

函館市

中野 B 遺跡 (IV)

函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 分冊

- I 遺跡の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺跡と遺構出土の遺物

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

函館市

中野 B 遺跡 (IV)

函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 分冊

- I 遺跡の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺跡と遺構出土の遺物

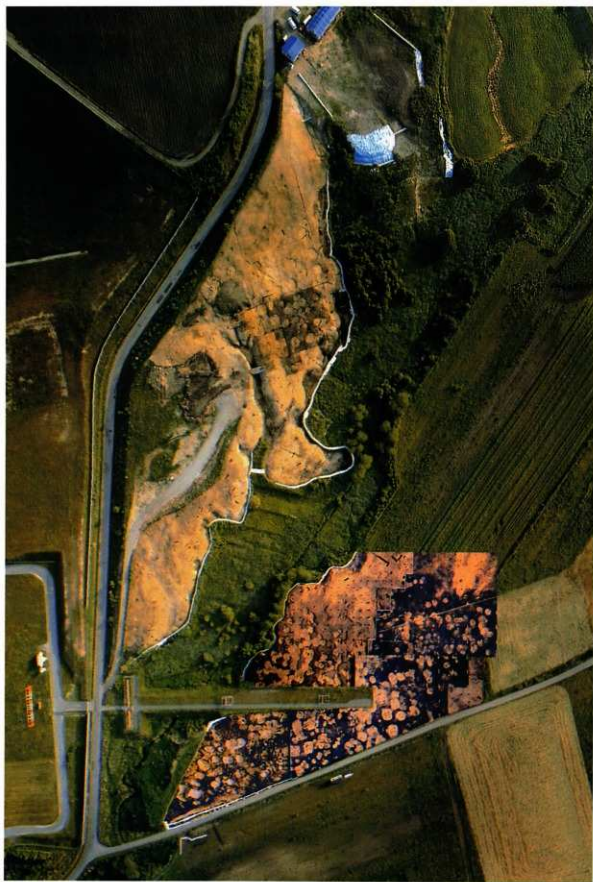
財団法人 北海道埋蔵文化財センター



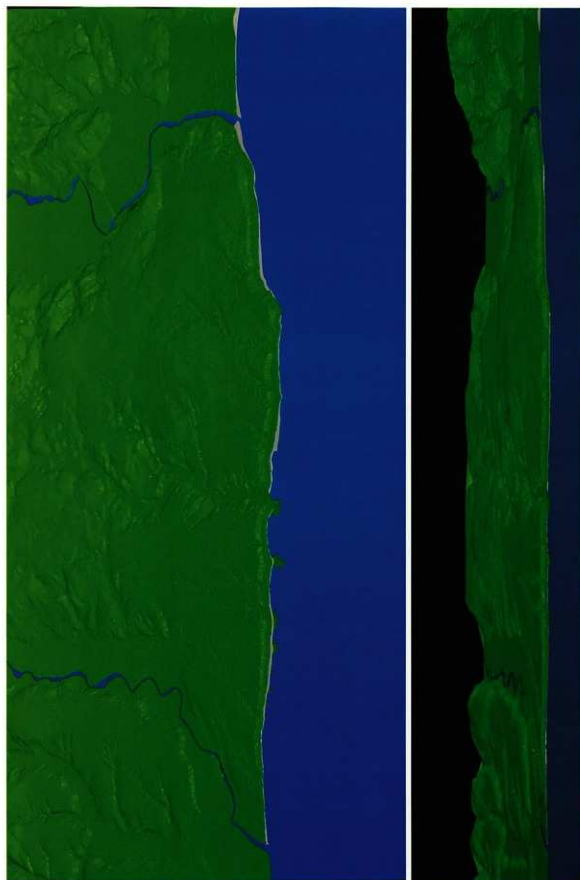
1. 遺跡空撮 (滑走路手前が中野B遺跡)



2. 遺跡空撮



各年度空中写真の合成



周辺復元地形の鳥瞰図



周辺地形復元による集落立地想定



1. 大型堅穴住居跡群（遠方は函館山）



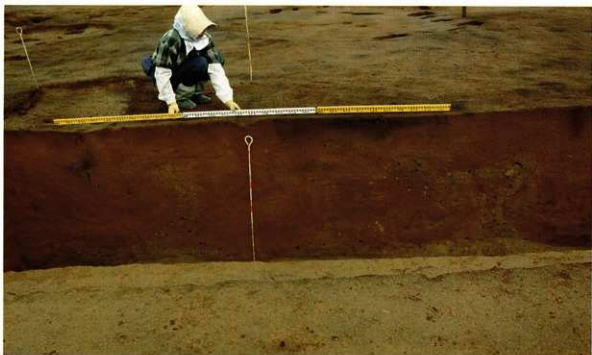
2. H-565の完掘



1. 土層堆積状況(1. 100-49区)



2. 土層堆積状況(2. 竖穴H-565覆土)



3. インボルーションの土層



1. H-562出土の格子目モチーフをもつ土器



2. 同左アップ



3. H-561出土石鍾 (線刻)



4. H-566出土石鍾 (線刻)



例 言

1. 本書は平成8年度に函館空港拡張整備工事用地において、財団法人北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した函館市中野B遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査および報告書の作成は、第1調査部第1調査課が行った。
3. 遺構の原稿は、調査を担当した調査員がそれぞれ執筆し、各遺構の文末に文責者名を記している。そのほかの各章・節の原稿についても、文末に文責者名を記している。
4. 遺構図は、調査を担当した調査員がそれぞれ整理し、第2原因を作成した。篠崎淑子がトレースなどを行い、田中哲郎が遺構図版の取りまとめを行った。
5. 遺物等の現場での一次整理およびトータルステーションデータ管理は越田雅司が統括し、データ整理には田中美佐・長崎亜希子が従事した。
6. 土器の接合、復元、拓本には、主に貝田和子・波多野にな子・高橋慶子・種市伊津子・前川紀子・尾美里子・大坂篤美が従事し、土器の実測・トレースは、主に山下かず子・飯田由紀乃・澤田直美・中谷 恵が行い、これらの作業を富永勝也が統括した。
7. 石器の計測、集計等は、主に服部たえ子と田中美佐が従事し、石器の実測・トレースは渡部久美子・細田美佐子・福島千智・中谷 恵が行い、これらの作業を田中哲郎・柳瀬由佳が統括した。
8. 遺物分布接合図、遺物図版、集計表等の整理、作成には種市伊津子・前川紀子・田中美佐・長崎亜希子・佐藤陽子・岡田信子が従事し、田中哲郎と富永勝也が統括した。
9. 現地の写真撮影は調査を担当した調査員が行い、アルバム整理を柳瀬由佳が行った。遺物の写真撮影は田中哲郎が行い、写真焼付けは菊池慈人・越田雅司が行った。アルバム整理、写真図版の作成は、主に田中美佐が従事した。
10. フローテーション試料の大きな選別作業には、大坂篤美・浦口山香が従事した。
11. V章の各種分析・同定は、下記の方々と機関に依頼した。

山田 治（京都産業大学理学部）、藏科 哲男（京都大学原子炉実験所）、中野 益男（帯広畜産大学生物資源科学科）、小林 幸雄（北海道開拓記念館）、水島 未記（北海道開拓記念館）、（株）地球科学研究所、株式会社ズコーシャ、パリノサーベイ株式会社、北海道環境文化研究センター

12. 石材鑑定は花岡正光の助言のもと、田中哲郎・柳瀬由佳が行った。
13. 調査にあたっては、下記の機関および人々の指導ならびに協力を得た（順不同、敬称略）。

文化庁、奈良国立文化財研究所、北海道教育委員会、函館市教育委員会 田原良信・中村公宣・佐藤智雄・落合治彦・野辺地初雄、市立函館博物館 長谷部一弘、函館市北方民族資料館 野村祐一、七飯町教育委員会 石本省三・横山英介・竹花和晴・菊池 博・佐々木日登美、上磯町教育委員会 森 靖裕、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・山口 敦・小林 貴、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則・大矢内愛史、森町教育委員会 藤田 登、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、長万部町教育委員会 佐藤 稔・山田明美、知内町教育委員会 高橋彦彦、松前町教育委員会 久保 泰・前田正憲、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斎藤邦典・松田輝哉、乙部町教育委員会 森 広樹・藤田 巧、江差町教育委員会 藤島一巳、今金町教育委員会 寺崎康史、奥尻町教育委員会 木村哲朗、倶知安町教育委員会 矢吹俊男、余市町教育委員会 宮 宏明、小樽市教育委員会 石川直章、札幌市教育委員会 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋

山洋司・出穂雅実、千歳市教育委員会 大谷敏三・田村俊之・豊田宏良・松田淳子・遠藤昭浩、千歳サケのふるさと館 高橋 理、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一・森 秀之、江別市教育委員会 高橋正勝・直井孝一・園部真幸・野中一宏・稲垣和幸・佐藤一志、石狩町教育委員会 石橋孝夫・工藤義衛、北広島市教育委員会 遠藤龍畝、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉・小島朋夏、苫小牧市教育委員会 佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤 肇・赤石慎三・大泉博嗣・兵藤千秋、苫小牧市 渡辺俊一・二階堂啓也・鈴木耕栄、平取町教育委員会 森岡健治・長田佳宏、静内町教育委員会 藪中剛司、深川市教育委員会 葛西智義、旭川市教育委員会 斎藤 傑・瀬川拓郎・友田哲弘、富良野市教育委員会 杉浦重信・澤田 健、名寄市教育委員会 氏江敏文・鈴木邦輝、稚内市教育委員会 内山真澄、枝幸町教育委員会 佐藤隆広・高島孝宗、網走市立博物館 和田英明・米村 衛、紋別市教育委員会 佐藤和利、常呂町教育委員会 武田 修、斜里町 金盛典夫、斜里町立知床博物館 松田 功、羅臼町教育委員会 涌坂周一、美幌博物館 小林 敬、浦幌町教育委員会 後藤秀彦、帯広百年記念館 北沢 実・山原敏朗、釧路市埋蔵文化財調査センター 西 幸隆・松田 猛・石川 朗、北海道開拓記念館 平川善祥・山田悟郎・石代啓規・小林幸雄・水島未記、財団法人北海道開拓の村 野村 崇、道立アイヌ民族文化研究センター 古原敏弘、北海道文化財保護協会 竹田輝雄・大島秀俊・谷岡康孝・長谷川徹・村上章久、国立歴史民俗博物館 西本豊弘・辻誠一郎、国立民族学博物館 大塚和義・岸上啓吾、北海道大学 菊池俊彦・林 謙作・天野哲也・梅坂恭代・小杉 康、北海道大学高等教育機能開発総合センター 小笠原正明、北海道教育大学函館校 千代 肇・瀧沢好博、札幌大学 木村英明、札幌国際大学 吉崎昌一・長崎潤一、青森大学 村越 潔、福島大学 工藤雅樹、東京大学 安斎正人、東京大学常呂実習施設 宇田川洋・佐藤宏之、早稲田大学 金子浩昌・菊池徹夫・高橋龍三郎、國學院大学 小林達雄、国士館大学 大沼克彦、鹿児島大学 上村俊夫・渡辺芳郎、琉球大学 石田 肇、青森県教育委員会 三浦圭介・工藤 大、青森県立郷土館 三宅徹也・鈴木克彦、青森県埋蔵文化財調査センター 成田滋彦・福田友之・畠山 昇・中村哲也・相馬良仁・坂本真弓、青森県企画部県史編さん室 木村真昭、青森市教育委員会埋蔵文化財対策室 遠藤正大、東北町教育委員会 古屋敷則雄、三沢市歴史民俗資料館 長尾正義、八戸市教育委員会 小笠原義範・大野 亨・工藤竹久、秋田県埋蔵文化財センター 栗沢光男、盛岡市教育委員会 神原雄一郎、一迫町教育委員会埋蔵文化財センター 尾関清子、山形市埋蔵文化財センター 五十嵐貴久、財団法人仙台市歴史文化事業団地底の森ミュージアム 斎野裕彦、茨城県歴史館 斉藤弘道、埼玉県蓮田市教育委員会 赤島正明、我孫子市教育委員会 茅野 強、埼玉県埋蔵文化財センター 金子直行、佐倉市教育委員会 高橋 誠、市立市川考古博物館 領塚正浩、財団法人千葉県文化財センター 小笠原水隆、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 石井 寛、長野県教育委員会 中沢道彦、鹿児島県歴史資料センター黎明館 牛ノ濱 修、鹿児島県立埋蔵文化財センター 新東晃一・立神次郎・中村耕治・富田逸郎・東 和幸・前迫亮一・繁昌正幸・中原一成・今村敏照、鹿児島市教育委員会 出口 浩、鹿児島県加世田市教育委員会 上東克彦、鹿児島県指宿市教育委員会 下山 覚・大井晴男、工藤利幸

凡 例

1. 遺構は、以下の記号によって表記し、原則として発掘調査順に番号を付した。

遺構番号は、原則として平成4年度からの継続である。

H：竪穴住居跡 P：土坑 SP：小土坑 T：Tピット F：焼土

HF：住居に伴う焼土および炉跡 HP：住居に伴う小ピットおよび柱穴

2. 遺構図中の方位は真北を示し、レベルは標高（単位m）である。

3. 掲載した実測図等の縮尺は原則的には以下のとおりであるが、必要に応じてそれぞれにスケール・バーを明示している。

遺構図：1/40 遺構図中の遺物出土状況図：1/20 土器実測図：1/4 土器拓影図：1/3

石器実測図 剥片石器・石斧類：1/2 礫石器：1/3 土・石製品：1/2

4. 遺構の規模は、以下のように計測値を表示した。

検出面での長軸長／床（坑底）面での長軸長×検出面での短軸長／床（坑底）面での短軸長×検出面からの最大深（単位m）。また一部壊されているものは現存長および復元推定値を（ ）で示し、不明の場合は——の記号で表示した。

5. 遺構覆土などにおける土層の混合状態を表現するため、以下のように表記している場合がある。

A+B（A≒B）：AとBがほぼ同量に混じる A>B：AにBが少量混じる

A>>B：AにBが微量混じる

6. 遺構図中のPは土器、Fは剥片石器、Sは礫石器を基本的に示している。

7. 第2分冊にまとめて掲載した「遺構出土遺物分布・接合位置関係図」については、本文中で引用する場合「関係図」と略称する。

分 冊 目 次

第1分冊

口 絵 1～8 (カラー)

例 言

凡 例

分冊目次

第1分冊目次

挿図目次・表目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査の方法	4
5 平成8年度調査の概要	8
6 遺構・遺物の分類	12
II 遺跡の位置と環境	21
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	21
2 地形・地質	24
3 土層	28
III 遺構と遺構出土の遺物	33
1 概要	33
2 竪穴住居跡	35
3 土坑	309
4 Tピット	372
5 SP群	400
6 防空壕	408

第2分冊

凡 例

第2分冊目次

IV 包含層出土の遺物	409
1 概要	409
2 土器	409
3 石器等	456
V 自然科学的手法による分析結果	471
1 放射性炭素による年代測定結果-1	471
2 放射性炭素による年代測定結果-2	472
3 函館市中野B遺跡出土の黒曜石製造物の原材産地分析	473

4	中野B遺跡から出土したピットに残存する脂肪の分析	484
5	中野B遺跡から出土した遺物に残存する脂肪の分析	494
6	中野B遺跡の燃料材などに関する自然科学的分析調査	506
7	中野B遺跡の炭化植物遺体について	513
	付記 炭化植物遺体検出のための試料採取方法について	515
8	中野B遺跡出土土器片にみられた葉の痕跡	517
9	中野B遺跡出土土器表面における赤褐色系呈色部の材質について	521
VI	まとめ	525
1	遺構	525
2	土器	532
3	石器	559
4	中野A・B遺跡および石倉貝塚「進入灯地区」におけるフローテーション法による炭化種子検出の成果について	562
	引用・参考文献	579
	遺構出土遺物分布・接合位置関係図	587
	一覧表	637

第3分冊

写真図版目次

写真図版

報告書抄録

付図1 遺跡周辺地形復元図と遺跡の位置

付図2 中野B遺跡遺構集成図

付図3 中野B遺跡出土遺物分布図

付図4 中野B遺跡住居跡出土遺物分布図

付図5 中野A・B遺跡Tピット集成図

付図6 中野B遺跡出土土器集成図

第1分冊目次

口 絵 1～8 (カラー)

例 言

凡 例

分冊目次

第1分冊目次

挿図目次・表目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査の方法	4
(1) 調査区の呼称	4
(2) 調査区の設定	4
(3) 発掘調査の方法	4
(4) 整理の方法	7
(5) 遺物とデータ類の保管	8
5 調査の概要	8
6 遺構・遺物の分類	12
(1) 遺構	12
(2) 遺物	12
II 遺跡の位置と環境	21
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	21
2 地形・地質	24
3 土層	28
III 遺構と遺構出土の遺物	33
1 概要	33
2 竪穴住居跡	35
(1) G1区	35
(2) G2区	53
(3) G3区	94
(4) G4区	115
(5) G5区	167
(6) G6区	198
(7) G7区	227
(8) G8区	284
3 土 坑	309
(1) G1区	309

(2)	G 2 区	317
(3)	G 4 区	340
(4)	G 5 区	340
(5)	G 6 区	341
(6)	G 7 区	358
4	T ビット	372
5	SP 群	400
6	防空壕	408

挿 図 目 次

図Ⅰ-1	遺跡の位置	3	図Ⅲ-24	H-571実測図	68
図Ⅰ-2	中野B遺跡調査区名称図	5	図Ⅲ-25	H-571出土遺物	69
図Ⅰ-3	中野B遺跡調査区設定図	6	図Ⅲ-26	H-598実測図	71
図Ⅰ-4	中野B遺跡遺構位置図	9	図Ⅲ-27	H-598出土土器(1)	73
図Ⅰ-5	石蔵の分類模式図	16	図Ⅲ-28	H-598出土土器(2)	74
図Ⅰ-6	石器計測方法の模式図	20	図Ⅲ-29	H-598出土土器	75
図Ⅱ-1	渡島半島の縄文早期の遺跡位置図	22	図Ⅲ-30	H-599実測図	77
図Ⅱ-2	遺跡周辺地形図	25	図Ⅲ-31	H-599出土遺物	78
図Ⅱ-3	遺跡周辺の地形分類図	26	図Ⅲ-32	H-602実測図	80
図Ⅱ-4	地形断面と地質柱状図	27	図Ⅲ-33	H-603実測図	82
図Ⅱ-5	遺跡周辺の岩石分布図	29	図Ⅲ-34	H-602・603出土遺物	83
図Ⅱ-6	基本土層模式図	30	図Ⅲ-35	H-606実測図	85
図Ⅱ-7	土層断面図(1)	31	図Ⅲ-36	H-606出土遺物	86
図Ⅱ-8	土層断面図(2)	32	図Ⅲ-37	H-607実測図	89
図Ⅲ-1	G地区遺構位置図と区割名称図	34	図Ⅲ-38	H-607出土遺物	90
図Ⅲ-2	G1区竪穴住居跡位置図	35	図Ⅲ-39	H-608実測図と出土遺物	92
図Ⅲ-3	H-523実測図	36	図Ⅲ-40	H-628実測図と出土遺物	93
図Ⅲ-4	H-523出土遺物	37	図Ⅲ-41	G3区竪穴住居跡位置図と H-530実測図	95
図Ⅲ-5	H-529実測図	40	図Ⅲ-42	H-530出土土器(1)	99
図Ⅲ-6	H-529出土土器	41	図Ⅲ-43	H-530出土土器(2)	100
図Ⅲ-7	H-529出土土器(1)	43	図Ⅲ-44	H-530出土土器(1)	101
図Ⅲ-8	H-529出土土器(2)	44	図Ⅲ-45	H-530出土土器(2)	102
図Ⅲ-9	H-559実測図	45	図Ⅲ-46	H-530出土土器(3)	103
図Ⅲ-10	H-580実測図	47	図Ⅲ-47	H-530出土土器(4)	104
図Ⅲ-11	H-580出土遺物	48	図Ⅲ-48	H-572実測図	106
図Ⅲ-12	H-625実測図と出土遺物	50	図Ⅲ-49	H-572出土土器	107
図Ⅲ-13	H-626実測図と出土遺物	52	図Ⅲ-50	H-572出土土器	108
図Ⅲ-14	G2区竪穴住居跡位置図	53	図Ⅲ-51	H-597実測図	111
図Ⅲ-15	H-534実測図	55	図Ⅲ-52	H-597出土土器	113
図Ⅲ-16	H-534出土土器	56	図Ⅲ-53	H-597出土土器	114
図Ⅲ-17	H-534出土土器	57	図Ⅲ-54	G4区竪穴住居跡位置図と H-525実測図	116
図Ⅲ-18	H-536実測図	59	図Ⅲ-55	H-526実測図	117
図Ⅲ-19	H-536出土土器	61	図Ⅲ-56	H-526出土土器	120
図Ⅲ-20	H-536出土土器(1)	62	図Ⅲ-57	H-526出土土器	121
図Ⅲ-21	H-536出土土器(2)	63	図Ⅲ-58	H-527実測図	122
図Ⅲ-22	H-537実測図と出土遺物	65			
図Ⅲ-23	H-538実測図と出土遺物	66			

图Ⅲ-59	H-527出土土器	124	图Ⅲ-99	H-561出土土器	188
图Ⅲ-60	H-527出土土器 (1)	125	图Ⅲ-100	H-561出土土器 (1)	189
图Ⅲ-61	H-527出土土器 (2)	126	图Ⅲ-101	H-561出土土器 (2)	190
图Ⅲ-62	H-562实测图	127	图Ⅲ-102	H-609实测图	192
图Ⅲ-63	H-562出土土器 (1)	131	图Ⅲ-103	H-613实测图	193
图Ⅲ-64	H-562出土土器 (2)	132	图Ⅲ-104	H-613出土遗物	195
图Ⅲ-65	H-562出土土器 (3)	133	图Ⅲ-105	H-614实测图	195
图Ⅲ-66	H-562出土土器 (4)	134	图Ⅲ-106	H-619实测图与出土遗物	197
图Ⅲ-67	H-562出土土器 (5)	135	图Ⅲ-107	G 6 区竖穴住居遗址位置图	199
图Ⅲ-68	H-562出土土器 (6)	136	图Ⅲ-108	H-275实测图	200
图Ⅲ-69	H-562出土土器 (1)	139	图Ⅲ-109	H-290实测图	201
图Ⅲ-70	H-562出土土器 (2)	140	图Ⅲ-110	H-290出土遗物	202
图Ⅲ-71	H-562出土土器 (3)	141	图Ⅲ-111	H-564·585实测图	204
图Ⅲ-72	H-562出土土器 (4)	142	图Ⅲ-112	H-575实测图	205
图Ⅲ-73	H-562出土土器 (5)	143	图Ⅲ-113	H-576实测图	207
图Ⅲ-74	H-563实测图	145	图Ⅲ-114	H-582实测图与出土遗物	209
图Ⅲ-75	H-563出土土器·石器 (1)	147	图Ⅲ-115	H-584实测图与出土遗物	211
图Ⅲ-76	H-563出土土器 (2)	148	图Ⅲ-116	H-586实测图	213
图Ⅲ-77	H-583实测图	151	图Ⅲ-117	H-586出土土器 (1)	214
图Ⅲ-78	H-583出土土器	153	图Ⅲ-118	H-586出土土器 (2)·石器	215
图Ⅲ-79	H-583出土土器	154	图Ⅲ-119	H-594实测图	217
图Ⅲ-80	H-611实测图与出土土器	156	图Ⅲ-120	H-596实测图	218
图Ⅲ-81	H-622实测图与出土遗物	157	图Ⅲ-121	H-601实测图	220
图Ⅲ-82	H-623实测图与出土遗物	159	图Ⅲ-122	H-610实测图	221
图Ⅲ-83	H-624实测图与出土遗物	161	图Ⅲ-123	H-612实测图	222
图Ⅲ-84	H-627实测图与出土遗物	162	图Ⅲ-124	H-615实测图	224
图Ⅲ-85	H-629实测图	164	图Ⅲ-125	G 7 区竖穴住居遗址位置图	225
图Ⅲ-86	H-629出土遗物	165	图Ⅲ-126	H-565实测图	229
图Ⅲ-87	G 5 区竖穴住居遗址位置图	167	图Ⅲ-127	H-565柱穴实测图	231
图Ⅲ-88	H-544实测图	169	图Ⅲ-128	H-565出土土器	233
图Ⅲ-89	H-544出土土器 (1)	172	图Ⅲ-129	H-565出土土器 (1)	234
图Ⅲ-90	H-544出土土器 (2)	173	图Ⅲ-130	H-565出土土器 (2)	235
图Ⅲ-91	H-544出土土器 (1)	174	图Ⅲ-131	H-565出土土器 (3)	236
图Ⅲ-92	H-544出土土器 (2)	175	图Ⅲ-132	H-566·588实测图 (1)	237
图Ⅲ-93	H-544出土土器 (3)	176	图Ⅲ-133	H-566·588实测图 (2)	239
图Ⅲ-94	H-560实测图	179	图Ⅲ-134	H-566·588·620柱穴实测图 (1)	241
图Ⅲ-95	H-560出土土器	181			
图Ⅲ-96	H-560出土土器 (1)	182	图Ⅲ-135	H-566·588·620柱穴实测图 (2)	242
图Ⅲ-97	H-560出土土器 (2)	183			
图Ⅲ-98	H-561实测图	185	图Ⅲ-136	H-566·588·620柱穴实测图 (3)	

.....	243	図Ⅲ-176	H-604実測図	301	
図Ⅲ-137	H-566出土土器	245	図Ⅲ-177	H-616実測図	302
図Ⅲ-138	H-566出土土器 (1)	246	図Ⅲ-178	H-617実測図	304
図Ⅲ-139	H-566出土土器 (2)	247	図Ⅲ-179	H-618実測図	305
図Ⅲ-140	H-566出土土器 (3)	248	図Ⅲ-180	H-621実測図	307
図Ⅲ-141	H-588出土遺物	250	図Ⅲ-181	H-630実測図	308
図Ⅲ-142	H-620実測図	252	図Ⅲ-182	G 1 区土坑位置図	309
図Ⅲ-143	H-620出土遺物	253	図Ⅲ-183	P-333・335~347実測図	311
図Ⅲ-144	H-567実測図	254	図Ⅲ-184	P-374・375・378・379実測図	315
図Ⅲ-145	H-567柱穴実測図	255	図Ⅲ-185	P-333・340・343・374・379 出土遺物	316
図Ⅲ-146	H-568実測図 (1)	257	図Ⅲ-186	G 2 区土坑位置図と P-329・330実測図	318
図Ⅲ-147	H-568実測図 (2)	259	図Ⅲ-187	P-331実測図と出土遺物	320
図Ⅲ-148	H-568柱穴実測図	260	図Ⅲ-188	P-334実測図と出土土器	321
図Ⅲ-149	H-568出土土器	261	図Ⅲ-189	P-366・372・376実測図と 出土遺物	323
図Ⅲ-150	H-568出土土器	262	図Ⅲ-190	P-373実測図と出土土器	325
図Ⅲ-151	H-569実測図	265	図Ⅲ-191	P-304・307・315~317 実測図と P-317出土土器	327
図Ⅲ-152	H-569柱穴実測図	267	図Ⅲ-192	P-318~321・323実測図	329
図Ⅲ-153	H-569出土土器	268	図Ⅲ-193	P-321出土遺物	331
図Ⅲ-154	H-569出土土器 (1)	269	図Ⅲ-194	P-328・365・377実測図と 出土遺物	333
図Ⅲ-155	H-569出土土器 (2)	270	図Ⅲ-195	P-332実測図と出土土器・石器 (1)	335
図Ⅲ-156	H-570実測図	271	図Ⅲ-196	P-332出土土器 (2)	336
図Ⅲ-157	H-574実測図	274	図Ⅲ-197	P-354実測図と出土土器 (1)	337
図Ⅲ-158	H-574柱穴実測図	275	図Ⅲ-198	P-354出土土器 (2)	338
図Ⅲ-159	H-581実測図	276	図Ⅲ-199	G 4 区土坑位置図と P-371実測図と出土土器	339
図Ⅲ-160	H-589実測図	278	図Ⅲ-200	G 5 区土坑位置図と P-380実測図	341
図Ⅲ-161	H-590実測図	279	図Ⅲ-201	G 6 区土坑位置図	342
図Ⅲ-162	H-592実測図	280	図Ⅲ-202	P-300・301実測図	343
図Ⅲ-163	H-600実測図	282	図Ⅲ-203	P-302・303実測図	345
図Ⅲ-164	H-605実測図	283	図Ⅲ-204	P-314・324実測図	346
図Ⅲ-165	H-605出土遺物	284	図Ⅲ-205	P-325・326実測図	348
図Ⅲ-166	G 8 区竪穴住居跡位置図	285	図Ⅲ-206	P-327・348実測図	349
図Ⅲ-167	H-558実測図	287	図Ⅲ-207	P-349・350実測図と出土土器	351
図Ⅲ-168	H-573実測図	288			
図Ⅲ-169	H-577実測図	289			
図Ⅲ-170	H-578実測図	291			
図Ⅲ-171	H-579実測図と出土遺物	292			
図Ⅲ-172	H-587実測図と出土土器	294			
図Ⅲ-173	H-591実測図	296			
図Ⅲ-174	H-593実測図と出土土器	297			
図Ⅲ-175	H-595実測図	299			

図Ⅲ-208	P-351・353実測図と出土土器	353	図Ⅲ-229	T-238・239実測図	383
図Ⅲ-209	P-362・363実測図と出土土器	354	図Ⅲ-230	T-240・241実測図	384
図Ⅲ-210	P-364・368実測図と出土遺物	356	図Ⅲ-231	T-242・267実測図	385
図Ⅲ-211	P-369・370実測図	357	図Ⅲ-232	T-226・227実測図	386
図Ⅲ-212	G7区土坑位置図	359	図Ⅲ-233	T-228・245実測図	387
図Ⅲ-213	P-305・306・308-311 実測図と出土遺物	361	図Ⅲ-234	T-246・247実測図	388
図Ⅲ-214	P-312・313実測図	363	図Ⅲ-235	T-248・249実測図	389
図Ⅲ-215	P-352実測図	364	図Ⅲ-236	T-250・251実測図	390
図Ⅲ-216	P-352出土遺物	365	図Ⅲ-237	T-252・253実測図	391
図Ⅲ-217	P-355・357実測図と出土土器	367	図Ⅲ-238	T-254・255実測図	392
図Ⅲ-218	P-358-360実測図と出土遺物	369	図Ⅲ-239	T-256・257実測図	393
図Ⅲ-219	P-361・367実測図と出土土器	371	図Ⅲ-240	T-258・259実測図	394
図Ⅲ-220	Tピット位置図	373	図Ⅲ-241	T-264実測図	395
図Ⅲ-221	T-172・229実測図	375	図Ⅲ-242	T-265・266実測図	396
図Ⅲ-222	T-233・243実測図	376	図Ⅲ-243	T-268・269実測図	397
図Ⅲ-223	T-244・260実測図	377	図Ⅲ-244	T-270・271実測図	398
図Ⅲ-224	T-261・262実測図	378	図Ⅲ-245	Tピット出土遺物	399
図Ⅲ-225	T-230・231実測図	379	図Ⅲ-246	SP群実測図(1)	401
図Ⅲ-226	T-232・263実測図	380	図Ⅲ-247	SP群実測図(2)	403
図Ⅲ-227	T-234・235実測図	381	図Ⅲ-248	SP群出土遺物	404
図Ⅲ-228	T-236・237実測図	382	図Ⅲ-249	防空壕実測図	408

表 目 次

表Ⅰ-1	中野B遺跡年度別調査面積と 検出遺構数一覧	2	表Ⅰ-3	年次・地区別遺物点数一覧	11
表Ⅰ-2	函館空港拡張整備工事に伴う中野 B遺跡年次・地区別遺構数一覧	10	表Ⅲ-1	SP群一覧	405

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	財団法人北海道埋蔵文化財センター
所在地	函館市中野町97-1ほか
調査面積	29,802㎡（うち遺構確認調査面積 22,930㎡）
発掘期間	平成8年5月7日～平成8年10月31日
整理期間	平成8年11月1日～平成9年3月31日 平成9年4月11日～平成10年3月13日 平成10年4月10日～ <u>平成11年3月25日</u>

2 調査体制

平成8年度調査体制

理事長	伊藤一夫
専務理事	佐藤哲人
常務理事	柴田忠昭・木村尚俊
業務部長	山内清志
第1調査部長	畑 宏明
第1調査課長	越田賢一郎（発掘担当者）
主査	和泉田 毅（発掘担当者）
主任	田中哲郎
◇	越田雅司
文化財保護主事	笠原 興
◇	富永勝也
◇	柳瀬由佳
◇	福井淳一

平成9・10年度整理体制

理事長	伊藤一夫（平成10年5月まで） 大澤 満（平成10年6月から）
専務理事	佐藤哲人
常務理事	柴田忠昭・木村尚俊
業務部長	山内清志（平成9年5月まで） 北条雅洋（平成9年6月から 平成10年3月まで） 中田 仁（平成10年4月から）
第1調査部長	畑 宏明
第1調査課長	越田賢一郎
主任	田中哲郎
文化財保護主事	富永勝也

3 調査の経緯

函館空港は、昭和36年4月滑走路1,200mで供用開始された空港である。昭和42年には第1次空港整備5カ年計画が打ち出され、函館空港の滑走路2,000mへの延長、管制塔や新空港ターミナルなどの設置が順次行われた。2,000m滑走路が供用開始された昭和46年には利用客は増加する一方で、引き続き第2次空港整備5カ年計画が開始され、函館空港にあっては昭和50年までに滑走路2,500mに延長してエアバスの就航を可能にしようとするものであった。その後も、利用客の増加、それに伴う航空機の大形化や国内航空網の整備などに伴い、さらに第3次空港整備5カ年計画（昭和51年開始）、第4次空港整備5カ年計画（昭和56年開始）が実施されてきた。昭和61年には第5次空港整備5カ年

計画が策定され、同年11月函館空港の滑走路を再度500m延長して3,000mとすることが閣議決定された。この滑走路延長（拡張整備）工事に伴い、当センターでは平成3年度から中野A遺跡、中野B遺跡、石倉貝塚（進入灯地区）の発掘調査を実施し、順次調査報告書を刊行してきたところである。

これまでの函館空港整備工事に伴う発掘調査の経過については個々の報告書に詳述されているので、ここでは概略に止めたい。その始まりは第1次空港整備5カ年計画が打ち出された昭和42年に通り、武内収太により函館空港第1遺跡（現在の北海道教育委員会遺跡登録名称による。また、図I-1では数字のみ記載。以下同じ。）が調査された。以後、昭和51年に開始された第3次空港整備5カ年計画の終了までに、予備調査や函館空港第2・3・4・5・6・7・8・9遺跡、中野A・B遺跡の調査が、市立函館博物館、函館市教育委員会、北海道開拓記念館によって行われた。その間、昭和48年には北海道教育庁に文化課が新設され、主任文化財保護主事が配置されるなど、文化財保護の事前協議対応も本格化した時期でもあった。翌49年から実施された函館空港第4遺跡、中野A・B遺跡の3カ所の調査は、総面積25,000㎡を超え、道内における大規模調査の始まりを告げるものでもあった。このときの中野B遺跡の調査は進入灯工事区域1,920㎡を対象としたものであったが、縄文時代早期の竪穴住居跡21軒など豊富な遺構、遺物が検出され、当時から大規模集落の存在が意識されていた。

今回の一連の調査原因である、函館空港拡張整備工事に伴う埋蔵文化財保護に関する事前協議書は、昭和63年5月、北海道開発局函館開発建設部から北海道教育庁文化課に提出された。これを受け、文化課では平成2年から遺跡所在確認調査、遺跡範囲確認調査を数次に亘り実施した。その調査結果は平成5年3月に公表され、工事用地内に中野A・B遺跡、石倉貝塚の3カ所の埋蔵文化財包蔵地が存在し、発掘調査を必要とする総面積（遺構確認調査地区を含む）は11万㎡を超えるものであった。

当センターでは文化課、函館開発建設部と工事工程など調整協議を行いながら、平成3・4年度に中野A遺跡（調査面積14,000㎡）、平成7年度に石倉貝塚進入灯地区（調査面積1,965㎡）の調査を実施し、完了している。中野B遺跡については平成4年度から調査を開始し、平成8年度で現地調査を終了している。年次ごとの調査面積は表I-1のとおりで、最終の面積は94,692㎡となり、当センターで実施した函館空港拡張整備工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査面積は、総計110,657㎡である。また、この一連の調査で検出した遺構、遺物は膨大な量であり、単年度での整理報告は不可能で、次年度以降に繰り越さなければならない状況であった。このため、平成8年度の現場調査の終了を受け、当センターと函館開発建設部間で、「函館空港拡張整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定

表I-1 中野B遺跡年度別調査面積と検出遺構数一覧

調査年度	調査主体	調 査 面 積 (㎡)			検 出 遺 構 数							備 考
		A (対象面積)	B(遺年度 表区分)	A-B	竪 穴 住居跡	土 坑	焼 土	集 石	Tピット			
昭和50年度	函館市教育委員会	1,920		1,920	21	15			22	函館市教育委員会調査分と (財)道地文センター調査分と で確実と同一と判断された遺 構は以下のとおりで、合計遺 構数は調査数である。 1号住＝H-560 2号住＝H-544 1号Tピット＝T-262 7号Tピット＝T-186 10号Tピット＝T-167 15号Tピット＝T-18		
平成4年度	財団法人	3,700		3,700	143	70	5	2	12			
平成5年度	北海道埋蔵 文化財センター	11,210	150	11,060	205	85	12	1	29			
平成6年度		28,400		28,400	96	95			97			
平成7年度		22,983		22,983	103	48	1		84			
平成8年度		29,082	533	28,549	84	79	1		47			
小 計		95,375	683	94,692	631	377	19	3	271			
合 計		97,295	683	96,612	650	392	19	3	289			

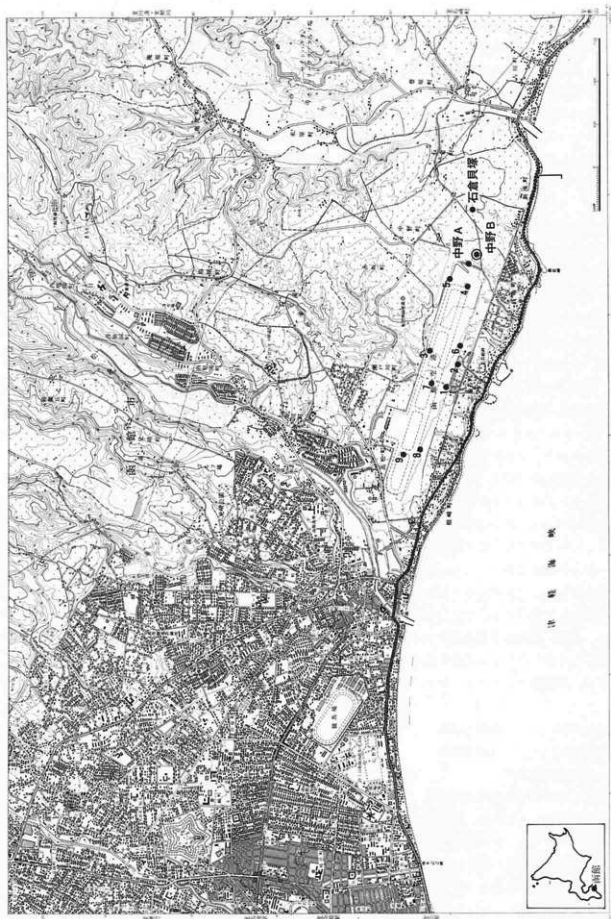


図1-1 遺跡の位置 (この地図は国土交通省国土地理院発行の25万分の1地形図「五旗図」を利用したものである)

害」を平成9年に締結した。これにより、平成9・10年度整理作業を実施し、本報告書が中野B遺跡に関する最終のものである。

なお、石倉貝塚のうち市道石倉1号線切り替え工事地区及び航空法50条関連工事地区については、函館市教育委員会によって調査が行われている。

本節の経緯の記載に際し、空港整備計画の沿革については函館開発建設部函館港湾事務所が発行したパンフレットなどを、また埋蔵文化財に関する事項等についてはこれまでに刊行された発掘調査報告書を参照した。ここでは参考文献の記載を省略し、引用参考文献の項で一括掲載しているのでご容赦願いたい。

（田中）

4 調査の方法

（1）調査区の呼称

中野B遺跡の発掘調査区は、北海道教育庁文化課による遺跡範囲確認調査の結果に基づき、堅穴住居跡などの遺構や遺物の濃密な分布が予想され通常の発掘調査を必要とする地区と、Tピット以外に遺構や遺物が稀薄であると判断された遺構確認調査地区に、あらかじめ大別、線引きされている。

平成8年度の調査地区は工事工程などの調整から調査順を考慮して地区割りし、G・H・I・J・K地区、市道中野4号線道路地区、市道石倉6号線道路地区と呼称した（図I-2）。

（2）調査区の設定

中野B遺跡の発掘調査は、トータルステーションを利用した遺構・遺物データベースシステム（以下、「データベースシステム」と略す）による遺物取り上げなどを実施することを前提に、函館空港滑走路のセンターラインを基軸とし、空港本体工事区域全体を網羅できるように、5m×5m方眼の発掘区を設定した（図I-3）。

滑走路センターラインを基軸とするX軸方向（東西方向）は、センターラインに付されている測点SP=2700を0とし、SP=2800が20、SP=2900が40、SP=3000が60、……となるように5m毎に1、2、3、……とアラビア数字を付している。センターラインに直交するY軸方向（南北方向）は、センターライン交点を40とし、5m毎に南側ほど小さく、北側ほど大きくなるように、X軸同様アラビア数字を付した。それぞれの5m×5m調査区の呼称は、この方眼の南西側交点の数字をX軸、Y軸の順に連結して表示することにした（図I-3）。X軸は、真北からN-107°35'55.51"E傾いている。

なお、遺構・遺物の平面実測、および堅穴住居跡床面や土坑底面などの土壌試料採取に際しては、必要に応じてさらに小さな区画を設定した。

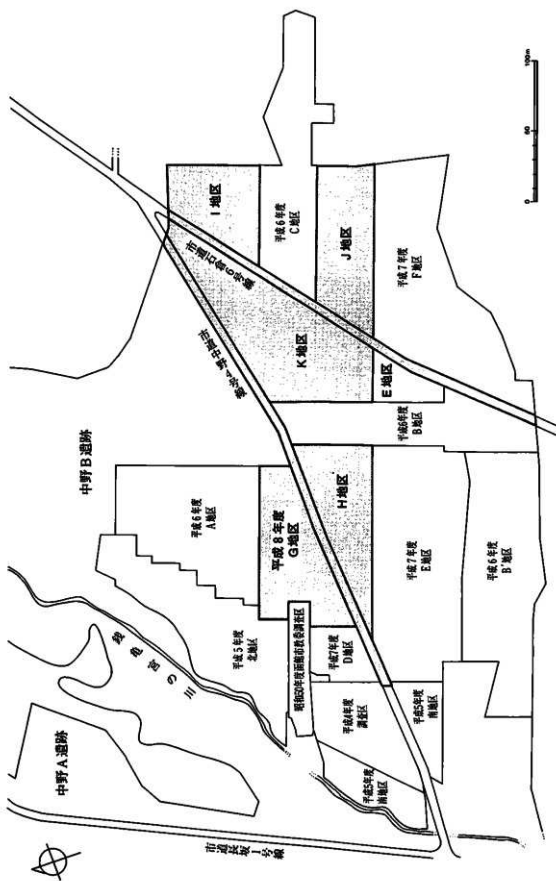
以下に、滑走路センターライン上の2点の座標値を示す。道南新座標系（第Ⅲ区系）

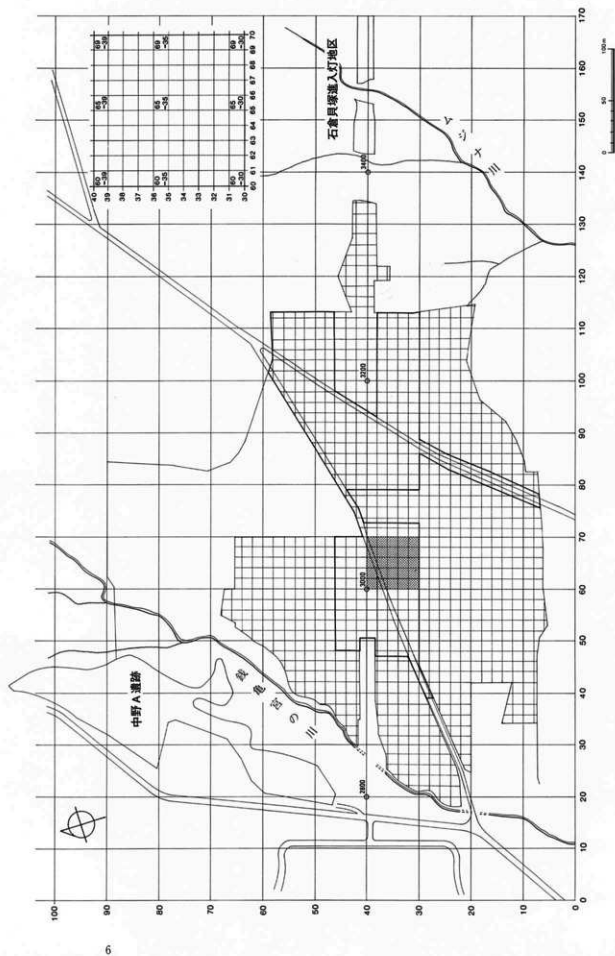
	X	Y	調査区枕名
SP=2900	-248209.922	49187.490	40-40
SP=3300	-248330.859	49568.770	120-40

（3）発掘調査の方法

G地区と市道中野4号線道路地区の一部は通常の発掘調査を必要とする地区であり、その他の地区は遺構確認調査地区である。G地区は通年で調査を実施し、残る地区は調査工程、現場引き渡し時期により、H・I・J・K・道路地区の順に調査した。

通常の発掘調査地区の調査は人力を基本とするが、I層の上半部が主体の表層土については重機で除去した。G地区では残るI層を人力で除去したところ、耕作がⅢ層、深いところではⅣ層にまで及んでいることが判明し、P.D.3は堅穴などの窪みに残る程度であった。このため、調査は当初から遺





構検出を主眼とするものとなり、確認できた遺構は順次調査を実施した。調査は土層観察用の土手を残して掘り下げ、随時写真撮影、実測を行った。遺構調査終了後には、データベースシステムにより遺構輪郭線の概略を計測している。また、遺物は土層を確認しながらデータベースシステムを利用して取り上げ、出土層位や出土位置の三次元データをできる限り残した。遺構調査・遺物包含層調査後、残存遺構の検出を主目的にⅣ層を掘り下げ、最終的にⅤ層上面で地形測量を行った。

遺構確認調査地区は、遺構や遺物の有無を確かめつつⅣ層下部まで重機で掘り下げ、その後人手により遺構検出作業を行った。検出された遺構はすべてTビットで、順次調査を行い、データベースシステムにより遺構輪郭線の概略を計測している。地形測量はこれらの地区もⅤ層上面で行っている。H地区の西端部では、平成5・7年度に確認された銭亀宮の川に流れ込む沢が北東方向に連続し、その周辺に遺物が少量出土している。遺物は移動したものとの判断から、調査区ごとに一括して取り上げた。

また、旧石器確認のためG地区の一部においてトレンチ調査を実施したが、遺物の出土はなかった。

なお、竪穴住居跡や土坑などの床・坑底面付近の土壌はできるだけ採取し、フローテーション法（浮遊選別法）による炭化種子選別作業を実施し、また剥片・削片の微細遺物の集中地点については、土壌ごとに取り上げ、篩分けや水洗選別を行った。

このほか、調査区外縁や排土山には、雨などによって泥水が直接海へ流れこまないよう、土壌の積み上げやグラウンドシートで覆うなどの予防措置をとった。 (田中)

(4) 整理の方法

i) 土器

現地では、水洗・乾燥後分類作業を行ってデータベースシステムに入力し、遺物台帳とカードを作成した。また注記は、遺跡名の中野B遺跡をナBと略記し、グリッド名、遺構名、遺物番号、出土層位の順で、それぞれ簡略に記入した。現地での整理を終えた遺物は、グリッド毎、遺構毎に仮収納し、現場終了後札幌の整理作業所へ搬送して、随時本格的な整理作業を開始した。

接合・復元作業では、遺構内、遺構間、遺構と包含層間との接合関係の把握に留意し、接合資料については、展開図とカードを作成するとともに、同一個体の破片（未接合資料も含む）の識別に努めた。実測図の作成に当たっては、最も土器の特徴を表している部分を実測するために、90度あるいは180度回転させたものもある。また、断面と輪郭のみを実測し、文様は拓影によって表現しているものもある。破片資料は口縁部の文様をもとに個体識別に努め、文様構成が想定できるものを中心に拓影図と断面図を作成した。

これらの作業と並行して、データベースシステムを利用して、分類の修正、遺物分布図の作成、接合関係図の作成、集計作業を行っている。

整理作業の終了した資料は報告書掲載資料、遺構、グリッド別に収納した。

ii) 石器

現地では、水洗後分類してデータベースシステムに入力して、遺物台帳を作成した。注記内容は土器と同じである。現場終了後札幌へ搬送し、分類の訂正と細分類を行い、報告書に掲載する石器を選び出して実測作業を行った。遺構出土の石器は、床面・床面直上付近出土のものを優先して実測し、集計は覆土出土のものを含め全点について実施した。包含層出土の石器は、全器種を網羅するよう実測している。石質の同定は主に花岡の肉眼判定結果をもとに田中・柳瀬が行った。

整理作業終了後、報告書掲載資料、遺構、グリッド別に収納した。

(5) 遺物とデータ類の保管

遺物類は、整理作業終了後函館市教育委員会において保管される。

土器・石器等及び遺構の輪郭と断面についてのデータは、札幌での整理段階で書き加えと修正を行い、光磁気デスク (M. O.) に読み込んである。1部はセンターに残し、もう1部は遺物類と合わせて、函館市教育委員会において保管される。

(越田賢)

5 調査の概要

中野B遺跡は函館市中野町に所在する。調査は函館空港拡張整備工事に伴うもので、平成4年度から開始し、今年度をもって整理作業も終了した。整理作業は平成7年度調査の報告書編集作業や平成8年度現場調査で検出された遺構・遺物について行ったものである。遺跡は現在、延長滑走路 (本年3月末日供用開始予定) の工事により消滅している。

遺跡は函館市街地の東方約8kmに位置する (図Ⅰ-1)。標高40~50mほどの海岸段丘縁辺の緩斜面上に立地し、北東から南西方向に段丘を開折して津軽海峡に注ぐ銭亀宮の川の河口から700~800m上流左岸にある。銭亀宮の川の対岸には中野A遺跡が、東に500mほど離れたムジナ川沿いに石倉貝塚が存在する。その一部は当センターで調査を実施し、完了している。

中野B遺跡の調査は昭和50年度、当時の空港整備工事に伴い函館市教育委員会によって行われている。調査面積は1,920㎡であったが、縄文時代早期中葉の竪穴住居跡21軒など数多くの遺構や遺物が検出され、当時から相当規模の集落跡の存在が予想されていた。平成4年度から当センターが実施した調査面積を加えれば、都合96,612㎡ (遺構確認調査部分を含む) が調査対象となり、確認された遺構は、竪穴住居跡650軒、土坑392基、Tピット289基などとなった (表Ⅰ-1)。竪穴住居跡、土坑の大部分は銭亀宮の川沿いの6,000㎡ほどの地域に集中し、主体となる出土遺物からみて、縄文時代早期中葉の住吉町式からムシリⅠ式土器の段階まで居住が繰り返され、大規模な集落跡が形成されたものと考えられる。なお、センターが実施した調査で確認された年度別、地区別遺構内訳は表Ⅰ-2のとおりである。

以下に、平成8年度調査の概要を述べる。

竪穴住居跡、土坑はすべて、平成7年度調査区 (D区) の東に続くG区で検出された。その南西部ではこれまでも同様、竪穴住居跡や小型フラスコ状ピットなど多くの遺構が重複する状況にあったが、その東側、銭亀宮の川から約80mほど離れた地点では、長軸長が7~8mほどの大型で深い竪穴住居跡が、切り合い関係をほぼ持たず数軒確認されたのが特徴的である。竪穴の長軸方向がほぼ南北にそろい、南北方向に2列に並んで配列されている。これらの平面形は隅丸方形・隅丸長方形が基本で、竪穴中央部にほぼ方形の掘り込み炉を持ち、それを巡るように主柱穴が配置されている。主柱穴は、深さ40cmを越える規格性に富んだものである。H-565では3本の柱穴が同一箇所に近接して並ぶなど、竪穴拡張などの建て替えを各竪穴で考えなければならないものとなった。また、壁隙を巡る柱穴には、H-560 (昭和50年度調査の1号住居址と同一)・566のように、長さ40cmほど壁を掘り込んで作られるものがみられた。これら大型住居跡の窪みには黒色腐植土 (Ⅲ層) が厚く堆積している。遺物はⅢ層からは稀で、竪穴覆土から出土したものがほとんどである。これに対し、南西側の竪穴住居跡が重複する地区では、耕作深度の違いを考慮するにしても、H-562のように確認面から多くの遺物が出土しており、様相を異にしている。また、H-565・588周辺には、遺物を包含する暗赤褐色土の堆積が認められた。竪穴の掘り上げ土と考えられ、その下部の黒色腐植土 (Ⅲb層) からは遺物がほとんど出土しないことから、竪穴の掘り込み面はⅢb層中にあることが再確認された。遺物出土

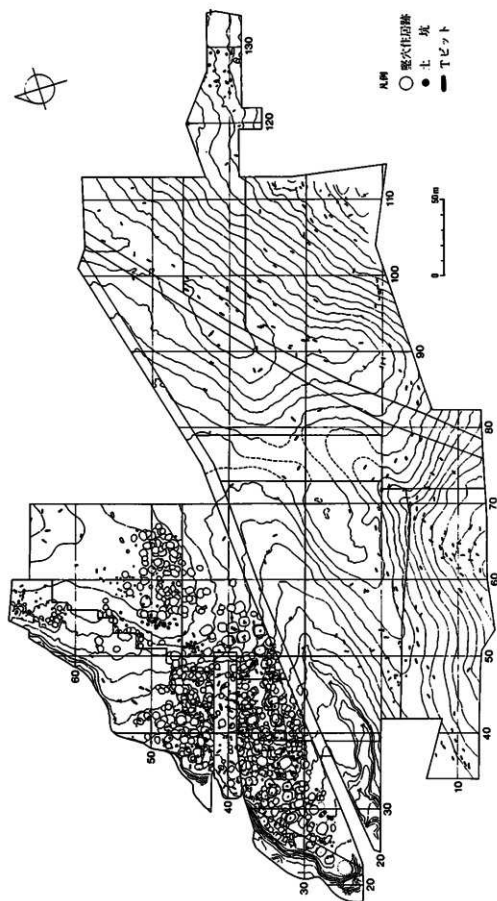


図 I-4 中野B遺跡遺構位置図

表1-2 函館空港拡張整備工事に伴う中野B路線年次・地区別運搬数一覧

	平成5年度		平成6年度			平成7年度			平成8年度				合 計	
	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	F地区	G地区	H地区	I地区	J地区	K地区			
平成5年度	171軒	177軒	91軒	5軒	103軒	103軒	84軒							
掘削 (A)	011~021 022a・022b 023~038 040~146 148~152 154~157 191~194 196~205 215・216	158~159 195 023~038 206~214 217~350 420~449	039 147・153 351~400 411~418 420~449	401 403・404 407 409 450・451 453~522 524・528 531~533 535 539~543 545~557	034・402 405・406 408・410 419 450・451 453~522 524・528 531~533 535 539~543 545~557	034・402 405・406 408・410 419 450・451 453~522 524・528 531~533 535 539~543 545~557	523 525~527 529~530 534 536~538 544 558~630							(番号重複) 034 (火警) 452
土 坑 (B)	171軒 805 011~074 076・083 084・087 088・089 090・091	177軒 755 075 081・082 085・086 088・089 099~166	735 077・080 082~088 167~195 196~200 225~256	255 196・197 201~220	263~283 285~299 257~262	103軒 125 078・079 221~224 257~262	795 300~321 323~355 357~380							631軒 (火警) 284 322 356
掘削 (C)	805 5カ所 001~004 009	755 12カ所 005~016 009	735 12カ所 005~016 009	955 1カ所 017	455 1カ所 017	795 1カ所 018	3775 (番号重複) 009							
集石 (D)	5カ所 3カ所 001~003	12カ所 3カ所 001~003	12カ所 3カ所 001~003	1カ所 1カ所 018	1カ所 1カ所 018	1カ所 1カ所 018	19カ所							
T L I T I	135 001~012 028	285 013~027 029~041	105 060~066 121~123	185 042~059 124~137	245 067~070 171 185~187 189~193	235 143~160 173~176 184 185~187 189~193	395 178~183 188 194~225	85 172 229 243・244 260~262	45 230~232 263 267	105 226~229 245~259	75 264~266 268~271			3カ所 2715

頻度が高いのもこの地区までで、これより以東では激減する。

北西側の調査区では、平成6年度調査（A地区）で確認された長軸長・深さとも2mを超す大型フラスコ状ピット群に連続するように、規模的にやや小ぶりのフラスコ状ピット群が確認されたことも特徴的である。標高47～48mの平坦面に20基ほどで構成される。土坑の深さにはバラツキがあるが、坑底は錢亀火砕流堆積物層（VI層）中に達していることが共通する。この地域はインポリューションにより波状の地質状態で、坑底を火砕流堆積物中につくるといふ意識も要因となって土坑規模のバラツキが生じたのではあるまいか。この地区は遺物の散布も稀で、覆土中の遺物の出土もごく僅かで、その構築時期が問題となる。

そのほか、G区南西側の多くの遺構が重複する地区では、小型のフラスコ状ピットやすり石・石錘などの礫石器が集中して出土する浅い土坑が検出されている。これらの土坑はいくつかのまとまりをもって位置し、これまでの調査結果と合わせてみれば、高橋が指摘した環状の配置（中野B I）が窺える。ただ、土坑の性格など、その全体像となるとまだまだ考えなければならない問題が多い。

Tピットは、いずれも溝状の細長いタイプである。長軸長3～4m程度のものが主体で、長軸長1.5m前後の小型のものもある。その配列は平成8年度の調査ではほぼ等間隔に並ぶものや、3基が近接して検出されたものもある。これまでの調査結果から全体を概観すると、尾根上や谷地形部分に集中域が見られ、緩斜面上にいくつかのTピット列が観察される。また、錢亀宮の川沿いの集落跡も集中域の一つとなっている。他の遺構との重複関係を持つTピットはこれまでと同様、すべて堅穴・土坑を壊してつくられていることから、新しいものと位置付けられる。

出土遺物の内容はこれまでと同じ様相である。土器は吉吉町式土器が主体で、わずかに物見台式・根崎式・ムシリ式土器などがみられた。石器では礫石器が多く、石錘の点数が群を抜いている。特徴的な遺物としては、線刻のある石錘が上げられる。H-561・566から出土したもので、ともに凝灰岩製で、砥石としても使用されている。線刻は格子状のモチーフを持ち、それに山形や不規則な幾本もの直線が加わるものである。格子状のモチーフはH-562出土土器にもみられ、線刻それ自体が他の文様に比べ、細く浅いのが特徴的である。同様の線刻はH-530出土の砥石にも不規則ではあるが見られ、過年度の報告では「線刻状の擦痕をもつもの」として、蛇紋岩製の石斧（H-27出土）・泥岩製の石錘（H-74出土）を示している。数量的には少ないが、これらは「線刻画」として扱って良いのではないかと判断される。

（田中）

表I-3 年次・地区別遺物点数一覧

年 度	土 器																
	I	IA	IB	IC	ID	ID1	ID2	IE	IF	IG	IH	II	II	III	IV	V	不明
平成4年度 ・5年度南	688	—	29	—	75,729	—	—	29,594	5,085	179	199	420	392	41	3	4	—
平成5年度北	26	—	21	—	—	16,304	908	1,809	65	577	16	729	782	242	—	1	—
平成6年度	520	1	565	—	—	2,572	2,830	17	—	—	—	4	3	1	—	—	—
平成7年度	332	—	22	—	—	56,710	748	1,455	—	769	—	—	—	—	—	—	1,650
平成8年度	113	—	197	14	—	36,084	570	225	—	4	—	1	—	1	—	—	1,137
合 計	1,679	1	834	14	75,729	111,670	5,056	33,100	5,150	1,529	215	1,154	1,177	285	3	5	2,787

年 度	石器等					合 計
	剥片石器群	磨製石器群	礫石器群	その他	小 計	
平成4年度 ・5年度南	64,985	277	45,680	305	111,247	223,610
平成5年度北	—	55	4,941	77	—	—
平成6年度	22,796	11	1,605	17	29,502	57,495
平成7年度	40,134	141	20,662	52	60,989	122,675
平成8年度	55,777	62	18,840	118	74,797	113,143
合 計	183,692	546	91,728	569	276,535	516,923

6 遺構・遺物の分類

(1) 遺構

遺構は、住居跡(略号H)、土坑(P)、Tピット(T)、焼土(F)に大きく分けた。

住居跡としたものは、すべて地面を掘りくぼめて床とした堅穴住居跡である。床面に炉(焼土はなく火を焚いた痕跡が認められるものを含む)があるものと、ないものがある。上屋構造を支えた、柱穴と考えられる小ピット(HP)がみられる。日常生活あるいは日常作業のための空間を意図した遺構である。

土坑としたものは、平面形、断面形、また規模と構造など様々で、機能や性格など不明確なものが多い。断面形がフラスコ状になるいわゆるフラスコ状ピット、人骨は残存しないが覆土の堆積状態と遺物の出土状況などから墓の可能性のあるものなどもこれに含めている。

Tピットとしたものは、細長い、深い溝状の遺構で、落とし穴と言われるものである。長径が1mをわずかに越す小型のものから、4m近い大型のものまで様々な大きさのものがある。覆土は自然堆積で、坑底直上に黒色または黒褐色腐植土がみられる特色がある。

焼土は、住居に伴わず、単独で発見されたもので、屋外炉の可能性もある。なお、住居跡に伴うものはHFとして区分している。(越田賢)

(2) 遺物

i) 土器

土器の分類については、函館市中野A遺跡(Ⅰ・Ⅱ)、中野B遺跡(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)、石倉貝塚進入灯地区の分類を踏襲しながら、必要に応じていくつかの分類を加えている。

I群：縄文時代早期の土器群

A1類：川汲式に相当するもの(阿部・領塚 1996)。中野A遺跡・中野B遺跡(平成5・6年度調査区)で出土する。本年度調査区では出土していない。東北地方の日計式に比定される。

A2類：ノダツプⅠ式に相当するもの。函館空港第6遺跡・志苔館跡の資料に相当する。本年度調査区では出土していない。東北北部の白浜式・根井沼式・寺ノ沢式に比定される。

B類：中野A式に相当するもの(横山 1996)。中野A(昭和51年度報告の第Ⅲ群)・中野B遺跡・石倉貝塚C地区・同進入灯地区(平成7年度調査区)で出土する。東北北部の物見台式に比定される。

C類：石倉貝塚進入灯地区のd1類に相当するもの(鳴川式の一部・梁川町遺跡の住吉町下層式Aの一部)。石倉貝塚進入灯地区・中野B遺跡(平成4～6年度調査区)で出土する。東北北部の島木沢式に比定される。

D1類：住吉町式に相当するもの(住吉町遺跡の下層式の大部分)。中野A遺跡・中野B遺跡(昭和51年度報告の第Ⅱ群)で出土し本遺跡に多い。東北北部の螢沢AⅡ式に比定される。

住吉式が学史的には正しい型式名だが、標識資料の内容が明らかでないことと、中野B遺跡の出土土器の多くが住吉町遺跡の内容と酷似するため、狭義の意味で住吉町式を踏襲した。また中野B遺跡(Ⅲ)の報告書(以下「Ⅲ報告」と略す)では時間差を考え胴部無文のものをA種、文様のあるものをB種に細分類した(A・B種を本報告からa・b種に訂正する)。

D2類：根崎式(森 1996)に相当するもの(梁川町遺跡の下層式B)。中野B遺跡(平成5・6年度調査区)、石倉貝塚C地区で出土する。東北北部の吹切沢式に比定される。

E類：アルトリ式に相当するもの。中野A・B遺跡（平成4・5年度調査区）で出土する。東北部のムシリⅠ式に比定される。

F類：道南地方では型式未設定、東銅路Ⅱ式に併行するもの。中野B遺跡（平成4・5年度調査区）遺跡で出土する。本年度調査区では出土していない。東北部の表館Ⅵ群に比定される。

G類：東銅路Ⅲ式に相当するもの。中野B遺跡・石倉貝塚進入灯地区で出土する。東北部の表館Ⅶ・Ⅷ群、売場Ⅹ群に比定される。

以下早期後葉の土器群は本年度調査区では出土していない。

H類：コッタロ式に相当するもの。中野B遺跡（平成4・5年度調査区）・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

I類：中茶路式に相当するもの。中野B遺跡（平成4～6年度調査区）・函館空港第1遺跡・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

J類：東銅路Ⅳ式に相当するもの。中野B遺跡（平成4～6年度調査区）・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

以下の土器群は本年度調査区では出土していない。

Ⅱ群：縄文時代前期の土器群。中野A遺跡・中野B遺跡（平成4～6年度調査区）・函館空港第4遺跡・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

Ⅲ群：縄文時代中期の土器群。中野A遺跡・中野B遺跡（平成4・5年度調査区）・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

Ⅳ群：縄文時代後期の土器群。石倉貝塚で出土する。

Ⅴ群：縄文時代晩期土器群。中野A遺跡（平成4年度調査区）・石倉貝塚進入灯地区で出土する。

続縄文及び縄文時代の資料は、中野B遺跡では出土しないため省略する。

[用語の解説について]

本報告では、貝殻沈積文尖底土器群（B類～I2類）の観察をⅢ報告を踏襲しながら、必要に応じて項目を付け加えて記載した。各遺構・包含層出土土器の事実記載は、以下の用語を用いている。また各図版の復元側面図に付した番号は、次の部位についての解説の（ ）付けの番号と一致する。

イ) 部位

口唇部：口縁部のうち土器の開口部の先端付近の縁部の総称（外面1・内面5）。

口唇端部：土器の内面、外面（上面・外傾面）、外面（外方）を区画する稜線のこと（分類に関わる部位のため、暫定的にこの名称を用いた）。

口縁部：胴部上半にくびれ部のある土器はその上位、文様帯のある土器はその下限、文様帯の存在しないものは、およそ土器の開口部を親指と、人差し指で挟み込んで余裕をもって届く範囲の粘土の接合部まで（外面2・内面6）。

頸部：口縁部下位から胴部への屈曲部。

胴部：頸部から底部屈曲にかけての部位（外面3・内面7）。

底部：尖底・平底部へと急激に径がすぼまる屈曲部から下位全体の総称（外面4・内面8）。

ロ) 形態

口縁部 波状口縁：波頂部となる大型突起が設けられるもの。

副突起付波状口縁：波頂部間に副突起が設けられるもの（B類・C類に多い）。

小波状口縁：小型突起が8山以上の多数設けられるもの。

平縁：突起を持たず平坦なもの。

口唇部断面 角形：上部に平坦面が整形されるもの。

丸形：上部に平坦面が整形されないもの（先細りの丸形を含む）。

切り出し状：上部の面が外そぎに外傾するもの（僅かに上面のあるものも含む）。

尖底部 乳房状尖底：突起を持ち、緩やかな曲線で立ち上がるもの。

砲弾形尖底：突起を持たず、やや鋭い曲線で立ち上がるもの（D2類に多い）。

ハ) 器面調整・地文

貝殻文土器の器面調整は条痕文による場合が多いが、かねてより条痕文には文様を意識するもの、単なる器面調整などいくつかのタイプ分けがなされることが指摘されている。本報告では文様を意図すると思われるものは末尾に「文」を付け、器面の調整による痕跡と使い分けた。

調整 ナデ：器面を指、貝などでナデるもの。

すり消し条痕：器面調整の1段階として条痕を施し、再びナデ調整するもの。

条痕：貝殻の条痕を文様を意図せず器面調整として不規則に施すもの。

背圧痕：貝殻殻表の押捺を文様を意図せず器面調整として不規則に施すもの。

押引：貝殻の腹縁・殻表の断続的加圧移動を文様を意図せず器面調整として不規則に施すもの。

押引波状：腹縁部の曲線を利用して押引ながらロッキング移動し、文様を意図せず器面調整として不規則に施すもの（D2類に多い）。

文様 条痕文：貝殻条痕を文様を意図して一定の規則のもと施文するもの。

背圧痕文：貝殻殻表の押捺を文様を意図して一定の規則のもと施文するもの。

押引文：貝殻の腹縁・殻表の断続的加圧移動を文様を意図して一定の規則のもと施文するもの。

押引波状文：腹縁部の曲線を利用して押引ながらロッキング移動を文様を意図して一定の規則のもと施文するもの（D1類に多い）。

ニ) 文様表現の単位

口縁部文様帯に施される文様を構成する様々な文様表現を、明瞭に意味付け記載出来る様に以下のとおり細分した。中には表現の区分に曖昧さがある。適切な用語が定まらなかったため暫定的に用いたことによるもので、ご容赦いただきたい。

沈線文：器面を引摺り線を引く。

鋸歯状沈線文：器面に「へ」字状を連続して刻み、鋸歯状の1本の線をつくる。

梯子状沈線文：2条の平行沈線の間に、腹縁部を押捺するもの（B類に多い）。

枕木状沈線文：2条の平行沈線の間に、殻表縁部を押捺するもの（B類に多い）。

押引沈線文：断続的に加圧移動し沈線をひくもの。

貝刻沈線文（暫定表現）：沈線文の上から腹縁文を刻み込むもの（C類に多い）。

貝線文：腹縁文の刺突を横位に連続押捺し、1本の線をつくる（D1類に多い）。

刻線文：先端の鋭利なもので浅く器面を引掻いて細い刻線を引く。

刺突文：器面に棒を突き刺した痕跡「角形」の場合もあるが中野Bでは「円形」が多い。

円形刺突：器面に対して直角に工具を突き刺すもの（B類・C類に多い）。

楕円形刺突：器面に対して斜角に工具を突き刺すもの（D1類に多い）。

伸円刺突：器面に対して斜角に工具を押しつけ引摺るもの（D2類に多い）。
 沈線上刺突（暫定表現）：沈線の上から刺突を等間隔で施すもの（C類に多い）。
 列点：連続して刺突が施されるもの。（C類・D1類に多い）。

貝殻文

腹縁文（暫定表現）：腹縁部で押捺するもの。Ⅲ報告では腹縁刺突と表現したが不適切と判断し押捺とした。

櫛目状腹縁文：貝殻の腹縁の背面を平坦に研磨した櫛歯状の原体で押捺し文様が櫛目状になった腹縁文。

連続腹縁文：腹縁部を一定の間隔に併行に連続押捺するもの（C類に多い）。

連続移動文（暫定表現）：腹縁部の一部分を幅狭く密着の間隔で移動し連続押捺するもの。（C類に多い）。

連続波状文：腹縁部の曲線を利用してロッキング移動するもの（D1類に多い）。

押引文：断続的に加圧移動する。殻表縁部・腹縁部での施文を一括したもの（D1類に多い）。

押引波状文：腹縁部の曲線を利用し押引ながらロッキング移動するもの（D1類に多い）。

背圧痕文：殻表部を押捺するもの。殻表縁部・腹縁部の施文を一括したもの（D1類に多い）。

引摺り背圧痕文：殻表部を短く引摺るもの（E類に多い）。

爪形文：爪型の工具により施文する。

爪瘤文：先端爪形のヘラ状工具により粘土を掻き分け、瘤状の突起を作り出すもの（A2類に用いられる爪形文との混同を避け、爪瘤文とした）。

爪痕：従来爪形文として文様の一種に捉えられてきたが、連続移動文等の施文時についた爪の痕跡と判断し爪痕とした（C類に多い）。

その他

置き痕：土器成形時に口唇部についた土器台の痕跡。

指頭圧痕：成型時の指頭の痕跡。

ボタン状突起：粘土粒を器面に貼り付けたもの。

結条体圧痕文：軸となる棒に撚り糸を巻き付けたものの側面圧痕。（富永）

ii) 石器

石器の分類は、中野A遺跡（平成3・4年度調査）の分類を基礎に、中野B遺跡で特徴的な器種を追加してきたこれまでのものに拠って行っている。まず、製作体系の異なる剥片石器群・磨製石器群・礫石器群に大別し、さらに器種の分類、細分類を行った。細分類に当たっては形態（一部調整方法を含む）により、大まかな項目立てを行い、それらに該当しないものについて最後に一項目を設けている。複数の器種が複合していると考えられるものは、原則的に下位の器種に含めている。また、細分類に当たっては、分類者の感覚による部分が多々あることをご了解願いたい。

なお、刃部・機能部の特定しがたい遺物を石製品として、一項目を設けている。

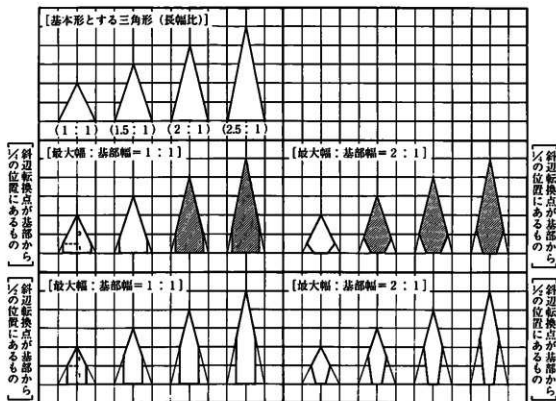
I 剥片石器群

剥片石器群は硬質頁岩を主に用い、稀に黒曜石と玄武岩がみられる。

石鏃

- | | |
|-------------------|-------|
| 1類 三角形のもの | a類 平基 |
| | b類 凹基 |
| 2類 細身・長身のもの | a類 平基 |
| | b類 凹基 |
| 3類 菱形のもの | |
| 4類 柳葉形のもの | |
| 5類 円基のもの | |
| 6類 有基のもの | |
| 7類 その他、上記に該当しないもの | |

石鑑については中野A遺跡からB遺跡に調査が移行した段階で、2・3類が加えられている。特に、2類の細身で長さ5cmを超えるような長身の鑑に注意したうえでの追加であった。ただ、分類の基準には不明確さが伴う。今回、図示(図I-5)を試みた。主に三角形鑑(1類)との対比である。長幅比各種の三角形を基本とし、尖端部の斜辺と側縁部の辺が変化する点(斜辺転換点)の位置、最大幅と底辺長の比を基準に作成した。模式図であるため、転換点を明瞭に示することができるが、実際にはなだらかに移行するものが多い。今回の分類で2類としたものは、下段の形状が主体である。上段・中段は基本的に1類として取り扱うが、中段スクリーン・トーンで示したものについては実物の形態変異は漸移的であり、分類に当たって判断に迷うものも少なくない。また、模式図を拡大して考えれば、底辺が極端に狭まるものは、菱形(3類)、柳葉形(4類)ということになる。



図I-5 石鑑の分類模式図

石槍

- 1 類 形態上、身と茎部の区別がつかないもの
 - a 類 幅広のもの（木葉形）
 - b 類 細長いもの（柳葉形）
- 2 類 側縁が曲線的な方を尖頭部、直線的な方を茎部と区別したもの
 - a 類 幅広のもの（木葉形）
 - b 類 細長いもの（柳葉形）
- 3 類 明瞭なかえしのあるもの
- 4 類 三角形または五角形で、基部が内湾するもの
- 5 類 その他、上記に該当しないもの

石錐

- 1 類 剥片の一部に尖端部を作出したもの：尖端部以外はあまり加工されていない
- 2 類 剥片または石器の折れ面を多少加工して尖端部とするもの
- 3 類 柄と機能部の区別が明瞭なもの
- 4 類 柄と機能部の区別が不明瞭なもの
- 5 類 柄と機能部の区別が不明瞭なものうち、棒状のもの
- 6 類 他石器からの転用品：今回の分類では石鏃からの転用品に限った。
- 7 類 その他、上記に該当しないもの

鐮状石器：全体的形状（1～3類）と刃部（a～c類）の分類の組合せによる。

- 1 類 三角形またはそれに近い台形状のもの a 類 直刃加工のもの
- 2 類 方形またはそれに近い台形状のもの b 類 曲刃加工のもの
- 3 類 その他、上記に該当しないもの c 類 素材のままのもの

両面調整石器：尖頭部を持たないもので、片面加工の同形態のものも含める。粗雑な加工なものは他器種の未製品の可能性もある。

- 1 類 円形・楕円形のもの
- 2 類 左右非対称形のもの
- 3 類 撥形のもの
- 4 類 その他、上記に該当しないもの

石匙：これまでどおりの分類で、1～5類は縦型。6類の横型は出土していない。今回の分類では、決りによるつまみ部の作出はないが、刃部と明瞭な段差があり長方形の柄を持つ特徴的形態のものを石匙とし、3類に分類した。

なお、中野B遺跡（Ⅱ）の報告で2b類（背面に先行して腹面右側縁に調整が加えられるもの）とした石匙は、中茶路式・コッタロ式土器に多く共伴する特徴的なものである。その特色付けを意識した分類であり、統一性に欠ける部分があるがご了解願いたい。

- 1 類 両面加工によるもの
- 2 類 片面（半両面）加工によるもの

- a 類 稜線がほぼ中央にあるもの
- b 類 稜線が左右どちらかに偏るもの
- 3 類 周辺加工によるもの
- 4 類 加工がほとんど見られないもの
- 5 類 大型のもので身は殆ど加工されないもの
- 6 類 横型
- 7 類 その他、上記に該当しないもの

スクレイパー：中野B遺跡 (Ⅲ) の報告では変更しているが、今回の分類は以前のものに復している。

- 1 類 素材の短辺に刃部を有するもの：搔器 (円形搔器) を含む。
- 2 類 素材の長辺に刃部を有するもの
 - a 類 一側縁に刃部をもつもので、刃部が直線的なもの：直刃削器
 - b 類 一側縁に刃部をもつもので、刃部が外湾するもの：外湾刃削器
 - c 類 一側縁に刃部をもつもので、刃部が内湾するもの：内湾刃削器
 - c' 類 挟り状の刃部をもつもの：挟入削器
 - d 類 複数の刃部をもつもの：複刃削器
 - d' 類 複数の刃部をもつもののうち、細身で先細りするもの：複刃尖頭削器
 - e 類 鋸歯状の刃部を有するもの：鋸歯状削器
- 3 類 その他、上記に該当しないもの

彫器様石器：素材の側縁に櫛状の剥離面を有するもの。名称は以前のままとする。今回該当するものは出土していない。

楔形石器：上下両端 (もしくは一端) が潰れ、側面に櫛状の剥離面を有するもの。ただし、櫛状剥離は使用の結果であり、すべてに有するとは限らない。点数的には少ない。

加工痕ある剥片 (R フレイク)

使用痕ある剥片 (U フレイク)

石核

剥片

Ⅱ 磨製石器群

磨製石器群は磨製石斧及びその製作残片、研磨石材、前三者への分類不明破片からなる。石材は蛇紋岩が大部分で、緑色泥岩が若干みられる。今回、点数的に少ない。

石斧：特に小型のものを「石のみ (形)」と呼称し、一覧表備考欄等に記載した。

- 1類 擦り切り技法により成形されるもの
- 2類 粗割り・敲打により成形されるもの
- 3類 その他、上記に該当しないもの：多くは良く研磨され、製作過程が不明なものである。

擦り切り残片

研磨石材

磨製破片：破片のため、上記の分類に含まれないもの。

環状石斧：特異なものとして項目立てした。平成4・7年度の調査で出土している。

II 礫石器群

礫石器群は機能が複合しているものが多い。複合例については、前述のとおり下位の器種に分類している。例えば、すり面と敲打痕が同個体にみられる場合はすり石に、すり面と敲打痕があっても対向する縁のあるものは石錘に分類する。

主たる石材は、たたき石・すり石では閃緑岩・安山岩・砂岩が、砥石・石鋸では流紋岩・凝灰岩・頁岩などが多く用いられている。礫の素材では丸みを帯びる、いわゆる河原石の類や、堆積岩などの露頭やその近辺で採取した岩塊を分割した礫片を利用している。本文中では前者を「円礫」、後者を「板状礫」とただ単純に表現している場合がある。

たたき石：素材の形態から細分している。特徴的形態から一般的形態の順に、すり石との分類を統一のため、これまでの1・2類を入れ替えている。読み替えていただきたい。

- 1類 棒状のもの
- 2類 円形・楕円形（不整円）のもの
- 3類 球状のもの
- 4類 その他、上記に該当しないもの

すり石：上記のとおり、たたき石との分類を統一するため、球形のもの（3類）を追加している。

- 1類 断面形が三角形で、その稜部にすり面を有するもの
- 2類 円形・楕円形のもの
- 3類 球状のもの
- 4類 その他、上記に該当しないもの

砥石

- 1類 平坦～U字状の砥面をもつもの
- 2類 溝状の砥面をもつもの
- 3類 その他、上記に該当しないもの

石鏃：基本的に扁平な鏃を素材とし、機能部がV字またはU字状の断面を持つもの。一部、すり石や砥石との区別が困難なものがある。

石錘：今回から、以下の細分類を行っている。

- 1類 短軸に対向する挟りがあるもの
- 2類 長軸に対向する挟りがあるもの
- 3類 短軸・長軸ともに対向する挟りがあるもの
- 4類 破片（鏃片のうち挟りを有するものに限る。）

石皿・台石：概ね直径20cm以上の扁平鏃にすり面・たたき痕を有するもの。たたき痕のみのものを台石とした。

加工痕ある鏃

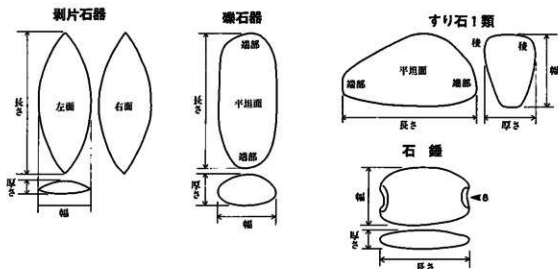
鏃・鏃片

M 石製品

機能部の特定し難い加工・成形加工が施された遺物について石製品として扱い、これまで列記されてきた「両端挟入石製品」などの名称を本文中や一覧表に記載している。

計測についてはこれまでと同様に、下図（図Ⅰ-6）のように行った。磨製石器については剥片石器と同様である。礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅としている。本文中で便宜的に使用した部位の名称は、下図のとおりである。遺物実測図中で、敲打痕をV-Vで、すり痕を→で表現しているが、すり石で下面図を表示しているものについては省略している。なお、石錘挟り部に敲打痕のみられるものを≡で表示し、その幅を数字で記載した。その単位はmmである。

（田中）



図Ⅰ-6 石器計測方法の模式図

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の遺跡

中野B遺跡は函館市街地の東方約8kmに位置する(図I-1)。標高40~50mほどの海岸段丘縁辺の緩斜面上に立地し、北東から南西方向に段丘を開析して津軽海峡に注ぐ銭亀宮の川の河口から700~800m上流左岸にある。中野B遺跡が立地する松倉川と汐泊川に挟まれた地域は海岸段丘が発達する地域で、幾本もの小河川や沢がほぼ北東から南西方向に段丘を開析して津軽海峡に注いでいる。この段丘上には小河川や沢沿いに数多くの遺跡が存在している。周辺の遺跡については前に報告されているので割愛するが、縄文時代早期に限れば志苔館遺跡、函館空港第6地点、中野A遺跡、石倉貝塚進入灯地区、石倉貝塚C地点、根崎遺跡が調査され、中野B遺跡の主体を占める住吉町式土器の前後型式がそれぞれの遺跡で確認されている。南茅部町川汲遺跡と共に現在のところ道南部では最初期の日計式相当の土器に伴う竪穴住居跡が対岸の中野A遺跡で確認されており、この段丘上が早くから居住に適した環境にあったことが窺える。

渡島半島における縄文時代早期の遺跡は函館周辺部が早くから知られていたが、近年の発掘調査により周辺地域の様相も、次第に明らかになってきた。ここで中野B遺跡が成立していた頃の渡島半島の状況がどのようなものであったか比較対比が出来るように、中野B遺跡のおおよその分類ごとに、近年発掘調査された各市町村の遺跡を以下に集成した。なお、縄文早期に該当し、報告書中に細かい型式が未設定のものは中野B遺跡の基準の範囲で当てはめた。

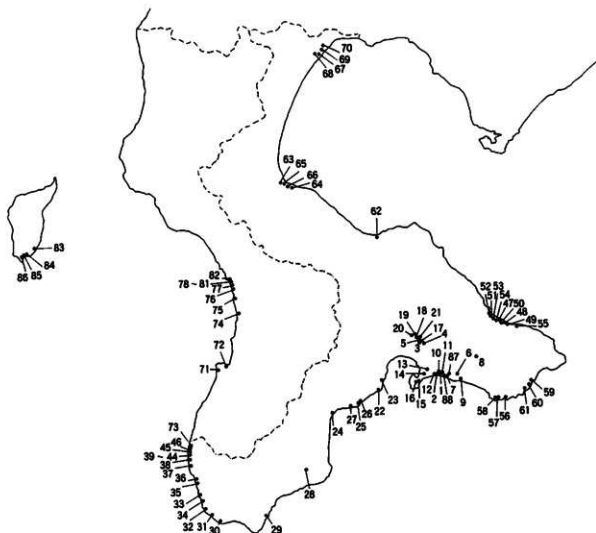
I群A2類【ノグップI式】は、函館市の西桔梗1遺跡(1995)、石川1遺跡(1988)、西股遺跡(1974)、石崎町第9地点遺跡(1974)、函館空港第6遺跡(1968)、七飯町の国立療養所裏遺跡(1995)、木古内町の新道4遺跡(1986)、松前町の白坂第6地点遺跡(1983)、白坂第7地点遺跡(1983)、恵山町の古武井9遺跡(1984)、恵山町中浜E遺跡(1986)で出土している。

B類【中野A式】は函館市の石倉貝塚C地区(1995)、桔梗2遺跡(1988)、七飯町の国立療養所裏遺跡、南茅部町の川汲D遺跡(1990)、八雲町の八雲3遺跡(1990)で出土している。

C類は函館市の梁川町遺跡(1960)、石倉貝塚進入灯地区(1995)、七飯町の鳴川遺跡(1967)で出土している。

D1類【住吉町式】は函館市西桔梗1遺跡、住吉町遺跡(1953)、木古内町の釜谷5遺跡(1995)釜谷遺跡(1996)、鶴岡2遺跡(1989)、松前町の茂草B遺跡(1979)、棚石遺跡(1978)、小浜遺跡(1975)、恵山町の日ノ浜砂丘1遺跡(1986)、中浜E遺跡、長万部町の長万部陣屋跡(1985)、榮原2遺跡、上ノ国町の小砂子遺跡、乙部町の緑町2遺跡(1989)で出土している。また住吉町式に併行すると考えられる【虎杖浜式】が奥尻町の青苗遺跡(E地区)で出土し、同じく【大間式】が松前町の札前第1遺跡(1985)、札前第2遺跡(1985)、高野II遺跡(1984)、白坂第7地点(1983)、白坂第8地点(1983)、森町のオニウシ遺跡(1977)、恵山町の中浜E遺跡、上ノ国町の大間遺跡(1955)で出土する。

D2類【根崎式】は函館市の豊原2遺跡(1994)、石倉貝塚C地区、根崎公園遺跡(1967)、七飯町の国立療養所裏遺跡、松前町の白坂第6地点(1983)、原口館(1993)、南茅部町の八木B遺跡(1992)、後駒B遺跡(1991)、川汲B遺跡(1986)、八雲町の八雲3遺跡(1990)、奥尻町の青苗遺跡(F地区)(1998)で出土している。



遺跡名				
1 中野A遺跡	19 国立療養所高道跡	37 小浜遺跡	55 木直C遺跡	73 小砂子遺跡
2 志谷館	20 長万川遺跡	38 高野II遺跡	56 浜町A遺跡	74 目名尻遺跡
3 石川1遺跡	21 大中山13遺跡	39 白坂第1地点	57 戸井貝塚	75 緑町2遺跡
4 柿梗2遺跡	22 館野2遺跡	40 白坂第5地点	58 蛭子川2遺跡	76 桑浜4遺跡
5 西柿梗1遺跡	23 茂別遺跡	41 白坂第6地点	59 古武井9遺跡	77 オカシ内遺跡
6 豊原2遺跡	24 新道4遺跡	42 白坂第7地点	60 日ノ浜砂丘1遺跡	78 元和9遺跡
7 石倉貝塚C地区	25 釜谷5遺跡	43 白坂第8地点	61 中浜E遺跡	79 元和11遺跡
8 西殿遺跡	26 釜谷遺跡	44 白坂第9地点	62 オニウシ遺跡	80 元和12遺跡
9 石崎町第9地点遺跡	27 鶴岡2遺跡	45 原口遺跡	63 山崎遺跡	81 元和3遺跡
10 函館空港第6遺跡	28 湯の屋6遺跡	46 原口館	64 浜松2遺跡	82 元和7遺跡
11 函館空港第1遺跡	29 隠内館	47 磨光A遺跡	65 八雲3遺跡	83 松江遺跡
12 横崎公園遺跡	30 達石遺跡	48 八木A遺跡	66 コタン風泉遺跡	84 青苗遺跡
13 権現台場遺跡	31 鬼沢B遺跡	49 八木B遺跡	67 長万部峰遺跡	85 青苗遺跡(E地区)
14 梁川町遺跡	32 トノマ遺跡	50 後駒B遺跡	68 オバルベツ2遺跡	86 青苗遺跡(F地区)
15 春日町遺跡	33 札前第1遺跡	51 白尻A遺跡	69 栄原2遺跡	87 石倉貝塚通入灯地区
16 住吉町遺跡	34 札前第2遺跡	52 白尻B遺跡	70 ナイベコシナイ2遺跡	88 中野B遺跡
17 西柿梗E1遺跡	35 茂草B遺跡	53 川波B遺跡	71 大間遺跡	
18 鳴川遺跡	36 響石遺跡	54 川波D遺跡	72 四十九里沢A遺跡	

図Ⅱ-1 渡島半島の縄文早期の遺跡位置図

E類【アルトリ式（ムシリI式系）】は函館市の桔梗2遺跡（1988）、豊原2遺跡、松前町茂草B遺跡、白坂第1地点遺跡（1983）、白坂第5地点遺跡（1983）、白坂第8地点遺跡（1983）、原口館、南茅部町の八木B遺跡、戸井町の浜町A遺跡（1990）、戸井貝塚（1990）、八雲町の浜松2遺跡（1991）、八雲3遺跡、コタン温泉遺跡（1992）、ナイベコシナイ2遺跡（1996）、恵山町の中浜E遺跡（1986）、上ノ国町の四十九里沢A遺跡（1974）、奥尻町の育苗遺跡（F地区）で出土している。

F類は函館市の西桔梗1遺跡、豊原2遺跡（1994）、長万部町のナイベコシナイ2遺跡で出土。

G類【東銅路Ⅲ】は函館市の桔梗2遺跡（1988）、西桔梗1遺跡、豊原2遺跡、梁川町遺跡、春日町遺跡（1954）、木古内の新道4遺跡、松前町の建石遺跡（1975）、鬼沢B遺跡（1978）、棚石遺跡（1978）、白坂第1地点遺跡、白坂第7地点、白坂第9地点遺跡（1983）、南茅部町の木直C遺跡（1981）、戸井町の浜町A遺跡、戸井貝塚、恵山町の日ノ浜砂丘1遺跡、中浜E遺跡、八雲町の八雲3遺跡、栄原2遺跡、ナイベコシナイ2遺跡、上ノ国町の四十九里沢A遺跡、小砂子遺跡、乙部町の緑町2遺跡（1989）、オカシ内遺跡（1980）、奥尻町の育苗遺跡（1981）、松江遺跡（1983）で出土している。

H類【コッタロ式】は函館市の豊原2遺跡、松前町の棚石遺跡、白坂第7地点遺跡、恵山町の中浜E遺跡、上ノ国町の小砂子遺跡、乙部町のオカシ内遺跡、奥尻町の松江遺跡で出土している。

I類【中茶路式】は函館市の西桔梗1遺跡、豊原2遺跡、函館空港第1遺跡（1967）、権現台場遺跡（1981）、梁川町遺跡、春日町遺跡、七飯町の長万川遺跡（1991）、木古内町の新道4遺跡、知内町の湯の里6遺跡（1985）、松前町の建石遺跡、鬼沢B遺跡、小浜遺跡（1975）、高野Ⅱ遺跡（1984）白坂第1地点遺跡、南茅部町の白尻A遺跡（1977）、戸井町の浜町A遺跡、戸井貝塚、恵山町の日ノ浜砂丘1遺跡、中浜E遺跡、八雲町の山崎遺跡（1980）、八雲3遺跡、長万部町のオバルベツ2遺跡、栄原2遺跡、ナイベコシナイ2遺跡、上ノ国町の四十九里沢A遺跡、小砂子遺跡、乙部町の栄浜4遺跡（1977）、オカシ内遺跡、元和7遺跡（1977）、元和9遺跡（1977）、元和11遺跡（1977）、奥尻町の松江遺跡で出土している。

J類【東銅路Ⅳ式】は函館市の西桔梗1遺跡、豊原2遺跡、梁川町遺跡、春日町遺跡、西桔梗E1遺跡（1974）、七飯町の大中山13遺跡（1992）、福島町の隠内館（1986）、松前町の建石遺跡、鬼沢B遺跡、茂草B遺跡、高野Ⅱ遺跡、白坂第1地点、白坂第8地点、白坂第9地点、原口遺跡（1976）、原口館、南茅部町の磨光A遺跡（1994）、八木A遺跡（1995）、白尻A遺跡（1977）、白尻B遺跡（1981）、木直C遺跡（1981）、戸井町の浜町A遺跡、蛭子川2遺跡（1989）、恵山町のご武井9遺跡（1984）、日ノ浜砂丘1遺跡、中浜E遺跡、長万部町のオバルベツ2遺跡、栄原2遺跡、ナイベコシナイ2遺跡、上ノ国町の四十九里沢A遺跡、小砂子遺跡、厚沢部町目尻遺跡（1979）、乙部町栄浜4遺跡、オカシ内遺跡、元和7遺跡、元和9遺跡、元和11遺跡、元和12遺跡（1977）、元和3遺跡（1977）、奥尻町育苗遺跡、松江遺跡で出土している。

以上の遺跡のうち堅穴の検出された遺跡は、函館市西段遺跡、函館空港第1遺跡、南茅部町白尻B遺跡、川汲B遺跡、恵山町日ノ浜砂丘遺跡、松前町トノマ遺跡、高野Ⅱ遺跡、白坂第8地点遺跡、乙部町オカシ内遺跡、奥尻町松江遺跡である。

本州の東北地方北部と道南部は、同じ尖底土器文化圏にあり強い影響関係が考えられる。だが、道南部に限ってもいくつかの地域差が認められる。例えば「住吉町式」も白老町虎杖浜3遺跡で底部が平底となった「住吉町式」類似の文様をもつ土器が出土している。この時期の北海道道東部の平底の文化圏の影響が器形にみられ、互いの文化圏が融合していたことがわかる。

尖底土器の分布の境界線を追うと、B類「中野A式」の北限は白老町虎杖浜2遺跡で確認されたも

のである。C類の石倉貝塚進入灯地区に併行するものは静内町駒場7遺跡で確認され、そしてD1類の「住吉町式」分布の北限は苫小牧市美沢東6遺跡で確認される。以上のことから日高地方までの太平洋沿岸は、ほぼ尖底の文化圏に含まれていたと考えられる。(宮永)

2 地形と地質

図Ⅱ-2に遺跡周辺の等高線図を示した。銭亀宮の川を挟んで、中野A・B遺跡がある。遺跡は海岸段丘の緩斜面上に立地し、周辺は雨水の侵食により起伏ある地形となっている。遺跡を横断する市道中野4号線の部分が調査でも明らかになった銭亀宮の川に流れ込む沢であり、この沢と銭亀宮の川に挟まれる標高40～50mの尾根上に遺跡の主体となる縄文時代早期の竪穴などの遺構が密集している。この集落跡には時期的に新しいTピットが集中するほか、遺物の希薄な周辺の尾根上にもTピットが広範に分布している。この段丘上からは津軽海峡を挟み、約20km隔てた対岸の西北半島が隣近に望むことができる。

さて、遺跡周辺には少なくとも3段の段丘面、段丘を開析する河川、沖積低地、谷底平野が発達している。図Ⅱ-3・4に地形分類図・地形断面図及び地質柱状図を示している。周辺地形についてはこれまでの花岡の報文を要約したい。要約にあたって、用語の不適切な使用など誤りがあると思われるが、専門外の筆者の責に追うものである。

段丘Ⅰ：標高60～100mに分布し、円礫から構成される。扁平な礫が多く、地点4では砂と礫の水平互層が観察される。この段丘面は広い谷に開析され、波状の起伏をなすことが多い。また、段丘周縁部では段丘崖が不明瞭で、下位の平坦面との間に緩傾斜面をなすことが多い。

第2段丘(長谷川・鈴木、1964)、中野町面(瀬川、1974)に相当。

段丘Ⅱ：段丘Ⅰ下位の標高30～60mの平坦面。この面は、松倉川右岸地域の地点13では円礫層から構成され、段丘とみなされる。一方、松倉川から沙泊川の海岸沿いに分布する平坦面は水成礫がほとんど観察されず、火砕流堆積物から成っている。地点12では火砕流堆積物に円礫が含まれ、火砕流堆積物の水成二次堆積物と考えられる。一連のようにみえるこの平坦面は、段丘面、火砕流堆積物の侵蝕面といった成因の異なる平坦面で構成されるとみられる。地形分類図では一括して段丘Ⅱ・火砕流台地として示している。

第3段丘(長谷川・鈴木、1964)、日吉町段丘(瀬川、1974)に相当。また、火砕流堆積物は銭亀沢火山灰層(長谷川・鈴木、1964)、銭亀一女那川テフラ(山縣ほか、1989)に対比される。

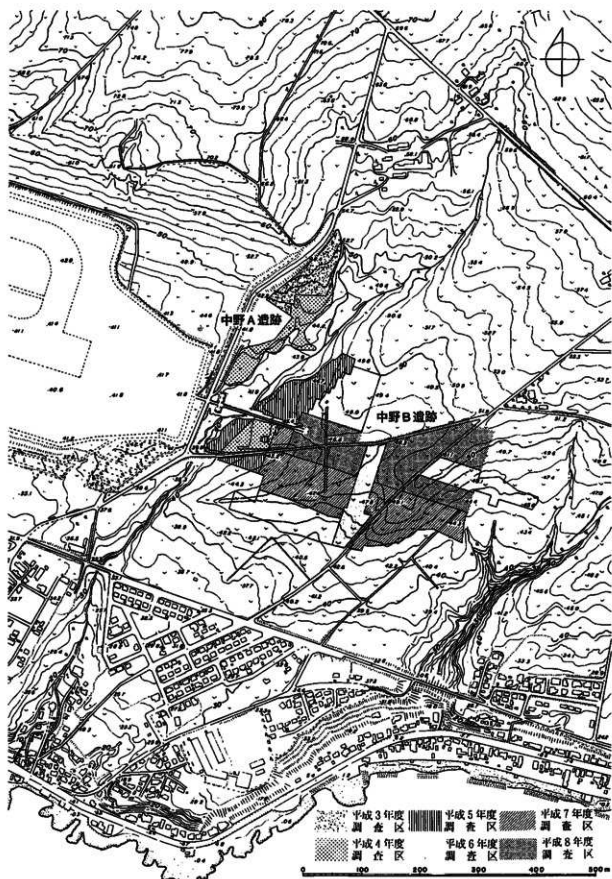
段丘Ⅲ：標高40mで、現運河沿いにある。

山地斜面：標高50m以上で谷密度が大きく、段丘堆積物や火砕流堆積物の基盤である新第三紀の沙泊川層(長谷川・鈴木、1964)の分布と一致する。

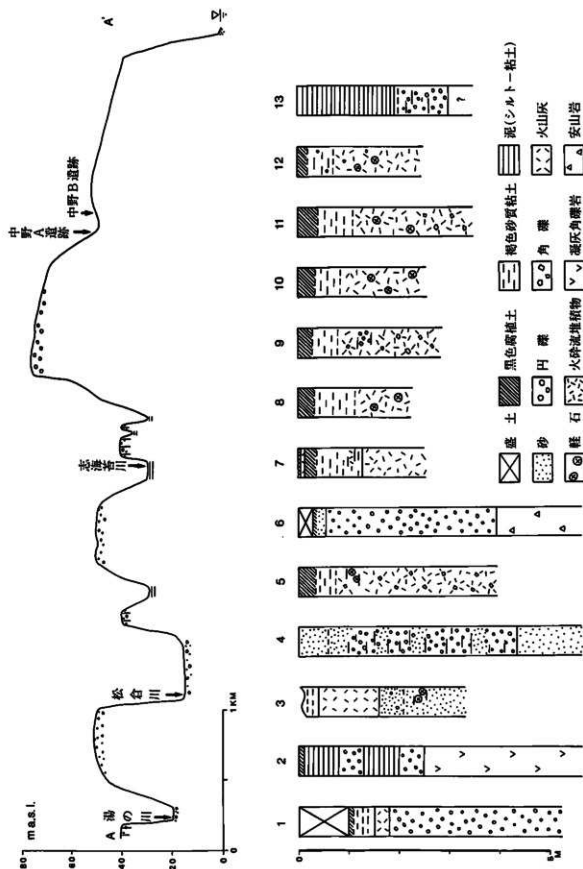
この他地形的特色とした、沖積低地が湯の川、松倉川、沙泊川沿いに認められ、狭長で侵蝕性の谷底平野は志海苔川沿いや段丘Ⅱ・火砕流台地を刻む小谷に発達している。遺跡周辺の河川は、概ね北東～南西の方向性がある。海岸部には、砂礫から成る海浜と安山岩から成る波蝕面がある。

中野B遺跡は段丘Ⅰ周縁部の緩斜面上に立地し、両館市内の多くの遺跡は段丘Ⅱの平坦面に立地している。ところで、松倉川・沙泊川の現河床・現河口で見られる礫の岩種の調査から、遺跡で出土する石器石材の大部分は遺跡周辺から得られそうであるとの知見が得られている。主に、蛇紋岩を除く流紋岩、安山岩、硬質(珪質)頁岩、頁岩、砂岩、閃緑岩、凝灰岩である。そこで、図Ⅱ-5では遺跡周辺の岩石分布図を示した。

遺跡が立地する段丘には礫・砂及び泥などからなる段丘堆積物(遺跡周辺では見られず、基盤は火



図II-2 遺跡周辺地形図



図II-4 地形断面図と地質柱状図

砕流堆積物になっているようである)のほか、輝石安山岩及び火砕岩がある。また、松倉川・沙泊川中流域から上流域には流紋岩火砕岩及び溶岩、硬質泥岩シルト岩互層・泥岩・砂岩及び酸性凝灰岩、ドレイait及び玄武岩が表示されている。閃緑岩以外の岩石は容易に入手できそうである。今回の調査でも、砥石や石錐に利用された流紋岩が接合(図Ⅲ-139-26~33)したことや同一母岩の頁岩を分割して石錐に利用するなど、露頭やその近辺で採取されたであろう大きな石材を遺跡に持ち込んでいることが予想される。

ただし、石器に使用される閃緑岩は円礫で、河床や海岸で採取されるものであろうが、その供給源となる閃緑岩帯は図示されていない。岩種調査でも目立った存在ではなかったようである。函館・渡島大島地域の地質図(『日本地質体系2・北海道地方』1998)で見る限り、大野町大野川上流域、日本海側の上ノ国町石崎川流域や桂岡鉾山周辺にあるだけである。渡島半島には花崗閃緑岩からなる白亜紀の深成岩類が点々と分布することから、遺跡周辺地域に閃緑岩帯が存在する可能性は皆無ではない。しかしながら、花崗が指摘するように「石器として使用されている質の良い材質のものまでも周辺で入手可能かはさらに調査する必要」(『中野A遺跡(Ⅱ)』1993)がまだまだあるだろう。

また、石斧の石材に利用される蛇紋岩は、地質図から松前町稲倉沢鉾山周辺にみられる。

3 土層

中野B遺跡の基本土層についてもこれまでの花岡の報文を要約し、今回の調査で得た知見を加えることにしたい。

遺跡の基本的土壌断面は上位から下位へ、黒色土、黒褐色ないし暗褐色土、未風化層に区分され、黒色土中には数枚の降下火山灰が認められている。これまで同様、土層の名称は図Ⅱ-6のとおりである。P.D.1~P.D.4は函館市教育委員会(1977)による名称を踏襲している。今回の調査範囲ではⅢ層上半以上の保存は悪い。また、V層についてはこれまでの報告書間で内容に差違がある。このことについては後で述べたい。

I層:P.D.2より上位の腐植土層を一括する。これまで、I a層(耕作土)、I b層(腐植土)と分類しているが、今回の調査での図中I層はすべて耕作土である。

P.D.1:灰白色のシルト質降下火山灰。I b層中にみられるもので、駒ヶ岳統d火山灰(Ko-d)に対比されるとみられる(函館市教育委員会、1977)。

図Ⅱ-5 の凡例

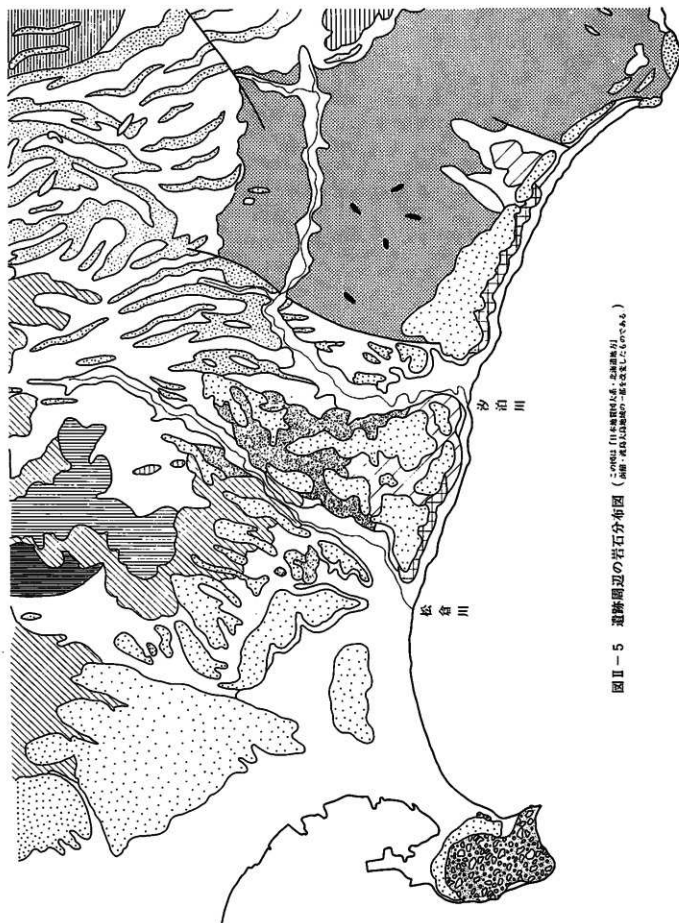


図 2-5 遺跡周辺の岩石分布図 (この図は「日本地質図」系、北緯緯度図) (遺跡・遺構は地質図の一部を改変したものである)

砂質火山灰：にぶい黄褐色の軽石混じり砂質降下火山灰。I b層中でP.D.1・P.D.2間の層準に産出するもの。

P.D.2：にぶい黄褐色、黄褐色、褐色のシルト質降下火山灰。駒ヶ岳統e火山灰(Ko-e)とされてきたが、この火山灰は白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)に対比されるらしい。

以上の火山灰については、今回の調査で検出されていない。

II層：P.D.1とP.D.3との間の腐植土層。黒色を呈し、粘土質である。今回の調査では市道石倉6号線脇やムジナ川支流の沢頭周辺に見られた(図II-8のB・C)。

P.D.3：赤褐色、明赤褐色の粘土質土壌で含水量が非常に多い。保存の良い地点で層厚10~20cm。層状ないしレンズ状に産出する。プラントオパールを頗る多く含み、少量の石英、斜長石、角閃石、火山ガラス等を含んでいるという。今回の調査では大型堅穴の窪みに堆積していた。腐植化の度合いによるのか、同じ層準で色調が異なってみられるものがあり、P.D.3'などで表記している。

また、この色調を呈する土壌は一地点の土壌断面において二つの層準に産出することがあり、単純に上位をP.D.3 I、下位をP.D.3 IIとした。今回、ムジナ川支流の沢頭周辺に見られ(図II-8のC)、色調からII層中のものをP.D.3 I、その下位に25cmと厚く堆積するものをP.D.3 IIとした。下位のP.D.3 IIには周辺から再堆積したものを含まれると考えられる。

III層：P.D.3とIV層との間の腐植土層。遺物包含層の主体で、縄文時代早期の遺物が出土する。

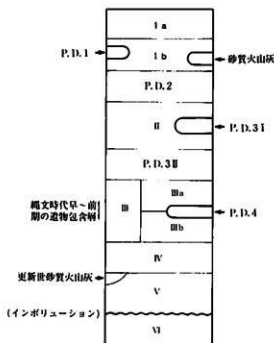
この層はP.D.4の挟在によって上下に二分される。P.D.4より上位をIII a層、下位をIII b層とする。III a層は黒色の粘土質腐植土で、III b層は赤黒色の粘土質腐植土である。P.D.4が挟在しない限り両層の区別は難しく、この場合には一括してIII層と表示している。

大型堅穴の周辺(図II-7)では掘り揚げ土と考えられる暗赤褐色土の堆積があり、多くの遺物を包含していた。III d層と呼称した。その下位には黒色腐植土(III b層)が見られ、遺物はほとんど出土しない。また、46-30区周辺の遺物集積域での土層表記でIII b1・III b2等の名称を用いているが、函館市教育委員会(1977)が定義したものとは別個のもので、今回の調査に限定するものである。

P.D.4：明黄褐色のシルト質降下火山灰。縄文早期の住居跡の覆土中に産出することが多く、今回の調査でも大型堅穴の窪みに堆積していた。火山ガラスに富み、斜長石、斜方輝石、不透明鉱物を含むという。火山ガラスの形態は網目模様を呈し、斜方輝石と火山ガラスの屈折率から、駒ヶ岳起源のKo-gに対比されるようである。

今回の堅穴内のP.D.4は腐植化が激しく、明黄褐色に確認できる部分は少ない。

IV層：V層を母材とする腐植土層で、III層との間の漸移層。黒褐色暗褐色の砂質粘土~粘土質腐植土。



図II-6 基本土層模式図

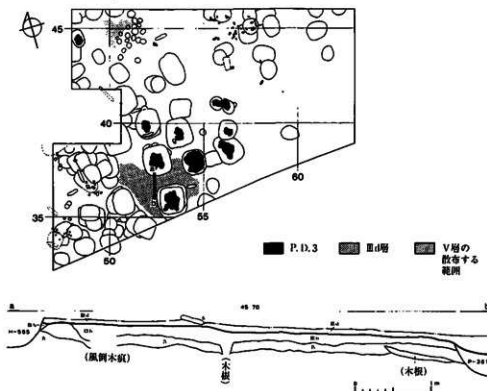
更新世砂質火山灰：灰色の砂質降下火山灰。主に、斜長石、角閃石、火山ガラスから成り、軽石を含むという。角閃石と火山ガラスの屈折率から、濁川カルデラ起源のNg-a (fall) またはNg-b (fall) に対比される。今回、旧石器確認調査を実施し、その試掘溝断面でⅣ層下位、Ⅴ層の窪みに堆積することが確認された（図Ⅱ-8）。なお、50-44区の砂質火山灰上で出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $12,300 \pm 110$ y.B.P.の値が得られた（Ⅴ章-2参照）。

Ⅴ層：基本的には黄褐色のローム。粘性が強く、色調には種々変化がみられる。旧石器確認調査試掘溝などの土層表記で、Ⅴ-1からⅤ-4まで区分するのは色調の差などによるものである。黄褐色から順に、淡紅色、橙色、淡紅色で下位の火砕流堆積物が混合するものである。ただ、下位の火砕流堆積物との区分が専門的に正確かどうかの吟味は行っていない。また、Ⅴ・Ⅵ層中ではインボリューションの土層が観察され、Ⅴ層はかなり乱れた状況であった（図Ⅱ-8のD）。

なお、T-264下のⅤ-3層中から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $15,600 \pm 1,000$ y.B.P.の値が得られた（Ⅴ章-1参照）。

Ⅵ層：火砕流堆積物。明黄褐色を呈し、軽石と石質岩片を多量に含む火山灰から成る。石英と角閃石を多く含む。前出の銭亀沢火山灰層、銭亀-女那川テフラに対比される。

これまでⅤ層について、ローム層と火砕流堆積物との混同があった。中野A遺跡（Ⅱ）の報告以来、Ⅴ層を火砕流堆積物と記述している。石倉貝塚進入灯地点ではⅤ層としてわずかに残るローム層の存在を報告し、雨水による流失の可能性を考えている。これまでの報告の遺構土層記述中にも「黄色土」との表記もあり、ローム層の存在を窺えるが、断定するまでには至らなかった。今回の旧石器確認調査によって明確な層準が確かめられた（現場調査段階で、花岡の助言を得た）。今回、Ⅴ層をローム層として、以前に復することとなった。（田中）



図Ⅱ-7 土層断面図(1)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

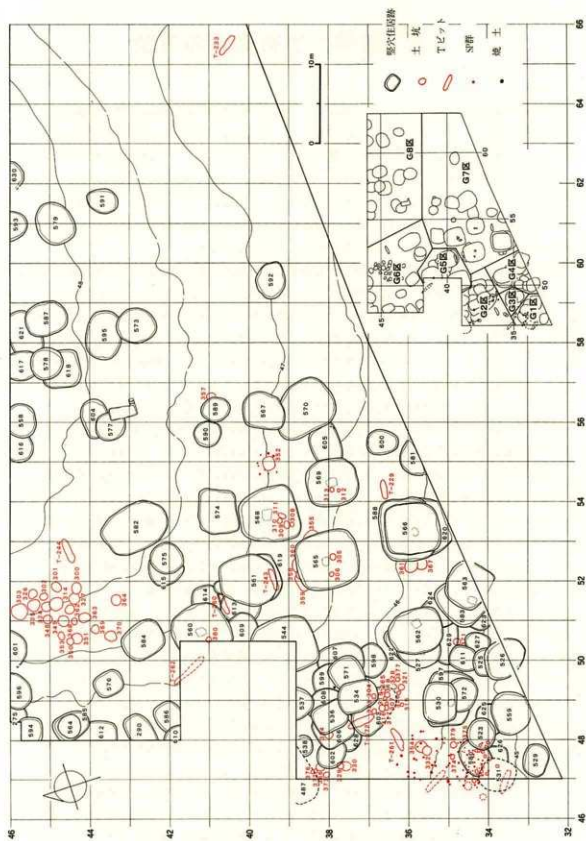
1 概要

平成8年度の調査(平成7年度に一部調査)で新たに確認された遺構は、堅穴住居跡84軒(平成5年度調査で確認されているH-275・290を除く)、土坑79基、Tピット47基、焼土1カ所である。堅穴住居跡・土坑・焼土はすべてG地区で確認され、Tピットはこれまでの調査結果と同様にG地区からH・I・J・K地区と広範に確認されている。Tピットはいずれも溝状の細長いタイプであり、堅穴と重複するものはすべて堅穴を壊してつくられている。なお、Tピットについては一括して概略を記載し、個別記載は行っていない。また、道路D(市道中野4号線および市道石倉6号線)の調査地区で確認されたTピットについては、適宜近接する調査地区に加えている。

堅穴住居跡は、G地区南西部に平成7年度調査区(D地区)から重複して続くもののほか、北西部に平成5年度調査区(平成5年度北地区)から東へ続くもの、北東部に平成6年度調査区(A地区)から南へ続くものがみられる。これらのうち、遺物を多く出土する堅穴はD地区から続く南西部の一群であり、銭亀宮の川から東へ約80mほど離れた地点で確認された南北方向に並ぶ数軒の大型で深い堅穴住居跡を境にして、それより以東の遺物出土頻度は激減する。集落構成を考える上で注目される。大型住居跡は堅穴の長軸方向がほぼ南北にそろう(H-588は除く)、南北方向に2列ほど並んで配列されている。ただし、堅穴同士が接近しているものもあり、すべてが同時に建てられていたとは考えられない。これらの平面形は、隅丸方形・隅丸長方形が基本で、台形状のものもある。堅穴中央部にほぼ方形の掘り込み炉を持ち、それを巡るように主柱穴が配置されている。主柱穴は、深さ40cmを超える規格性に富んだものである。H-565では堅穴長軸方向に並行して3本の柱穴が近接して並び、H-566では切り合い関係を持つ柱穴のみみられた。同一箇所にも同規模・複数の柱穴がある場合には、堅穴の拡張などの建て替えを考慮する必要がある。また堅穴が重複する地区では柱穴の配置から、平面形が捉えられなかった住居跡の存在も考えなければならないが、今回の報告では検討できなかった。これら大型堅穴の窪みには黒色腐植土(Ⅲ層。P.D.4が確認されⅢa・b層を分層できた堅穴も多い。)が厚く堆積している。遺物の出土はこのⅢ層からは稀で、堅穴覆土から出土したものがほとんどである。また、H-565・588周辺には、遺物を包含する暗赤褐色土(Ⅲd層)の堆積が認められた。これは堅穴の掘り揚げ土と考えられ、その下部の黒色腐植土(Ⅲb層)からは遺物がほとんど出土しないことから、堅穴の掘り込み面がⅢb層中にあることが、再確認された。

南西部の堅穴住居跡はD地区に向かって開口するように配列され、多くが重複して存在する。このように切り合い関係を持つ堅穴が多いことから、記述するに当たり今回の報告では、切り合い関係や前述の過年度調査地区との関係をみてG地区を7つに細分割して(図Ⅲ-1, G1~G7区)記述していくこととする。したがって、遺構番号順とならないことを先にお断りしたい。

土坑も堅穴住居跡と同様の区画で記述することとしたい。土坑はG1・2・6・7区に多く存在し、G1・2区(G区南西部)では小型のフラスコ状ピットやすり石・石錘などの礫石器が集中して出土する浅い土坑がいくつかのまとまりをもって確認されている。G6区(G区北西部)では標高47~48mの範囲に、平成6年度調査で確認された大型フラスコ状ピット群に連続するように、規模的にやや小ぶりのフラスコ状ピット群が確認された。遺物出土が希薄な地区であり、土坑に伴う遺物はほとんどない。土坑の深さにはバラツキがあるが、坑底がほぼ銭亀火砕流層(VI層)中に達していることが共通する。G7区では堅穴覆土中から掘り込まれたものや、堅穴に切られるものが確認されている。



図Ⅲ-1 G地区遺構位置図と区別名称図

焼土（F-18）は1カ所が確認されただけである。H-599覆土中で確認され、径10cm程度、厚さも1cmに満たないものである。個別記載は行っていない。

なお、竪穴住居跡を中心とした遺物出土位置関係図（主に土器について）は、複数の竪穴住居跡出土遺物の関係を捉えようと努めたこともあって、第2分冊にまとめて掲載している。本文中では「関係図」と表記している。（田中）

2 竪穴住居跡

(1) G1区

G1区はG区の一帯南西側を区画した地域で、西は平成7年度D地区に接する部分である。標高45m前後の南西側に傾斜する緩傾斜面上に、6軒の竪穴住居跡が存在する。H-523・529・559・580・625・626である。H-529が単独で存在するほか、すべて切り合い関係を持ち、その関係は下図のとおりである。H-580・626を切って存在するH-531については、前に報告済み（中野BⅢ）である。この区画には前の報告で「揚げ土」とした遺物を多量に包含する灰褐色土が竪穴覆土の上層で確認されている。また、H-580の内外には土坑がつくられており、おおむね竪穴覆土を切っているとの調査者の所見がある。土坑のほか、SP群もH-580内外にあり、北方向に広がりを見せている。竪穴との関係についても土坑と同様のものである。（田中）

H-523（図Ⅲ-3・4，図版7・102・120）

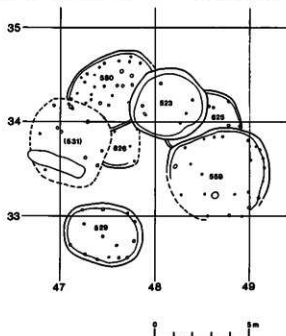
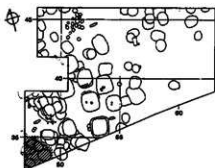
位置：47-33・34，48-33・34；標高45.40mほどの緩斜面上に位置している。

規模：3.92/3.43×3.64/3.10×0.40m 床面積：8.66㎡

平面形：楕円形 長軸方向：N-44°-W

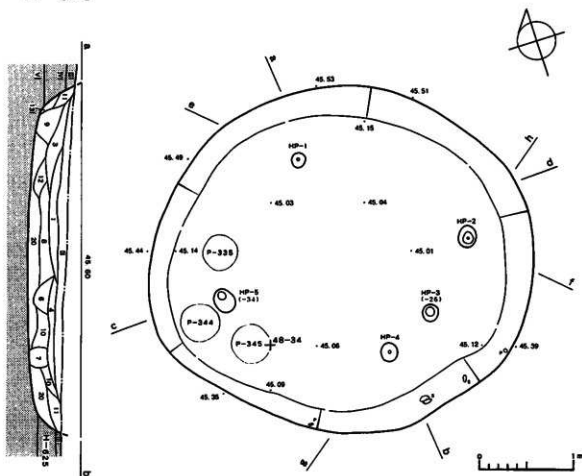
確認・調査・土層：包含層調査中Ⅲ層中に、P.D.3まじりの黒色土の広がりが見られ、遺構が想定された。土層観察用の土手を設定し、精査しつつ全体に掘り下げる。Ⅳ層直上付近でⅢ層、暗茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で、砂質で堅い黄色ロームの面を検出し、柱穴

〔G1区〕



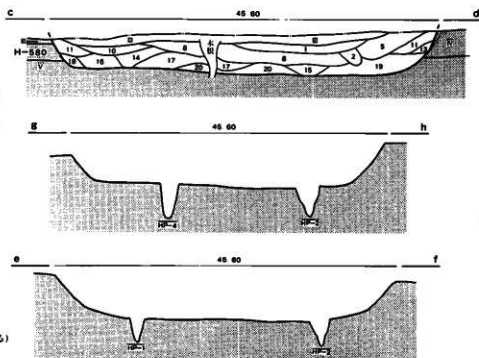
図Ⅲ-2 G1区竪穴住居跡位置図

H-523

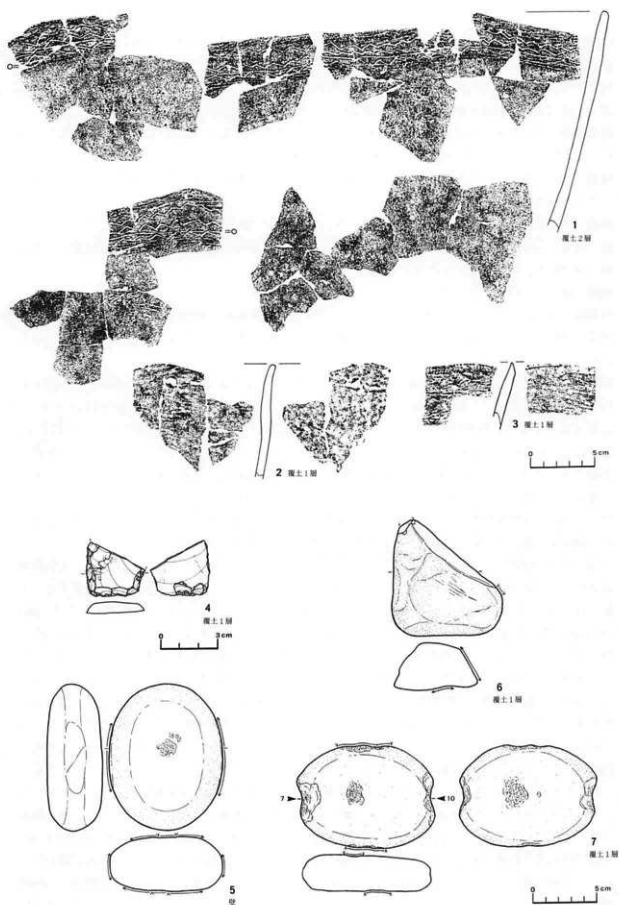


H-523の土層

1. 黒褐色土
2. 黒茶色土(軟質)
3. 暗茶黒色土(砂質)
4. 3 > V (砂質)
5. 暗茶褐色土
(砂質、小石・軽石が混入)
6. 暗黄褐色土
(砂質、小石・軽石が混入)
7. 灰褐色土(軽石が混入)
8. 黒褐色土 > 暗黄褐色土
9. 暗茶褐色土 > 黄色ローム
10. 4 + 20
11. 黒褐色土(砂質)
12. 黒褐色土 > 暗黄褐色土
13. 暗茶黄色土
(小石・軽石が混入)
14. 暗茶黄色土
(軽石が多く混入)
15. 8 + 20
16. 暗茶灰色土
17. 暗茶黄色土(軟質)
18. 暗茶黄色土
19. 暗茶黄色土(ザラザラしている)
20. 暗黄褐色土



図Ⅲ-3 H-523実測図



図Ⅲ-4 H-523出土遺物

伏小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中である。土層は、堆積状態が不安定であるが、ほぼ三層に分けられる。覆土1層は黒褐色土（土層図1）、覆土2層は覆土1層と3層が混じり合った茶褐色系の土で汚れている（土層図3～5・8）。覆土3層はⅤ層に褐色土が少し混入する暗黄色土（土層図15・17・19・20）である。

重複関係：本住居跡は、H-580・625・626の住居跡と重複しており、これらより新しい。また、重複する土坑（P-335・344・345）との新旧関係は不明である。

時期：覆土と周辺の包含層出土の土器などからみて、Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層をやや深く掘り込んで構築している。ほぼ平坦で堅い。

壁：立ち上がりは急傾斜である。検出面からの壁高は、北東壁が37cm前後、北西壁が33cm前後、南西壁が24cm前後、南東壁が30cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは5個検出されている。すべて床面にあり、HP-1・5、HP-2・4間は1.70m、HP-1・2、HP-4・5間は1.90mである。4本柱と思われる。すべて直立し、杭状で深い。

遺物出土状況：出土遺物総数は125点である。この内訳は土器76点、石器49点である。遺物は覆土からの出土がほとんどで、床面付近からは出土していない。遺物の出土状態にまともは見られない。土器は覆土1層でⅠ群E類のものが1点出土した以外は、すべてⅠ群D1類土器である。石器では、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。

（和泉田）

土器：1・2はⅠ群D1類a種、3はD1類b種ですべて口縁部破片である。器形では1～3の口縁部形態はすべて波状口縁を呈し、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面調整は基本的にナデで調整される。1は歯状腹縁での貝線文と、鋸歯状沈線文、沈線文で施文される。2は波頂部下に爪痕と、焼成前の貫通孔が施される。3は口唇部の外傾面に背圧痕文が施される。

（土器出土位置関係）平面分布は南西側に密度が高く、垂直分布では覆土下部から上部まで土器が確認される（関係図-2）。1は覆土2・1層（下部）から出土し、平成7年度のH-531の覆土2・1層、H-563（G4区）の覆土2層、H-526（G4区）・H-580（G1区）の覆土1層、H-559（G1区）覆土上層のⅢ層、47-31・33・34、48-33、49-34区のⅢ層、47-33区の揚げ土、47-33・34、49-37、50-34区のⅠ層と接合する。破片の散布域が広範に広がる遺物で、H-523では覆土の下部から出土し堅穴廃棄直後に流れ込んだ遺物であることがわかる。この土器はD1類の古手と考えられる。破片は微小に粉砕され、主に口縁部付近が各遺構内で出土しており、人為的拡散の可能性が高い。2・3は覆土の上部でまともに出土しており、遺構埋没過程の遅い段階で流入したものである。

（富永）

石器：土器と同様、覆土上部からの出土がほとんどである。4はスクレイパー片で、1類としたものである。急角度の刃部を持ち、新しい細かい剥離が多くみられる。特に両側縁はつぶれた状況を呈している。5は両平坦面に敲打痕を持つ閃緑岩製のすり石で、両側縁のすり面には稜があり二面で構成される。6は肌理が細かい灰白色の凝灰岩製の砥石で、砥面には幅1mm程度の細かい擦痕がみられる。7は閃緑岩製の石錘である。両平坦面、上下縁に敲打痕を持ち、下縁には直線状の敲打痕が認められる。左右両端部にも敲打痕（7、10mm幅）が認められるが、大きな剥離痕を持つ最終形態から、石錘の2類としたものである。

（田中）

H-529 (図Ⅲ-5~8, 図版8・89・102・121)

位置: 47-32・33; 標高44.96~45.13mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.15/3.76×3.08/2.68×0.37m 床面積: 8.83m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-56°-W

確認・調査・土層: 47-33区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で遺物を多量に混入する灰褐色土の広がりが見られ、遺構が想定された。このため土層観察用の土手を設定し、全体に少しづつ掘り下げ、調査を行う。Ⅲ層中で灰褐色土の広がりとその周辺にⅢ層にⅤ層が少量混じる土層の落ち込みを検出した。灰褐色土の下には黒褐色土の落ち込みも見られ、これらの遺物を取り上げつつ掘り下げる。黒褐色土の下には汚れた粘質の暗茶黄色土が堆積し、それを除去しⅤ層のやや堅い面を検出した。この面で柱穴状小ピットも検出されたことから床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中で、灰褐色土の下から掘り込んでいるようである。この灰褐色土は掘り揚げ土である。覆土は二層である。覆土1層は粘質の黒褐色土(土層図1)、覆土2層は床面にある粘質の暗茶黄色土(土層図5)で、汚れた土である。なお、北東壁側では黒褐色土が床面直上まで、深く、厚く堆積していた。

重複関係: 本住居跡は他遺構と重複していない。

時期: 覆土と周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや堅い。

壁: 立ち上がりはやや急傾斜である。検出面からの壁高は、北東壁が26~36cm、北西壁が24~34cm、南西壁が18~24cm、南東壁が20~30cmである。

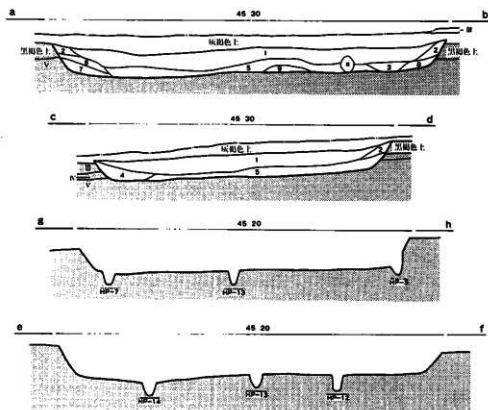
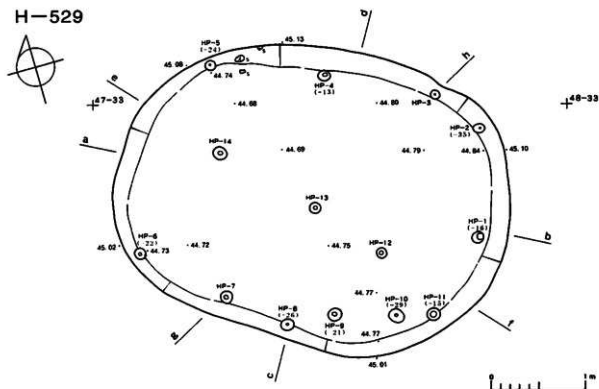
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは14個検出されている。HP-1~11は壁際をめぐるもので、全体に杭状で、直立している。HP-12~14は、長軸方向と若干ずれているが、主柱穴と思われる。浅いが、直立している。1本あるいは2本柱かと思われる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は606点である。この内訳は土器405点、石器201点である。覆土上に堆積している灰褐色土で多量の遺物が出土している。また覆土1層の上層付近までは遺物が混入しているが、床面からは僅か1点が出土しているだけである。土器は1点のI群B類土器以外はすべてI群D1類土器である。石器では石槍、石錐、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。
(和泉田)

土器: 1~10・14はI群D1類a種で、1~3は復元個体。4は乳房状尖底で胴部との接合部位を内面上方、外面下方に調整する。5~13は口縁部破片、14は乳房状尖底で器内外をナデ調整する。11~13はD1類b種で全て口縁部破片である。器形については口縁部形態が液状口縁を呈するもの(5・7・8・10)、平縁を呈するもの(1~3・6・9・11~13)があり、口唇部断面形は角形のもの(2・6・9)、丸形のもの(3・5)、切り出し状に外傾するもの(1・7・8・11~13)がある。b種の口唇部はすべて切り出し状である。器面調整は基本的にナデで、他にすり消し条痕のもの(1~5・7・8)、条痕のもの(4)があり、D1類の多くは貝殻で器面調整されている。2は一部にケズリが見られ、9は器面にミガキ、補修孔が施され、口唇部上面の一部に成型時の置き痕の窪みが残る。2・3・10には一部に指頭圧痕が見られる。文様は、沈線文が施されるもの(1・7・8)、鋸歯状沈線文のもの(1・6~8・13)、貝線文のもの(7・8・11・13)があり、b種は貝線で文様構成される。刺突文が施されるものでは円形刺突のもの(13)、楕円刺突のもの(1・3・5・8)、列点となるもの(1・5・8)があり、楕円刺突の施されるものの多くは列点になる。6は円形の沈

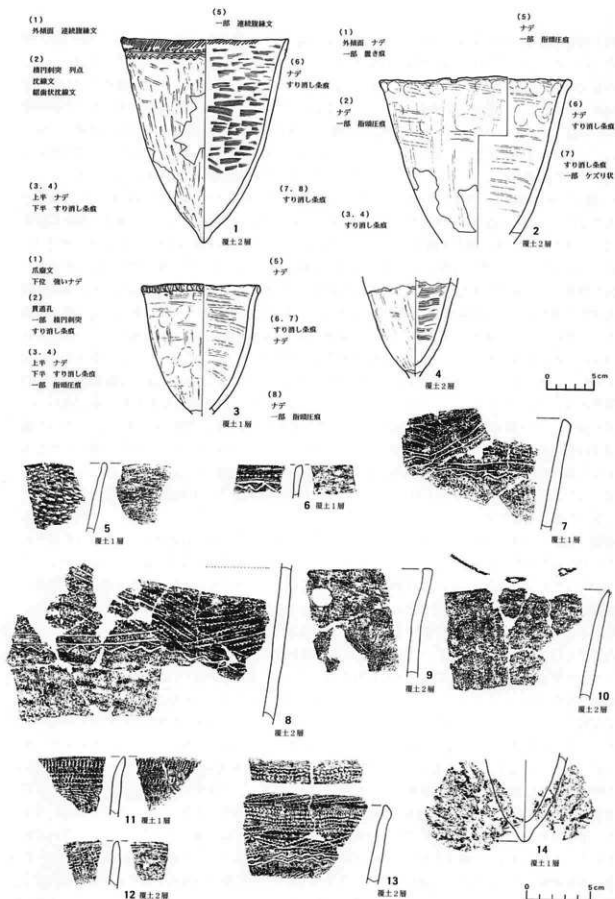
H-529



H-529の土層

- | | | |
|--------------------------|-----------------|-------------------|
| 1. 黑褐色土(粘質) | 4. 暗褐黃色土(輕石が混入) | 7. 暗灰黃色土 |
| 2. $\text{H} > \text{V}$ | 5. 暗茶黃色土(粘質) | 8. $1 + \text{V}$ |
| 3. 黑茶色土(砂質) | 6. 暗灰黃色土(粘質) | 9. 暗黃色土(粘質) |

图 III-5 H-529 实测图



図Ⅲ-6 H-529出土土器

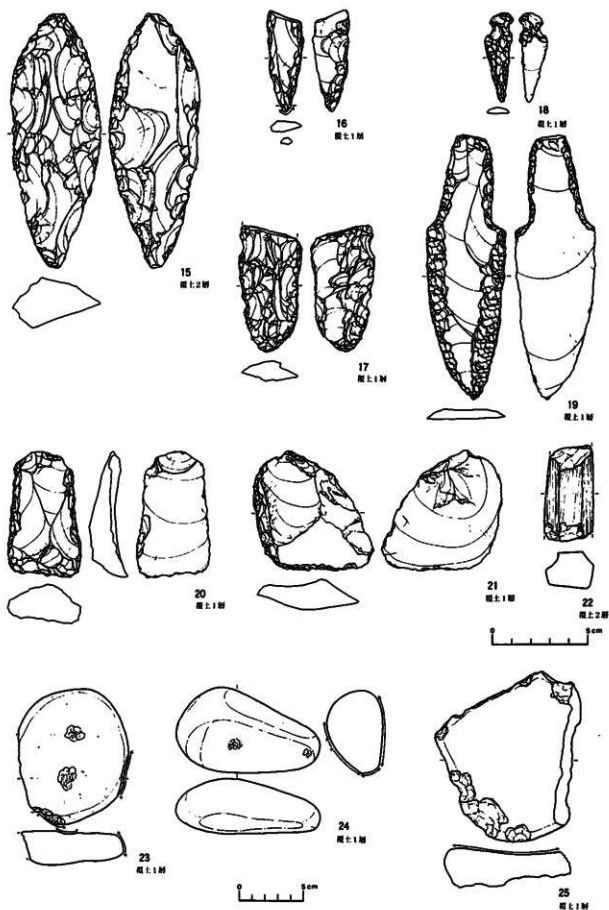
線上刺突が施される。貝殻文は7は篩目状腹縁文が施文され、連続腹縁文のもの（1・11・13）、押引文のもの（12）、押引波状文のもの（13）があり、b種には雑然とした押引系が多い。爪形文では、爪縮文のもの（3）、爪痕が残るもの（11）がある。その他に3は爪縮文の下位を強くナデて隆起を強調したもの。文様構成では鋸歯状（三角）の構成のもの（7・8・13）がある。堅穴出土土器の器形・調整・文様をとおして見られる特徴は、口唇部断面が切り出し状に外傾するものに貝線文が施されるものが含まれ、また切り出し状のものには列点の施されるものがある。また口唇部断面形態が角形のものに沈線上刺突が含まれ、そしてミガキ・ケズリなど器面調整の変化のあるものが多い。

（土器出土位置関係）平面分布では堅穴中央から西側にかけて分布密度が高い（関係図-1）。垂直分布ではほとんどの土器は覆土中部の二次堆積と考えられる覆土から出土している。覆土下部から遺物はほとんど出土せず、覆土中部からは1・9が出土している。1は覆土2層（中部）から出土し、H-597（G3区）の覆土1層、47-33区のⅢ層・揚げ土と接合する。堅穴埋没過程の比較的早い段階で廃棄された遺物と考えられる。本遺構西北側の包含層出土の土器と接合することから、初期に西方向から流れ込んだ第1段階の堆積のものであろう。9はD1類の古手と考えられる。他の覆土中部から上部にかけての遺物では、2は1と同方向からH-529へと流れ込み、3は東側からの2段階目の流れ込みのものであろう。7・8は文様の構成等に類似点があり、東方向からの流れ込みとして捉えられる。10は1・2と同様の北西方向からの流入を示す。11・13は胴部に地文の施されるD1類の新手のもので、3段階目に北方向から流入したと考えられる。他遺構から混入するH-562-3、H-629-1の土器は1段階目の流入に沿ったものと考えられる。H-530-6、H-544-6の土器は3段階目の流入以降、D1類の新手として捉えられる。また、掲載しなかったが他遺構との接合例が2件あり、事例1の整理番号[973]（以下、「整理番号」を省略する。）は覆土2層から出土し、H-527（G4区）の覆土1層と接合する。事例2[991]は覆土2・1層から出土し、H-562（G4区）の覆土1層と接合する。

（富永）

石器：土器と同様、ほとんどの石器は覆土上部からの出土である。剥片石器はすべて硬質頁岩製である。15は右面に原石面を残す、全体的に粗雑なつくりの石槍である。石器のほぼ中央が最大厚で、尖端がわずかに欠損する。基部には打面の一部を残している。16は1類の石錐で、素材剥片を意識的に切断して適当な長さとしたものと思われる。右面の大きな剥離は握りやすくするためのものと考えられる。先端部の磨減は著しい。17は石槍の可能性があるが、破断部に調整剥離が施されることから両面調整石器としたものである。スクレイパーとして再利用したものかもしれない。調整剥離自体は粗雑で、右面に主剥離面を残すほか、基部に打面の一部を残している。18・19は石匙で、前者のつまみ部は宝珠形のもの。後者はナイフと言っても良いような特徴的なものであり、湾曲する剥片素材の形状は残している。20・21は2d類のスクレイパー。20の縦断面形は搔器（1類）として良いものであるが、下端部の横方向の剥離が使用によるものと判断されないためこの類とした。22は蛇紋岩製の擦り切り残片で、図正面が切断部である。切断部は平滑に研磨されている。23・24はともに閃緑岩製。23のたたき石の左側縁部には、直線状の敲打痕が若干みられる。25は粒子がやや粗い灰白色の凝灰岩製の砥石である。砥面は礫割れ口周辺で途切れる部分が多く、手頃な大きさに割った礫を使用したものと考えられる。26-29はすべて円礫素材の2類の石錐。26・27は閃緑岩製。26の平坦面の窪みは敲打によるものではなく、縄糸痕がみられ、何か棒状のものを回転させたため弾け飛んだ窪みとみられる。27の両端挟り部には敲打が認められる。28は灰白色の粒子の細かい凝灰岩製で、平坦面に砥面を持つ。29は流紋岩製で、図左側の大きな剥離は挟り部作出時のものとはみられない。

（田中）



図III-7 H-529出土石器(1)



図Ⅲ-8 H-529出土石器(2)

H-559 (図Ⅲ-9, 図版9)

位置: 48-32・33, 49-33; 標高44.67~44.87mの北から南へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模: (5.44)/(5.00)×(4.80)/(4.50)×(0.40)m 床面積: (19.02)m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-75°-W

確認・調査・土層: 48-33区の包含層調査中、軽石まじりの茶褐色土の広がりが見られ、その中にⅢ層の落ち込みが確認された。遺構が予想されたため土層観察用の土手を設定し、全体に掘り下げ、Ⅳ層直上付近で暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ)の落ち込みを検出した。遺物を取り上げつつ、順次覆土を掘り下げ、調査を行う。軽石を多量に混入する茶黄色土を除去し、Ⅴ層中で暗灰黄色土を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。西側と東側に大きな風倒木痕が見られた。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴの暗褐色土(土層図1~3)で、砂質で、小石や軽石を多く混入している。覆土2層は覆土1層と3層のまじり合った黒茶色の汚れた土(土層図4・5・8)である。覆土3層は軽石を多量に混入し、ザラザラした堅い砂質の茶黄色土(土層図6・9・11・12)である。覆土は全体に風倒木痕の影響を受け不安定である。

重複関係: 本住居跡は、H-625と重複しており、これより新しい。

時期: 覆土と周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群11類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: 北側はⅤ層を掘り込んで構築されている。やや北から南へゆるやかに傾斜しており、風倒木痕の影響を受け凹凸がある。堅い。

壁: 西側は風倒木痕で不明、南側は側溝により壊されている。残存部の立ち上がりはゆるやかな傾斜で、検出面からの壁高は、北壁が21~28cm、東壁が22~27cmである。

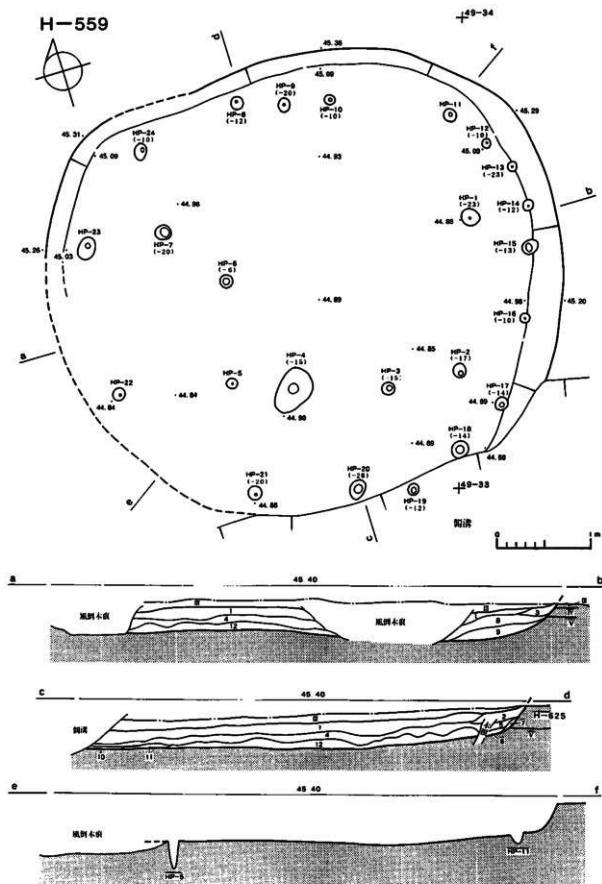
炉跡: 焼土などは検出されていない。ただ床面中央部に0.7×0.6mの楕円形状に、他に比べて赤く、堅くなっている部分が見られたが、火熱を受けた痕跡なのかどうかは判然としない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは24個検出されている。HP-8~22は壁際をめぐめるもので、直立している。HP-1~7は主柱穴と思われる。建て替えが行われている模様である。

遺物出土状況: 出土遺物総数は39点である。この内訳は土器11点、石器28点である。遺物は覆土上のⅢ層、覆土上部で出土しているが、床面付近からは出土していない。出土状態にまともはみられない。

H-559の土層

- | | | |
|---------------------|-------------------------|-----------------------------|
| 1. Ⅲ>Ⅴ | 5. ㍿4 (4より軽石少ない) | 9. 暗灰色土(砂質、かたい) |
| 2. ㍿1 (軟質、軽石の混入少ない) | 6. 茶黄色土(軽石が混入) | 10. ㍿6 (6より色調黒く、軽石の混入少ない) |
| 3. ㍿1 (砂質、軽石が多く混入) | 7. 暗茶黄色土(砂質) | 11. ㍿6 (軽石の混入少ない) |
| 4. 1+12 | 8. 暗灰黄色土(砂質、軽石が混入し、かたい) | 12. ㍿6 (軽石が多量に混入、ザラザラし、かたい) |



図III-9 H-559実測図

い。土器はI群土器3点、I群D1類土器8点である。石器ではたたき石、石錘などが出土している。
(和泉田)

H-580 (図Ⅲ-10・11, 図版10・89・103・120)

位置: 47-33・34, 48-34; 標高45.27~45.55mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模: (5.04)/(4.50)×3.78/3.45×0.28m 床面積: 床面積: (13.63)m²

平面形: 長円形 長軸方向: N-77°-E

確認・調査・土層: 47-34区付近の包含層調査中、IV層直上付近でⅢ層にV層が微量混じる土(Ⅲ>V)および暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。軽石まじりの暗灰黄色土を除去し、堅い明灰黄色土を検出した。この面で一括土器が出土し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢ>V(土層図1)である。覆土2層は混合土状の暗茶褐色土(土層図2・4・5)である。2層下部は上部に比べ黄色ロームが多く混入している。覆土3層は軽石まじりの暗灰黄色土(土層図6・7・9)で、床面上に厚く堆積している。覆土2層中からピットや柱穴状小ピットが多く掘り込まれていて、覆土の堆積状態は不明瞭な部分が多い。

重複関係: H-523・531・626、P-333・336~343・375と重複しており、H-626より新しいが、他よりは古い。ピットは覆土2層中から掘り込まれている。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。北東から南西へわずかに傾斜している。やや凹凸はあるが、全体に堅く、平坦である。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が10~20cm、南壁が13~20cm、東壁が14~25cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

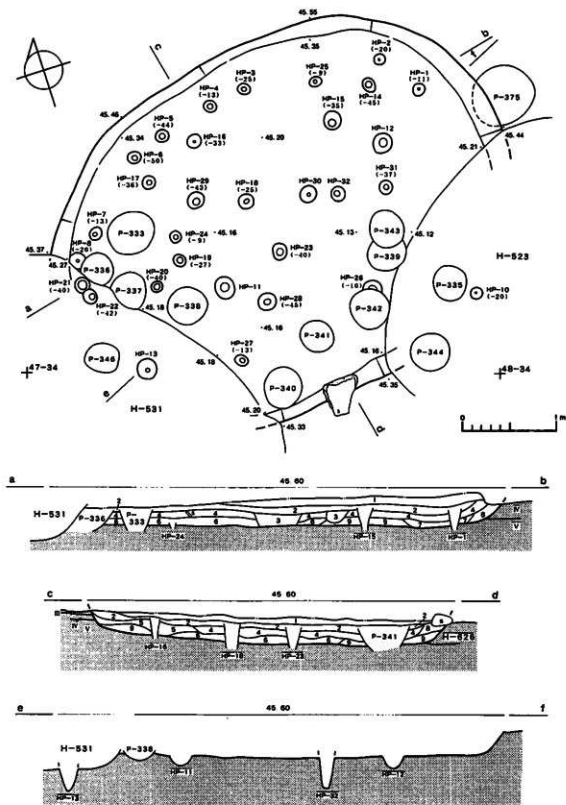
付属ピット: 柱穴状小ピットは31個検出されている。このうち本住居跡に伴うものはHP-25・4・7・27・26・11・12・24の8個である。HP-11・12・24が主柱穴と思われる。HP-24と12、HP-11と12の2本柱が想定される。すべて直立している。この他のHP-1~3・5・6・8~10・13~23・28はH-580の北側で検出されたSP群の一部のものと考えられる。これらの覆土は茶褐色土で、20~50cmと非常に深いものである。遺物も覆土中に混入している。堅穴住居跡に伴う小ピットというより他遺構のものであろう。

遺物出土状況: 出土遺物総数は95点である。この内訳は土器62点、石器32点、土器片錘1点である。遺物は覆土1・2層で少量出土しているが、まとまりは見られない。床面付近でI群D1類土器1点が出土している。土器は覆土1層でI群D2類土器1点、I群E類土器1点出土しているが、他はI群D1類土器である。石器ではたたき石、すり石、石錘などが出土している。
(和泉田)

土器: 2~4はI群D1類a種で口縁部破片。1はb種で復元個体、5はD2類の胴部破片で外面は押し波状で調整される。6は土製品で、E類の土器片錘で形状がやや円盤化する。

D1類の口縁部形態は波状口縁(1~3)と平縁(4)があり、口唇部断面形は丸形(2)、切り出し状に外傾するもの(1・3・4)がある。器面調整はナデ(1~3・5)、すり消し条痕(1・4・6)がある。文様は貝線文(1~3)、連続腹線文(1)、爪瘤文(4)がある。文様構成のわかるもので1は鋸歯状である。

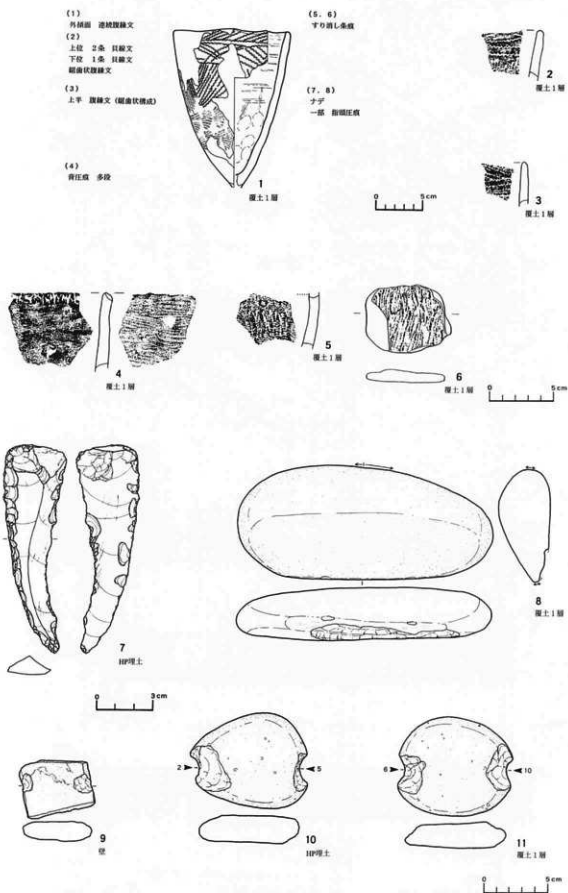
H-580



H-580の土層

- | | | |
|-------------------|--------------------------|----------------|
| 1. Ⅲ>Ⅴ | 4. 2>Ⅴ | 7. 暗茶黄色土 |
| 2. 暗茶褐色土 | 5. Ⅳ4 (4より黄色ロームが多く、軽石混入) | 8. Ⅲ>Ⅴ |
| 3. 茶褐色土(黄色ロームが混入) | 6. 暗灰黄色土(軽石が混入) | 9. 暗黄灰色土(やや粘質) |

図Ⅲ-10 H-580実測図



図Ⅲ-11 H-580出土遺物

(土器出土位置関係) 平面・垂直分布では南側部分の覆土上部に偏って分布し、多くの土器は二次堆積の遺物である(関係図-2)。1はI1類の新手で、覆土1層(上部)から出土し、H-597(G3区)の覆土1層の揚げ土・Ⅲ層・I層、遺構外の東北方向の包含層と接合する。遺物流入の経路を示すものであろう。4・5はI1類でも新手のもので覆土の上部で出土し、他にI2類の5が混在する。

(富永)

石器：土器と同様、ほとんどが覆土からの出土である。HP出土の石器が多くみられるが、堅穴覆土中から掘り込まれた小ビット(SP)からの石器も堅穴覆土中にあった可能性が高いと判断したことによっている。1はHP-14出土のスクレイパーである。HP-14はSP群の一つの小ビットであるが、前述のとおり堅穴覆土中にあった可能性が高いと判断し、ここで扱った。左側縁の刃部には部分的につぶれがみられる。先端部は石錐とみて良い形状を示すが、磨滅がみられずスクレイパーとした。8は閃緑岩製のすり石で、図下方のすり面に見られる剥離は敲打によるものとはみられないものである。9～11は2類の石錐で、9が凝灰岩の板状礫を、10・11は閃緑岩の円礫を素材とするものである。後者の挟り部にはともに敲打痕が見られる。11は床面で確認された小ビット状の木の根痕とみられる掘削部からの出土であるが、堅穴に係わる可能性が高いと判断し、ここで扱った。

(田中)

H-625(図Ⅲ-12、図版11・103・120)

位置：48-33・34；標高45.26～45.43mの北東から南西へゆるやかに傾斜するところに位置する。

規模：4.12/3.88×—/—×(0.23)m 平面形：長円形？ 長軸方向：N-70°-E

確認・調査・土層：48-34区周辺の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で暗茶褐色土(Ⅲ>Ⅴ)の落ち込みを検出した。このため土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。Ⅴ層中で軽石まじりの茶黄色土の面を検出した。柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は三層である。覆土1層はⅢ>Ⅴの暗茶褐色土(土層図1・2)である。覆土2層は覆土1層+3層(土層図3)で、覆土3層は軽石まじりの汚れた暗黄茶色土(土層図4)である。

重複関係：本住居跡は、H-523・559と重複しており、これらより古い。

時期：周辺の包含層と覆土出土の遺物などからみて、I群I1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。北から南へゆるやかに傾斜しており、平坦で、軟質。

壁：東壁の立ち上がりは急傾斜、西壁はゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は12～17cm。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは5個検出されている。HP-1・2は壁際にあり、内傾している。

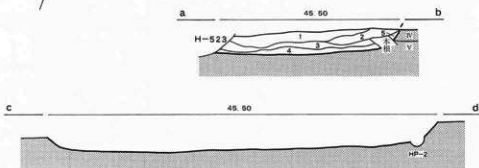
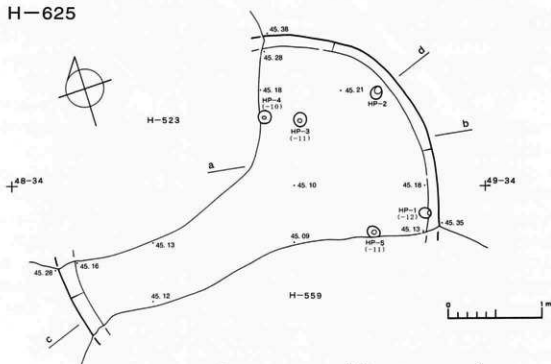
遺物出土状況：出土遺物総数は55点である。この内訳は土器32点、石器23点である。遺物は覆土中で出土しており、I群I1類土器30点、スクレイパー1点、すり石1点、石錐8点などが出土している。

(和泉田)

土器：1はI群I1類a種、2はI1類b種の口縁部破片である。器形は口縁部形態がともに平縁で、口唇部断面形は九形のもの(1)、切り出し状のもの(2)がある。1は器面調整は内外ともにすり消し条痕で調整される。2は口唇部外傾面を連続腹縁文、口唇部内外を押し波状文、2条の貝線文と鋸歯状沈線文で文様帯下限を横位に区画する。

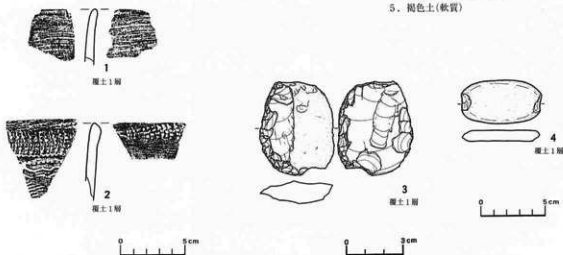
(土器出土位置関係) 平面分布では全面に平均的に出土し、垂直分布では覆土中部・上部から出土する(関係図-2)。1・2ともに中部付近からの出土する。2はI1類の新手と考えられ、他遺構から

H-625



H-625の土層

1. Ⅲ>Ⅴ
2. 茶褐色土
3. Ⅰ+Ⅳ
4. 暗黄茶色土(軽石が混入)
5. 褐色土(軟質)



図Ⅲ-12 H-625実測図と出土遺物

混入するH-629-5 (G4区)も含めてすべてIⅡ1類の頃の新手の段階での流入であろう。(富永)
 石器：1は両側縁に錯向剥離による刃部を持つスクレイパーである。図下方の挟りはノッチとしてみて良いものかもしれない。2は閃緑岩製、円礫素材の石錘である。両端の挟り部には明瞭な敲打痕はみられない。
 (田中)

H-626 (図Ⅲ-13, 図版11・120)

位置：47-33・34；標高45.21~45.27mのはほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：47-33区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で石皿が出土し、遺構が想定された。このため土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を掘り下げる。周辺精査の結果、Ⅳ層直上付近で黒味のある暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ)の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で軽石の混入する明黄色土の面を検出した。柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層である。覆土1層はⅢ>Ⅴの暗褐色土(土層図1)、覆土2層は覆土1層と3層がまじり合った土(土層図2)である。覆土3層は砂質で汚れた暗黄茶色土(土層図3)である。

重複関係：本住居跡は、H-523・531・580と重複しており、これらより古い。

時期：周辺の包含層と覆土出土の遺物などからみて、I群IⅡ1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築している。平坦で、やや軟質である。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜で、残存部分の検出面からの壁高は9~15cmである。

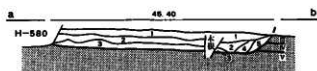
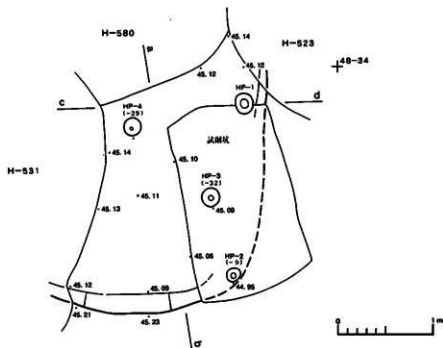
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは4個検出されている。

遺物出土状況：遺物は覆土中でI群IⅡ1類土器26点、スクレイパー、たたき石、砥石、石錘などが出土している。覆土上で出土した石皿は北から南へやや傾いており、住居廃棄後その窪地に入ったものであろう。
 (和泉田)

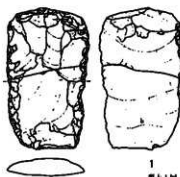
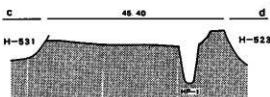
石器：剥片1点が覆土2層から出土した以外、すべての遺物は覆土1層からの出土である。1は堅穴内南側で出土した破片2点が接合したスクレイパー。出土レベルには差がない。両側縁に刃部を持つものである。2は閃緑岩の円礫を素材とする石錘で、大きな剥離は敲打によるものとみられるが、敲打痕はともに不明瞭である。
 (田中)

H-626



H-626の土層

1. Ⅲ>Ⅴ
2. Ⅰ>Ⅲ
3. 暗黄茶色土
4. Ⅲ+Ⅴ (ブロック状)
5. 4<Ⅰ



1
縦1.1m

2
縦1.1m



図Ⅲ-13 H-626実測図と出土遺物

(2) G2区

G2区は西側の平成7年度D地区と接し、構成する竪穴は重複関係の激しい一群である。北は昭和50年度の函館市教育委員会調査地区に接している。標高46m前後の南西側に傾斜する緩傾斜面上にあるが、あまり傾斜を感じない地区である。H-534・536~538・571・598・599・602・603・606~608・628の13軒の竪穴住居跡がある。H-538(報告済みのH-487と重複する)以外の12軒は、何らかのかたちで重複関係を持っており、これにいくつかの土坑が集中してつくられるなど複雑な様相を呈している。ただし、土坑の一部(「G2-2区」として後述する土坑群)は後世のV層にまで及ぶ擾乱部分で確認されており、竪穴住居跡との関係が明らかとならなかった点が多い。

竪穴間の新旧関係は、下図のとおりである。ただし、H-607と重複関係を持つ大型の竪穴住居跡H-544(函館市教委調査の2号住居址)については、後のG5区で扱っている。(田中)

H-534 (図Ⅲ-15~17, 図版12・103・122)

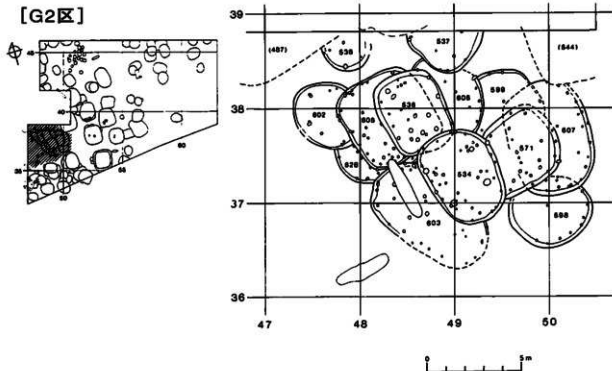
位置: 48-36・37, 49-36・37; 標高46.17~46.39mの東から西へ傾斜する緩傾斜面上に位置する。

規模: 5.18/4.86×3.83/3.37×0.38m 床面積: 12.32㎡

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-13°-W

確認・調査・土層: H-536の調査中、南西側の覆土中で黒味のあるⅢ層の落ち込みが見られ、H-536より新しい遺構の存在が想定された。そのため土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、Ⅲ層中でⅣ層にⅤ層が少量まじる落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、汚れの目立つ茶黄色土の下でⅤ層の灰黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は四層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴ(土層図1)、覆土2層は覆土1層に茶黄色土が混入する土で、軽石が混入している(土層図5・6)。覆土3層は覆土2層と茶黄色土が混じり合った土である(土層図7・9・11・12・

[G2区]



図Ⅲ-14 G2区竪穴住居跡位置図

14・17)。覆土4層は床面直上に堆積する土で、Ⅲ+Ⅴの茶黄色土(土層図19)で、汚れている。覆土は木の根痕や風倒木痕も見られ堆積状態は不安定である。

重複関係:本住居跡は、H-536・571・603、P-304と重複しており、P-304より古い、他より新しい。

時期:Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面:Ⅴ層を掘り込んで構築されている。やや凹凸はあるが、ほぼ平坦で、堅い。

壁:北側の立ち上がりは急傾斜であるが、他はゆるやかである。検出面からの壁高は、北・西壁が21~29cm、南壁が17~25cm、東壁が31~36cmである。

炉跡:焼土などは検出されていない。

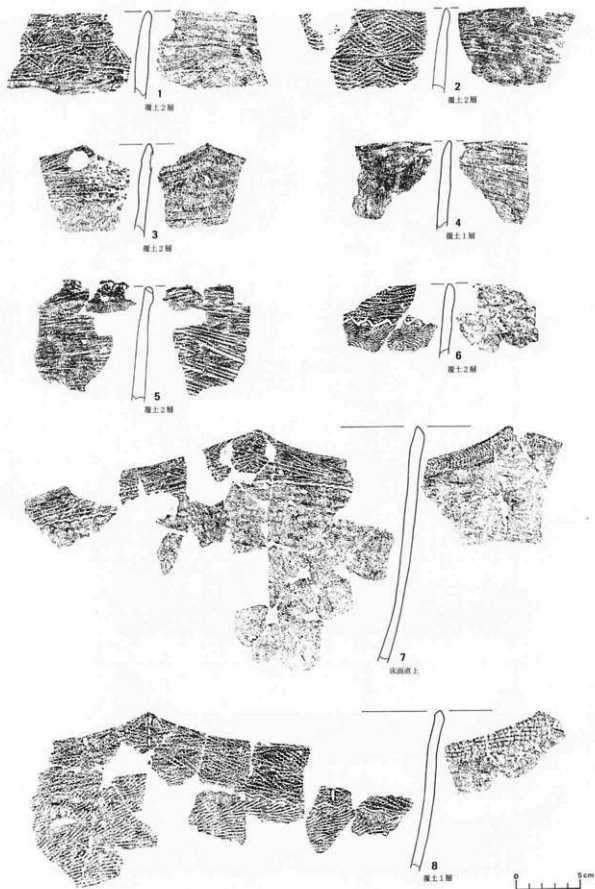
付属ピット:柱穴状小ピットは31個検出されている。HP-1~5・7~18は壁際をめぐるので、直立し、全体に杭状で、深い。HP-19~26・28は主柱穴と思われる。小ピットの配列などからみると、HP-19・20・21・22、HP-19・25・26・22、HP-22・24・25、HP-23・24・25・28という3回の建て替えが行われた可能性が考えられる。HP-19・20・21・22は4個ともやや大きな小ピットであり、HP-9・26に切られていることから、もっとも古い住居のもので、これに対応する西壁はもっと西よりにつくられていたものと思われる。検出された西壁は最も新しい住居の壁である。

遺物出土状況:出土遺物総数は412点である。この内訳は土器296点、石器116点である。遺物の多くは覆土上層(1・2層)で出土しているが、まとまった出土状態ではない。床面直上付近ではⅠ群D1類土器が3点出土している。土器は覆土中でⅠ群B類2点、Ⅰ群D2類4点、Ⅰ群E類3点が出土している。他はⅠ群D1類土器である。石器では石鏃、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘(22点)などが出土している。(和泉田)

土器:1~5はⅠ群D1類a種、6~8はD1類b種の口縁部破片である。口縁部形態は波状口縁(1・3・6~8)と平縁(2・4・5)があり、口唇部断面形状はすべて切り出し状に外傾する。器面調整はナデ(3・6~8)、すり消し条痕(1・2・4)、条痕(5)があり、7は一部に貝殻によるケズリがある。文様は鋸歯状沈線文(3・6~8)、楕円刺突の列点となるもの(8)、貝線文(1~3・6~8)、連続腹縁文(1~3・6~8)、爪形文は、5は爪瘤文が口唇部外傾面に施される本遺跡では少ない例である。文様は鋸歯状(1・2)、羽状(7)の構成があり、8は上部を羽状に下部を鋸歯状の構成に組み合わせる。口唇部は切り出し状で貝線文と連続腹縁文の組み合わせが多い。堅穴出土土器の器形・調整・文様をとって見られる特徴は、波状口縁のものに鋸歯状沈線文と貝線文と連続腹縁文の組み合わせで施文されるものが多い。7に施される背圧痕は胴部上半のみである。(土器出土位置関係)平面分布では北側に密度が高く、垂直分布では立面図Cから堅穴の下部より上部まで土器が混入することが解る(関係図-4)。立面Dでは北側に分布が集中することが解る(関係図-5)。覆土下部では2・3・7、P-321-1が出土する(関係図-8)。7は破片が遺物集中付近の下層で出土し、堅穴破壊後に流入した早い段階のものと判断される。覆土下部の土器はD1類の新手である。覆土中部から上部では1は北側の遺物集中付近で出土し、南西側のH-603覆土上層

H-534の土層

- | | | | |
|----------------|----------------|-----------------|----------------------|
| 1. Ⅲ>Ⅴ | 6. 暗褐色土 | 11. 黄褐色土 | 16. 茶褐色土 |
| 2. 茶灰色土 | 7. 暗黄褐色土(5+19) | 12. 暗黄褐色土 | 17. 暗褐色土>黄褐色土(軽石が混入) |
| 3. 暗黄褐色土 | 8. 暗黄褐色土 | 13. 9+19(軽石が混入) | 18. 黄褐色土(軽石が混入) |
| 4. 黒茶色土>黄色ローム | 9. 暗灰褐色土 | 14. 暗褐色土(6>Ⅴ) | 19. 暗黄褐色土 |
| 5. 1>19(軽石が混入) | 10. 暗褐色土>黄色ローム | 15. Ⅲ>Ⅴ | |



図Ⅲ-16 H-534出土土器

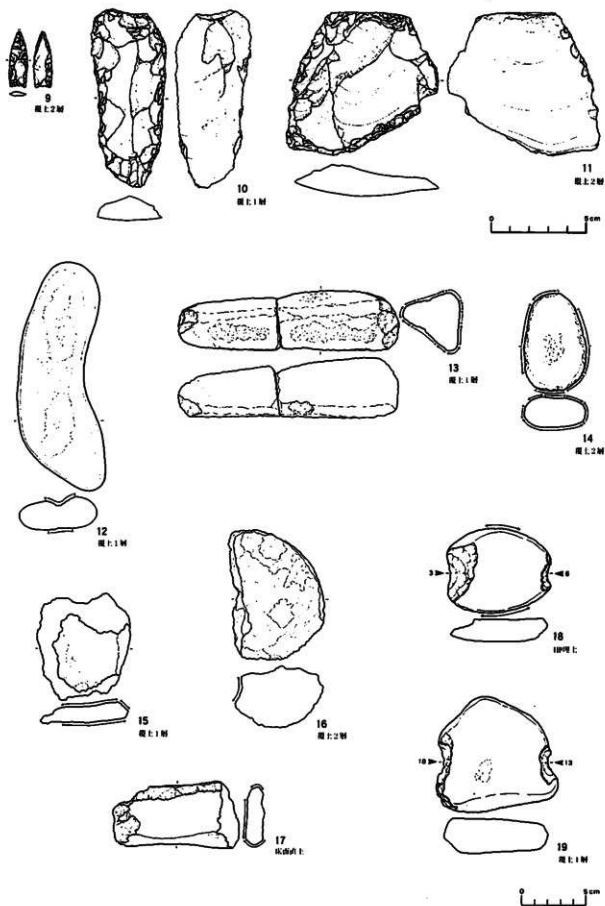


図 III-17 H-534 出土石器

の揚げ土・Ⅲ層と接合する。8はD1類の新手で覆土上部で出土し、ともにH-536-12、H-606-4の破片は広域に散布し南側のG1区との接合関係をもつ（関係図-14）。下部から上部にかけて出土している2-6はD1類の新手である。また、掲載はしていないが他遺構と2件の接合例がある。事例1〔654〕は覆土2・1層から出土し、H-571（G2区）の覆土2・1層と接合する。事例2〔1063〕は柱穴覆土、覆土2・1層から出土し、H-536（G2区）の覆土2層、H-571の覆土1層、H-599（G2区）の覆土2・1層と接合する状況である。上記の2方向ばかりではなく東側との接合関係がみられる。（富永）

石器：9-11は硬質頁岩製で、9の石鐮は先端がわずかに欠損している。10は右側縁に直線状の刃部を持つスクレイパーで、左側縁の調整は雑であり、刃部とみなさなかつた。12は泥岩製のたたき石で、図裏面の中央部にも同様の連続する窪みを持つものである。13のすり石は45-37区（平成7年度D地区）Ⅲ層出土の破片と接合したものである。平坦面すり面の2つには段差はないものの、稜のすり面の幅に差があり、また敲打痕が破断面まで及ばないことから、破断後も個々に使用されたものと考えられる。閃緑岩製。14のすり石も閃緑岩製である。両側縁の敲打痕は幅広で、波打つ形状を示している。右側縁に3カ所、左側縁に2カ所のへこみがみられ、左側縁裏面には剥離痕も見られる。15・16は円礫破片を素材としたとみられる砥石である。15は粗粒の凝灰岩製で、浅いU字形の砥面が集合したものの。16は破断面に1本のU字形砥面があることから2類としたもので、平坦面は凹凸が激しく部分的に平滑な砥面がみられるのみである。流紋岩製。17は粗粒の凝灰岩製の石鐮で、上下端を利用している。平坦面の砥面との新旧関係はわからない。18・19は円礫素材の石鐮で、18が閃緑岩製、19が安山岩製である。ともに両挟り部に敲打痕が認められるが、18の左挟り部は大きな剥離のため一部に残るのみである。また、18の上下縁には幅6mm程度のすり面がある。（田中）

H-536（図18-21、図版13・89・104・123）

位置：48-37・38、49-37；標高46.11～46.35mのほぼ平坦地に位置している。

規模：4.54/4.20×3.56/3.13×0.40m 床面積：(13.94)㎡

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-8°-W

確認・調査・土層：48-37・38区周辺のI層を除去したところ覆土とみられる土が広がっており、その中にⅢ>Ⅴ、Ⅲ>Ⅴの落ち込みが検出された。土層観察用の土手を設定し、Ⅲ>Ⅴから順次掘り下げる。Ⅲ>Ⅴ、Ⅲ>Ⅴの下には混合土状の茶褐色土が堆積しており、同層および同層に黄色ロームがまじり合った砂質土を除去したところでV層の堅い灰黄色ロームを検出した。この面で柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴ（土層図1）、覆土2層はⅢ>Ⅴ（土層図2）である。覆土3層は混合土状の暗茶褐色土（土層図3）で、覆土4層は3層と同質であるが、黄色ロームがやや多い（土層図10）。床面直上には砂質の灰色土が薄く堆積していた（土層図11）。

重複関係：本住居跡は、H-534・606・608、P-334と重複しており、P-334とH-534より古く、他より新しい。

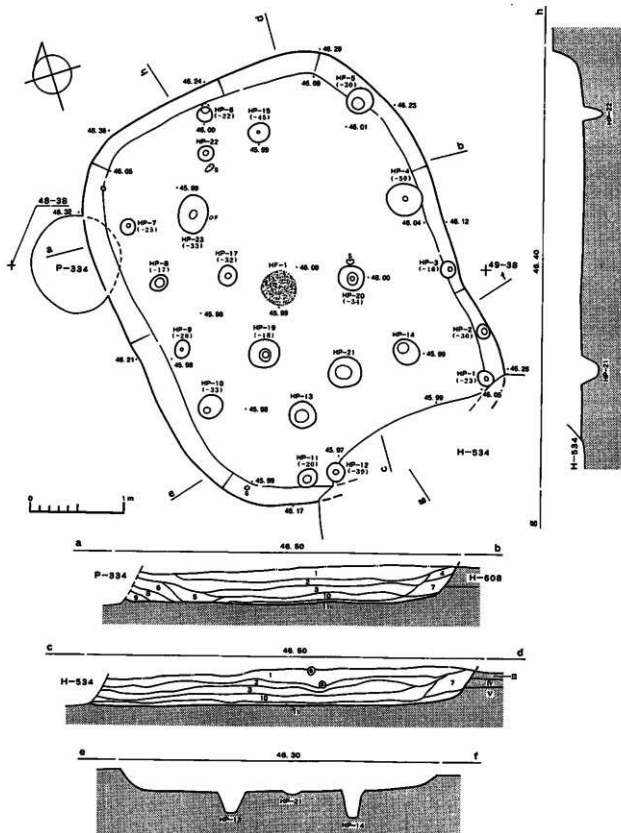
時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：V層を掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

壁：北壁の立ち上がりは急傾斜であるが、他は全体にゆるやかである。検出面からの壁高は、北壁が19～30cm、西壁が18～29cm、東壁が8～20cmである。

炉跡：床面中央部に0.4×0.4mの円形状の範囲が火熱を受けて赤色化したと思われる明褐色の粘質の

H-536



H-536の土層

- | | | | |
|----------|-------------|--------------------|--------------|
| 1. Ⅲ>Ⅴ | 4. Ⅲ>Ⅴ (軟質) | 7. 暗黄茶褐色土>暗灰色土(砂質) | 10. 暗黄茶褐色土 |
| 2. Ⅲ>Ⅴ | 5. 暗茶褐色土 | 8. 暗黄褐色土+茶褐色土 | 11. 暗灰色土(砂質) |
| 3. 暗茶褐色土 | 6. 暗黄褐色土 | 9. 茶褐色土(黄色ローム粒が多い) | |

図Ⅲ-18 H-536実測図

土が見られた。地床かと思われる。

付属ピット：柱穴状小ピットは21個検出されている。HP-1～12は壁際をめぐるもので、直立し、ほぼ杭状で、深い。HP-13～15・17・19～23は主柱穴と思われる。小ピットの配列などから考えると、HP-13・14・15・17（6本柱）、HP-19・20・23（4本柱）、HP-21・22（2本柱）をそれぞれ主柱穴とする住居跡があり、建て替えが行われたものと考えられるが、新旧関係ははっきりしない。

遺物出土状況：出土遺物総数は986点である。この内訳は土器664点、石器322点である。遺物は覆土上層の西側で多く出土している。ただまともには見られない。土器は覆土中でI群B類2点、I群I2類7点、I群E類1点が出土したほかは、すべてI群I1類土器である。床面付近から土器は出土していない。石器では石鏃、石錐、石匙、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘（69点）などが出土している。（和泉田）

土器：4はI群B類の口縁部付近の破片で、調整はミガキ。文様は3条の貝刻沈線文で方形に区画し、区画の屈曲点に円形刺突を加える。1～3・5～9はI1類a種で、1は復元胴体。2は乳房状尖底である。10～13はI1類b種、14はI2類で屈曲の緩い平底状の底部付近の破片。15はE類の口縁部破片で多重沈線で施文され、内面を条痕で調整される。

I1類の口縁部形態は波状口縁（7・8・10～12）と平縁（1・3・5・9・13）があり、口唇部断面形は角形（12）、九形（7・8）、切り出し状に外傾するもの（4～6・9～13・15）がある。器面調整はナデ（1・7・8・13）、すり消し条痕（2・3・5・6・9・10）、条痕（11）背圧痕（12）がある。文様は鋸歯状沈線文（7・8）、貝線文（1・5～11）、楕円刺突（1・13）、列点となるもの（1）、櫛目状腹線文（3）、連続腹線文（1・4・5・7・10）、連続波状文（7・10）、押引文（1）、爪瘤文（9）がある。1・5・10は羽状、11は菱形の文様構成を呈し、横位多段の貝線文と羽状の文様構成の組み合わせが多い。

（土器出土位置関係）平面分布では全面的に密度が高く分布し特に北側に顕著で（関係図-4）、垂直分布は立面A～Dの状況から覆土上部から下部まで土器が混入することが解る（関係図-5）。周辺の遺構と比較しても土器が集中して出土している。

覆土下部では1・2・6が出土する（関係図-9）。1は覆土3・2・1層、壁際（下部）から出土し、H-603（G2区）覆土上層のⅢ層、51-36区のⅢ層と接合する。北部から南部の窪みへ破片が流入していると判断される。1はH-603覆土上層のⅢ層と接合するが、出土レベルに差異はないことから、1が流入した時点でH-603は埋まり切っていたと考えられる。6は下部から出土し、H-603覆土上層のⅢ層と接合するが、1と同様と考えられる。2は遺構の中央部で接合する。これらはH-562-11の破片とともに、堅穴が破棄された後の比較的早い時期に混入したといえる。

覆土中部では、5が覆土2層（中部）から出土し、H-534（G2区）の覆土2・1層、50-36区のⅢ層と接合する。P-334-1～3はP-334に遺物が流入する形で出土しており、埋まりかけたH-536と同じ時点で廃棄されたことによるものであろう（関係図-10）。4～11の土器片は覆土中部の遺物で、B類～I2類迄の時間的幅を有したものであり、I2類以後の段階で造成等の行為により再廃棄された遺物の可能性もある。覆土上部では、3が上層間で接合する。12はI1類の新手で覆土1層（上部）から出土し、H-559（G1区）覆土上層のⅢ層と接合する。H-534-8、H-606-4も同様の南側と接合関係をもつ。H-629-2、H-599-6、P-321-6も覆土上部で出土し、上記のものと同様に他遺構からの混入であろう。その他に掲載していないが他遺構と5件の接合例がある。事例1〔689〕は覆土3・2層から出土し、H-537（G2区）の覆土1層、50-32区のⅢ層と接合する。事例2〔998〕は覆土3・1層から出土し、H-606（G2区）の覆土2層、P-334の覆土中層

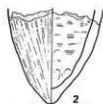
(1)
外側面 連続線文

(2)
連続線文 (羽状横纹)
5条 貝線文
横四刺突 凹点

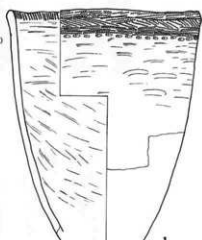
(3)
ナデ

(5)
押引文

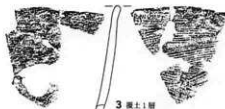
(6、7)
ナデ



2
覆土3層



1
覆土3層



3
覆土1層



4
覆土2層



5
覆土2層



6
覆土4層



7
覆土1層



8
覆土2層



9
覆土2層



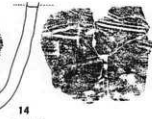
10
覆土3層



11
覆土1層



12
覆土1層



14
覆土2層



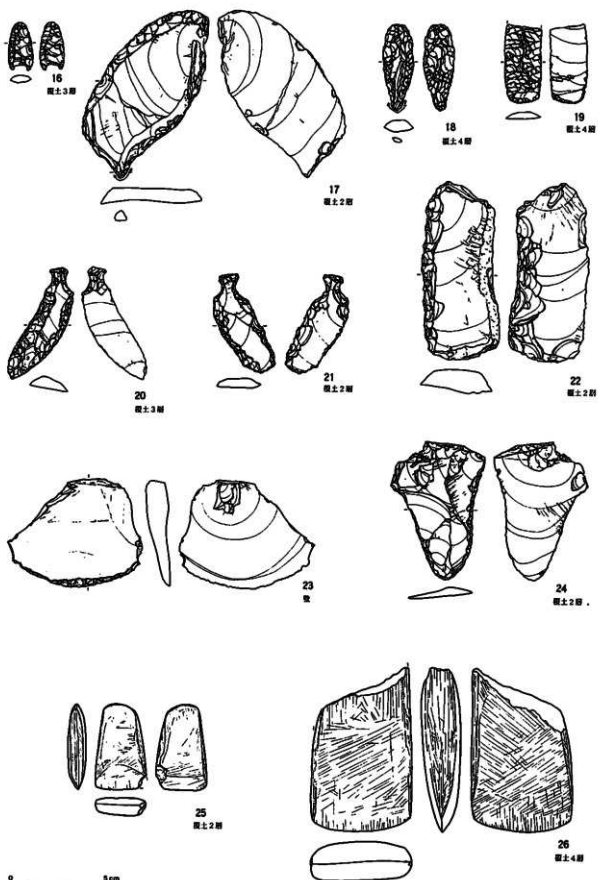
15
覆土1層



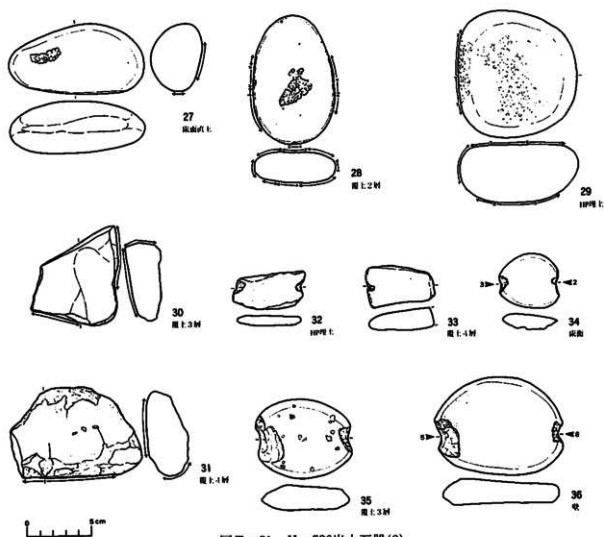
13
覆土短



図Ⅲ-19 H-536出土土器



圖Ⅲ-20 H-536出土石器(1)



図Ⅲ-21 H-536出土石器(2)

と接合する。事例3 [157] は覆土2・1層から出土し、H-530 (G3区) 覆土上層のⅢ層と接合する。事例4 [1072] は覆土3・1層、覆土上層のⅢ層から出土し、H-544 (G5区) の覆土3層、H-571 (G2区) の覆土3・1層、H-534の覆土2・1層、H-606の覆土2層、H-625 (G1区) の覆土1層、H-608 (G2区) の覆土1層、P-321の覆土上層、H-559覆土上層のⅢ層、50-37、52-37、47-38、48-33、49-37区のⅢ層、47-36、47-38、50-37、52-39区の1層と接合する。事例5 [1098] は覆土2層から出土し、H-597 (G3区) の覆土2層、48-38、49-34区のⅠ層と接合する。

(富永)

石器：土器同様、覆土出土のものがほとんどで、床面出土は34の石錘1点のみである。図示した剥片石器はすべて硬質頁岩製である。16の石鏃は全体的に丸みを帯び、丸い先端部や基部の挟りがやや大きいのが特徴的である。17・18は石錐で、ともに先端部の磨滅が激しい。17の右側縁には刃部とみて差し支えない調整が施され、スクレイパーとしての利用が考えられる。19～21は石匙で、20・21のつまみはT字形となり、その上縁は鋭角に調整している。22のスクレイパーは左側縁に直線的な刃部を持つもので、右面に見られる剥離痕は剥片自体の厚みを減ずるための調整とみられる。23は原石面を残し、横長剥片の下縁のみを調整した刃部を持つスクレイパーである。25・26は蛇紋岩製の石斧 (25

(25は「石のみ」)で、ともによく研磨されており、製作時の痕跡を残していない。27～29はすべて閃緑岩製のすり石で、それぞれ稜部や側縁などに敲打痕を有するものである。特に、28の右側縁の敲打痕は溝状を呈するほどである。30は凝灰岩製の砥石。砥面は滑らかで肌理細かいが、表面に細かい空隙があり、あまり重量感のない石質である。31は凝灰岩製の石鋸で、石質は細粒であるが、平坦面の砥面にはザラザラ感が残る。32～36は2類の石錘。32は流紋岩の板状礫に、33は閃緑岩の円礫破片に簡単な挟りを入れたものである。32の一部には火熱のため赤色化した部分が見られる。34～36は円礫素材で、34・36が閃緑岩製、35が安山岩製である。35の挟り部は一部剥離痕を残すが全体的に磨滅しており、平滑となっている。この磨滅は礫表面とに何らの違いもなく、人為的作業によるものとは考えられない。

(田中)

H-537 (図Ⅲ-22, 図版14・104・124)

位置: 48-38, 49-38 規模: -/-X-/X0.30m 平面形: 不明 (円形か)

床面積・長軸方向: 不明

調査・確認・土層: 函館市教委調査地区に接する48-38区周辺のⅢ層除去後、Ⅳ層上面で半円状の黒色土の落ち込みを確認した。東西、南北に土層観察用のベルトを残し順次掘り下げて調査を行った。覆土は三層に分層した。

重複関係: H-608と重複する。本住居跡が新しい。

時期: 縄文時代早期中葉。

床面: V層上面に掘り込まれる

炉跡: 検出されていない。

付属ピット: 柱穴状の小ピットを6カ所で確認した。中央方向に向かって傾斜するものが3個、壁際の2個は柱の方向を確認できなかった。HP-1では坑底に脆く風化した礫が確認され、柱石もしくは添え石だと考えられる。

遺物出土状況: 遺物総数は106点。出土した土器は89点で、すべてⅠ群D1類である。石器等は17点出土、うち剥片石器は6点、礫石器は11点である。

土器: ⅠはⅠ群D1類a種、2・3はD1類b種の口縁部破片である。1～3は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面調整はナデで、文様は鋸歯状沈線文のもの(3)、貝線文のもの(1・3)、楕円刺突のもの(3)、列点となるもの(3)、連続腹縁文のもの(1・2)、連続移動文のもの(3)、連続波状文のもの(3)がある。文様構成は1・2は羽状の構成になる。

(土器出土位置関係) 平面分布では南側付近に遺物が集中する(関係図-4)。他年度調査区により切られるため全容は不明である。垂直分布では立面Dで覆土下部からも遺物は確認されているが(関係図-5)、上部付近に密度が高くなっている。掲載されていないが接合例が1件あり、事例1として[204]は覆土1層から出土し、H-562(G4区)の覆土1層と接合する。

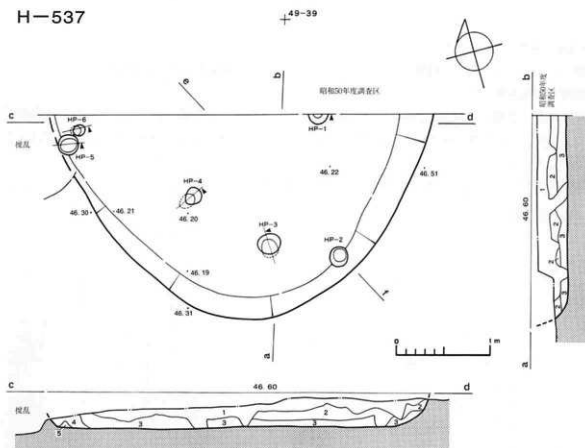
(富永)

石器: 掲載した石器4は流紋岩製のすり石で、平坦面に広範な浅い敲打痕を持つもの。敲打痕の中に、回転による線条痕のある窪みが2カ所、裏面にも1カ所が見られる。ただし、すり痕はあまり顕著ではない。

(田中)

H-537

49-39

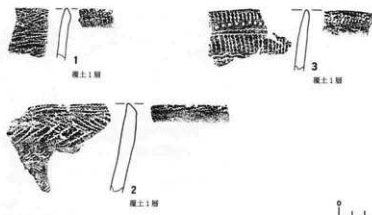


H-537の土層

1. 暗褐色土(粘質)
2. 暗黄褐色土(粘質)
3. 黄灰色土(粘質)
4. 暗褐色土(軟質)
5. 砂 (粘質)

HPの土層

1. 暗褐色土
2. 暗灰褐色土



図Ⅲ-22 H-537実測図と出土遺物

時期：縄文時代早期中葉。

床面：Ⅴ層上面に掘り込まれる

炉跡：検出されていない。

付属ピット：柱穴状の小ピットを5カ所で確認した。中央方向に向かって柱の傾斜するものが3個、柱の方向が確認できなかったものは2個であった。HP-3ではドーナツ状に第1層の暗灰黄色土が廻り、中央部分の第2層の灰褐色土（粘質）は坑底の深い部分まで堆積していた。後者は柱痕、前者は掘り込みに柱を建てた後の埋土と考えられる。

遺物出土状況：遺物総数は17点。遺物のほとんどは覆土上部から散在して出土している。出土した土器10点のうち、9点がⅠ群D1類である。石器等は7点出土、うち剥片石器は2点、礫石器は5点である。（富永）

石器：1は閃緑岩製、1類のすり石。図示した後のすり面には敲打による剥離があり、線状の敲打痕が多数みられる。（田中）

H-571（図Ⅲ-24・25、図版15・90・104・126）

位置：49-37、50-37；標高46.12～46.52mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模：(4.80)/(4.30)×4.14/3.52×0.44m 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-52°-E

確認・調査・土層：49-37区周辺でⅠ層を除去したところ、黒味の強いⅢ層の広がりが見え確認された。遺構が予想されたため土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しずつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。Ⅲ層中で暗褐色土、茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げる。北東側の覆土上層で流れ込み状の遺物が多く出土し、遺物を取り上げつつ覆土を掘り下げる。Ⅴ層中で明黄灰色土のやや堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴの暗褐色土（土層図1）である。覆土2層は混合土状の茶褐色土（土層図2）である。覆土3層は1層に黄色ロームが多く混じる暗黄茶色土（土層図5）で、覆土4層は床面直上に堆積する土で、粘質の暗黄灰色土（土層図9）である。

重複関係：本住居跡は、H-534・598・599・607・608と重複しており、H-534より古く、他より新しい。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：Ⅴ層を深く掘り込んで構築されている。やや堅く、凹凸がある。

壁：立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が11～25cm、東壁が32～41cm、南壁が24～36cmである。

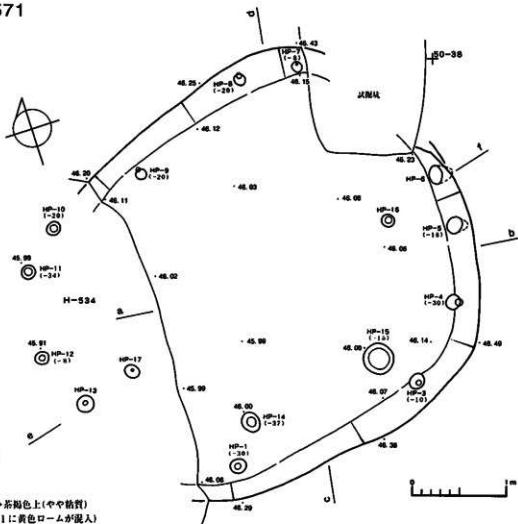
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは16個検出されている。HP-1・2～13はほぼ壁面にあるものである。HP-3～9はやや内傾し、HP-10～13はH-534の構築面で検出されたもので、直立している。HP-16・17は主柱穴と思われ、2本柱が想定される。

遺物出土状況：出土遺物総数は525点である。この内訳は土器383点、石器141点、土器片鏝1点である。遺物は覆土上層でややまとまって出土している。とくに覆土1層の壁際で、内面を上にし、流れ込みとみられる状態で土器がまとまって出土している。床面付近からはスクレイパー（2点）、Rフレイク（1点）、石鏝（1点）、礫（1点）が出土しただけである。土器は覆土1層でⅠ群D2類土器

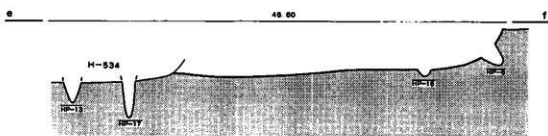
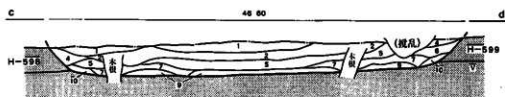
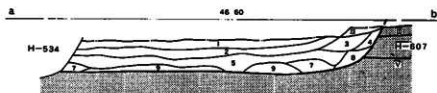
H-571

49-38

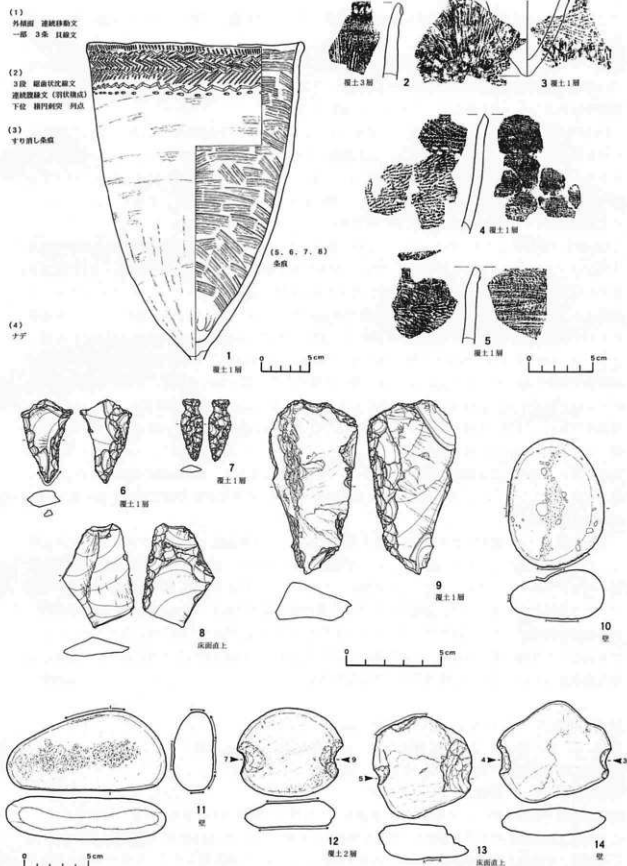


H-571の土層

1. III > V
2. 茶褐色土
3. 暗褐色土 > 茶褐色土 (やや粘質)
4. 暗褐色土 (I に黄色ロームが混入)
5. 暗黄茶色土
6. 暗黄茶色土 > 黄色ローム (やや粘質)
7. 暗黄黄色土 (やや砂質)
8. 黄褐色土 (軽石が少量混入)
9. 暗黄色土 (粘質)
10. 暗黄灰色土 (粘質)



図III-24 H-571実測図



図Ⅲ-25 H-571出土遺物

が1点出土しているが、他はI群D1類土器である。石器では石鏃、石錐、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。(和泉田)

土器：1～3はI群D1類a種で、1は復元個体。2は口縁部破片、3は乳房状尖底。4はD1類b種の口縁部破片である。5はD2類の口縁部破片で、平縁を呈し口唇部断面形は切り出し状である。器面調整は内面をすり消し条痕で、外面は敲製の押しである。

D1類の口縁部形態は波状口縁(4)と平縁(1・2)があり、口唇部断面形は角形(2)、切り出し状に外傾するもの(1・4)がある。器面調整はナデ(1)、すり消し条痕(1～4)、条痕(1)がある。文様は鋸歯状沈線文(1)、貝線文(1・4)、楕円刺突(1・4)、列点となるもの(1・4)、連続腹縁文(1・4)、連続移動文(1)、背圧痕文(4)、爪瘤文(2)がある。1・4は羽状の文様を構成し、全体の内容はH-536に類似する。

(土器出土位置関係) 平面分布では中央に土器が集中する(関係図-4)。垂直分布では立面Eの南北方向では中央に、立面Fの東西方向では幅広く分布し覆土中部に密度が高い(関係図-6)。覆土下部からは5及び他遺構P-321-6の破片が出土する。D1類の最新の纏まった時期のものである。1は纏まって出土した個体だが中部付近の遺物である。2～4もほぼ同一レベルで確認される。掲載されないが他遺構との接合例が4件ある。事例1[259]は壁際から出土し、H-562(G4区)の覆土2層、H-544(G5区)の覆土1層、48-33区のⅢ層、47-33区のⅠ層と接合する。事例2[1085]は覆土1層から出土し、H-559(G1区)覆土上層のⅢ層、50-32区のⅢ層、平成7年度の45-33区のⅠ層と接合する。事例3[251]は壁際から出土し、H-536(G2区)の覆土2層と接合する。事例4[1067]は覆土1層から出土し、H-598(G2区)の覆土1層、P-321、P-354の覆土上層、48-34区のⅢ層・Ⅰ層と接合する。(富永)

石器：剥片石器の石質は黒曜石製の7以外、すべて硬質頁岩である。黒曜石製の遺物はこの1点で、剥片も出土していない。この黒曜石は原材産地分析の結果、赤井川産との推定結果が得られている(V章-3参照)。

6は石鏃で、先端部がかなり磨滅し丸みを帯びている。7は両面加工の1類の石匙。小型で身も薄く、石鏃を再度加工したものかもしれない。実用品なのだろうか。8・9はともに一側縁に直線的刃部を持つスクレイパーである。10は安山岩製のたたき石で、平坦面や端部、側縁に顕著な敲打痕を持つ。11は閃緑岩製のすり石で、内裏面の平坦面も敲打痕が顕著である。12～14は円礫素材の石錘で、石質は順に閃緑岩、片岩、砂岩である。12の両平坦面にはすり痕があり、ごく浅い皿状を呈することから砥石での使用が考えられる。13の図裏面はほぼ中央には、径6mmほどの2カ所の窪みを中心とした敲打痕が見られる。これら石鏃は、挟り部に敲打痕を持っている。(田中)

H-598 (図26～29, 図版16・18・90・105・127)

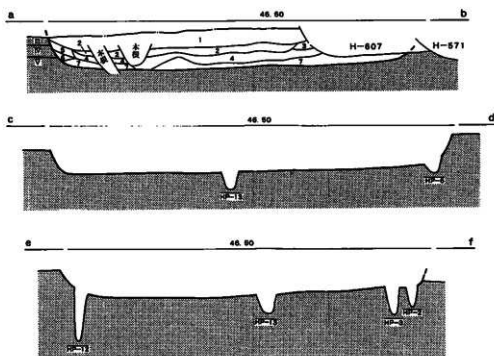
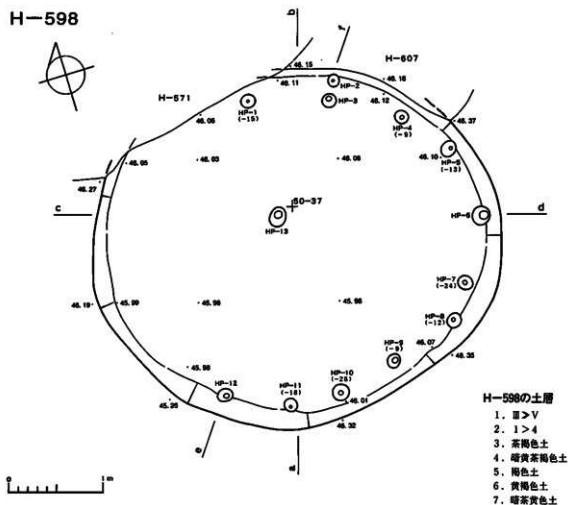
位置：49-36・37, 50-36・37; 標高46.20～46.41mのほぼ平坦地に位置している。

規模：4.34/3.98×(3.72)/(3.50)×0.40m 床面積：(11.19)m²

平面形：楕円形 長軸方向：N-79°-W

確認・調査・土層：50-37区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で黒味のあるⅢ層の広がりが確認された。このため土層観察用の土手を設定し、周辺を精査し、Ⅲ層を少しずつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。この結果、Ⅳ層直上付近でⅢ>Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で暗灰黄色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。ただ北側の覆土中で茶褐色土の落ち込みが見られ、これがH-607の覆土で、H-607の床面が

H-598



図Ⅲ-26 H-598実測図

本住居跡の覆土中にあることが判明した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴ(土層図1)、覆土2層は茶褐色系の土である(土層図2~4)。覆土2層の上層はⅢ層が多く、下層は黄色ロームが多い。覆土3層は床面直上に堆積する土で汚れた暗茶黄色土(土層図7)で、薄く堆積している。

重複関係: 本住居跡は、H-571・607と重複しており、これらより古い住居跡である。

時期: 覆土と周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

壁: 全体に立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、南西壁が20~27cm、南東壁・北東壁が30cm前後である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

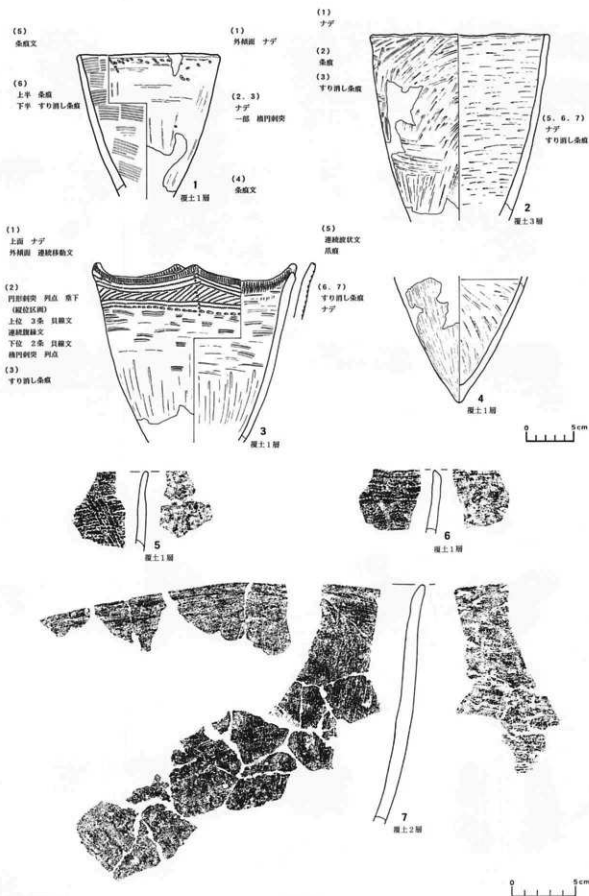
付属ビット: 柱穴状ビットは13個検出されている。HP-1~12は壁際をめぐるもので、直立している。HP-13は直立し、主柱穴と思われ、1本柱が想定される。

遺物出土状況: 出土遺物総数は729点である。この内訳は土器568点、石器158点、土器片鍾3点である。遺物はすべて覆土中からの出土で、床面付近からは出土していない。土器は覆土1層でI群D2類土器11点、I群E類土器1点が出土している以外はすべてI群D1類土器である。石器では石鉾、石鎌、石匙、すり石、たたき石、砥石、石鎌などが出土している。(和泉田)

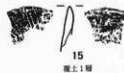
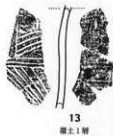
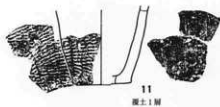
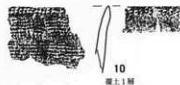
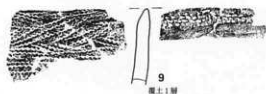
土器: 1~7はI群D1類a種で、1~3は復元個体。4は砲弾形尖底。8~9はD1類b種。10~12はD2類で、10は口縁部破片、11は平底の底部破片、12は尖底部破片。11の背圧痕は背圧痕同士が重複し、断続的加圧移動に近いものである。底面にも背圧痕を施す。12は外面に背圧痕が施される。13はE類の胴部破片で多重沈線と施文される。14はD1類b種の土器片鍾、15はミニチュア土器の破片で櫛目状腹縁文で施文される。

D1類の口縁部形態は波状口縁(3・6)と平縁(1・2・5・7~10)があり、口唇部断面形は丸形(5・7)、切り出し状(6・8~10)がある。器面調整はナデ(1~4)、すり消し条痕(1~3・7)、条痕(1・3)がある。文様は貝線文(2・5・6・8)、楕円刺突(1・2)、円形刺突(2)、列点となるもの(2)、櫛目状腹縁文(5)、連続腹縁文(9)、連続移動文(2)、連続波状文(2)、押引文(11)、押引波状文(9)、爪痕(2)がある。1は三角形(鋸歯状)、8は菱形、9は羽状の文様構成である。8・15の胴部の背圧痕は、施文の規則性が乱れる段階であろう。

(土器出土位置関係) 平面分布では遺構全面から密度が高く土器が出土する(関係図-4)。垂直分布では立面E・Hでは覆土中部から上部にかけて多く出土することが解る(関係図-6)。覆土下部からは、D1類の古手と考えられる2・4・7が出土し、堅穴破壊後の第1段階に流入したものであろう(関係図-11)。4は覆土1層(下部)から出土し、H-534(G2区)・H-562(G4区)の覆土1層、H-607(G2区)の覆土、H-563(G4区)覆土上層のⅢ層、49-36、50-36区のⅢ層、49-36、50-39・40、51-36・37、52-35区のI層と広範に接合し南東へと広がる。7は覆土2・1層(下部)から出土し、H-607の覆土と接合する。覆土中部・上部からは1・3・5・6・8・9・11~15が出土した。これらはほぼ同一のレベルで確認されD1類~E類迄の時間幅を有した遺物が混入している。1は覆土1層(中・上部)から出土し、H-607の覆土1層と接合する。3は東側遺構外と堅穴中央の破片とが接合している。9は覆土1層(中・上部)から出土し、H-607の覆土と接合する。H-607-8とともに両遺構の上層で接合する。8は覆土1層(中・上部)から出土し、H-530(G3区)の覆土1層と覆土上層のⅢ層、H-534の覆土1層、48-33・49、51-36区のⅢ層、



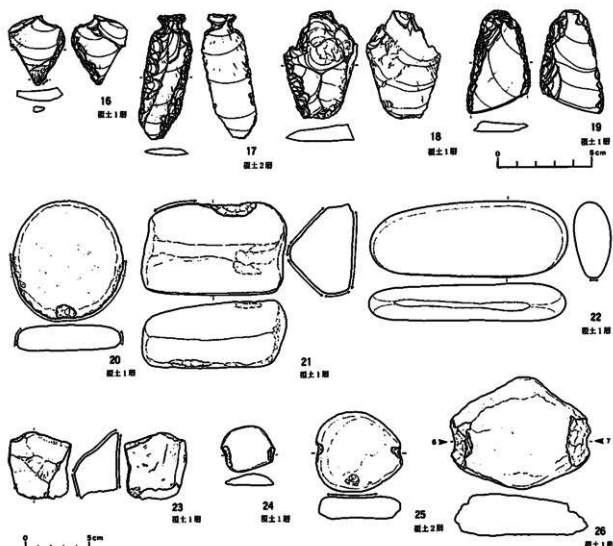
図III-27 H-598出土土器(1)



0 5cm

0 3cm

図Ⅲ-28 H-598出土土器(2)



図Ⅲ-29 H-598出土石器

48-35・48、49-36・37・38区のⅠ層と接合し、広範な接合関係を示す。H-560-10・H-536-5は他遺構との接合関係を示す。10は覆土上部から出土し南西方向の43-30区の包含層と接合する。その他に掲載はされないが他遺構との2件の接合例がある。事例1〔288〕は覆土1層から出土し、H-607の覆土と接合し、事例2〔491〕は覆土1層から出土し、H-607の覆土と接合する。(富永)石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製である。16はスクレイパーの破損品を再利用したものか、折れ面の一部を先端部とする石錐である。先端部は磨滅して丸みを帯びている。17は薄身の石匙で、つまみはT字形をなし、上端を鋭角に調整している。18・19は側縁に刃部を持つスクレイパーで、19の上端には素材剥片の打面を残している。20は閃緑岩製のたたき石。扁平な円盤の周縁半分に連続する敲打痕を持つもの。剥離痕は下端に見られるのみである。21は安山岩製のすり石。図上半にススが付着している。22は閃緑岩製のすり石。断面形は典型的な三角形を呈しないが、最大厚が一方に偏ることから細分類を1類としたものである。23の砥石は細粒の凝灰岩製で、4面の砥面を持ち、すべて平坦か浅い皿状を呈している。24・25は凝灰岩製の石錐で、25は砥石としても使用されている。挟り部を含め、全体に鉄分が吸着している。26は安山岩製の石錐で、両端の挟り部に敲打痕を持っている。平

平坦に並行する数本の亀裂やそれに直交する細かい亀裂があり、火熱を受けたものかもしれない。

(田中)

H-599 (図Ⅲ-30・31, 岡版16・18・105・126)

位置: 49-37・38; 標高46.41~46.47mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 49-38区周辺の包含層調査中、V層直上付近でⅢ>Vの落ち込みを確認した。またI層を除去し、Ⅲ層中で石皿が水平の状態で出土していたことから、この付近に遺構が想定された。このため土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。覆土中(覆土3層上面)で焼土が検出されたが、本住居跡のものではなく、F-18とする。V層中で暗黄灰色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢ>V(土層図1)、覆土2層はⅢ>V(土層図3・4)である。覆土3層は黄色ロームが多い暗茶褐色土(土層図2・5)である。覆土4層は床面直上に堆積する砂質の暗黄灰色土(土層図6・7)である。

重複関係: 本住居跡は、H-571・607・608と重複しており、H-607より新しく、他より古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。北東から南西へゆるやかに傾斜しており、平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜で、残存部分の検出面からの壁高は、11~16cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

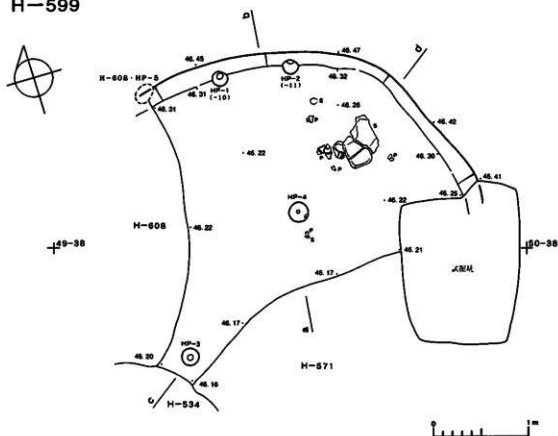
付属ピット: 柱穴状小ピットは4個検出されている。HP-1・2は壁際にあり、やや内傾している。

遺物出土状況: 出土遺物総数は277点である。この内訳は土器173点、石器102点、土製品2点である。遺物は覆土1・2層で多く出土している。石皿は覆土1層で割れた状態で出土したものである。覆土3層上面付近で焼土が検出されており、遺物の出土状況などから見て、この面付近に凹地を利用した生活面があった可能性もある。床面付近では、砥石1点が出土している。土器はすべてI群D1類土器である。石器ではすり石、たたき石、石皿、砥石、石錘などが出土している。(和泉田)

土器: 1~3はI群D1類a種で1は復元個体。2は砲弾形尖底である。4~6はD1類b種の口縁部破片である。口縁部形態は波状口縁(6)と平縁(1・3~5)がある。口唇部断面形は角形(5)、丸形(1・3)、切り出し状(6)がある。器面調整はナデ(1・2)、すり消し条痕(1・2・5)、条痕(3)がある。4は口唇先端部を欠損するが、内面に引摺り背圧痕、外面は多重の貝線文が施される。6は口唇部内面に引摺り背圧痕、口縁部外面に押し波状文が施される。

(土器出土位置関係) 平面分布では比較的均一に土器は分布する(関係図-4)。垂直分布では立面Bの状況から覆土中部から上部に遺物が堆積することが解る(関係図-5)。1・2は覆土下部から出土したD1類の古手の一括土器で、堅穴破棄の時期に近いものと判断される(関係図-11)。中部から出土する3~6はD1類の新手と考えられ、3は覆土2・1層(中部)から出土し、H-561(G5区)覆土1層のⅢ層、47-38、49-38区のⅢ層と接合する。3は所属遺構より標高の高いH-561と接合している。4は覆土2・1層(中部)から出土し、H-571(G2区)・H-603(G2区)の覆土1層と接合する。6は覆土1層(中部)から出土し、H-536(G2区)覆土1層のⅢ層、47-36区のⅢ層・1層と接合する。その他に掲載していないが他遺構と2件の接合例がある。事例1[497]は覆土2層から出土し、H-534(G2区)の覆土1層と接合する。事例2[1062]は覆土2層から出

H-599



H-599の土層

1. III > V
2. 暗茶褐色土
3. III > V
4. 褐黃色土
5. 暗黃茶褐色土(砂質)
6. 暗灰棕色土(砂質)
7. 暗灰黃色土

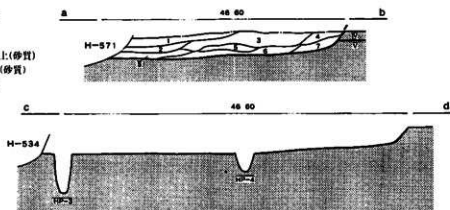
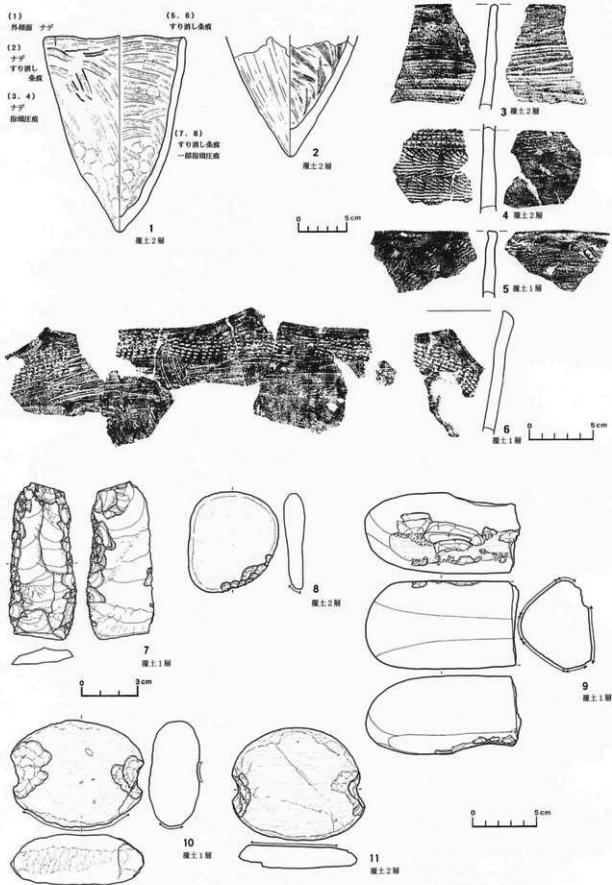


图 4-30 H-599 实测图



図Ⅲ-31 H-599出土遺物

土し、H-608 (G 2 区) の覆土と接合する。

(富永)

石器：7 は硬質頁岩製のスクレイパー。右側縁は表裏両面の調整で側面縁が波状となり、刃部とはみられない。握りのための調整とも考えられる。8・9 は閃緑岩製のたたき石、すり石。8 にみられる剥離痕は表裏両面にあり、顕著な敲打痕は認められないがたたき石とした。10・11 はともに砥石として利用された石錘である。10 の下縁にある砥面は幅 5～10mm 程度の U 字状の砥面が連続し、一般的な砥石にはみられないものである。石質は順に凝灰岩、片岩である。

(田中)

H-602 (図 III-32・34, 図版 17・18・106・125)

位置：47-37・38；標高 46.16～46.26m のほぼ平坦地に位置している。

規模：(4.18)/(3.80)×(3.34)/(3.06)×0.26m 床面積：(8.83)m²

平面形：長円形 長軸方向：N-30°-W

確認・調査・土層：47-38 区周辺の包含層調査中、IV 層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。V 層中で暗茶褐色土の面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面は III 層中と思われる。覆土はほぼ一層で、茶褐色系の混合土が床面まで堆積している (土層図 1・2・4・7)。覆土上層は黒味のある土で、下層は黄色ロームがやや多く混入している。覆土は全体的に不安定な堆積状態である。

重複関係：本住居跡は H-606・628 と重複しており、H-628 より新しいが、他より古い。P-329・366 との新旧関係は明瞭でないが、他との例からみて、本住居跡が古いのではないと思われる。

時期：覆土や周辺の包含層出土の遺物などからみて、I 群 D1 類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V 層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、やや軟質である。

壁：立ち上がりは全体にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高はほぼ 17～22cm である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは 13 個検出されている。HP-6～13 は主柱穴と考えられる。HP-7・8・9 (4 本柱)、HP-10・11・12・13 (4 本柱)、HP-6・13 (2 本柱) がそれぞれ一組となると思われる。HP-12 が HP-8 を、HP-13 が HP-9 をそれぞれ切って掘られており、HP-7・8・9 → HP-10・11・12・13 という建て替えが行われ、これに伴う住居の平面形は 3.40×3.40m ほどの円形状のものと思われる。これを南東側に拡張し、HP-6 と HP-13 (?) の 2 本柱の長円形の住居跡になったのではないと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は 107 点である。この内訳は土器 36 点、石器 39 点、土器片 2 点である。遺物は覆土中で出土したものである。ただ南西壁際で礫石器がややかたまって出土している。土器 I 群 D2 類土器 1 点、I 群 E 類土器 1 点の他はすべて I 群 D1 類土器である。石器ではすり石、たたき石、砥石、石錘などが出土している。

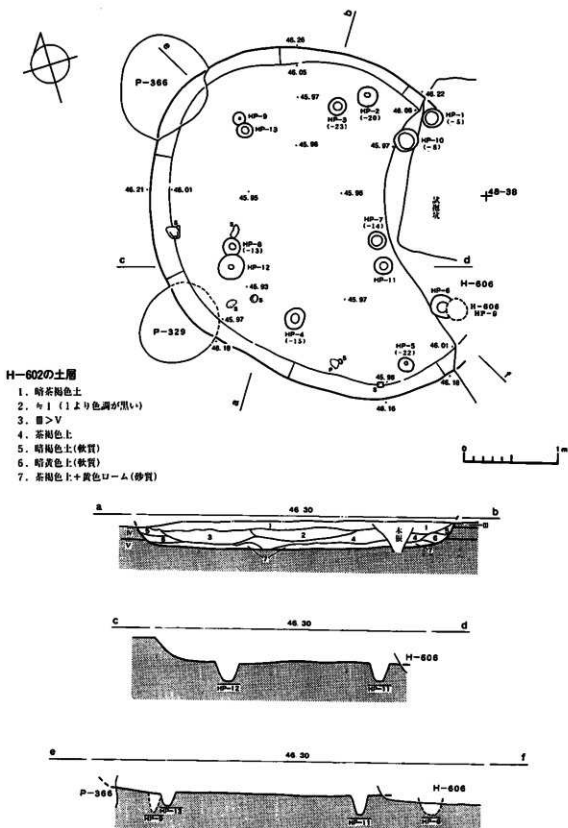
(和泉田)

土器：1・2 は I 群 D1 類 a 種の口縁部破片、3 は D2 類の口縁部破片。平縁で口唇部断面形は切り出し状、内面をすり消し条痕、器外面は押引 (地文) で調整される。

D1 類の口縁部形態は剛突起付波状口縁 (1) と平縁 (2) があり、口唇部断面形は丸形 (1)、切り出し状に外傾するもの (2) がある。器面調整はともにナデ。文様は沈線文 (2)、貝線文 (1)、連続腹縁文 (1) がある。

(土器出土位置関係) 平面分布では中央部に密度が高い (関係図-4)。垂直分布は立面 A の状況から、

H-602



土器は覆土の中部から上部にかけて多く出土する（関係図-5）。1～3は覆土中部から出土する（関係図-7）。1・2はⅠ1類の段階だが、3のⅠ2類が混入することから新しい時期に遺物が動いてきた可能性がある。また、掲載していないが他遺構と2件の接合例がある。事例1〔296〕は覆土2・1層から出土し、H-608（G2区）の覆土と接合し東側からの経路を、事例2〔317〕は覆土2層から出土し、H-608の覆土1層と接合し南西への経路を示している。（富永）

石器：4・5は硬質頁岩製のスクレイパー。5については素材剥片の細くなる裏面に、対をなして調整が加えられている。3類の石匙とみて良いものかもしれない。6は閃緑岩製のすり石。下稜のすり面には敲打痕とともに剥離痕があるが、すべてが敲打によるものとは判断できない。7は閃緑岩製の石錘で、両挟り部には敲打痕が顕著にみられる。また、裏面にある剥離痕の多くは挟り部作図のためのものではないようである。（田中）

H-603（図Ⅲ-33・34、図版20・106・125）

位置：48-36・37、49-36・37；標高46.06～46.13mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：48-36、49-36区周辺は広く、深く攪乱を受けており、全体を確認することができなかった。48-36・37区周辺の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で暗褐色土、褐色土の落ち込みが検出された。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げる。茶褐色系の土が厚く堆積しており、これらを除き、Ⅴ層中で明灰色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴの暗褐色土（土層図1）であるが、西側ではⅢ>Ⅴの褐色土（土層図2）が見られる。覆土2層は暗灰褐色土（土層図3）であるが、これは中央部に見られるもので、東側では茶褐色土（土層図4）が堆積している。覆土3層は床面直上に堆積しているもので、中央部には粘質でかたい灰褐色土（土層図6・7）、東側には暗褐色土（土層図9）が堆積している。

重複関係：本住居跡は、T-172、H-534・628と重複しており、H-628より新しいが、他より古い。なお、P-304・307・317・318・319・323・365と重複している模様であるが、P-304を除く他の土坑は攪乱によりⅤ層まで削平されている処で検出されたものであり、新旧は明瞭でない。ただ他との比較で見ると、恐らくこれらの土坑は本住居跡より新しいものと思われる。

時期：覆土や周辺の包含層出土の遺物などからみて、Ⅰ群Ⅰ1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜で、残存部分の検出面からの壁高はほぼ17～22cmである。

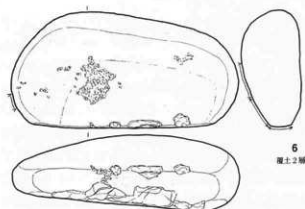
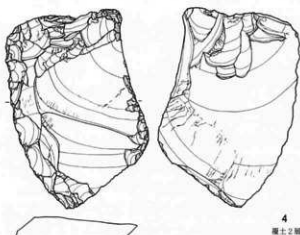
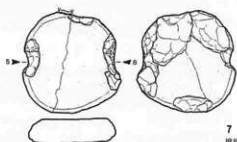
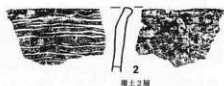
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：攪乱されているところを含め、柱穴状小ピットは33個検出されている。全体に直立し、杭状で、深いものが多い。HP-26・33・28は主柱穴と思われる。HP-16～18・20・21はH-534の床面で検出されたものである。

柱穴状小ピットの配列などから考えて、6.80×4.00m、長軸方向N-36°W、隅丸長方形の住居跡が想定される。3本柱であろうか。

遺物出土状況：出土遺物総数は85点である。この内訳は土器53点、石器32点である。床面付近からはⅠ群Ⅰ1類土器3点、砥石1点、石錘1点などが出土している。土器はⅠ群Ⅰ2類土器1点のほかは、すべてⅠ群Ⅰ1類土器である。石器では石匙、たたき石、砥石、石錘などが出土している。（和泉田）

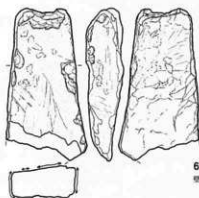
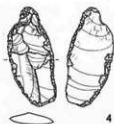
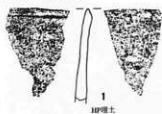
H-602



土器・礫石器：0 5 cm

剥片石器：0 5 cm

H-603



図Ⅲ-34 H-602・603出土遺物

土器：1～3はⅠ群D1類a種の口縁部破片で、口唇部形態は波状口縁（3）と平縁（1・2）があり、口唇部断面形は角形（2）、切り出し状に外傾するもの（1・3）がある。3は口唇部が肥厚している。器面調整はナデ（1・3）、すり消し条痕（2）、条痕（2）がある。3は内面に連続移動文、外傾面・外方に羽状構成の連続腹縁文、下位を2条の貝縁文で区画する。

（土器出土位置関係）平面分布は、堅穴中央部をTビットが分断するため全容は不明だが東側に偏る傾向がある（関係図-4）。垂直分布は立面Fの状況から床面付近の最下層からも土器が出土するが、ほとんどの遺物は覆土の上部の二次堆積の遺物と判断できる（関係図-6）。1～3およびH-599-4、H-536-6は覆土上部からの出土である。

（富永）

石器：4は硬質頁岩製の石匙。つまみは半円状に整形され、挟りは顕著でない。裏面の調整は素材剥片のよじれを調整したものと思われる。5のたたき石は多孔質の凝灰岩製である。6の砥石も凝灰岩製で、あらゆる面が使用され、幅5mm程度の浅い溝状の砥面もみられるが全体的に平坦であることから、1類としたものである。

（田中）

H-606（図Ⅲ-35・36、図版21・106・124）

位置：47-37・38、48-37・38；標高46.00～46.21mのほぼ平坦地に位置している。

規模：(4.70)/(4.40)×(4.60)/(4.20)×(0.24)m 平面形：隅丸方形

確認・調査・土層：H-602の調査中、東側の覆土中で暗茶褐色土の落ち込みが検出された。遺構が想定されたため、土層観察用の土手を設定し、周辺を精査する。Ⅳ層直上付近で褐色土、茶褐色土の落ち込みを検出した。褐色土から順次覆土を掘り下げ、Ⅴ層中で暗黄灰色土の堅い面を検出した。柱穴状小ビットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層と思われる。覆土はほぼ2層である。覆土1層はⅢ>Ⅴの褐色土（土層図1）である。覆土2層は茶褐色系の土（土層図2～6）で床面直上まで堆積している。下層はやや粘質（土層図4～6）である。また床面直上には薄く、砂質の暗灰黄色土（土層図7）が見られた。

重複関係：本住居跡は、P-334、T-172、H-536・602・628と重複しており、P-334、T-172、H-536より古く、他より新しい。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が3～19cm、西壁が7～19cm、南壁が15cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

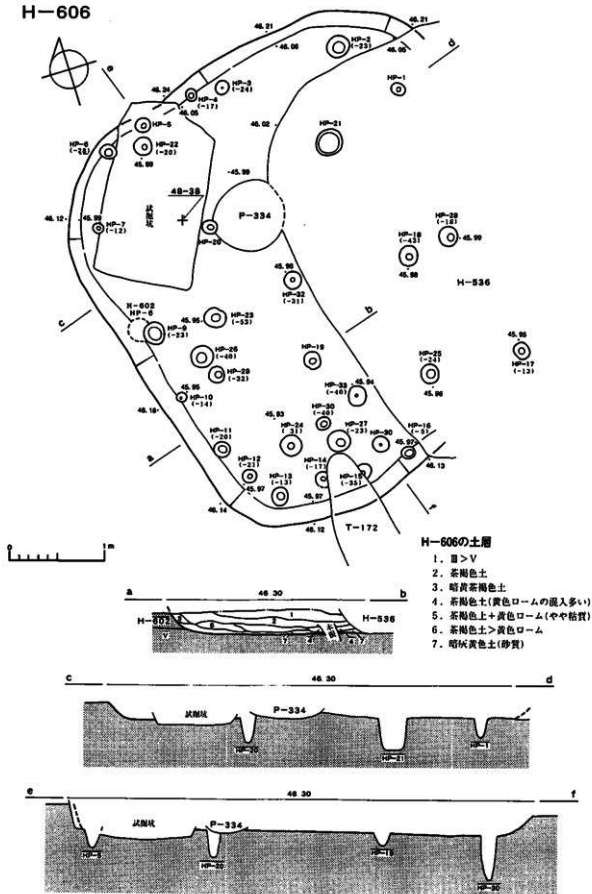
付属ビット：柱穴状小ビットは31個検出されている。HP-1～7・9～17は壁際をめぐるものと思われる。HP-18・19・20・21は主柱穴で、4本柱である。南西側付近で、小ビットが多く検出されている。これらは床面を少し掘り下げたところで検出したものである。全体に深く、遺物なども混入しており、より古い住居跡の主柱穴ではなかろうかと考えている。何度も建て替えが行われたのではないと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は232点である。この内訳は土器103点、石器129点である。遺物は全体的に散在的でまとまりはみられない。床面付近からはⅠ群D1類土器8点、石匙1点、石錘2点などが出土している。土器はすべてⅠ群D1類土器である。石器では石槍、石匙、擦切残片、すり石、石皿、砥石、石錘（27点）などが出土している。

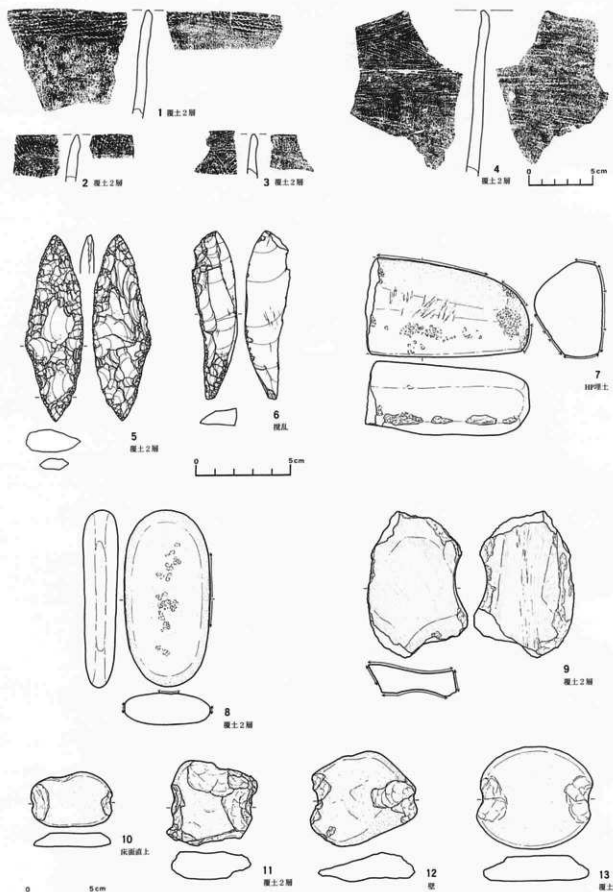
（和泉田）

土器：1～4はⅠ群D1類a種の口縁部破片である。波状口縁（4）と平縁のもの（1～3）があり、

H-606



図III-35 H-606実測図



図Ⅲ-36 H-606出土遺物

口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。器面調整はナデ（1・3）とすり消し条痕（3・4）がある。文様は貝線文（1）、櫛目状腹線文（2・4）、連続腹線文（2・3）、連続波状文（2・3）がある。3は鋸歯状、4は羽状の文様を構成する。

（土器出土位置関係）平面分布では竪穴中央部に遺物が集まる傾向にあるが、H-536および土坑に分断され全容は不明である（関係図-4）。垂直分布では立面A・Bの状況から覆土の下部から中部にかけて遺物が出土している（関係図-5）。1～4は覆土の中部付近の遺物で、時期幅の狭いD1類の一群といえる。4は覆土2層（中部）から出土し、H-530（G3区）の覆土2・1層、48-35区のⅢ層と接合し、H-534-8、H-536-12も同様の南側との接合関係を示し、いずれもD1類の新手である。（富永）

石器：石器の層位的出土状況は土器と同様である。5は硬質頁岩製の石槍。先端部に櫛状剥離がみられるが、I群E類土器に伴う彫器様石器のそれとは違い、破損によるとみられる同様の剥離が先端部に残る石鏃も出土していることから、石槍としたものである。6も硬質頁岩製のスクレイパーで、剥片素材はかなりよじれている。床面で確認された柱穴状の本根痕からの出土で、この居居跡覆土などに含まれていた可能性が高いと判断したものである。7・8は閃緑岩製のすり石。7の図正面の稜にはごく浅い直線状の敲打痕が幾本もみとめられる。9は粗粒の凝灰岩製の砥石で、幅狭い側面に大きく湾曲した砥面がある。10-13は円礫素材の石錘で、石質は順に片岩、頁岩、流紋岩、閃緑岩の各種がある。11は適当な大きさを得るため、人為的に割ったものかは判断できない。13の挟り部は剥離痕をほとんど残さないほど平均的に磨滅しており、その磨滅は人工的加工とはみられない。図示した4点の石錘には挟り部に敲打痕はみられないが、敲打痕のある石錘も出土している。（田中）

H-607（図Ⅲ-37・38、図版17・18・90・106・127）

位置：49-37・38、50-37・38；標高46.21～46.61mのやや東から西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模：(6.00)／(5.80)×(4.40)／(4.00)×(0.24)m 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-7°-E

確認・調査・土層：H-598の調査中、北側の覆土中でⅢ層の落ち込みが確認された。土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、遺構検出作業を行った。この結果、Ⅳ層直上付近で褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、北側ではⅤ層中で暗黄色土の堅い面を検出した。南側は軟質で汚れた暗茶黄色土が検出され、この面で柱穴状小ビットが検出されたことから床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層である。覆土1層はⅢ>Ⅴの褐色土（土層図1）、覆土2層は茶褐色系の混合土で、上層は暗茶褐色土（土層図2・3）、下層は茶黄褐色土（土層図4）である。西側は床面直上まで堆積している。覆土3層は粘質の暗灰黄色土（土層図6）で、東側の床面直上に堆積している。覆土は全体に不安定な堆積状態である。

重複関係：本住居跡は、H-544・599・571・598と重複しており、H-598より新しいが他より古い。時期：周辺の包含層と覆土出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：北側はⅤ層を浅く掘り込んで構築されているが、南側はH-598の覆土中に作られている。北東から南西へゆるやかに傾斜しており、凹凸がある。北側は堅いが、南側は軟質である。

壁：立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、東壁が14～21cm、南壁が5～17cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは29個検出されている。HP-5・7・9は壁面にあるものと思われ、内傾している。HP-6・8・10・21・27・29は壁際をめぐるもので直立している。HP-16・21・

29はH-571の床面で検出されたものである。HP-22・23は主柱穴と思われ、2本柱が想定される。

遺物出土状況：出土遺物総数は283点である。この内訳は土器230点、石器53点である。遺物はHP中でI群D1類土器13点、床面直上で礫2点出土した以外はすべて覆土中から出土したものである。覆土1層で多く出土している。上器はすべてI群D1類土器である。石器では石匙、石錘などが出土している。

(和泉田)

土器：1～5はI群D1類a種で、1は復元個体。6～9はD1類b種の口縁部破片。10・11はでD1類のミニチュア土器である。

D1類の口縁部形態は波状口縁(1・4・6・7)と副突起付波状口縁(5)と平縁のもの(2・3・8・9・10)があり、口唇部断面形は丸形(9)、切り出し状(1～8・10・11)がある。器面調整はナデ(1・2・5)、すり消し条痕(1・3・4・6～11)、条痕(9)がある。文様は鋸歯状沈線文(6・10)、貝線文(4・6・7)、円形刺突(11)、貝殻文は櫛目状腹縁文(9)、連続腹縁文(2・3・6)、連続波状文(4)、押引文(8)がある。4は羽状、7は菱形(逆羽状)の文様構成である。6・7は背圧痕文、8は背圧痕と判断される。

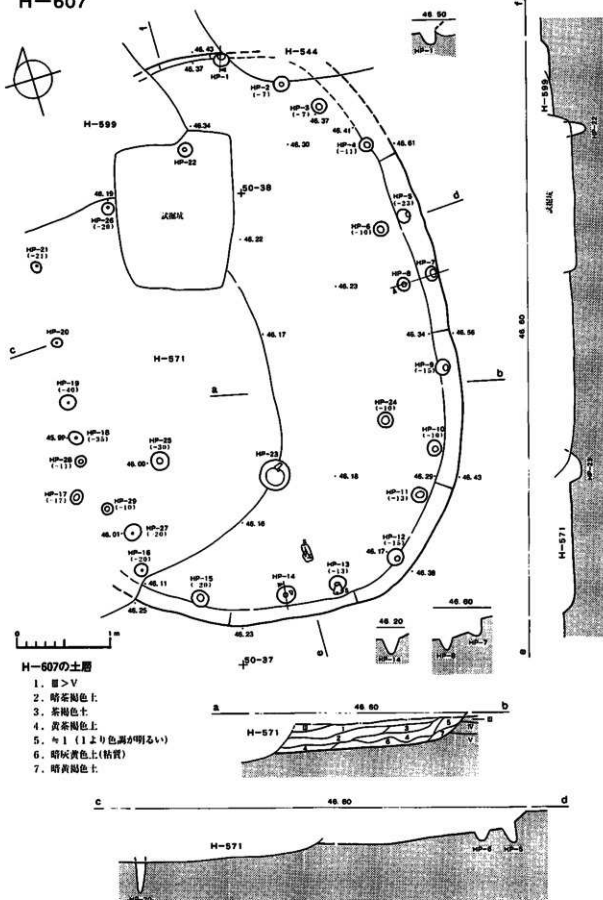
(土器出土位置関係) 平面分布では遺構南側から密度が高く出土する(関係図-4)。垂直分布は立面G・Hでは下部から上部にかけて多く出土することが解る(関係図-6)。覆土下部では1が柱穴覆土から出土し、H-562(G4区)の覆土3・1層、H-565(G7区)の覆土1層と接合する。1はD1類の古手と考えられる。2・6・8は遺構の中央付近の上部から出土し、1に比べD1類でも新し手と考えられる。8は覆土2層・覆土(上部)から出土し、H-598(G2区)の覆土1層、50-36区のI層と接合する。3～5・7・9・10・11は堅穴南側の遺物集中地域から出土したD1類の新し手である。5は覆土2・1層から出土し、H-598(G2区)の覆土1層、50-37区のI層と接合する。3・5はこれら集中域とH-598の上層と接合する。3・5はH-607とH-598の埋没過程ではほぼ同時に、二次的に堆積したことを示すと考えられる。また、H-562-42は堅穴中央部の上部と南側集中域とに接合関係がある。

(富永)

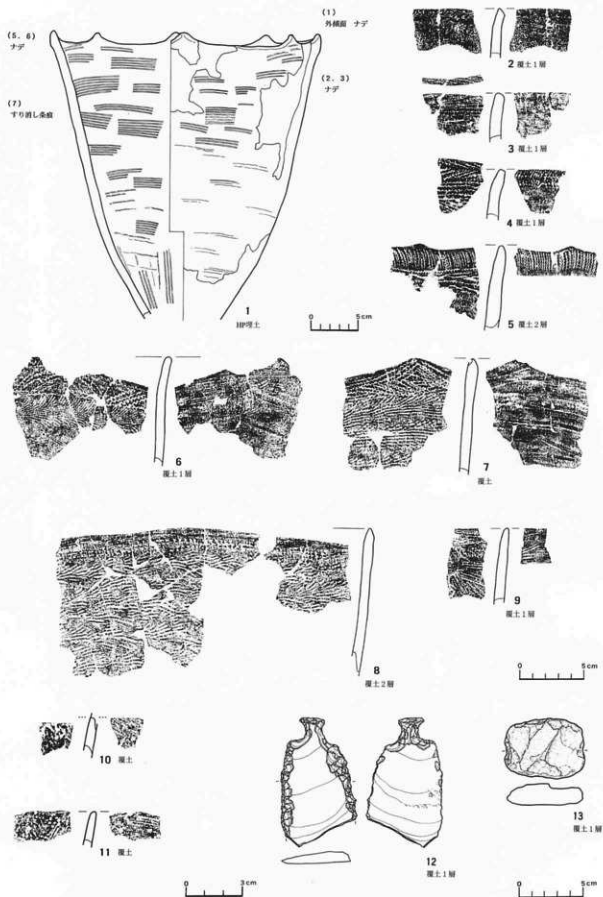
石器：土器に比べ出土点数は少ない。12は硬質頁岩製の石匙。つまみは典型的なT字形で、上端は鋭角に調整している。また、割れ面がかなり磨滅しており、この状態での長期間の使用が考えられる。13の石錘は頁岩製で、両平坦面に鉄分の吸着した礫面を残している。板状に割れた礫に簡単な袢りを入れたものである。

(田中)

H-607



図III-37 H-607実測図



図Ⅲ-38 H-607出土遺物

H-608 (図Ⅲ-39, 図版17・18・126)

位置: 48-37・38, 49-37・38; 標高46.23~46.43mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-599の調査中、その西側の覆土中で茶褐色土の落ち込みを検出した。このため49-38区周辺を精査し、Ⅳ層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。Ⅴ層中で暗灰黄色土の堅い面が検出され、また柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ二層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴの褐色土(土層図1)である。覆土2層は床面直上に堆積する茶褐色系の土(土層図2・3)で、下層(土層図3)は黄色ロームが多く混入し、軟質土である。

重複関係: 本住居跡は、H-534・536・537・599と重複しており、H-599より新しく、他より古い。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層をわずかに掘り込んで構築されている。北東から南西へ若干傾斜し、平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高はほぼ6~15cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

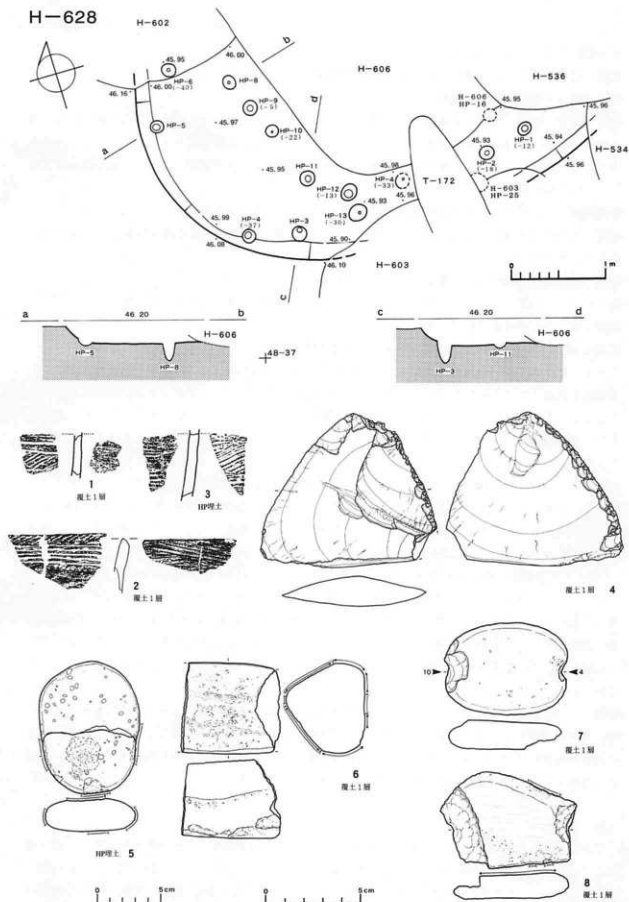
付属ピット: 柱穴状ピットは11個検出されている。HP-1~5は壁際であり、やや内傾気味である。他は直立している。

遺物出土状況: 遺物のほとんどは覆土1・2層で出土しているが、まとまった出土状態ではない。土器は覆土1層でI群D1類土器が8点出土している。(和泉田)

土器: 1はI群D1類a種の乳房状尖底で突起部は小さい。接合部の調整は内面上方、外面下方に成形する、内外面はすり消し条痕で調整される。

(土器出土位置関係) 平面分布は他遺構に分断され明確ではない(関係図-4)。垂直分布は立面Bでは上部に密度が高いことがわかる(関係図-5)。1は遺物の集まりから離れた地点にある(関係図-11)。P-321-6は10mほど離れたP-321に主体があり、H-571の覆土など広範囲にわたって接合関係がみられる。その他に掲載していないが他遺構と接合例が1件ある。事例1[671]は覆土から出土し、H-537(G2区)の覆土1層と接合している。(富永)

石器: 11は頁岩製の石錘で、節理に沿って割れたものを素材とするもの。12は安山岩製の石錘。床面で確認された柱穴状の木根痕からの出土で、この住居跡覆土などに包含されていた可能性が高いと判断したものである。(田中)



図Ⅲ-40 H-628実測図と出土遺物

H-628（図Ⅲ-40，図版19・106・125）

位置：47-37，48-37；標高46.10～46.16mの平坦地に位置している。

規模・床面・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：47-37区周辺の包含層調査中、Ⅳ層直上付近でⅢ＞Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を掘り下げ、Ⅴ層中で暗灰黄色土の面を検出した。この面で柱穴状小ピットも検出されたことから床面とし、壁の立ち上がりを検出した。覆土は床面直上まで褐色土が堆積している。掘り込み面はⅢ層中と思われる。

重複関係：本住居跡は、T-172とH-534・536・602・603・606と重複しており、これらより古い。時期：周辺の包含層と覆土出土の遺物などからみて、Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。

壁：残存部分の立ち上がりは、ゆるやかな傾斜で、検出面からの壁高は10cm前後である。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは13個検出されている。HP-3～5は壁際にあり、直立している。

HP-1・2・8～12・14は規則的に並んでおり他遺構の柱穴状小ピットの可能性が考えられる。

遺物出土状況：出土遺物総数は72点である。この内訳は土器36点、石器36点である。遺物は覆土中とくに上部で多く出土している。HP中からⅠ群D1類土器2点、たたき石1点が出土している。土器はすべてⅠ群D1類土器である。石器ではスクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石錘などが出土している。（和泉田）

土器：1～3はⅠ群D1類a種。1・2は口縁部破片で、1は口唇部先端が欠損する。3は胴部破片である。器形がわかるものは2で口縁部形態が平縁を呈し、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面調整は基本的にナデで調整されるが、3は外面をすり消し条痕、内面を条痕で調整する。文様は沈線文のもの（1・2）、連続腹縁文のもの（2）がある。

（土器出土位置関係）平面分布は他遺構に分断されるため全容は不明である（関係図-4）。垂直分布では、立面Gの状況から土器は覆土の中層から多く出土することがわかる（関係図-6）。1・2は覆土中層から出土するが、沈線文を主体にして文様を構成する共通の特徴を有し、D1類の比較的古手と考えられる。2は覆土1層（中層）から出土し、H-536（G2区）の覆土3・2層、48-37区のⅢ層と接合する。北東からの流入経路を示している。3は柱穴の覆土から出土し壁穴に伴う土器片である。（富永）

石器：4は硬質頁岩製のスクレイパーで、横長剥片の両側縁に錯向剥離により刃部を作出しているもの。5は泥岩製のたたき石。HP-6出土とH-536覆土2層出土の破片が接合したもので、接合部分にある敲打痕には段差はない。6のすり石は閃緑岩製。7・8は円礫素材の石錘で、石質は順に閃緑岩、流紋岩である。8は砥石としても使用され、砥面は平滑である。（田中）

（3）G3区

この地区はG区南西側の、平成7年度D地区に向かって開口するように配列する壁穴群の一部を構成し、G1・2・4区に囲まれる部分である。重複するH-530・572・597の3軒がある。H-530・597が長軸方向をほぼ東西にする隅丸長方形の壁穴であるのに対し、新旧関係で中間にあるH-572は平面形が長円形を呈する壁穴である。H-597は後続するH-572・530に大半が壊され、それぞれの床面レベルが接近することもあり、全体像ははっきりしない部分が多い。（田中）

H-530 (図Ⅲ-41~47, 図版22・91・107・128・129)

位置: 48-34・35, 49-34・35; 標高45.55~45.68mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模: 5.15/4.76×4.30/3.75×0.40m 床面積: 15.96㎡

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-73°-W

確認・調査・土層: 48-34・35, 49-34・35区の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で覆土状の土が広がり、その中にⅢ>Ⅴの土が長円形状に広がっているのが確認された。遺構が想定されたため、土層観察用の土手を設定しⅢ>Ⅴから順次掘り下げ、また周辺を精査した結果、Ⅲ>Ⅴの落ち込みを検出した。Ⅲ>Ⅴの下は混合土状の土が堆積しており、遺物も多く出土していることから、遺物出土状況の写真撮影や実測を行いつつ遺物を取り上げ、覆土を掘り下げる。Ⅴ層中で明灰黄色の非常に堅い面が検出され、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴ(土層図1)、覆土2層はⅢ>Ⅴの土(土層図2)である。覆土3層と4層は混合土状の茶褐色土であるが、4層(土層図4)は3層(土層図3)より黄色ローム、軽石、小石などが多く混入しており、一応分層し、遺物の取り上げを行った。

重複関係: 本住居跡は、H-572・597と重複しており、これより新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: Ⅴ層を深く掘り込んで構築している。やや北東から南西へ傾斜しているが、平坦で、堅い。とくに中央付近は2×2.5mの範囲で、若干盛り上がり、非常に堅くなっている。

壁: 立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が30~46cm、西壁が24~29cm、南壁が18~30cm、東壁が32~41cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。南壁際で浅い掘り込み炉跡が検出されているが、位置的に考えて、H-597のものであろう。

付属ピット: 柱穴状小ピットは21個検出されている。HP-1~6は壁面にあり、内傾している。HP-7~10・12~15・22は壁際をめぐめるもので直立している。HP-16~21は主柱穴と思われる。またこれらの配列からみて、HP-17・18・19、HP-16・21・20がそれぞれ4本柱に対応するもので、建て替えが行われているものと思われるが、この新旧関係は明らかでない。

遺物出土状況: 出土遺物総数は2,466点である。この内訳は土器1,420点、石器1,045点、土器片・土器片1点である。遺物は覆土1層から床面直上まで多く出土している。とくに北東側の床面直上付近では土器がまとまって出土している。また南東側の3~4層付近で、土器の尖底部が横どおしの状態で出土した。北壁付近の床面直上付近では石錘など礫石器がかたまつて多く出土した。遺物の出土状況は全体にまとまりが見られ、凹地を利用した生活面があった可能性がある。土器は覆土1層でI群D2類土器7点、I群E類土器1点出土しているだけで、他はすべてI群D1類土器である。床面、床面直上付近で出土した土器はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、両面調整石器、石斧、たたき石、すり石、砥石、石鋸、石錘などが出土している。とくに石錘は覆土、床面あわせて207点出土している。

(和泉田)

土器: 1~6は復元個体。1~3・7~22はI群D1類a種、4・5・23・24はD1類b種である。7は乳房状尖底で、8は砲弾形尖底である。6・25はD2類で、ともに平縁を呈し、口唇部が先細り丸形のもの(6)と、やや切り出し状に外傾するもの(25)がある。6は内外ともに条痕文で調整され、25は外面は背圧痕で調整され、内面はすり消し条痕で調整される。26はE類。平縁で、口唇部断面形

は切り出し状に外傾し、口唇部外方が隆起線状に肥厚する。器面調整は内外ともにすり消し条痕である。27はD1類a種の土器片鏝である。

D1類の口縁部形態は波状口縁 (1・3・5・10・13・16・19・22)、副突起付波状口縁 (22・23)、平縁 (2・9・11・12・14・15・17・18・20・21・24) があり、口唇部断面形は角形 (10・11・14・15・19・20)、丸形 (1・2・12・13)、切り出し状 (4・16・18・21・24) である。器面調整はナデ (1・3・5・7・8)、すり消し条痕 (1・3・5)、条痕 (1・2・5) がある。文様には沈線文 (1・9・12・20・21)、鋸歯状沈線文 (17・21・22・24)、貝線文 (2・4・13・16・24)、刺突文には円形刺突 (1・22)、楕円刺突 (10・12・24)、列点となるもの (1・10・12・22)、貝殻文では櫛目状腹縁文 (14・19)、連続移動文 (2・17・22)、連続腹縁文 (13・17・24)、連続波状文 (23)、押引文 (2・4)、押し波状文 (24)、引摺り背圧痕 (16) がある。その他、3は波頂部の直下に縦位の粘土瘤が貼り付けられる。粘土瘤の両脇には焼成前に貫通孔が設けられる。5は散発的に背圧痕が施される。1は三角形 (鋸歯状)、4は格子目状 (羽状)、9・14・17・24は羽状、11・16・19・22・24は鋸歯状の文様構成である。D1類a種に鋸歯状構成のものが多く、3・18は分析を依頼したものと同様の朱の痕跡が内面にある。

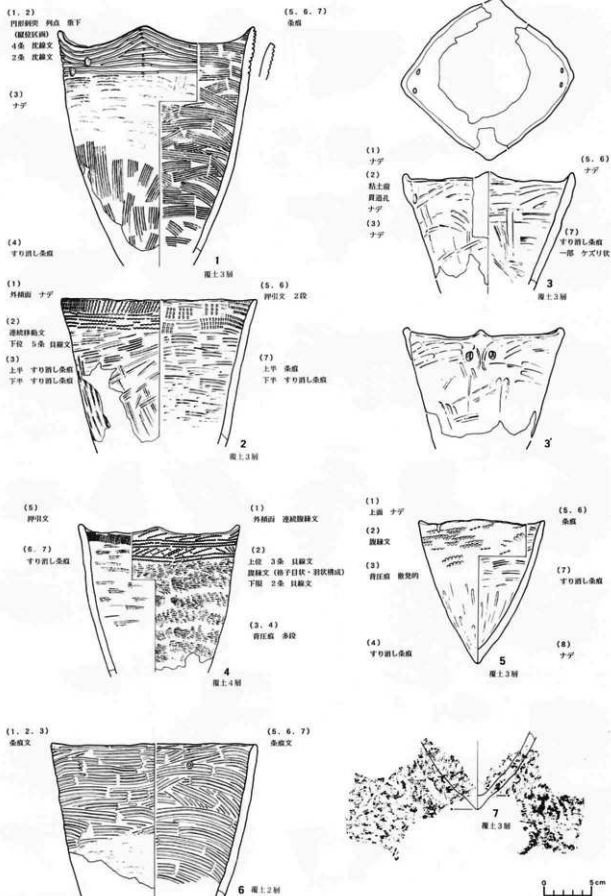
(土器出土位置関係) 平面分布では中央から東側にかけて遺物密度が高くなる (関係図-16)。垂直分布では北が高く、南が低くなる出土状況である。

4・7・9・11は覆土の下部から出土する (関係図-17)。このうち4は纏まった個体でD1類の新手である。

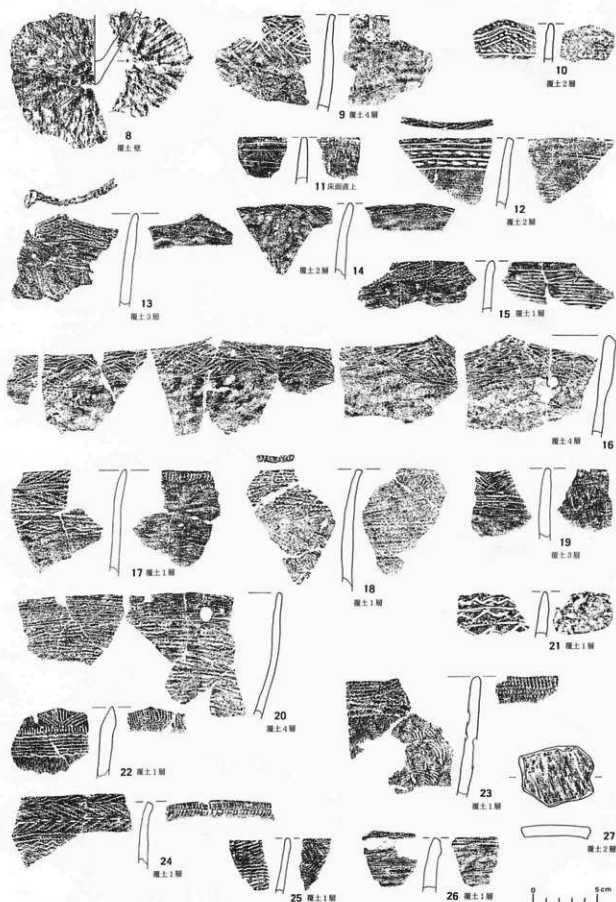
12・13・15・17・19・20・26は覆土の中部から上部にかけて出土する。内容はD1類の中でも古手と新手を含んでいる (関係図-17-19)。1・3・5・14は竪穴の東半分には纏まっており、いずれも北東側と中央部との接合関係がある。このグループはD1類古手の要素をもつものが多い。12は覆土2層 (中部) から出土し、平成7年度のH-406の覆土上層のⅢ層 (Ⅲ報告、図Ⅲ-50-16) と、44-33、48-35区のⅢ層、48-35区のⅠ層と接合する (関係図-18)。この他に接合関係が広範に及ぶものは6・15・16・20である。いずれも覆土上部から出土する (関係図-19・20)。6・15、H-597-5は南側地区の破片と接合する。16は大部分の破片が覆土4～1層 (中部)、覆土上層のⅢ層から出土し、H-562 (G4区) の覆土3・2層と接合する。20は大部分の破片が覆土4・3・2層、壁際 (中部) から出土し、H-527 (G4区) の覆土1層、50-36区のⅢ層と接合する。16・20はH-597-11、H-572-4・10、H-562-51と同様の動きを示し、H-562と接合関係をもつ (関係図-20)。その他、H-534-8、H-544-6、H-598-8、H-606-4は北側の地区との接合関係を示している。この様にH-530の土器は広範囲に接合関係を有していることが特徴である。そして、H-562との接合関係が特に多いことが目立つ。両遺構の埋没の時期が近いことを示すものであろう。また、掲載していないが他遺構と接合する例が1件ある。事例1 [331] は覆土3層から出土し、H-562の覆土3層、覆土上層のⅢ層、H-607 (G2区) の覆土2・1層、H-523 (G1区)・H-598 (G2区) の覆土1層、50-37・38区のⅢ層、50-34・37区のⅠ層と接合する状況である。 (富永)

石器: 剥片石器の石質は30の石鉄と46のUフレイクが黒曜石、41のスクレイパーが玄武岩以外はすべて硬質頁岩である。30・46の黒曜石は原産地分析の結果、ともに赤井川産との結果が得られている (V章-3参照)。

28は幅広の石鉄で、1b類とした。29の石鉄の先端部は欠損しており、その欠損面は櫛状の剥離となっているが、偶発的なものと判断される。30は身に明確な屈曲点を持つもので、基部に向かって若



図III-42 H-530出土土器(1)



図Ⅲ-43 H-530出土土器(2)

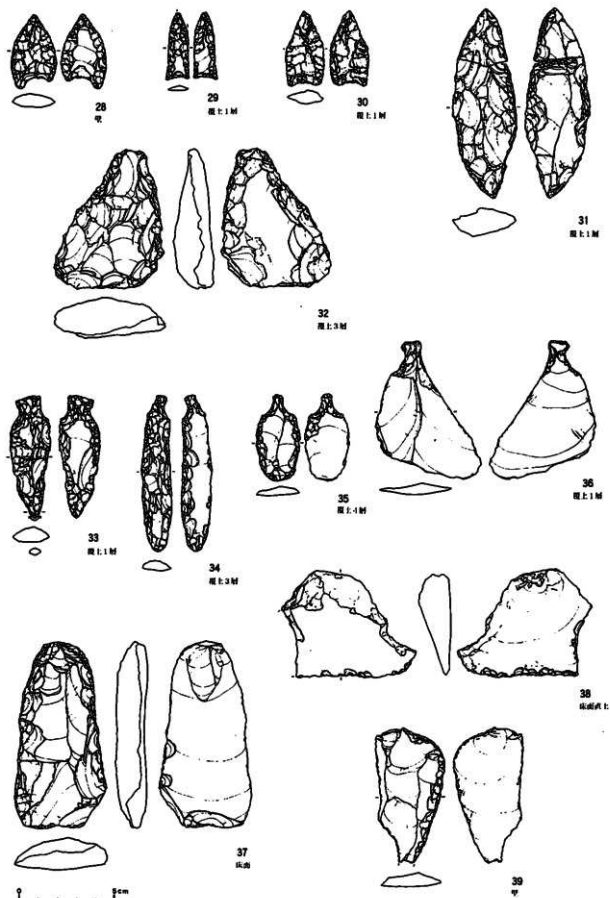
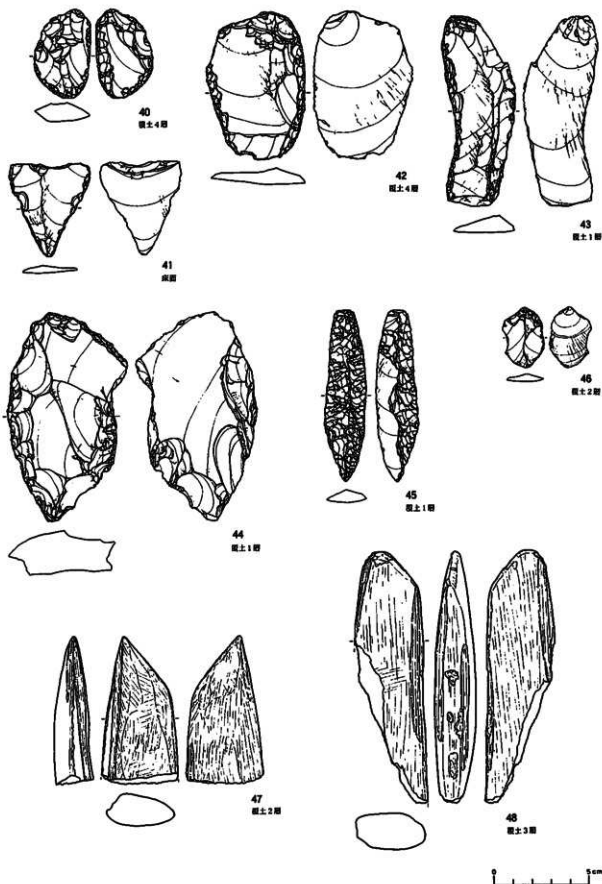
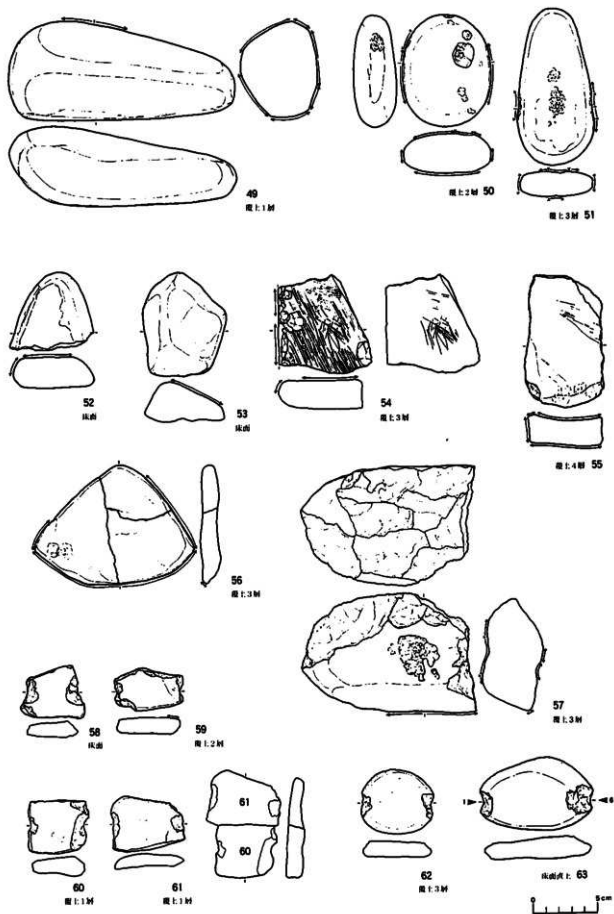


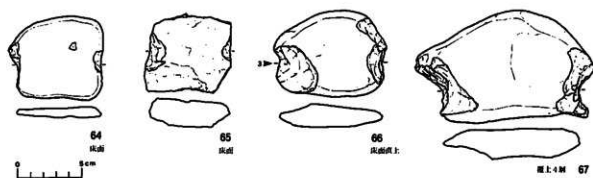
図 III-44 H-530出土石器(1)



図Ⅲ-45 H-530出土石器(2)



図III-46 H-530出土石器(3)



図Ⅲ-47 H-530出土石器(4)

干すはんでいる。やや幅広であるが、2b類とした。これら石鏃は、すべて素材剥片の剥離面を残している。31は覆土1層と覆土上層のⅢ層出土の破片が接合した石槍。身厚で、調整剥離は雑である。先端部欠損後、切断面から調整を加えている。反転して使用したものか。32は左右両側縁を表裏両面からの調整で楕形に整形していることから、筈状石器としたもの。刃部作成、または再生途中のものともみられる。33~36は石匙。33は身厚で、刃部の調整は粗雑である。つまみは幅広で、上端は水平に調整されている。また、先端部は細かく調整され、一部磨滅している。石鏃としての使用が考えられる。34・35はともに棒状のつまみを持つもの。34は細身で、刃部の再調整を繰り返した最終形態を示すものとみられる。35はつまみだけを作出したものである。37~45はスクレイパー。素材剥片の一侧縁や両側縁、下縁部に刃部を持つものである。37は形態的には筈状石器としてよいものであるが、下縁部にヒンジ・フラクチャーを残しており、左側縁を刃部とするスクレイパーとしたものである。45の調整は美麗で、左面の調整はきれいな対称形をなしている。ただし、上端には素材剥片の打面の一部を残している。これ以外にも包含層から同様のスクレイパーが数個出土しており、分類を別にすべきものかもしれない。

47・48は石斧の基部破片で、石質は順に緑色片岩、蛇紋岩である。擦り切り痕を残すが、よく研磨されている。47は表面が黒色、赤色を呈する部分がある。49~51は閃緑岩製のすり石。50の平坦面の窪みは、回転による線条痕のみられるもの。51裏面の敲打痕は、ごく小範囲である。52~55は砥石で、石質は55が流紋岩以外すべて凝灰岩製である。52は青灰色で粗粒、53は細粒で肌理細かいもの。54の砥面には一定方向の細かい線条痕が密に見られるが、一部それが途切れ平滑となる部分がある。そこに線条痕よりも細く浅い線条で、部分的に格子と認められる線刻がある。H-561・566出土の石鏃にみられる線刻と同様のものかと思われる。55の砥石には図示の平坦面下端に、並行する凹凸の砥面が連続して見られる。56・57は凝灰岩製の石鏃。56は竅穴北東側の覆土1・3層と覆土上層のⅢ層出土の破片が接合したもの。より鋭角的な2カ所の端部を挟み両側縁を機能部としたもので、接合する機能部には再使用による段差はない。58~67は石鏃。石質は58~61・67が頁岩製、62・63が閃緑岩製、64が安山岩製、65が凝灰岩製、66が片岩製である。60・61はともに竅穴西側の覆土1層から接近して出土したもので、接合する。平坦面には砥面を持ち、砥面には再使用による段差はない。砥石を適当な大きさに割り、長軸両端に簡単な打ち欠きにより挟みを入れたものである。図示はできなかったが、この石鏃出土地点周辺に、頁岩製の同形態の石鏃がややまとまって出土している。67の石鏃は火熱を受けたためか、スズが広範囲に付着している。

(田中)

H-572 (図48～50, 図版23・24・92・107・131)

位置: 48-34, 49-34; 標高45.52～45.88mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模: $(4.54) / (4.20) \times (3.92) / (3.73) \times 0.38\text{m}$ 床面積: 11.61 m^2

平面形: 長円形 長軸方向: N-45°-W

確認・調査・土層: H-530の南壁面で覆土状の土の落ち込みが見られたため、土層観察用の土手を設定し、周辺を精査し、遺構検出作業を行う。ほぼV層直上付近で、灰褐色土、茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、調査を行う。覆土中で土器がまとまって出土したことから、写真撮影、実測、取り上げ作業を繰り返して調査を進め、V層中で非常に堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ一層である。混合土状の茶褐色土(土層図2・3)である。ただ上層は掘り上げ土と思われる灰褐色土が薄く堆積しており(土層図1)、また床面には茶褐色土と黄色土がまじり合った汚れた土が薄く堆積していた(土層図6・8・9)。

重複関係: 本住居跡は、H-530・597と重複しており、H-530より古く、H-597より新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: 南西側はV層上、東側はV層を深く掘り込んで構築されている。北側はきわめて堅く、凹凸がはなはだしい。南側はやや軟質で、低くなっている。北側は、H-597の床面をそのまま利用していたものであろう。

壁: 北東側の立ち上がりは急傾斜で、他はゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が12cm前後、南西壁が10cm前後、南東壁が12～22cm、北東壁が25～35cmである。

炉跡: 本住居跡に伴う焼土などは検出されていない。

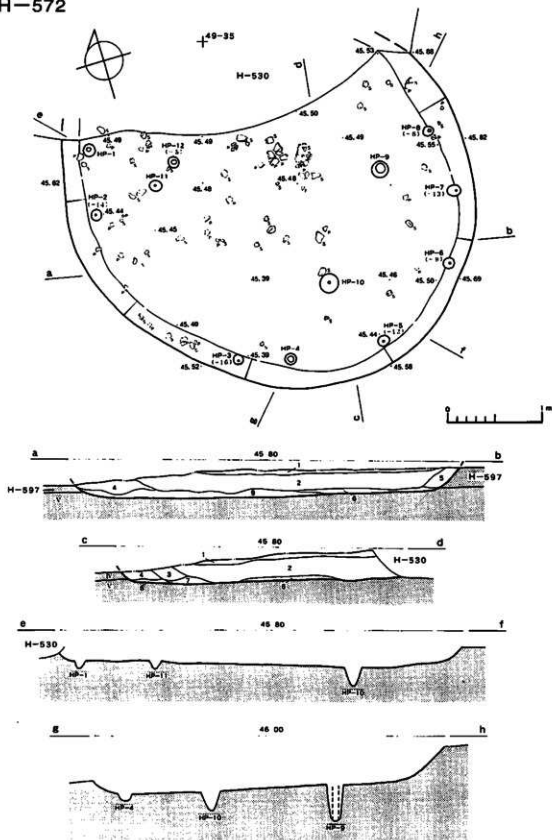
付属ピット: 柱穴状小ピットは12個検出されている。HP-1～8は壁際をめぐるもので、細く、杭状で直立している。HP-9～11は主柱穴と思われる。直立しており、4本柱が想定される。

遺物出土状況: 出土遺物総数は604点である。この内訳は土器468点、石器134点、土器片鍾2点である。遺物は覆土中で多く出土しており、とくに覆土下層では土器が4カ所でまとまって出土しており、その周辺でも土器片などが集中的に出土している。床面付近でI群D1類土器が6点、土器片鍾が1点、石鍾4点などが出土している。土器はすべてI群D1類土器である。石器では石錐、両面調整石器、石匙、たたき石、すり石、砥石、石鍾(38点)などが出土している。(和泉田)

土器: 1・2・4～11はI群D1類a種で、1・2は復元個体。4～11は口縁部破片である。3・12はD1類b種で、3は復元個体。12は口縁部破片である。D1類の口縁部形態は波状口縁(1～3・5～7・9・10)と平縁(4・8・11・12)があり、口唇部断面形はすべて切り出し状である。器面調整はナデ(1・4～6・8～10・12)、すり消し条痕(1～3・7・11)、条痕(2)がある。文様は沈線文(9・10)、鋸歯状沈線文(4・7・9・12)、貝線文(1～6・9・12)、楕円刺突(10)、沈線上刺突(1)、押引刺突(8)、列点となるもの(10)、櫛目状腹縁文(8)、連続移動文(12)、連続腹縁文(1・8・11)、連続波状文(2)、押引文(3)、引摺り背圧痕(3)があり、爪形文では爪瘤文(11)がある。文様構成は、1・5・9・10は三角形(鋸歯状)、7は羽状となる。D1類a種に鋸歯状の文様構成のものが多く、2は波頂部間を数条の貝線文による弧線でつなぎ、これを3段重ねて魚鱗状の文様を構成する。胴部外面の連続波状文は規則的に多段に施される。3の外面には不規則な加圧移動による押引と押引波状が多段に整然と施される。9はG1区のH-529-7・8と文様の構成が類似する。

(土器出土位置関係) 平面分布では中央部に遺物密度が高くなる(関係図-16)。垂直分布は覆土下部

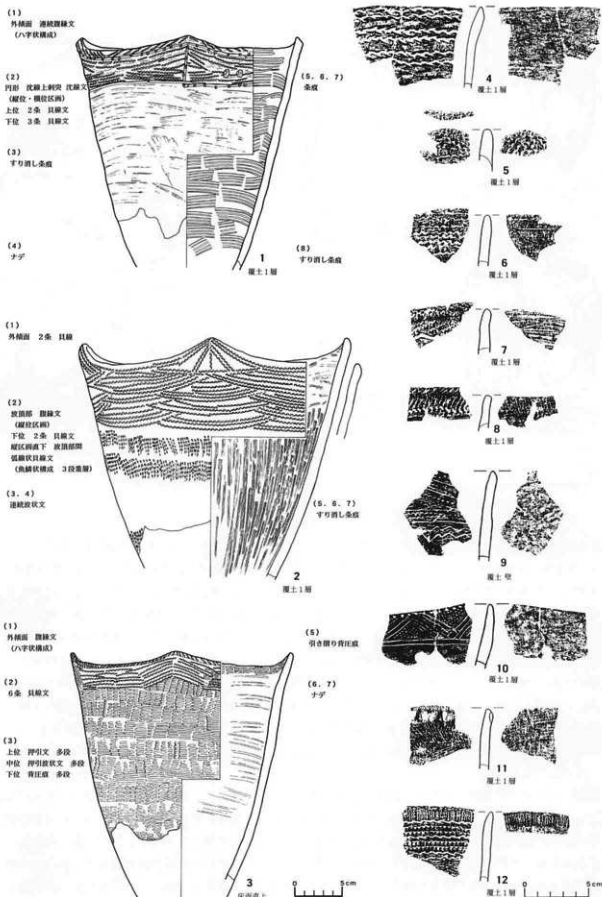
H-572



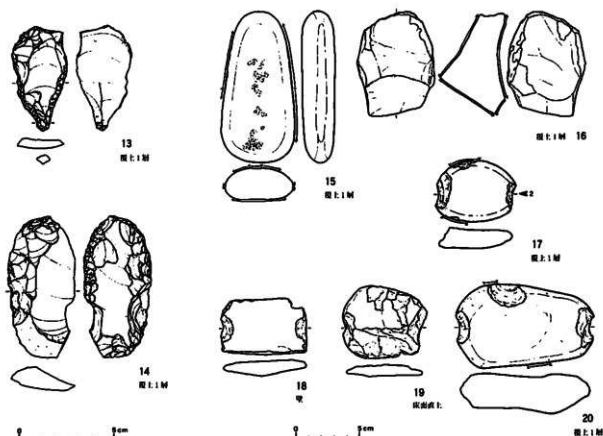
H-572の土層

- | | | |
|----------|----------------------|-----------------|
| 1. 灰褐色土 | 4. 明褐色土 (Ⅲ > V) | 7. 黄褐色土 (3 + V) |
| 2. 茶褐色土 | 5. 暗褐色土 (Ⅲ > V) | 8. 褐色土 |
| 3. 明茶褐色土 | 6. 茶褐色土 + 黄色ローム (砂質) | 9. 暗灰黄色土 |

図Ⅲ-48 H-572実測図



図Ⅲ-49 H-572出土土器



図Ⅲ-50 H-572出土石器

から上部まで遺物が出土することが解る。7・9・11は覆土下部から出土する（関係図-17）。これらはD1類の古手と考えらる。2・3・6は壁穴内で接合する（関係図-18）。2・3はD1類の新手、6は古手である。D1類の古手と新手が混在する。隣接する遺構間で接合するものに1・12がある（関係図-18）。1は覆土1層（上部）から出土し、H-530（G3区）の覆土1層、48-34区のⅢ層・揚げ土と接合する。12は覆土1層（上部）から出土し、H-530覆土上層のⅢ層と接合する。遺構北側との接合関係を示す。接合が広範に及ぶものとして4・10があり（関係図-19）、4は覆土1層の下部から出土し、H-562（G4区）の覆土3層、H-530の覆土4層、50-35区のⅠ層と接合する。10は覆土1層（上部）から出土し、H-562の覆土1層、H-530の覆土4層、48-32区のⅠ層と接合する（関係図-20）。これらはH-530-16・20、H-597-5、H-562-10と同様の動きを示し、全体としては隣接するH-530・597と接合するだけでなく、H-562との接合関係を持つものが多いことが指摘できる。

（富永）

石器：13は硬質頁岩製の石錐で、素材剥片打点側の身が厚い部分に先端部を作出したもの。磨減はあまり顕著でない。14は硬質頁岩製のスクレイパーで、右面左側縁上半を刃部とするもの。右側縁の調整は粗く、素材剥片の厚みを減ずるものとみられる。15は閃緑岩製のすり石で、両平坦面、両側縁にすり面を持つもの。敲打痕は凸面平坦面にのみ見られる。16は細粒の凝灰岩製の砥石で、あらゆる面が使用され、合計10面の砥面を数える。17-20は石錐で、石質は順に閃緑岩、砂岩、片岩、流紋岩である。図示した石錐は振り部に敲打痕を持たないものが多いが、他に出土した石錐には敲打痕を有するものも多い。

（田中）

H-597 (図Ⅲ-51~53, 図版24・92・108・130)

位置: 48-34・35, 49-34・35; 標高45.51~46.02mの東から西へ傾斜する緩斜面上に位置する。

規模: 6.90/6.50×(5.65)/(5.30)×0.32m 床面積: (31.11)m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-68°-W

確認・調査・土層: H-530・572の東・西壁で覆土状の土の落ち込みを確認した。45-35区周辺のI層を除去し、Ⅲ層を掘り下げつつ遺構検出作業を行う。ほぼⅣ層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定して、覆土を掘り下げる。覆土中でH-530の東側では遺物が多く出土したため、写真撮影などをくり返し、遺物を取り上げつつ掘り下げる。Ⅴ層中で軽石まじりの暗灰黄色土の堅い面が検出され、柱穴状小ピットも検出されたためこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は茶褐色系の混合土がほぼ床面まで堆積している(土層図1~4)。ただ上層は明るい茶褐色土(土層図1)、下層(床面直上)は軽石を混入する暗茶褐色土(土層図2~4)である。

重複関係: 本住居跡は、H-530・572と重複しており、これらより古い。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: Ⅴ層を深く掘り込んで構築されている。炉跡周辺は非常に堅く、他も堅い。やや東から西へ傾斜している。

壁: 西側の立ち上がりはゆるやか、東側は急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、西壁の北側が16~25cm、南側が6~15cm、東壁の北側が29~37cm、南側が8~23cmである。

炉跡: ほぼ床面中央部で0.95×0.70m、深さ0.05mほどの浅い掘り込みをもつ炉跡が検出された。これはH-530の調査中に検出したものであるが、位置的にみて本住居跡のものとした。炉跡の坑底、その周辺は非常に堅く、デコボコしている。北東、南西のコーナー付近に径10cm、深さ12~15cmの枕状の小ピットがある。

付属ピット: 柱穴状小ピットは31個検出されている。HP-1~13は壁面にあり、内傾している。HP-14~20は壁隙をめぐるもので直立している。HP-23~29は炉跡の周辺にあり直立し、深いものであり、主柱穴と思われる。HP-23・24・25(4本柱)、HP-26・27・28・29(4本柱)という位置関係が想定され、建て替えが行われたものと考えられる。HP-26・27・28・29は、深さが40cmほどである。

遺物出土状況: 出土遺物総数は1,280点である。この内訳は土器248点、石器1,037点、土器片錘1点である。遺物は東側残存部の覆土中で多く出土したものである。とくに床面直上付近で多く出土しており、剥片の集中部分が認められた。この剥片集中の下でHP-16が検出されており、この覆土中にも入り込んでいたことから、本住居跡が廃棄されたのち、投げ入れられたものであろう。床面付近からI群D1類土器が32点、すり石1点、石鋸1点、石錘19点などが出土している。土器は覆土1層でI群E類土器1点、HPからI群B類土器が1点出土した以外はすべてI群D1類土器である。石器では石鏃、両面調整石器、石匙、石斧、すり石、たたき石、砥石、石鋸、石錘(74点)などが出土している。(和泉田)

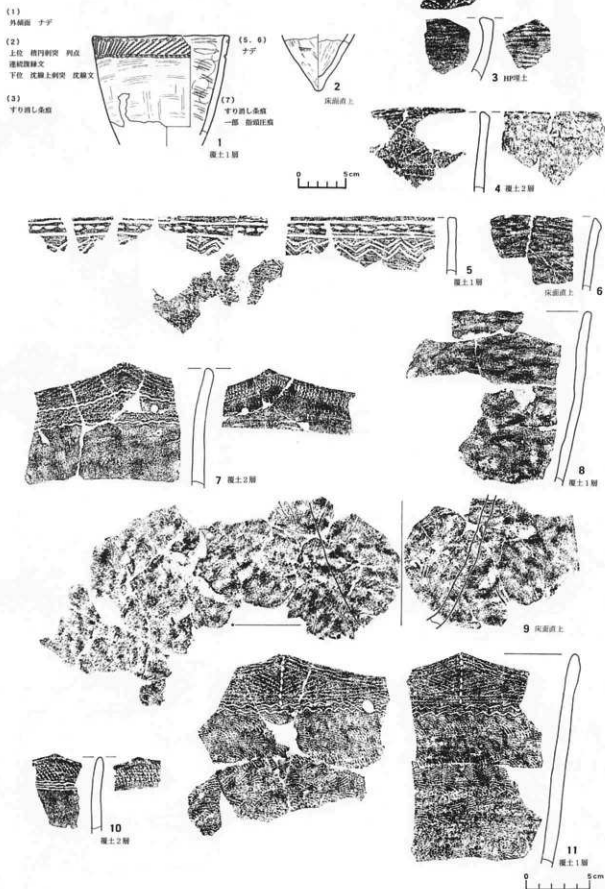
土器: 3はI群B類の波状口縁部で、口唇部断面形は角形、口唇部は内側に肥厚する。器面調整は外面がミガキ、内面がすり消し条痕である。1・2・4~9はD1類a種で、4~8は口縁部破片、2は乳房状尖底、9は底部近くの破片。10・11はD1類b種の口縁部破片である。

D1類の口縁部形態は波状口縁(7・10・11)と平縁(1・4~6・8)があり、口唇部断面形は角形(5)と切り出し状(1・3・4・6~8・10・11)がある。器面調整はナデ(1・2・4・6

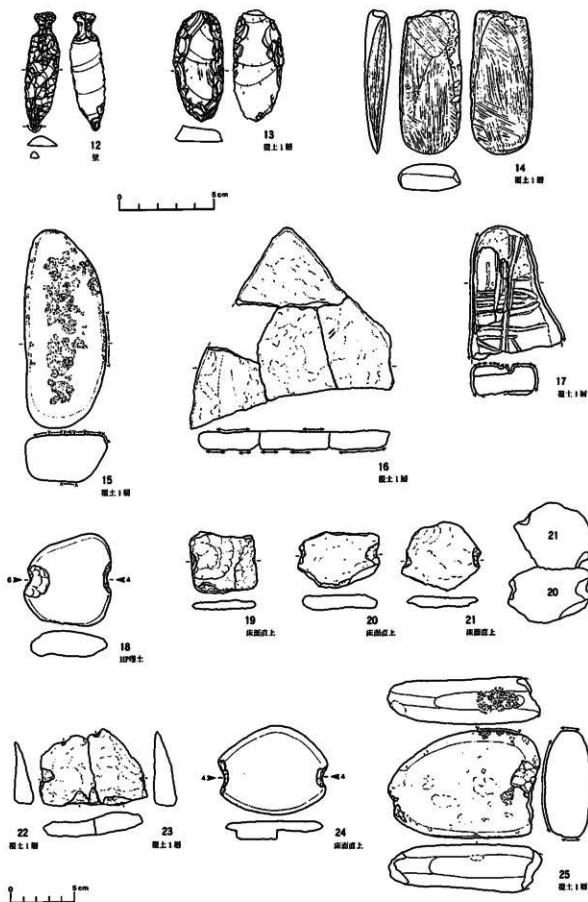
～9)、すり消し条痕(1・3・5・9)があり、文様は沈線文(1・5)、鋸歯状沈線文(5・7・10・11)、沈線上刺突(1)、貝線文(4・7・11)、栞門刺突(1・4・5・11)、列点となるもの(1・4・5・11)、櫛目状腹線文(3・5)、連続腹線文(1・4・5・11)、連続移動文(10)、連続波状文(7・10)がある。文様構成は、4は羽状、7は三角形(鋸歯状)、11は菱形(羽状)となる。11の外面の背圧痕文は規則的に多段に施される。

(土器出土位置関係) 平面分布では2遺構に分断される為には全容は明らかでない(関係図-16)。垂直分布では覆土下部から中部にかけて土器が多く出土する。2～4・10は下部から出土する。3はB類。2・4・10はD1類の古手である(関係図-17・18)。6・7・9はH-597の東側部分だけで接合関係が完結する(関係図-18)。8は隣接遺構と接合するもので、覆土1層の上部から出土し、H-530(G3区)の覆土3・2層と接合する(関係図-18)。広範に接合関係を持つものとして、5は覆土1層(上部)から出土し、H-530の覆土3・2層、H-572(G3区)の覆土1層、48-33区のⅢ層、48-34区の揚げ土と接合し、H-530-6・15と同様の南方方向への接合関係を示す(関係図-20)。1は覆土1層の下部から出土し、H-530の床面直上、覆土4・2層、H-544(G5区)の覆土3層、H-562(G4区)の覆土1層、覆土上層のⅢ層、49-35区のⅠ層と接合する。1は所屬遺構より高い位置のH-544と接合する(関係図-20)。11は覆土1層の下部から出土し、H-530の覆土4・1層、H-562の覆土3・2層と接合する。1・11、H-530-16・20、H-597-11、H-572-4・10はH-562と接合する共通点を持つことが指摘できる(関係図-20)。また掲載していないが他遺構と接合する例が1件ある。事例1[1060]は床面直上、覆土1層から出土し、H-530覆土上層のⅢ層、47-33、48-32・34・35区のⅢ層、48-34区の揚げ土、48-34・35区のⅠ層と接合する。(富永)

石器: 12は硬質頁岩製の石匙。つまみはT字形で、上端を鋭角的に調整されている。先端部は顕著に磨減し、石錐としてかなり使用されたものとみられる。13も硬質頁岩製で、左面右側縁に直線的な刃部を持つスクレイパー。右側縁に比べ、左側縁の調整は大きくて刃部の作出を意図したものと判断しなかった。14は蛇紋岩製の石斧で、よく研磨され製作時の痕跡は残していない。刃部は丸く、かなりの使用が考えられる。また、基部は整形が雑で、破損品の再調整かもしれない。15は閃緑岩製のすり石。すり面は図示した平坦面のみで、広範な敲打痕が目立つ。16は青灰色で細粒の凝灰岩製の砥石で、この堅穴出土の破片は岡右下の1点である。H-613(G5区)覆土1層出土の破片(左下)と堅穴南側の49-33区出土の破片(中央2点)が接合している。岡表面の砥面はかなり光沢があるのに対し、裏面はそれほどでもない。破片間に連続する砥面には段差がないものの、割られてからの個々の使用が考えられる。H-613出土の破片は割れ口の砥面に丸みを持つことや、上端の破片には明確な砥面はないことからそれが窺える。17も凝灰岩製の砥石で、石質は粗粒である。平坦面全体は水平な砥面で、幾本もの溝が加わるものである。溝の深いところでは6mmの深さがある。18-25は石錐で、石質は順に砂岩、凝灰岩、頁岩(20・21)、流紋岩(22・23)、閃緑岩、安山岩である。18は短軸に対向する挟りが作られており1類としたが、長軸、短軸の長さの差はわずかで意識的なものではなく、礫の形状に起因するものとする。19-23は割られた板状の礫に簡単な挟りを入れたもの。接合した20・21は残存した堅穴の東側床面直上で出土したもの。22・23は西側の覆土1層から出土したものである。両出土地点に石錐が集中する状況はみられず、それぞれ0.9m、1.6mの水平距離をもって出土している。24の裏面の割離は、礫に元々あった亀裂によるものである。25はすり石としてかなり使用されたもので、両端に割離痕を伴う挟りが見られることから石錐とした。(田中)



図Ⅲ-52 H-597出土土器



圖Ⅲ-53 H-597出土石器

(4) G4区

この地区はG地区南西側、平成7年度D地区に向かって開口するように配列する竪穴群の東部分を構成する。H-525・527・562・563・583・611・622・624・627・629の12軒がある。重複関係は図Ⅲ-54のとおりである。すべての竪穴は何らかの形で重複するため、竪穴個々の全体像を把握できるものは少ない。H-526・563などは道路（市道中野4号線）脇の側溝に竪穴の一部が壊され、道路下で確認できた部分も大半が削平されており、床面付近がわずかに残る程度であった。

この地区の東側にあるH-563・583・623が隅丸形状の平面形を呈するほかは、平面形が楕円形を呈するものが大半である。また、炉跡が確認できた竪穴は、H-527・562・563・583の4軒に止まる。炉跡はすべて掘り込み炉で、H-562・563・583では竪穴中央から壁際に寄ってつくられている。ただし、その方向に統一性はない。H-562では覆土上部から床面まで多くの遺物が出土した。土器片だけでも3,500点を超え、集中廃棄の剥片を含めると総点数は21,000点を超えるものとなり、これまでの調査の中でも突出した数字である。

この地区では土坑1基（P-371）が検出され、H-629がこの土坑を壊してつくられている状況が確認できた。（田中）

H-525（図Ⅲ-54、図版25・26）

位置：49-33・34，50-33・34；標高45.40～45.64mの緩斜面上に位置している。

規模：-/-×3.57/3.20×0.27m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：試掘溝とH-526の壁面で、覆土状の土と立ち上がりを確認した。土層観察用の土手を設定し、周辺の遺物包含層を少しづつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。Ⅳ層直上付近で、Ⅲ>Ⅴ、Ⅲ>Ⅴの落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、床面、壁の検出作業を行う。試掘溝、H-526の壁面で確認した床面まで掘り下げ、柱穴状小ピットや壁の立ち上りを検出した。掘り込み面はⅢ層中である。土層はほぼ3層に分けられる。覆土1層はⅢ>Ⅴ（土層図1）で、壁際にⅢ>Ⅴがみられる。覆土2層は軽石を混入する黄色ロームと褐色土の混合土（土層図3・4）である。覆土3層は床面直上にある土で黄茶色系の汚れた土で、やや厚く堆積している（土層図5・6）。

重複関係：本住居跡は、H-526・611・627と重複しており、H-526より古く、H-611・627より新しい。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を少し掘り込んで構築されており、北から南へやや傾斜している。ほぼ平坦で、堅い。

壁：立ち上がりは緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は北壁が15cm、西壁が13～18cm、東壁が20～26cmである。

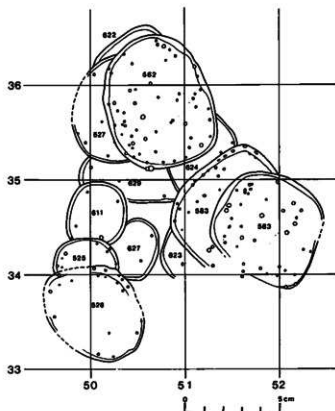
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは9個検出されている。HP-1～5は壁側にあり、浅いが直立している。HP-6～9は壁面にあり、内傾している。

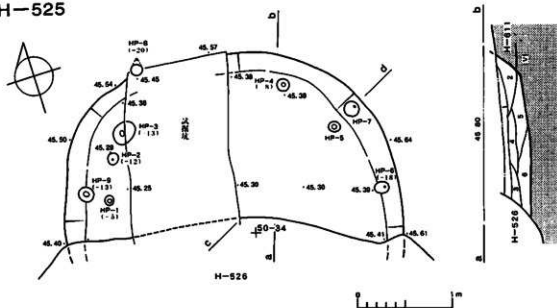
遺物出土状況：遺物は覆土中でI群D1類土器4点、剥片・曜各1点が出土しているだけである。

（和泉田）

[G4区]



H-525



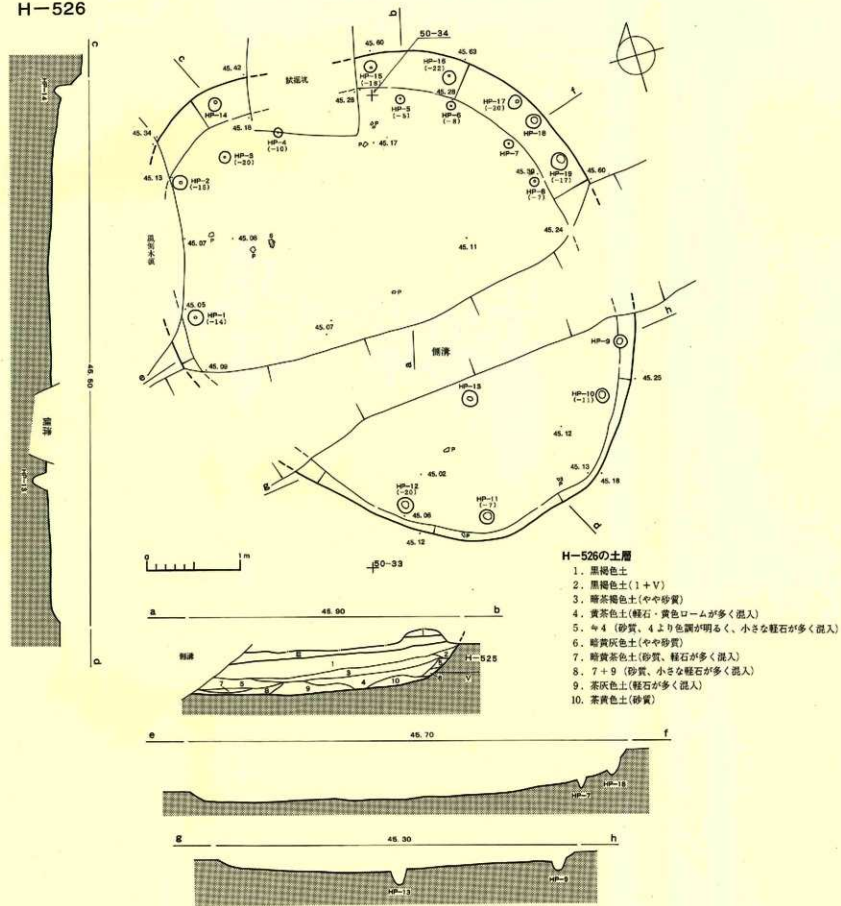
c 45.80 d H-525の土層



1. III > V
2. III > V (かたい)
3. 黄褐色土(砂質、軽石が少量混入。黄色ローム>褐色土)
4. 暗黄褐色土(ややかたい。黄色ローム+褐色土)
5. 暗茶灰色土(やや粘質)
6. 褐黄色土(砂質、軽石が多く混入。黄色ローム>褐色土)

図III-54 G4区竪穴住居跡位置図とH-525実測図

H-526



図III-55 H-526実測図

H-526 (図Ⅲ-55~57, 図版25・26・92・108・131)

位置: 49-33・34, 50-33・34; 標高45.34~45.61mの緩斜面上に位置している。南半分は道路によって床面直上付近まで削平されていた。

規模: $5.76/5.30 \times (4.60)/3.85 \times 0.42\text{m}$ 床面積: (16.74) m^2

平面形: 楕円形 長軸方向: N-25°-W

確認・調査・土層: 側溝と試掘溝の壁面で覆土、壁面、壁の立ち上がりを確認した。土層確認用の土手を設定し、遺物包含層を掘り下げる。Ⅲ層中で、黒褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、床面、壁の立ち上がりを検出し、柱穴状小ピットも検出した。掘り込み面はⅢ層中である。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は黒褐色土(土層図1)で、約20cmほどの厚みがみられる。覆土2層は茶褐色系の土(土層図2・3)である。覆土3層は床面上に厚く堆積する土で、砂質で軽石を含む暗黄茶色系の土(土層図4・5・7~10)である。

重複関係: 本住居跡は、H-525と重複しており、これより新しい。

時期: 覆土と周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。北東から南西へ緩やかに傾斜している。皿状で、やや軟質である。

壁: 立ち上がりは緩やかな傾斜である。北半分の検出面からの壁高は、ほぼ23~33cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

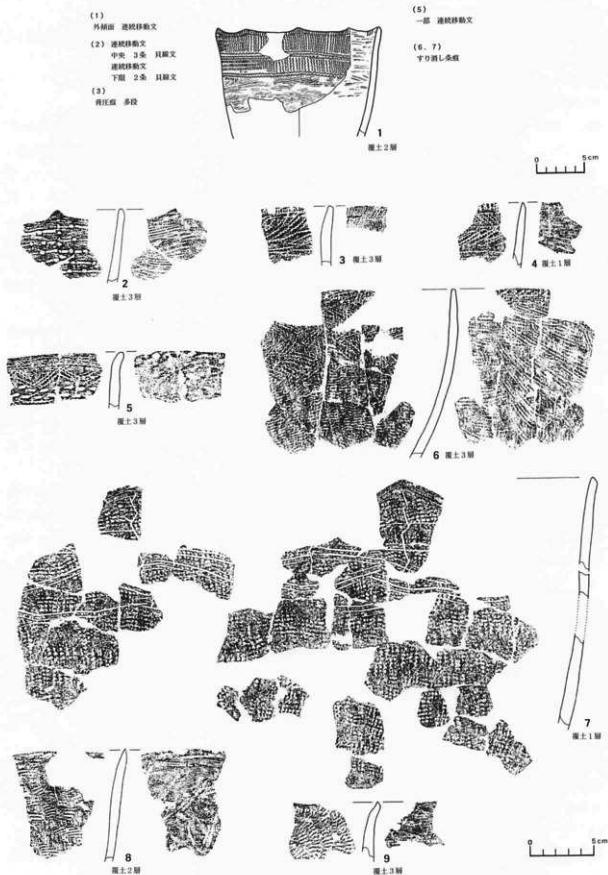
付属ピット: 柱穴状小ピットは19個検出されている。HP-1~12は壁際をめぐるもので、浅いがほぼ直立している。HP-14~19は壁面にあり、杭状で、内傾している。HP-13は直立しており、主柱穴の一つと思われ、2本柱が想定される。

遺物出土状況: 出土遺物総数は75点である。この内訳は土器50点、石器等25点である。床面直上からI群D1類土器が3点、I群E類土器が2点出土している以外はすべて覆土中からの出土である。覆土中の土器は2・3層でI群D2類土器が7点出土しているほか、すべてI群D1類土器である。石器はすり石、砥石、石錘などが出土している。(和泉出)

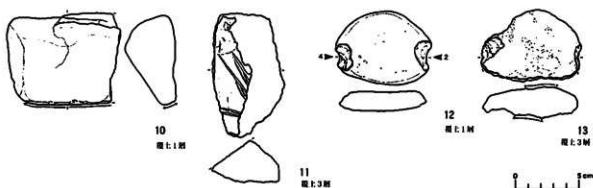
土器: 2~5はI群D1類a種の口縁部破片。1・6・7はD1類b種で、1は復元個体。6・7は口縁部破片である。8・9はD2類で外面を引摺り背圧痕で調整する。9は口唇部が外反する。

D1類の口縁部形態は、波状口縁(1・2・7・9)と平縁(3~6・8)があり、口唇部断面形は丸形(2)と切り出し状(1・3~9)がある。器面調整はナデの他に、すり消し条痕(1)がある。文様は沈線文(7)、鋸歯状沈線文(7)、貝線文(1・4・5)、栂刺突(2・5)、列点となるもの(2・5)、沈線上刺突(2)、連続腹縁文(4・6)、連続移動文(1・3)がある。4・6は羽状、5は鋸歯状、7は菱形の文様構成である。1・6は外面に規則的な多段の背圧痕。7は押引波状文が施される。

(土器出土位置関係) 平面分布では堅穴は側溝により分断され全容は不明であるが、垂直分布では南北の立面の状況から北から南へ向かって低くなる斜めの堆積状況が解る(関係図-29)。覆土から出土するまとまりは、1はD1類の新品で、H-559(G1区)覆土上層のⅢ層と47-31、48-32、49-34、50-37区のⅢ層、49-33・37、50-37区のⅠ層と接合する(関係図-30)。その他の2~9は、D1類からD2類までの長い時間幅がある。D2類以降の時期に上砂とともに纏まって廃棄された可能性がある。他遺構と接合関係のあるものでは(関係図-30)、2は覆土3層(上部)から出土し、H-563(G4区)覆土上層のⅢ層、51-33区のⅢ層と接合し東側との接合関係を示している。7は覆土



図Ⅲ-56 H-526出土土器



図Ⅲ-57 H-526出土石器

1（上部）から出土し、H-559覆土上層のⅢ層、48-32・33・35、51-32区のⅠ層と接合する。H-523-1は西方向との接合関係を、5～7は北西地域との接合関係を示すものである。（富永）

石器：10は閃緑岩製のすり石。素材礫の右側は欠損しているが、破断部のすり面には丸みがあり、この状態で使用が考えられる。火熱を被ったせいか、礫表面に亀裂が認められる。11は凝灰岩製の砥石で、水平な砥面に細く浅い直線状の溝を有するもの。2類とした。12は閃緑岩製の石錘。挟り部両端に敲打痕が認められる。13は凝灰岩製の石錘。両平坦面及び左上縁に敲打痕があり、破損品の再利用とみられる。（田中）

H-527（図Ⅲ-58～61、図版27・109・134）

位置：49-35・36、50-35・36；標高45.94～46.26mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-562の西壁で覆土状の土の落ち込みを発見した。また周辺を精査し、V層直上付近で、暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げる。V層中で堅い面を検出し、また柱穴状小ピット、炉跡も検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は茶褐色系の土が床面直上まで堆積している。上層は明るい色調（明茶褐色土）のもの（土層図1）、下層は暗茶褐色土（土層図3・4）で、軽石、黄色ロームを少量混入する混合土である。床面直上には暗茶褐色土と黄色ロームが混合する汚れた土（土層図8）が薄く堆積していた。

本住居跡はH-562に大きく壊されているが、H-562床面出土の小ピットなどを含めてその配列などを検討すると、5.80×5.00m、深さ30cm、長軸方向N-55°-Eの隅丸長方形のものが想定される。4本柱で、浅い掘り込みを持つ炉跡を有し、炉跡の四隅には小ピットが見られる。そして炉の周辺はややこぼこして高くなり、非常に堅い。H-408・583のものと酷似している。

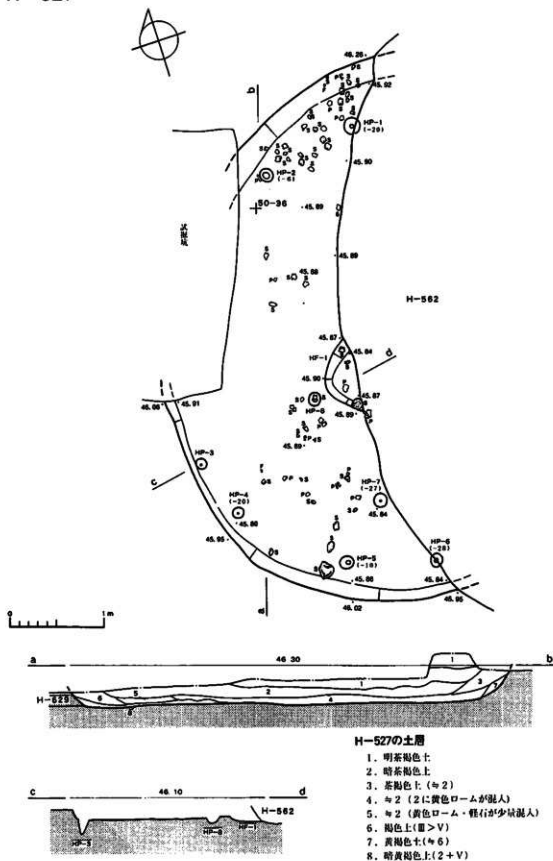
重複関係：本住居跡は、H-562・622・629と重複しており、H-562より古く、他より新しい。

時期：覆土と床面出土の土器などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。H-562の床面とほぼ同一レベルである。

壁：立ち上がりは、北壁が急傾斜、南西壁は緩やかである。検出面からの壁高は、北壁が24～36cm、

H-527



南西壁が8~16cmである。

炉跡：床面中央付近で半円状の暗茶褐色土の落ち込みがあり、周辺が非常に堅くなっているのが確認された。この落ち込みの覆土中、坑底付近で焼土などは検出されていないが、他の掘り込みのある炉跡と同じような検出状況であることから考え、浅い掘り込みを持つ炉跡であろう。東側はH-562に切られており、全体は不明である。

付属ビット：柱穴状小ビットは8個検出されている。HP-1~6は壁際をめぐるもので、直立している。HP-7は主柱穴と思われ、またHP-8は炉跡に伴う小ビットと考えられる。

遺物出土状況：出土遺物総数は843点である。この内訳は土器385点、石器等458点である。遺物は覆土中（土層図2）、床面直上付近で多く出土している。とくに礫石器が多く、北壁付近では流れ込み状にかたまって出土している。また炉跡直上でI群D1類土器を利用した土器片鏟が1点出土している。土器は覆土1層でI群D2類土器が1点出土しているが、他はI群D1類土器で、床面付近からは29点出土している。石器では石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘（67点）などが出土している。（和泉田）

土器：1~6はI群D1類a種の口縁部破片、7・8はD1類b種の口縁部破片、9はD1類a種の土器片鏟である。10はD1類a種の尖底部片で胴部との接合部位が内面上方、外面下方に成形される。

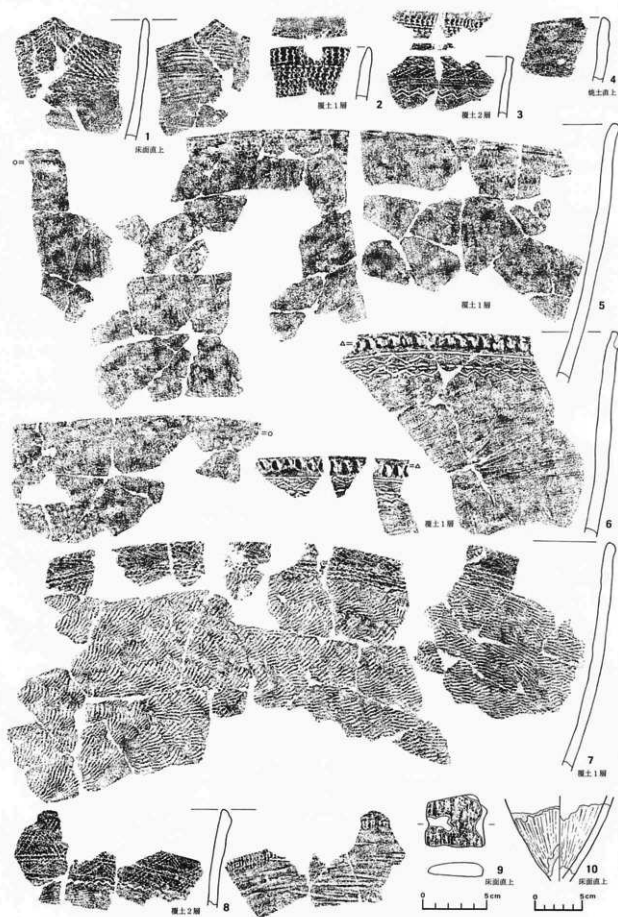
D1類の口縁部形態は液状口縁（1・4・8）と、平縁（2・3・5~7）があり、口唇部断面形はすべて切り出し状である。器面調整はナデ（2・5・9・10）、すり消し条痕（1・6~8）がある。文様は沈線文（6）、鋸歯状沈線文（3・6・8）、貝線文（3・7・8）、楕円刺突（2・3・6）、沈線上刺突（1・2）、列点となるもの（3・6）、櫛目状腹線文（7）、連続腹線文（1・2・3・7）、連続移動文（8）、連続波状文（6）、押引波状文（3）、爪痕文（6）がある。1・8は鋸歯状、3・7は羽状の文様を構成する。

（土器出土位置関係）平面分布は他遺構に分散され全容は不明である。垂直分布では覆土の下部から上部まで土器は出土するが下部に密度が高い（関係図-21）。2・5~7は覆土上部から出土する（関係図-23）。2はH-559（G1区）覆土上層のⅢ層、50-35区のⅢ層と接合する（関係図-22・27）。6はH-562（G4区）の覆土3層、H-563（G4区）の覆土3層・覆土上層のⅢ層と接合する（関係図-24）。3・8は覆土の中部で出土するD1類の新手である（関係図-22）。8はH-607（G2区）の覆土1層、47-35区のⅢ層、47-31、49-35区のⅠ層と接合する。このほか他遺構と関係するものにはH-530-20、H-544-18がある。H-583-1はD1類の古手で覆土下部から出土する。他にも下部では南側付近で1・4・9・10などD1類の古手が出土している。その他に掲載されないが他遺構と接合する例が2件ある。事例1の[898]は覆土1層から出土し、H-622（G4区）の覆土1層と接合する。事例2の[966]は壁際から出土し、H-562の覆土3層・壁際と接合する。

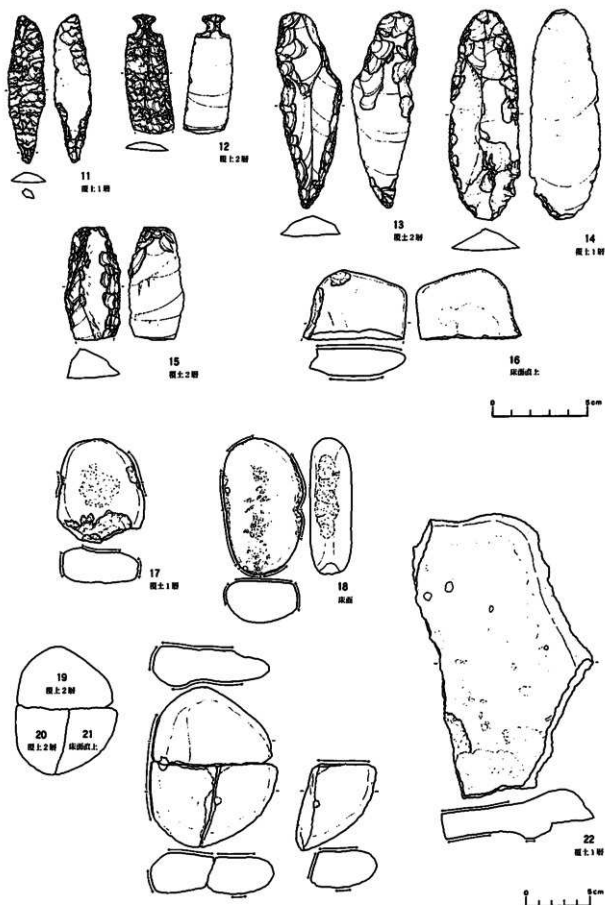
（富永）

石器：剥片石器（11~15）はすべて硬質頁岩製である。11は石錘で、石匙の欠損したつまみ部側を錐として再生したとみられる。機能部の磨減は顕著でないが、形態から判断した。12・13は石匙。12は全体的に調整は丁寧で、つまみ部の上端は鋭角となり、典型的なT字形を呈する。13は周辺加工で、つまみ部が長方形を呈するもの。同様の形態のものの中では厚身の部類にはいる。14・15はスクレイパー。15の刃部調整などを除く主だった剥離面は、石質によるのか、他のものと比べ風化の度合いが進んでいる。

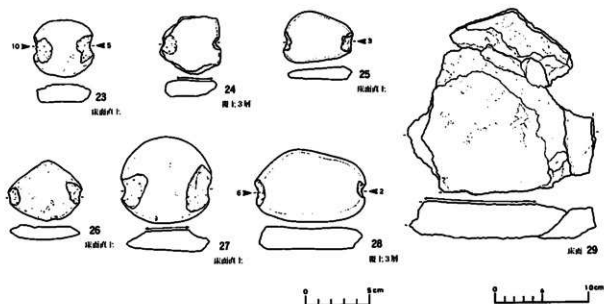
16は緑色泥岩製で、石斧片としたものである。平坦面の研磨、側縁部の剥離痕は認められるが、全体的に自然礫そのままといった状態で、完成品となったかには疑問が残る。



図Ⅲ-59 H-527出土土器



図Ⅲ-60 H-527出土石器(1)。



図Ⅲ-61 H-527出土石器(2)

17・18は閃緑岩製で、17はたたき石、18はすり石である。ともに、側縁部には敲打による凹みがあり、敲打痕の中には浅い直線状のものも観察される。19～21は凝灰岩の円礫素材の砥石で、接合したもの。平坦面の砥面には段差があり、また21の破断面にも砥面を持つことから、破片それぞれで使用したものである。19・20は堅穴南西側の覆土2層から、21は北側の床面直上から、3.3mほどの水平距離をもって出土している。22も凝灰岩製の大型の砥石。図表裏両面に砥面を持つ。裏面の大きな段差は、砥面再生のための剥離により生じたものと考えられる。23～28は2類の石錘。23・26は流紋岩製、24は凝灰岩製、ほかは閃緑岩製である。24は礫破片の砥石に簡単な挟りをつけたものである。23・25・28の挟り部には敲打痕が認められる。また、図示しなかったものの中には頁岩製の板状礫を素材に、長軸両端に簡単な打ち欠きによる挟りをつけたものもある。29は安山岩製の石皿。堅穴南側の床面に散在して出土した破片が接合したもの。被熱のため、礫表面には亀裂が多く、細かく破砕し接合できない小破片を残す。

(田中)

H-562 (図Ⅲ-62～73、図版28・29・93～96・110・111・136～139)

位置：50-35・36、51-35・36；標高45.93～46.41mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上にある。

規模：7.04/6.75×5.62/5.29×0.43m 床面積：29.09㎡

平面形：卵形 長軸方向：N-6°-E

確認・調査・土層：50-36区周辺のⅠ層を除去したところ、覆土と掘り上げ土と思われる層が広がっており、内側にⅢ層が確認された。遺構が想定されたため土層観察用の土手を設定し、少しずつ掘り下げ、遺構の確認作業を行った。Ⅳ層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げる途中で、礫が面的に広がっている面があり、また北から西壁近くで多量の遺物が出土した。遺物出土状況の写真撮影、実測をし、遺物を取り上げつつ掘り下げ、Ⅴ層中で暗灰黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼⅣ層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ。土層図1)、覆土2層は汚れた黒茶色土(土層図2・3)で、この層中および上面付近で礫が多量に出土し、面的

な広がりが見られた。覆土3層は茶褐色系の混合土である(土層図4~7)。覆土4層は3層に黄色ロームが混じり合った土で、床面直上に堆積するものである(土層図8・9・11・12)。覆土3層と4層はほぼ同質の土である。

重複関係：本住居跡はH-527・622・624・629と重複しており、これより新しい。

時期：I群I1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：V層を深く掘り込んで構築されている。北から南へゆるやかに傾斜し、やや凹凸がある。堅い。壁：北~北東側の立ち上がりは急傾斜で、他はゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が42~48cm、西壁が22~28cm、南壁が14~25cm、東壁が26~39cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。ただ、床面中央部東側に1.02×1.00mのきわめて浅い方形の凹地が認められている。この凹地を囲むようにHP-45・46・47が検出されており、掘り込みのある炉跡の可能性もある。HP-55は0.7×0.4mの長円形状の浅い(深さ約6cmほど)皿状のものであるが坑底は焼けて赤くなっていた。

付属ピット：柱穴状小ピットは54個検出されている。HP-1~25は壁際をめぐるもので、直立している。小ピットの配列などから、HP-26~44は支柱穴と考えられる。HP-32・33・34・35(6本柱)、HP-26・31・27・28・29・30(6本柱)、HP-36・37・38・39・40・30・42(8本ないし10本柱)と、新旧ははっきりしないが建て替えが行われた模様である。ただ方形の浅い凹地を炉跡と想定すると、HP-35はこれを切っているのが、炉跡を使用した住居跡より新しい時期のものである。

遺物出土状況：出土遺物総数は21,731点である。この内訳は土器3,670点、石器等18,061点、土器片鉢3点である。遺物は覆土上のⅢ層、覆土中で多量に出土している。とくに覆土2層中およびその上面付近では際が面的な広がりをもって出土している。また北から西にかけての壁際で流れ込み状に遺物が多量に出土した。土器はまとまった出土状態を示すものも多い。南西壁寄りの覆土4層中で0.9×0.8mの円形状の範囲で、2~3cmの厚さで剥片が15,212点集中していた。この壁際の床面直上で一括して出土した土器片に挟まり同質の剥片が混入していたことから考えると、住居廃棄後、あまり時間がたたない時に、まとめて廃棄されたものと思われる。床面、床面直上、HPからI群I1類土器が167点、石鏝、石匙、たたき石、すり石、砥石、石鏝などが出土している。土器は覆土中でI群B類土器3点、I群I2類土器11点、I群E類土器2点出土しているが、他はすべてI群I1類土器である。石器では石鏝、石槍、石鏝、石匙、腕状石器、たたき石、すり石、石皿、石鏝(393点)などが出土している。

(和泉田)

土器：34・35はI群B類の口縁部付近の破片で、文様は3条の貝刻沈線文と円形刺突の沈線上刺突で文様の範囲を区画し、内部を連続腹線文で充填する。1~17・22~33・36~48はI1類a種で、1~17は復元個体。22~33は尖底部で、24・26・27は乳房状尖底、25・28・29・30・31は砲弾形尖底。22・23・33は底部が欠損する。29・31・33は接合部が内面上方、外面下方に成形される。36~48は口縁部破片である。18~21・49~55・56はI1類b種で、18~21は復元個体、49~56は口縁部破片である。57~59はI2類。57は波状口縁を呈し、口唇部断面形は先細りの丸形である。外面は曲線的に押し引文が、内面はナデで調整される。58・59は胴部破片で、外面は押し引波状で調整される。内面はナデ(58)、条痕(59)がある。60~62は土製品で、60はI1類a種の土器片鉢、61はI1類b種の土器片鉢、62は上面観が方形のミニチュア土器で、細い沈線文で鋸歯状に文様構成される。

I1類の口縁部形態は波状口縁(1~6・10~12・14・15・20・21・39・44・45・49・50・54・55)、小波状口縁(16)、平縁(7~9・13・17~19・37・38・40~43・46~48・56)があり、口唇部断面形は角形(5・43)、丸形(3・6・16・17・45~48)、切り出し状(2~4・7~15・18~21・36~

42・44・49～53) がある。

器面調整はナデ (1・3・5・7・9・11・13～23・33・38・40)、すり消し条痕 (1・4・6・8・10・14・16～20・21・25・27・31・32・36・38・40・42・43～45・48・56)、条痕 (4・8・10・17～20・26～28・37・46・48)、一部にケズリのみられるもの (14・21)、ミガキ (14) がある。

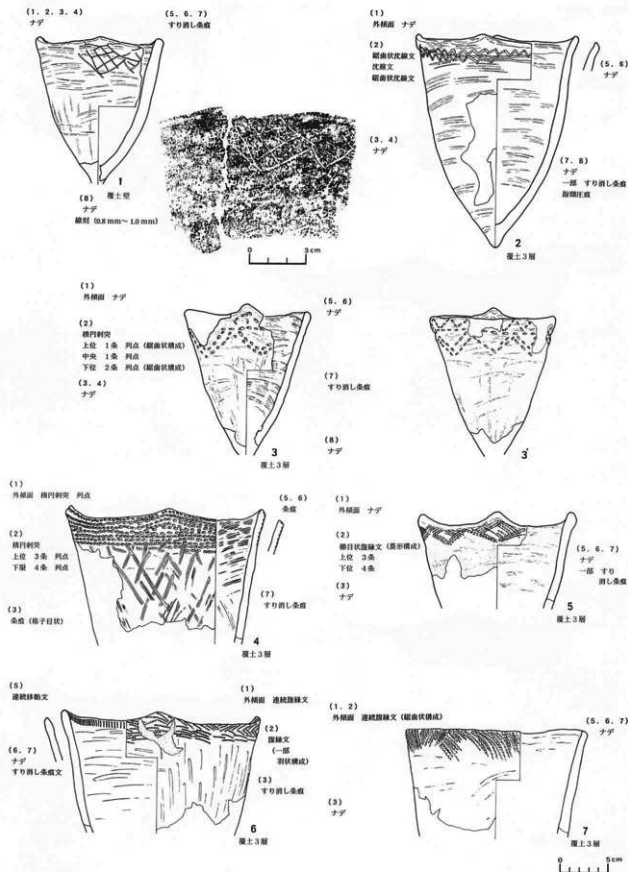
文様は沈線文 (2・11・36・43・45)、鋸歯状沈線文 (2・10・13・20・36・37・43・47・53～55)、貝線文 (8・9・10・12～14・18～21・38・39・42・44・45・52～54)、押引沈線文 (37・47)、楕円刺突 (3・4・11・12・20・36・37・44・45・47・54・55)、列点となるもの (3・4・11・12・14・20・36・37・44・45・47・54・55)、貝殻文では櫛目状腹線文 (5・9・11・20・40・41・44)、連続腹線文 (6～10・13・14・19・38・40・43・45・47・49・50・51・55)、連続移動文 (6・9・10・12・19・52・55)、連続波状文 (13・47・51・53)、押引文 (18・49・50・54)、押引波状文 (43)、引摺り背圧痕 (49)、条痕文 (4)、爪形文では爪痕文 (56)、爪痕 (8・10・12・51) がある。

文様構成は3・7・18・41・42・44・53は鋸歯状、4・10・12・20・45は三角形、4・9・11・38は格子目状と、5・14・44は菱形、6・39・44・51は羽状、43は羽状 (菱形) を呈す。D1類A種に鋸歯状の文様構成のものが多く、その他、11は波頂部直下にボタン状の粘土瘤を貼り付ける。14は形状が長方形の刺突の列点で文様帯の上下を横位区画する。46は平成7年度の復元個体 (Ⅲ報告、図Ⅳ-11-13) と接合する。D1類A種の尖底部が多い事が特徴的である。18～20は胴部外面に不規則な背圧痕が、21は変則的に多段の背圧痕が施される。50は胴部上半のみに、52・56は全面に背圧痕が施される。

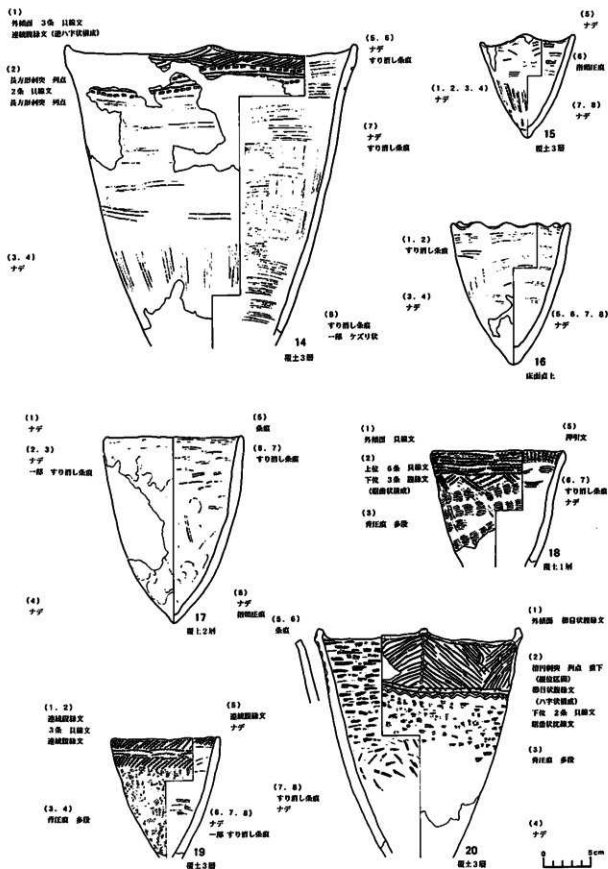
(土器出土位置関係) 平面分布では西側から中央にかけて密度が高く、東側に稀薄である。垂直分布は東西立面では典型的な凹レンズ状の堆積を示していることが解る。西側から中央下部にかけての堆積と、東側から中央中部にかけての堆積に分けられる。南北立面では北側に下部から上部までの厚い遺物の堆積が確認され、北側から遺物が流入した事が解る (関係図-21)。

覆土上部では1・8・31・45・47・49・60・61のD1類の古手と新手が出土する。また接合関係がある48・50・54は北側からの経路で流れ込む遺物を、18・26・44は西側からの接合関係を、17・26・28・33は東側から接合関係を示す (関係図-23)。他遺構と接合するものでは9～11・34・39・42・52・54 (関係図-23) がある。34はB類でH-534 (G2区) の覆土1層と接合する (関係図-27)。9は壁際から出土し、H-622 (G4区) の覆土1層と接合する。10の大部分の破片が壁際から出土し、H-536 (G2区) の覆土3層と接合する。39は覆土2層 (上部) から出土し、H-566 (G7区) の覆土1層と接合する。42は覆土2層 (上部) から出土し、H-529 (G1区) の覆土2層、H-607 (G2区) の覆土1層と接合する。11・39・42はD1類の古手である。52はI緑部破片の一部が覆土1層 (上部) から出土し、H-530 (G3区) 覆土上層のⅢ層と48-35区のⅢ層、48-35、50-35区のI層と接合する。54はD1類の新手で、覆土2層 (上部) から出土し、H-571 (G2区) の壁際、H-544 (G5区) の覆土1層、48-33区のⅢ層、47-33区のI層と接合する。標高の高い位置にあるH-544と接合している。他遺構から接合するものにH-544-9、H-572-10、H-598-4、H-597-1があり、これら覆土上部の遺物が同じ時期に廃棄されたことを示すものであろう。覆土上部では他地区に及ぶ広い接合関係がみられ、北側のH-544、北西のH-534周辺、西側のH-530周辺、南西のH-559周辺、東側のH-566とも接合する状況である。

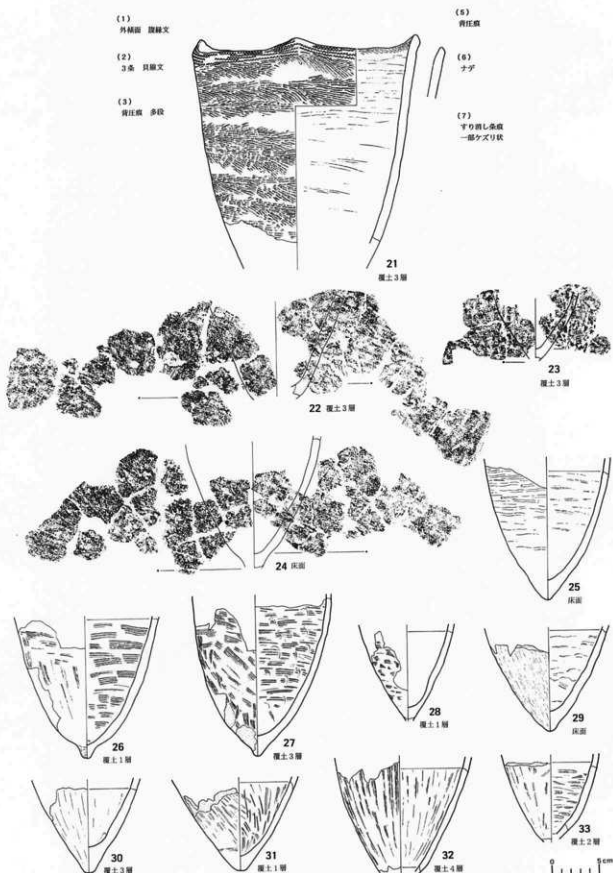
覆土中部では22・23・30・35・37・38・40・51・59の幅広い時期幅の土器が混在する (関係図-24)。遺構内で接合するものは4・7・13～15・20・21・27・43・55・62があり南北方向で接合する



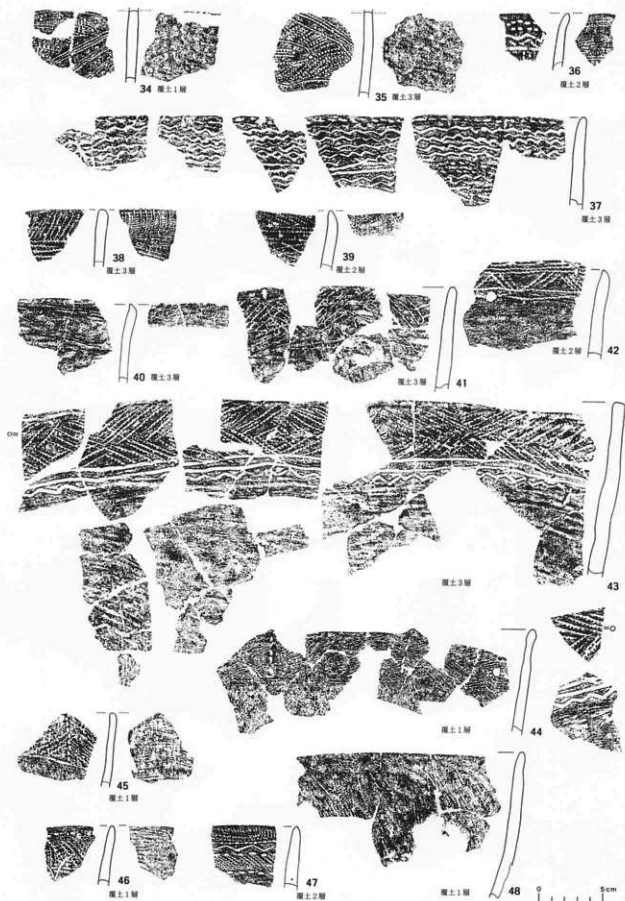
図Ⅲ-63 H-562出土土器(1)



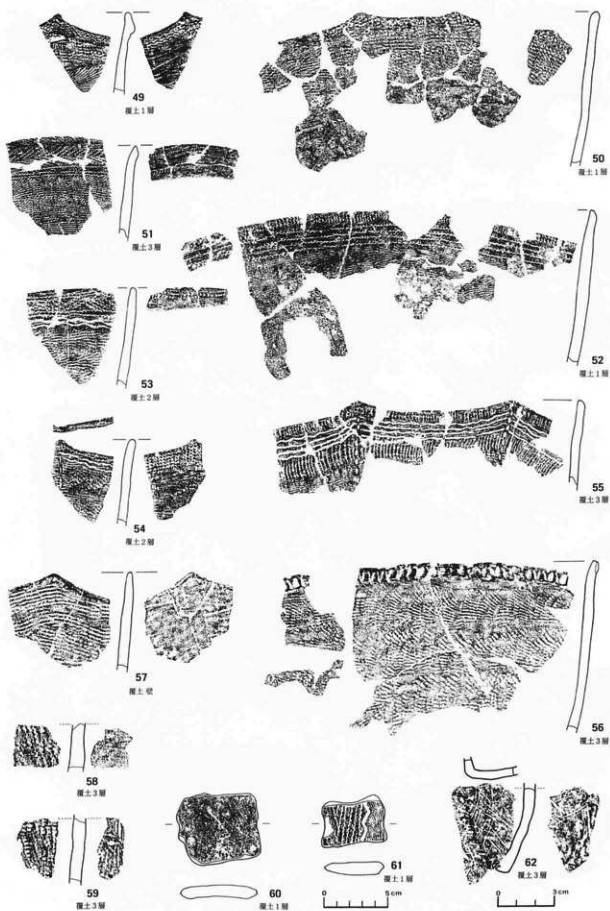
図Ⅲ-65 H-562出土土器(3)



図Ⅲ-66 H-562出土土器(4)



図III-67 H-562出土土器(5)



図Ⅲ-68 H-562出土土器(6)

ものが多い(関係図-25)。他遺構と接合するものは2・3・37・51がある(関係図-28)。2はD1類の古手で、覆土3・2・1層(中部)から出土し、北方向へ20mほど離れたH-561(G5区)の覆土2層と接合する。3は覆土3層(中部)から出土し、H-529の覆土2層と接合する。37は覆土3層(中部)から出土し、H-529の覆土1層と、48-33区のⅢ層、47-32区の揚げ土、48-32、49-32区のⅠ層と接合する。51はD1類の新手で覆土3層(中部)から出土し、H-530の覆土2層と接合する。3・37・51は南西の低い方向との接合関係を示す。56は北東方向の包含層との接合関係を示す(関係図-28)。56、H-597-11、H-629-1は北側の覆土下部と南側の覆土上部で接合する。H-527-6、H-629-4は西側の隣接遺構との接合関係を示す。また他遺構から接合するものにH-565-1、H-607-1、H-530-16、H-597-11、H-527-6、H-629-1・4があり、これら覆土中部の遺物が同じ時期に廃棄されたことを示すものであろう。覆土中部では他地区に及ぶ広い接合関係がみられ、北側のH-561、北西のH-607、西側のH-530、南西のH-529、東側のH-565とも接合し、覆土上層と類似した接合関係を示す。

覆土下部では(関係図-26)、北側付近で12・16・24・25・29・32・57が出土する。12はD1類の古手で、北側包含層と接合する。57はD2類である。下部の土器はD1類の各時期及びD2類までの破片を含み、堅穴の破棄された時期は比較的新しい頃といえることができる。

その他に掲載されないが他遺構と接合する例が5件ある。事例1の[158]は覆土4・2層から出土し、H-536の覆土2層と接合する。事例2の[279]は覆土1層から出土し、H-598(G2区)の覆土1層と接合する。事例3の[856]は覆土2層から出土し、H-602(G2区)の覆土1層、50-37区のⅢ層と接合する。事例4の[974]は覆土3・1層から出土し、H-530の覆土1層・覆土上層のⅢ層、48-32区のⅢ層・Ⅰ層と接合する。事例5の[1024]は覆土3・1層から出土し、H-534・H-606(G2区)の覆土2層、H-530覆土上層のⅢ層、47-31、48-37区のⅢ層、51-36区のⅠ層と接合する。

(富永)

石器：剥片石器(63-84)の石質は、71・76・83が黒曜石である以外、すべて硬質頁岩である。黒曜石は原産地分析で、71・76は赤井川産、83は豊泉産との推定結果が得られている(V章-3参照)。

63は左右非対称の石鏃で、素材剥片の剥離面を残している。64-66は石鏃。機能部の磨減は64・66が顕著で、65は幾分光沢がみられる程度である。67の石槍は、堅穴北東側の覆土中から出土した破片が接合したもの。ほぼ中央(断面図作成部位)で厚さが最大となる身厚のもので、調整は粗雑である。68-72は石匙。つまみ挟り部から刃部へなだらかに移行するものが多く、特に68-70は顕著で、刃部の再生を繰り返した最終の形態を示すものと考えられる。69に残る素材剥片の剥離面は他の剥片に比べ風化が著しく、時代的に古い剥片(旧石器か?)を利用した可能性が残るものである。73-82はスクレイパー。73-75は一個縁に直線的な刃部を持つもの(2a類)で、73・75の左面右側縁や74の右面右側縁の調整は、素材の厚みを減じることを主目的としたようであり、持ちやすくするためのものと考えられる。76・77は挟り状の刃部を持つもの(2c類)。78-81は両側縁に刃部を持つもの(2d類)。78は石匙同様の丁寧な調整であるが、図上端には素材剥片の打面の一部が残っており、つまみ部欠損の石匙とは考えられないものである。逆に81は緩やかに湾曲する素材で、下縁は槍状石器の刃部とみて良いものかもしれない。82は左側縁から下縁に連続した刃部を持つもの。84は石核である。このほかに図示していないが、剥片集中周辺の覆土3層出土の大型剥片とH-629(残存する堅穴のほぼ中央部)覆土1層出土の石核が接合している。

85・86は蛇紋岩製の石斧。ともに基部が欠損するもので、刃部端に明瞭な使用痕が認められる。85には擦り切り痕が残る。86の左面上部は窪み、素材の稜面が残る。この部分での最大厚は1cm程度で

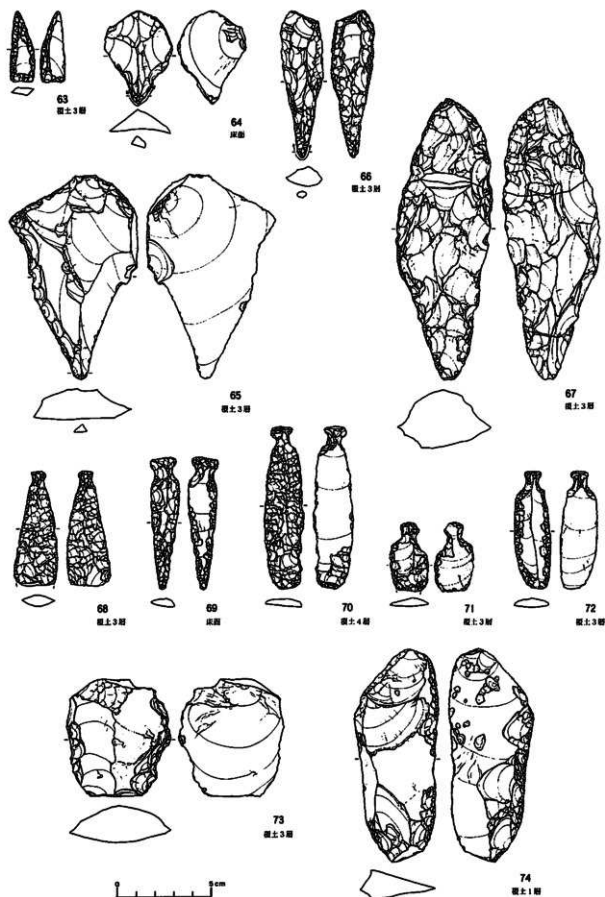
ある。

87～89は閃緑岩製の楕円形礫を素材とするたき石（2類）で、両側縁に敲打痕を有する。88は平坦面も使用されている。90～92は断面三角形の典型的なすり石（1類）。90・91は閃緑岩製、92は安山岩製である。90はほぼ礫全面を、敲打部、すり面として使用している。91・92のすり面にある剥離痕については、敲打によるものか不明。93～95は楕円形礫素材のすり石（2類）で、敲打部とすり面が複合するもの。93は泥岩製、94・95は閃緑岩製。93は石質やすり面の状況から、砥石としての使用も考えられる。94の右側縁には痕跡的にすり面が観察される。96～101は砥石で、98以降は溝を有するもの（2類）である。96は粒子の細かい灰色の凝灰岩製。砥面は肌理が細かく滑らかで、一部光沢感がある。97は硬質頁岩製で、平坦面にはっきりとした数条の擦痕が見られる。98～101は凝灰岩製。98・99は同一母材（細粒）のものとみられる。101は石錘としての使用も考えられるが、はっきりしない。102は凝灰岩製、103は頁岩製の石錘。103の機能部側面の磨耗は部分的である。

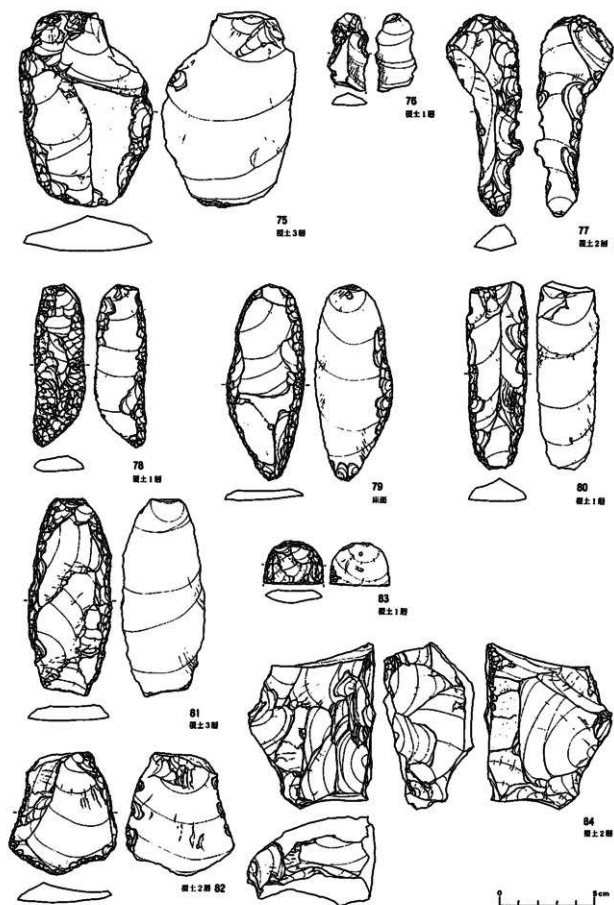
104～126は石錘。104は短軸に対向する袂りを持つもの（1類）で、破損品の再利用とみられる。123～126は短軸・長軸に袂りを持つもの（3類）、または長軸に袂りを持つもの（2類）である。石質は片岩製が105・114、流紋岩製106・111・116・121・122、凝灰岩製107・109・110・125、安山岩製115、砂岩製120、軽石製123で、ほかは閃緑岩製である。平坦面や上下縁に敲打痕・すり面を持つもの（107～122）、平坦面に砥面を持つもの（109～111）が見られ、ほかの器種として使用されたものが多い。また、袂り部に敲打痕があるもの（104・106～108・112・114・119・120・122・124・126）も多く、すべて円礫素材のものである。以下、石錘について特徴点を上げる。109の袂りの作は敲打によるだけでなく、縄の固定のためか平行する2本の条線がみられ、右側縁の裏面には削り取ったように条線が5・6カ所ある。110の平坦面には径3～4mmの小孔が垂直または斜めにいくつも穿たれている。深さは最大で10mmほど、貫通するものはない。目的は不明で、同じ材質（凝灰岩製）の礫石器には見られず、この1点のみである。113の右袂り部脇にある窪みは敲打によるものではなく、H-529出土の石錘（図Ⅲ-8-29）にみられる棒状のものの回転によるものである。また、113・118の袂り部は全体的に磨減しており、H-536出土の石錘（図Ⅲ-21-35）同様、礫表面と変化なく連続するものである。写真図版（201-5）でも掲載した。

127は安山岩製の石皿。128は泥岩製で、剥離痕を持つ礫である。石錘として利用しようとしたものかもしれない。下半は火熱のため焼けている。129は軽石製で、石製品としたもの。平坦面や側面に数多くの孔が穿たれ、一部砥面があることから、砥石として良いものかもしれない。孔は底径で5mmほど、深さは最大で30mmを超えるものがある。用途は不明であるが、孔壁には回転による条線が認められ、孔底に凸部が残る（図版201-1）ことから、管状のもの（材質不明）で穿たれたと考えられる。素材となる軽石は肉眼観察ではあるが、基盤層に包含される軽石とは異質で、黄色ロームの付着もみられない。選択的に遺跡に持ち込まれた可能性が高い。

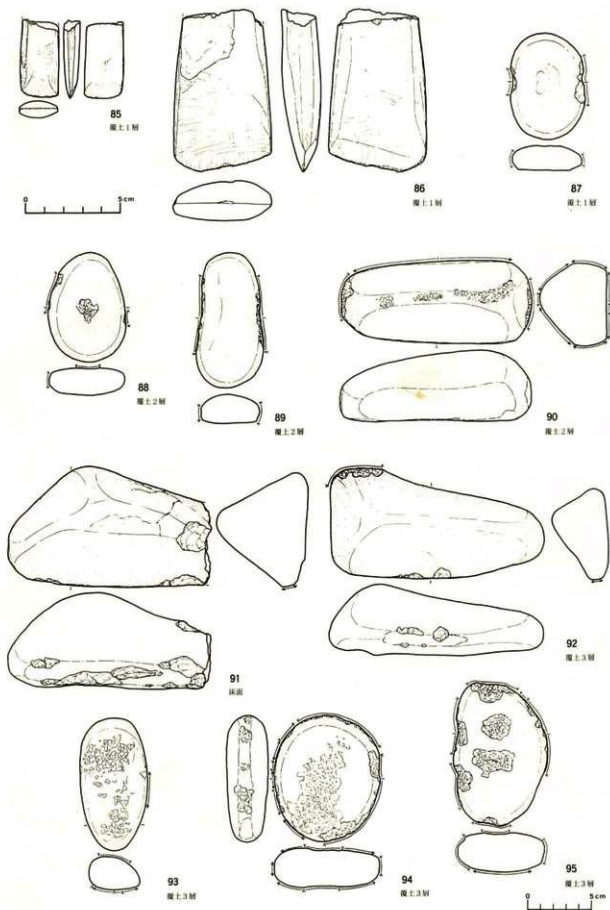
（田中）



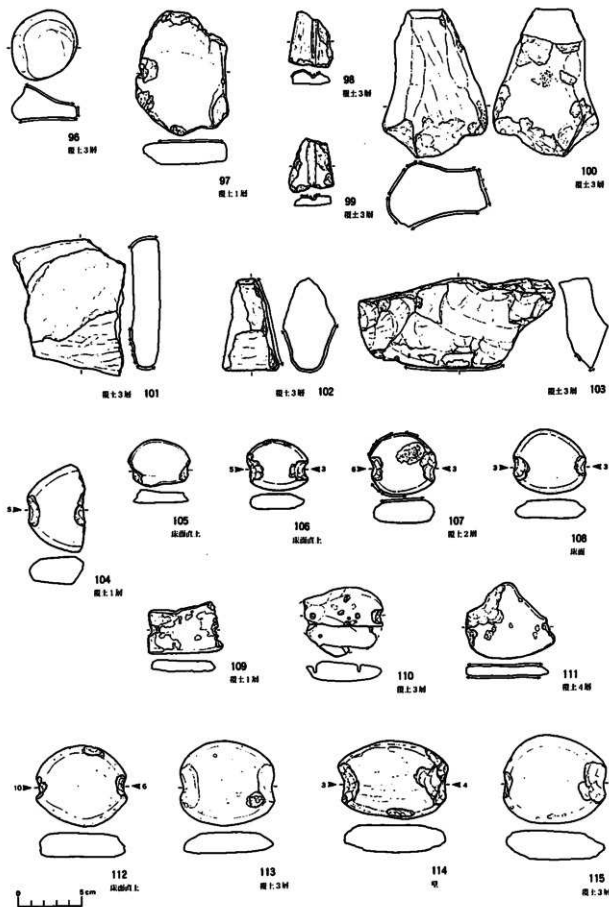
図III-69 H-562出土石器(1)



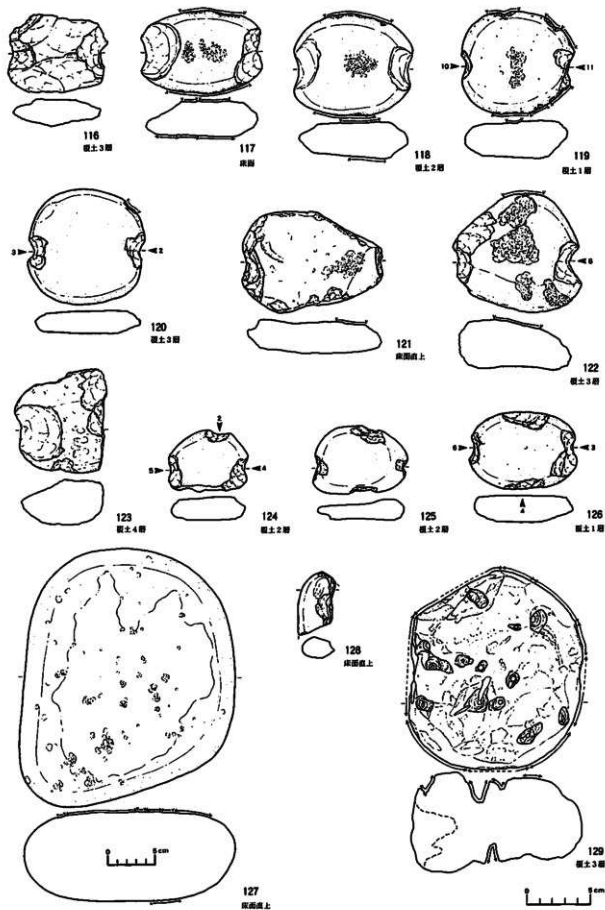
圖Ⅲ-70 H-562出土石器(2)



図III-71 H-562出土石器(3)



図Ⅲ-72 H-562出土石器(4)



図Ⅲ-73 H-562出土石器(5)

H-563 (図Ⅲ-74~76, 図版30・111・132)

位置: 51-33~35, 52-33~35; 標高45.80~46.12mのほぼ平坦地に位置している。南側は側溝、道路によってほとんど掘削、削平されている。

規模: (6.00)/(5.35)×(5.50)/(5.08)×0.50m 床面積: (24.20)m²

平面形: ほぼ隅丸長方形 長軸方向: N-42°-W

確認・調査・土層: 52-34区周辺のⅠ層を除去し、P.D.3、Ⅲ層の広がり確認された。遺構が想定されたことから土層観察用の土手を設定し、少しづつⅢ層を掘り下げる。ほぼⅣ層直上付近で暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ)の落ち込みを検出した。また道路の側溝で切られていたため、その壁面を精査したところ、覆土と壁の立ち上がりを確認した。P.D.3、Ⅲ層を除去し、覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出したことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は大きく3層に分けられる。覆土Ⅰ層はⅢ>Ⅴの暗褐色土(土層図1・2)である。覆土Ⅱ層は茶褐色系の混合土(土層図3・4)である。この下層には軽石が多く混入し、やや黄色ロームが多い。覆土Ⅲ層は暗褐色土(土層図6~10)である。この下層には炭化物が多量に混入していた。覆土は2・3層とも汚れた土で、それほど明瞭な分層はできなかったが、軽石、炭化物などの含有量によって分層した。

重複関係: 本住居跡は、H-583と重複しており、これより新しい。

時期: Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: 北側はⅤ層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

壁: 北壁付近の立ち上がりは急傾斜であるが、南壁の立ち上がりは若干確認できた程度である。検出面からの壁高は、北西壁が30~48cm、北東壁が42~46cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。ただ中央部付近で、一辺1m程の浅い落ち込みが検出された。覆土は暗茶褐色土で、側溝によって大半が削平されている。位置、他の類型などから考え、炉跡の可能性が高い。

付属ピット: 柱穴状小ピットは20個検出されている。HP-11・13~15・17・19~21は主柱穴と思われる。13本柱前後のものであろうか。柱穴状小ピットは概して細く、杭状のことが多い。HP-2~7・10は壁際をめぐるものであると思われるが、西~北~東壁際では小ピットは検出されていない。

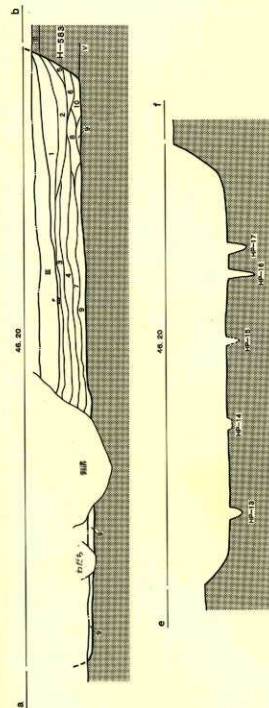
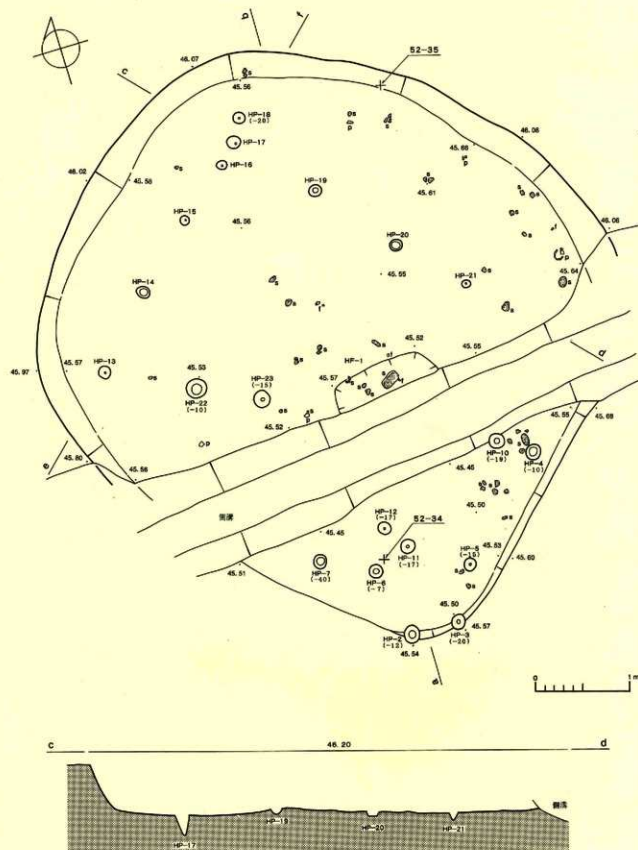
遺物検出状況: 出土遺物総数は368点である。この内訳は土器128点、石器240点である。遺物は覆土Ⅱ層、Ⅲ層上部でやや多く、覆土Ⅱ層上面では礫石器が多く出土している。また東壁付近の床面直上で土器の尖底部が直立して出土しており、その北側では石錐がかたまつて出土した。床面付近ではⅠ群D1類土器が18点、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石錐などが出土している。土器は覆土Ⅱ層でⅠ群D2類土器が1点出土した以外は、すべてⅠ群D1類土器である。石器では両面調整石器、石斧(石のみ)、たたき石、すり石、砥石、石錐(58点)などが出土している。(和泉田)

土器: 1・2はⅠ群D1類a種で、1は乳房状尖底、2は胴部下半の破片である。3・4はD1類b種の口縁部破片である。5はD2類の胴部破片で、外面は押引で調整される。

D1類は口縁部形態が波状口縁(4)と平縁(3)があり、口唇部断面形は切り出し状(3・4)である。器面調整はナデ(1・4)、すり消し条痕(1~3)、条痕(2)がある。3は口唇部外傾面に2条の貝線文を巡らせ、口縁部は押引文を横環し、横位に重畳する腹縁文で下限を区画する。4は口唇部が僅かに外反しその内面と外傾面に連続移動文を施す。口縁部文様帯には7条の貝線文が横環する。

(土器出土位置関係) 平面分布は側溝により分断され全容は明らかではない。垂直分布をみると土器

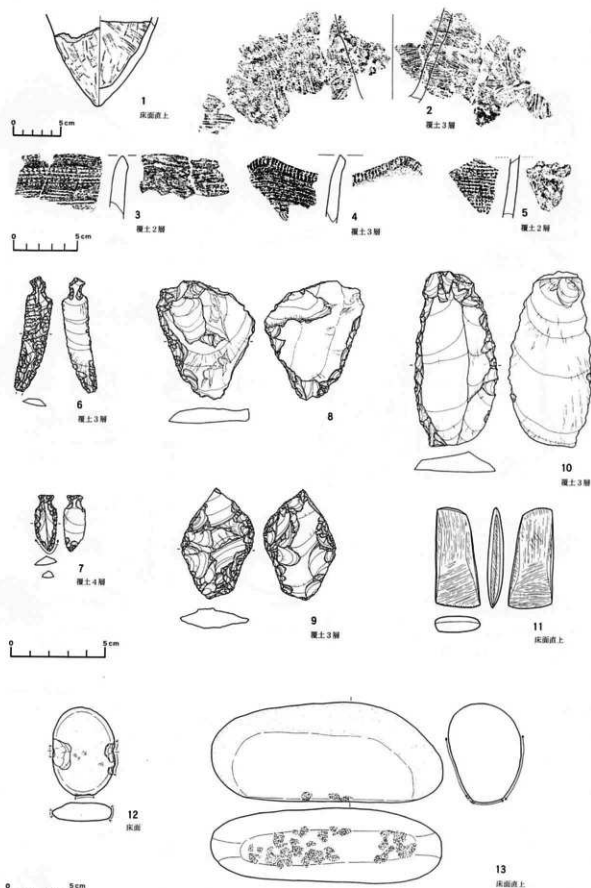
H-563



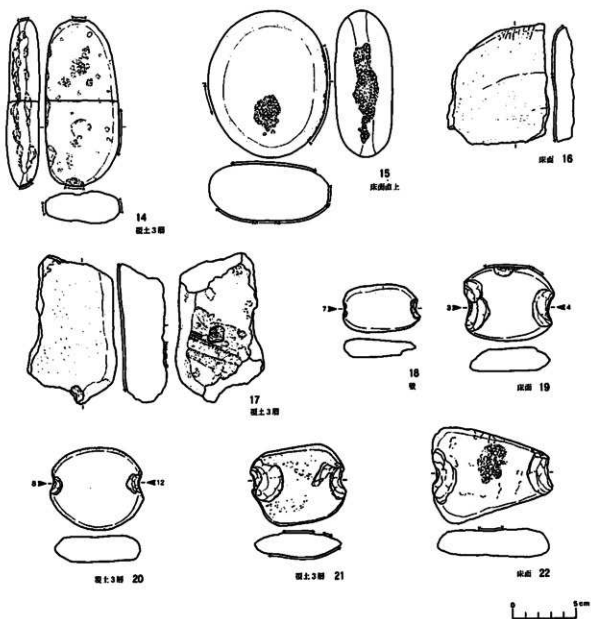
H-563の土層

1. 暗褐色土 (Ⅲ>Ⅴ)
2. Ⅳ (1より色調が濃い)
3. 茶褐色土 (軽石が少量混入)
4. 茶褐色土 (軽石・黄色ロームが混入)
5. 2>Ⅴ
6. 暗黄褐色土 (やや粘質)
7. 暗茶褐色土 (軽石・黄色ロームが多く混入)
8. Ⅳ7 (7より色調が濃い)
9. Ⅳ7 (黄色ロームがブロック状に混入)
10. 黒褐色土 (やや粘質)

図III-74 H-563実測図



図Ⅲ-75 H-563出土土器・石器(1)



図Ⅲ-76 H-563出土石器(2)

の流入状況は、東から西へ低くなる出土状況を示している（関係図-33）。1・2は覆土の下部で接合し、堅穴破壊後の早い時期に流入したものであろう。H-527-6は覆土の最下部と上部が接合する。3は覆土2層（中部）から出土し、H-598（G2区）の覆土2層と接合する。3・4はIⅠ類の新手で覆土中部から出土する。H-583-5のレベル位置とほぼ同じである。他に掲載はしないが他遺構と接合する例が2件ある。事例1 [1068]は覆土3・2・1層から出土し、H-583（G4区）覆土上層のⅢ層と接合する。事例2 [223]は床面から出土し、H-566（G7区）の覆土3層と接合する。

（富永）

石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製である。6・7は石匙。6のつまみ上端には素材剥片の打面を一部残し、平坦となっている。7の先端部はかなり磨滅し、石錐として使用されている。8～10はスクレイパー。8は一側縁に直線的刃部を持つもの（2a類）。9は一側縁に外湾する刃部を持つもの（2b類）で、表裏両面から調整されている。10は両側縁に刃部を持つもの（2d類）で、上端に素材剥片の打点を、下端にはヒンジ・フラクチャーをそのまま残している。

11は蛇紋岩製の石のみ。器体表面はきれいに研磨され、製作過程を残していない。左面刃部端に明瞭な使用痕が見られ、使用痕は短刻線状で刃部線とほぼ直交する。

12は閃緑岩製の、左右両側縁、下端に敲打痕があるたたき石。13は断面三角形のすり石（1類）で、安山岩製。下縁すり面には細かい敲打痕が多数見られる。また、すり面には鉄分の沈着が激しく、赤褐色を呈する。14は流紋岩製のすり石。厚さがほぼ均一で扁平な礫を素材としていることから、2類とした。接合した2個の破片は、覆土3層（堅穴東側）と覆土上層のⅢ層（堅穴ほぼ中央東寄り）から出土したもので、水平距離にして1m離れていた。すり面に段差はなく、破断部にも磨耗はない。15も2類のすり石で、閃緑岩製。両平坦面、両側縁に敲打痕を持つ。16・17はともに凝灰岩製の砥石。16の図上縁に、波状の砥面が見られる。図示はしなかったが、同様の砥面を平坦面に持つ石鋸（遺物番号147、図版201-3で掲載）が覆土3層から出土している。この砥面をつくる対象物は定かではないが、土器施文具として使用される貝殻の放射肋が想起される。一つの可能性として考えたい。17の右面平坦面にある窪みは、回転による条痕を有するものである。18～22は2類の石錐。石質は18～20が閃緑岩、21が凝灰岩、22が流紋岩である。19の上縁、22の平坦面に敲打痕がみられ、21は砥石としても使用されている。

（田中）

H-583 (図Ⅲ-77~79, 図版31・97・111・133)

位置: 50-34, 51-33~35, 52-34; 標高46.78~47.10mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 一ノ一×(6.30)/(5.84)×(0.45)m

床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-563の北東壁面、側溝の壁面で覆土状の落ち込みを確認した。このため土層観察用の土手を設定し、周辺を精査し、遺構確認調査を行う。この結果、Ⅲ層中で黒味のあるⅢ層、暗茶褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲ層を除去し、覆土を順次掘り下げる。Ⅲ層中および覆土中部付近で遺物が多く出土し、写真撮影などを行いつつ遺物を取り上げる。暗茶褐色土が厚く堆積しており、Ⅴ層中で暗黄色土の堅い面を検出した。この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。北東壁際の床面直上には黄色砂と暗褐色土のまじり合った土が0.6×0.4m、0.6×0.2mの範囲で2ヵ所、0.15~0.2mほどの厚みをもって堆積していた。住居廃棄後、他から流れ込んだ掘り揚げ土と思われる。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ一層である(土層図1・2)。床面直上まで暗茶褐色土が堆積している。覆土下層は粘質土で、軽石を多く混入している。

重複関係: 本住居跡は、H-563・623・624・629と重複しており、H-563より古く、他より新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。H-563の床面と同一レベルである。

壁: 立ち上がりは急傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、北壁が24~39cm、西壁が25cm前後、東壁が40cm前後である。

炉跡: H-563の床面で1.10×0.90m、深さ約0.14mほどの掘り込み(HF-1)が検出された。位置的にみて、本住居跡に伴うものと考えられる。HF-1は中央部がやや深く、段状になっている。覆土は上部が暗茶褐色土、中・下部は黒茶色土で炭化物を多量に混入し、坑底で焼土が検出されている。HF-1周辺、および坑底は非常に堅く、デコボコしている。また炉跡の四隅には、径0.1m、深さ0.1mほどの杭状の小ピットが4個検出されている。

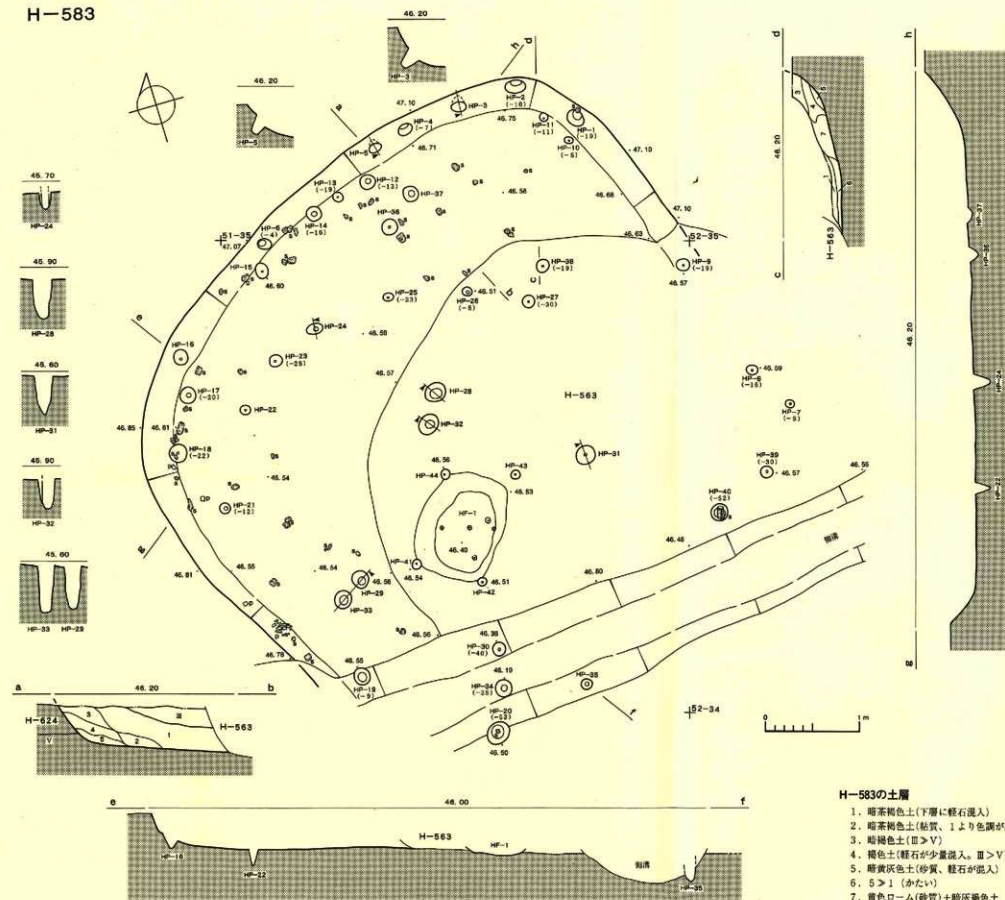
付属ピット: 柱穴状小ピットは40個検出されている。HP-1~6は壁面にあり、内傾するものである。HP-7~20は直立しており、壁際をめぐるものと思われる。HP-22・24・28~40は主柱穴と思われる。HP-28~33は非常に深く、しっかりしたものである。HP-28・29・30・31(4本柱)、HP-32・33・34(4本柱)が位置的にみて対応するもので、これに伴う壁際をめぐる小ピットはHP-20・19・21・23・26・27、HP-39・40・35・22・24・36・37(12本柱)に伴う住居の壁際をめぐる小ピットがHP-7~20で、一部壁面に内傾する小ピット(HP-1~6)が対応するものと思われる。このように、HP-28~31、HP-32~34を主柱穴とする5.30×4.60mの住居跡から、HP-39・40・35・22・24・36・37を主柱穴とする7.20×6.20mの住居に拡張されたものと推測される。

遺物出土状況: 出土遺物総数は286点である。この内訳は土器126点、石器等159点、土器片鍾1点である。遺物は覆土上のⅢ層、覆土中部付近で多く出土している。床面直上では礫石器が多く、また西壁際では土器がまとまって出土している。床面付近でI群D1類土器2点、スクレイパー6点、たたき石1点、砥石3点、石鋸1点、石錘8点などが出土している。土器でI群D1類土器、石器では石錐、石匙、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、砥石、石鋸、石錘(39点)などが出土している。

(和泉田)

土器: 1~3はI群D1類a種で、1は復元個体。2・3は口縁部破片。4・5はD1類b種の口縁部破片である。D1類は口縁部形態は波状口縁(2・4)と平縁(1・3・5)があり、口唇部断面形

H-583



図III-77 H-583実測図

は角形(3)、丸形(1・2)、切り出し状(4・5)がある。器面調整はナデ(1~4)、すり消し条痕(5)がある。文様は貝線文(1・4・5)、楕円刺突(1)、沈線上刺突(1)、櫛目状腹縁文(2)、連続腹縁文(1)がある。2・4は鋸歯状の文様構成、1は胴部に条痕文を格子目状に施している。

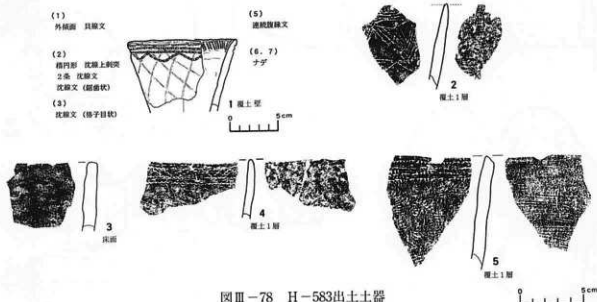
(土器出土位置関係) 平面分布はH-563により分断されるため全容は定かではない。垂直分布では北から南へ向かって低くなる出土状況を示している。全体的には覆土中部から出土する土器が多い(関係図-33)。1は壁際(下部)から出土し、H-527(G4区)の覆土2層、50-37区のI層と接合する(関係図-34)。1・3はD1類の古手で、壁際から出土した。堅穴破棄に近い時期の遺物と判断される。5は覆土1層(中部)から出土し、H-563(G4区)の覆土3層、H-566(G7区)の覆土1層、48-32区のI層と接合し、大型堅穴がある東方向との接合関係を示す。(富永)

石器：剥片石器の石質は、8のスクレイパーがめのう、11の石製品が黒曜石である以外、すべて硬質頁岩である。黒曜石については原材産地分析で、豊泉産との推定結果が出ている(V章-3参照)。

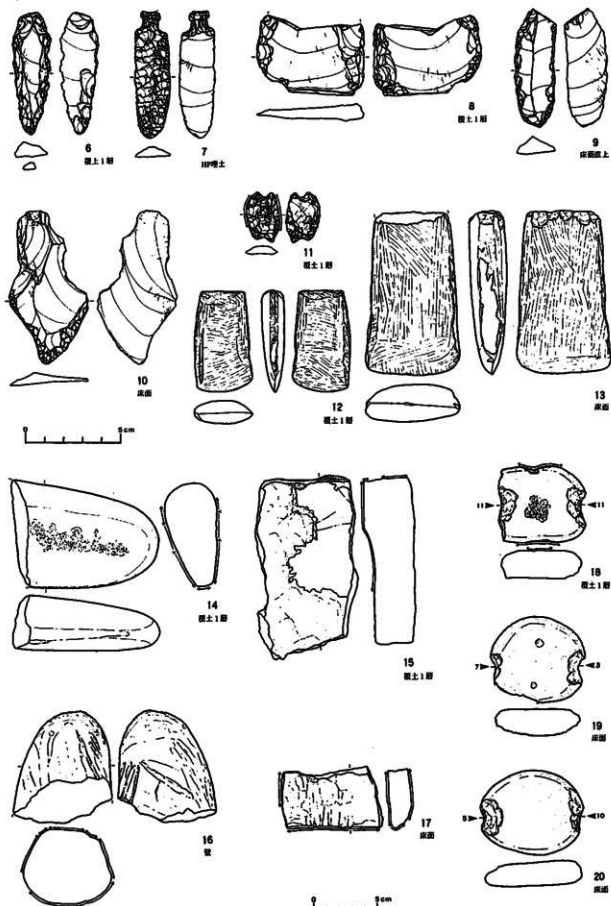
6は4類の石錐。機能部は若干磨滅している程度である。7の石匙は下方が急激に湾曲する剥片素材を使用している。また、つまみ部が丁寧に調整され、上端は鋭角となっている。8は欠損しているが、一側面に外湾する刃部を持つものとみて、2b類としたスクレイパー。右側縁の両面に一部原石面を残している。9・10は両側縁に刃部を持つ、2d類のスクレイパー。11は両端挟入石製品。両側縁はわずかではあるが、平坦部をもつまでに磨滅している。

12・13は蛇紋岩製の石のみ、石斧である。ともに、擦り切り痕や側面部に切断の痕跡を残すもので、1類とした。13の上縁にある剥離痕は破断部の調整とみられ、刃部は使用痕とみられる刃部線に直交するための条線を痕跡的に残す程度に磨かれ、光沢がある。再生品とみられる。

14は閃緑岩製のすり石。15は流紋岩製の砥石で、上面の使用は部分的である。16は凝灰岩製の溝状砥面を持つ砥石(2類)で、円柱状のあらゆる面を使用している。17は流紋岩製の石鋸。平坦面にはH-563出土の砥石(図Ⅲ-76-16)、石鋸でみられた波状の砥面がある。18~20は2類の石錐。18・20は閃緑岩製、19は凝灰岩製である。3点とも挟り部に敲打痕を持っている。(田中)



図Ⅲ-78 H-583出土土器



図Ⅲ-79 H-583出土石器

H-611 (図Ⅲ-80, 図版32)

位置: 49-34, 50-34; 標高45.65~45.96mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模: (3.64)/(3.34)×3.10/2.72×(0.32)m 床面積: (7.45)m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-47°-E

確認・調査・土層: 49-34区周辺の包含層調査中、暗褐色土の落ち込みを検出した。このため土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。V層中で暗黄色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>V、土層図1)である。覆土2層は覆土1層に下部の3層が少量混じる暗黄茶色土(土層図3)、覆土3層は汚れた黄茶褐色土(土層図5~7)である。

重複関係: 本住居跡は、H-525・627・629と重複しており、H-525より古く、他より新しい。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築している。北東から南西へやや傾斜している。ほぼ平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりは全体にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、北東壁が24~29cm、北西壁が9~19cm、南東壁が10~21cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは4個検出されている。HP-1~4は主柱穴で、4本柱である。

遺物出土状況: 遺物は覆土1層でI群D1類土器2点、スクレイパー1点、礫36点が出土しただけである。(和泉田)

石器: 礫以外に唯一出土した石器である。硬質頁岩製のスクレイパーで、左側縁に抉り状の刃部を持つものである。(田中)

H-622 (図Ⅲ-81, 図版33・135)

位置: 50-36; G4区の最北部、H-527・562の北側に位置している。

規模: -/-×-/-×(0.38)m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-527・562の北壁に、褐色土の落ち込みを確認した。周辺調査区はⅣ層上面近くまで掘り下げている段階で、平面的に精査したところ極小範囲の輪郭が捉えられたものである。土層観察用の土手を2本設定して調査を行った。確認時点ではH-527・562の壁面に遺物が露出している状況であり、土層の観察でも部分的にH-527・562の覆土と判断された土も残っていた。各々の堅穴との境界部分で出土した遺物については、H-527・562覆土のものが含まれている可能性が高い。

覆土は褐色土(土層図1)が主体で、壁際に暗茶褐色から暗黄褐色土(土層図2・3)が堆積していた。確認できた堅穴の残存部分は極わずかであるが、4mほどの北壁の状況から住居跡(H)の番号を付した。

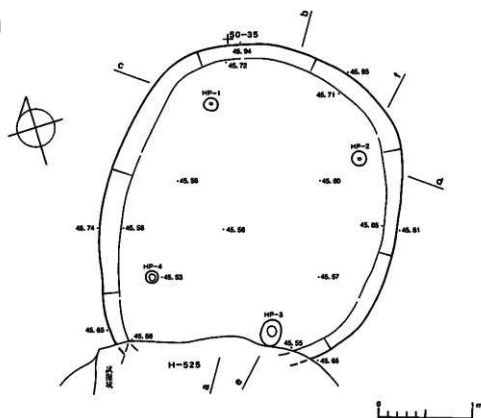
重複関係: 本住居跡はH-527・562と重複し、それらより古い。

時期: 床面出土の遺物はなく特定できない。

床面・壁: 床面はV層を掘り込んでつくられて、壁際から緩やかに傾斜している。重複関係を持つ堅穴の床面とのレベル差は、ほとんどない。壁は急激に立ち上がり、確認できた北壁は直線的に残り、堅穴の平面形は隅丸方形となるものであろうか。炉跡・柱穴などの付属施設は、検出されていない。

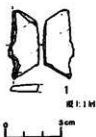
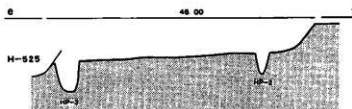
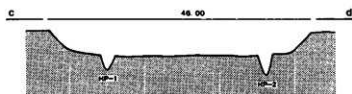
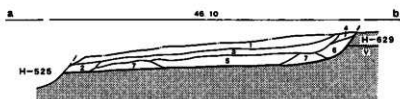
遺物出土状況: 遺物は床面出土のものはなく、すべて覆土1層出土である。H-527・562との境界部

H-611



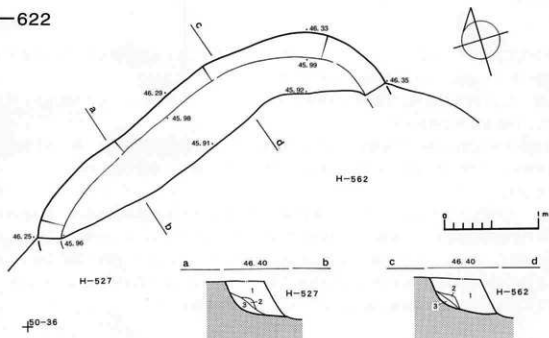
H-611の土層

1. 面>V
2. 淡黄褐色土
3. 暗黄褐色土(1>5)
4. 暗褐色土
5. 黄褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 暗黄色土(砂質)



図Ⅲ-80 H-611実測図と出土石器

H-622



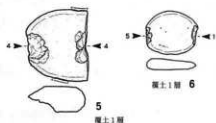
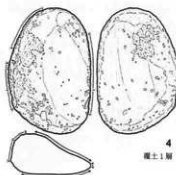
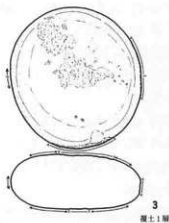
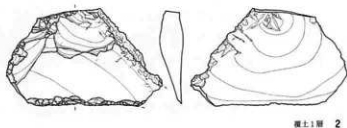
H-622の土層

1. 褐色土(a-bラインの下部にローム及び軽石が混入)
2. 暗茶褐色土
3. 暗黄褐色土



土器・礫石器: 0 5cm

剥片石器: 0 3cm



図Ⅲ-81 H-622実測図と出土遺物

分での出土が多く、前述のとおり一部はH-527・562の遺物である可能性が高い。出土位置や接合関係からH-562のものとして取り扱ったものもある。(田中)

土器：1はI群D1類a種。平縁の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。外面はナデで、内面を条痕で調整する。

(土器出土位置関係) 堅穴は他遺構に分断され全容は不明である(関係図-21)。覆土の上部付近に密度が高い。上部の遺物はH-562出土のものと一緒に、H-562への遺物の流入の中で捉えられるものであろう。(富永)

石器：2は硬質頁岩製のスクレイパー。横長剥片の下縁部に主たる刃部を持つもの。3は閃緑岩製のすり石。裏面の敲打痕は小範囲(15×18mm)で浅い窪みとなっている。4は円礫素材、乳白色の流紋岩製の砥石。砥面は平滑で、側縁の敲打痕も顕著である。5～7はすべて閃緑岩製の石錘で、挟り部に敲打痕が認められる。6の挟り部は直線的であり、たたき石として良いものかもしれない。また、5は破損品の再利用か、短軸に対向する挟りを持つもので1類とした。(田中)

H-623 (図Ⅲ-82, 図版33・133)

位置：50-33・34, 51-33・34；標高45.50mほど、G4区の南側、H-583・627間に位置する。

規模：—/—×—/—×(0.22)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：H-583の西壁に、褐色土の落ち込みを確認した。周辺調査区はIV層上面まで掘り下げている段階で、平面的に精査したところわずかな遺物の散布と小範囲の輪郭が確認できたものである。大半がH-583や道路(市道中野4号線)側溝に壊されており、全容はわからない。

覆土は床面まで、色調のやや赤い褐色土の一層である。

重複関係：本住居跡はH-583と重複し、それよりも古い。

時期：床面直上および覆土から出土した土器はすべてI群D1類土器で、縄文時代早期中葉の時期とみられる。

床面・壁：床面はV層中につくられ、平坦である。特段かたくなった状況はみられない。H-583との床面レベルに、差はほとんどない。残存する壁は床面から緩やかに立ち上がる。

付属ピット：残存する床面に、柱穴跡1個(HP-1)が確認された。深さ25cm程度のもので、底は平坦である。

遺物出土状況：確認面から床面まで、散在して出土している。出土点数は少ないが、I群D1類土器片のほか、砥石と石錘が目立つ。(田中)

土器：1はI群D1類b種の口縁部破片である。平成7年の復元個体(Ⅲ報告、図Ⅲ-124-3)と接合する。波状口縁で口唇部断面形は切り出し状に外傾する。口唇部内面に背圧痕が、外傾面には連続腹縁文が施される。波頂部から楕円突起の列点が垂下する。口縁部文様帯は連続波状文が横環し、下限を2条の鋸歯状沈線文で区画する。

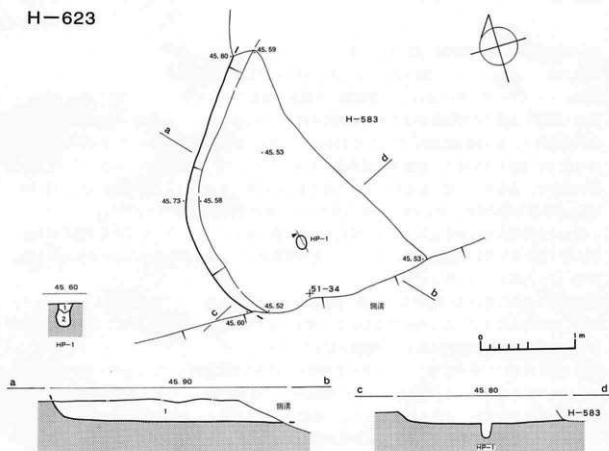
(土器出土位置関係) 1は堅穴の下部から出土する(関係図-33)。D1類の中では新手とみられる。

(富永)

石器：2は凝灰岩製の砥石。平坦砥面と、幾本もの溝状砥面が複合するもので、2類とした。3は円礫素材、流紋岩製の石錘。図示した以外の石錘には、板状礫に簡単な挟りを入れたものもみられる。

(田中)

H-623



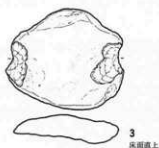
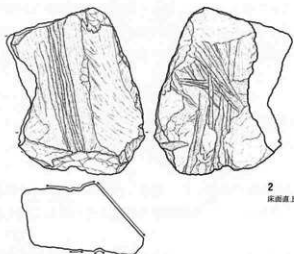
H-623の土層

1. 褐色土(色調が赤い)

HPの土層

HP-1

1. 暗茶褐色土
2. 明茶褐色土



0 5cm

図Ⅲ-82 H-623実測図と出土遺物

H-624 (図Ⅲ-83, 図版34・35・111・135)

位置: 50-34・35, 51-34・35; H-562・583に挟まれて位置する。

規模: $-\text{ノ}-\text{メ}-\text{ノ}-\text{メ}$ (0.30) m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: この住居跡はこれまで調査を終えていたH-526・562・583・611などの堅穴に囲まれた範囲を、H-623確認時にIV層上面を精査した段階で確認したもの一つである。ほかに、2軒の堅穴を確認しているが、調査順に遺構番号を付している (H-627・629)。遺構存在の想定は遺物の散布や、黄色ローム粒・軽石粒を含む土壌の平面的把握によっている。切り合い関係を持つH-629との平面上の境界は、覆土中に含まれる黄色ローム粒の有無で確認できた。

覆土は全体的に軽石粒を含み、上部に褐色土系の土壌 (覆土1・2) が、壁際から下部には茶色系の土壌 (覆土3~7) が堆積している。ただ、堅穴東側壁付近には風倒木痕とみられる土壌の擾乱があり、はっきりとしない部分があった。

重複関係: 本住居跡はH-562・583・629と重複し、H-629より新しく、他より古い。

時期: 床面出土の土器はなく特定できないが、覆土中から出土した土器片はすべてI群D1類土器であり、それに近い縄文時代早期中葉の時期を想定したい。

床面・壁: 床面はV層中につくられ、やや北東側から南西方向に傾斜している。H-562床面とのレベル差はほとんどなく、H-583の床面から15cmほど高い位置にある。残存する壁は急激に立ち上がる。西壁はやや直線的。東壁は弧状となるが、前述のとおり風倒木痕で定かでない部分がある。堅穴の残存部分はわずかであるが、若干いびつ感が残る。

付属ピット: 東側部分に、2個の柱穴跡を検出した (HP-1・2)。深さはともに20cm程度で、底は丸みを持つ。HP-1は堅穴中央にやや傾いている。

遺物出土状況: ほとんどの遺物が覆土中からの出土で、堅穴中央部に散在していた。 (田中)

土器: 1はI群D1類A種の口縁部破片、2はD1類A種の土器片鏃である。1は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾し、僅かに外反する。外面に連続腹縁文がめぐり、その下位を2条の楕円刺突の列点で区画する。

(土器出土位置関係) 分布状況は他遺構に分断され全容は明らかでない (関係図-31)。1はD1類の古手と考えられ、下部から出土する。 (富永)

石器: 3・4はともに安山岩製の石鏃。3は板状鏃を素材としており、図裏面に簡単な対向する打ち欠きを施したものである。砥石として使用されているほか、裏面には小範囲 (12×15mm) の敲打痕がある。4の挟り部には敲打痕を残し、右挟り部近くの縁辺にも敲打痕がみられる。 (田中)

H-627 (図Ⅲ-84, 図版34・111・131)

位置: 50-33・34; H-525・526・611と重複関係を持ち、その東側に位置する。

規模: (3.20)/(2.94)×(2.74)/(2.62)×(0.18) m 床面積: (6.23) m²

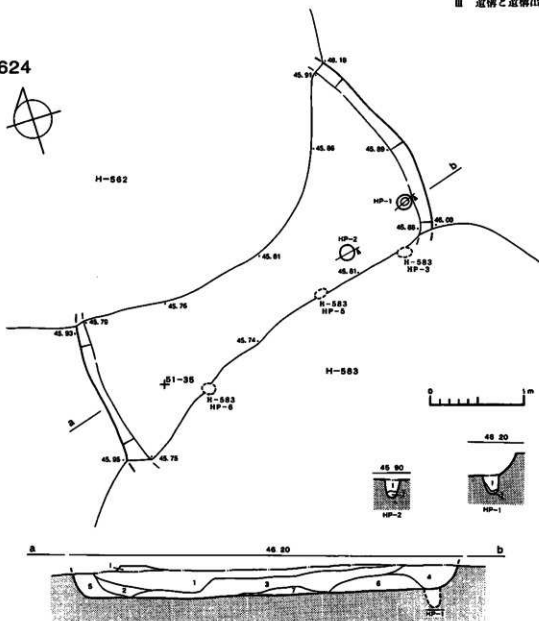
平面形: 楕円形 長軸方向: N-45-E

確認・調査・土層: 前述のとおり、H-623精査時にIV層上面で確認したものである。検出できた壁の長さからみて、堅穴の大半は残存しているとみられる。確認面から床面までは概して浅く、20cm程度であった。

覆土は全体に赤味を帯びる褐色土 (土層図2・4) で、堅穴の西から南側の壁際に褐色土 (土層図5) が堆積している。

重複関係: 本住居跡はH-525・526・611と重複関係を持ち、これらより古い。

H-624



H-624の土層

1. 褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗茶褐色土
4. 茶褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 明茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 茶褐色土
9. 茶褐色土
10. 茶褐色土
11. 茶褐色土
12. 茶褐色土
13. 茶褐色土
14. 茶褐色土
15. 茶褐色土
16. 茶褐色土
17. 茶褐色土
18. 茶褐色土
19. 茶褐色土
20. 茶褐色土
21. 茶褐色土
22. 茶褐色土
23. 茶褐色土
24. 茶褐色土
25. 茶褐色土
26. 茶褐色土
27. 茶褐色土
28. 茶褐色土
29. 茶褐色土
30. 茶褐色土
31. 茶褐色土
32. 茶褐色土
33. 茶褐色土
34. 茶褐色土
35. 茶褐色土
36. 茶褐色土
37. 茶褐色土
38. 茶褐色土
39. 茶褐色土
40. 茶褐色土
41. 茶褐色土
42. 茶褐色土
43. 茶褐色土
44. 茶褐色土
45. 茶褐色土
46. 茶褐色土
47. 茶褐色土
48. 茶褐色土
49. 茶褐色土
50. 茶褐色土
51. 茶褐色土
52. 茶褐色土
53. 茶褐色土
54. 茶褐色土
55. 茶褐色土
56. 茶褐色土
57. 茶褐色土
58. 茶褐色土
59. 茶褐色土
60. 茶褐色土
61. 茶褐色土
62. 茶褐色土
63. 茶褐色土
64. 茶褐色土
65. 茶褐色土
66. 茶褐色土
67. 茶褐色土
68. 茶褐色土
69. 茶褐色土
70. 茶褐色土
71. 茶褐色土
72. 茶褐色土
73. 茶褐色土
74. 茶褐色土
75. 茶褐色土
76. 茶褐色土
77. 茶褐色土
78. 茶褐色土
79. 茶褐色土
80. 茶褐色土
81. 茶褐色土
82. 茶褐色土
83. 茶褐色土
84. 茶褐色土
85. 茶褐色土
86. 茶褐色土
87. 茶褐色土
88. 茶褐色土
89. 茶褐色土
90. 茶褐色土
91. 茶褐色土
92. 茶褐色土
93. 茶褐色土
94. 茶褐色土
95. 茶褐色土
96. 茶褐色土
97. 茶褐色土
98. 茶褐色土
99. 茶褐色土
100. 茶褐色土

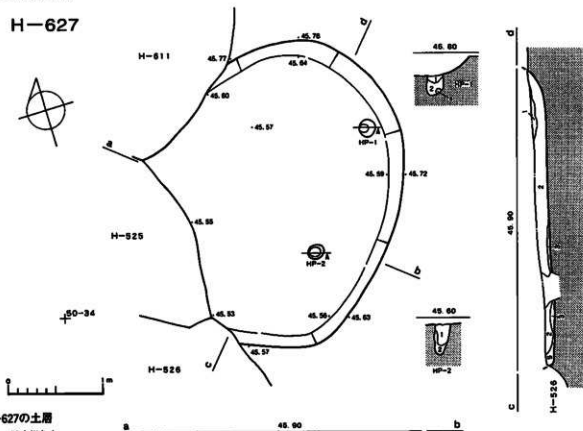
HPの土層

- HP-1
1. 暗茶褐色土(ローム粒・軽石が若干混入)
 2. 茶褐色土
- HP-2
1. 茶褐色土(軽石が若干混入)
 2. 暗茶褐色土(軽石が若干混入)



図III-83 H-624実測図と出土遺物

H-627

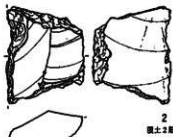


H-627の土層

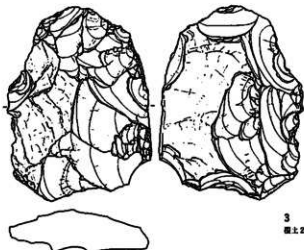
1. 暗赤褐色土
2. 黒褐色土(軽石が混入)
3. 暗茶褐色土(軽石が混入)
4. 暗赤褐色土
5. 褐色土



図土2層



図土2層



図土2層

H-627の土層

(柱穴覆土は全体にしまり、かたい)

HP-1

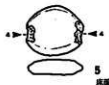
1. 褐色土(軽石が混入)
2. 暗茶褐色土

HP-2

1. 褐色土(ローム粒・軽石が若干混入)
2. 明茶褐色土(ローム粒・軽石が若干混入)



図土2層



図土2層



図土2層

0 5 cm

0 5 cm

図Ⅲ-84 H-627実測図と出土遺物

時期：床面・覆土中から出土した土器片はすべてⅠ群D1類土器であり、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

床面・壁：床面はⅤ層中につくられ、全体的には北東側から南西方向へやや傾斜している。壁は緩やかに立ち上がり、その分床面は浅い皿状となっている。重複関係を持つH-611床面とのレベル差はほとんどなく、H-525・526の床面からは各々15cm、30cmほど高く位置している。北壁から東壁は弧状で、明確な屈曲点をもって直線状の南壁に続いている。

付属ピット：竪穴東側部分に、長軸方向に沿って並ぶ2個の柱穴跡を検出した。HP-1は深さ20cm程度で、底はやや袋状となる。HP-2は深さ30cm程度で、竪穴外側へやや傾いている。

遺物出土状況：遺物は、床面・覆土中からもまともはみられず、竪穴全体に散在していた。(田中) 土器：1はⅠ群D1類a種。平縁を呈し、口唇部断面形は切り出し状に外傾し、口唇部が僅かに外反する。3条の貝線文で縦位・横位に交差する文様を構成する。

(土器出土位置関係) 土器は非常に少なく、垂直分布では覆土下部から中部に含まれる(関係図-29)。1は覆土上部からの出土。H-629-4はD1類の古手で、覆土の下部から出土する。(富永)

石器：2・3は硬質頁岩製で、石質はあまり良くない。2はスクレイパー。破片であるが、2a類とした。3は両面調整石器で、表裏両面に風化層を残している。4は閃緑岩製のたたき石。平坦面、下縁部、右側縁部に敲打痕を有する。5・6はともに閃緑岩製、2類の石錘。挟り部には敲打痕がみられる。4～6には素材の違いはみられない。(田中)

H-629 (図Ⅲ-85・86, 図版35・97・111・135)

位置：49-34・35, 50-34・35；北にH-527・562, 南にH-611, 東にH-583・624があり、その間に挟まれて位置する。

規模：-/-×-/-×(0.18)m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：この住居跡も、H-623精査時にⅣ層上面で確認したものである。確認面から床面までは概して浅く、20cm程度であった。竪穴西側については風倒木痕とみられる土壌の擾乱があり、不確かな部分がある。残存する南壁は直線的であるのに対し、西壁は強い弧状となり、その連続を想定できないいびつ感がある。西側については遺物の出土もなく、掘り過ぎの可能性もある。

覆土は大きく二層に分けられる。主体となるのは覆土1層の暗茶褐色土であり、確認面から床面まで堆積している。覆土2層は暗黄褐色土で、竪穴西側に堆積している。この層が掘り過ぎかと考えられるものである。

また、e-fラインで、P-371との切り合い関係が確かめられた。竪穴覆土より土坑覆土は全体に黒みが強く、竪穴が土坑を壊している状況が捉えられた。

重複関係：本住居跡はH-527・562・583・611・624、P-371と重複関係を持ち、P-371より新しく、ほかの竪穴より古い。

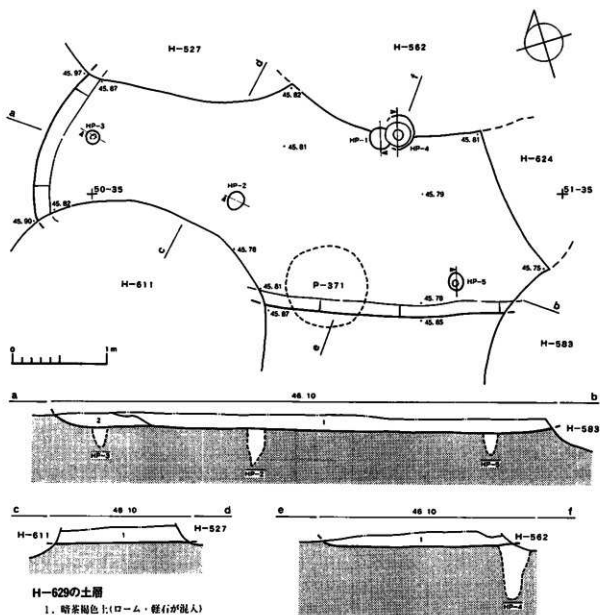
時期：床面・覆土中から出土した土器片はすべてⅠ群D1類土器であり、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

床面・壁：床面はⅤ層中につくられ、ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。

重複関係を持つ竪穴床面とのレベル差はH-527・562・624とはほとんどなく、H-583・611の床面からは各々20cm、10cmほど高く位置している。

付属ピット：柱穴状の小ピットは5個検出された。小ピットはすべて直立するものである。HP-1・3・5は深さ15～20cm程度で、底はやや丸くなる。HP-2は深さ40cm程度で、先細りするもの

H-629



H-629の土層

1. 暗茶褐色土(ローム・軽石が混入)
2. 暗黄褐色土

45.90



HP-1

45.90



HP-2

45.90



HP-3

45.90



HP-4

45.90



HP-5

HPの土層

HP-1

1. 褐色土(軽石が混入、下方がやや茶色に変化する)

HP-2

1. 暗茶褐色土
2. 茶色土+暗黄色土(まだらに混在)

HP-3

1. 暗茶褐色土(軽石が混入)

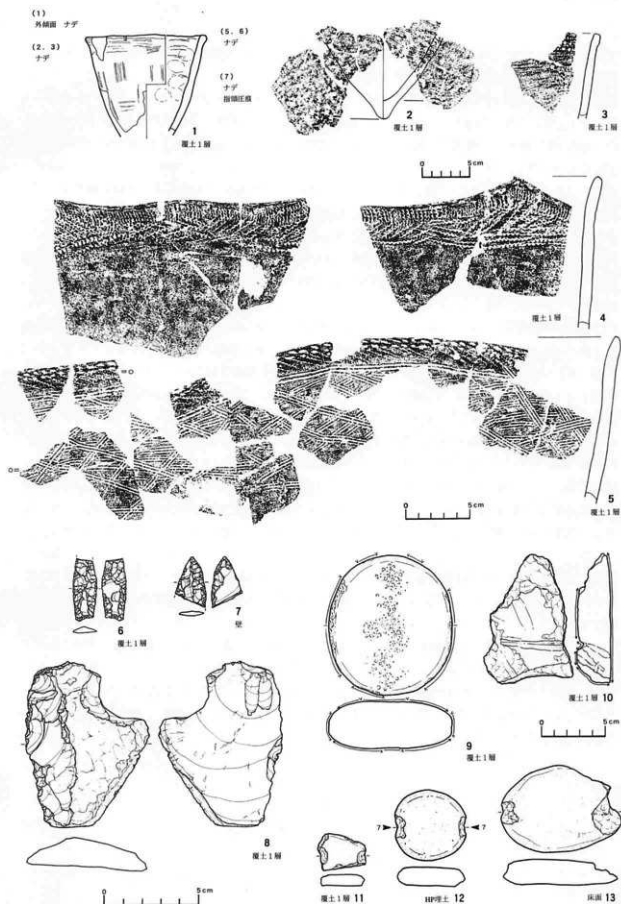
HP-4

1. 褐色土
2. 茶褐色土
3. 明茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黒色土+ロームブロック(やわらかい)
6. 暗茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 暗黄褐色土

HP-5

1. 褐色土(炭化物粒が混入)

図Ⅲ-85 H-629実測図



図Ⅲ-86 H-629出土遺物

である。H-562との境界付近で検出したHP-4は深さ56cmで、大型堅穴によくみられる主柱穴と同規模のもの。径15cm程度の柱痕と、掘り方が観察された。

遺物出土状況：遺物は床面からの出土はわずかで、覆土中からのものがほとんどである。まともにはみられず、堅穴全体に散在していた。また、前述のとおり、堅穴西側には鏝以外の遺物の出土はない。H-562の頂で触れた大型剥片と接合した石核（遺物番号97）は、床面から5cmほど浮いた状態で出土したものである。

(田中)

土器：1～5はすべてI群D1類a種で、1は復元個体。2は乳房状尖底。3～5は口縁部破片で、波状口縁（3・4）と平縁（1・5）があり、口唇部断面形は角形（3）と切り出し状（1・4・5）がある。器面調整にはナデ（1・2・4）とすり消し条痕（3・5）がある。文様は沈線文（5）、円形刺突（3）、楕円刺突（5）、沈線状刺突（3）、列点となるもの（5）、連続腹縁文（5）、連続移動文（4）、押引文（5）がある。4は腹縁文が崩れた鋸歯状の構成に施される。5は胴部外面に格子目状に条痕文が施される。

（土器出土位置関係）平面・垂直分布は他遺構に分断され全容は明らかでない（関係図-31）。1は覆土1層の下部から出土し、H-562（G4区）の覆土3・2層、壁際、H-529（G1区）の覆土2・1層、H-622（G4区）の覆土1層と接合する。2は覆土1層の下部から出土し、H-536（G2区）の覆土3・2層と接合する。4は覆土1層の下部から出土し、H-627（G4区）の床面、H-562の覆土3層、壁際、H-527（G4区）の覆土1層、48-32区のI層と接合する。5は覆土1層の下部から出土し、H-562の床面直上、覆土4・3層、壁際、H-527の覆土3・2層、H-625（G1区）の覆土1層、50-35・36・38区のⅢ層、50-35・37区のI層と接合する。1・2・4・5はD1類の古手と考えられ、覆土下部から出土している。3は覆土中部からの出土で、D1類の古手の特徴を持つ。他遺構との接合関係をみると（関係図-32）、1は南側と広く接合関係がある。2はH-536と接合し、北西方向との接合関係を示す。5は破片が細かくわかれ、南北方向に広く接合関係がある。

(富永)

石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製。6・7は石鏝片で、6は残る形状から2b類とした。8は2a類のスクレイパーとしたもの。原石面を残し、風化層の厚さも15mm程あり、石質は悪い。刃部調整も粗雑である。

9は閃緑岩製のすり石。円礫を素材とし（2類）、平坦面に一面のすり痕と敲打痕、周縁に敲打痕を持つ典型的形状のものである。10は凝灰岩製で、溝状の砥面を持つ砥石（2類）。石質は粒子が粗いが、砥面は平滑で、一部光沢感もある。11～13は2類の石錘。11・12は閃緑岩製、13は片岩製。12はHP-4から出土したもので、袈すり部に敲打痕がみられる。図示した以外に、板状礫に簡単な打ち欠きによる袈すりを入れた石錘も出土している。

(田中)

(5) G5区

この地区はG2区の北東側、昭和50年度函館市教育委員会調査地区の東隣にあたる。標高46.50～47.00mの北東から南西方向へ傾斜する緩斜面上に、重複関係をもつ7軒の竪穴（H-544・560・561・609・613・614・619）があり、それを区画したものである。重複関係は図Ⅲ-87のとおり。この地区の北東側、標高の高い地区にはフラスコビット群がある。

H-544・560・561は、南北に並ぶ大型竪穴群の北部分を構成する。H-544・560は昭和50年度函館市教委調査の第2号・第1号住居址の未調査部分にあたり、その全体像は長軸方向をほぼ南北にする、掘り込み炉を持つ隅丸長方形の竪穴住居跡であることが判明した。ただ、H-560では堆積土中にP.D.4が確認され、H-544にはみられない相違がある。これらとH-561は、ちょうど三角形頂点の位置関係にあり、その間にH-609・613・614が位置している。

この地区には2基のTビット（T-243・260）が検出されており、いずれも竪穴覆土を掘り込んでつくられたものである。また、H-544はG2区のH-607を切ってつくられている。（田中）

H-544（図Ⅲ-88～93、図版36・97～99・112・140～142）

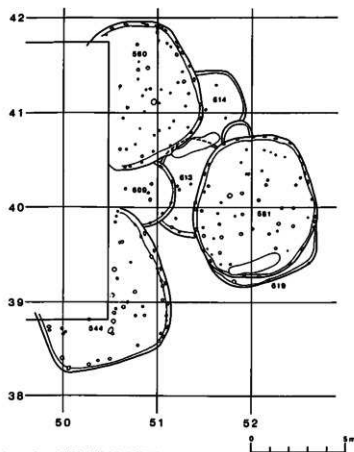
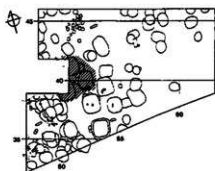
位置：49-38、50-38・39、51-38・39；標高46.61～47.08mの北東から南西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模：(7.80)/(7.20)×(7.00)/(6.60)×0.40m 床面積：不明

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-S

確認・調査・土層：51-39区周辺のI層を除去し、Ⅲ層の面まで掘り下げたところ、P.D.3とⅢ層の

[G5区]



図Ⅲ-87 G5区竪穴住居跡位置図

広がりが見られたため、土層観察用の土手を設定し、全体に包含層を掘り下げ、遺構の検出作業を行う。Ⅳ層直上付近で暗褐色土、褐色土の落ち込みを検出した。褐色土を除去し、その下に堅い暗黄褐色土を検出した。この上面に土器の大型破片が見られ、炭化物も散らばっていた。このため出土遺物の実測、写真撮影ののち遺物を取り上げ、また地形測量をし、順次覆土を掘り下げる。Ⅴ層中で暗灰黄色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことから、この面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ。土層図1)、覆土2層は褐色土(Ⅲ>Ⅴ。土層図2)である。覆土3層は堅く、黄色ロームとⅢ層がまじり合った暗黄褐色土(土層図3)である。覆土3層上面には遺物が多く、炭化物も多く見られた。凹地を利用した生活面があったものと思われる。覆土4層は混合上状の暗茶褐色土(土層図5~7)で、やや堅く、炭化物が混入している。床面直上には茶黄色土(覆土4層+Ⅴ層)の土が薄く見られた。

重複関係: 本住居跡は、H-609と重複しており、これより新しい。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面: Ⅴ層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ北東から南西へ、わずかに傾斜している。平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりは全体にゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は、南壁が22~28cm、東壁が24~34cmである。

炉跡: 本年度調査部分で焼土などは検出されていない。ただ昭和50年度調査部分には、ほぼ中央部付近に0.5×0.5m、深さ0.08mの浅いピットが見られる。位置的に見てこれが本住居跡の掘り込みのある炉跡ではないかと思われる。

付属ピット: 柱穴状小ピットは51個検出されている。HP-1~8は壁面にあり、内傾する小ピットである。HP-9・10・12~29・51は壁隙をめぐるもので、直立している。HP-30~50は支柱穴と思われる。昭和50年度調査部分検出の柱穴状小ピットを含めてその位置関係などをみると、3回から4回の建て替えが行われている模様である。HP-41・47・50、HP-42・43・44・45、HP-31・32・33・35・37・39、HP-30・32・33・34・35・36・38というように拡張されていったものであろう。ところで、HP-3の掘り方で、柱を固定していたものと思われる粘土塊が検出されている。厚さ2cm前後、5×10cmほどの大きさのものである。また壁面にある小ピットと対応するように壁隙に直立する小ピットが確認された。これによると、HP-30にHP-13・2、HP-32にHP-14・3、HP-33にHP-18・5、HP-34にHP-19・6、HP-35にHP-21・7がそれぞれ対応している。これを見るとHP-2・3・5・6・7は斜め材の小ピット、HP-13・14・18・19・21は斜め材を支える支柱穴と考えられる。なお、昭和50年度調査の北東コーナー付近に半円状(幅約80cm、張り出しの長さ約25cm)の張り出し部が見られる。位置的にみて、出入口の可能性が考えられる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は1,759点である。この内訳は土器970点、石器等789点である。遺物は覆土上のⅢ層、覆土3層上面、床面直上付近で多く出土している。とくに覆土3層上面では大型の土器破片が水平の状態出土していた。また、床面直上付近でも石皿や土器の尖底部が倒立した状態で出土している。床面、床面直上付近からはI群D1類を52点、たたき石1点、石皿1点、砥石5点、石錘15点などが出土している。土器は覆土1~3層でI群D2類土器19点、その他はI群D1類土器である。石器では石鏃、石錐、両面調整石器、石匙、両端挾入石製品、石斧、たたき石、すり石、石皿、砥石、石鋸、石錘(184点)などが出土している。

(和泉田)

土器：1～4・9・12～20はI群D1類a種で、1～4は復元個体。9は乳房状平底。12～20は口縁部破片である。5～8・10・11・21～24はD1類b種で、5～8は復元個体。10・11は尖底部破片で、10は乳房状平底。ともに胴部との接合部位は内面上位、外面下位に成形する。25・26はD2類。25は底部付近の破片で、内面はすり消し条痕、外面は押しで調整される。26は平底破片で、内外面と底面をナデで調整する。立ち上がり部分から上位にかけて煤が付着する。27・28はD1類a種の土器片鏝である。

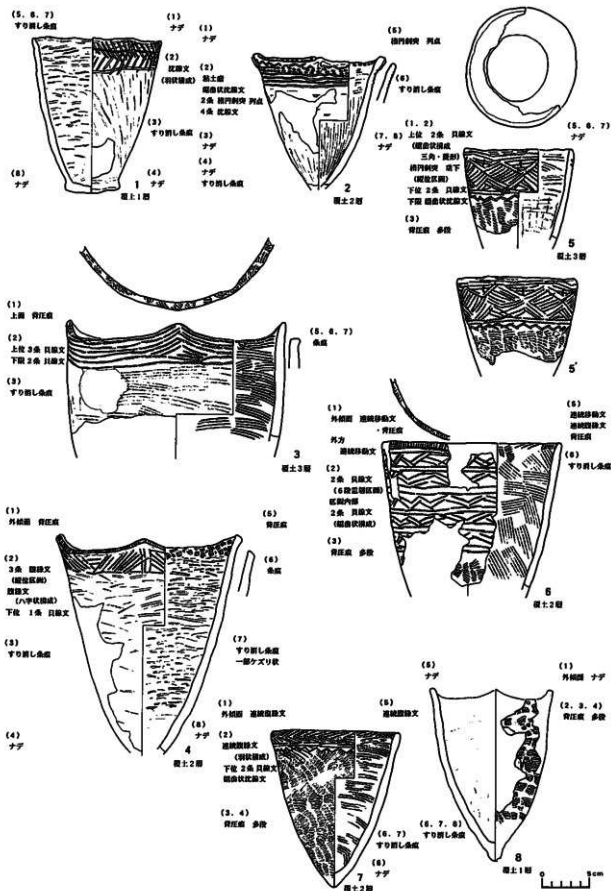
D1類の口縁部形態は波状口縁（2～4・8・12～17・21～24）と平縁（1・5・7・18～20）があり、口唇部断面形は角形（17～19）、丸形（1・2・7）、切り出し状（4～6・8・12～16・20～24）がある。器面調整はナデ（1・2・4・5・7～9・15・17）、すり消し条痕（1～4・6～8・10・11・17）、条痕（3・4・9・12）がある。文様は沈線文（1・2・19）、鋸歯状沈線文（2・5・7・12・18・22・23）、貝線文（3～7・13・15・16・19～23）、栴形刺突（5・19）、列点となるもの（19）、背圧痕文（4）、連続脈線文（6・19・20）、連続移動文（6・13）、連続波状文（21）、押し文（15・16・24）、押し波状文（20・23・24）、爪形文は爪瘤文（18・19）がある。文様構成は6・15・22は鋸歯状、7・16は羽状、12・14は菱形である。

（土器出土位置関係）平面分布は大部分が他年度調査区にまたがる為に全容が不明であるが、竪穴中央部に稀薄で周辺部に密度が高いドーナツ状である。また垂直分布では南北の立面では南側に遺物が集中し、北側が高く南側に低く出土していることが解る（関係図-35・36）。1・10・12～14・19・21・24・27・28の遺物は覆土下部から中部にかけての遺物である。1は一個体分が纏まって出土した。D1類の新手を多く含んでいる為、竪穴放棄の時期が比較的新しいと考えられる（関係図-35）。

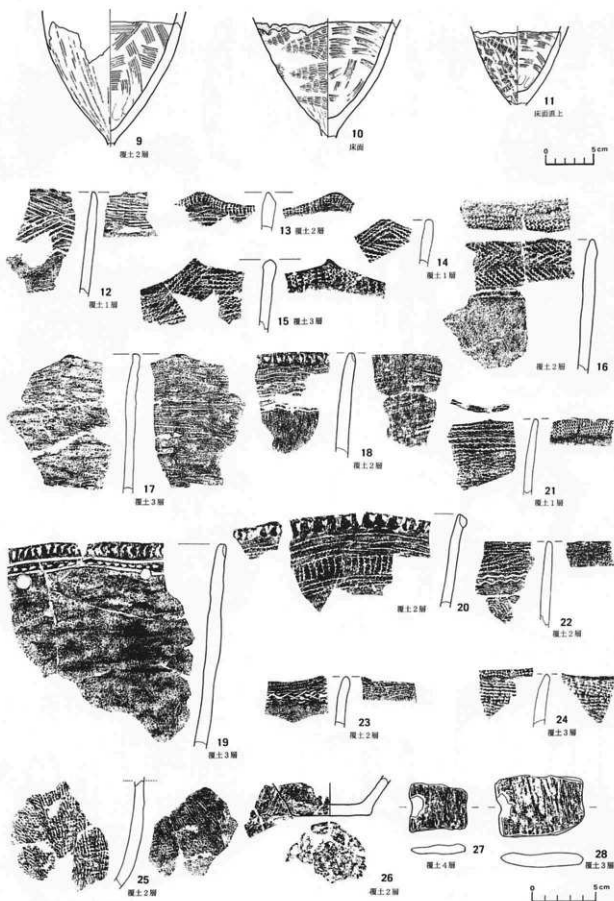
接合関係のある遺物のうち2・4は南側の包含層と接合関係がみられる。5・7・11は遺構の中部付近で接合するもので、いずれもD1類の新手である。3・15は覆土堆積後、北側からの遺物の流入を示す。25・26はもっとも遺構の上層で出土する（関係図-36）。接合関係は南西側のH-530周辺の遺構と関連する6、H-597-1、南側のH-562周辺の遺構と関連する9・18、H-562-54とがある（関係図-37）。他遺構と接合関係をもつ6はD1類の新手で、覆土2・1層（中・上部）から出土し、H-530（G3区）の覆土2層、49-38、50-38区のⅢ層、47-32区の揚げ土、49-35区のⅠ層と広範に接合する。9は覆土2層（中部）から出土し、H-562（G4区）の覆土2・1層と接合する。18は覆土2層（上部）から出土し、H-527（G4区）の覆土1層、49-36区のⅢ層と接合する。20は覆土2層から出土し、平成7年度調査のT-67の覆土中層、39-35区のⅢ層、41-38区のⅠ層と接合する（別項記載）。また他に同地区の大型竪穴H-561-4、小型フラスコビットのP-321-6とも接合関係がみられる。

（富水）

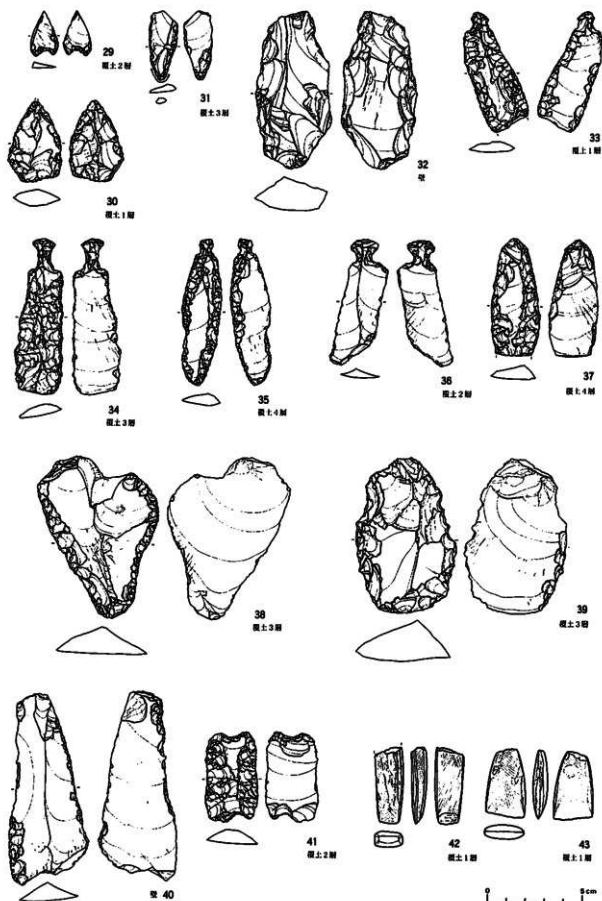
石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製である。29・30は石鏝。29は剥片破片を素材としており、先端部の一部と基部を調整、成形しただけのもの。折れ面はそのままにしている。30は大型のもので、石櫓とした方がよいかもしれない。左面基部の左斜辺には素材剥片の打面平坦面を残している。31はⅠ類の石鏝。機能部の磨減は著しい。32は両面調整石器としたもの。石質が悪く、調整剥離がうまくいかず放棄したものか。33～36は石匙。つまみの形態は34・36がT字形、33・35がやや丸みを帯びている。34の先端部には平坦面を残している。また、33～35はつまみ部に向かって、先細る形態である。繰り返す刃部再生の結果かもしれない。37～40は両側縁に刃部を持つD2類のスクレイパー。37の上端部には素材剥片の打点の一部を残している。40の左面左側縁は表裏面から交互に調整し、刃部をつくっている。他のものにはみられない調整方法である。41は両端挟入石製品で、両側縁はわずかが磨減している。



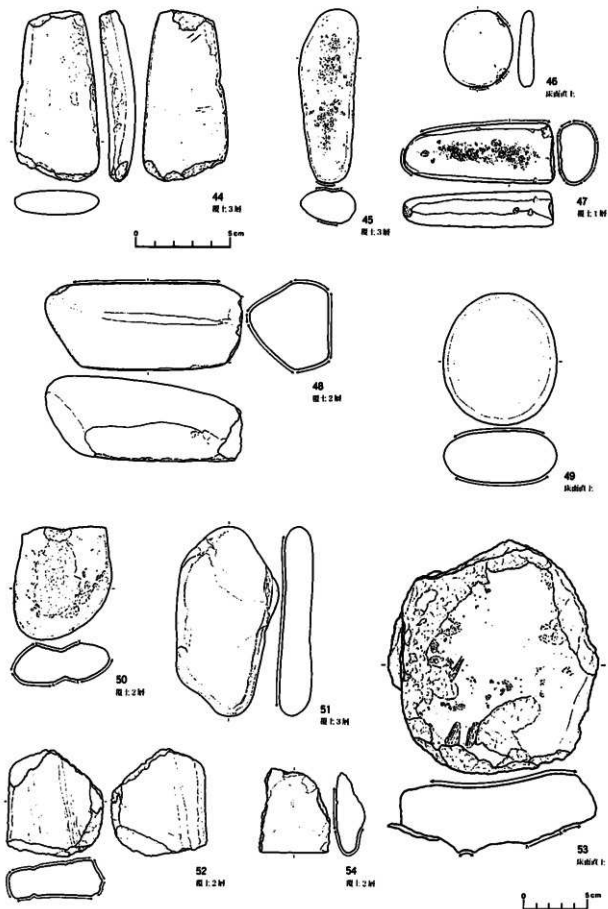
図Ⅲ-89 H-544出土土器(1)



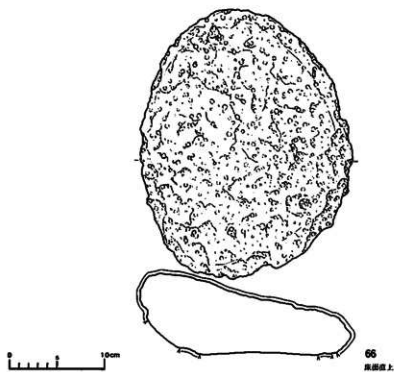
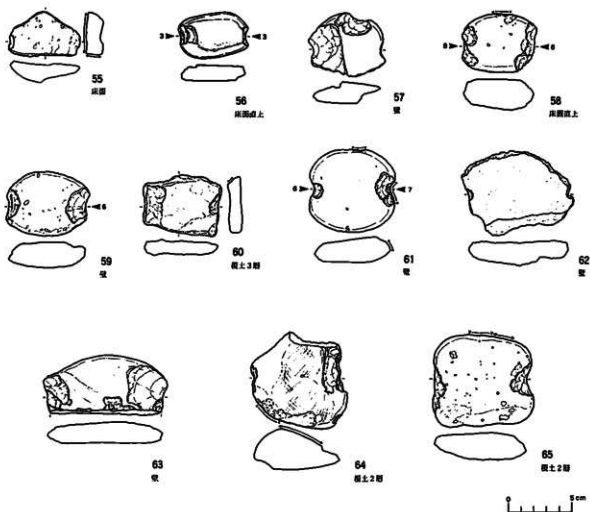
図III-90 H-544出土土器(2)



図Ⅲ-91 H-544出土石器(1)



図III-92 H-544出土石器(2)



圖Ⅲ-93 H-544出土石器(3)

42～44は蛇紋岩製の石斧。42・43は小型の石のみで、42の両側縁に擦り切り痕を残している。44は右側縁に擦り切り痕を残し、器表面の横走する擦痕は荒く凹凸がはっきりしている。機能部側にみられる剥離痕は刃部再生のためと考えられる。

図示したたたき石・すり石（45～49）はすべて閃緑岩製である。45・46はたたき石。45は棒状礫を素材とする1類、46は円礫素材の2類とした。46は周縁の極一部に敲打痕を有するのみである。47～49はすり石。47は上下縁の厚さに差があり1類とした。すり面は破断部で丸まり、適当な長さに折って使用したことが考えられる。48は断面三角形の典型的なもの（1類）で、平坦面の使用はそれほどでもない。また、右端部の剥離痕は敲打によるものとみられる。49は円礫素材（2類）で、平坦面のすり痕以外、明瞭な使用痕はみられない。50～53は砥石。50は円礫素材の凝灰岩製で、両平坦面に敲打痕が、大きな窪みとしてみられる。石質からみて、砥石とした。51は片岩製の砥石で、平坦面に浅い皿状の砥面を持っている。52は平坦面・割れ面に溝状の砥面を持つもの（2類）。53は流紋岩製の大型のもので、裏面中央にも幅1.3cm、長さ3cmほどの溝状の砥面を持つ。周縁・裏面に多くの剥離痕がみられ、成形か、砥面再生のためかと考えられる。54は流紋岩製の石錘。多くの石鋸にみられるとおり、平坦面に砥面がある。55～65はすべて2類の石錘。石質は55・59・62・65が流紋岩、56・63が片岩、57・61が閃緑岩、58が安山岩、60が凝灰岩、64が頁岩で、種々石材を利用している。素材でも円礫の他、破損品の再利用とみられるもの（57・63）や板状礫に簡単な打ち欠きを施したものがある。また、袂り部に敲打痕を有するもの（56・58・59・61）、砥石として利用されたもの（55・64）などもみられる。図示はしていないが、覆土中出土の石錘および石錘片の接合例が5件ほどみられた。66は流紋岩製の台石としたもの。周縁や平坦面に、敲打痕や剥離痕が広範囲にみられ、砥石使用の前段の状況を示すものかもしれない。（田中）

H-560（図Ⅲ-94～97、図版37・99・113・143・144）

位置：50・40・41，51・40・41；標高47.09～47.34mのほぼ平坦地に位置している。

規模：7.29/6.80×(6.60)/(6.04)×0.65m 床面積：不明

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-15°-W

確認・調査・土層：51-41区周辺のI層を除去し、P.D.3、Ⅲa層の広がりを確認した。遺構が想定されたため土層観察用の土手を設定し、全体に少しずつ掘り下げ、ほぼIV層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲa・Ⅲb層が深く落ち込んでおり、これらを除去し、暗褐色土から覆土を順次掘り下げ、調査を行う。V層中で堅い黄色ロームが検出され、この上に炭化物の混じった汚れた土が薄く堆積しており、また炉跡と思われる方形の落ち込みが検出されたことからこの面を床面とし、全体に広げ、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は暗褐色土（Ⅲ>V。土層図1・2）、覆土2層は覆土1層+3層（土層図3）である。覆土3層は汚れた混合土の暗茶褐色土で、軽石が混入している（土層図20）。壁際には三角堆積状に褐色土と黄色ロームの混じり合った土が見られ（土層図6・7・12～17）、床面直上には炭化物を多量に混入する汚れた黒茶色土が見られた（土層図18・19・21）。また床面付近の壁際には壁の崩落土と思われる暗黄色土も確認された（土層図8～11）。

重複関係：本住居跡は、P-380、H-609・613・614と重複しており、P-380より古く、他より新しい。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：V層を深く掘り込んで構築されており、平坦で、堅い。

壁：ほぼ垂直に立ち上がっている。検出面からの壁高は、北壁が39～53cm、東壁が49～62cm、南壁が37～50cmである。

炉跡：床面のはば中央付近で1.20×1.00m、深さ約0.10mほどの浅い掘り込みが検出され、覆土と思われる炭化物を混入する茶褐色土を掘り下げたところ、坑底付近で棒状の焼土を検出した。これを掘り込みのある炉跡（HF-1）とした。この焼土（HF-1の北西側）付近には径0.10m、深さ0.13mほどの逆三角形の小ピットがあり、焼土との関係からみて、土器が立てられていた穴かとも思われる。炉跡の四隅には径0.12m前後、深さ0.10～0.13mほどの小ピットが検出され、炉に關係する施設に伴う小ピットと考えられる。

付属ピット：柱穴状小ピットは57個検出されている。このうちHP-1～34は床面にあり、HP-35～55は壁面にあり内傾している。HP-1・5・6は非常に深く主柱穴と思われる。全体に炉跡周辺にある小ピットは深く主柱穴と思われることから、4本柱→10本柱へ建て替え、拡張が繰り返されたものと思われる。

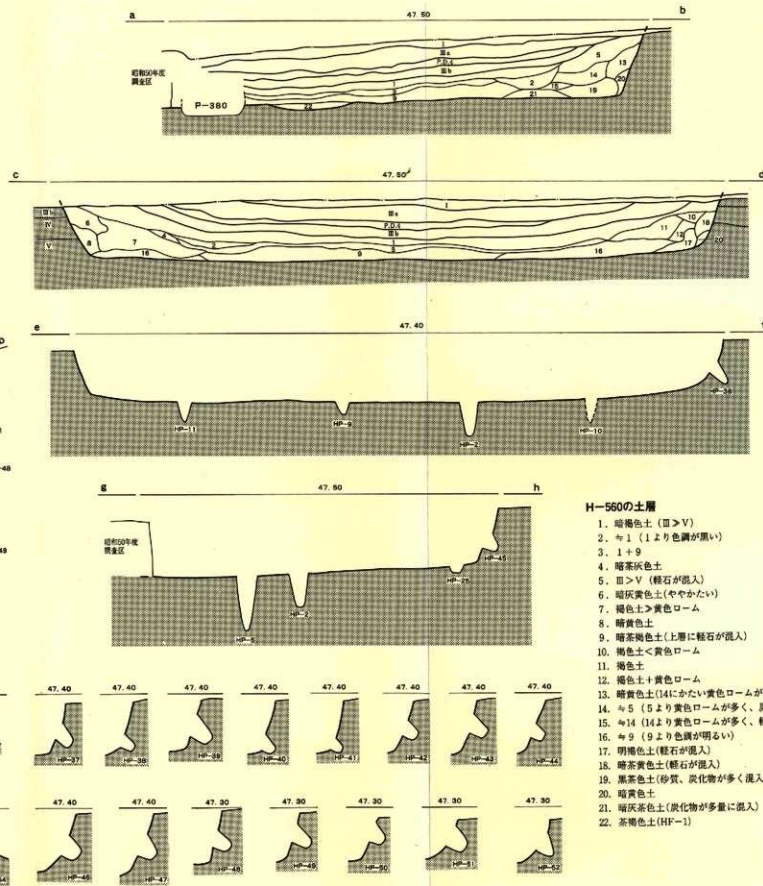
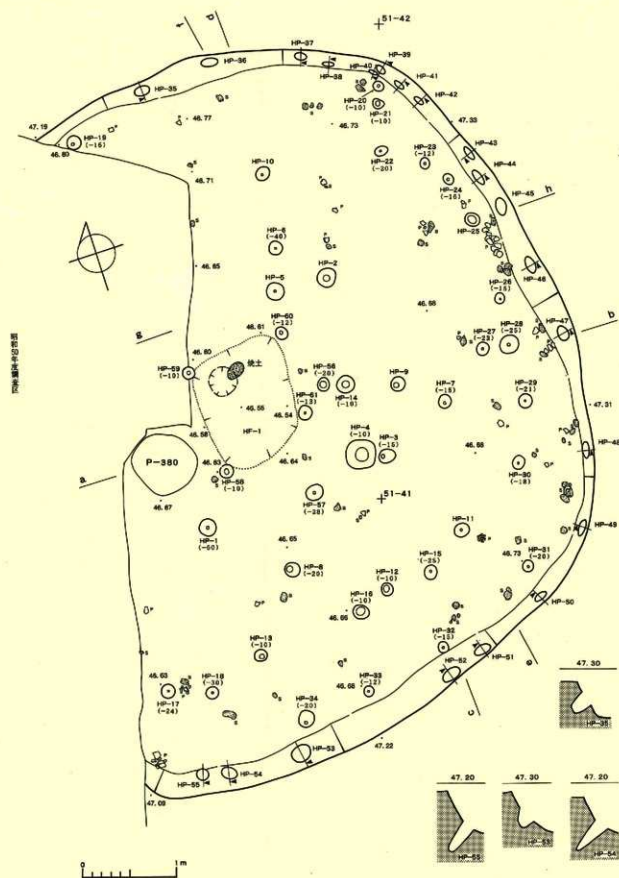
遺物出土状況：出土遺物総数は617点である。この内訳は土器272点、石器等345点である。床、床面直上からはI群B類土器1点、I群D1類土器27点、土器片錘が18点出土している。とくに東壁際の床面直上で12点の土器片錘がかたまつて出土し、この土に壁の崩落土と思われる暗黄色土がかぶっていることからみて、原位置を保っているものと考えられる。石器では石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー、たたき石、すり石、砥石、石錘（146点）などが出土している。（和泉田）

土器：7はI群B類の胴突起付波状口縁部で、口唇部断面形は角形を呈する。口唇内面端部に連続移動文が施される。3条単位の貝刺沈線文で文様が描かれる。2～6・8～10はD1類a種。2～6は底部片で、2・4・6は砲弾形尖底、3・5は乳房状尖底。2～4は胴部との接合部位を内面を上方向、外面を下方向に成形する。1・11～13はD1類b種で、1は復元個体。11～13は口縁部破片である。14はD2類の胴部破片で、内面をすり消し条痕で調整し、外面を押しで調整する。15～22は土器片錘で、15～21はD1類a種。15・19・21は胴部破片を、16～18・20は口縁部破片を利用する。22はD1類b種の土器片錘である。

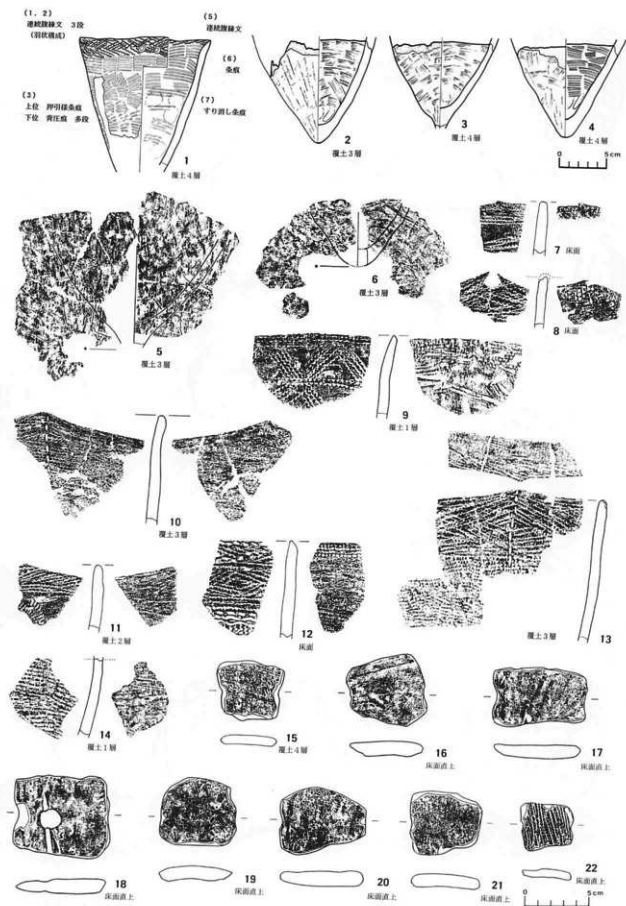
D1類の口縁部形態は波状口縁（8・10・11・13）と平縁（9・12）があり、口唇部断面形は角形（7）、丸形（2）、切り出し状（8～13）がある。器面調整はナデ（2・5・6・8）、すり消し条痕（1・3・4）、条痕（1・2）がある。文様は鋸歯状沈線文（10・12）、貝線文（9・10・11・12・13）、刺突は楕円刺突（10・12・13）、列点となるもの（10・12・13）、貝殻文は連続腹線文（1・11・12）、押し文（8・14）、押し波状文（9・12）、引摺り背圧痕（13）がある。その他、1は口縁部文様帯の下位を押し様に条痕で調整する。文様構成は1・10は羽状、12・13は菱形（羽状）、9は鋸歯状（菱形）となる。

（土器出土位置関係）平面分布は大部分が他年度調査区にまたがる為に全容が不明であるが、H-544と同様にドーナツ状の分布を示す。垂直分布は凹レンズ状の堆積を示し、中部から上部にかけての遺物の混入はほとんどみられない（関係図-38）。1・2・6は覆土の下部付近で接合する。堅穴の窪みが埋まりきらないうちに東側から流入したものと考えられる。1はD1類の新手である。3・4及び、10・13も同様である。10は覆土3層（下部）から出土し、H-598（G2区）、H-569（G7区）の覆土1層、55-40区のI層と広範に接合する。13は覆土3層（下部）から出土し、H-586（G7区）覆土上層のⅢ層、49-44区のI層と広範に接合する。また掲載はしていないが他遺構と接合する例が1件ある。事例1 [537] は覆土、床面から出土し、H-619（G5区）の覆土1層、壁際と接合する。接合関係は北西部のH-586と南東部の大型堅穴H-569、南側のH-598と接合している（関

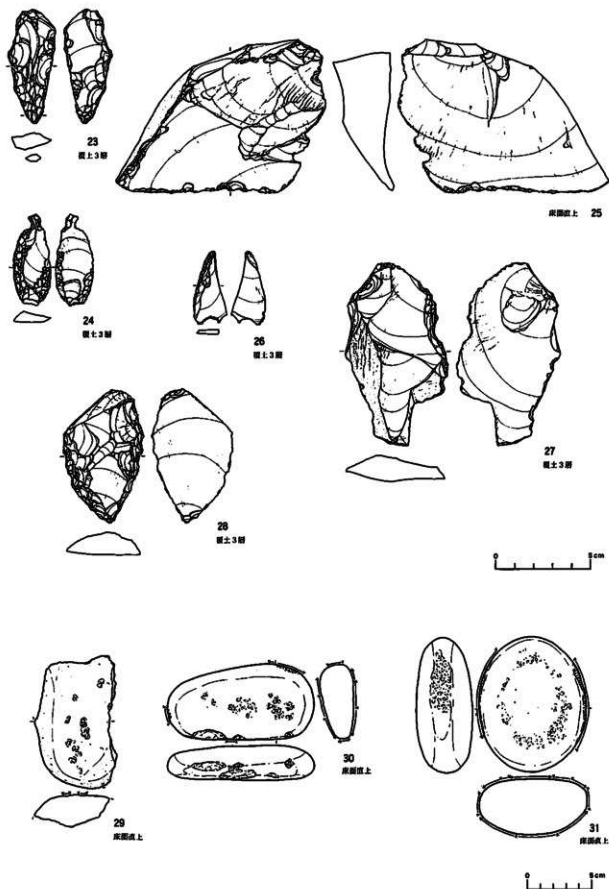
H-560



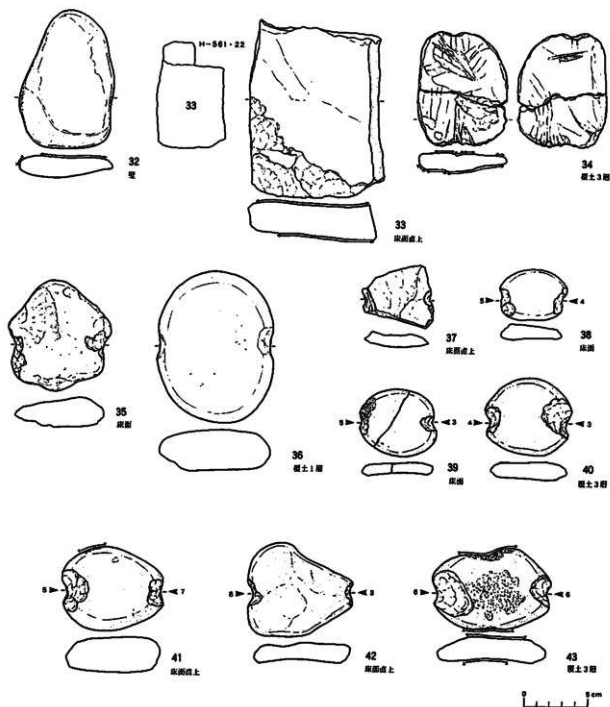
図III-94 H-560実測図



図III-95 H-560出土土器



図Ⅲ-96 H-560出土石器(1)



図Ⅲ-97 H-560出土石器(2)

係図-40）。

15～22は東壁際の覆土下部から縄まって出土した土器片錘で、遺構に伴うものと判断され、D1類の古新が共に利用されている。（活水）

石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製。23は石錘であるが、機能部の磨減はわずかである。24は石匙。下部は素材剥片の打点側で、そこにみられる大きな剥離痕は厚さを減じるためのものと考えられる。25～28はスクレイパー。25は横長剥片を素材としたもので、刃部調整は粗略である。26・27は挟り状の刃部を持つもの（2c'類）としたが、26についてはH-544で掲載した石錘（図Ⅲ-91-29）を考えれば、形状的に石錘として良いのかもしれない。28は両側縁の刃部が合わさり、先細りで尖るもの（2d'類）である。

29は凝灰岩製で、円礫の破片を使用したもの。30・31はすり石で、ともに閃緑岩製である。32は粒子の細かい凝灰岩製で、底面は平滑、光沢感がある。33は流紋岩製の砥石で、堅穴南東隅の床面直上で出土したもの。H-561覆土2層出土の砥石（図Ⅲ-101-22）と接合する。両者の底面には段差があり、個別に使用されていたものである。34は凝灰岩製の砥石で、堅穴南東側の覆土3層中から2m程離れて出土した破片が接合したもの。接合部の底面には段差はない。石質は軟質で、溝状の底面のほか、弧状の段をつくる部分があり、石斧刃部の研磨に使用した箇所と考えられる。35・36は1類とした石錘である。35は長軸・短軸の長さにさほどの差はなく、素材となる礫の形状によって、挟り部の位置が決まったものと思われる。36には敲打などの使用の痕跡はまったくみられず、挟り部も自然の礫面と変化する連続する。形状で石錘としたものである。37～43は2類の石錘。石質は37が頁岩、38・41～43が閃緑岩、39が砂岩、40が安山岩である。37は板状礫に簡単な打ち欠きを施したもので、堅穴北東隅の床面直上からまともに出土した12点の石錘の一つである。写真図版144下段に掲載した（遺物番号413：うち1点は凝灰岩製の砥石）。すべて同形状のもので、土器片錘1点も出土していない。39は堅穴東側の床面と覆土3層出土の破片が接合したもの。水平距離で2mほど離れて出土している。43の上下縁の敲打痕は剥離を伴わず、大きく窪んでいるが意識的な挟り部とはみえていない。

（田中）

H-561（図Ⅲ-98～101、図版38・39・114・145・146）

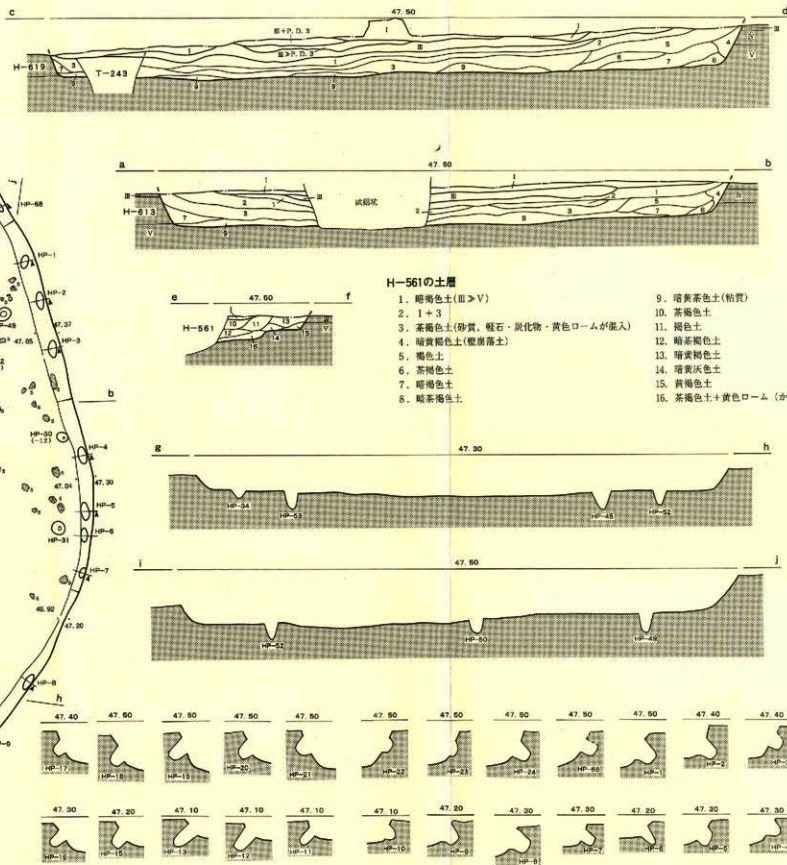
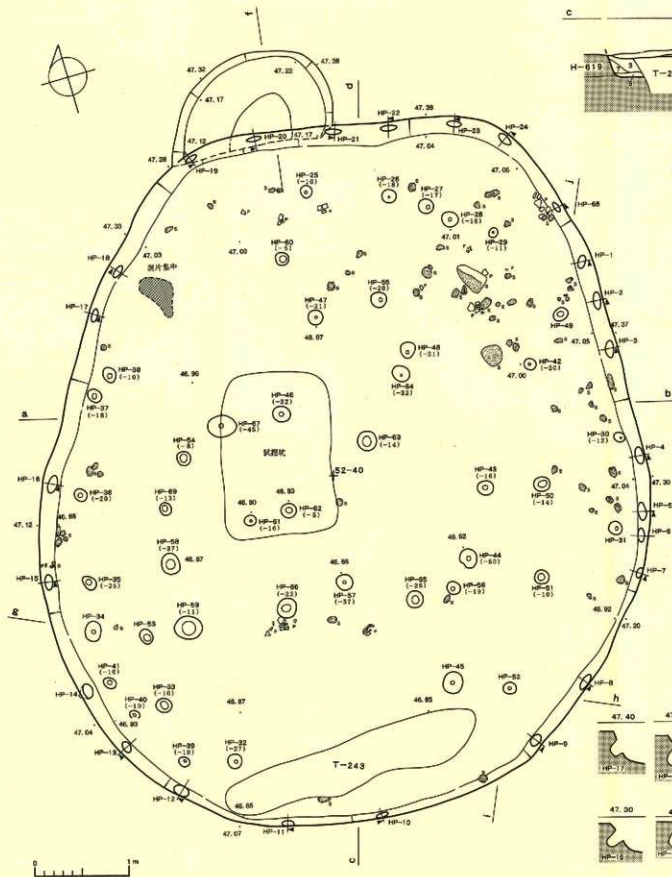
位置：51-39・40、52-39・40；標高47.02～47.41mのほぼ平坦地に位置している。

規模：7.36/7.08×6.50/6.20×0.38m 床面積：35.52㎡

平面形：楕円形（ゆるやかな六角形状） 長軸方向：N-25°-W

確認・調査・土層：52-40区周辺のI層を除去し、P.D.3、Ⅲ層の広がりが見られた。遺構が想定されたため、土層観察用の土手を設定し、全体にⅢ層を掘り下げ、遺構検出作業を行う。Ⅲ層中（ほぼⅣ層直上付近）で暗褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で暗黄灰色の堅い土の面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ四層に分けられる。覆土1層は暗褐色土（Ⅲ>Ⅴ。土層図1）、覆土2層は、覆土1層と3層がまじり合った汚れた上の暗茶褐色系の土（土層図2）である。覆土3層は混合土状の茶褐色土（土層図3・4）である。覆土4層は床面上に堆積する粘質で汚れた暗茶褐色土（土層図9）である。中央部東側では覆土4層がやや厚く堆積していた。床面直上付近の壁際には暗茶褐色土が三角堆積状に見られ、遺物が多く混入していた。また北、東壁際には壁の崩落土も見られ、北西壁際の覆土上に灰褐色の土が堆積しており、これは他遺構からの掘り揚げ土である。

H-561



図III-98 H-561実測図

重複関係：本住居跡は、T-243、H-613・619と重複しており、T-243より古く、他より新しい。時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

床面：北側では深く、南側ではやや浅い。V層を掘り込んで構築されている。やや北から南へ傾斜している。凹凸があり、全体に堅い。ただ一部（中央部付近）にはインボリューションが表出しており、軟質のV層になっている。

壁：北から東にかけての立ち上がりは急傾斜であるが、他は緩やかである。検出面からの壁高は、北壁が25～37cm、西壁が11～24cm、南壁が18cm前後、東壁が22～32cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは69個検出されている。HP-1～24・68は壁面にあり、内傾している。HP-25～41は壁際をめぐるものと思われる。直立している。HP-42・61・65～67・69は主柱穴と思われる。柱穴状小ピットの位置関係からみて、致度建て替え、拡張がなされているものと考えられる。HP-48・65・59（4本柱）、HP-42・43・44・45・61・46・47（8本柱）、HP-49・50・52・53・54・55（8本柱）が想定される。また北壁には半円状（底辺1.7m、高さ1.0m）の張出し部分が検出されている。坑底は段状になっており、非常に堅い。これについては北壁面に見られる柱穴状小ピットの時期よりも古いものであろうと考えている。この住居跡が最初に構築された時か、それに近い時期のもので、これが埋まった後再び壁面として利用している。

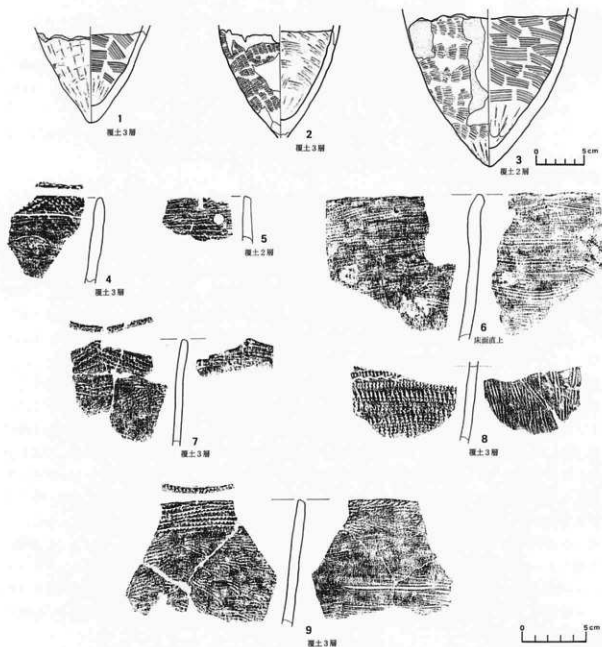
遺物出土状況：出土遺物総数は1,675点である。この内訳は土器353点、石器1,315点、土器片錘7点である。遺物は覆土1、2層中で多く出土している。とくに3層上面（覆土2層で遺物を取り上げている）で多いようであり、北西側では剥片の集中も検出されている。床面直上付近では、北壁側で礫石器がかたまて出土している。とくに北東コーナー付近では床に貼りついた状態で土器片、石器が出土している。HP-66・54周辺の床面直上付近でも土器片がややかたまて出土している。床面、床面直上付近ではI群D1類土器15点、剥片439点、すり石、石皿、砥石、石錘などが出土している。土器は覆土中でI群土器が5点出土しているが、他はI群D1類土器である。石器では石錐、石匙、たたき石、すり石、石皿、砥石、石錘（200点）などが出土している。（和泉田）

土器：1・4～6はI群D1類a種で、1は砲弾形尖底、4～6は口縁部破片である。2～3・7～9はD1類b種で、2は乳房状尖底、3は砲弾形尖底。胴部との接合部位は内面上方向、外面下方向に成形する。7・9は口縁部破片。8は胴部破片で文様帯を下限区画する鋸歯状沈線文の下位に押引波状文を多段に巡らせる。

D1類の口縁部形態は波状口縁（7）と平縁（4～6・9）で、口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。器面調整はナデ（1・5）、すり消し条痕（2・6・7）、条痕（1・3・6）がある。文様は沈線文（4）、鋸歯状沈線文（8）、貝線文（5・7・9）、刺突は栴檀刺突（4）、貝殻文は連続腹縁文（4）、背匠痕文（9）がある。

（土器出土位置関係）平面分布はH-544と同様にドーナツ状になる。垂直分布の遺物の流れも凹レンズ状に堆積していることが解る。覆土上部ではほとんど遺物はみられない（関係図-39）。1・2・8は覆土の下部から出土し、堅穴廃棄に近い時期のものと考えられる。2・8はD1類の新手である。8は覆土3層（下部）から出土し、H-560の覆土2層と接合する（関係図-40）。

3～7・9は覆土中部からの出土で、4は覆土3層（中部）から出土し、H-544（G5区）の覆土2層と接合する。また他遺構からのH-562-2も覆土中部で1片の破片が接合している。また掲載はしないが他遺構と接合するものが2例ある。事例1〔198〕は床面直上、覆土2層、壁際から出土し、H-560の覆土3・2層と接合する。事例2〔937〕は覆土1層から出土し、P-352（G7区）

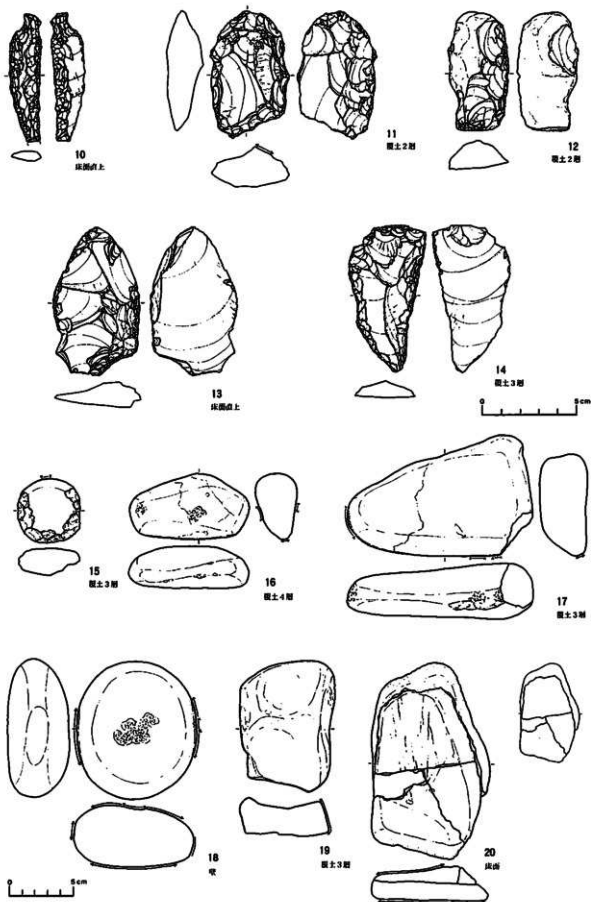


図Ⅲ-99 H-561出土土器

覆土中層、53-41区のⅠ層と接合する。以上のように接合関係は大型堅穴群の範囲でみられる（関係図-40）。（富永）

石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製である。10は石匙。右面も過半が調整されていることから2a類としたが、刃部再生による最終的形狀を示しているものと考えられ、挟りもなだらかなっている。11は3a類の筧状石器とみたもの。下縁部は刃部再生途中のものか。右面に残る原石面には細かい擦痕が認められる。12-14はスクレイパー。12は転石を素材とするもので、調整は粗略である。14は両側縁に刃部を持つもの（2d類）で、上端の素材剥片打点部も調整し鋭角に仕上げている。

15は閃緑岩製のたたき石。周縁の3分の2ほどに剥離痕があり、所々に敲打痕が残っている。16は砂岩製、1類のすり石で、小型である。礫表面には被熱のためか、細かな亀裂がみられる。17は閃緑



図Ⅲ-100 H-561出土石器(1)

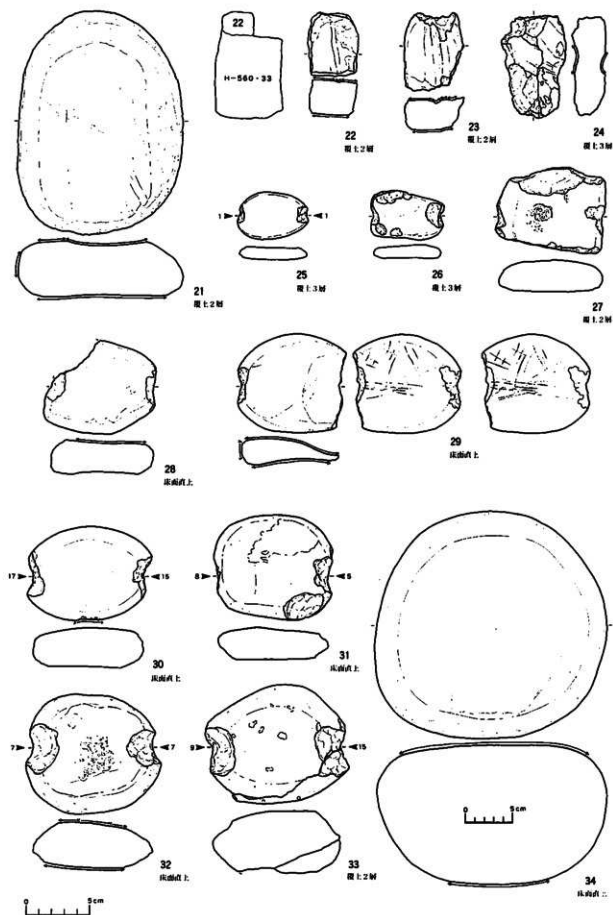


圖 III-101 H-561出土石器(2)

岩製のすり石。全体的断面形は扁平であるが、すばまる形態の稜をすり面としていることから1類としたものである。18は閃緑岩製の典型的な2類のすり石。19～21は凝灰岩製、1類の砥石。19の石質は粒子が細かく緻密で、砥面は光沢感がある。円礫の側面だけを使用している。20は床面、壁際出土の破片とH-619の床面、覆土出土の破片が接合したもの。いずれも堅穴東側から出土している。図表面の上部と下部で、一部砥面に段差が認められる。割れた（割った？）後も個別に使用されたものである。石質の粒子は粗い。22～24は2類の砥石。22・23は凝灰岩製、24は流紋岩製である。また、22はH-560床面出土の砥石（図Ⅲ-97-33）と接合したもの。25～33は2類の石錘。石質は25・31が砂岩、26が頁岩、27・29が凝灰岩、28・33が流紋岩、30が閃緑岩、32が安山岩である。29は堅穴北東隅の床面直上で出土した、線刻のあるものである（図録7-3）。砥石としてかなり使用しており、もっとも薄い部分で6mmの厚さとなっている。線刻は極細で浅く、両挟りを結ぶ中央部に幾重にも直線的に描かれている。その上方に、各々3本で山形を描き、さらに格子目が付け加えられている。挟りの一部にも線刻が観察されることから、線刻を最後に施しているとみられる。ほかに砥石として使われたものに28・31があり、30には敲打痕が、32にはすり面と敲打痕がみられる。挟り部に敲打痕があるものは25・30～33。33はともに覆土2層出土の破片が接合したもので、堅穴東側に接近して出土している。図示していないが、石錘破片では堅穴内接合例のほか、H-565やH-613覆土、H-561覆土上層のⅢ層出土の破片との接合例もある。34は閃緑岩製の石皿で、堅穴中央東側よりの床面直上から出土している。

(田中)

H-609（図Ⅲ-102、図版40）

位置：50-39・40、51-39・40；標高47.07～47.21mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：51-40区周辺のI層除去後、P.D.3まじりのⅢ層の広がりや確認されたため、土層観察用の土手を設定し、周辺を精査し、遺構検出作業を行う。この結果、茶褐色の土を切っている褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中で暗灰色土の面を検出した。柱穴状小ピットが検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は褐色土（Ⅲ>V。土層図1）、覆土2層は茶褐色系の土（土層図3・4）である。2層の下層は黄色ロームを多く混入する土（土層図4）である。覆土3層は床面上に堆積する土で、砂質、粘質、軟質の土が混在する暗灰色土（土層図5～7・8）である。

重複関係：本住居跡は、H-544・560・613と重複しており、H-613より新しいが、他より古い。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群Ⅱ1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層をわずかに掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。

壁：立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高はほぼ11～20cmである。

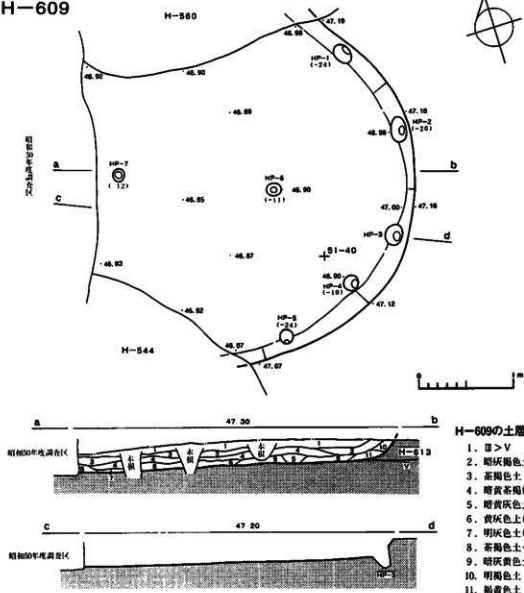
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは7個検出されている。HP-1～5は壁面付近にあり、内傾している。HP-6・7は直立しており、位置的にみて、主柱穴と思われる。

遺物出土状況：遺物は覆土1層でI群Ⅱ1類土器1点、剥片1点、土器片錘1点が出土しただけである。

(和泉田)

H-609



H-609の土層

1. Ⅲ > V
2. 暗灰褐色土
3. 茶褐色土
4. 暗黄茶褐色土
5. 暗黄灰色土(粘質)
6. 黄灰色土(粘質)
7. 明灰色土(砂質)
8. 茶褐色土+黄色ローム
9. 暗黄灰色土(やや砂質)
10. 明褐色土
11. 褐黄色土

H-613 (図Ⅲ-103・104, 図版40・114・147)

位置: 51-39・40; 標高47.08~47.26mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.95/4.50×(4.40)/(4.00)×(0.29)m 床面積: 不明

平面形: 隅丸方形 長軸方向: N-46°-E

確認・調査・土層: 51-40区周辺の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で明茶褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を掘り下げ、調査を行う。覆土下層付近で遺物がやや多く出土し、また炭化物が混入する暗茶褐色土がわずかに落ち込んでいた。この上面で一時期の生活面があったことも考えられる。さらに掘り下げたところ、Ⅴ層中で暗灰黄色土の堅い面を検出し、遺物がこの上面に貼り付いた状態で出土した。また柱状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ全体に茶褐色系の土であるが、三

層に分層した。覆土1層は明茶褐色土(土層図1)、覆土2層は暗茶褐色土(土層図2)である。覆土3層は床面直上に堆積する土で、茶褐色土に黄色ロームがまじり合った黄茶褐色土(土層図5)である。全体に混合土状の汚れた土である。遺物、炭化物などが検出された面は覆土3層上面付近である。

重複関係:本住居跡は、T-260、H-560・561・609・614と重複しており、H-614より新しいが、他のものより古い。

時期:I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面:V層を掘り込んで構築されている。H-561・609の床面とはほぼ同一面である。平坦で、堅い。壁:立ち上がりはゆるやかな傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は、北東壁が23cm前後、南西壁が15cm前後である。

炉跡:焼土などは検出されていない。

付属ピット:柱穴状小ピットは10個検出されている。HP-1・2は壁面にあり、若干内傾している。HP-4・6はH-609の床面で検出されたもので、直立している。HP-7が主柱穴と思われるが、これに対応する小ピットは検出されなかった。

遺物出土状況:出土遺物総数は84点である。この内訳は土器32点、石器等52点である。土器はすべてI群D1類土器で、石器ではスクレイパー、砥石、石錘(19点)などが出土している。(和泉田) 土器:1・2はI群D1類a種。1は波状口縁、2は平縁で、口唇部断面形はともに角形である。1はナデで調整し、口縁部文様は栴門刺突の列点を6条巡らせている。2は器面調整を口唇部内面、外傾面、外方をナデで調整する。

(土器出土位置関係)他遺構に切られるため、全容は不明である(関係図-39)。1・2ともにD1類の古手の要素を持つと考えられる。2は覆土2層(中部)から出土し、H-619(G5区)の覆土1層と接合する。

(富永)

石器:3は硬質頁岩製のスクレイパー。両側縁に刃部を持つ2d類である。4は閃緑岩製のたたき石。円礫を素材とする2類で、両側縁や平坦面中央に敲打痕を持つもの。5は粒子の細かい凝灰岩製の砥石で、両平坦面の砥面は平滑(1類)。6は溝状砥面を持つ片岩製の砥石(2類)。円礫破片を利用したもので、主たる使用面は割れ口の凹凸面である。7・8は2類の石錘で、石質は順に粒子の粗い凝灰岩、砂岩である。砥石やたたき石として使用されている。石錘破片の中には、切り合い関係を持つH-561(覆土2・3層)出土のものと接合する例がある。また、覆土出土の砥石はH-597覆土1層出土のもの(図Ⅲ-53-16)と接合している。

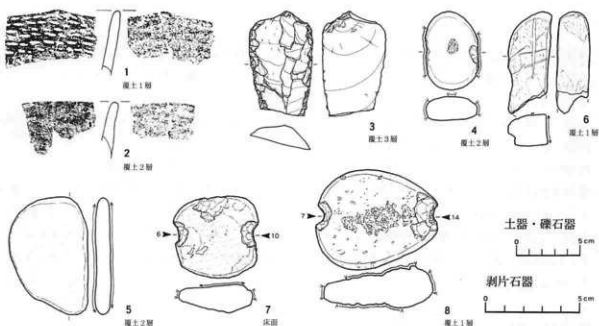
(田中)

H-614(図Ⅲ-105, 図版41・114)

位置:51-40・41;標高47.36~47.44mのほぼ平坦地に位置している。

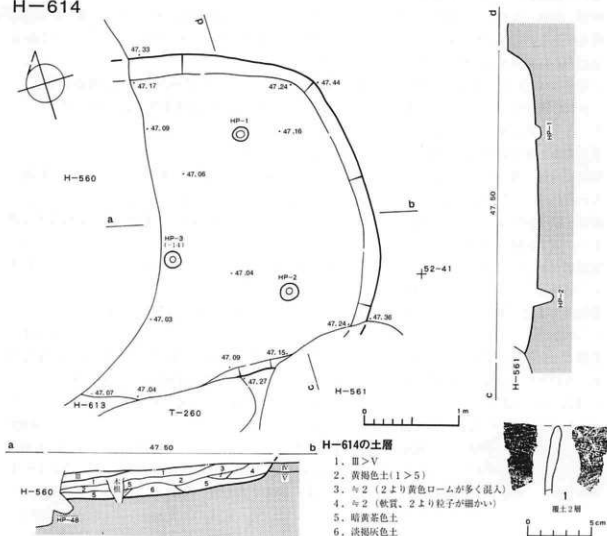
規模:床面積・平面形・長軸方向:不明

確認・調査・土層:51-41区周辺のI層を除去したところ、P.D.3まじりのⅢ層の広がりか確認された。遺構が想定されたため土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、Ⅳ層直上付近で褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中で暗灰黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上りを検出した。掘り込み面はⅢ層中である。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は褐色土(Ⅲ>V。土層図1)、覆土2層は覆土1層>3層の黄褐色土(土層図2~4)である。覆土3層は汚れた暗黄褐色土(土層図5・6)である。



図Ⅲ-104 H-613出土遺物

H-614



図Ⅲ-105 H-614実測図と出土土器

重複関係: 本住居跡は、T-260、H-560・561・613と重複しており、これらより古い。

時期: 周辺包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築している。東から西へやや傾斜し、中央部が若干くぼんでいる。堅い。炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ビット: 柱穴状小ビットは3個検出されている。HP-1・2が主柱穴と思われる。

遺物出土状況: 遺物は覆土上層のⅢ層で少量出土しているが、覆土中ではI群D1類土器1点、剥片4点が出土しただけである。(和泉田)

土器: 1はI群D1類a種の口縁部破片で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面調整はナデで、口縁部内面に2段の押し波状文、外傾面に2条の貝線文を巡らせる。口縁部文様帯は連続復縁文を羽状に施す。(富永)

H-619 (図Ⅲ-106, 図版41・114・147)

位置: 51-39, 52-39; H-561と切り合い関係を持って、南に位置する。

規模・床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: この住居跡はH-561調査終了後、周辺のⅣ層を若干掘り進めた段階で、遺物の散布がみられ、周辺を精査したところH-561南側に茶褐色土の弧状の輪郭が検出されたものである。確認面から床面までは概して浅く、20cm程度であった。

覆土は茶褐色土(1層)が主体で、壁際から床面にかけて薄く暗黄色土(2層)が堆積する。

堅穴の床面レベルや遺物の出土状況、接合関係からみれば、重複関係を持つH-561など一つの堅穴として想定復元できる段階があると考えられる。

重複関係: 本住居跡はH-561と重複関係を持ち、それより古い。

時期: 床面・覆土中から出土した土器片はすべてI群D1類土器であり、縄文時代早期中葉の時期と考えられる。ただし、残存する堅穴は小範囲で、断言するまでに至らない。

床面・壁: 床面はV層をわずかに掘り込んでつくられている。H-561との床面レベル差はほとんどない。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、一部南西隅は直角に近い。

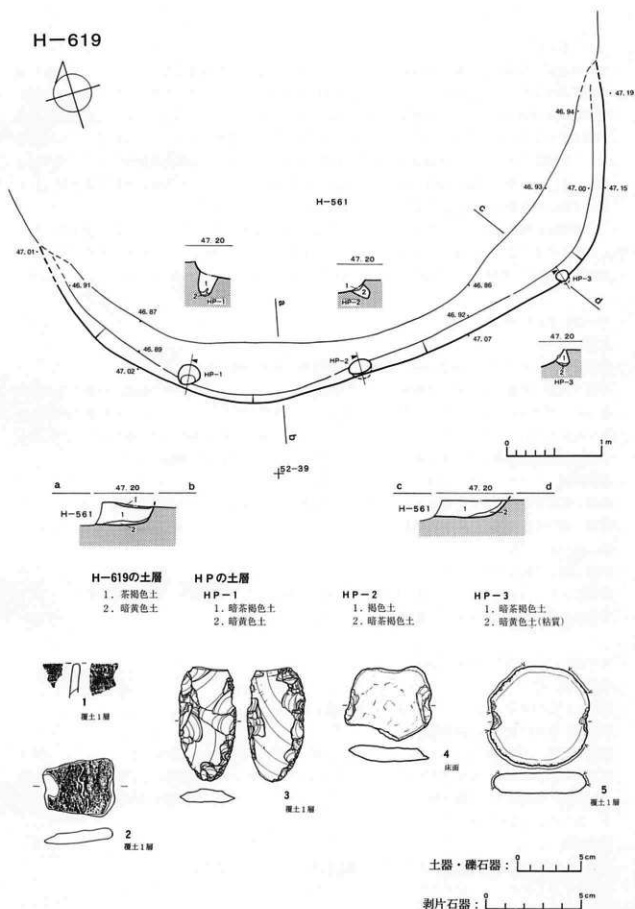
付属ビット: 柱穴状の小ビットは南壁中に3個検出された(HP-1~3)。いずれも堅穴中央に向かって傾斜している。その中ではHP-1は直立気味である。

遺物出土状況: 遺物は床面からの出土はわずかで、覆土中からのものがほとんどである。まともはみられない。(田中)

土器: 1はI群D1類土器。平縁で口唇部断面形は丸形である。口唇部上面をナデ調整し、内面と外面に連続波状文を施す。口縁部文様帯は沈線文で構成する。2はD1類a種の土器片鏟である。

(土器出土位置関係) H-561に大部分を切られる為、全容は不明である(関係図-39)。1・2はともに覆土の下部から出土し、D1類の古手の要素を持つと考えられる。(富永)

石器: 3は硬質頁岩製の、両側縁に刃部を持つ2d類のスクレイパー。4は砂岩製の、5は閃緑岩製の2類の石鏟。5は円礫のはば全周に敲打痕があるもので、敲打痕は周縁に直交する線状の窪みとなるものが多い。床面・覆土中から出土した砥石が、H-561出土のものと接合している(図Ⅲ-100-20)。(田中)



図Ⅲ-106 H-619実測図と出土遺物

(6) G6区

この地区はG5区の北側、平成6年度A地区から続く尾根上に検出されたフラスコ状ピット群の周辺に位置する堅穴を区画したものである。標高は46.00~47.50mほどで、フラスコ状ピット群が尾根上のほぼ平坦面に位置し、その西側に続く斜面は一旦角度を増して急傾斜となり、堅穴のあるG6区西端でまた緩やかになっている。この地区では15軒の堅穴(平成5年度一部調査のH-275・290を含む)が確認されている。重複関係は図Ⅲ-107のとおりで、平成5年度北地区から続く調査区にはH-275・290・564・585・586・594・596・601・610・612が、フラスコ状ピット群の南西側にH-576・584、南東側にH-575・582・575が位置している。

この地区は概要でも述べたように、遺物出土頻度は低い地区である。H-290・586の覆土中で多くの遺物が出土した以外、あまり出土していない。また、フラスコ状ピット群西側の斜面や一部H-585覆土上層に、遺構掘り上げ土とみられる黄色ロームの散布が認められた(図Ⅱ-7)。(田中)

H-275 (図Ⅲ-108)

位置: 48-46

規模: -/-×-/×(0.20)m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-594・596調査中、両遺構間にパミスをやや多く含む暗褐色土の落ち込みを確認した。プランは明瞭ではないが柱穴状の小ピットが検出されたことから、平成5年度に調査したH-275の続きとして調査を行った。暗褐色土を除去し、覆土を順次掘り下げ、床面、わずかに残る壁の立ち上りを確認した。覆土はほぼ二層に分けられる。層厚は約15~20cmである。

重複関係: H-594・596と重複し、これらより古い。

時期: 周辺包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: 残存する床面はほぼ平坦である。

壁: 緩やかに立ち上がる。

炉跡: 焼土は検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットを1個検出した。壁際をめぐるものと思われ、内傾している。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-290 (図Ⅲ-109・110, 図版42・115・147)

位置: 48-42

規模: 4.50/4.00×3.40/2.90×0.40m 床面積: (10.48)m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-77°-E

確認・調査・土層: IV層上面で検出した。覆土上部には掘り上げ土の堆積が見られた。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。平成5年度に調査したH-290の続きとして調査を行った。Ⅲ層を除去し、覆土と思われる暗褐色土を順次掘り下げ、床面、壁の立ち上りを確認した。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土の深さは約40cmである。

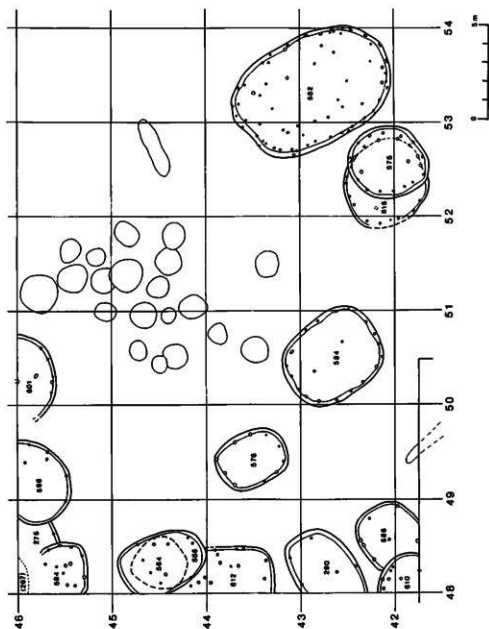
重複関係: なし。

時期: I 群IⅠ類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅くしめる。

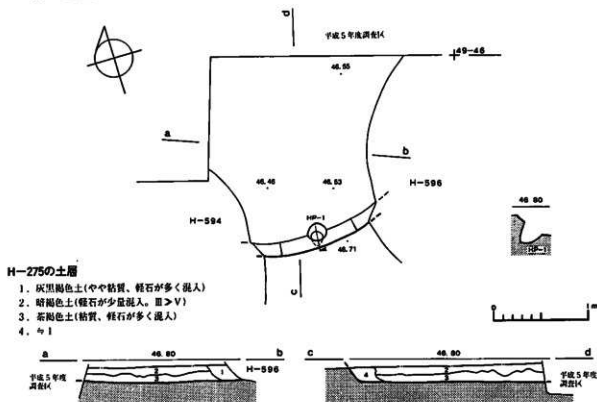
壁: 壁高は約40cmで、傾斜はやや急角度で立ち上がる。

炉跡: 焼土などは検出されていない。



図III-107 G6区竪穴住居跡位置図

H-275



H-275の土層

1. 灰黒褐色土(やや粘質、軽石が多く混入)
2. 暗褐色土(軽石が少量混入。Ⅲ>Ⅴ)
3. 茶褐色土(粘質、軽石が多く混入)
4. Ⅳ

図Ⅲ-108 H-275実測図

付属ピット：柱穴状小ピットを5個検出した。HP-1・2・4は壁際をめぐるもので内傾している。HP-3も壁際に位置するが杭状ではほぼ直立している。HP-5は主柱穴と思われる。

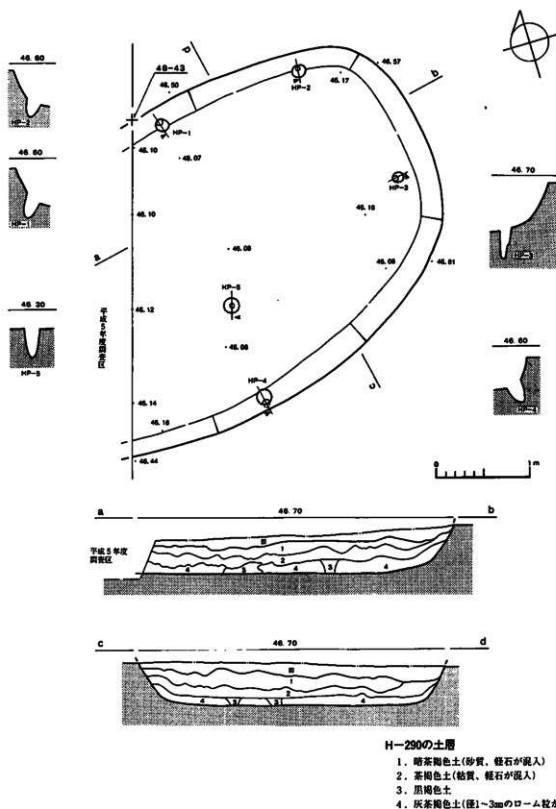
遺物出土状況：遺物は覆土中から多く出土しており、土器はすべてⅠ群D1類土器である。床面からは台石1点が出土している。(笠原)

土器：1・2はⅠ群D1類a種、3はD1類b種ですべて口縁部破片である。口縁部形態が波状口縁(3)と平縁(1・2)があり、口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。器面調整はナデ(1・3)とすり消し条痕(2)があり、文様は鋸歯状沈線文(3)、貝線文(3)、楕円刺突の列点となるもの(1)、押引文(3)、押引波状文(1)がある。3は2段に重層する背圧痕文が施される。その他に2は内面に煤が大量に付着する。

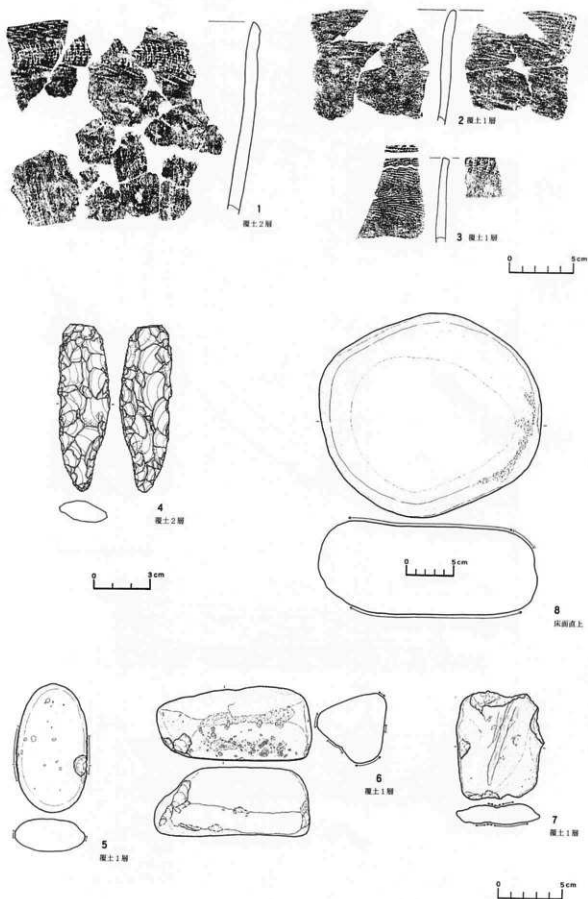
(土器出土位置関係) 平面分布では南側に密度が高い。垂直分布では覆土の上部からのみ出土する。1～3は堅穴覆土内での接合である。他にH-586と接合する破片がある(関係図-41)。(富永)

石器：4は硬質頁岩製のスクレイパー。両面が調整されているが、全体に粗い。上端には素材剥片の打面が残され、側面もゆるい波状となっている。5は安山岩製、2類のたたき石。両側縁に敲打痕を持ち、敲打痕は一部線状となっている。6は閃緑岩製、1類のすり石。典型的形状のもので、平坦面に敲打痕がみられる。7は凝灰岩製、平坦面両面に溝状の砥面を持つ2類の砥石。溝幅は4mm程度である。8は床面直上から出土した安山岩製の石皿。図示していないが、石錘が5点出土しており、挟り部に敲打痕を持つものが多い。(田中)

H-290



図Ⅲ-109 H-290実測図



図Ⅲ-110 H-290出土遺物

H-564 (図Ⅲ-111)

位置: 48-44

規模: $-\text{ノ}- \times (2.80) / (2.50) \times (0.40) \text{m}$ 床面積: $(6.72) \text{m}^2$ 平面形: 不整形円形? 長軸方向: $N-73^\circ-W$

確認・調査・土層: I層除去後のⅢ層上面で、一部まだら状のP.D. 3の広がりが見られた。これを掘り下げたところ、Ⅲ>黄色ロームの落ち込みを検出した。土層断面の観察や床面調査中に段差が確認されたことから重複があると判断された。当初掘り下げていた部分をH-585、これを切っている部分をH-564として調査した。

覆土は上部に暗褐色土(土層図1)、下部に暗黄褐色土(土層図2)が堆積している。

重複関係: H-585と重複しており、これより新しいと思われる。

時期: 周辺包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: 残存する床面はほぼ平坦である。

壁: 検出するにいたらなかった。

炉跡: 焼土は検出されていない。

付属ピット: 推定の床面範囲内に柱穴状小ピットを8個検出したが、この堅穴に付属するものは特定できなかった。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-585 (図Ⅲ-111, 図版45)

位置: 48-44

規模: $4.60 / 4.10 \times 3.40 / 3.00 \times 0.45 \text{m}$ 床面積: 10.61m^2 平面形: 隅丸長方形 長軸方向: $N-11^\circ-E$

確認・調査・土層: 確認状況は前述のとおりで、H-564の南北に残る部分である。覆土は暗褐色土(土層図3)や軽石を多量に含む黄褐色土(土層図4)である。また、堅穴南側と北側の一部に、掘り上げ土とみられる土壌の堆積が覆土上層に認められた。

重複関係: H-564・612と重複し、H-564より古く、H-612より新しい。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。H-564に壊され、その南北に残る部分と考えられる。残存部分は平坦で、堅くしめる。

壁: 壁高は約40cmで、傾斜はやや急角度で立ち上がる。

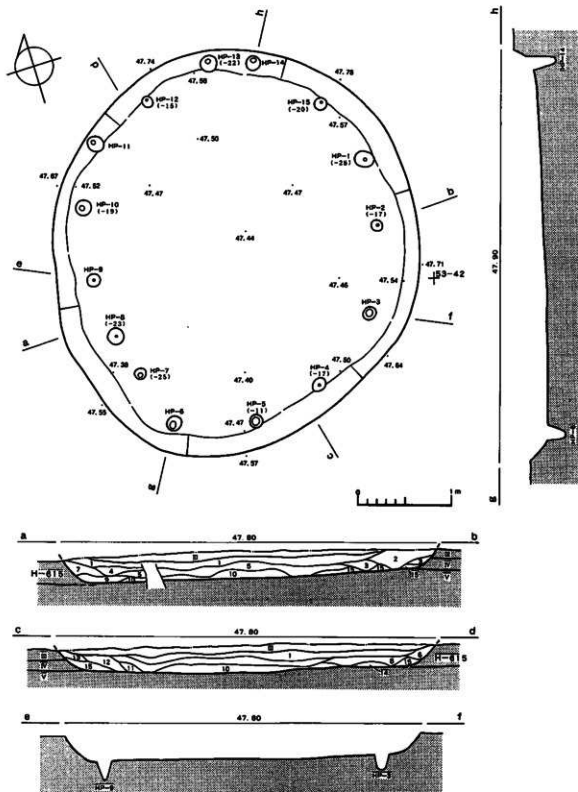
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 確実にこの堅穴に付属する柱穴状小ピットは、HP-6・7・10の3個である。いずれも堅穴中央に傾いている。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-575



H-575の土層

- | | | |
|---------------|----------------------------|------------------------------|
| 1. Ⅲ>V | 6. Ⅲ>V | 11. 暗灰黄色土(軟質、黄色ロームが混入) |
| 2. 明茶褐色土 | 7. Ⅳ1 (やや粘質、1より黄色ロームが多く混入) | 12. 暗茶褐色土 |
| 3. 1>15 | 8. 暗茶灰色土 | 13. Ⅳ2 (2より褐色土が多く混入) |
| 4. 暗褐色土(軟質) | 9. 茶黄色土 | 14. 暗黄色土 |
| 5. 茶褐色土(やや粘質) | 10. 黄茶色土 | 15. Ⅳ11 (軟質、11より黄色ロームの混入少ない) |

図Ⅲ-112 H-575実測図

H-575 (図Ⅲ-112, 図版43)

位置: 52-41・42; 標高47.56~47.78mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 4.32/3.88×3.90/3.60×0.28m 床面積: 10.64㎡

平面形: 長円形 長軸方向: N-20°-E

確認・調査・土層: 52-41・42区周辺のI層を除去したところ、黒味のあるⅢ層の広がり方が確認された。遺構が想定されたことから、土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しずつ掘り下げ、ほぼⅣ層直上付近で暗褐色土、茶褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で灰黄色土のやや堅い面と柱穴状小ピットも検出した。このためこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ、土層図1・4・7)である。覆土2層は混合土状の茶褐色土(土層図5)である。覆土3層は床面直上に堆積する土で、黄色ロームが混入するやや汚れた茶黄色土(土層図9・10)である。

重複関係: 本住居跡は、H-615と重複しており、これより新しい。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦である。やや堅いが、部分的に砂質で軟質の部分も見られる。

壁: 立ち上がりは、全体にほぼ急傾斜である。検出面からの壁高は北壁が16~20cm、西壁が16~25cm、南壁が13cm前後、東壁が14~21cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは15個検出されている。すべて壁際で検出されたもので、全体に内傾している。

遺物出土状況: 覆土2層でI群D1類土器1点、Rフレイク1点が出土しているだけである。

(和泉田)

H-576 (図Ⅲ-113)

位置: 49-43

規模: 3.75/3.30×3.00/2.60×0.30m 床面積: 7.64㎡

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-6°-W

確認・調査・土層: 包含層調査中にⅣ層直上で、Ⅲ>黄色ロームの落ち込みを確認した。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。層厚は約30cmである。また、床面から灰色で砂質の濁川カルデラ起源と思われる火山灰(Ng-a)を検出した。

重複関係: なし。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅くしまる。

壁: 壁高は約20cmで、傾斜はやや緩やかに立ち上がる。

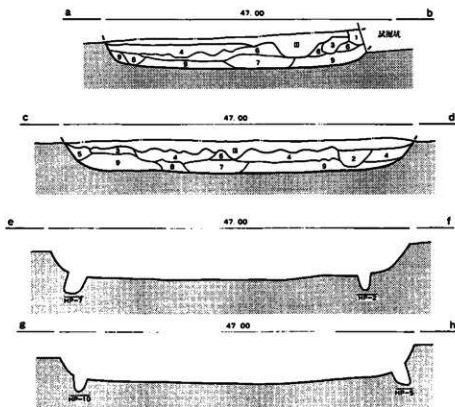
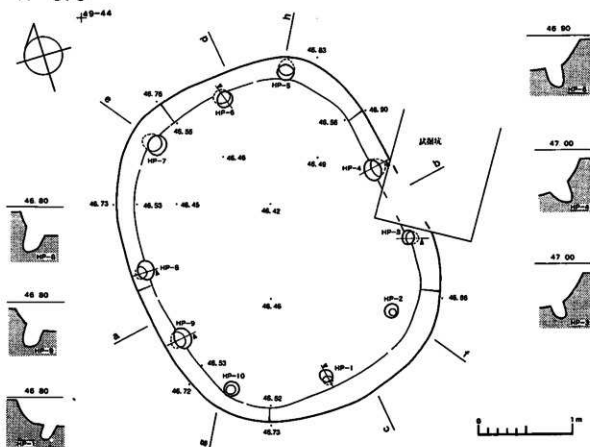
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 壁際をめぐり、内傾する柱穴状小ピットを10個検出した。主柱穴と思われるものは確認できなかった。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-576



H-576の土層

1. 灰黒褐色土 (風刺木灰?)
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黒褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 灰色土 (砂質)
8. 暗黄褐色土
9. 黄褐色土

HPの土層

- HP-1: 暗灰褐色土
- HP-2: 灰黄褐色土
- HP-3: 暗灰褐色土
- HP-4: 灰黄褐色土
- HP-5: 暗灰褐色土
- HP-6: 暗灰褐色土
- HP-7: 灰黄褐色土
- HP-8: 灰黄褐色土
- HP-9: 暗灰褐色土 (ローム粒が混入)
- HP-10: 暗灰褐色土

図Ⅲ-113 H-576実測図

H-582 (図Ⅲ-114, 図版44・115・148)

位置: 52-42・43, 53-42・43, 54-42; 標高47.71~47.97mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 8.45/8.10×5.73/5.35×0.27m 床面積: 36.99㎡

平面形: 楕円形 長軸方向: N-15°-W

確認・調査・土層: 53-43区周辺のⅠ層を除去したところで、黒味のあるⅢ層の広がり確認された。遺構が予想されたため、土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。Ⅳ層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で堅い暗黄灰色土を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土Ⅰ層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ、土層図1)である。覆土Ⅱ層は混合土状の茶褐色土(土層図4・7)で、下層は上層より黄色ロームが多く混入している。覆土Ⅲ層は床面直上に堆積する土で、軟質の汚れた黄茶色土(土層図14)である。

重複関係: 本住居跡は他の遺構と重複していない。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。部分的に湧川火山起源の淡緑灰色粗砂(Ng-a)が見られ、その上を床面としている。ほぼ平坦で、やや堅い。

壁: 立ち上がりは全体に緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は北壁が16~22cm、西壁高が14~20cm、南壁高が19cm前後、東壁高が17~22cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは69個検出されている。HP-1~18は壁面にあり、やや内傾している。ほぼ杭状で浅い。HP-19~47は壁隙をめぐめるもので、直立している。HP-21・22・39・40・41・42・44は浅い杭状のものである。HP-55~68は主柱穴と思われる。小ピットの配列などから想定すると、HP-55・58・63・64(6本柱)、HP-55・56・57・58・59・60・61・62(8ないしは9本柱)、HP-65・66・67・68(8本柱)という構造が考えられる。建て替えが数度行われたものであろう。

遺物出土状況: 床面付近から遺物は出土していない。覆土Ⅰ層でⅠ群D1類土器12点、砥石1点、石錘3点などが出土している。

(和泉田)

土器: 1はD1類a種の口縁部破片。平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面は内外ともにナデで調整される。

(富永)

石器: 2は流紋岩製の石錘。鉄分の付着が著しい。出土した石錘3点のうち、2点は破片で接合している。

(田中)

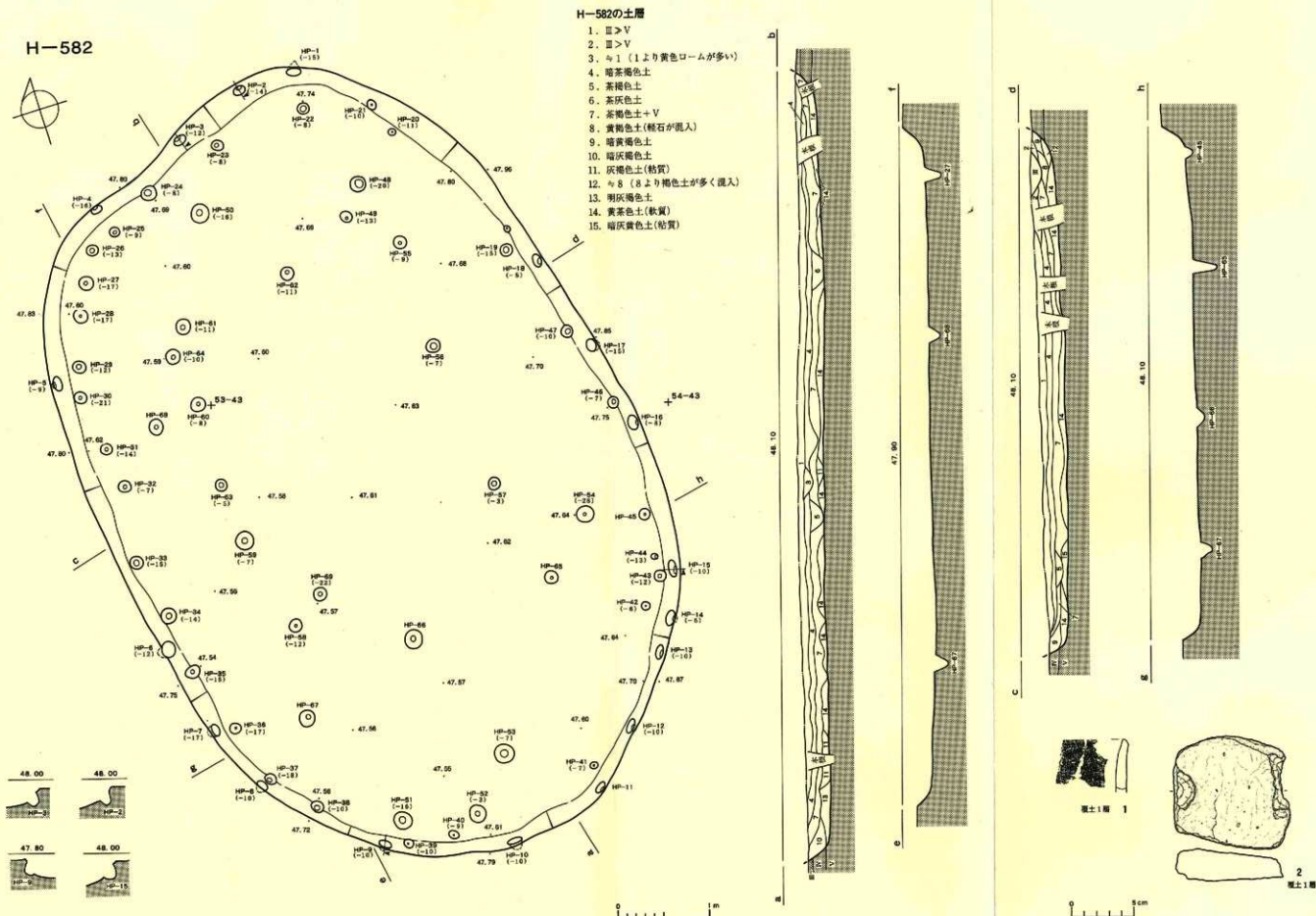
H-584 (図Ⅲ-115, 図版45・115・148)

位置: 49-42, 50-42・43, 51-42; 標高47.12~47.42mの東から西へ傾斜する緩斜面上に位置している。

規模: 5.52/5.06×4.40/4.00×0.35m 床面積: 15.00㎡

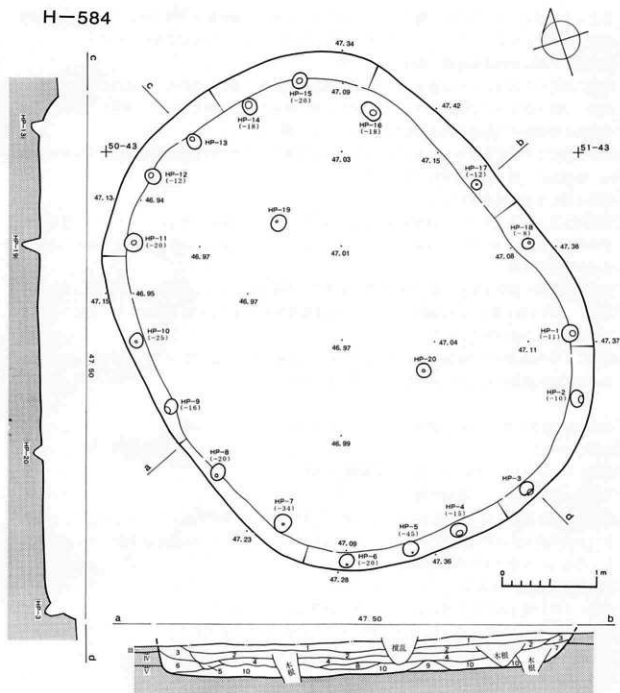
平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-20°-W

確認・調査・土層: 50-42・43区周辺の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。Ⅴ層中で暗黄色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は四層に分けられる。覆土Ⅰ層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ、土層図1)、覆土Ⅱ層は褐色土(Ⅲ>Ⅴ、土層図2)である。覆土Ⅲ層は覆土Ⅱ層と4層がまじり合った汚れた茶黄



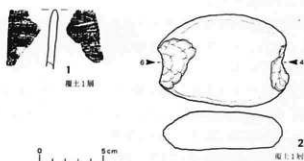
図III-114 H-582実測図と出土遺物

H-584



H-584の土層

1. 暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ)
2. 褐色土(Ⅲ>Ⅴ)
3. 暗褐色土(軟質、粒子細かい)
4. 茶褐色土(2+10)
5. 暗黄褐色土(2>黄色砂)
6. 茶褐色土
7. 明灰褐色砂
8. 暗茶褐色土+黄色ローム(砂質)
9. 黄色ローム(粘質)
10. 明灰黄色土(部分的に砂質と粘質のところがある)



図Ⅲ-115 H-584実測図と出土遺物

色土 (土層図4・5) である。覆土4層は床面直上に堆積する明灰黄色土 (土層図10) で、砂質と粘質の土が部分的にまじっている。覆土は木の根痕が多く、全体的に不安定な堆積状態である。

重複関係: 本住居跡は他遺構と重複していない。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。東から西へゆるやかに傾斜している。平坦で、堅い。北東側床面には湧川火山起源の淡緑灰色粗砂 (Ng-a) が見られる。

壁: 全体に立ち上がりはゆるやかな傾斜である。検出面からの壁高は北壁が17~24cm、西壁が19~27cm、南壁が21~25cm、東壁が24~30cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは20個検出されている。HP-1~18は壁際をめぐるもので、全体にやや内傾している。HP-19・20は直立し、ほぼ長軸方向にみられることから、主柱穴と思われる。2本柱が想定される。

遺物出土状況: 遺物は覆土1層でI群D1類土器3点、石錘4点が出土しているだけである。(和泉田)
土器: 1はD1類a種の口縁部破片。平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面は内外ともにすり消し条痕で調整される。(富永)

石器: 2は円礫素材の閃緑岩製の石錘。両挟り部に敲打痕がみられる。図示していない他の石錘には、挟り部に敲打痕を持つもの、持たないものがともにみられる。(田中)

H-586 (図Ⅲ-116~118, 図版46・99・100・115・148)

位置: 48-42

規模: 一ノノ×3.45/3.00×0.25m 床面積: 不明

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-76°-E

確認・調査・土層: H-290調査終了後、南側の包含層精査中に暗褐色土の広がりを確認し、Ⅲ>黄色ロームの落ち込みを検出した。やや堅くしまる床面からは径1~5cm程度の炭化物が多く認められた。落ち込みの深さは約25cmである。

重複関係: H-610と重複し、これより古い。

時期: I群D類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層中に構築されている。南西方向にわずかに傾斜し、やや堅くしまる。

壁: 壁高は約25cmで、傾斜はやや急角度で立ち上がる。

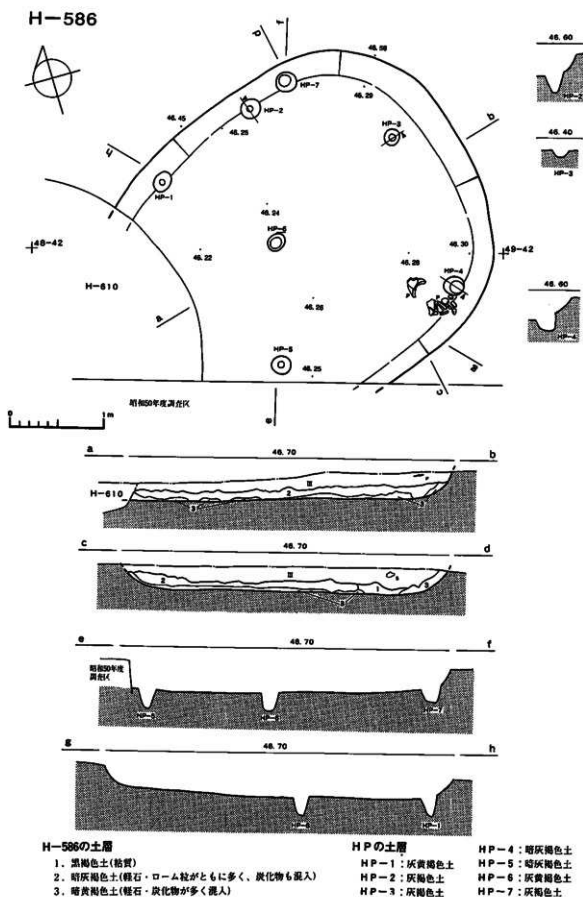
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットを5個検出した。HP-1・2・4・7は壁際に位置し内傾している。他に明瞭なものはない。

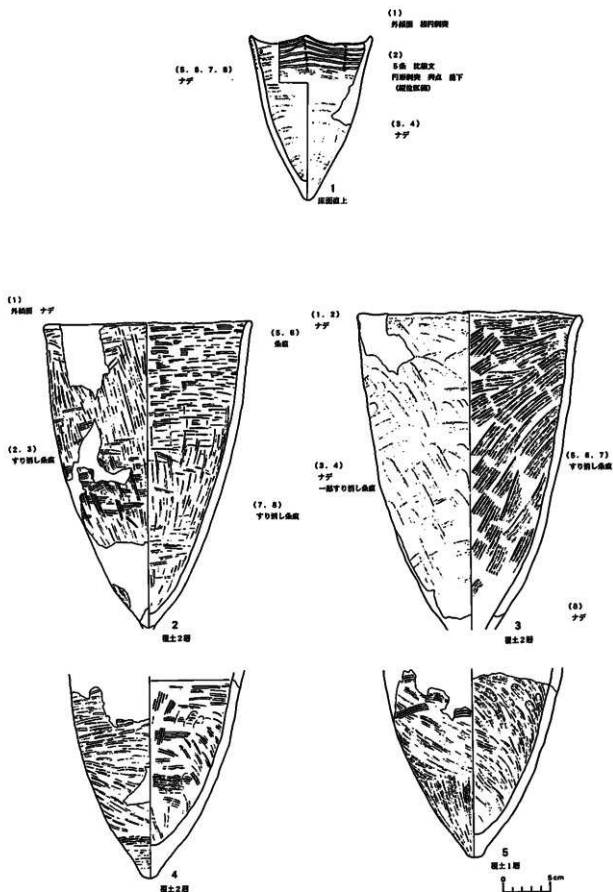
遺物出土状況: 遺物の多くは覆土中からの出土である。土器は覆土中からI群D2類土器6点が出土した以外、すべてのI群D1類土器である。床面及び床面直上からはD1類土器4点、剥片1点などが出土している。(笠原)

土器: 1~8はI群D1類a種で、4・5は乳房状尖底である。胴部と尖底部の接合部位は内面上方向、外面下方向に成形される。4は乳房状突起部周辺に横位に器面がこすれて挟られた痕跡がみられる。9はD2類で器面を条痕で調整する。

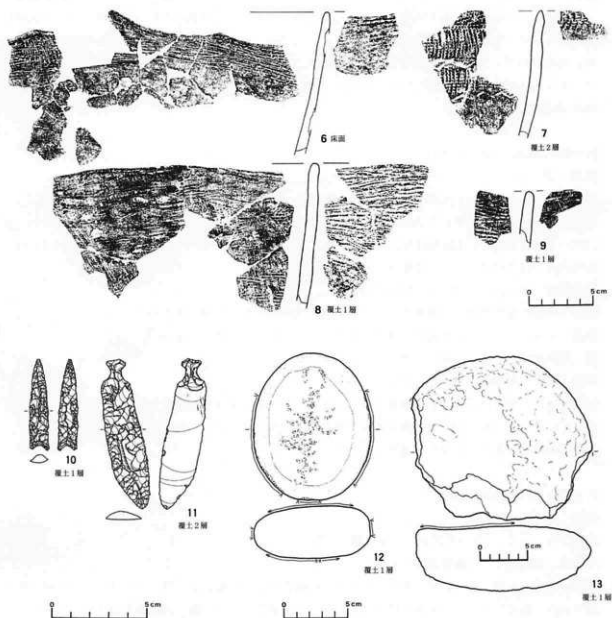
D1類の口縁部形態は波状口縁 (1・6・9) と平縁 (2・3・7・8) があり、口唇部断面形は角形 (2)、丸形 (8)、切り出し状 (1・3・5・7・9) がある。器面調整はナデ (1~3)、すり



図Ⅲ-116 H-586実測図



図Ⅲ-117 H-586出土土器(1)



図Ⅲ-118 H-586出土土器(2)・石器

消し条痕(2・3・5)、条痕(2・4・8)がある。8の内面は条痕で調整の際に砂粒が動いたケズリ状の跡が残る。文様は沈線文(1)、鋸歯状沈線文(7)、貝線文(7)、刺突は円形刺突(1)、楕円刺突(1)、列点となるもの(1)、貝殻文は櫛目状腹縁文(6)、連続腹縁文(7)、押引波状文(7)がある。

(土器出土位置関係) 平面分布では南東側に密度が高くなる。垂直分布ではH-586とH-290の上層はほとんど同一のレベルである(関係図-41)。

1・2・6・7はH-290の覆土上部と接合する。相互に接合関係がみられ、これらの遺物は一連のものと考えられる(関係図-41)。これらは一括して廃棄されたと考えられる。1は床面直上(下部)から出土し、H-290の覆土1層、48-42区のⅢ層と接合する。最下部に入る9はD2類である。

(富永)

石器：10は硬質頁岩製、2b類の石鏃。まさに細身・長身鏃である。左面に、一部素材の剥離面を残している。11も硬質頁岩製の石鏃。つまみはT字形で、上端に素材剥片の打点の一部を残すが鋭利に調整している。全体の側面観は直線状である。12は閃緑岩製、2類のすり石。平坦面の敲打痕はすり面以前のもののようである。13は流紋岩製の石皿としたもの。大きく破損しておりはっきりとしませんが、すり面は部分的で破断部で丸みがあることから、この状態での砥石としての使用も考えられる。他に石錘が出土している。(田中)

H-594 (図Ⅲ-119, 図版47)

位置：48-45

規模：—/—×—/—×0.25m 床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：G 6区北西端の包含層調査中に、粒子の粗い暗褐色土の落ち込みを検出した。堅穴状の遺構を想定し、土層観察用のベルトを設け順次掘り下げを行い、床面、壁の検出作業を行った。落ち込みの深さは約25cmで、遺物等は出土していない。

重複関係：H-275と重複し、これより新しい。

時期：周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層をわずかに掘り込んで構築されている。ほぼ水平で堅くしまる。

壁：壁高は約25cmで、傾斜はやや急角度で立ち上がる。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状ピットを12個検出した。HP-1・4・5は壁際に位置するものであるが、ほぼ直立している。HP-6・10はやや掘り過ぎの感がある。直立するが、不明瞭である。

遺物出土状況：覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-596 (図Ⅲ-120, 図版47)

位置：48-45, 49-45

規模：—/—×—/—×0.25m 床面積：不明

平面形：長円形？ 長軸方向：不明

確認・調査・土層：49-45区を中心とする包含層調査中に暗茶褐色土(Ⅲ>黄色ローム)の堅穴状の落ち込みを確認した。直交する土層観察用のベルトを設定し、その脇に試掘溝を設けながら全体に少しずつ掘り下げた。明瞭ではないが壁際をめぐるように柱穴状の小ピットが検出されたことから、遺構を想定し調査を継続した。落ち込みの深さは約30cmである。

重複関係：H-275と重複し、これより新しい。

時期：周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと考えられる。

床面：V層を掘り込んで構築されている。東から西に傾斜している。やや堅い。

壁：壁高は約20cmで、傾斜は緩やかに立ち上がる。

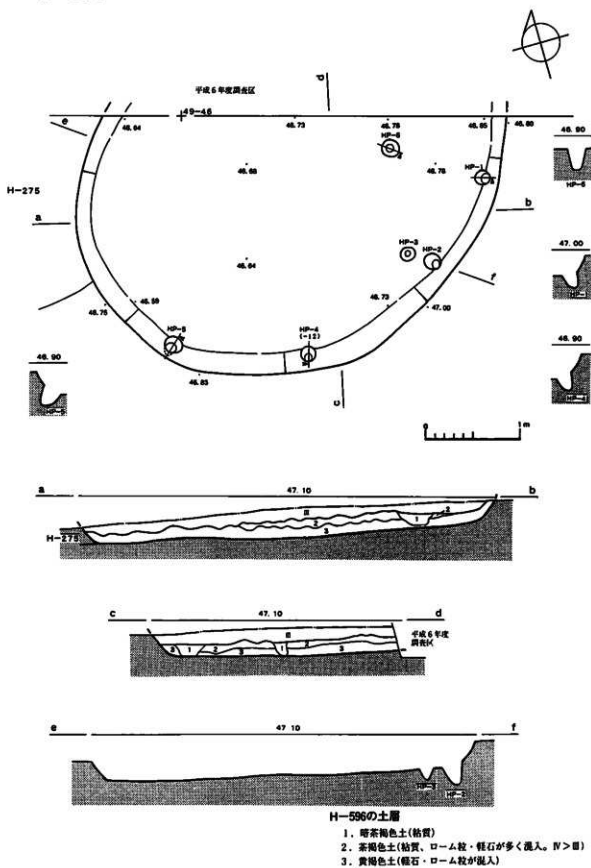
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状ピットを6個検出した。HP-5は壁際をめぐるもので内傾する。他は明瞭でない。

遺物出土状況：覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)

H-596



図Ⅲ-120 H-596実測図

H-601 (図Ⅲ-121)

位置: 49-45, 50-45

規模: -/-×-/×0.20m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: IV層直上で黒色のやや強い暗褐色土>黄色ロームの落ち込みを確認した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。明瞭ではないが、壁際をめぐる柱穴状の小ピットが検出されたことから、遺構を想定し調査を継続した。落ち込みの深さは約30cmである。

重複関係: なし。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと考えられる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。わずかに東から西に傾斜している。やや堅い。

壁: 壁高は約20cmで、傾斜は緩やかに立ち上がる。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットを5個検出した。HP-4を除いて、他には明瞭なものはない。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。 (笠原)

H-610 (図Ⅲ-122, 図版48)

位置: 48-41・42

規模: -/-×-/×0.30m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-290の調査終了後の包含層調査中、G6区南西隅で扇形に広がる暗褐色土を確認した。土層観察用のベルトを設定し掘り下げたところ、Ⅲ>黄色ロームの落ち込みを確認した。床面からは径1~5cm程度の炭化物が少量認められた。層厚は約30cmである。

重複関係: H-586と重複し、これより新しい。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと考えられる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。ほぼ水平で堅くしまる。

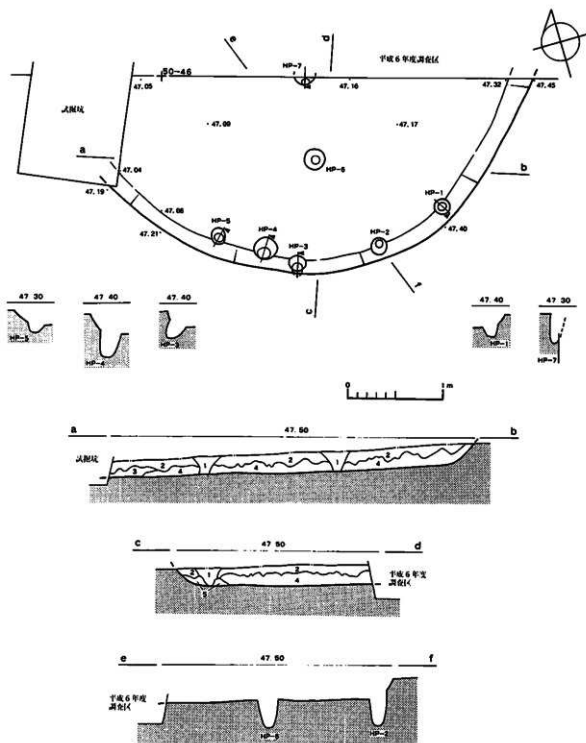
壁: 壁高は約25cmで、残存する壁の立上りはやや急である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットを7個検出した。HP-1・2は壁際に位置するものであるが、傾きは少ない。他は概して浅く明瞭でない。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。 (笠原)

H-601

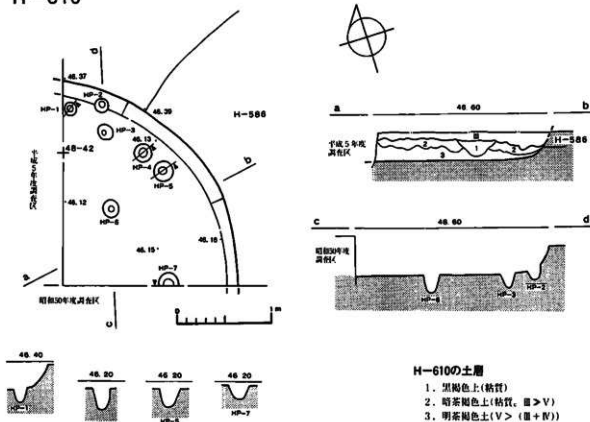


H-601の土層

1. 灰黒褐色土(砂質、粒子は粗い。木の根?)
2. 暗褐色土(やや粘質。Ⅲ>Ⅴ)
3. 暗茶褐色土(やや粘質。Ⅲ+Ⅴ)
4. 暗黄褐色土(粘質。Ⅴ>(Ⅲ+Ⅴ))
5. 暗茶褐色土(粘質。Ⅲ+Ⅴ)

図Ⅲ-121 H-601実測図

H-610



図Ⅲ-122 H-610実測図

H-612 (図Ⅲ-123, 図版48)

位置: 48-43・44

規模: -/-x-x/-x0.30m 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: H-585調査終了後、南側の包含層精査中にⅢ>黄色ロームの落ち込みを検出した。直交する土層観察用のベルトを設定しトレンチ調査により床面、壁の立ち上がりの検出作業を行った。床面からは径1~5cm程度の炭化物が点在するように少量認められた。覆土は大きく三層に分けられ、深さは約30cmである。

重複関係: H-585と重複し、これより古い。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などから、縄文時代早期中葉の時期のものと考えられる。

床面: V層を掘り込んで構築されている。わずかに東から西に傾斜する。

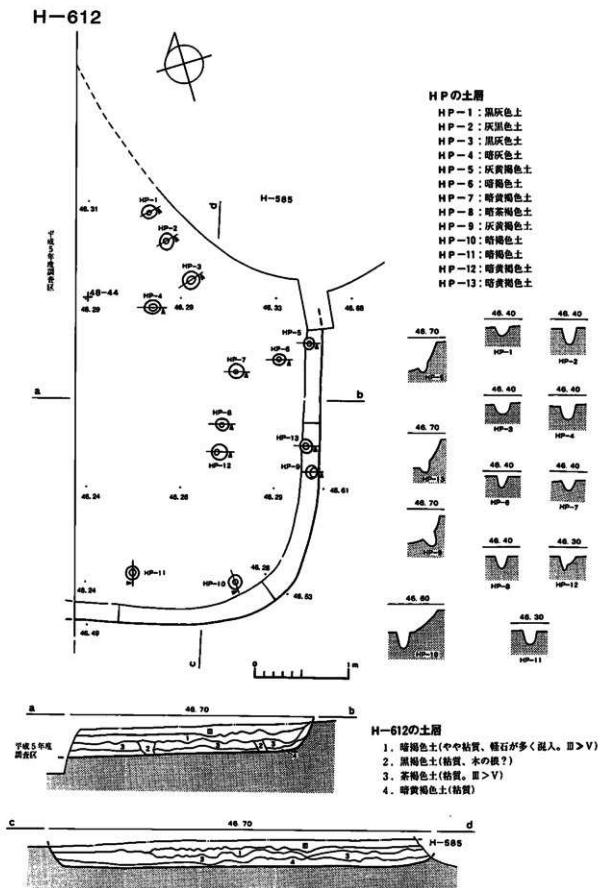
壁: 壁高は約25cmで、壁の立上りはやや急である。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットを13個検出した。いずれも浅く明瞭なものは認められないが、HP-2・10・11はおおむね先端部が細くなり、杭状に近いものである。

遺物出土状況: 覆土、床面から遺物は出土していない。

(笠原)



図Ⅲ-123 H-612実測図

H-615 (図Ⅲ-124)

位置：51-41・42, 52-41・42；標高47.24～47.44mのほぼ平坦地に位置している。

規模：(5.14)／(4.78)×(4.54)／(4.20)×(0.26)m 床面積：(14.81)m²

平面形：楕円形 長軸方向：N-45°-W

確認・調査・土層：試掘坑で覆土状の土の落ち込みと柱穴状小ピットが確認された。このため土層観察用の土手を設定し、周辺を精査しながら、遺構検出を行う。この結果、Ⅳ層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げる。H-575の床面下に汚れた土が見られ、H-615の床面がH-575の床面下に構築されていることが明らかとなる。Ⅴ層中で暗黄色土の面で柱穴状小ピットが検出され、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は三層である。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ、土層図1)で、壁際にはⅢ>Ⅴ(土層図2)が見られる。覆土2層は混合土状の暗茶褐色土(土層図3)である。覆土3層は床面上に厚く堆積する土で、粘質の灰褐色土(土層図4・5)である。ただ東側床面上(H-575の床面下)には黄色ローム+褐色土の汚れた土が堆積している。

重複関係：本住居跡は、H-575と重複しており、これより古い。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築している。やや砂質である。

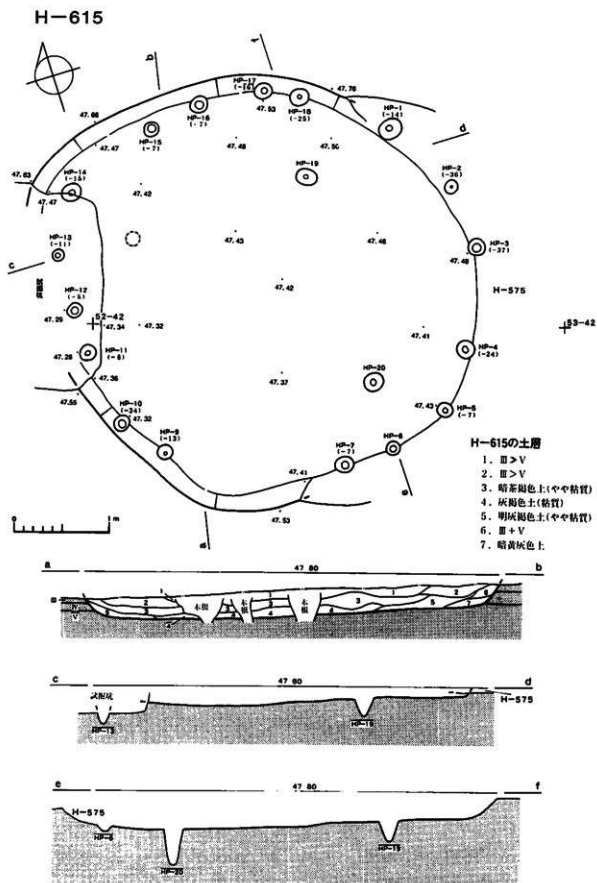
壁：立ち上がりは全体に緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は北壁が16～19cm、南壁が12～19cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

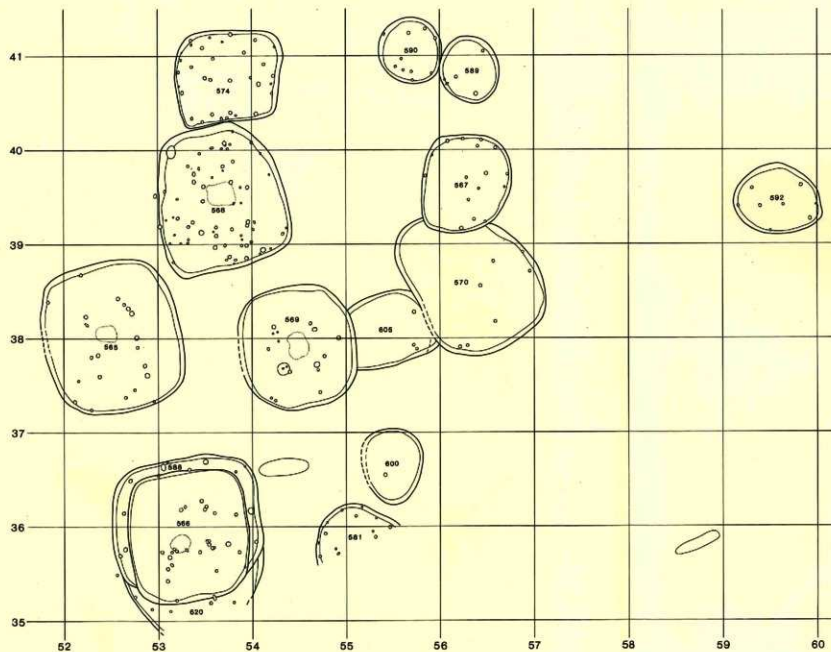
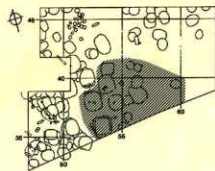
付属ピット：柱穴状小ピットは19個検出されている。HP-1～7・9～18は壁際をめぐるもので、直立している。HP-19・20は直立しており、位置的にみて主柱穴と思われ、4本柱が想定される。

遺物出土状況：覆土、床面付近から遺物は出土していない。

(和泉田)



[G7区]



図III-125 G7区竪穴住居跡位置図



(7) G7区

この地区はG5区の南東側、標高46.00～47.50mの北北東から南南東へ傾斜する緩斜面上に立地する堅穴を区画したものである。G2・4区の東縁から4～8mの距離を置いて南北方向2列に並ぶH-565・566(588・620と重複)・568・569の大型堅穴と、それ以东にあるH-567・570・574・581・589・590・592・600・605の計15軒の堅穴である(図Ⅲ-125)。一部重複関係を持つ堅穴はあるが、G区南西側で区画したG1～4区のようなおびただしい重複関係はみられない。

H-565・566・568・569の大型堅穴はⅡ章でも述べたように、I層除去後にP.D.3を伴う大きな落ち込みとして確認されたものである。覆土上層にはP.D.4が確認され、自然堆積層Ⅲ層が分層(Ⅲa層・Ⅲb層)された。遺物はⅢa層からほとんど出土せず、Ⅲb層から覆土中に多くの遺物を包含していた。これら堅穴は平面形が隅丸長方形で、ほぼ中央に掘り込み炉を持ち、炉を巡って配置される多くの柱穴が検出されている。堅穴の拡張などの建て替えを考慮しなければならないものである。このほかの堅穴は炉が確認されず、構造物、遺物出土点数でも大型堅穴と大きな違いがある。

I層除去後にはまた、H-565・588間およびその周辺に遺物を包含する暗赤褐色土(Ⅲd層)が確認された。これは堅穴の掘り上げ土と考えられ、その下部には黒色腐植土層(Ⅲb層)が残存し、遺物はほとんど出土しない。堅穴内にはこの腐植土層から連続する上層の堆積は認められず、堅穴の掘り込み面がⅢb層にあることが再確認された。

この地区には堅穴のほか、15基の土坑が存在する。堅穴覆土中につくられる土坑(P-305・306・308～313)や単独に存在する土坑(P-352)、堅穴に切られる土坑(P-355・357～361・367)がある。そのうちH-588西側の土坑P-361・367の覆土上層にも暗赤褐色土の堆積が確認されている。

(田中)

H-565(図Ⅲ-126～131, 図版49・50・100・116・149～151)

位置: 51-37・38, 52-37・38, 53-37・38; 標高46.50mほどの緩斜面上、南北に並ぶ大型堅穴群のほぼ中央に位置する。

規模: 8.10/7.56×7.26/6.82×0.68m 床面積: 45.52㎡

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-4°-E

確認・調査・土層: この堅穴はI層除去後、P.D.3を中心にした黒色土や茶褐色土の大きな落ち込みとして確認されたものの一つである。堅穴北側、H-561間はⅣ層上面近くまで耕作が及んでいた。

土層観察用の土手を、南側の堅穴(H-566など)との関係を捉えることを目的に連続して南北方向に1本、それに直交するよう東西方向に2本設定して調査にあたった。P.D.3から順次掘り下げたところ、黒色土(Ⅲ層)中に暗黄褐色から茶褐色のやや砂質土壌(P.D.4。腐食化がかなり進んでいる)がまだらに分布する面的広がり確認された。この面で一旦精査し、黒色土の円形の輪郭が確認できたため、P-305・306として調査を行った。坑底はともに堅穴覆土中にあり、深さ20cmほどの小型の土坑で、遺物は出土していない。土坑調査終了後、再度掘り下げる。この段階でⅢb層中から遺物が出土し始め、覆土1層下面では押しつぶされた状態で出土する土器もみられた(図Ⅲ-127遺物出土状況図, 図Ⅲ-128-2)。また、堅穴南東側で、剥片の集中が堅穴内に流れ込む状態で出土している。この段階までくると堅穴中央部の覆土中に黄色ローム粒が目立つようになり、床面近くまで調査が進んだことが予想されたため、土層観察用の土手沿いにサブ・トレンチを設定し、床面の確認と壁の検出を行った。土手を取り払った段階で、堅穴内に方眼を組み、床面直上の土壌を採取、炭化植物種子などの水洗選別を実施している。その結果はV章-7を参照されたい。

竪穴調査終了後に、北壁・東壁で、それぞれ土坑を (P-355・358~360) を確認している。

覆土は大きく三層に分けられる。上部に茶褐色土 (土層図 1・1') が堆積し、壁際に暗茶色~暗茶褐色土がいわゆる三角堆積する (土層図 2~4)。床面直上に黄色ローム粒を多く含む暗黄褐色土である (土層図 5)。Ⅲb層と覆土Ⅰ層間に部分的に漸移的な暗茶褐色の土壌があり、Ⅲb'層としている。

重複関係: 上述のとおり、本竪穴より新しい土坑に P-305・306 があり、古い土坑に P-355・358~360 がある。

時期: 覆土上部にⅠ群E類土器が出土しているが、床面および床面直上から出土したものはすべてⅠ群D1類土器であり、この時期に相当する縄文時代早期中葉と考えられる。

床面: V層を掘り込んでつくられている。ほぼ平坦であるが、全体的には北東から南西側に緩やかに傾斜し、壁際に若干高くなっている。スクリーン・トーンで示した内側がたたくしめる範囲で、炉を中心として、西側に偏っている。

壁: 総体的には床面から急角度に立ち上がり、直立気味となる。北壁や西壁の一部は直線状に開口する。

炉跡: 竪穴ほぼ中央に、浅く掘り込んだ炉が確認された。焼土は検出されなかったが、覆土中に炭化物粒が多く混入していた。平面形は隅丸長方形で、長軸方向は竪穴長軸とほぼ直交する東西である。付属ピット: 柱穴と考えられる小ピットを21個検出した。番号は検出順であるが、HP-1~8はほぼ同時に検出したものである。また、HP-19は柱に立てかけたものか、ちょうど石皿が覆い被さって出土したため検出が遅れ、HP-20・21は木の根などによる土壌の擾乱があって当初に検出しきれなかったものである。

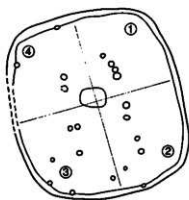
炉跡を中心に四分分割して掲載した。竪穴北東側 (①区) に HP-1~4、南東側 (②区) に HP-5・6・9~11、南西側 (③区) に HP-7・12・13・19・21、北東側 (④区) に HP-8・20 がある。このうち竪穴南側にある HP-11~13 は深さ 10cm 前後の小規模のもので、他の柱穴は炉を挟み、竪穴長軸方向に2列に並んで位置している。①区・④区が対応し、②区 HP-5・6 と 9・10 が③区の HP-7・21 と 19 にそれぞれ対応するものと考えられ、竪穴の建て替えが想定される。深さが 30cm 代から 40cm 代前半の若干浅めの柱穴が HP-4・7・9・10・19 で、他は深さが 40cm 代後半から 50cm を超えるものである。浅めのものは竪穴南側で対応するものが多い。このような深さのばらつきや対応する柱穴数の違いは建て替えばかりでなく、竪穴の補修といった点も考慮する必要がある。柱穴の新旧ははっきりしないが、覆土上部が薄く水平に堆積する HP-6 や覆土上部で石皿が出土した HP-8 は古く考えられるものである。

壁際に検出した HP-14~18 はすべて壁立ち上がり部に位置し、概して浅い。HP-15~17 は竪穴中央に向かって内傾するもので、他は直立する。

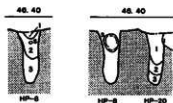
遺物出土状況: 遺物は竪穴全体に散在して出土している。特徴的な出土状態を示すものは上述のとおり、覆土Ⅰ層下面でまとまって出土した土器や竪穴南東側に見られた剥片の集中、HP-19 を覆い出土した石皿、HP-8 覆土上部で出土した石皿があげられる。

(田中)

土器: 1~3・5~10、12 はⅠ群D1類A種、1・2 は復元個体。3 は乳房状尖底で、胴部と底部の接合部位が内面は上方へ、外面は下方へ成形される。5~10 は口縁部破片、12 は底部付近の破片で、内外面をナデで調整する。胴部と尖底部の接合部位で器形の輪郭が大きく変化しており、胴部と底部を別につくり接合したとみられる。11 はE類の平底の底部。内面は立ち上がり部分に斜位の条痕がみられ、外面と底面は条痕で調整される。



【④区】



HP-8の土層

1. 褐色土
2. 茶色土(軽石が混入)
3. 暗黄色土

HP-20の土層

1. 茶褐色土(軽石が混入)
2. 黄白色ローム
3. 黄色ローム(軽石が混入)

【③区】



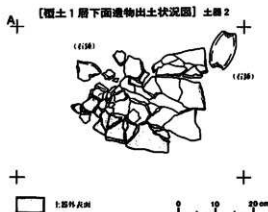
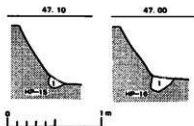
HP-7の土層

1. 褐色土
2. 茶色土(軽石が混入)
3. 暗黄色土

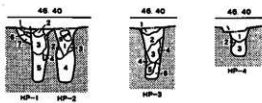
HP-19の土層

1. 茶褐色土(軽石が混入)
2. 茶色土(軽石が混入)

【壁根】



【①区】



HP-1の土層

1. 茶色土
2. 暗黄色土
3. 暗茶褐色土(炭粒が混入)
4. 茶色土
5. 黄色ローム(やわらかく、炭粒がわずかに混入)
6. 暗黄色土
7. 明茶色土

HP-2の土層

1. 暗茶褐色土
2. 明茶色土
3. 暗黄色土
4. 黄色ローム(やわらかく、炭粒がわずかに混入)

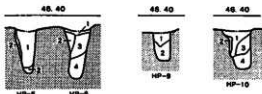
HP-3の土層

1. 茶色土
2. 明茶色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗黄色土
5. 暗茶褐色土
6. 黄褐色土

HP-4の土層

1. 茶色土
2. 暗茶褐色土
3. 暗黄色土

【②区】



HP-5の土層

1. 茶褐色土(ローム粒が混入)
2. 暗黄色土
3. 明茶色土
4. 茶色土

HP-6の土層

1. 茶褐色土(炭粒・ローム粒が混入)
2. 暗黄色土

HP-8の土層

1. 褐色土
2. 暗黄色土

HP-10の土層

1. 茶色土(軽石が混入)
2. 暗黄色土
3. 明茶色土
4. 暗黄色土

HP-15の土層

1. 褐色土(軽石が混入)

HP-16の土層

1. 褐色土(軽石が混入)

HP-17の土層

1. 暗褐色土(色調が赤く、ローム粒・軽石が混入)

図III-127 H-565柱穴実測図

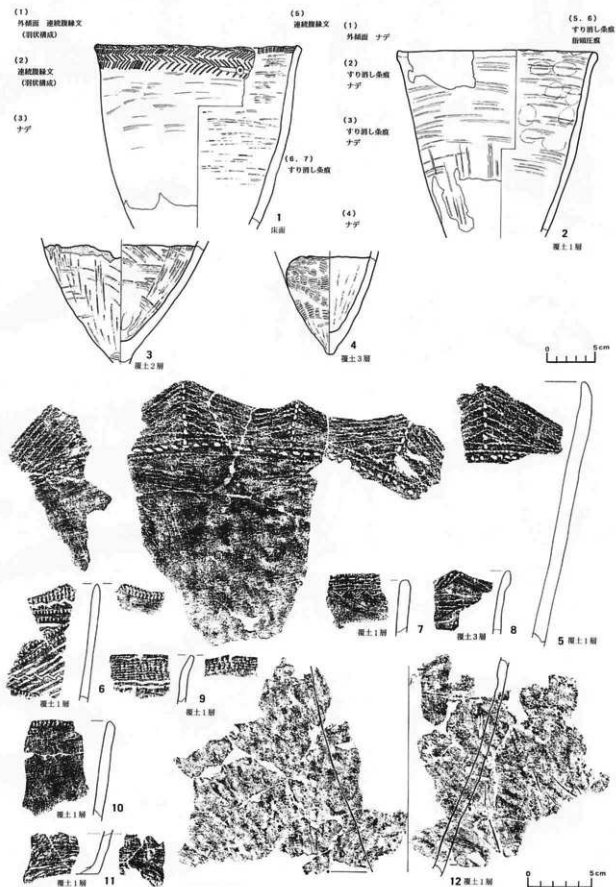
D1類の器形は口縁部形態が波状口縁(8)、副突起付波状口縁(5・6)、平縁のもの(1・2・7・9・10)があり、口唇部断面形は九形(7)と切り出し状(1・2・5・6・8・10)がある。器面調整はナデ(1・2・4・5・7)とすり消し条痕(1・3・8)がある。文様は沈線文(6・7)、鋸歯状沈線文(6・7・9)、貝線文(5・8)刺突は指円刺突(5・7)、沈線上刺突(6)、列点となるもの(5・7)、貝線文は罽目状腹縁文(8)、連続腹縁文(1・8)、連続移動文(6)、押引文(10)、押引波状文(9)、1は羽状、5は三角形(鋸歯状)の文様構成である。

(土器出土位置関係) 平面分布は中央に稀薄で周辺部に密なドーナツ状である。垂直分布では南北の立面で凹レンズ状の出土状況を示す。1・2はD1類の古手と考えられ、堅穴中央の覆土下部で出土し、堅穴廃棄に比較的近い時期の遺物であると考えられる。1はH-562(G4区)の覆土3・1層、48-32、50-37区のI層と接合する。3・12はH-607-1は覆土の流れ込みの傾斜にそって出土する。6は覆土1層(上部)から出土し、H-561(G5区)覆土上層のⅢ層、51-37区のI層と接合するほか、5とともに平成7年度調査区と接合する(別項記載)。北側のH-561、南西のH-562、更に平成7年度調査区などとの広域な接合関係がみられる。11はD2類でほぼ同一レベルで出土している。H-565は廃棄されてからしばらくの間、窪んだ状態であったと推測される。(富永)

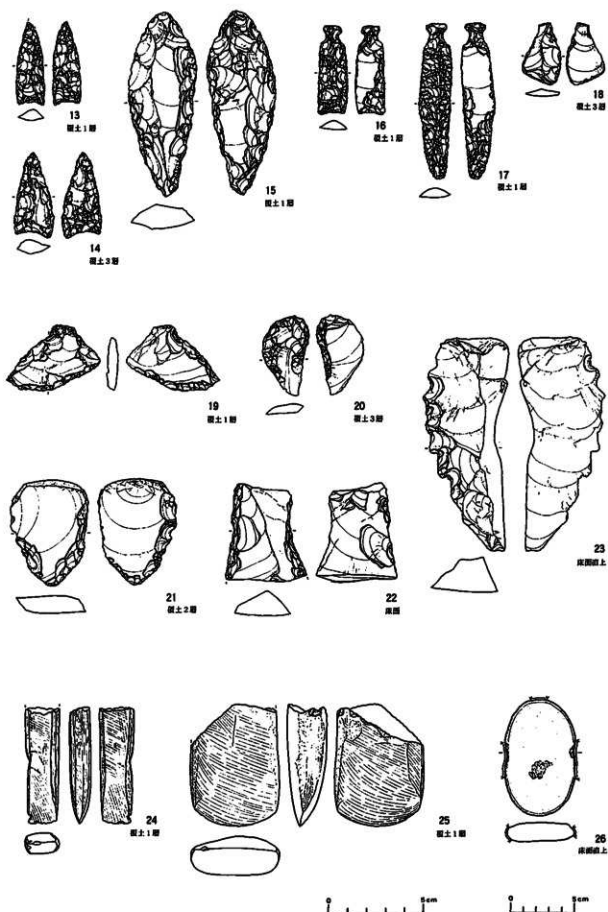
石器: 剥片石器はすべて硬質頁岩製である。13・14は2b類の石鏃。14は身厚で、素材剥片の剥離面を残し、やや粗雑なつくりである。15は石槍。これも左右両面に素材剥片の剥離面を残しつくりは粗雑で、側面観は波状となっている。16・18は石匙。16・17のつまみ部はT字形で、その上端は16が折れ面を残し平坦であるが、17は鋭角に調整している。刃部下半の調整はともに特徴的で、刃部再生の結果かと考えられる。18は素材剥片の周辺を加工するもので、つまみ部のつくりはやや不明瞭であるが3類の石匙とした。19・22は複数の刃部を持つ2d類のスクレイパー。23は鋸歯状の刃部を持つ2c類のスクレイパーである。

24は蛇紋岩製、擦り切りの痕跡を残している1類の石のみ。刃部付近には太めの擦痕が観察されるが、使用痕かどうかは不明である。破断部が太くなる形状からみると、破損品の基部を刃部に再加工したものかもしれない。25は緑色泥岩製の石斧で、敲打による成形とみられるがはっきりしない。

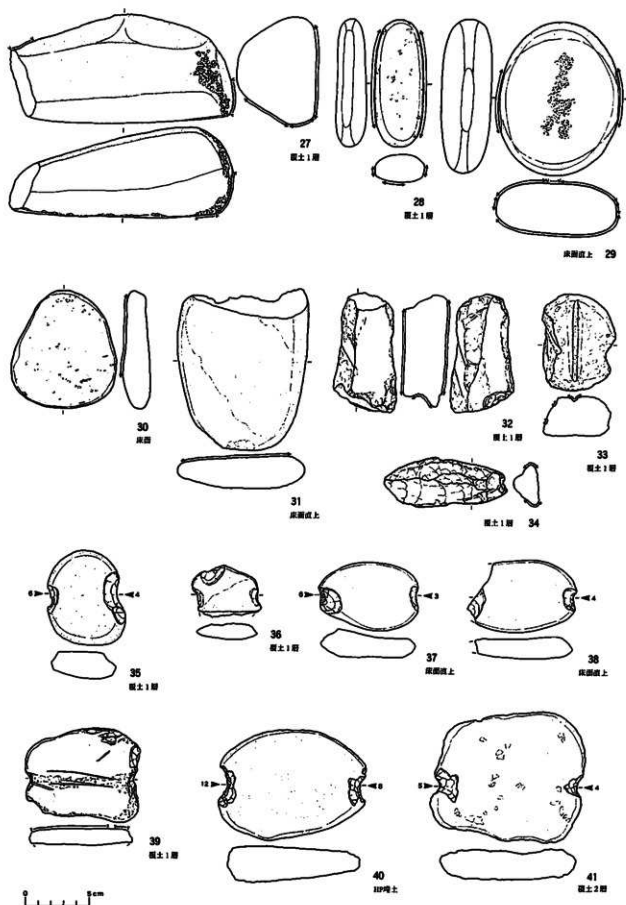
26は閃緑岩製のたたき石で、裏面にも、表面平坦面敲打痕と点对称の位置に敲打痕を持つ。27・29は閃緑岩製のすり石。27の稜部すり面は幅広で、端部敲打も顕著である。左側の破損は敲打によるものとみられる。30・31は扁平な円盤を素材とする1類の砥石。石質は順に流紋岩、やや粗粒の凝灰岩である。32は凝灰岩製、2類の砥石。図下部の破断面全面を使用する幅広の溝状砥面を持つもので、他にはあまりみられない形状のものである。33は軽石製、2類の砥石。礫表面の剥落が激しく、平坦面や破断面にある溝状砥面以外ははっきりしない。34は流紋岩製の石鏃。上下両縁を機能部としている。35・41は石錘。35は安山岩製で、短軸に対向する挟りを持つ1類で、他はすべて2類である。36・39は凝灰岩製で、36は石鏃破損品の再利用とみられるもの。39は砥石としても使用されており、砥面のある平坦面には対向する挟り部を結ぶように2本の浅い線刻が見られる。紐掛かりとはみられず、H-561出土の石錘(図Ⅲ-101-29)に見られた線刻と同様のものと考えたい。37・38・40は閃緑岩製で、挟り部に敲打痕が見られる。38の欠損も敲打によるものと考えられる。41は流紋岩製である。42は閃緑岩製の扁平な石皿。43は安山岩製の石皿で、図右面小範囲のすり面はまず敲打によって平坦面をつくっている。(田中)



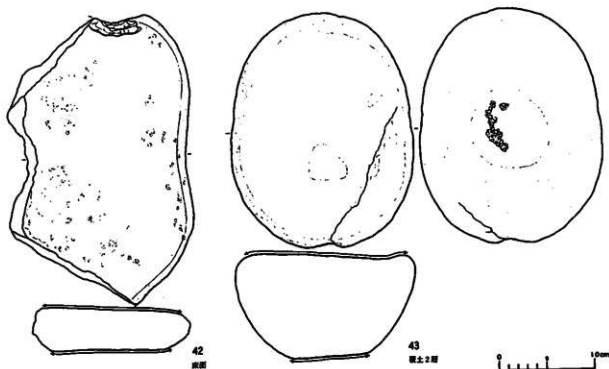
図Ⅲ-128 H-565出土土器



圖Ⅲ-129 H-565出土石器(1)



図Ⅲ-130 H-565出土石器(2)



図Ⅲ-131 H-565出土石器(3)

H-566 (図Ⅲ-132~140, 51~53・100・101・116・152~156)

位置: 52-35・36, 53-35・36; 標高46.00m内外の北東から南東に傾斜する緩斜面上に位置し、G 4 区の東側、大型竪穴群の南端にある。

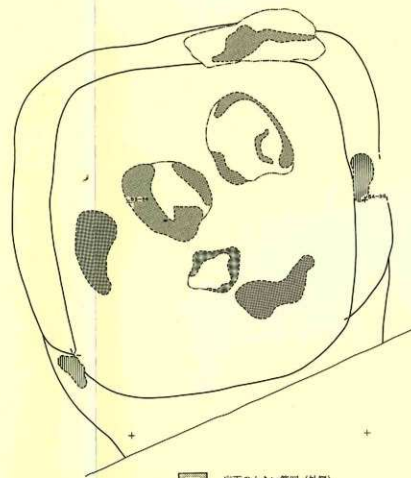
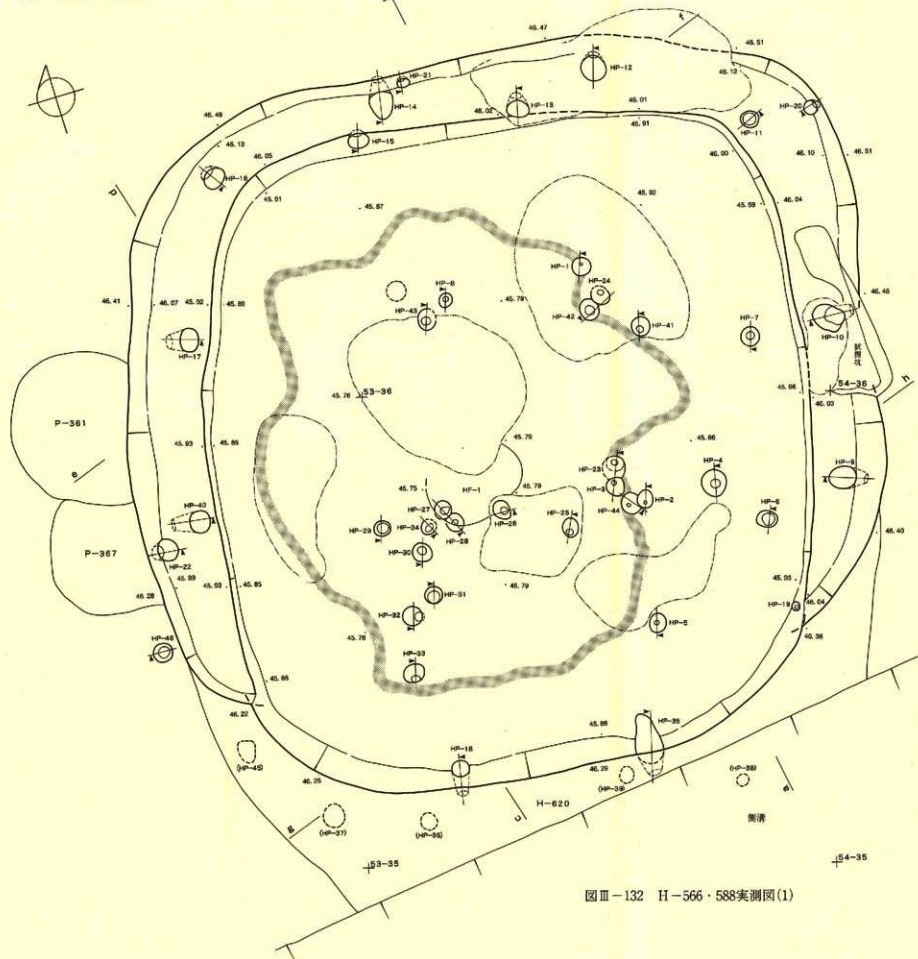
規模: $(6.98)/6.56 \times (6.47)/6.11 \times 0.60\text{m}$ 床面積: 37.17m^2

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-14°-E

確認・調査・土層: この竪穴もH-565と同様、I層除去後、P.D.3を中心にした黒色土や茶褐色土の大きな落ち込みとして確認したものである。また、道路側溝法面にも竪穴覆土と判断される落ち込みが見られた。P.D.3の広がり大きく、東側に偏る状況がみられたため、複数の竪穴の存在を考慮して土層観察用の土手を、H-565から連続するもの(a-bライン)のほか南北方向に平行して1本、それに直交するよう東西方向に2本、井桁に設定して調査にあたった。P.D.3を掘り下げたところ、Ⅲ層上面は波打つ状況であった。黒色土(Ⅲ層)中にH-565ほど明瞭ではなかったが、暗黄褐色から茶褐色のやや砂質土壌(P.D.4、腐食化がかなり進んでいる)がまだらに分布していた。この段階で上層の遺構などは検出されなかった。H-565と同じくⅢb層中から遺物が出土し始めた。掘り進めるにしたがいe-fライン東側に風倒木による土層の乱れが観察され、Ⅲ層上面の凹凸も風倒木痕を原因とするものと考えられた。床面で確認された風倒木痕の範囲は平面図のとおりであるが、その範囲に柱穴が検出されるなど竪穴構築との前後関係がはっきりしないものもある。

竪穴中央部の覆土中に黄色ローム粒が目立つようになった段階で、土層観察用の土手沿いにサブ・トレンチを設定し、床面の確認と壁の検出を行った。北側の土手交差点分で、床面に10cmほどの段差が確認された。土層観察の結果切り合い関係が確認され、中央部をH-566、一段高い周縁部をH-588とした。切り合い関係は覆土下部でわずかに確認できた部分や覆土上部まで確認できる部分などまちまちで、当然のことながらH-566壁の崩れによると考えられる。したがって、出土遺物の取り

H-566・588



- 床面のかたい範囲 (外周)
- 黒樹木炭黒色土範囲
- 柱上部の落ち込み

H-566・588の土層

- P.D.3 (赤褐色)
- P.D.3' (明茶色)
- P.D.3'' (暗茶・チョコレート色)
- P.D.3''' (後の掘削によると思われるP.D.3の混入)
- Ⅱb' 明褐色土(軽石が若干混入)
- [H-566]
 - 1. 暗茶褐色土(ローム状が混入)
 - 2. 褐色土(軽石が混入)
 - 3. Ⅱb' (軽石の混入が多い)
 - 4. 茶褐色土(粘質、軽石の混入が多い)
 - 5. 暗茶褐色土(粘質)
 - 6. 明茶褐色土(粘質)
 - 7. 黄褐色土(黒色土・軽石が混入し、ボソボソしている)
- [H-588]
 - 8. 暗茶褐色土(H-566の5層より色調が暗い)
 - 9. 暗茶褐色土(H-566の5層に類似)
 - 10. 褐色土
 - 11. 茶褐色土
 - 12. 暗茶褐色土

図III-132 H-566・588実測図(1)

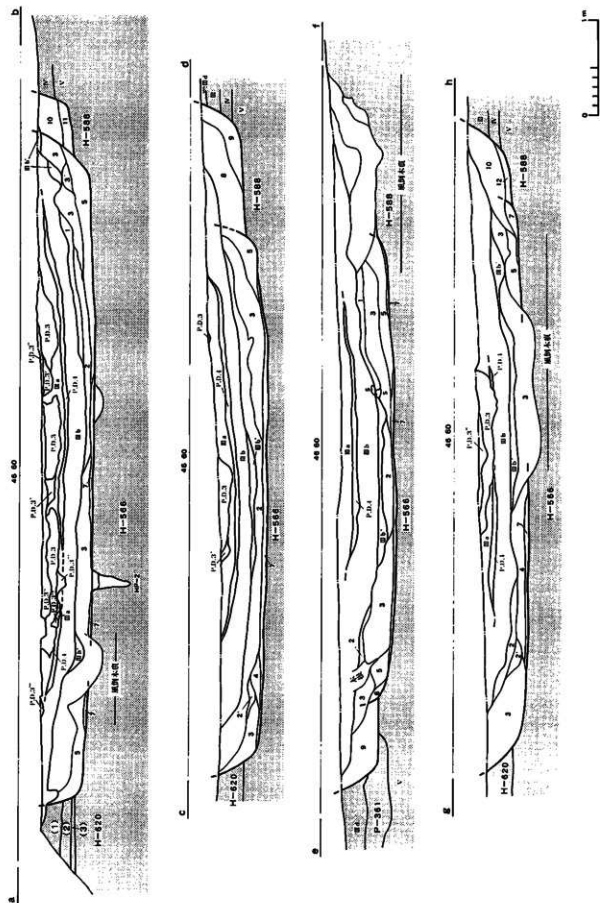


図 III-133 H-566・568実測図(2)

掘いには難しい面があり、特に覆土上層のものについては一連の埋没過程の中で捉えなければならないと判断される。

トレンチ調査中e-fライン西端で、H-588が切る別遺構の覆土を検出し、堅穴調査終了後H-588西壁に土坑規模の落ち込みを確認している(P-361・367)。

覆土は上部に褐色土(土層図2)が、下部に暗茶褐色～茶褐色土が堆積し、床面直上に黄褐色土が薄くある(土層図7)。Ⅲb層と覆土1・2層間に部分的に漸移的な明褐色の土壌があり、Ⅲb層としている。なお、風倒木痕が多く土層の擾乱が激しいと判断されたため、床面直上土壌の水洗選別は行っていない。

重複関係:本堅穴はH-588・620より古い。

時期:床面直上からI群B類の土器片1点が出土しているが、土器は床面から出土のものはすべてI群D1類であり、このD1類が主体となっている。この時期に相当する縄文時代早期中葉と考えられる。

床面:V層を掘り込んでつくられている。ほぼ平坦であるが、堅穴中央部がやや窪む浅皿状となる。H-565とは逆に、スクリーン・トーンで示した外側がかたくしまっていた。基盤となる土壌の性質によるものかもしれない。

壁:確認できた部分では床面から急角度に立ち上がり、直立気味となるようである。

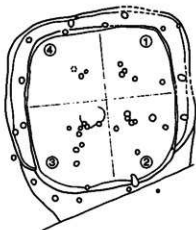
炉跡:堅穴中央南西寄りに、浅い皿状の黒褐色土の落ち込みを検出した。覆土中に炭化物粒が多く混入しており、炉跡とみられる。平面形は楕円形とみられるが、風倒木痕に挟まれはつきりしない。

付属ピット:柱穴と考えられる小ピットを46個検出した。番号は検出順である。ただ、3軒の堅穴が重複し、どの堅穴に係わるものか判断できないものが多く、ここで一括して掲載した。また、精査を何度も繰り返したため、検出面はそれぞれ違っている。

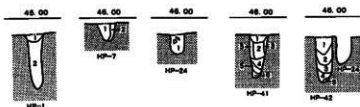
H-565と同様、H-566床面を四分劃などして掲載した。堅穴南東側(②区)、南西側(③区)に多く検出され、堅穴の重複による結果と考えられる。堅穴内に四角形に配置される柱穴がそれぞれの区画に複数個まとまって検出された。堅穴北東側(①区)にHP-1・24・41・42、南東側(②区)にHP-2・3・23・44、南西側(③区)にHP-27・30・34、北東側(④区)にHP-8・43である。この中には柱穴同士が切り合うHP-24・42、HP-2・44、HP-3・23、HP-27・28(番号の大きい方が古い)や覆土上部がかたくしまり埋め戻された可能性が高いHP-2・41がある。また、HP-27・28は炉跡調査後に検出されたものである。なお、④区に示した円形の破線は、現場段階で柱穴壁が不明瞭で木根と判断したもので、深さは40cmほどあった。

H-566床面にある柱穴の深さをみると、10cm代がHP-6・8、20cm代がHP-24・26・30・33と浅いものが、壁側や四角形に配置される①・③・④区の柱穴中に一個ずつみられる。逆に45cmを超える深いものは①区にHP-1・41・42、②区にHP-3・23・25・44、③区にHP-32(堅穴外側、西側に傾く)があり、堅穴東側に多く分布している。他は40cm代前半のものが大半である。

壁際で検出された柱穴はH-588床面で検出したものが多い。HP-11(深さ10cm)が直立する以外、堅穴中央側に内傾するものである。また、柱の軸線も中央側に向いている。深さ30cmを超えるものが多く、H-565でみられた小型はHP-15・19・21、H-620床面で検出されたHP-39があり、北壁際にあるHP-13が深さ20cmほどで中間の大きさである。壁際の柱穴は規模的・位置的にみて、北側でHP-12・14、HP-13・15、南側でHP-18・35、東側でHP-9・10、西側でHP-17・40の組み合わせで使われたと考えられる。北西隅のHP-16や南西隅のHP-45(H-620床面で検出)を含め、大方はH-566に付随するものと考えている。また、検出時の輪郭は不定形で大きく、特にHP-10・40・45



【①区】



HP-1の土層

1. 茶色土
2. 暗黄色土(バサバサ、やわらかい)

HP-7の土層

1. 暗茶色土(炭粒・ローム粒が混入)
2. 茶色土(炭粒・ローム粒が混入)

HP-24の土層

1. 茶褐色土(軽石が混入)

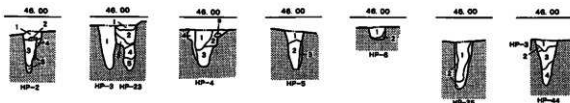
HP-41の土層

1. 茶色土(かたくしまる。堀め戻し土)
2. 黒色土
3. 明茶色土
4. 黄色ローム(しまりなくもろい)
5. 明黒色土(しまりなくもろい)
6. 黄色ローム(しまりなくもろい)

HP-42の土層

1. 茶褐色土(炭粒・軽石が混入)
2. 明茶色～暗黄褐色土(軽石が混入)
3. 暗黄色土(かたくしまる)
4. 々々2(かたくしまる)
5. 黄色ローム

【②区】



HP-2の土層

1. 茶色土(かたくしまり、ローム粒
軽石が混入。堀め戻し土)
2. ロームブロック
3. 褐色土(炭粒・ローム粒・軽石が混入)
4. 茶色土(炭粒・ローム粒・軽石が混入)
5. 暗黄色土

HP-3の土層

1. 暗茶褐色土(炭粒・軽石が混入)

HP-4の土層

1. 褐色土(炭粒・ローム粒が混入)
2. 茶色土(ロームが多量に混入)
3. 暗茶褐色土(ロームが多量に混入)
4. 々々2

HP-5の土層

1. 明茶色土(かたくしまり、ローム主体で
軽石が混入。堀め戻し土)
2. 茶色土(やわらかく、バサバサ)
3. 暗黄色土

HP-6の土層

1. 暗茶褐色土(炭粒・ローム粒が混入)
2. 黒色土(炭粒・ローム粒が混入)

HP-23の土層

1. 茶色土
2. 暗黄色土(炭粒・軽石が混入)
3. 茶色土(炭粒・軽石が混入)
4. 黄色ローム
5. 茶褐色土(大きな炭粒が多く混入)

HP-25の土層

1. 茶褐色土(下半もろくやわらかく、ローム粒・軽石が混入)
2. 暗黄色土

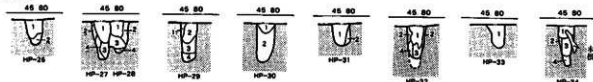
HP-44の土層

1. 茶褐色土
2. 黄白色ローム
3. 暗茶褐～茶褐色土
4. 黒褐色土(全体に炭粒・軽石が混入)



図Ⅲ-134 H-566・588・620柱穴実測図(1)

【③区】



HP-26の土層

1. 茶褐色土(軽石が混入)
2. 暗茶褐色土(ロームブロックが混入)

HP-27の土層

1. 茶褐色土(軽石・ローム粒が混入)
2. 暗黄色土
3. 茶色土
4. 暗茶褐色土(炭粒が混入)

HP-28の土層

1. 茶褐色土(HP-27-1より色調が暗く、軽石が混入)
2. 暗茶褐色土(軽石が多く混入)
3. 茶色土と黄色ロームの混入
4. 茶褐色土

HP-29の土層

1. 暗黄褐色土
2. 褐色土(軽石・ローム粒が混入)
3. 茶褐色土
4. ローム・軽石の混入(かたくなり)

HP-30の土層

1. 茶褐色土
2. 暗黄褐色土(やわらかくしまりなく、軽石が混入)

HP-31の土層

1. 暗茶褐色土(軽石が若干混入)
2. 茶色土(軽石が混入)

HP-32の土層

1. 褐色土(軽石が混入)
2. 暗黄色土
3. 暗茶褐色土(軽石が混入)
4. 茶色土(軽石が混入)

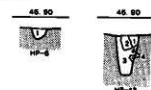
HP-33の土層

1. 褐色土(軽石が混入)

HP-34の土層

1. 茶色土(軽石が混入)
2. 明茶色土
3. 茶褐色土(軽石が混入)
4. 黄褐色ローム(かたくなり、軽石が混入)

【④区】



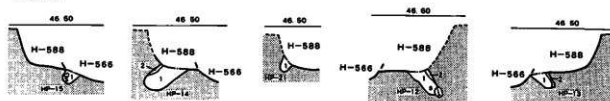
HP-8の土層

1. 茶色土(炭粒・軽石が混入)

HP-43の土層

1. 明茶褐色土
2. 暗黄色土
3. 明褐色土(ローム粒が多く混入)
4. 黄色ロームブロック

【北壁際】



HP-14の土層

1. 褐色土(炭粒・軽石が混入)
2. 茶色土

HP-15の土層

1. 褐色土

HP-21の土層

1. 褐色土

HP-12の土層

1. 褐色土(炭粒・軽石が混入)
2. 茶色土

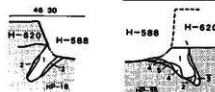
HP-13の土層

1. 茶色土(炭粒・軽石が混入)
2. 明茶色土

【南壁際】

HP-18の土層

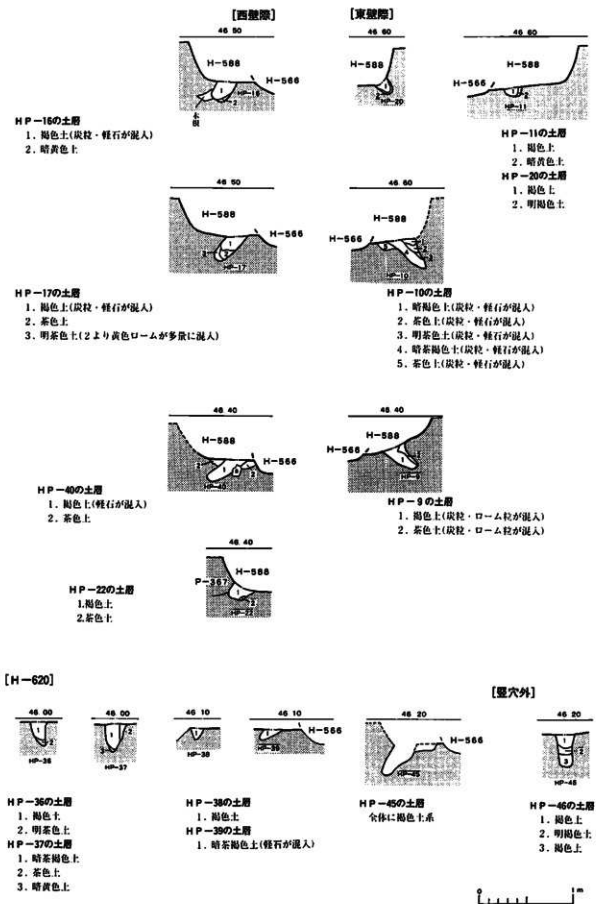
1. 褐色土
2. 茶色土



HP-35の土層

1. 茶褐色土(炭粒・軽石が混入)
2. 茶色土+ロームブロック(炭粒が混入)
3. 明茶褐色土(ローム主体)
4. 明茶色土
5. 茶色土

図Ⅲ-135 H-566・588・620柱穴実測図(2)



図Ⅲ-136 H-566・588・620柱穴実測図(3)

は柱穴痕上部の周囲が浅い皿状の窪みとなっている。H-566を作る時点で、H-588・620の覆土を掘り込んだ痕跡とも考えられる。

堅穴外のHP-46は四層上面で検出したもので、堅穴に係わるものか不明である。34cmの深さで、直立する。

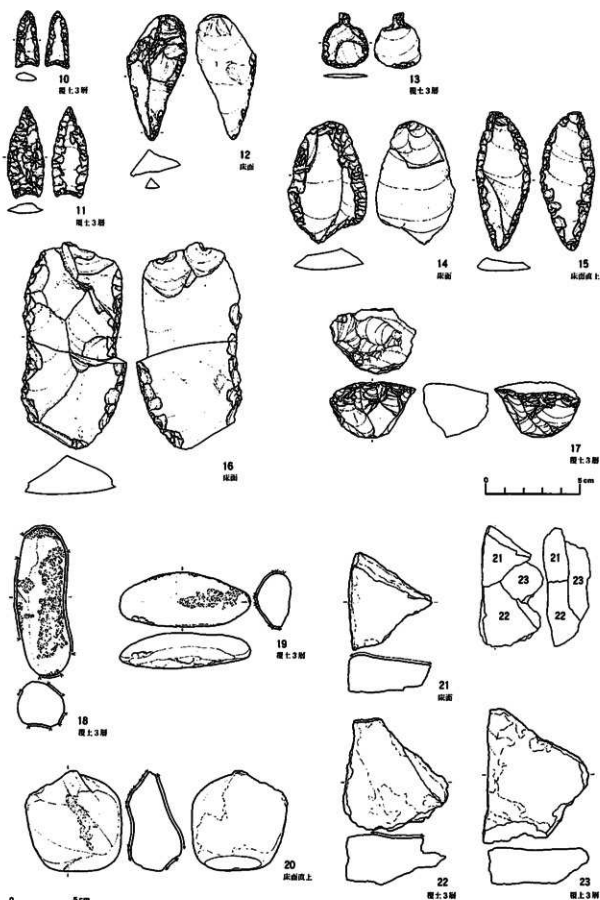
遺物出土状況：遺物は堅穴全体に散在して出土している。特徴的な出土状態を示すものは現場段階では特になく、接合する流紋岩製の砥石・石鏝（図Ⅲ-139-26～33）や同一母岩とみられる頁岩製の石鏝（図Ⅲ-139-37、図版156下段）は整理段階でわかったものである（関係図-48）。（田中）
土器：5はI群B類の口縁部破片で、キヤリバー状の屈曲をもつ。器面調整はミガキ、文様は円形の沈線に刺突で区画される。1・2・6～9はD1類a種で、1・2は復元個体。6～9は口縁部破片である。3・4はD1類b種で、3は復元個体。4は砲弾形尖底で、胴部と底部の接合が内面は上方へ、外面は下方へ調整される。

D1類の口縁部形態は波状口縁（1）と平縁（2・3・6～9）があり、口唇部断面形は九形（6・8）と切り出し状に外傾するもの（1・7・9）がある。器面調整はナデ（1～3・7～9）とすり消し条痕（1・2・6・9）がある。文様は沈線文（6）、鋸歯状沈線文（6）、貝線文（3・7）があり、刺突は楕円刺突（3・6）、列点となるもの（3）、貝殻文は連続腹縁文（7）、連続波状文（3）、押引文（7）、背圧痕文（7）がある。3・4は胴部外面に背圧痕を不規則に施文する。2は一部に成形時の置き痕が残る。

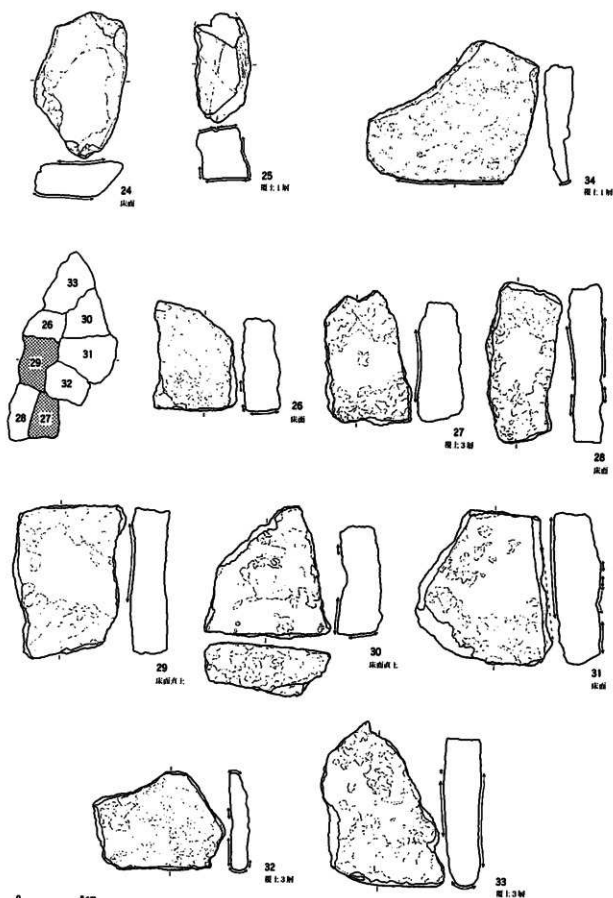
（土器出土位置関係）平面分布は中央部に稀薄で周辺部に密度が高いドーナツ状の分布である。垂直分布では東西立面で凹レンズ状の堆積を示す（関係図-43）。1はほぼ完形に復元され、遺構中央部の下部で接合する。また、2・8は北壁側の下部から出土する。いずれもD1類の古手で堅穴廃棄後に近い時期の遺物であると考えられる。3・4は隣接するH-588と接合関係がある。9はH-569-1、P-361-1と同様に覆土の流入経路を示すものであろう。また、掲載しなかったが他遺構との接合例が2件ある。事例1 [459] は覆土2層から出土し、H-588（G7区）の覆土1層と接合する。事例2 [869] は壁際から出土し、H-620（G7区）覆土2層と接合する。いずれも隣接遺構との接合例である。広域に接合するものにH-569、P-361との接合関係がみられる。（富永）

石器：剥片石器はすべて硬質頁岩製。10・11はともに2b類で、素材剥片の剥離面を大きく残している。12は石鏝。機能部はかなり磨滅しており、特に側縁部は著しい。13は周辺加工の石匙（3類）。薄く小型で、実用品か疑問である。14～16は両側縁に刃部を持つ2d類のスクレイパー。15の刃部は両面調整でつくられている。16は堅穴西側床面からごく接近して出土した破片が接合したもの。製作途中で破損したものか、上部破片に再度調整が加えられている。17は石核。

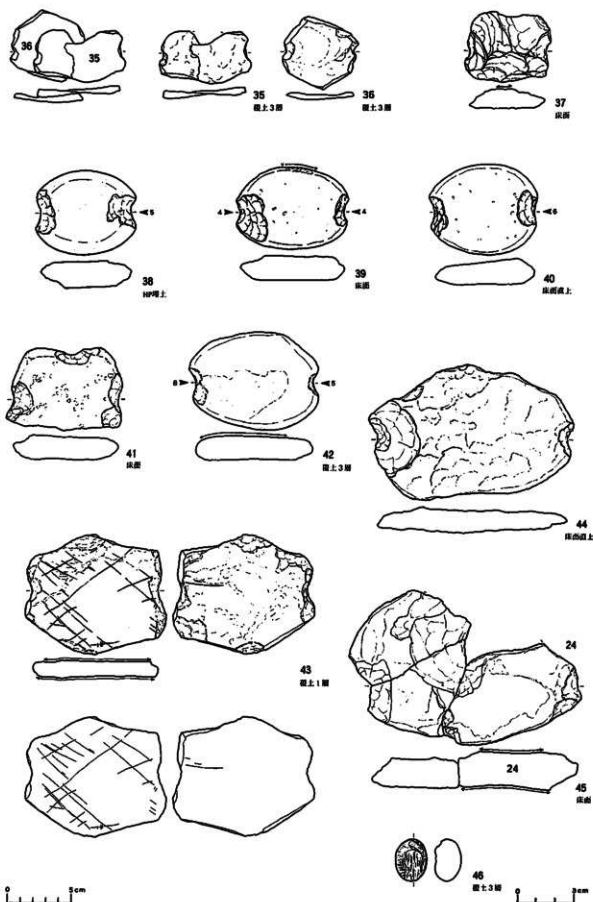
18は安山岩製で、棒状の礫を素材にする1類のたたき石。広範囲に敲打痕を残す。19は閃緑岩製、小型のすり石。接部すり面の剥離は敲打によるか、はっきりしない。20は凝灰岩製、円礫素材の砥石。石質は細粒で緻密。あらゆる面を使用し、砥面は平滑で一部光沢感がある。21～23は流紋岩製の砥石で、接合する。21・22は堅穴北西側の床面、覆土3層出土のもの。23は北東側覆土3層出土のもので、水平距離にして2.2m離れて出土した。板状に割った素材を使用したもので、21・22の接合する砥面にも若干の段差があり、個別に使用されたものである。24は淡緑色細粒の凝灰岩製の砥石。石鏝とみた45と接合する。24は堅穴西側の床面出土で、45は北東側床面、南東側覆土3層から出土している。それぞれ壁近くで出土しており、水平距離で3.5～5m離れている。25は凝灰岩製、溝状砥面をもつ砥石。26～33は流紋岩製の砥石（32・33は石鏝）で、接合する。床面、床面直上および覆土3層出土のもので、堅穴北側、西側に散在していた（関係図-48）。ほとんどのものは接合平面模式図の面に砥



図Ⅲ-138 H-566出土石器(1)



図III-139 H-566出土石器(2)



図Ⅲ-140 H-566出土石器(3)

真図版156下段（カッコ内は遺物番号）に掲載した。礫面に葉脈痕を持つものがいくつか見られた。37は堅穴西側の床面から出土した以外、多くは堅穴南側の覆土3層、35・36を中心に南北1m、東西0.7mの範囲にややまとまって出土している。38～40は閃緑岩製で挟り部に敲打痕を持つほか、上縁に敲打痕を持つもの（39）、砥石として使用されたもの（42）がある。43も砥石として使用された凝灰岩製の石錘で、格子目の線刻が施されている（口絵7-4）。線刻は浅く細いもので、一部は砥面に消されている。41は破損品の再利用と考えられるもので、安山岩製。44は流紋岩製。

46は凝灰岩製の石製品。球状で全面が研磨されるが、石質が軟らかいため水洗時の擦痕とみられるものも多い。一部平坦面を持っている。用途はわからない。（田中）

H-588（図Ⅲ-132・133・141、図版51・116・157）

位置：52-35・36、53-35・36、54-35・36；H-566の周囲に残存する堅穴。

規模：7.98/7.48×(6.90)/(6.60)×0.42m 床面積：(44.61)m²

平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-76°-W

確認・調査・土層：H-566の項で記述したとおり、この堅穴はH-566調査時に確認した一段高い周縁部で、ほとんどが壊されている。道路側溝法面に確認された落ち込みも一連のものと判断していたが、堅穴北側から壁の検出を進めていたところ、南東・南西側で僅かながらV層中に壁の立ち上がりを確認された。このため道路側を別の堅穴H-620とした。また繰り返しになるが、トレンチ調査中e-fライン西端で別遺構の覆土を検出し、堅穴調査終了後西壁に土坑P-361・367を確認している。

覆土は暗茶褐色土が主体で、床面直上に暗黄褐色土が堆積する部分もみられた。

重複関係：本堅穴はH-566より古く、H-620、P-361・367より新しい。

時期：覆土中からの出土であるが、土器はすべてI群D1類であり、この時期に相当する縄文時代早期中葉と考えられる。

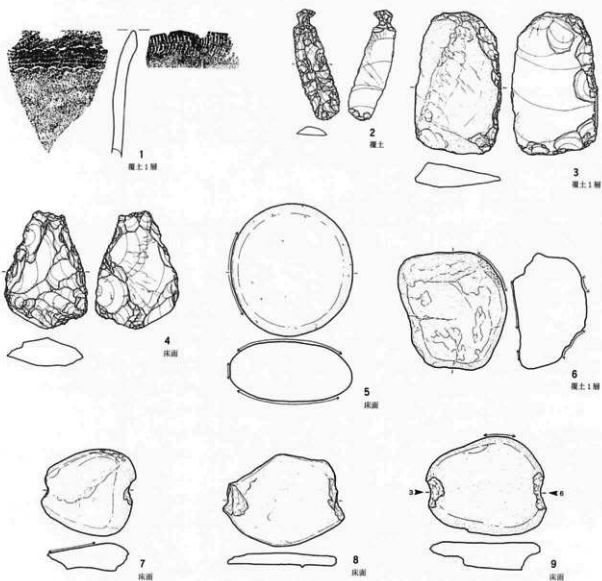
床面・壁：堅穴北側の東半分ほどは、床面・壁ともに風倒木で壊されている。床面はV層を掘り込んでつくられている。残存する東西両側はほぼ平坦であるが、北側は南方向に傾斜している。壁の立ち上がりは北側が急で直立し、東西側はやや緩やかである。

付属ビット：H-566の項のとおり、この堅穴に確実に付随するものはない。

土器：1はI群D1類a種。平縁で口唇部断面形は切り出し状に外傾する。器面はナデで調整される。口唇部内面を連続波状文、外傾面を連続腹縁文を施し、口縁部文様帯は3条の貝縁文を横位に巡らせ、2条の鋸歯状沈線文で上下を区画する。

（土器出土位置関係）平面分布はH-566により切られるため全容は明らかでない。垂直分布の状況では壁際の覆土上部に密度が高い（関係図-43）。1は覆土の上部で確認されている、またH-569-1も同レベルでの出土であり、大型堅穴間での接合関係がみられる。（宮永）

石器：2は硬質頁岩製の石匙。つまみ部は基本的にT字形で、上端は鋭角的に調整され、一部素材剥片打面の平坦面を残している。3・4はともに硬質頁岩製の、一側縁に直線的刃部を持つ2a類のスクレイパー。3の右面右側縁の調整を素材剥片の厚みを減ずるものとみだが、刃部または製作途中とみられるべきものかもしれない。5は安山岩製の2類のすり石で、平坦面両面と一側縁にすり面を持っている。6は花崗岩製の砥石で、一平坦面に砥面を持つ。敲打痕が一端部にみられるほか、図裏面にも円形の窪みとなる敲打痕が2カ所ある。花崗岩は平成8年度で扱った礫石器中、ごく稀な石材である。7～9は2類の石錘。7は円礫素材の頁岩製で、平坦面に砥面がある。8は片岩製のもの。9は閃緑岩製で、挟り部に敲打痕を持つほか、上縁の一部にすり面が認められる。（田中）



土器・礫石器 : 0 5cm

剥片石器 : 0 5cm

図Ⅲ-141 H-588出土遺物

H-620 (図Ⅲ-136・142・143, 図版116・157)

位置: 52-35・36, 53-35・36; H-566・588の南側に位置する。

規模: $-/-\times-/-\times(0.36)\text{m}$ 床面積・平面形・長軸方向: 不明

確認・調査・土層: 本堅穴はH-566調査前、道路側溝法面に確認された落ち込みである。H-588と一連のものとみていたが、別遺構と確認したものである。床面が道路側溝溝底で僅かながら立ち上がりが見られ、残存する部分は堅穴南側と考えられる。

覆土は上部に暗茶褐色土が、中間に褐色土を挟んで、床面直上にまた暗茶褐色土が堆積する。上部の暗茶褐色土(土層図1)は赤味が強く、H-588周辺に堆積していたⅢd層に相当するものかもしれない。

重複関係: 本堅穴はH-566・588より古い。

時期: 覆土中からの出土であるが、土器はすべてI群D1類であり、この時期に相当する縄文時代早期中葉と考えられる。

床面・壁: 床面はV層を僅かに掘り込んでつくられ、平坦である。壁は急角度に立ち上がり、直立気味である。

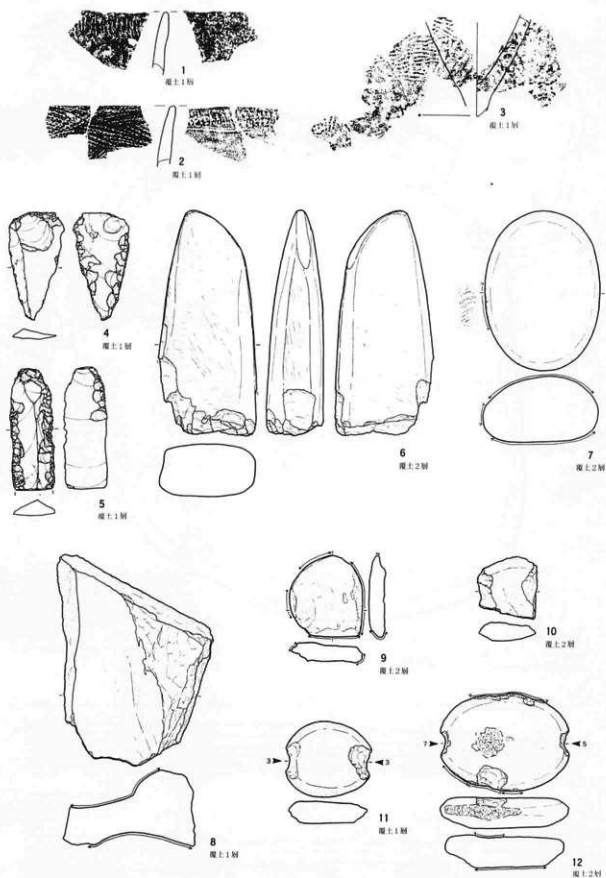
付属ピット: H-566の項(図Ⅲ-136)に掲載している。この堅穴床面で検出したもののうち、この堅穴に伴うとみられるものはHP-36~38で、いずれも小型。H-566床面で検出されたものに比べ、壁・底ともはつきりしない。HP-45は位置的・規模的にみてH-566に付属すると考えられるもの。HP-39は小型のものであるが、H-566側に傾くものでこの堅穴に付属するものかはわからない。

(田中)

土器: 1はI群D1類a種。2・3はD1類b種で、2は口縁部破片、3は乳房状尖底。1・2ともに波状口縁で口唇部断面形は1が丸形、2が切り出し状に外傾する。器面調整はナデ(1・3)とすり消し条痕(2)がある。1は口唇部外面に無肋の貝殻腹縁で連続腹縁文を施す。2は口唇部内面を押し波状文、口縁部文様帯は1条の貝縁文で文様帯下限を区画し、腹縁文で区画内部に菱形の文様を施す。

(土器出土位置関係) 平面分布はH-566に切られるため全容は不明である(関係図-43)。1はD1類の古手と考えられ、2・3はD1類の新手の要素を持ち、覆土の上部から出土する。(富永)

石器: 4・5は硬質頁岩製のスクレイパー。4は一側縁に刃部を持つ2a類。5は両側縁に刃部を持つ2b類で、素材剥片剥離面と調整剥離面の風化度に顕著な差違はみられないが、形態的に古い可能性があり(旧石器?)、素材として遺跡に持ち込まれたものかもしれない。6は緑色泥岩製の石斧基部。器表面は良く研磨され、成形痕は残していない。7は閃緑岩製のすり石。両平坦面がすり面として使われ、側縁の一部に敲打痕を残している。敲打痕には直線状に残るものが認められる。8は凝灰岩製の、やや大型の砥石。9は流紋岩製の円礫素材の石鏝で、3つの機能部を持っている。10は流紋岩製の円礫破片を利用したもの。11・12は閃緑岩製の石錘。12の平坦面、上下縁にはすり面や敲打痕が残し、下縁の敲打痕には直線状のものが認められる。(田中)

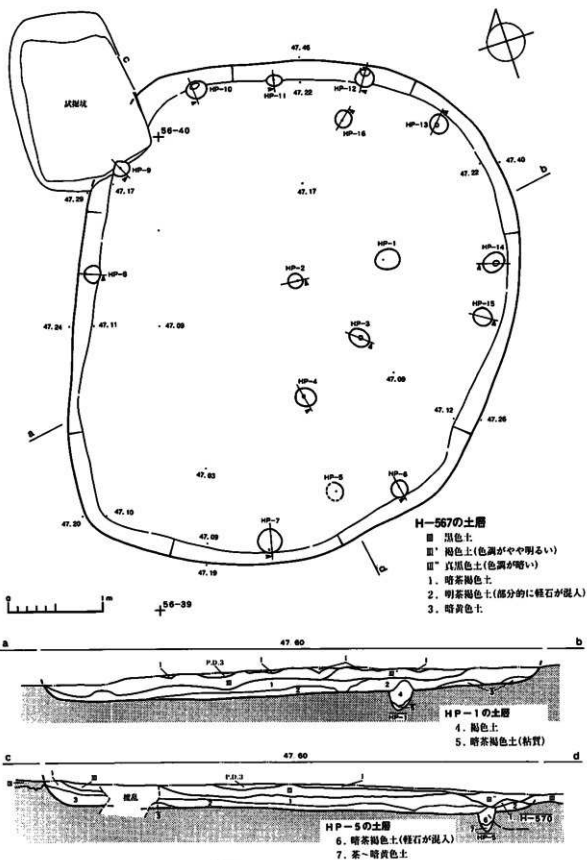


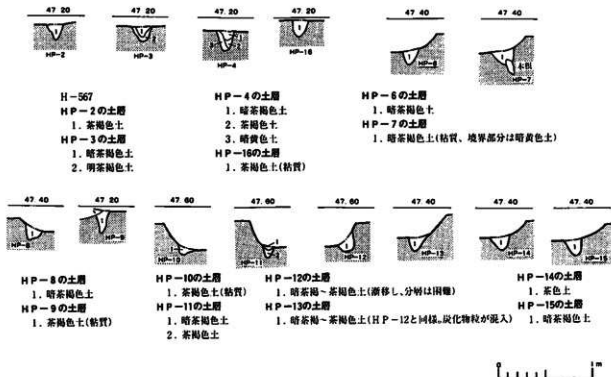
土器・礫石器：0 5cm

剥片石器：0 5cm

図Ⅲ-143 H-620出土遺物

H-567





図Ⅲ-145 H-567柱穴実測図

H-567 (図Ⅲ-144・145, 図版54)

位置: 55-39・40, 56-39・40; 標高47.00mほどの北東から南東方向に傾斜する緩斜面上に位置し、P-352を挟んでH-568の東側にある。

規模: 5.38/5.02×6.40/4.32×0.27m 床面積: 18.37㎡

平面形: 不整楕円形 長軸方向: N-26°-E

確認・調査・土層: I層除去後の56-38・39区周辺で、黒色土中にP. D. 3が広く散在する状況が見られた。試掘坑壁には遺構とみられる土層の堆積がみられたことから、遺構の存在を想定して調査にあたった。土層観察用の土手は南北方向にはP. D. 3の散在地域を網羅できるよう長く設定し(H-567・c-dラインとH-570・a-bライン)、東西方向に1本設定して、順次掘り下げた。これまでのH-565などと比べ、床面・壁などに明確さはなく、はっきりしない部分が多い。遺物もⅢ層中から僅かに出土したほか、覆土3層からI群D1群土器片が1点出土しただけである。

覆土は茶褐色土が主体で、壁際に暗黄色土が堆積している。覆土上部のⅢ層は色調・明度に違いがみられ、分層している。

重複関係: 本竪穴はH-570より新しい。

時期: 覆土中からI群D1群土器片が1点出土しているが、特定は難しい。

床面・壁: 床面はⅣ層からⅤ層につくられ、平坦である。全体的に北東方向から南西方向へ傾斜し、自然傾斜方向と同一である。壁は緩やかに立ち上がり、外傾気味である。

付属ピット: 床面中央部にあるHP-1～4は直立するもので、深さ20cm前後。その他はすべて壁際・壁中に作られるもので、深さは10cm程が多い。竪穴中央側に確実に内傾するものはHP-7およびHP-12だけで、他はすべて直立するものとみられる。竪穴南西側に、柱穴は検出できなかった。

(田中)

H-568 (図Ⅲ-146~150, 図版55・101・117・158・159)

位置: 53-38~40, 54-38・39

規模: 7.55/7.05×6.70/6.30×0.53m 床面積: 39.92㎡

平面形: 隅丸長方形から台形 長軸方向: N-3°-W

確認・調査: I層除去後、P.D.3・Ⅲ層・茶褐色土の同心円状の落ち込みを検出した。Ⅲ層中から掘り込まれている。

重複関係: なし

時期: 覆土1層からI群B類土器、覆土3層からD2類土器がわずかに出土しているが、主体となる土器はD1群である。床面からも出土することから、この頃の縄文時代早期中葉の時期と考えられる。床面: 緩やかに南方に傾斜するV層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦である。

壁: 立上りは急傾斜である。自然地形が緩やかに南方に傾斜しているため、北壁で検出面からの壁高が40~50cm、南壁で検出面からの壁高が25cm前後となっている。そのため、南壁は不明瞭であった。炉跡: 堅穴中央部で掘り込み炉を検出した。規模は1.20×1.30m。中央部に僅かに焼土、炭の痕跡がみられた。掘り込み西壁北側に長さ20cmの隙が出土し、隙下にも焼土が確認できた。

付属ピット: 堅穴北西隅にHP-1を検出した。深さ25cmで、平面形は卵形、断面形は鍋底状である。性格不明であるが、ピット上面には11個の石鍾が集中して出土している (図Ⅲ-147)。

このほか柱穴と考えられる小ピットを67個検出した。床面から深さ40~50cm前後のものが13個あり、この中に三対6本柱の主柱穴が想定出来た (i-j および k-l ラインとその周辺)。2~3回の建て替えが想定でき、いずれも基本は三対6本柱のようである。深さ30cm前後のものは5個。壁際に直径約10cmのものが並ぶ。主柱穴と壁際のピットは対応関係にあるとみられる。i-j および k-l ライン間にある柱穴も、主柱穴と組み合わせ使用された可能性が考えられる。

遺物出土状況: 遺物は床面、覆土とも壁際から出土する傾向が強い。ただし、東西壁際、北壁際に比べ、南壁際では出土量が少ない。繰り返しになるが、堅穴北西隅のピット上面からは11個の石鍾が集中して出土し、出土した石鍾も円礫素材で形状的にそろっている。完形・半完形の土器が、堅穴北東隅で2個、南東隅で1個出土している。いずれも床面との間に覆土5・6層を挟む状態で出土している (図Ⅲ-149)。

(福井)

土器: 4はI群B類の口縁部付近の破片で、内外は丁寧なナデ調整が施される。3条一単位の貝刻沈線文で区画され、要所に沈線 (貝刻) 上に刺突が施される。1~3・5・6はD1類a種で、1は復元個体。2・3は尖底部で2は砲弾形のもの、3は乳房状のものである。いずれも胴部との接合が内面は上位方向、外面は下位方向に調整される。7~9はD1類b種の口縁部破片。10はD1類a種、11はD1類b種の土器片鍾である。両者とも打ち欠いて形を整え、両端に袈りをつけるものであろう。使用された形跡はなく煤が付着し器面に残る状態である。

D1類の口縁部形態は波状口縁 (8) と平縁 (1・5~7・9) があり、口唇部断面形は丸形 (1・8)、切り出し状に外傾するもの (5~7・9) がある。器面調整はナデ (1・7・8)、すり消し条痕 (1~3・5・6・9)、条痕 (2) がある。文様は沈線文 (8)、貝線文 (6・7)、刺突は楕円刺突 (8)、貝殻文は菊目状腹縁文 (6)、連続移動文 (6)、連続波状文 (8)、押引文 (9) がある。文様構成は5・6は鋸歯状、7は羽状、8は菱形となる。

(土器出土位置関係) 平面分布は中央に薄く周辺部に密度が高いドーナツ状で、垂直分布では覆土下部では遺物は殆ど出土しないが、中部付近で遺物が若干纏まっている。遺物は堅穴がある程度埋もれた段階で流入してきたものといえ、1~11は中部付近で接合し、D1類の新手が多く含まれる。H-

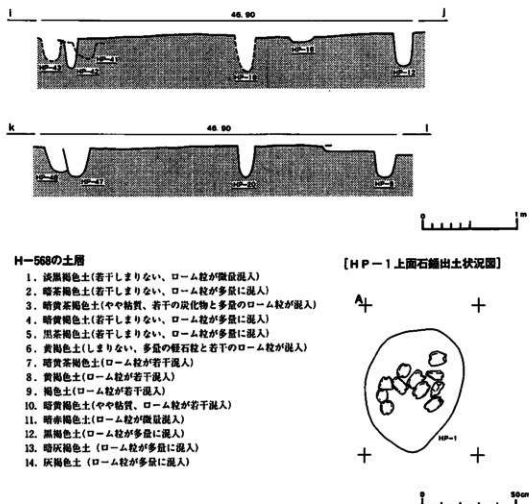
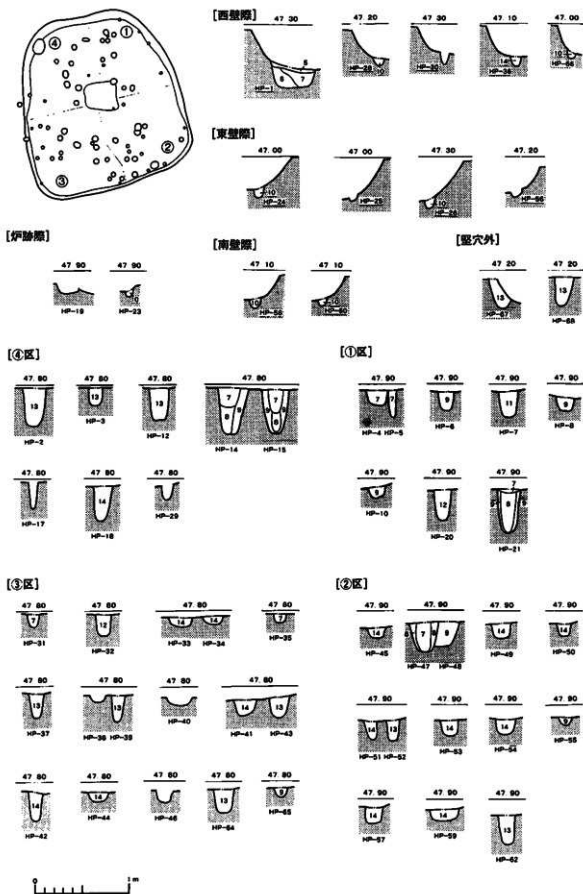


図 III-147 H-568実測図(2)

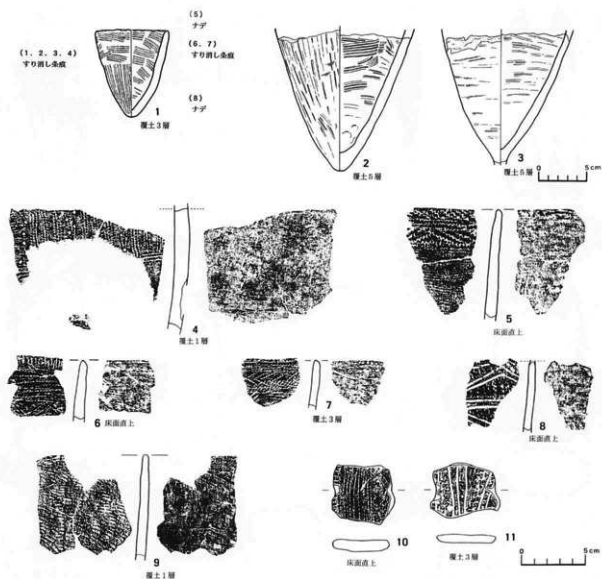
569-1も同レベルで出土し、2点が接合する。B類の4は覆土1層(上部)から出土し、P-363(G6区)の覆土中層、51-44区のI層と接合する。広域に接合するものにH-569との接合関係がある。(富永)

石器: 12・13は硬質頁岩製の石鏃。12の基部にみられる抉りは後から作っているように見える。14は硬質頁岩製で、両頭の石鏃。使用の痕跡はあまり見られない。15は抉り状の刃部を持つスクレイパー(2c'類)。硬質頁岩製で、原材表皮部分の剥片を素材としている。16は擦り切り残片。石質は蛇紋岩。表裏擦り切り溝の軸は交差し、破断面にも研磨痕が一部認められた。17はドレライト製の研磨石材としたもの。周縁を敲打で成形し、平坦面を研磨したものともみたが、石材が石斧に適すものか不確かで、すり石とした方がよいかもしれない。18は閃緑岩製の典型的な1類のすり石。後部すり面に多くの直線状敲打痕を残している。19は灰白色、細粒の凝灰岩製の砥石。砥面は平滑で、肌理は細かく光沢感がある。20-23は流紋岩製の砥石、石鏃。素材自然面には鉄分が固着している。石鏃(22・23)の平坦面は砥石としても使用されている。

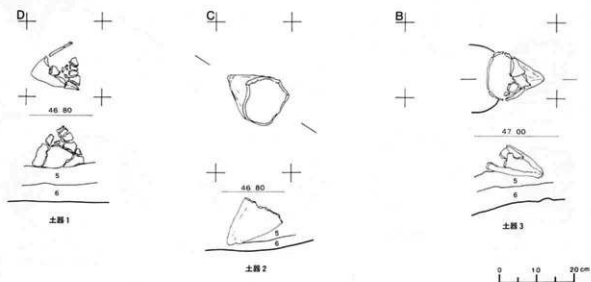
24-26は板状礫に簡単な打ち欠きによる抉りを持つ2類の石鏃。石質は順に凝灰岩、流紋岩、頁岩である。24・25は覆土1層、26は床面直上出土のもの。出土層位はまちまちであるが、ともに堅穴西側の壁近くから出土している。特に26出土地点周辺には同形状の石鏃がややまとまって出土しており



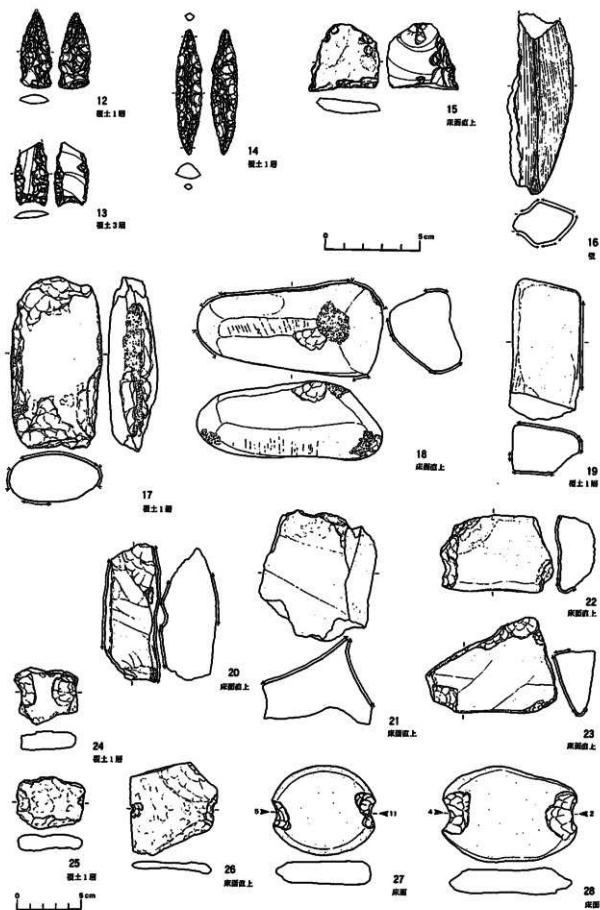
図Ⅲ-148 H-568柱穴実測図



[土器出土状況図]



図III-149 H-568出土土器



図Ⅲ-150 H-568出土石器

(図版159上段に掲載、カッコ内は遺物番号)、土器片(図Ⅲ-149-10)も伴うようである。27・28は閃緑岩製の2類の石錘。ともに円礫素材で、挟り部に敲打痕を持つ。28はHP-1上面からまともに出土したものの一つである(図版159下段に掲載)。すべてが円礫素材(破損品の再利用を含む)のもので、閃緑岩製が8点、流紋岩製が3点の計11点である。(田中)

H-569 (図Ⅲ-151~155, 図版56・57・101・117・160・161)

位置: 53-37・38, 54-37・38, 55-37・38

規模: 6.46/6.06×6.04/5.58×0.60m 床面積: 29.94㎡

平面形: 隅丸方形 長軸方向: N-5°-E

確認・調査・土層: I層除去後に、53-38、54-38区付近でP.D.3の広がりが見出された。P.D.3の周囲にⅢ層の黒色土が、さらにその周囲に遺構覆土と思われる褐色土がドーナツ状に広がっていた。P.D.3がやや南北方向に長く、中央部がくびれた形に分布していたため、2つの遺構が重複している可能性も想定し、東西方向に2本、南北方向に1本の土層観察用のベルトを設定して調査を行ったところ、1軒の深い堅穴住居跡であることが確認された。覆土は褐色系土で、色調が上部ではやや黒色が、下部では黄色が強くなる。全体に白色の混入物や炭化物の混入が多くみられた。

重複関係: H-605と重複し、これより新しい。

時期: 床面付近出土の土器から、縄文時代早期中葉のI群D類土器の時期である。

床面: V層を深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦である。

壁: 垂直に近い。床面からの立ち上がりは丸みを帯びている。検出面からの壁高は北側で約0.58m、南側で約0.34mである。

炉跡: 床面中央付近から、1.35×1.05mほどの隅丸長方形の掘り込みをもつ炉跡が見出された。掘り込みの深さは約10cmである。焼土は確認されなかったが、底部付近の覆土には微細な炭化物が非常に多く混じっていた。

付属ピット: 浅い楕円形のピットが1基(HP-1)、柱穴状ピットが17個検出された。HP-1は、深さ8cmほどの浅い皿状のピットで、HP-24~26と重複する。覆土上面から40cmほどの石皿が2点、一部分を重ねて置かれたような状態で出土した。性格は不明である。

柱穴状ピットは現場調査段階で番号を一旦与え、木の根などと判断して欠番としたものがある。確認できた柱穴状ピットはすべて直立するもので、13個が炉跡周辺に、4個が壁寄りに位置する。炉跡周辺の柱穴状ピットには、HP-4、HP-3・7・29、HP-24・25・26、HP-5・27・28を頂点とする長方形の配置がみられる。長軸方向が堅穴・炉跡とほぼ共通しており、4本柱の主柱穴と思われる。長方形の頂点においては、上記のように、ほぼ同一規模の柱穴状ピットが、2~3個のセットになる傾向がみられ、柱の立て替えが行われたものと思われる。HP-24・25・26はHP-1と重複している。土層断面での新旧の確認はできなかったが、HP-25・26はHP-1の坑底で検出され、HP-24はHP-1と同レベルで同時に検出されたことから、HP-24とHP-1は同時期のもので、HP-25・26はこれらよりも古いものと思われる。

遺物出土状況: 出土遺物は土器551点、石器等341点、計892点である。遺物の多くは覆土から出土しており、床面の遺物は少ない。覆土2層(土層図4・5層)では、壁寄りの部分から遺物が多く出土した。床面のスクレイパー(図Ⅲ-154-18)は、床に突き刺さった状態で出土した。また、上記のように、石皿が2点、HP-1の覆土上面から出土した。(柳瀬)

土器: 4~6はI群D1類a種の口縁部破片。1~3・7~8はD1類b種で、1・2は復元個体。3

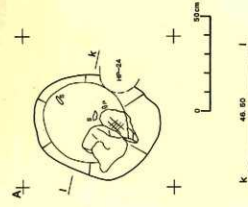
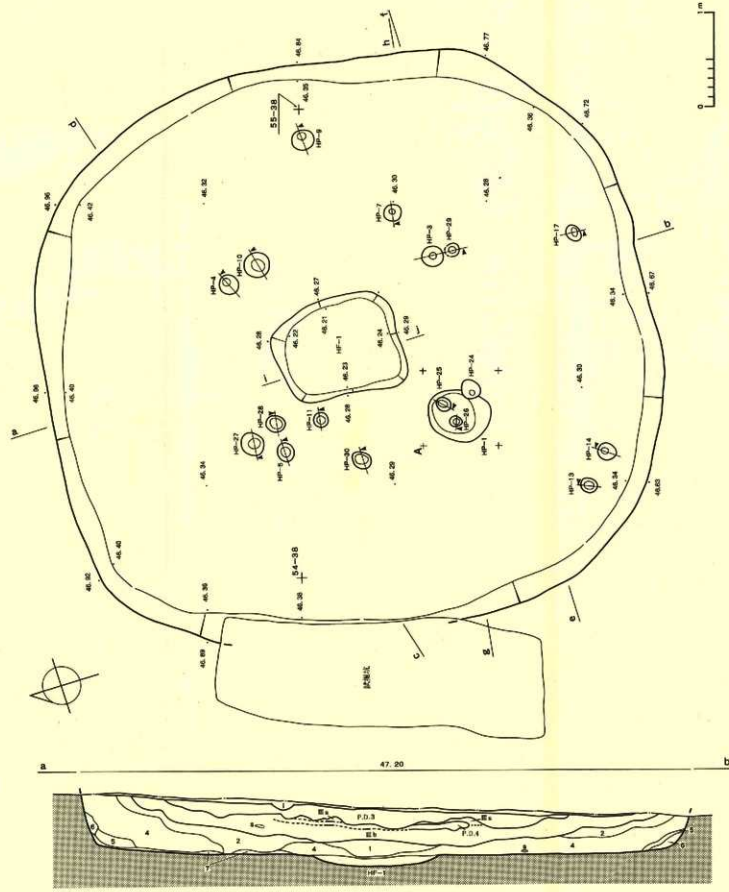
は砲弾形尖底。7～8は口縁部破片。9はD1類b種の土器片錘である。

D1類の口縁部形態は波状口縁(8)と平縁(1・2・4～7)があり、口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。器面調整はナデ(1・5・6・8)、すり消し条痕(1・2)、条痕(4)がある。文様は貝線文(2・7)、刺突は楕円刺突(7)、列点となるもの(7)、貝殻文は連続腹縁文(2)、背圧痕文(6)、爪形文は爪痕文(8)がある。文様構成は2は羽状の構成となる。その他、1・2は胴部外面に横位の背圧痕が不規則に施される。

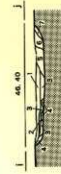
(土器出土位置関係) 平面分布は中央に稀薄で周辺に密度が高いドーナツ状である。垂直分布では凹レンズ状の堆積を示す。8は遺構中央部の下部から出土した遺物で、D1類の新手である。1は覆土2・1層(下部)から出土し、H-565(G7区)・H-566(G7区)・H-588(G7区)の覆土1層、H-568(G7区)の覆土1層・壁際、54-38区のⅢ層、55-38区のⅠ層と接合する。1は北側から覆土が流入した経路を示すもので、H-560-10もその流れの一群であろう(関係図-45)。1は破片が非常に細かく砕かれており、大型堅穴間で接合する。2は覆土2層(下層)から出土し、P-332の覆土上部、48-35区のⅠ層と接合する。2の場合もP-332から底部のみが出土している(関係図-46)。3～9はいずれも流れ込んだ遺物群と一体のものである。その他に掲載はしていないが他遺構との接合例が2件あり、事例1[1026]は覆土2・1層から出土し、H-605(G7区)の覆土1層、55-38区のⅠ層と接合する。事例2[1112]は覆土2・1層から出土し、H-605の覆土2層と接合する。いずれも東側の隣接遺構との接合例である。(富永)

石器：剥片石器は図示した11・15・16・19が黒曜石製である以外、すべて硬質頁岩製である。黒曜石の原材産地分析の結果、すべて赤井川産と推定されている(V章-3参照)。一堅穴から4点の黒曜石製遺物出土は今回の調査では最多で、複数点出土する堅穴もH-530・562があげられるだけである。

10は2b類の石鏃。11の石鏃は先端部・基部が欠損し、全体の形状は不明である。12・13は石鏃。12は折れ面に機能部を持つ2類で、先端部の磨減は顕著である。13の機能部は若干の磨耗が見られる程度である。14～16は石匙。14のつまみ部は上端に平坦面を残すT字形で、一部欠損している。15・16はつまみ部を持つことから石匙としたが、どれだけ実用的であったか疑問が残る。17・18は一側縁に刃部を持つスクレイパー。17の左側縁の調整は粗略で、刃部と判断できなかった。19は挟り状の刃部を持つスクレイパー(2c'類)としたが、15・16と同じ範疇に入れるべきものかもしれない。20は石核。21は研磨石材で、石質は蛇紋岩。研磨が平坦面の一部に見られるだけで、他の成形痕はない。22は閃緑岩製、23は安山岩製のたたき石で、周縁の敲打が顕著なもの。24は閃緑岩製のすり石。両平坦面にすり・敲打痕、両側縁に敲打痕を持つもので、表面の敲打痕は径2cmほどの浅い窪みが連続するものである。25は灰白色、細粒の凝灰岩製の砥石。断面図右面はさほど使用されておらず、平滑さではなく擦痕が見られる程度である。26・27は流紋岩製の砥石。27はH1-1出土のもので、平坦面に格子目の溝がある。溝は深く深いもので、これまで石鏃などでみられた線刻と同様のものか判断しかねる。28は凝灰岩製の石鋸で、表面の機能部過半が欠損している。29～36は2類の石鏃。石質は29が頁岩、30・34が安山岩、31が片岩、32・36が閃緑岩、33が砂岩、35が凝灰岩(灰緑色で粗粒)である。挟り部に敲打痕を持つものが多い。そのうち34は敲打によって割れたもので、破片2点は床面直上、1点は覆土2層から、ともに堅穴北西隅に近接して出土している。また、29の図下部に赤色顔料かと考えられる赤味が痕跡的に見られた。37は石の小型の石製品。石質は灰白色の凝灰岩で軟らかく、実用品とは考えられない。ただ、刃部(適当な用語が見当たらないので、ここでは石斧の部位名称を用いる。)は両面の研磨で刃縁を直線状に整形しており、石斧の製作工程を知る手掛かりになるのではなかろうか。(田中)



H-569の土層
1. 暗褐色土 (少量穴層土4層)
2. 黄褐色土 (粘質)



H-569の土層
1. 暗褐色土 (少量穴層土4層)
2. 黄褐色土 (粘質)

H-569の土層
1. 暗褐色土 (少量穴層土4層)
2. 黄褐色土 (粘質)

図III-151 H-569実測図

【①区】



HP-4



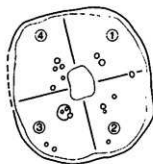
HP-10

HP-4の土層

1. 褐色土
2. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土

HP-10の土層

1. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土



【②区】



HP-3



HP-7



HP-9



HP-17

HP-3・29の土層

1. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土
2. 褐色土
3. 灰黄褐色土
4. 灰褐色土
5. 灰黄褐色土(3より色調が黄色い)

HP-7の土層

1. 褐色土
2. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土

HP-9の土層

1. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土

HP-17の土層

1. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土

【③区】



HP-13



HP-14



HP-24



HP-25



HP-26

HP-25・26の土層

1. 灰黄褐色土(黄褐色土のブロックが混入)

【④区】



HP-5



HP-11



HP-27



HP-28



HP-30

HP-5の土層

1. 灰黄褐色土

HP-11の土層

1. 褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土

HP-30の土層

1. 灰褐色土

HP-27の土層

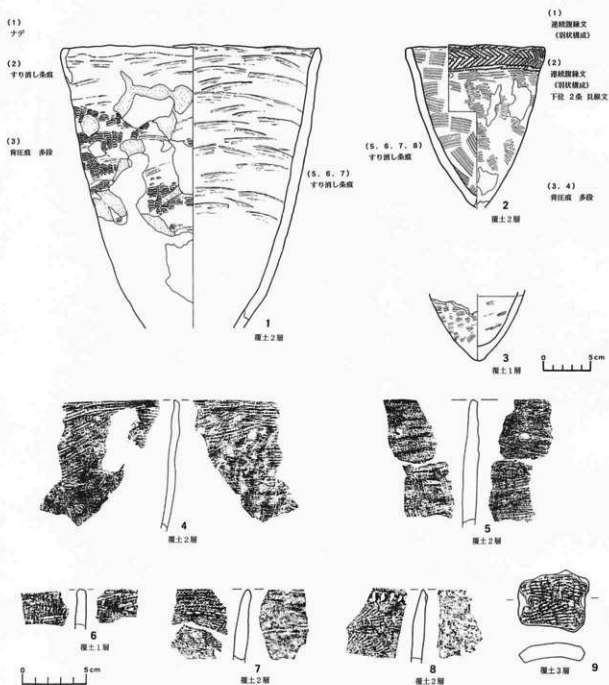
1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土
3. 暗褐色土(軽石が混入)
4. 灰褐色土・黄褐色土のモザイク状混合土
5. 灰黄褐色土(砂質、軽石が混入)
6. 黒色土

HP-28の土層

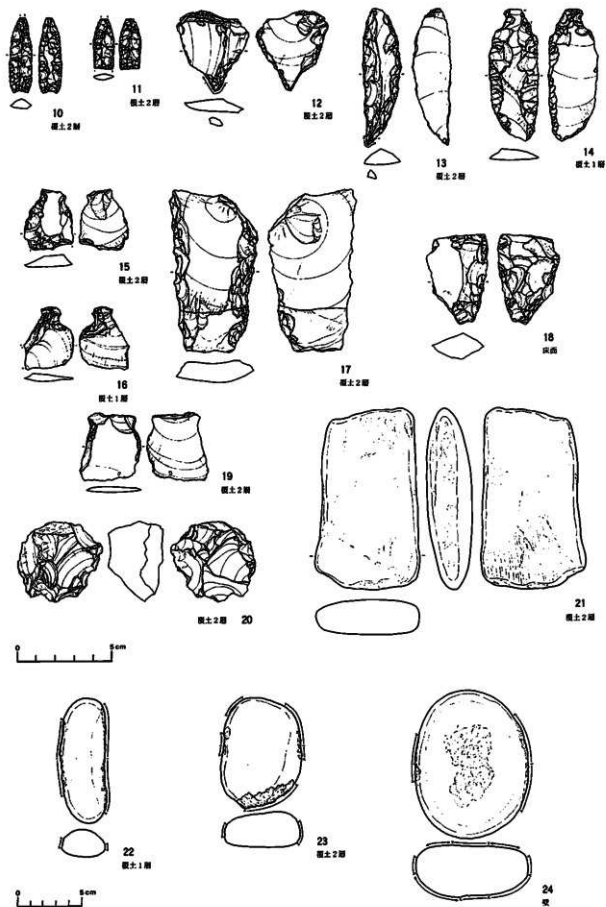
1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土(黄褐色土のブロックが混入)
3. 黄褐色土



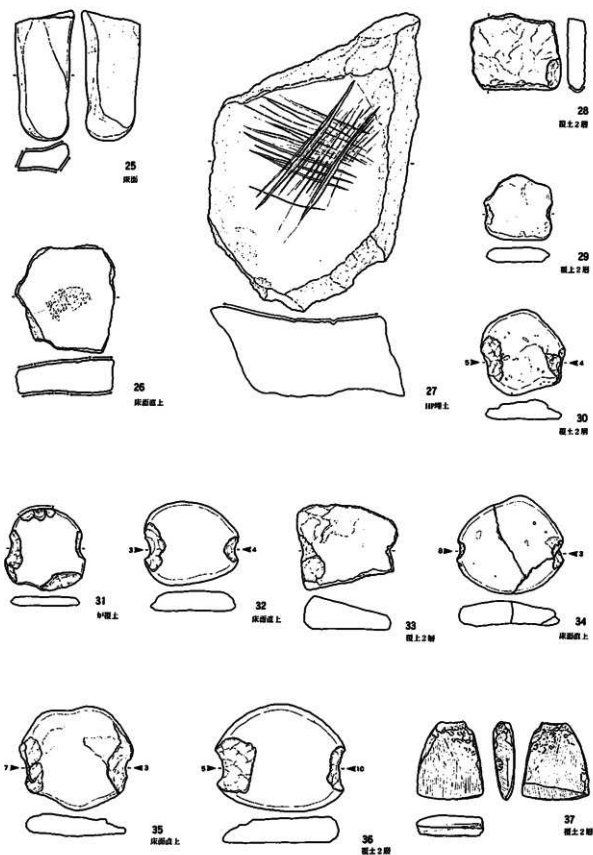
図Ⅲ-152 H-569柱穴実測図



図Ⅲ-153 H-569出土土器

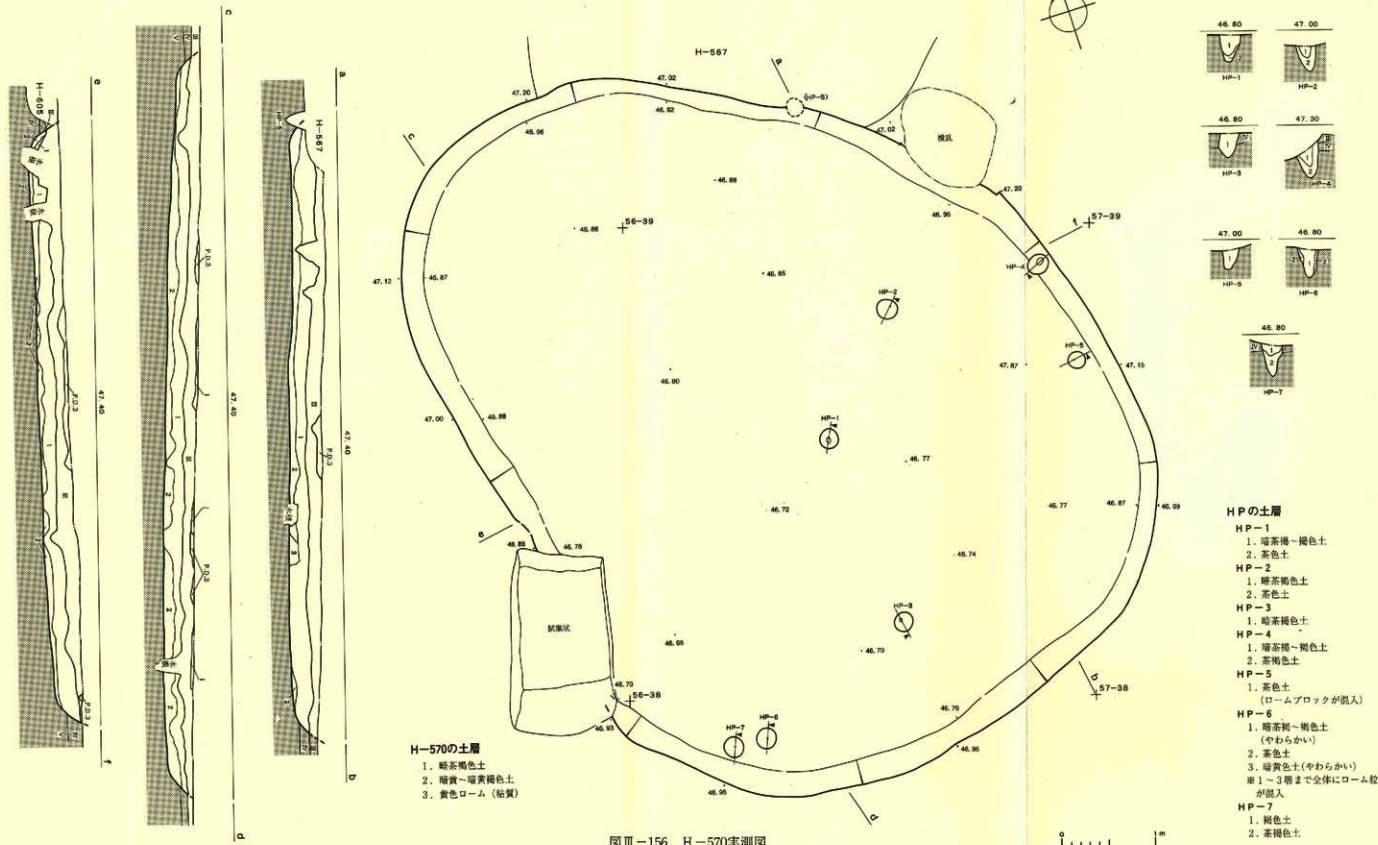


図III-154 H-569出土石器(1)



図Ⅲ-155 H-569出土石器(2)

H-570



図Ⅲ-156 H-570実測図

H-570 (図Ⅲ-156, 図版54)

位置: 55-37~39, 56-37~39, 57-38; 標高46.80mほどの北東から南東方向に傾斜する緩斜面上に位置し、H-567の南側にある。

規模: $8.43/7.86 \times 6.52/6.24 \times 0.28\text{m}$ 床面積: $(38.16)\text{m}^2$

平面形: 卵形 長軸方向: N-28°-W

確認・調査・土層: H-567の項で述べたとおり、I層除去後の56-38・39区周辺は黒色土中にP.D.3が散在していた。南北方向にP.D.3の散在地域を網羅して設定した土層観察用の土手(H-567・c-dラインとH-570・a-bライン)で、遺構の前後関係を捉えながら調査にあたった。新しいH-567の床面とは10cmほどの段差が確認され、H-567調査終了後、順次掘り下げた。H-567同様、床面・壁などに明確さはなく、はっきりしない部分が多い。遺物もⅢ層中から僅かに出土したほか、覆土中からI群D1群土器片、剥片および石錘各1点の計3点が出土しただけである。

覆土は上部に暗茶褐色土、下部に暗黄褐色土が主に堆積している。

重複関係: 本堅穴はH-567より古く、H-605より新しい。

時期: 覆土中からI群D1群土器片が1点出土しているが、特定は難しい。

床面・壁: 床面はⅣ層からⅤ層中につくられ、平坦である。全体的に北東方向から南西方向へ傾斜し、自然傾斜方向と同一である。壁は緩やかに立ち上がり、外傾気味である。

付属ビット: 検出できた柱穴状小ビットは7個で、深さは25cm前後で、すべて直立する。堅穴北側には検出されず、床面積に比べ少ない。

(田中)

H-574 (図Ⅲ-157・158, 図版58)

位置: 53-40・41, 54-40・41

規模: $5.48/5.16 \times 4.88/4.52 \times 0.34\text{m}$ 床面積: 22.32m^2

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-75°-E

確認・掘り込み面: I層除去後、P.D.3の落ち込みを確認した。Ⅲ層中からの掘り込みと思われる。

重複関係: なし。

時期: 堅穴内から遺物は出土しておらず、特定できない。

床面: Ⅳ層を浅く掘り込む。僅かに北から南に傾斜する。

壁: 全体に急傾斜で立ち上がる。壁高は平均30cm内外。

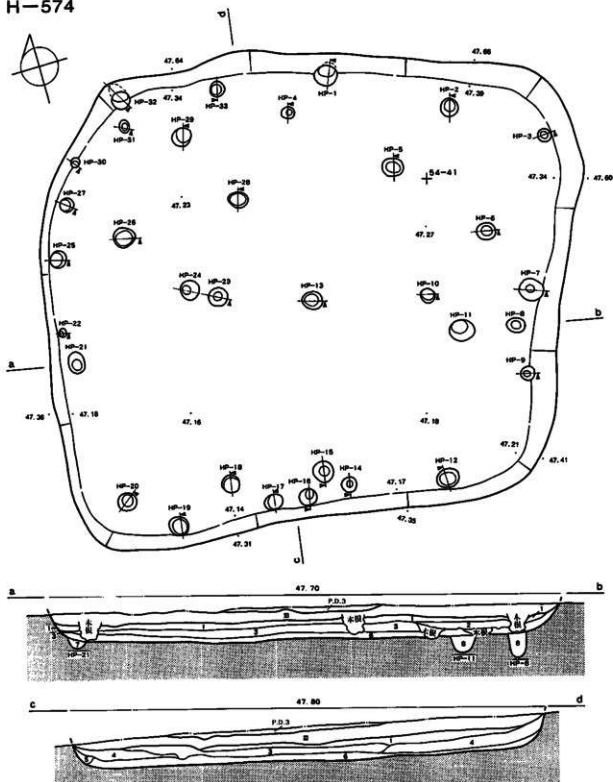
炉跡: なし。

付属ビット: 堅穴長軸上に、HP-13を挟んで東西に2個ずつ(HP-10・11とHP-23・24)の主柱穴がある。壁際には24個の柱穴があり、北壁のHP-1・32が堅穴中央に傾く以外、すべて直立する。東壁際にあるHP-7・8が35~40cmほどの深さを持つ以外、すべて小型のものである。

遺物出土状況: 遺物は流れ込んだⅢ層からのみ出土している。

(福井)

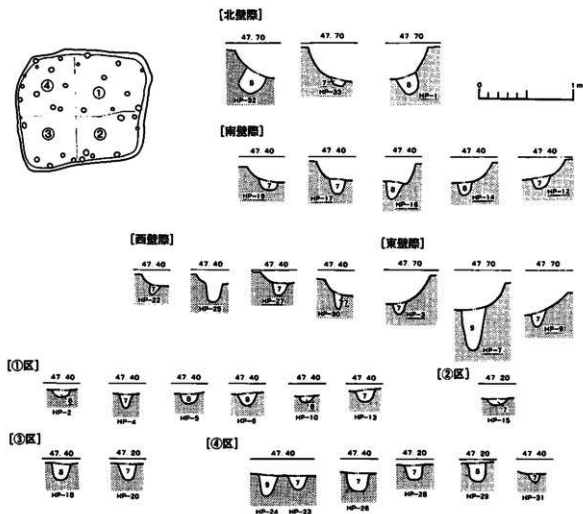
H-574



H-574の土層

1. 黒茶褐色土(しまりなく、ローム錠が若干混入)
2. 暗灰褐色土(しまりなく、ローム錠が若干混入)
3. 暗褐色土(しまりなく、ローム錠が多量に混入)
4. 暗茶褐色土(しまりなく、ローム錠が若干混入)
5. 黒褐色土(しまりなく、ローム錠が多量に混入)
6. 暗黄褐色土(しまりなく、ローム錠が微量混入)
7. 灰褐色土(やや粘質、ローム錠が微量混入)
8. 暗褐色土(ややしまりなく、ロームブロックが多量に混入)
9. 黒褐色土(しまりない)

図 III-157 H-574実測図



図Ⅲ-158 H-574柱穴実測図

H-581 (図Ⅲ-159, 図版58)

位置：54-35・36, 55-35・36；標高47.40~47.55mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：南側が道路によって壊されているため不明。

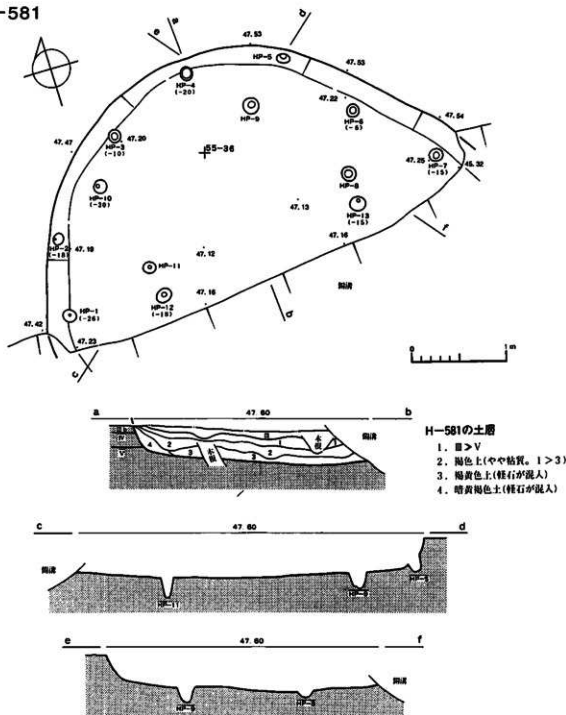
確認・調査・土層：55-36区の包含層調査中、Ⅳ層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。また側溝の壁面でも覆土状の土の落ち込みを確認した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。汚れた暗黄茶色土を除去し、Ⅴ層中で暗黄色土の堅い面を検出した。遺物はほとんど出土しなかった。また柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりも検出した。掘り込み面はⅢb層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ。土層図1)、覆土2層は混合土状の茶褐色土(土層図2)で、軽石が混入している。覆土3層は床面直上に堆積するもので、軽石の混じった汚れた暗黄茶色土(土層図3)である。10~20cmと厚く堆積している。

重複関係：本住居跡は他遺構と重複していない。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を掘り込んで構築されている。やや凹凸はあるが、堅い。

H-581



図面-159 H-581実測図

壁：立ち上がりは緩やかな傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は北西壁が18~28cm、北東壁が26~32cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは13個検出されている。HP-1~7・10は壁際をめぐるもので、やや

内傾している。HP-8・9・11~13は主柱穴と思われる。HP-8・9・11、HP-12・13の配列がみられ、建て替えが行われているものと考えられる。

遺物出土状況：遺物は覆土上のⅢ層で少量出土しているが、覆土1層でI群D1類土器2点、剥片1点、礫7点、覆土2層で礫5点が出土しているだけである。

(和泉田)

H-589 (図Ⅲ-160, 図版59)

位置：56-40・41

規模：3.70/3.33×3.16/2.78×0.30m 床面積：7.01㎡

平面形：長円形 長軸方向：N-9°-E

確認・調査・土層：Ⅲ層調査中に、56-42の杭を中心とした東西に長いP.D.3の薄層と、その周囲に広がる黒色土が検出された。2つの遺構の重複の可能性を想定し、南北方向に2本、東西方向に1本の土層観察用のベルトを設定して調査を行った。東西方向のベルトに沿ってトレンチ調査を行い、重複しない2つの遺構であることが確認された。

重複関係：H-590と隣接するが、重複しない。

時期：縄文時代早期中葉のI群D類土器の時期と思われる。

床面：V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、南に向かってやや傾斜している。

壁：全体にやや急に立ち上がるが、北から東にかけては緩やかである。

炉跡：検出されなかった。

付属ピット：柱穴状ピットが5個検出された。HP-2は規模的にこの堅穴に付属するものではない可能性があるが、付近にこれと対応しそうな遺構や柱穴状小ピットは検出されていない。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

(柳瀬)

H-590 (図Ⅲ-161, 図版59)

位置：55-40・41, 56-40・41

規模：3.58/3.20×3.37/3.01×0.25m 床面積：7.46㎡

平面形：不整円形 長軸方向：N-21°-W

確認・調査・土層：56-41の杭を中心とする、東西に長いP.D.3の広がりを検出されたことから、2つの遺構を想定して調査を行った（H-589参照）。

重複関係：H-589と隣接するが重複しない。

時期：縄文時代早期中葉のI群D類土器の時期と思われる。

床面：V層を掘り込んで構築されており、ほぼ平坦である。南に向かってやや傾斜している。

壁：北西側は緩やかだが、全体に急傾斜で立ち上がる。

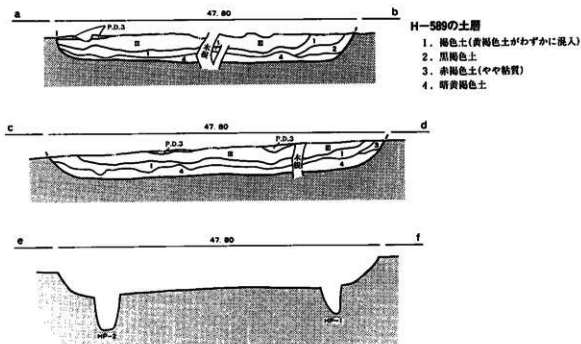
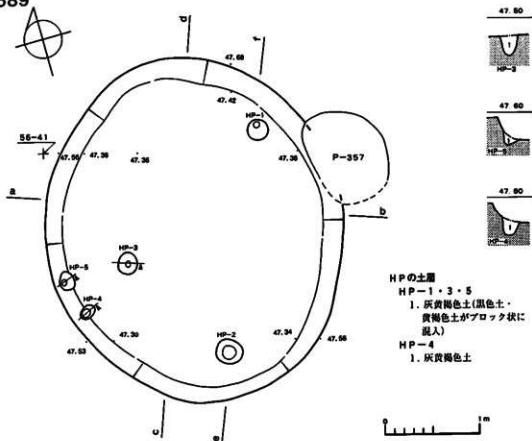
炉跡：検出されなかった。

付属ピット：柱穴状ピットが10個検出された。壁際のはHP-10を除き内傾する。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

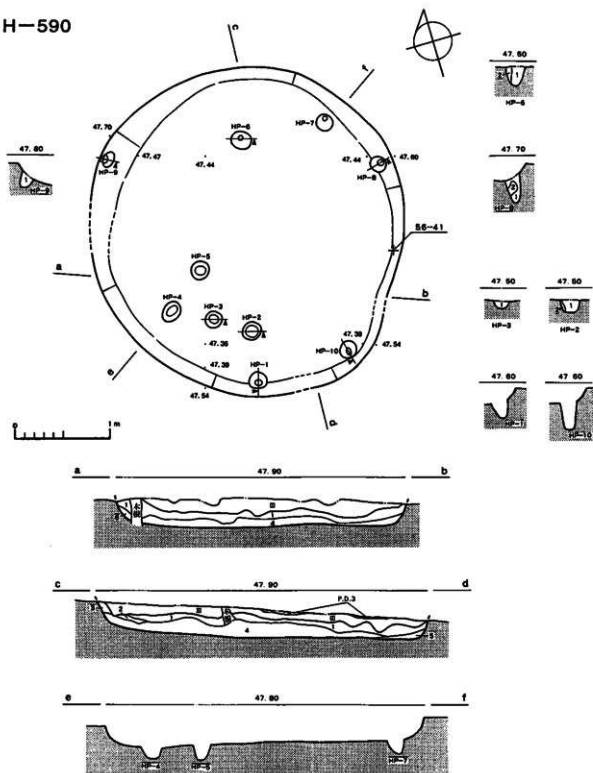
(柳瀬)

H-589



図Ⅲ-160 H-589実測図

H-590



H-590の土層

1. 褐色土(部分的に黄褐色土が混入)
2. 明褐色土
3. 赤黒褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 暗褐色土
6. 黄褐色土

HPの土層

- HP-2
1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土
- HP-3
1. 黄褐色土
- HP-4・5
灰黄褐色土

HP-6

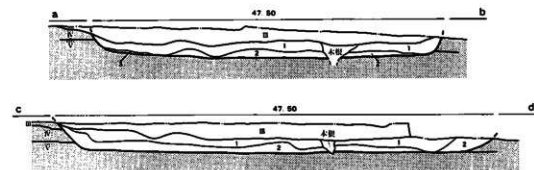
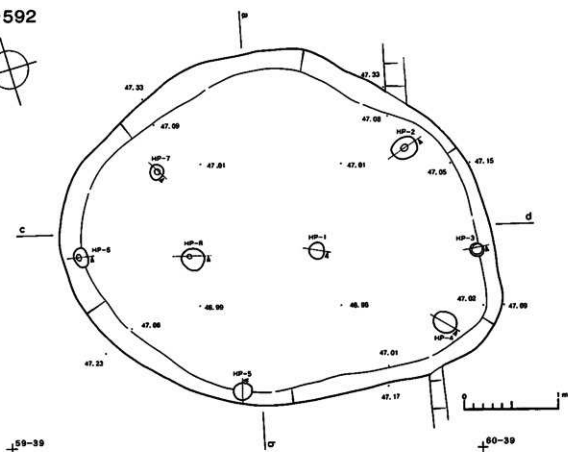
1. 灰黄褐色土
 2. 黄褐色土
- HP-7
灰褐色土

HP-8

1. 黄褐色土・灰黄褐色土のモザイク状混合土
 2. 黄褐色土
- HP-9
1. 褐色土(黒色土が混入)

図Ⅲ-161 H-590実測図

H-592



H-592の土層

1. 暗茶褐色土
2. 茶褐色土
3. 茶褐色土(軽石粒が混入)

HPの土層

- HP-1
1. 暗茶褐～褐色土
2. 暗黄色土
- HP-2
1. 暗茶褐色土
2. 茶色土
- HP-3
1. 茶色土
2. 暗黄色土

HP-4

1. 褐色土(ローム粒が若干混入)
2. 茶褐色土

HP-5

1. 褐色土
2. 茶色土

HP-6

1. 暗茶褐色土
2. 暗黄褐色土

HP-7

1. 暗茶褐色土(ロームブロックおよびローム粒が混入)

HP-8

1. 暗茶褐～褐色土
2. 茶色土

図面-162 H-592実測図

H-592 (図Ⅲ-162, 図版59)

位置: 59-39, 60-40; 標高47.00mほどの北から南方向に傾斜する緩斜面上、G7区の東端に位置する。単独に存在し、H-567・570からも東に10m離れている。

規模: $4.76/4.40 \times 3.89/3.42 \times 0.28\text{m}$ 床面積: 10.96m^2

平面形: 不整楕円形 長軸方向: N-59°-W

確認・調査・土層: 56-39区東側に段差があり、IV層上面まで掘り下がっていた。この面で半円形の暗茶褐色土の輪郭が観察されたため、I層除去後、土層観察用の土手を南北・東西方向に設定し調査を開始した。覆土は上部に暗茶褐色土(土層図1)が、下部に茶褐色土(土層図2・3)が堆積していた。H-565などの大型堅穴に比べ、床面・壁などにははっきりしない部分が多い。遺物もⅢ層中で僅かに出土したのみで、覆土中からは出土していない。

時期: 上記のとおり、出土遺物がなく特定できない。

床面・壁: 床面はV層中につくられ、平坦である。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、外傾気味である。南・北壁の一部が急激に立ち上がり、直立している。

付属ピット: 床面東西にそれぞれHP-1・8があり、HP-2・7は壁際にある。すべて直立する。深さは20~30cmほどのものが多い。(田中)

H-600 (図Ⅲ-163, 図版60)

位置: 55-36・37; 標高46.30mほどの緩斜面上に位置し、南北方向に並ぶH-568・569の南側に単独に存在する。南西側には50cmほど離れて、H-581がある。

規模: $3.98/3.58 \times (3.21)/(2.80) \times 0.24\text{m}$ 床面積: $(8.10)\text{m}^2$

平面形: 卵形 長軸方向: N-18°-E

確認・調査・土層: I層除去後の55-36区東側は、IV層上面が露出する状況であった。黒色土の楕円形状の輪郭がみられ、部分的には暗赤褐色土のⅢd層が薄く堆積していた。土層観察用の土手を南北・東西方向に設定し調査を開始した。黒色土(Ⅲb層とした)が大きく落ち込み、覆土は暗茶褐色~茶褐色土である。堅穴西側の一部は風倒木によって壊されている。遺物は覆土中から出土していない。

時期: 出土遺物がなく特定できない。Ⅲd層の存在からみれば古く位置付けられるかもしれない。

床面・壁: 床面はIV層からV層中につくられ、ほぼ平坦である。全体的に南方向へ傾斜する。壁は緩やかに立ち上がり、外傾する。

付属ピット: 床面ほぼ中央の南西側に1個(HP-1)が検出された。直立し、深さ15cmの先細りするものである。(田中)

H-605 (図Ⅲ-164, 図版60・117・161)

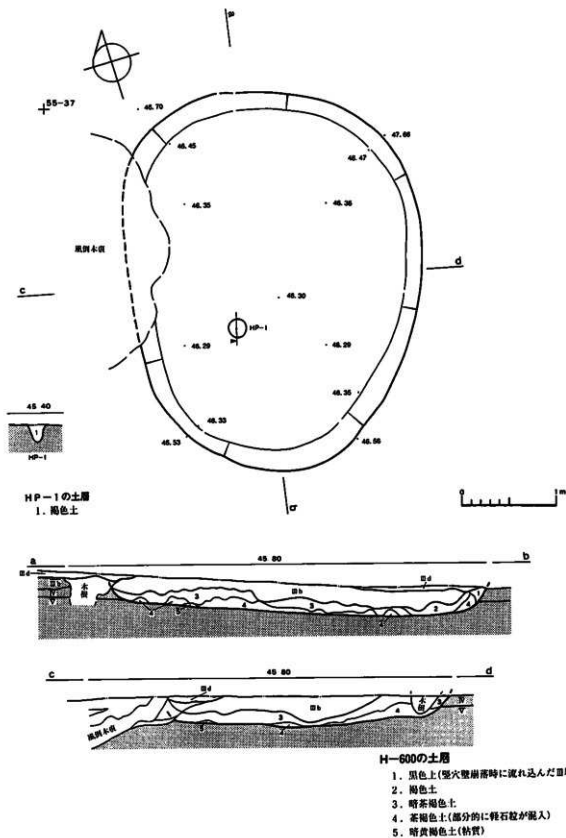
位置: 55-37・38; H-569・570に挟まれ位置する。

規模: $-/- \times 3.86/3.52 \times 0.32\text{m}$ 床面積: 不明

平面形: 隅丸長方形? 長軸方向: N-88°-W

確認・調査・土層: H-569調査終了後、55-37・38区を精査したところ、楕円形状に広がる暗赤褐色土がみられ、遺物の散布も確かめられた。遺構の存在が予想されたため、土層観察用の土手を南北・東西方向に設定し調査を開始した。覆土は上部に上記の暗赤褐色土と黒褐色土(土層図1・2)が堆積し、ほとんどの遺物がこの層より出土している。下部に暗茶褐色土(土層図2・3)が堆積し、

H-600



図Ⅲ-163 H-600実測図

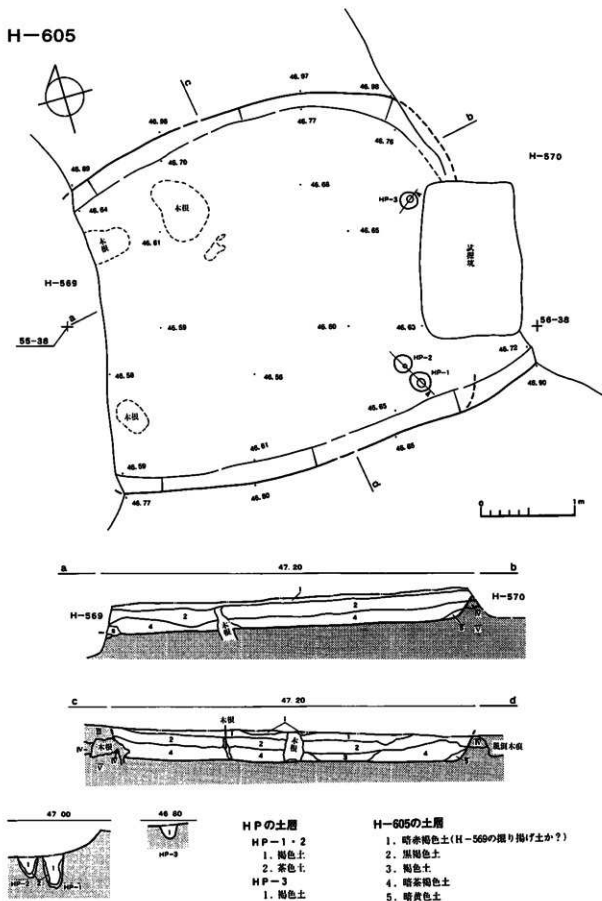
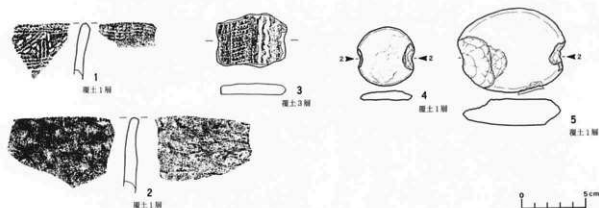


图 III-164 H-605 实测图



図Ⅲ-165 H-605出土遺物

壁際に暗黄色土が部分的にみられた。堅穴東側の試掘坑南側の壁がはっきりせず、北壁の連続性からみて掘りすぎの可能性が高い。

重複関係：本堅穴はH-569・570より古い。

時期：覆土上部から55点のⅠ群D1群土器片が出土しているが、床面出土の遺物はなく時期の特定は難しい。

床面・壁：床面はⅤ層中につくられ、平坦である。全体的に西方向へ傾斜している。堅穴西側の床面の一部は大きな木の根痕で壊されていた。壁は急角度に立ち上がり、やや外傾気味である。

付属ビット：堅穴東側に3個の柱穴状小ビットを検出した。東南隅のHP-1・2は直立するもので、覆土1・2層は漸移的ではっきりしない。HP-3は深さ15cmほどの小型なものである。(田中)

土器：1・2はⅠ群D1類a種、3はD1類a種の土器片。口縁部形態が平縁で、口唇部断面形は切り出し状である。器面調整はともにナデである。1は外傾面に3条の貝線文を巡らし、文様帯の下限を3条の貝線文と鋸歯状沈線文で区画する。2条の貝線文とその両側の楕円刺突で鋸歯状の文様を構成する。2は口唇部が外反する。

(土器出土位置関係) 分布は他遺構に切られるため全容は不明である(関係図-45)。1～3はD1類の古手と考えられる。1・2は覆土の上部、3は覆土の下部から出土する。(富永)

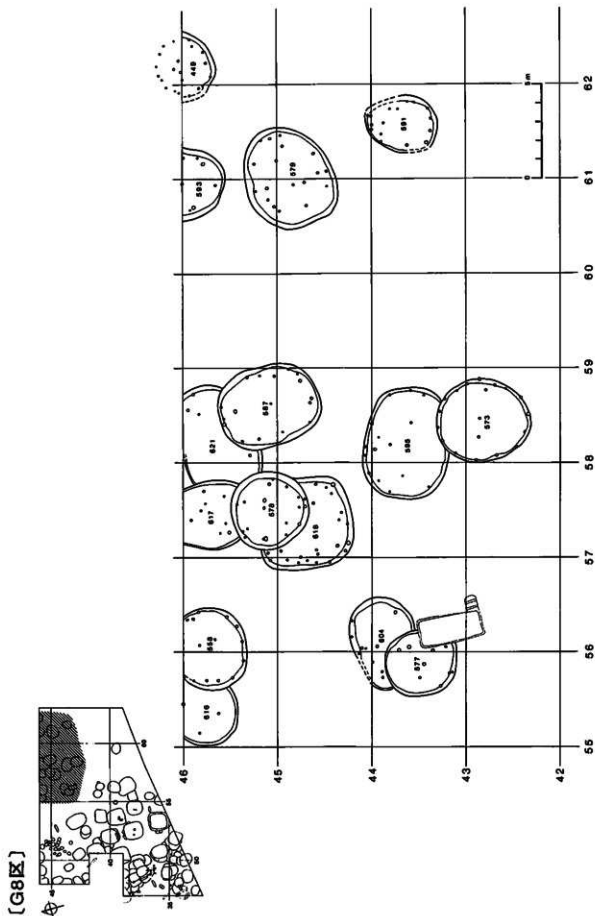
石器：4・5は2類の石錘。石質は順に、片岩、閃緑岩である。ともに挟り部に敲打痕が残り、5の下縁部にも平坦な敲打痕がある。これら図示した他の石錘は、すべて閃緑岩製、円礫素材の2類のもので、挟り部に敲打痕を持っている。(田中)

(8) G8区

この地区は平成6年度A地区の南に続く標高48.00m前後の尾根上の平坦面から、南方向に傾斜する緩斜面上に位置する堅穴を区画した。G6区の東端H-582からは東に15m程離れ、G7区北端H-589・590からも北に15m程離れている。

この地区には15軒の堅穴が存在し、ほぼ南北方向に3列並ぶ状況が捉えられる。西側からH-558・577・604・616、H-573・578・587・595・617・618・621、H-579・591・593・630のグループである。西側や中央に重複関係を持つ堅穴が多い。また、遺物の出土量はG区南西側に比べると極端に少なくなり、堅穴からもごく僅かである。

なお、H-577の南東側を壊して、第2次世界大戦末期の防空壕が作られている。(田中)



図Ⅲ-166 G8区竪穴住居跡位置図

H-558 (図Ⅲ-167, 図版61)

位置: 55-45, 56-45; 標高48.40m付近の平坦地に位置している。

規模: $4.33/3.94 \times (3.95)/(3.55) \times 0.38\text{m}$ 床面積: $(11.08)\text{m}^2$

平面形: 長円形状 長軸方向: N-77°-E

確認・調査・土層: 55-45, 56-45区の包含層調査中、Ⅲ層中でP.D.3、黒色土の広がりが見られた。このため周辺を精査し、暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定しⅢ層から順次掘り下げ、調査を行う。Ⅲ層と黄色ロームの混じり合った土を除去し、濁川火山起源の火山灰（淡緑灰色砂質土、Ng-a）上で堅い面が検出され、この面で柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面として、壁の立ち上がりを検出した。覆土はⅢ層と黄色土が混じり合った土であるが、ほぼ3層に分けられる。覆土1層は暗褐色土（Ⅲ>V。土層図1）、覆土2層は褐色土（Ⅲ>V。土層図2）である。覆土3層は床面上に堆積する土で、汚れの目立つ粘質の暗黄茶色土（土層図4・5）である。また西壁際には軟質の黒褐色土（土層図3）の堆積が見られた。

重複関係: 本住居跡は、H-616と重複しており、これより新しい。

時期: 時期の確定できる遺物は出土していないが、周辺の包含層出土土器などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層を浅く掘り込んで構築されている。南から北へ若干傾斜している。やや凹凸はあるが、平坦で、堅い。ただ中央部がややくぼんでいる。

壁: 西側の立ち上がりは緩やかで、他は急傾斜である。検出面からの壁高は、西壁が16~22cm、南壁が19~24cm、東壁が21~28cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは14個検出されている。このうちHP-1~12は壁際をめぐるもので、HP-2・8・10はやや内傾するが、他は直立し、ほぼ全体が杭状にとがったものである。HP-13・14は主柱穴と思われ、検出状況、覆土の堆積状態などからみて、HP-13が新しいものと思われる。HP-4・12・13は非常に深く、しっかり掘られている。

遺物出土状況: 南壁で、剥片が1点出土しているだけである。

(和泉田)

H-573 (図Ⅲ-168, 図版62)

位置: 58-42・43; 標高47.96~48.10mのほぼ平坦地に位置している。

規模: $5.03/4.62 \times 4.38/4.02 \times 0.32\text{m}$ 床面積: 14.56m^2

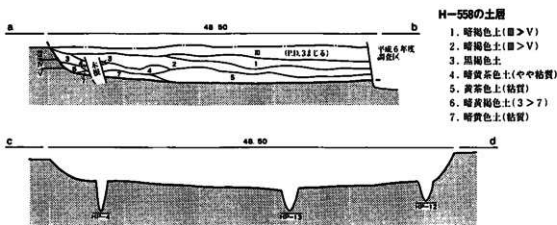
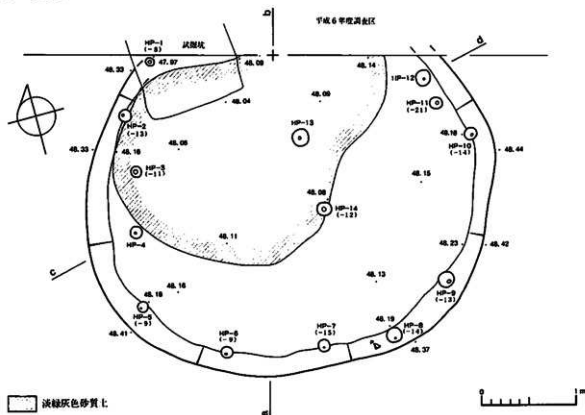
平面形: 長円形 長軸方向: N-17°-E

確認・調査・土層: 58-42・43区周辺のI層を除去したところ、P.D.3、黒味のあるⅢ層の広がりを確認した。遺構が想定されたため、土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、V層中で灰黄色土の面と、柱穴状小ピットを検出したことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層は暗褐色土（Ⅲ>V。土層図1）である。覆土2層は混合土状の茶褐色土（土層図2）である。覆土3層は床面上に堆積するもので、黄色ロームを多く混入し、粘質の暗茶灰色系の土（土層図4~6）である。

重複関係: 本住居跡は、H-595と重複しており、これより新しい。

時期: 覆土と周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

H-558



図Ⅲ-167 H-558実測図

床面：Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。やや軟質で、平坦である。

壁：立ち上がりは全体に急傾斜である。検出面からの壁高は21～28cmである。

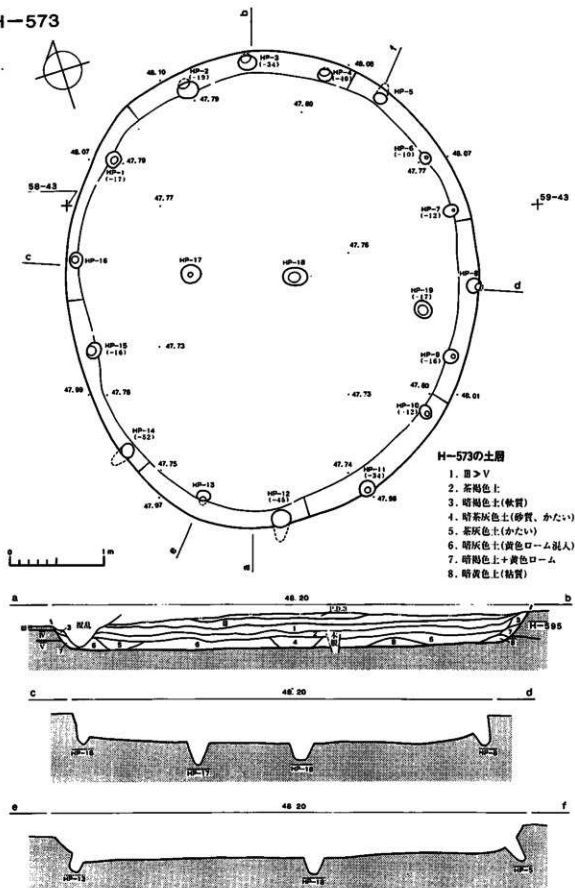
炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは19個検出されている。HP-1～16は壁面で検出されたもので、全体に内傾している。HP-18は主柱穴と思われ、直立している。1本柱と思われる。

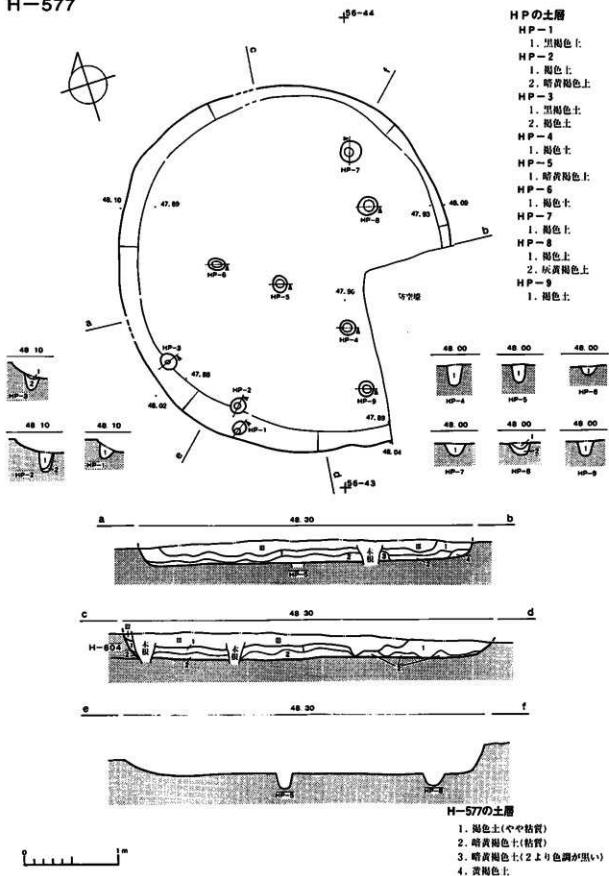
遺物出土状況：覆土、床面付近から遺物は出土していない。

(和泉田)

H-573



H-577



図Ⅲ-169 H-577実測図

H-577 (図Ⅲ-169, 図版63)

位置: 55-43・56-43

規模: $3.93/3.60 \times 3.52/3.21 \times 0.31\text{m}$ 床面積: $(9.23)\text{m}^2$

平面形: 隅丸方形? 長軸方向: N-10°-W

確認・調査・土層: Ⅲ層調査中に暗褐色土の広がりが見出された。防空壕壁面の壁面で暗黄褐色土の落ち込みが確認されたことから、遺構を想定して調査を行った。

重複関係: H-604と重複し、これより新しい。

時期: 縄文時代早期中葉のⅠ群D類土器の時期と思われる。

床面: ほぼ平坦で、V層を掘り込んで構築されている。

壁: 全体にやや急に立ち上がるが、南側は緩やかである。

炉跡: 検出されなかった。

付属ピット: 柱穴状小ピットが9個検出された。断面形から、HP-9は柱穴ではない可能性がある。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

(柳瀬)

H-578 (図Ⅲ-170, 図版64)

位置: 57-44・45; 標高48.32~48.39mのほぼ平坦地に位置している。

規模: $4.13/3.68 \times 4.00/3.48 \times 0.44\text{m}$ 床面積: 10.03m^2

平面形: 円形

確認・調査・土層: 57-44・45区の包含層調査中、Ⅲ層中でP.D.3まじりのⅢ層の広がりが確認され、暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層、覆土を順次掘り下げ、調査を行う。V層中で明黄色の砂質で堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ3層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>V。土層図1)である。覆土2層は粘質の暗灰褐色土(土層図3)である。覆土3層は床面上に堆積する土で、粘質の暗茶灰色土(土層図9)である。3層は15~20cmと厚い。

重複関係: 本住居跡は、H-617・618・621と重複しており、これらより新しい。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: V層をやや深く掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりはやや急傾斜である。検出面からの壁高はほぼ31~39cmである。

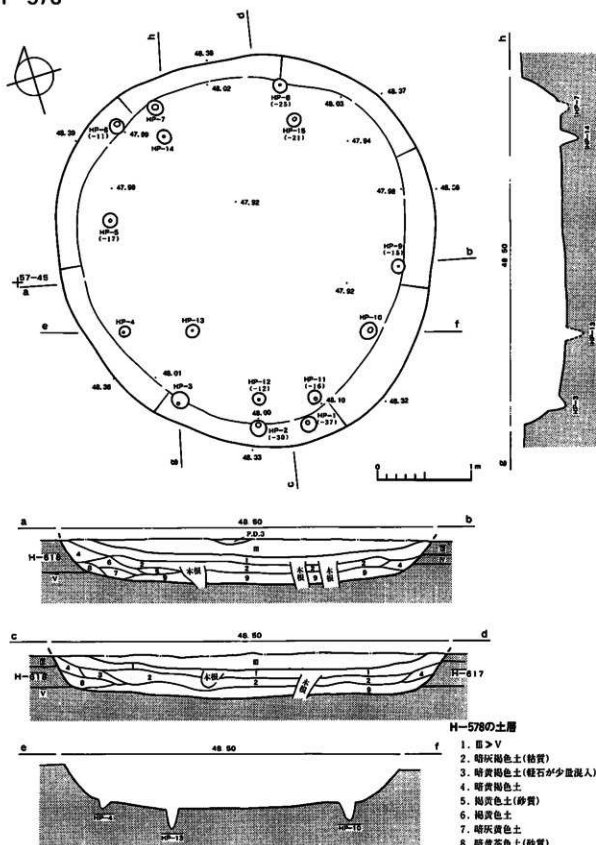
炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは15個検出されている。HP-1~12は壁際をめぐるもので、直立している。HP-11・12は古い小ピットで、堅穴は拡張されているものと考えられる。HP-13~15は主柱穴で、4本柱が想定される。

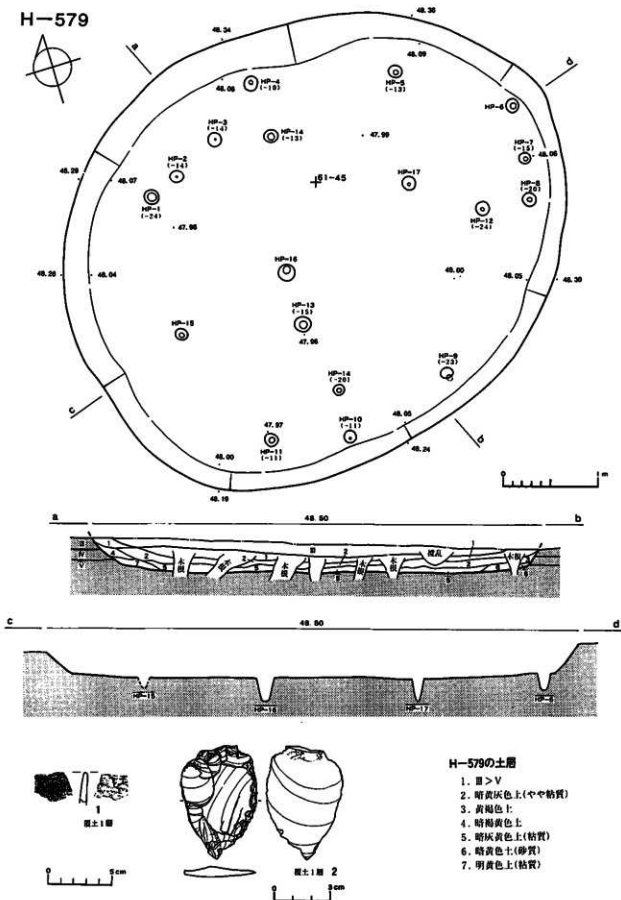
遺物出土状況: 遺物は覆土上のⅢ層中で少量出土しているが、覆土、床面付近からは出土していない。

(和泉田)

H-578



図Ⅲ-170 H-578実測図



図Ⅲ-171 H-579実測図と出土遺物

H-579 (図Ⅲ-171, 図版65・115・148)

位置: 60-44・45, 61-44・45; 標高48.19~48.37mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 5.62/5.13×4.67/4.15×0.31m 床面積: 16.93m²

平面形: 楕円形 長軸方向: N-72°-E

確認・調査・土層: 61-45区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で黒味のあるⅢ層の広がり確認されたため、土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。Ⅲ層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。Ⅲ層、覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で、砂質で堅い暗灰黄色土の面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は茶褐色土に近い混合土(Ⅲ>Ⅴ。土層図1)である。覆土2層はやや粘質の暗灰黄色土(土層図2)で、覆土3層は粘質の暗灰黄色土(土層図5)である。覆土2・3層は黄色ロームの多少による分層で、同質の土である。覆土は木の根などが多く、不安定な堆積状態である。

重複関係: 本住居跡は他遺構と重複していない。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。砂質で堅く、ほぼ平坦である。

壁: 立ち上がりは緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が20~28cm、西壁が16~22cm、南壁が17~22cm、東壁が24~29cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは18個検出されている。HP-15~17は主柱穴と思われる。HP-1~12・14・18は壁際をめぐるものと思われ、直立している。このうちHP-1~3・18・5・12・14・11は古い住居跡のものと考えられ、建て替え、拡張が行われた可能性がある。

遺物出土状況: 覆土上のⅢ層で遺物が少量出土しているが、覆土1層でI群I1類土器1点、スクレイパー1点、剥片1点が出土しただけである。(和泉田)

土器: 1はI群I1類のミニチュア土器である。波状口縁で、口唇部断面形は角形である。内外面に幼児の条痕で調整する。(富永)

石器: 2は硬質頁岩製のスクレイパー。右側縁に外湾する刃部を持つ2b類である。素材剥片への調整は刃部のみで、素材そのものの形状を残している。(田中)

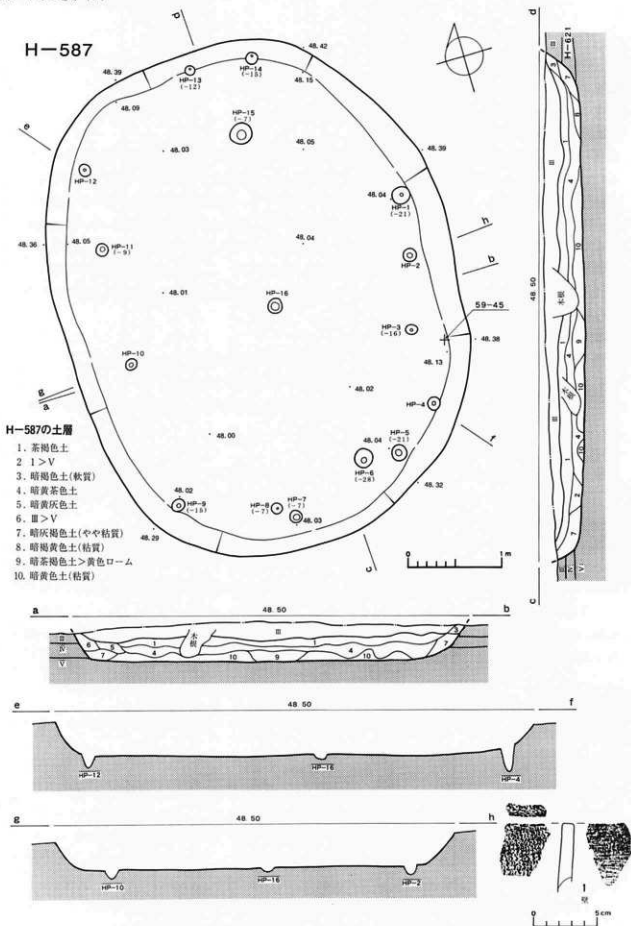
H-587 (図Ⅲ-172, 図版66・115)

位置: 58-44・45, 59-44・45; 標高48.29~48.42mの東から西へやや傾斜するところに位置している。

規模: 5.40/5.00×4.20/3.70×0.36m 床面積: 15.81m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-S

確認・調査・土層: 58-44・45区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中でP.D.3、黒味のあるⅢ層の広がり確認された。このため土層観察用の土手を設定し、Ⅲ層を少しづつ掘り下げ、遺構検出作業を行う。この結果、Ⅳ層直上付近でⅢ層、暗灰褐色土の落ち込みを検出した。覆土を順次掘り下げ、Ⅴ層中で明黄色土の堅い面を検出した。柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層で、覆土1層は明茶褐色土(土層図1)、覆土2層は暗黄褐色土(土層図4)である。これは覆土1層と2層が混じり合った土で、汚れている。覆土3層は床面上に堆積する土で、粘質の暗黄色土(土層図10)である。部分的に暗茶褐



図Ⅲ-172 H-587実測図と出土土器

色土>Vの土が見られる。覆土は木の根痕などが多く、全体に不安定な堆積状態である。

重複関係：本住居跡はH-621と重複し、これより新しい。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。やや東から西へ傾斜しており、平坦で、堅い。

壁：立ち上がりは全体に緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は、北壁が27~31cm、西壁が23~33cm、南壁が21~30cm、東壁が19~32cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは16個検出されている。HP-1~14は壁際をめぐるもので、ほぼ直立している。HP-16は浅い皿状であるが、主柱穴と思われる。

遺物出土状況：壁際でI群D1類土器が3点、D2類土器1点が出土しているだけである。（和泉田）
土器：1はD2類の口縁部破片。平縁で、口唇部断面形は角形である。内面をすり消し条痕、上面を連続腹縁文、外面を押引波状文で調整する。（富永）

H-591（図Ⅲ-173、図版66）

位置：61-43・44

規模：4.50/3.70×3.14/2.60×0.28m 床面積：(7.53) m²

平面形：楕円形 長軸方向：N-31°-E

確認・調査：Ⅳ層上面でⅢ層の落ち込みを確認した。全体的に浅く不明瞭な部分が多い。覆土から遺物も全く出土していない。

掘り込み面はおそらくⅢ層中かと思われる。

重複関係：なし。

時期：上記のとおり遺物が出土せず、特定できない。

床面：Ⅳ層を浅く掘り込んで構築している。北から南方向に緩やかに傾斜している。

壁：全体に緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は北壁で約20cm、南壁で10~15cmである。

炉跡：なし。

付属ピット：主柱穴と考えられるものは、検出されなかった。壁に沿って16個検出された。（福井）

H-593（図Ⅲ-174、図版67・148）

位置：60-45、61-45；標高48.38~48.46mのほぼ平坦地に位置している。

規模・床面積・平面形・長軸方向：不明

確認・調査・土層：61-45区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、覆土を順次掘り下げ調査を行う。V層中で明灰黄色土のやや堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は二層に分けられる。覆土1層は暗褐色土（Ⅲ>V。土層図1・2）、覆土2層は粘質の暗灰黄色土（土層図4~6）である。

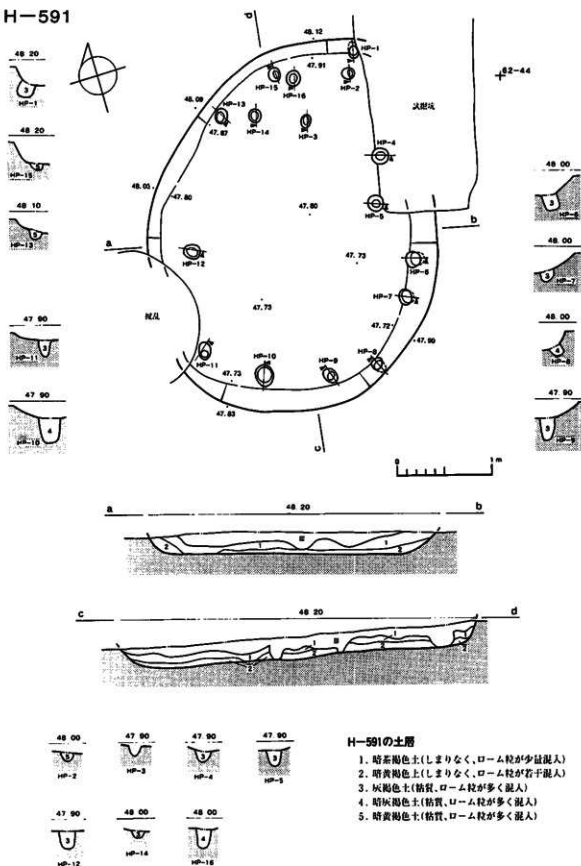
重複関係：本住居跡は他遺構と重複していない。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：V層を浅く掘り込んで構築されている。平坦で、やや堅い。部分的に濁川火山起源の淡緑灰色粗砂（Ng-a）が見られる。

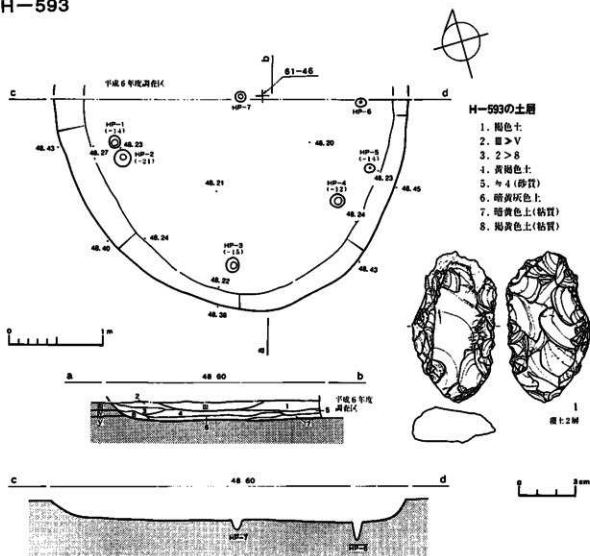
壁：全体に立ち上がりは緩やかな傾斜である。残存部分の検出面からの壁高は15~22cmである。

H-591



図Ⅲ-173 H-591実測図

H-593



図Ⅲ-174 H-593実測図と出土石器

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ビット：柱穴状小ビットは7個検出されている。HP-7は主柱穴と思われる。他は壁際をめぐるものである。

遺物出土状況：遺物は覆土2層でⅠ群ⅠⅠ類土器1点、両面調整石器1点が出土しただけである。

(和泉Ⅲ)

石器：1は硬質頁岩製の両面調整石器である。左面には素材剥片の剥離面を残し、調整は粗略である。右側縁は直線状となっているが、刃部とは判断できなかった。

(Ⅲ中)

H-595 (図Ⅲ-175, 図版62)

位置: 57-43・44, 58-43・44; 標高48.07~48.21mのほぼ平坦地に位置している。

規模: 6.10/5.63×(4.50)/(4.11)×0.29m 床面積: (19.53) m²

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-70°-W

確認・調査・土層: 58-43区周辺の包含層調査中、Ⅲ層中で黒味のあるⅢ層の広がりが見られ、暗褐色土の落ち込みを検出した。このため土層観察用の土手を設定し、暗褐色土から順次掘り下げ、調査を行う。Ⅴ層中で暗黄色土の堅い面を検出し、柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土はほぼ三層に分けられる。覆土1層は暗褐色土(Ⅲ>Ⅴ。土層図1)、覆土2層は暗灰褐色土(土層図2)である。覆土3層は床面直上に堆積する土で、やや粘質の暗黄灰色土(土層図5・6)である。

重複関係: 本住居跡は、H-573と重複しており、これより古い。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面: Ⅴ層を浅く掘り込んで構築されている。平坦で、堅い。

壁: 立ち上がりは全体的に急傾斜である。検出面からの壁高は、北西壁が20~27cm、南西壁が17~22cm、南東壁が21~26cm、北東壁が22~29cmである。

炉跡: 焼土などは検出されていない。

付属ピット: 柱穴状小ピットは15個検出されている。HP-1~10は壁際をめぐるもので、直立している。HP-11・12は直立し、位置的にみて主柱穴と思われる。2本柱が想定される。

遺物出土状況: 遺物は覆土2層で、剥片が1点出土しているだけである。(和泉田)

H-604 (図Ⅲ-176, 図版63)

位置: 55-43・44, 56-43・44

規模: 4.96/4.48×3.51/3.24×0.25m 床面積: (11.08) m²

平面形: 長円形 長軸方向: N-76°-W

確認・調査: Ⅲ層調査中に暗褐色土の広がりが見出された。また、試掘溝の壁面でも暗褐色土などの落ち込みを確認したことから、遺構を想定して調査を行った。

重複関係: H-577と重複し、これより古い。

時期: 縄文時代早期中葉のⅠ群D類土器の時期と思われる。

床面: ほぼ平坦で、Ⅴ層を掘り込んで構築されている。

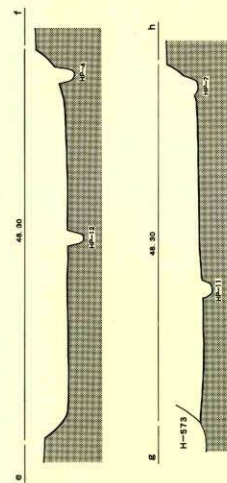
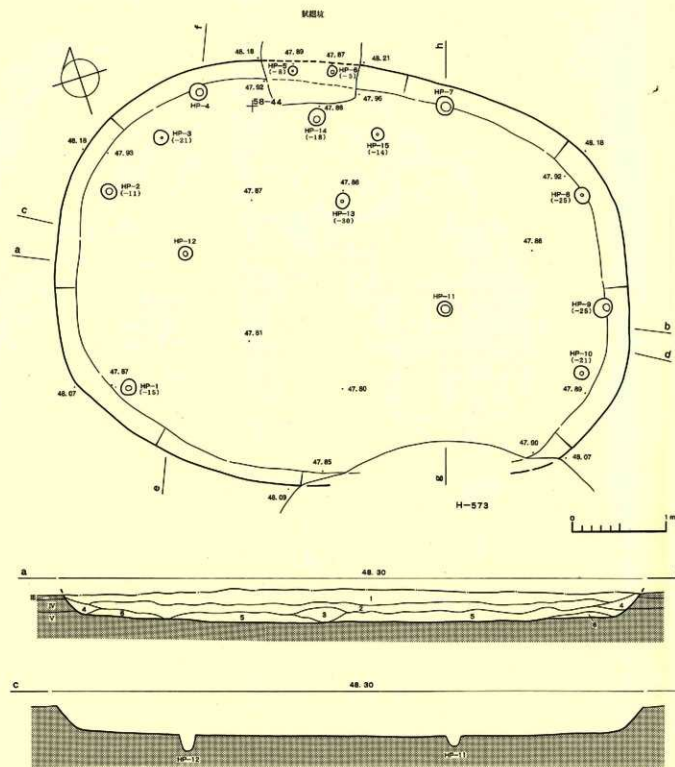
壁: 北側はやや急傾斜だが、全体に緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は約0.27mである。

炉跡: 検出されなかった。

付属ピット: 柱穴状ピットが10個検出された。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。(柳瀬)

H-595

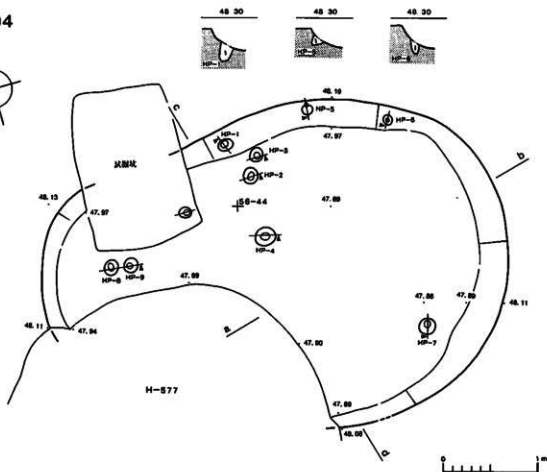


H-595の土層

1. Ⅲ>Ⅴ
2. Ⅰ>Ⅴ
3. Ⅳ1 (軟質)
4. 茶褐色土
5. 暗黄灰色土(やや粘質)
6. 暗灰黄色土(5に黄色ロームがブロック状に混入)

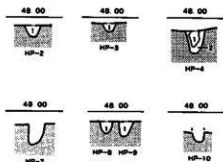
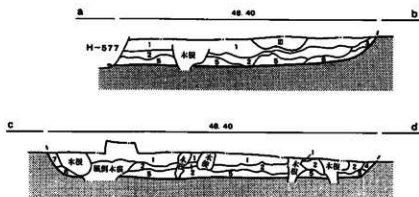
図III-175 H-595実測図

H-604



H-604の土層

1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. 明褐色土
4. 灰褐色土(やや粘質)
5. 暗黄褐色土
6. 黄褐色土(粘質)
7. 褐色土
8. 黄褐色土(黒色土がモザイク状に混合)



HPの土層

- HP-1
1. 灰黄褐色土
- HP-2
1. 灰黄褐色土(ロームブロックが混入)
- HP-3
1. 灰黄褐色土(ロームブロックが混入)
- HP-4
1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土(粘質)

- HP-5
1. 暗灰褐色土
- HP-6
1. 灰黄褐色土
- HP-8
1. 灰黄褐色土
- HP-9
1. 灰黄褐色土

図III-176 H-604実測図

出した。この面で柱穴状小ピットも検出されたことからこの面を床面とし、壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と思われる。覆土は三層に分けられる。覆土1層は褐色土（Ⅲ＞Ⅴ。土層図2）、覆土2層は黄褐色土（Ⅲ＋Ⅴ。土層図3～5）である。覆土3層は床面直上に堆積する土で、粘質で汚れた黄茶色土（土層図6・7）である。

重複関係：本住居跡は、H-558と重複しており、これより新しい。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

床面：Ⅴ層を掘り込んで構築されている。やや凹凸があり、堅い。

壁：立ち上がりは緩やかな傾斜である。検出面からの壁高は、全体に10～19cmである。

炉跡：焼土などは検出されていない。

付属ピット：柱穴状小ピットは3個検出されている。HP-1～3は主柱穴で、4本柱が想定される。

遺物出土状況：覆土、床面付近から遺物は出土していない。（和泉田）

H-617（図Ⅲ-178、図版67）

位置：57-45

規模：—/（2.87）×3.67/3.38×0.35m 床面積：不明

平面形：長円形？ 長軸方向：N-9°-E

確認・調査：Ⅲ層調査中に黒色土の広がりが見られ、H-578壁面および平成6年度A地区との境界での土層観察から、褐色土などの落ち込みを確認した。このため、遺構を想定し、土層観察用のベルトを残しながら調査を行った。なお、覆土から、遺物は出土していない。

重複関係：H-578・621と重複する。H-578より古く、H-621より新しい。

時期：縄文時代早期中葉のⅠ群D類土器の時期と思われる。

床面：ほぼ平坦で、Ⅴ層を掘り込んで構築されている。

壁：全体にやや急に立ち上がる。

炉跡：検出されなかった。

付属ピット：柱穴状ピットが8個検出された。すべて直立するが、概して浅い。（柳瀬）

H-618（図Ⅲ-179、図版68）

位置：56-44・45、57-44・45

規模：4.80/4.40×4.78/4.32×0.20m 床面積：（17.30）㎡

平面形：隅丸方形 長軸方向：N-15°-E

確認・調査：Ⅳ層上面でⅢ層の落ち込みを確認した。おそらくⅢ層中からの掘り込みと思われる。遺物は覆土中から出土していない。

重複関係：H-578に切られている。

時期：上記のとおり、遺物の出土はなく特定できない。

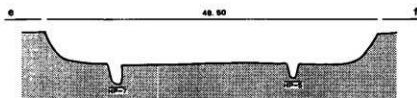
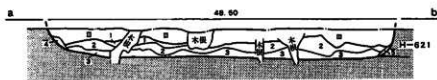
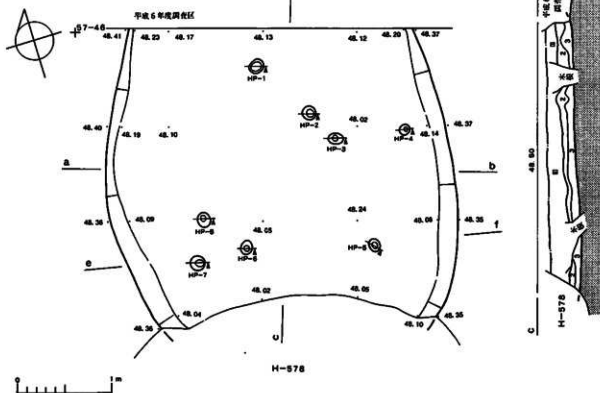
床面：Ⅳ層を浅く掘り込んで構築され、ほぼ平坦である。

壁：全体的に緩やかに立ち上がる。壁高は平均20cm内外である。

炉跡：なし。

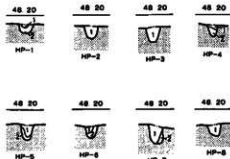
付属ピット：堅穴長軸線上に2個の主柱穴がある（HP-20・21）。ただ、HP-20は小型で浅く、用をなしたかは疑問が残る。壁際を巡って26個検出された。深さはまちまちであるが、皿状を呈するもの以外直立する。（福井）

H-617



H-617の土層

1. 黒褐色土
2. 褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗灰褐色土 (若干粘質)



HPの土層

- HP-1
1. 灰褐色土(ローム粒が混入)
2. 灰黄褐色土(粘質)
- HP-2
1. 灰黄褐色土
- HP-3
1. 灰黄褐色土
- HP-4
1. 灰黄褐色土(ローム粒が混入)
2. 灰黄褐色土(粘質)

HP-5

1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土

HP-6

1. 灰褐色土(しまりある)
2. 灰黄褐色土

HP-7

1. 灰褐色土(しまりある)
2. 灰黄褐色土(粘質)

HP-8

1. 灰黄褐色土

図Ⅲ-178 H-617実測図

H-621（図Ⅲ-180，図版69）

位置：57-45，58-45

規模：(5.78)／(5.56)×4.06／3.73×0.27m 床面積：不明

平面形：長円形？ 長軸方向：N-84°-E

確認・調査：Ⅲ層調査中に黒色土の広がりが検出された。H-578・587・617の壁面および試掘溝の壁面で、暗黄褐色土などの落ち込みを確認したことから、遺構を想定して調査を行った。

重複関係：H-578・587・617と重複し、これより古い。

時期：縄文時代早期中葉のⅠ群ⅠⅠ類土器の時期と思われる。

床面：ほぼ平坦であるが、南に向かってやや傾斜している。

壁：全体にやや急に立ち上がる。

炉跡：検出されなかった。

付属ピット：柱穴状ピットが5個検出された。すべて直立している。

遺物出土状況：覆土、壁際および床面直上から、Ⅰ群ⅠⅠ類の土器片が合計7点出土している。

（梅瀬）

H-630（図Ⅲ-180）

位置：61-45・46，62-45・46

規模：(3.60)／(3.14)×(3.50)／(3.10)×0.24m 床面積：不明

平面形：円形 長軸方向：N-75°-W

確認・調査：Ⅳ層上面でⅢ層の落ち込みを確認した。当初、平成6年度A地区のH-449の未調査部分と考え調査を行った。しかし、平面的にズレがあり、柱穴状の小ピットが平成6年度調査区にかけても円形に巡って検出されたことから別遺構とした。

掘り込み面はおそらくⅢ層中と思われる。また、遺物は覆土中から出土してない。

重複関係：H-449との重複関係が考えられるが、はっきりしない。

時期：上記のとおり、遺物の出土はなく、特定できない。

床面：Ⅳ層を浅く掘り込む。ほぼ平坦である。

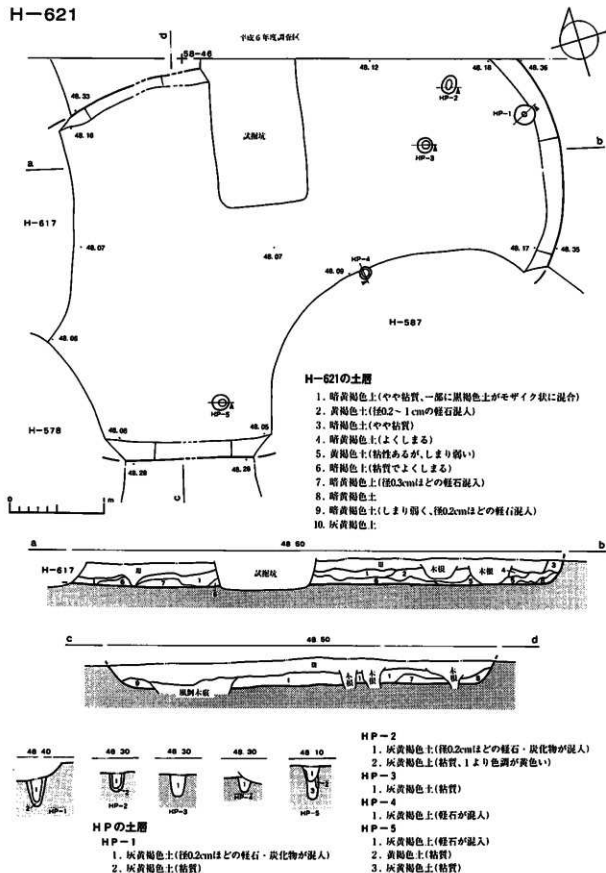
壁：全体に緩やかに立ち上がる。壁高は平均20cm内外である。

炉跡：なし。

付属ピット：中央に2個の主柱穴の二対（HP-1・4とHP-2・3）が想定される。壁沿いに17個の小柱穴がみられる。

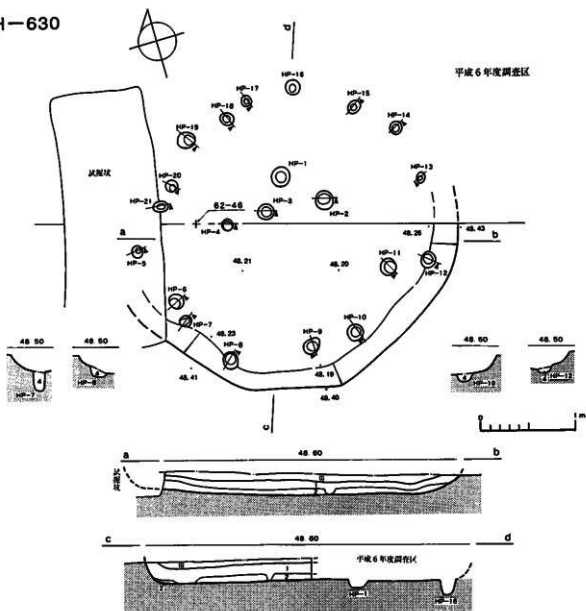
（福井）

H-621



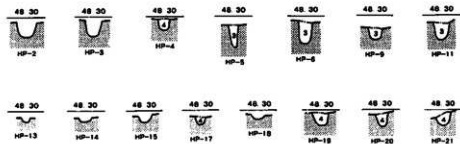
図Ⅲ-180 H-621実測図

H-630



H-630の土層

1. 暗茶褐色土(しまりなく、ローム粒が少量混入)
2. 暗黄褐色土(やや粘質、ローム粒が若干混入)
3. 暗茶褐色土(ややしまりなく、ローム粒が多量に混入)
4. 褐色土(やや粘質、ローム粒が多量に混入)



図Ⅲ-181 H-630実測図

3. 土坑

土坑は今回の調査で、79基が確認されている。記述にあたって堅穴住居跡と同様の区画を用いるため、遺構番号順とならないことを先にお断りしたい。土坑が存在する地区はG1・2・4～7区で、G3区のH-530・572・597に重複する土坑はなく、平成6年度A地区から南に続くG8区にも土坑は存在しない。なお、G2区では土坑のまとまりが3カ所みられたため、細区分している。

(1) G1区

G1区では18基の土坑が確認されている(図Ⅲ-182)。H-523・531(平成7年度調査)・580に重複する底径30cm前後の小型円形の土坑が多い(P-333・335～347)。これら土坑の検出面が堅穴床面であることから新旧関係を明らかに出来ない部分が多いが、堅穴よりも新しいものが存在する。また、上記3軒の堅穴の北側を囲むように、P-374・375・378・379がある。平成7年度調査のP-278・296を加えれば6基となる。そのうち、P-379は小型フラスコ状ピット、P-374は坑底中央に小ピット(新旧関係不明)を持つものである。P-378は規模的にみて堅穴と重複する土坑と同じで、一連のものとして捉えて良いものかもしれない。(田中)

P-333(図Ⅲ-183・185, 図版118)

位置: 47-34 規模: 0.50/0.36×0.46/0.26×0.18m 平面形: 楕円形

長軸方向: N-69°-E

検出面: H-580の床面で茶灰色土の落ち込みを検出した。

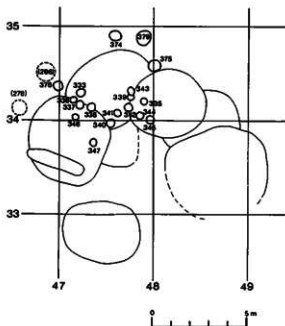
重複関係: H-580と重複しており、これより新しいものである。

覆土: ほほ一層で、茶灰色土である。

坑底・壁: V層を浅く掘り込んで構築している。中央部がくぼみ、堅い。壁の立ち上がりは急傾斜である。

遺物出土状況: 検出面で、I群D1類土器2点、Uフレイク、剥片など5点が水平の状態で出土した。

〔G1区〕



図Ⅲ-182 G1区土坑位置図

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

土器：1はI群D1類b種で、口縁部形態は副突起付波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。口唇部内面を連続波状文、外傾面を2条、その下位に4条の貝線文を施す。文様帯下限を2条の貝線文と鋸歯状沈線文で区画し、内部を鋸歯状の文様構成に腹縁文で充填する。文様帯下位に2段の背圧痕文を施す。(富永)

P-335 (図Ⅲ-183, 図版70)

位置：47-34 規模：0.36/0.26×0.35/0.27×0.08m 平面形：円形状

検出面：H-523の床面で暗黄茶色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-523との新旧関係は不明である。

覆土：汚れた暗黄茶色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明(縄文時代早期中葉?) (和泉田)

P-336 (図Ⅲ-183)

位置：47-34 規模：(0.35)/(0.25)×0.35/0.21×0.09m 平面形：円形

検出面：H-580の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-531・580と重複している。H-580より新しいが、平成7年度調査のH-531との新旧関係ははっきりしない。

覆土：混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明(縄文時代早期中葉?) (和泉田)

P-337 (図Ⅲ-183)

位置：47-34 規模：(0.42)/0.27×0.35/0.23×0.10m 平面形：長円形

長軸方向：N-53°-E

検出面：H-580の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-531・580と重複しており、これらとの新旧関係は不明である。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明(縄文時代早期中葉?) (和泉田)

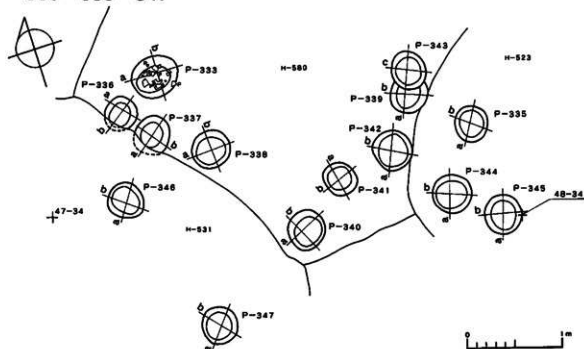
P-338 (図Ⅲ-183)

位置：47-34 規模：0.42/0.32×0.40/0.28×0.09m 平面形：円形

検出面：H-580の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580との新旧関係は不明である。

P-333・335~347



P-333



P-333の土層

1. 茶褐色土
2. 1 + V
3. 1 + V (Vはブロック状に混入)
4. V > 1

P-335



P-335の土層

1. 暗黄茶色土

P-336



P-336の土層

1. 暗茶褐色土
2. 1 > V

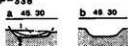
P-337



P-337の土層

1. 茶褐色土
2. 1 > V

P-338



P-338の土層

1. 暗茶褐色土
2. 1 > V

P-339



P-339の土層

1. 茶褐色土
2. V > 1

P-343



P-343の土層

1. 暗茶褐色土

P-340



P-340の土層

1. 暗茶褐色土
2. 1 > V

P-341



P-341の土層

1. 茶褐色土
2. V > 1

P-342



P-342の土層

1. 茶褐色土
2. 1 > V

P-344



P-344の土層

1. 茶褐色土
2. 1 > V

P-345



P-345の土層

1. 暗茶褐色土
2. 1 > V

P-346



P-346



P-346の土層

1. 暗茶褐色土
2. V > 1

P-347



P-347の土層

1. 暗茶褐色土
2. V > 1

図Ⅲ-183 P-333・335~347実測図

覆土：混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-339（図Ⅲ-183，図版70）

位置：47-34 規模：(0.44)/(0.32)×0.41/0.35×0.10m 平面形：楕円形

長軸方向：N-33°-E

検出面：H-580の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580、P-343と重複しており、P-343より古いものである。H-580との新旧関係は不明である。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-340（図Ⅲ-183・185，図版70・118・162）

位置：47-33・34 規模：0.41/0.27×0.41/0.30×0.13m 平面形：円形

検出面：H-580の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580との新旧関係は明瞭でない。

覆土：混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：検出面でI群D1類土器1点、石錘1点が出土している。

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）

土器：1はI群D1類b種の口縁部破片で口唇部が欠損する。器形は口縁部形態が波状口縁。文様を連続移動文で充填し、下位に背丘痕を施す。

（富水）

石器：2は閃緑岩製、2類の石錘。表裏両面の挟り部両端には自然面と変化する窪みがあり、剥離痕は挟り部作出のためとはみられないごく僅かなものである。

（田中）

P-341（図Ⅲ-183）

位置：47-34 規模：0.36/0.24×0.33/0.25×0.09m 平面形：円形

検出面：H-580の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580との新旧関係は明瞭でない。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-342（図Ⅲ-183）

位置：47-34 規模：0.42/0.32×0.40/0.32×0.11m 平面形：円形

検出面：H-580の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580との新旧関係は明瞭でない。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-343（図Ⅲ-183・185，図版70・118）

位置：47-34 規模：0.41/0.28×0.36/0.28×0.12m 平面形：楕円形

長軸方向：N-14°-W

検出面：H-580の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580、P-339と重複しており、P-339より新しいものである。H-580との新旧関係は不明である。

覆土：混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：検出面でI群D1類土器3点、礫2点が出土している

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）

土器：1はI群D1類a種、2はb種の口縁部破片で、器形は口縁部形態が波状口縁（1）と平縁（2）があり、口唇部断面形はともに切り出し状に外傾する。1は口唇部内面に背圧痕文、外傾面に連続腹縁文、口縁部の外面に菱形の文様構成に腹縁文が施される。2は口唇部内面に押し波状文、外傾面・外面に連続腹縁文、下位に2条の貝線文を施し、文様帯下限を2条の貝線文と鋸歯状沈線文で区画する。区画内部を菱形の文様構成に腹縁文で充填する。

（富永）

P-344（図Ⅲ-183，図版70）

位置：47-34 規模：0.40/0.28×0.40/0.32×0.11m 平面形：円形

検出面：H-523の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-523との新旧関係は不明である。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土中でI群D1類土器が4点出土している。

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）

P-345 (図Ⅲ-183)

位置: 47-33・34, 48-33・34 規模: $0.41/0.28 \times 0.39/0.29 \times 0.10\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-523の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: H-523との新旧関係は不明である。

覆土: 混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期: 不明(縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

P-346 (図Ⅲ-183, 図版118)

位置: 47-34 規模: $0.40/0.30 \times 0.37/0.24 \times 0.08\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-32°-W

検出面: H-531の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: H-531との新旧関係は不明である。

覆土: 混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期: 不明(縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

P-347 (図Ⅲ-183)

位置: 47-33 規模: $0.40/0.28 \times 0.37/0.27 \times 0.09\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-531の床面で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: H-531との新旧関係は不明である。

覆土: 混合土状の暗茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期: 不明(縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

P-374 (図Ⅲ-184・185, 図版70・162)

位置: 47-34 規模: $0.62/0.48 \times 0.57/0.42 \times 0.28\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-26°-W

検出面: V層直上で茶褐色土の落ち込みを検出した。

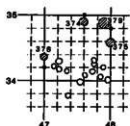
覆土: はほぼ一層で、茶褐色土である。小ピットの覆土は黄色土が混入する茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。平坦で、堅い。坑底中央部に $0.18 \times 0.16\text{m}$ 、深さ 0.16m の小ピットが検出された。断面観察ではP-374より古いか同時期のもので、本遺構に伴う小ピットかどうかは明瞭ではない。壁の立ち上がりは急傾斜である。

遺物出土状況: 小ピットの坑底付近で石鏝が1点出土している。

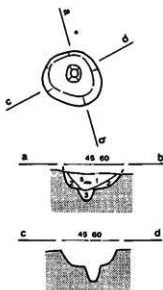
性格: 不明

P-374

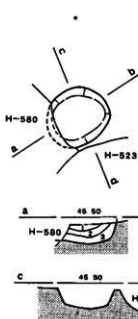


P-374の土層

1. 茶褐色土
2. $V > I$
3. $I > V$



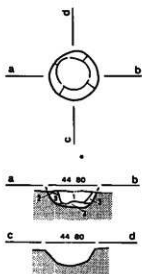
P-375



P-375の土層

1. 黒褐色土
2. $I > V$
3. 暗黄灰色土

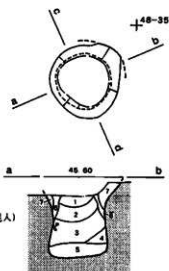
P-378



P-378の土層

1. 茶褐色土 $> V$
(小石・軽石が少量混入)
2. 明灰色砂
3. 暗黄灰色土
4. $I + V$

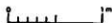
P-379



P-379の土層

1. $I > V$
2. 茶褐色土 $> V$
3. 茶褐色土 $> V$
4. 2にVがブロック状に混入
5. 黒褐色土

図Ⅲ-184 P-374・375・378・379実測図



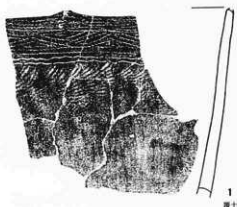
時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

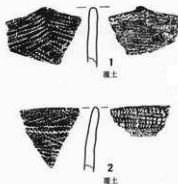
石器：1は閃緑岩製、2類の石錘。両端の挟り部は敲打による潰れが、顕著である。

(田中)

P-333



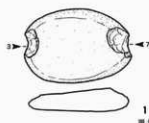
P-343



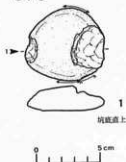
P-340



P-374



P-379



図Ⅲ-185 P-333・340・343・374・379出土遺物

P-375 (図Ⅲ-184)

位置：47-34, 48-34 規模：(0.70) / (0.57) × 0.60 / 0.44 × 0.22m 平面形：楕円形

長軸方向：N-75°-E

検出面：H-580の東壁面で覆土状の落ち込みを確認し、周辺精査の結果、Ⅳ層中で黒褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-580と重複しているが新旧関係は不明である。ただ他の類例から見て、P-375が新しいものと思われる。

覆土：覆土1層は黒褐色土（土層図1・2）で、下部（土層図2）には黄色ロームが多く混入している。覆土2層は暗黄灰色土である。

坑底・壁：Ⅴ層を掘り込んで構築している。中央部がくぼみ、堅い。壁は急傾斜の立ち上がりである。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格：不明

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-378 (図Ⅲ-184, 図版70)

位置: 46-34, 47-34 規模: 0.52/0.32×0.51/0.36×0.17m 平面形: 円形

検出面: V層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: はば一層で、砂質の茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁は急傾斜の立ち上がりである。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期: 不明 (縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

P-379 (図Ⅲ-184・185, 図版70・162)

位置: 47-34 規模: 0.82/0.60×0.76/0.59×0.65m 平面形: 円形

検出面: IV層直上で暗褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は暗褐色土 (Ⅲ>V) でやや黒味がある。覆土2層は茶褐色系の土 (土層図2~4) で、厚く堆積している。V層、軽石などが混入し、ガラガラした混合土である。覆土3層は坑底上に堆積する軟質の黒褐色土である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上付近から内傾して立ち上がり、中程から外傾し、大きく開口する。

遺物出土状況: 覆土中でI群D1類土器2点、石錘1点が出土している。

性格: 小型のフラスコ状ビットである。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

石器: 1は閃緑岩製、2類の石錘。上下縁にすり面、敲打痕が見られる。

(田中)

(2) G2区

G2区では23基の土坑が確認され、3カ所のまとまりがみられる。平成7年度D地区に接する部分、南側のH-603と重複する部分、若干離れて南西側のP-332・352である。順にG2-1区、G2-2区、G2-3区とした (図Ⅲ-186)。

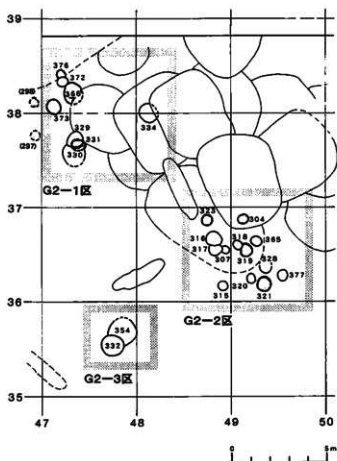
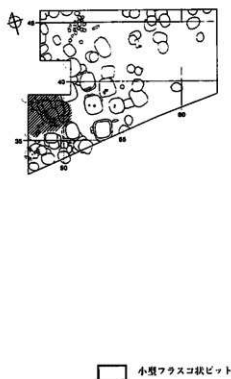
G2-1区には8基の土坑があり、P-331・366・373・376が小型のフラスコ状ビットである。平成7年度調査のP-297・298を加えると、6基のフラスコ状ビットが集中することになり、覆土中から多くの遺物を出土するものが多い。他の土坑P-329・330・372はいずれも、フラスコ状ビットを壊して作られ、あまり遺物は出土していない。なお、これから東方向に4m程離れ、H-536・606と重複するP-334もこの区に含めた。

G2-2区は後世行われた攪乱がV層にまで及ぶ部分で、土坑の上部構造や堅穴との関係がわからないものが多い。土坑は13基あり、うちP-304・319・321・323・365の5基が小型のフラスコ状ビットである。他に、フラスコ状ビットを切る土坑にP-318が、また土坑同士で切り合うP-307・317・318がみられる。フラスコ状ビットのP-321以外、あまり遺物は出土していない。

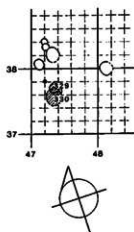
G2-3区は切り合い関係のあるP-332・352の2基である。ともに浅いビットで、検出面で多くの礫石器が出土していることが特徴的である。

(田中)

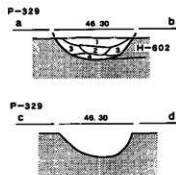
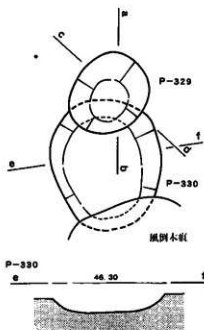
〔G2区〕



〔G2-1区〕



P-329・330



P-329の土層

1. Ⅱ>Ⅴ
2. Ⅱ>Ⅴ
3. Ⅱ2 (2より色調が濃い)
4. 黄褐色土

図Ⅲ-186 G2区土坑位置図とP-329・330実測図

[G2-1区]

P-329 (図III-186, 図版71)

位置: 47-37 規模: $0.91/0.45 \times 0.77/0.40 \times 0.25\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-65°-E

検出面: III層中でIII>Vの落ち込みを検出した。

重複関係: H-602、P-330・331と重複している。P-330・331より新しい。H-602との新旧関係は不明である。

覆土: 覆土1層はIII>V (土層図1)、覆土2層はIII>V (土層図2・3)である。坑底直上には黄褐色土が薄く見られた。

坑底・壁: V層を浅く掘り込んで構築している。わずかに中央部がくぼみ、皿状である。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 不明

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。
(和泉田)

P-330 (図III-186, 図版71)

位置: 47-37 規模: $(1.40)/(1.06) \times 1.18/0.84 \times 0.17\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-S

検出面: III層中で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: P-329・331と重複しており、P-329より古く、P-331より新しい。

覆土: ほぼ一層で、暗茶褐色土であるが下部は淡茶褐色土、坑底上には黄色ロームが多く混じった茶褐色土が薄く見られた。

坑底・壁: V層を浅く掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土中で砥石2点、石核1点、礫2点が出土している。

性格: 不明

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。
(和泉田)

P-331 (図III-187, 図版71・101・118・163)

位置: 47-37 規模: $0.63/0.51 \times 0.55/0.82 \times 0.60\text{m}$ 平面形: 隅丸長方形

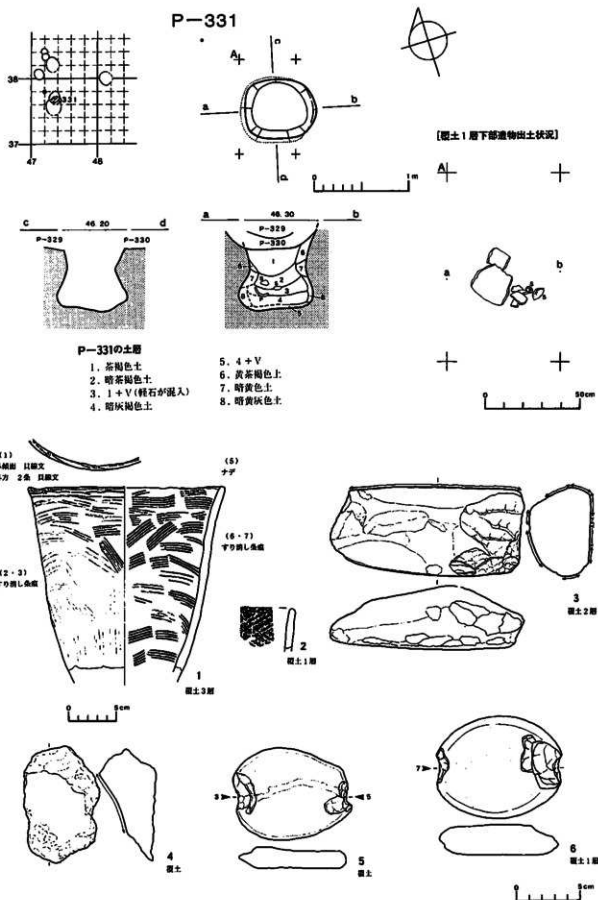
長軸方向: N-75°-W

検出面: P-329・330の坑底面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

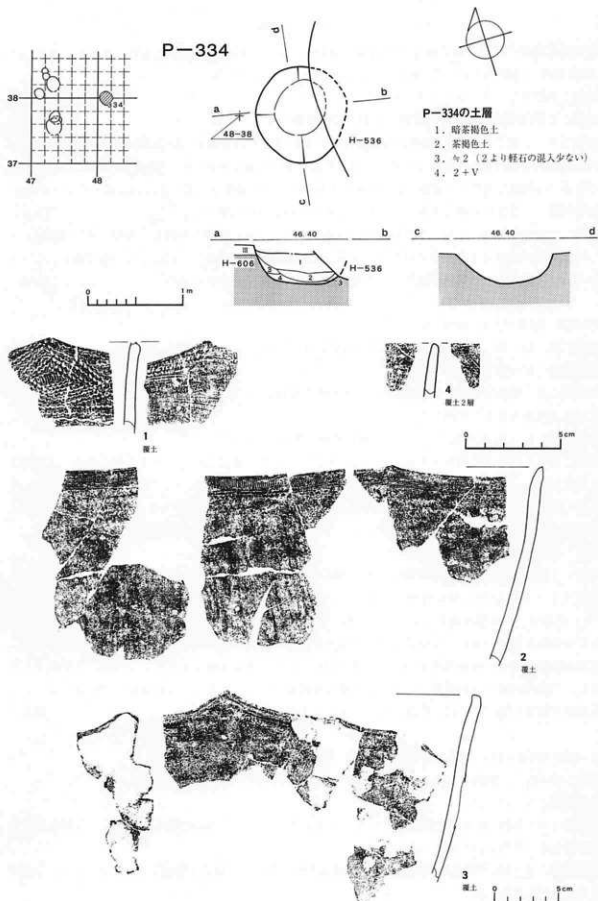
重複関係: P-329・330と重複しており、これらより古い。

覆土: 覆土1層は茶褐色系の混合土である (土層図1~3)。土層図1の下部には炭化物が多量に混入していた。また土層図3では土器がまとまって出土している。軽石を混入する。覆土2層は坑底上にある土で、粘質の暗灰褐色土 (土層図4・5) である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上付近から内湾気味に立ち上がり、中程から外傾しつつ大きく開口する。



図Ⅲ-187 P-331実測図と出土遺物



図Ⅲ-188 P-334実測図と出土土器

遺物出土状況：覆土1層下部でI群D1類土器がまとまって出土している。遺物は覆土中でI群D1類土器446点、石器ではすり石、砥石、石錘など14点が出土している。

性格：小型のフラスコ状ビットである。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものである。

(和泉田)

土器：1・2はI群D1類a種の口縁部破片で、器形はともに平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。1は口唇部外傾面に貝線文、外方には2条の貝線文が施され、胴部はすり消し条痕で調整される。口縁部内面はナデ調整、胴部内面はすり消し条痕で調整される。2は口唇部上面はナデ調整、口唇に沿って2条の貝線文を施し、下位を羽状の文様構成に充填する。

(富永)

石器：3は閃緑岩製、1類のすり石。ほぼ全面にすり痕・敲打痕がみられる。ただ、図下の稜部にみられる割傷は敲打によるものかは不明である。4は凝灰岩製の砥石で、砥面は滑らかである。5・6はともに閃緑岩製、2類の石錘で、挟り部には敲打による潰れがみられる。

(田中)

P-334 (図Ⅲ-188, 図版118)

位置：48-37・38 規模：1.02/0.57×(0.91)/0.55×0.31m 平面形：楕円形

長軸方向：N-17°-E

検出面：H-536の西壁面で暗茶褐色土の落ち込みを確認した。このため周辺を精査し、Ⅲ層中で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-536と重複しているが、新旧関係は明瞭でない。

覆土：混合土状の暗茶褐色土である。坑底直上には軽石を少量混入した土が薄く見られた。土層図3上面は堅い。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。皿状で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土中でI群D1類土器46点、スクレイパー、剥片など30点が出土している。

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

土器：1～3はI群D1類a種で、4はミニチュア土器。口縁部形態は波状口縁(1～3)と平縁(4)があり、口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。1は口唇部内面に押引文。外傾面と外方に1条の貝線文を施し、文様帯下限を2条の貝線文と鋸歯状沈線文で区画する。内部は菱形構成に文様を充填するが、波頂部直下の菱形空間の中央には爪の連続移動文を施す。2は篩目状腹縁文で施文し、口唇部内面に連続移動文、外面にも連続移動文を施し、下限を2条の貝線文で区画する。3は全面ナデ調整を施す。4は口唇部に沿って鋸歯状沈線が施される。

(富永)

P-366 (図Ⅲ-189, 図版71・118)

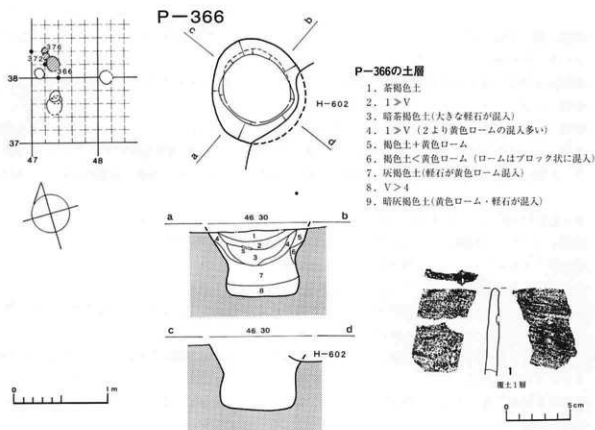
位置：47-38 規模：(1.12)/0.80×(1.00)/0.70×0.70m 平面形：長円形

長軸方向：N-15°-E

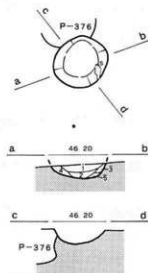
検出面：H-602の北西壁で茶褐色土の落ち込みを確認した。このため周辺を精査し、Ⅳ層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：H-602と重複しており、新旧関係は不明であるが、他との類例などからみて、P-366が新しいものと思われる。

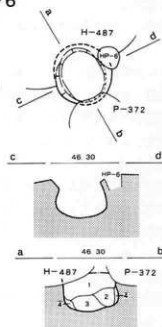
覆土：覆土1層は茶褐色系の土(土層図1～4)で、覆土2層は灰褐色系の土(土層図7・9)である。ともに混合土で、全体に堅い。



P-372



P-376



図III-189 P-366・372・376実測図と出土遺物

坑底・壁：V層を深く掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁は坑底付近から垂直的に立ち上がり、中程から外反し、開口する。

遺物出土状況：覆土中でI群D1類土器79点、Rフレイク、剥片、石錘など10点が出土している。

性格：小型のフラスコ状ビットである。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

土器：1はI群D1類a種の口縁部破片。口縁部形態は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。内面に煤が大量に付着する。内面は条痕調整、外面は粗いすり消し条痕で調整される。(冨水)

P-372 (図Ⅲ-189, 図版71・163)

位置：47-38 規模：0.56/0.38×0.52/0.33×0.13m 平面形：円形

検出面：IV層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：P-376と重複しており、これより新しいものと思われる。

覆土：ほぼ一層で、暗茶褐色土である。ただ下層の坑底直上付近(土層図2)は黄色ロームがやや多く混入している。全体に砂質土で、軽石を少量混入している。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。中央部がややくぼみ、皿状である。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土上部でI群D1類土器5点、砥石1点が出土している。

性格：不明

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

石器：1は凝灰岩製、転写素材の砥石。石質は細粒で肌理が細かく、砥面は平滑である。(田中)

P-373 (図Ⅲ-190, 図版72・163)

位置：47-38 規模：0.79/0.75×0.71/0.78×0.52m 平面形：円形

検出面：IV層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土：ほぼ一層で、混合土状の茶褐色土である。ただ、下部(土層図3)はやや黒味が強く、炭化物が少量混入している

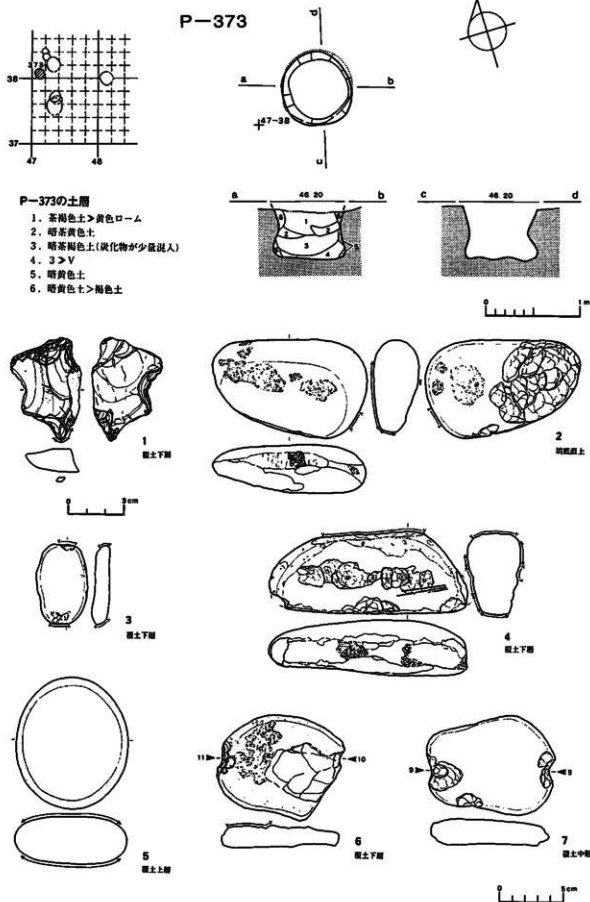
坑底・壁：V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底から内傾して立ち上がり、中程で少し外反し、開口する。

遺物出土状況：覆土中でI群D1類土器が11点、石錘、石鏃など11点、坑底直上ですり石1点が出土している。

性格：小型のフラスコ状ビットである。

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

石器：1は硬質頁岩製の石鏃で、先端部の磨滅は著しい。上端も調整され、使用の痕跡ははっきりしないが両頭のものかもしれない。3は閃緑岩製のたたき石。円形の長軸両端に、平坦な敲打による潰れがみられる。2・4は1類のすり石。2は閃緑岩製で、後部すり面にはっきりとした直線状の敲打痕がある(図版201-2)。4は頁岩製で、平坦面には一列に連続して並ぶ円形の敲打痕があり、裏面も同様である。5は閃緑岩製、2類のすり石。6・7は2類の石鏃。ともに挟り部に敲打痕を持つものの。6は流紋岩製、7は閃緑岩製である。(田中)



図Ⅲ-190 P-373実測図と出土石器

P-376 (図Ⅲ-189, 図版72)

位置: 47-38 規模: $(0.65) / 0.54 \times (0.62) / 0.45 \times 0.40\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-487 (平成7年度調査、報告済。)の床面で覆土状の土の落ち込みが確認され、また周辺を精査したところ、V層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: P-372、H-487と重複しており、P-372より古く、H-487より新しい。

覆土: ほぼ一層で、混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。中央部がややくぼみ、堅い。壁は坑底直上付近から内傾しつつ立ち上がり、中程で外傾し、開口する。

遺物出土状況: 覆土中でRフレイク1点が出土しているだけである。

性格: 小型のフラスコ状ビットである。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。
(和泉田)

[G2-2区]

P-304 (図Ⅲ-191, 図版72)

位置: 49-36 規模: $0.58 / 0.50 \times 0.56 / 0.48 \times 0.33\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-534の床面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: H-534と重複し、これより新しい。

覆土: 覆土1層はやや砂質の茶褐色土(土層図1・2)で、覆土2層はやや粘質の黒褐色土(土層図3~5)である。坑底直上には軟質の暗黄色土が薄く見られる。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。やや凹凸はあるが平坦で、堅い。壁は坑底直上から内湾気味に垂直に立ち上がっている。

遺物出土状況: 覆土中からすり石1点が出土しているだけである。

性格: 小型のフラスコ状ビットと思われる。

時期: 周辺の包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉のものと思われる。
(和泉田)

P-307 (図Ⅲ-191, 図版73)

位置: 48-36 規模: $(0.52) / (0.42) \times 0.39 / 0.30 \times 0.17\text{m}$ 平面形: 長円形

長軸方向: N-45°-W

検出面: V層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: P-317と重複しており、これより古い。

覆土: 混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。北から南へ少し傾斜しており、ほぼ平坦で、堅い。壁の立ち上がりは急傾斜である。

遺物出土状況: 覆土中で剥片、すり石がそれぞれ1点ずつ出土している。

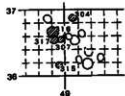
性格・時期: 不明(縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

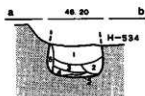
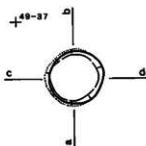
P-315 (図Ⅲ-191)

位置: 48-36 規模: $0.50 / 0.40 \times 0.43 / 0.29 \times 0.09\text{m}$ 平面形: 楕円形

[G2-2区]



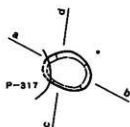
P-304



P-304の土層

1. 茶褐色土(やや砂質)
2. 茶褐色土>黄色ローム
3. 黒褐色土>黄色ローム(やや粘質)
4. 黒褐色土>黄色ローム(軟質)
5. 黄色ローム>黒褐色土
6. 暗黄色土(壁崩落土)

P-307

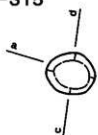


P-307の土層

1. 茶褐色土
2. V>I



P-315

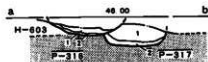
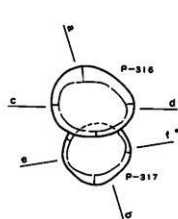


P-315の土層

1. 茶褐色土>黄色ローム
2. V>I
3. 茶褐色土(軟質)



P-316・317

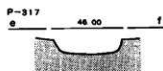


P-316の土層

1. 黒褐色土>黄色ローム
2. 黄色ローム>黒褐色土

P-317の土層

1. 茶褐色土
2. I>V



図III-191 P-304・307・315~317実測図とP-317出土土器

長軸方向：N-55°-W

検出面：V層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土：混合土状の茶褐色土で、下部には黄色ロームが多く混入している。

坑底・壁：V層中に構築しており、皿状である。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-316（図Ⅲ-191，図版73）

位置：48-36 規模：0.89/0.73×0.74/0.51×0.12m 平面形：楕円形

長軸方向：N-58°-W

検出面：V層中で黒褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：P-317と重複しており、これより新しい。

覆土：黄色ロームが少量混入した黒褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築しており、皿状である。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）

P-317（図Ⅲ-191，図版73・119）

位置：48-36 規模：0.71/0.60×0.69/0.56×0.22m 平面形：円形

検出面：V層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：P-307・316と重複しており、P-316より古く、P-307より新しい。

覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を深く掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物出土状況：覆土中でI群D1類土器1点、礫1点が出土している。

性格：覆土の堆積状態などからみて、小型のフラスコ状ビットと思われる。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）

土器：1はI群D1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は波状口縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。内面には横位の腹縁文、外傾面には貝線文が施され、腹縁文で文様が構成される。（富永）

P-318（図Ⅲ-192，図版73）

位置：49-36 規模：0.56/0.28×0.46/0.22×0.31m 平面形：長円形

長軸方向：N-44°-W

検出面：V層中で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係：P-319と重複しており、これより新しい。

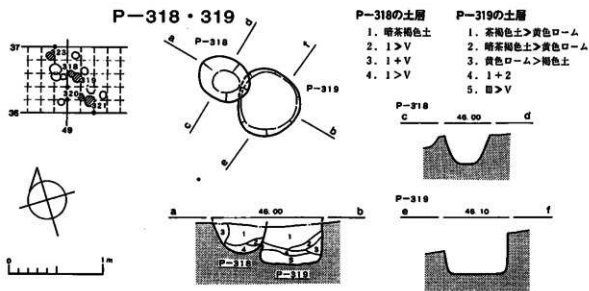
覆土：混合土状の暗茶褐色土である。ただ、坑底直上には黄色ロームが混入した汚れた土が薄く堆積していた。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。中央部がくぼみ、堅い。壁の立ち上がりは急傾斜である。

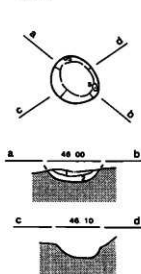
遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明（縄文時代早期中葉？）

（和泉田）



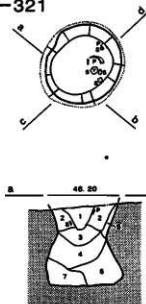
P-320



P-320の土層

1. 暗黄褐色土
2. $1 + V$

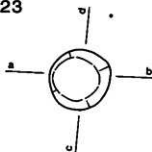
P-321



P-321の土層

1. 暗褐色土
2. 茶褐色土
3. ~ 2 (2より色調が濃い)
4. 暗茶褐色土
5. 黄色ローム > 褐色土
6. 暗黄褐色土
7. ~ 6 (6より黄色ローム・軽石が多く混入)

P-323



P-323の土層

1. 黒茶褐色土
2. $1 > V$
3. ~ 1 (1より軽石の混入が少ない)
4. $1 + V$
5. 暗茶褐色土
6. $1 + V$

図Ⅲ-192 P-318～321・323実測図

P-319 (図Ⅲ-192, 図版73)

位置: 49-36 規模: 0.69/0.60×0.68/0.60×0.40m 平面形: 円形

検出面: V層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: P-318と重複しており、これより古い。

覆土: 混合土状の茶褐色土である。ただ、坑底直上にはⅢ>Ⅴの土が約15cmほど堆積している。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上付近から垂直的に立ち上がっている。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 覆土、壁の状態などからみて、小型のフラスコ状ビットと思われる。

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-320 (図Ⅲ-192)

位置: 49-36 規模: 0.54/0.40×0.46/0.29×0.10m 平面形: 長円形

長軸方向: N-33°-W

検出面: V層中で暗黄茶色土の落ち込みを検出した。

覆土: 坑底直上にしか残存していない。汚れた暗黄茶色土である。

坑底・壁: V層中に構築されている。平坦で、堅い。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 覆土中からUフレイク1点、剥片1点が出土している。

性格・時期: 不明 (縄文時代早期中葉?)

(和泉田)

P-321 (図Ⅲ-192・193, 図版73・119・162)

位置: 49-36 規模: 0.85/0.96×0.75/0.86×0.86m 平面形: 円形

検出面: V層上面で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は茶褐色系の土 (土層図1~3) で、覆土2層は暗茶褐色土 (土層図4)、覆土3層は坑底上にある土で、汚れた黄茶褐色系の土 (土層図6・7) である。全体に砂質で、混合土である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上付近から内傾して立ち上がり、中程から外反し、開口する。

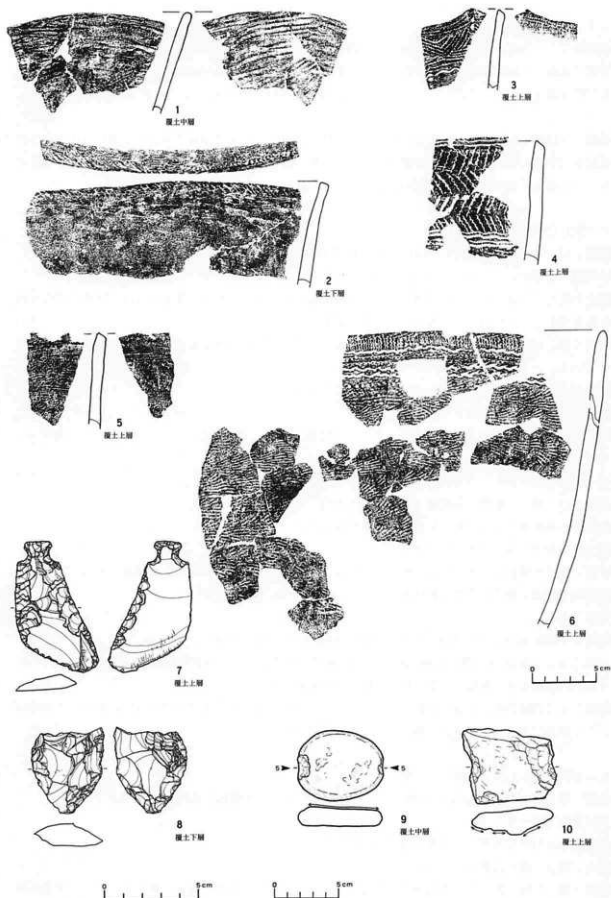
遺物出土状況: 覆土中部 (土層図2) で遺物が出土しており、また倒立した状態で土器がまとまって出土している。I群D1類土器が161点、I群D2類土器が4点出土しており、石器では石槍、石匙、たたき石、すり石、石錘などが51点出土している。

性格: 小型のフラスコ状ビットである。

時期: 縄文時代早期中葉の時期のものである。

(和泉田)

土器: 1・2はI群D1類a種の、3~6はD1類b種の口縁部破片である。D1類の口縁部形態は波状口縁(3)と平縁(1・2・4~6)があり、口唇部断面形はすべて切り出し状に外傾する。1は内面を条痕調整、外傾面を丁寧に条痕調整し、外面は粗いすり消し条痕で調整する。2は口唇部外傾面をナデ調整、口唇部内外面を櫛目状腹縁文の連続腹縁文を施す。3は口唇部内面を押し文、外傾面に2条と下位に1条の貝線文を施し、下限を3条の貝線文と鋸歯状沈線文で区画し、区画内部を鋸歯状の文様構成に腹縁文を充填する。4は器内面を条痕で調整し、外傾面を2条の鋸歯状沈線文、2段の羽状の文様構成に連続腹縁文を配し、下限を2条の鋸歯状沈線文で区画する。5は内面をすり消し条痕、外傾面はナデで調整し、口縁部外面は地文に背圧痕、条痕で文様帯の上下区画する。6は外傾面に連



図Ⅲ-193 P-321出土遺物

続腹縁文、口唇部内外面を連続移動文、文様帯は上位を1条の鋸歯状沈線文、下位を2条の鋸歯状沈線文で区画し、胴部は多段に背圧痕を施す。また、掲載していないが他遺構との接合例があり、覆土上部の土器片と、P-332 (G2-3区) 覆土上部出土のものとが接合している〔整理番号546〕。

(富永)

石器：7は硬質頁岩製、3類の石匙。つまみ部はT字形で、上端は鋭角に両面から調整される。8は硬質頁岩製のスクレイパー。厚い素材の両面から粗い調整が加えられ、断面形が凸レンズ状を呈するもの。9は凝灰岩製、10は頁岩製の石錘。ともに、砥石としても使用されている。

(田中)

P-323 (図Ⅲ-192)

位置：48-36 規模：0.65/0.46×0.62/0.46×0.36m 平面形：円形

検出面：V層中で黒茶色土の落ち込みを検出した。

覆土：覆土1層は汚れた軟質の黒茶色系の土(土層図1~4)である。覆土2層は坑底直上にみられる暗茶褐色土(土層図5)である。全体に砂質土である。

坑底・壁：V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底付近から垂直的に立ち上がっている。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格：小型のフラスコ状ビットである。

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-328 (図Ⅲ-194, 図版74・119・162)

位置：49-36 規模・平面形・長軸方向：不明

検出面：IV層直上付近でⅢ>Vの落ち込みを検出した。

覆土：Ⅲ層とV層がまじり合った土である。

坑底・壁：V層を浅く掘り込んで構築している。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：覆土上部でI群D1類土器25点、石錐1点、礫2点が出土している。

性格：不明

時期：I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

土器：1はI群D1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。内外面をナデ調整し、器上部に沈線で文様を描いている。

(富永)

石器：2は閃緑岩製、2類の石錘。挟り部両端に敲打痕がみられ、下縁にはすり面がある。すり面はごく小範囲であるが、一部に暗赤色の付着物が認められる。

(田中)

P-365 (図Ⅲ-194, 図版74・162)

位置：49-36 規模：0.48/0.38×0.41/0.26×0.25m 平面形：長円形

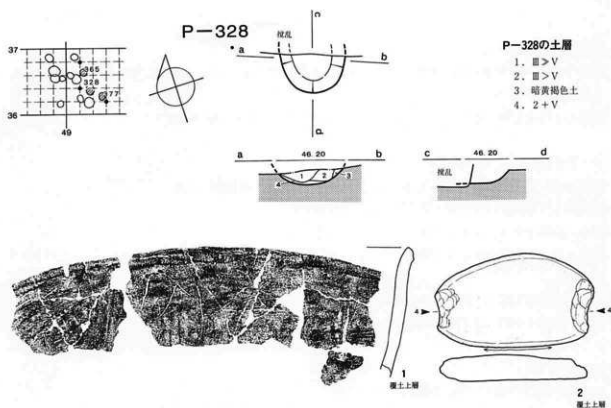
長軸方向：N-8°-W

検出面：V層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

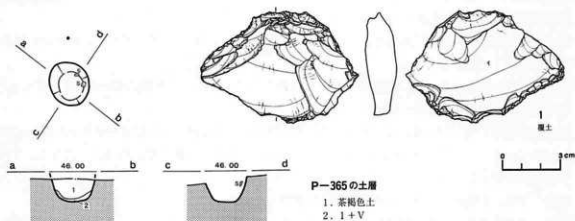
覆土：混合土状の茶褐色土である。

坑底・壁：V層を掘り込んで構築している。中央部がくぼみ、皿状である。壁の立ち上がりは垂直的である。

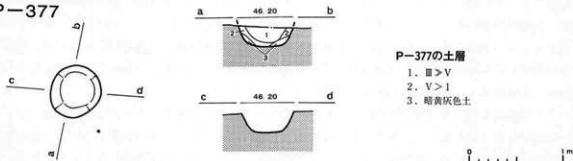
遺物出土状況：東壁際で流れ込み状に、スクレイパー、剥片がそれぞれ1点ずつ出土している。



P-365



P-377



図Ⅲ-194 P-328・365・377実測図と出土遺物

性格：不明

時期：周辺の包含層出土の遺物などからみて、Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

石器：Ⅰは硬質頁岩製のスクレイパー。となり合う縁辺に刃部を持つ2d類である。(田中)

P-377 (同Ⅲ-194, 図版74)

位置：49-36 規模：0.57/0.38×0.52/0.38×0.22m 平面形：円形

検出面：Ⅳ層直上付近でⅢ>Ⅴの落ち込みを検出した。

覆土：ほぼ一層で、Ⅲ層にⅤ層がまじり合った土である。

坑底・壁：Ⅴ層を掘り込んで構築している。中央部がわずかにくぼみ、堅い。壁の立ち上がりは急傾斜である。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格・時期：不明(縄文時代早期中葉?) (和泉田)

[G2-3区]

P-332 (同Ⅲ-195・196, 図版74・118・164)

位置：47-35 規模：1.18/1.00×1.10/0.85×0.26m 平面形：円形

検出面：Ⅲ層中で礫石器の集中が見られ、遺構が想定された。このため周辺を精査し、Ⅳ層直上付近で暗黄茶色土の落ち込みを検出した。

重複関係：P-354と重複しており、これより新しい。

覆土：中央部分にⅢ>Ⅴ、茶褐色土が逆三角形に落ち込んでおり、そのまわりに汚れた暗黄茶色系の土が坑底まで堆積している。

坑底・壁：Ⅴ層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。中央部に浅い小ピットが見られる。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況：検出面で礫石器の集中が見られ、覆土上部で横倒しの土器底部破片や石器などが水平の状態で出土している。遺物はⅠ群D1類・E類土器、石鏃、石槍、筥状石器、たたき石、すり石、石錘などが出土している。

性格：不明。土層断面でみると木の根痕の可能性もある。

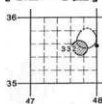
時期：縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。(和泉田)

土器：ⅠはⅠ群E類の胴部破片で、内外面を粗い条痕で調整する。(富永)

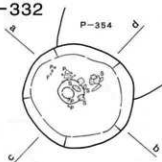
石器：2～6の剥片石器はすべて硬質頁岩製である。2は石鏃で、基部の一部に張り出しはみられるが、2a類の平基のものとした。素材剥片の剥離面を両面に残している。3・4は石槍。3は下半が欠損する。4の調整は粗く、断面形は三角形を呈する。5は筥状石器。左右非対称となるが、両面の調整は細かい。刃部とみられる下端は斜めで、規則的な調整はみられず、刃部再生途中のものかもしれない。6は内湾する刃部を持つ2c類のスクレイパーである。

7～15の礫石器は7が淡青色の片岩製以外、すべて閃緑岩製である。7～9はたたき石。7・8は一側縁の一部に敲打痕を持つもの。9は平坦面にも敲打痕があり、下半は欠損している。10はⅠ類のすり石。後部すり面の剥離は敲打によるものとはみられない。11・12は2類の典型的なすり石。13～15は円礫素材の2類の石錘で、両端の挟り部には敲打による潰れがみられる。(田中)

[G2-3区]

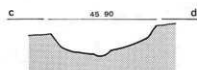
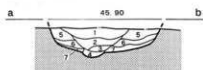


P-332



P-332の土層

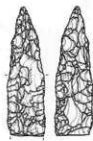
1. III > V
2. 茶褐色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗黄灰色土
5. 暗黄褐色土
6. 黄灰色土
7. 暗黄灰色土



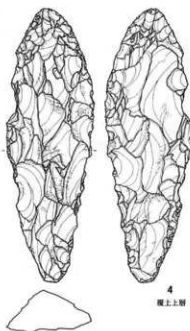
1
覆土上層



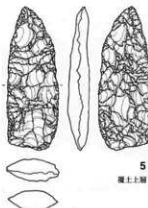
2
覆土中層



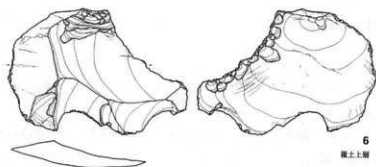
3
覆土上層



4
覆土上層



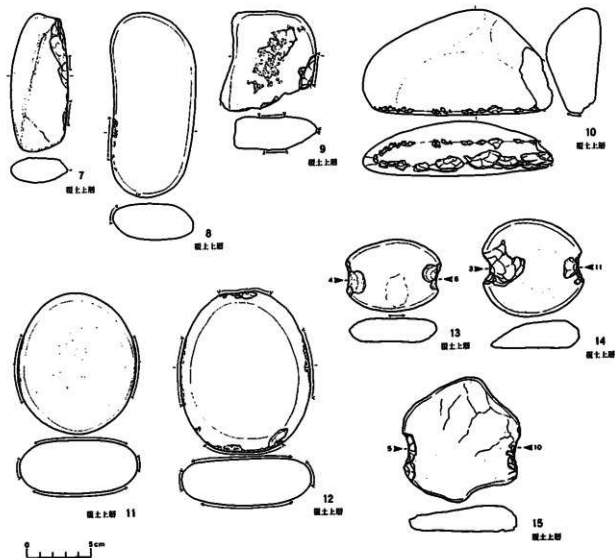
5
覆土上層



6
覆土上層



図Ⅲ-195 P-332実測図と出土土器・石器(1)



図Ⅲ-196 P-332出土石器(2)

P-354 (図Ⅲ-197・198, 図版74・165・166)

位置: 47-35 規模: (1.54)/(1.23)×1.42/1.06×0.17m 平面形: 楕円形

長軸方向: N-68°-E

検出面: Ⅲ層中で礫石器類の集中が検出され、遺構が想定された。このため周辺を精査し、Ⅲ層中で茶褐色土の落ち込みを検出した。

重複関係: P-332と重複しており、これより古い。

覆土: 覆土1層は茶褐色土で、厚く堆積している(土層図1・2・4・5)。覆土2層は坑底上に薄く見られる汚れた暗黄灰色土である(土層図3)。

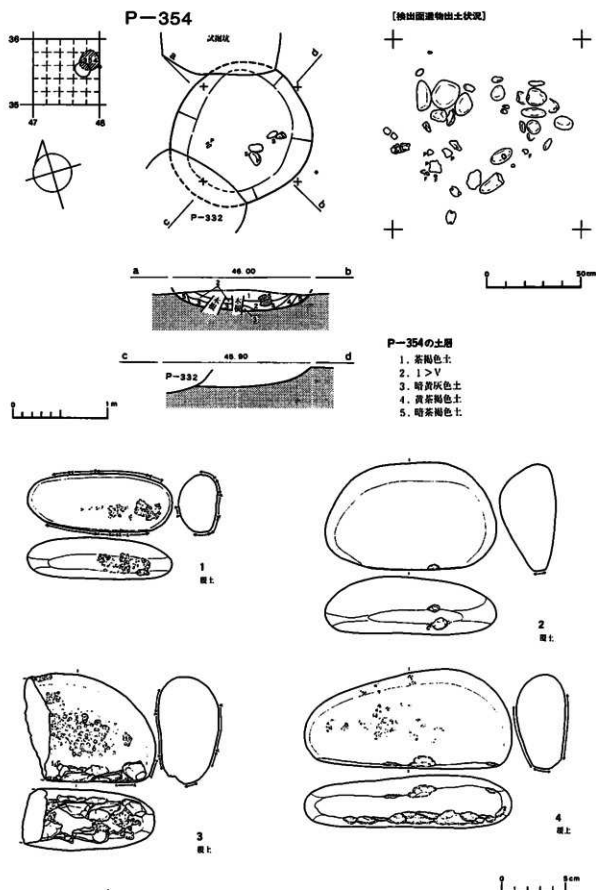
坑底・壁: V層を掘り込んで構築している。皿状である。壁の立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

遺物出土状況: 検出面で礫石器の集中が見られた。覆土上層でI群D1類土器5点、石器では剥片、すり石、砥石、石錘などが出土している。

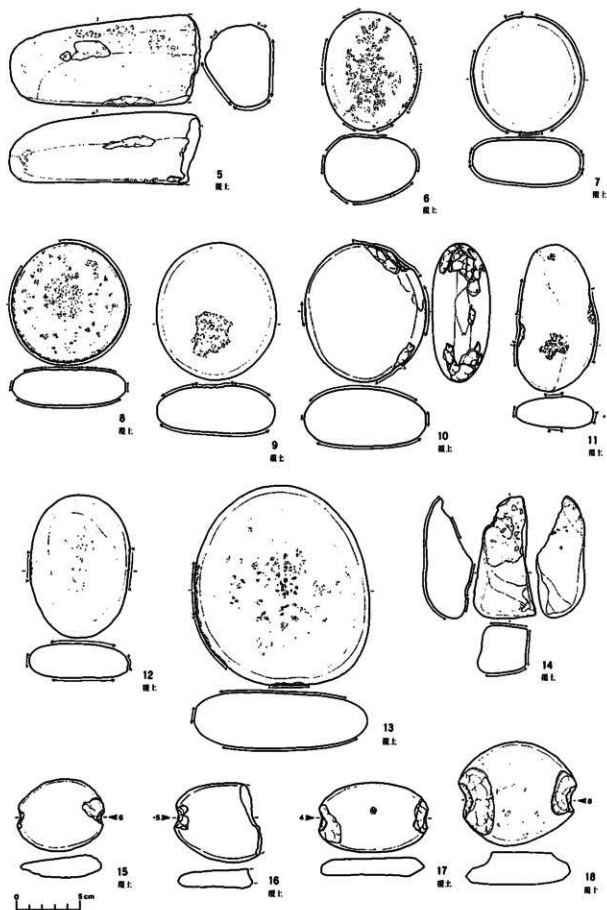
性格: 不明

時期: I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)



図Ⅲ-197 P-354実測図と出土石器(1)



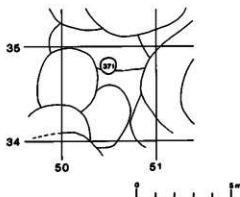
圖Ⅲ-198 P-354出土石器(2)

石器：土坑検出面でまとまって出土したものである。礫石器がほとんどで、14の砥石が凝灰岩製である以外、すべて閃緑岩製。石質に偏りがみられる。また、完形品ばかりではなく、すり石・石錘には破損品が含まれる。

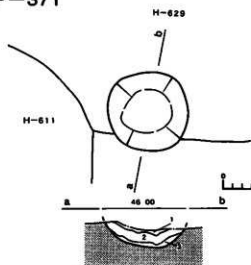
1～5は1類のすり石。後部すり面にみられる剥離痕には明らかに敲打によるものと、その起因がはっきりしないものがある。6～13は2類のすり石。すり面以外、敲打痕を持つものが多く、11の右側縁の敲打痕には、部分的に直線状のものが認められる。ただ、10に限れば、すり面の一部には被火熱により赤色化する部分があり、剥離も火熱によるものが含まれると考えられる。13は2類のすり石では大型のもので、今回の整理作業中、他にあまりみられなかった。14は2類の砥石。石質は細粒で、肌理が細かい。幅1cmほどの溝状砥面が3条みられる。15～18は円礫素材、2類の石錘。挟り部の片方には敲打による潰れがみられる。

(田中)

〔G4区〕



P-371



P-371の土層

1. 暗茶褐色土
2. 黒褐色土(軽石が若干混じる)
3. 黄褐色土(ローム+黒色土)

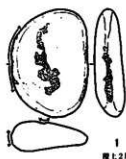


図1:2 槌



図上:2 槌 2



図上:1 槌 3



図Ⅲ-199 G4区土坑位置図とP-371実測図と出土石器

(3) G4区

G4区ではP-371の1基が、H-629床面で確認されたのみである(図Ⅲ-199)。ちょうどH-629の土層観察用の土手に掛かり、明らかに堅穴が土坑を壊している状況が捉えられた。

P-371 (図Ⅲ-199, 図版75・162)

位置: 50-34; H-629の南側床面から壁際にある。

規模: $(0.86)/0.49 \times (0.86)/0.48 \times 0.28\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-629調査中、土層観察用の土手に掛かりH-629床面及び壁面で、暗茶褐色土の落ち込みとして検出した。土手取り外し後に精査したところ、一部堅穴外側に広がる円形の輪郭が捉えられた。

重複関係: H-629より古い。

覆土: 覆土の主体は上部の暗茶褐色から黒褐色土であり、坑底近くに黒色土と黄色ロームが混合する黄褐色土がある。

坑底・壁: 坑底は皿状に、V層を掘り込んでつくられている。壁の立ち上がりは坑底からゆるやかな傾斜で、全体的形状も浅皿状である。

遺物出土状況: 遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。壁際からI群D1類土器の胴部破片が1点出土している。

性格: 堅穴に壊されているため、土坑の上部構造もわからず不明である。

時期: 縄文時代早期中葉、I群D1類土器の時期のものと思われるが、決定的確証はない。

石器: 1は閃緑岩製、2類のすり石。両側縁と平坦面に敲打痕がある。特に、右側縁の敲打痕には直線状のものが多く残っている。2は凝灰岩製の砥石。側面や裏面に部分的に砥面がみられる。3は閃緑岩製、2類の石錘。左側打り部には敲打による潰れがみられる。(田中)

(4) G5区

G5区ではP-380の1基が、H-560炉跡西脇に確認されている(図Ⅲ-200)。掘り込み面は定かではないが、G7区でもみられる堅穴覆土中に作られる土坑(P-305・306・308~313)と共通するものかもしれない。(田中)

P-380 (図Ⅲ-200, 図版75)

位置: 50-41 規模: $0.69/0.57 \times 0.64/0.58 \times 0.13\text{m}$ 平面形: 不整円形

長軸方向: N-74°-W

検出面: H-560の調査中、床面直上で検出した。

掘り込み面: H-560の覆土中と思われる。

重複関係: H-560と重複し、これより新しい。

覆土: 黒褐色の混合土。

坑底: V層を掘り込んでおり、ほぼ平坦。

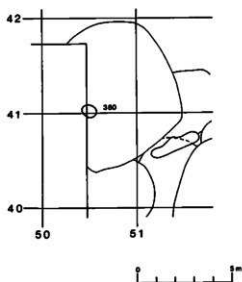
遺物出土状況: 遺物は出土していない。

性格: 不明。

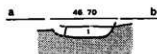
時期: H-560の床面直上に構築されていることから、I群D類土器を伴う時期に近いと思われる。

(柳瀬)

〔G5区〕



P-380

P-380の土層
1. 黒褐色土

図Ⅲ-200 G5区土坑位置図とP-380実測図

(5) G6区

この地区は平成6年度A地区から続く尾根先端部、標高47.00～47.70mのほぼ平坦面に、20基の土坑が確認された。ちょうど50-43区から始まる南北15m、東西10mの調査区に集中している（図Ⅲ-201）。この土坑群の北東側には、平成6年度の調査で確認された大型フラスコ状ピット群がある。

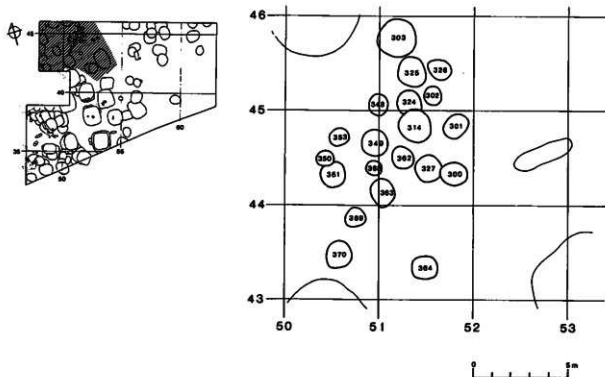
20基の土坑のうちP-350以外、19基がフラスコ状ピットである。土坑の中には壁が大きく崩れ、フラスコ状の形態を止めないものも多いが、壁崩落の黄色ロームが堆積する覆土の状況などからみてフラスコ状ピットとして良いものとする。P-303は平成6年度確認のものと同様、径2mほどの大型のものであるが、他は径1～1.5mの規模的にやや小ぶりのフラスコ状ピットである。土坑の深さにはバラツキがあるが、坑底がほぼ錢亀火砕流堆積物（VI層）中に達していることが共通する。

堅穴住居跡の項でも述べたとおり、この地区は遺物が希薄な地区であり、土坑に伴う遺物もほとんどない。また、フラスコ状ピット群西側の斜面や一部H-585覆土層に、遺構掘り揚げ土とみられる黄色ロームの散布が認められている（図Ⅱ-7）。この土坑群に關係するかは定かでないが、周辺の遺構配置状況からみれば、これらフラスコ状ピット群に關係する可能性が強い。（田中）

P-300（図Ⅲ-202、図版78）

位置：51-44 規模：(1.40)/0.76×1.18/0.78×1.18m 平面形：長円形
長軸方向：N-35°-W

〔G6区〕



図Ⅲ-201 G6区土坑位置図

検出面：Ⅳ層直上で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土：覆土上部は砂質の茶褐色系の土（土層図1～6）で、覆土下部は粘質の暗黄色系の土（土層図9～16）で、茶褐色系の土が間層に見られる。

坑底・壁：Ⅴ層を深く掘り込んで構築している。坑底は淡緑灰色砂層（Ⅵ層）中にあり、平坦。壁は坑底から内湾しつつ立ち上がり、中程から外反し、大きく開口している。

遺物出土状況：覆土下部でⅠ群D1類土器が1点出土している。

性格：中型のフラスコ状ビットである。

時期：Ⅰ群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）

P-301（図Ⅲ-202，図版78）

位置：51-44 規模：1.40/0.80×1.12/0.80×1.12m 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-55°-E

検出面：Ⅳ層直上付近で暗褐色土の落ち込みを検出した。

覆土：全体に砂質土で、上部は暗褐色系の土（土層図1～5・7～11）と黄色系の土（土層図6・13・18・19）が互層に、また下部は暗茶褐色系の土（土層図16・17・20）と黄色系の土が互層に堆積している。坑底上にはやや粘質の明褐色土が堆積している。

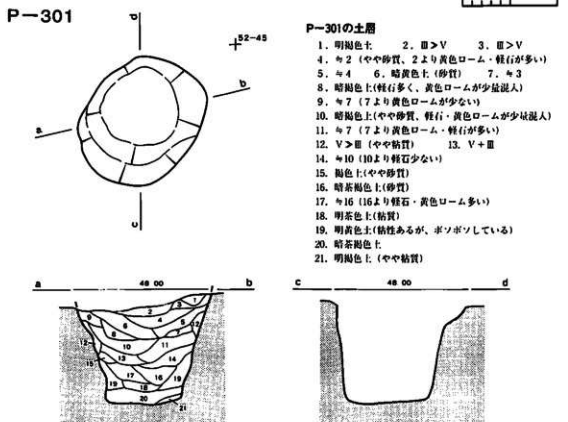
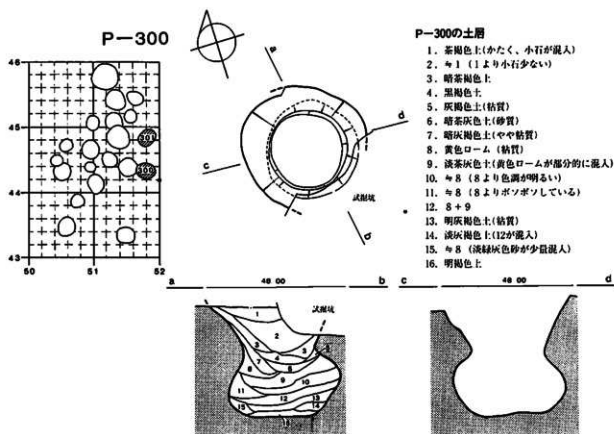
坑底・壁：Ⅴ層を深く掘り込んで構築している。平坦。壁はほぼ垂直的に立ち上がっている。

遺物出土状況：覆土中でUフレイク1点が出土している。

性格：覆土の堆積状態、壁の立ち上がりなどからみて、中型のフラスコ状ビットと思われる。

時期：縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

（和泉田）



図Ⅲ-202 P-300・301実測図

P-302 (図Ⅲ-203, 図版78)

位置: 51-45 規模: 1.03/0.70×0.89/0.68×0.44m 平面形: 隅丸長方形

長軸方向: N-S

検出面: Ⅳ層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は暗茶褐色土(土層図1)である。覆土2層は暗褐色土と黄色ロームがまじり合った土(土層図2・4)で坑底上まで堆積している。全体に粘質で、汚れた土である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、堅い。壁はやや急傾斜で立ち上がり、広く開口する。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 不明。ただ、覆土の状態、周辺検出の遺構などとの関連でみると、中型のフラスコ状ピットではないと思われる。

時期: 縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-303 (図Ⅲ-203, 図版77)

位置: 51-45 規模: 2.01/1.42×2.00/1.38×1.26m 平面形: 円形

検出面: Ⅳ層直上付近で小石を混入する砂質の暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は小石、軽石を多く混入する暗茶褐色系の土(土層図1~3)で、覆土2層は中央部分に見られる厚さ約20cmほどの暗黄色粘質土(土層図6)である。覆土3層は軽石を多量に混入する砂質の褐色系の土(土層図8・10)である。覆土4層は覆土2層と同質の土(土層図12・13)である。覆土5層は壁の崩落土で明灰黄色系の土(土層図14~17)で、覆土6層上に三角堆積する。覆土6層は坑底上にある土で、砂質で、大きな軽石を多量に混入している淡褐色土(土層図18)である。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。やや凹凸はあるが、堅い。壁は坑底からほぼ垂直的に立ち上がり、中程でややせばまっているが、上方は大きく開口している。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近で遺物は出土していない。

性格: 大型のフラスコ状ピットである。

時期: 他とのまとまりからみて、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-314 (図Ⅲ-204, 図版78)

位置: 51-45 規模: 1.72/1.08×1.66/1.13×1.10m 平面形: 円形

検出面: Ⅳ層直上付近で茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は小石、軽石、黄色ロームがまじり合った暗茶褐色系の土(土層図1~7)で、砂質土。覆土2層は壁の崩落土と思われるV層の土(土層図8~10・12・13)である。覆土3層は坑底上にある土で、軽石の混入する淡褐色土(土層図11・14~16)である。

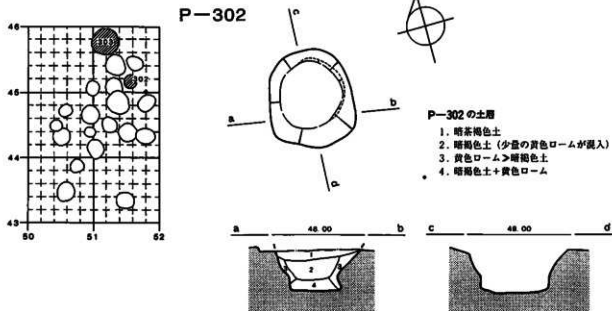
坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、砂質土である。壁は坑底から垂直に立ち上がり、中程から内湾しつつ外傾し、開口している。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

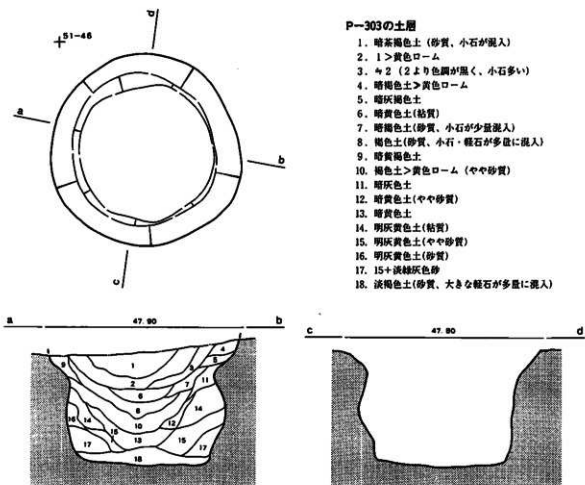
性格: 中型のフラスコ状ピットと思われる。

時期: 縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

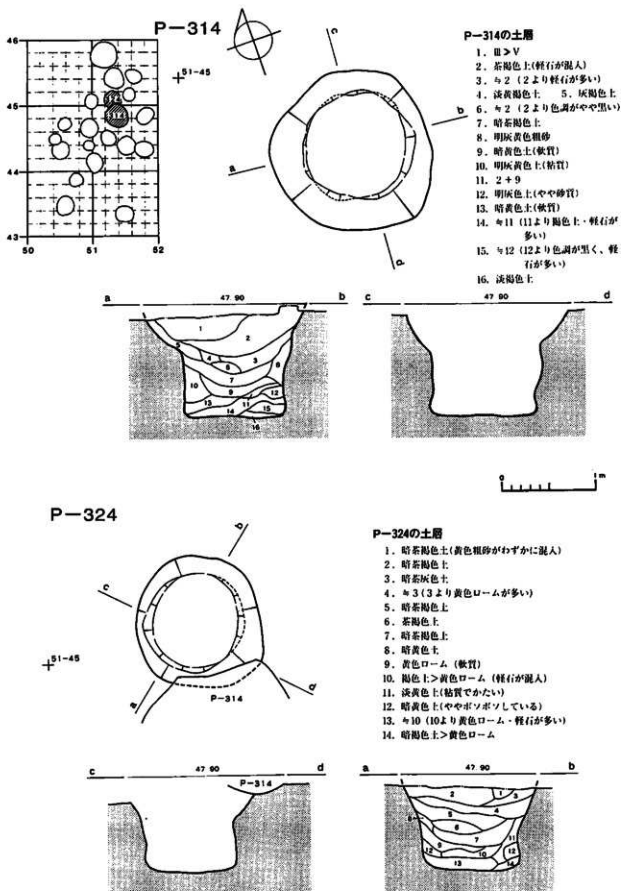
(和泉田)



P-303



図Ⅲ-203 P-302・303実測図



図Ⅲ-204 P-314・324実測図

P-324 (図Ⅲ-204)

位置: 51-44・45 規模: $1.40/1.00 \times 1.31/0.98 \times 0.91\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: IV層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: はば一層で、混合土状の暗茶褐色系の土である。ただ下部では軟質の黄色ロームが壁の崩落状に見られた。坑底直上には褐色土と黄色ロームがまじり合った土が約20cmほど堆積している。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上付近から垂直的に立ち上がり、中程で外反し、大きく開口する。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 中型のフラスコ状ピットである。

時期: 縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-325 (図Ⅲ-205, 図版78)

位置: 51-45 規模: $1.62/1.00 \times 1.52/0.97 \times 1.04\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-30°-W

検出面: IV層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: 覆土1層は混合土状の暗茶褐色系の上(土層図1~8)で、深く落ち込んでいる。全体に砂質土である。覆土2層は坑底上に堆積する土で、粘質でやわらかな黄色ロームである。壁際には明黄色土が落ち込んでいる。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底直上から垂直的に立ち上がり、中程から外傾し、大きく開口している。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 中型のフラスコ状ピットである。

時期: 縄文時代早期中葉のものと思われる。

(和泉田)

P-326 (図Ⅲ-205, 図版79)

位置: 51-45 規模: $1.30/0.75 \times 1.08/0.76 \times 0.70\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-39°-W

検出面: IV層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

覆土: はば一層で、軽石まじりの混合土状の茶褐色系の土である。ただ下部には黄色ロームがやや多く混入する汚れた暗黄褐色土(土層図5)が見られる。覆土の堆積状態はP-324と酷似している。

坑底・壁: V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁の立ち上がりは坑底から垂直に立ち上がり、中程から外傾し、大きく開口する。

遺物出土状況: 覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格: 中型のフラスコ状ピットである。

時期: 縄文時代早期中葉のものと思われる。

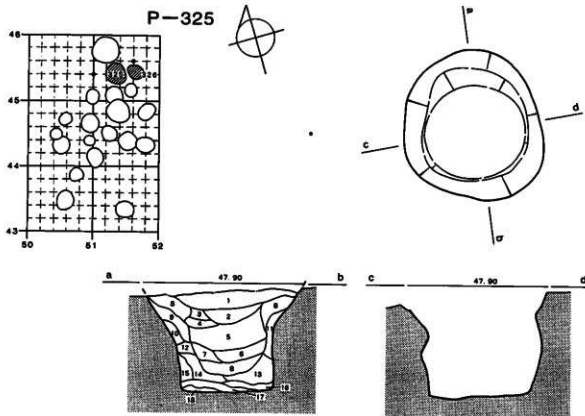
(和泉田)

P-327 (図Ⅲ-206, 図版79)

位置: 51-44 規模: $1.37/0.84 \times 1.34/0.81 \times 0.98\text{m}$ 平面形: 隅丸方形

検出面: IV層直上付近で暗茶褐色土の落ち込みを検出した。

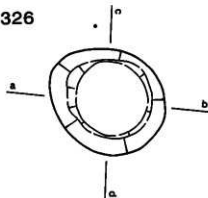
重複関係: P-300と重複しており、これより古い。



P-325の土層

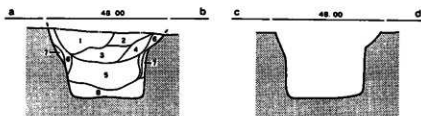
- | | | |
|------------------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 暗茶褐色土 | 7. ㇿ4 (4より軽石が少ない) | 13. 淡黄色土(粘性あるがやわらかい) |
| 2. 茶褐色土(砂質、軽石が多量に混入) | 8. 暗茶褐色土+黄色ローム(軽石が混入) | 14. ㇿ10 |
| 3. 暗茶褐色土(軽石・黄色ロームが少量混入) | 9. 暗黄色土(やや軟質) | 15. 淡緑灰色砂 |
| 4. 暗茶褐色土(軽石が多量に混入) | 10. 黄色ローム(砂質) | 16. 黒褐色土 |
| 5. 茶褐色土(2より黄色ロームが少なく、軽石は小さい) | 11. 明黄色土(粘質) | 17. 15>16 |
| 6. ㇿ5 (5より色調がやや黒い) | 12. 茶褐色土 | 18. ㇿ16 (16より色調が黒い) |

P-326

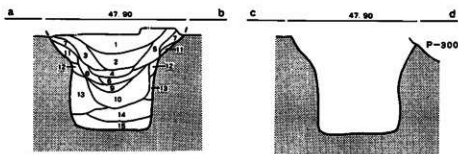
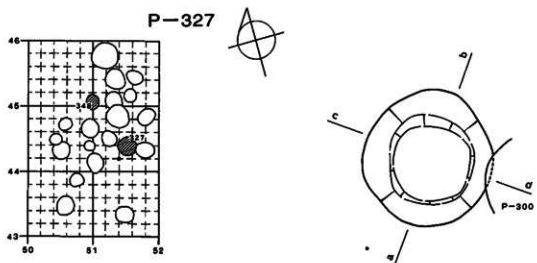


P-326の土層

1. 暗茶褐色土(軽石が混入)
2. 茶褐色土
3. ㇿ2 (2より軽石・黄色ロームが多い)
4. 黒褐色土>黄色ローム
5. 暗黄褐色土
6. 暗黄褐色土
7. 暗黄褐色土(粘質)
8. 暗茶褐色土(1より軽石が多い)



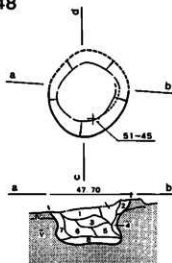
図Ⅲ-205 P-325・326実測図



P-327の土層

1. 暗茶褐色土
2. ㇿ1 (1に軽石・黄色ロームが多量に混入)
3. ㇿ1 (1に黄色ロームが混入)
4. 暗灰黄色土
5. ㇿ2 (2より軽石が少ない)
6. 灰褐色土
7. 暗黄褐色土
8. ㇿ5
9. 暗茶褐色土(黄色ロームが多量に混入)
10. ㇿ2 (2より黄色ロームが多い)
11. 暗黄色土
12. ㇿ11 (褐色土がわずかに混入)
13. 明茶灰色土(粘質で、ややボソボソしている)
14. 暗黄色土(粘質でかたい)
15. 暗茶褐色土(軽石が混入)

P-348



P-348の土層

1. 褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 暗茶褐色土(ローム粒が若干混入)
4. 茶色土
5. 暗茶褐色土
6. 褐色土
7. 茶色土
8. 暗茶褐色土(小さな軽石が混入)

図Ⅲ-206 P-327・348実測図

覆土：全体に黄色ローム、軽石が混入する混合土状の茶褐色土である。ただ、覆土中部付近には灰褐色系の土（土層図4・6）が、また下部には粘質で堅い暗黄色土（土層図14）が見られる。

坑底・壁：V層を深く掘り込んで構築している。平坦で、堅い。壁は坑底から垂直に立ち上がり、中程で外反し、大きく開口している。

遺物出土状況：覆土、坑底付近から遺物は出土していない。

性格：中型のフラスコ状ピットである。

時期：縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

(和泉田)

P-348 (図Ⅲ-206)

位置：50-45, 51-45 規模：1.18/0.60×1.04/0.63×0.40m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-77°-W

検出面：Ⅳ層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

覆土：上部には暗褐色の腐植土が混じり、坑底直上は軽石を含む暗茶色土である。

坑底：V層を掘り込んで構築されている。やや凸凹がある。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

性格：不明

時期：周辺の他遺構との関連から縄文時代早期中葉頃のものと思われる。

(笠原)

P-349 (図Ⅲ-207, 図版79・169)

位置：50-44, 51-44 規模：1.40/0.95×1.35/0.95×0.95m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-17°-E

検出面：Ⅳ層上面で暗茶褐色土の落ち込みを確認した。

覆土：全体に軽石とローム粒の混じるほぼ同質の土が堆積している。壁の崩落土も見られる。

坑底：V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で堅い。

遺物出土状況：覆土中部と坑底から、すり石が各1点出土している。

性格：不明

時期：周辺の他遺構との関連から、縄文時代早期中葉頃のものと思われる。

(笠原)

石器：1・2はともに閃緑岩製、2類のすり石。1の平坦面には部分的に、赤色顔料かと思われる付着物がみられた。

(田中)

P-350 (図Ⅲ-207)

位置：50-44 規模：0.92/0.56×0.88/0.46×0.35m 平面形：楕円形

長軸方向：N-66°-E

検出面：Ⅳ層上面で暗赤褐色土の落ち込みを確認した。

覆土：Ⅲ層とV層が混じる混合土で構成される。

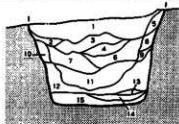
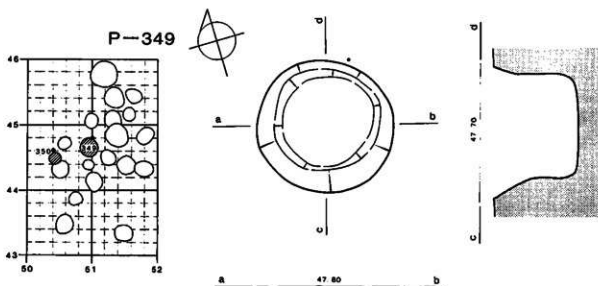
坑底：V層を掘り込んで構築されている。

遺物出土状況：覆土上部から、礫が1点出土している。

性格：不明

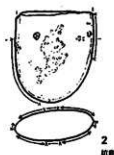
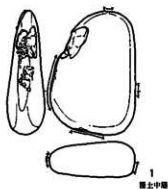
時期：周辺の他遺構との関連から縄文時代早期中葉頃のものと思われる。

(笠原)

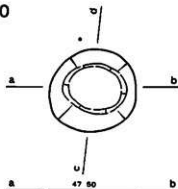


P-349の土層

1. 暗茶褐色土
 2. 茶色土
 3. 明茶色土(黄色ローム粒・軽石が混入)
 4. 褐色土(ローム粒・軽石が若干混入)
 5. 茶色土
 6. 明褐色土(ローム粒・軽石が混入)
 7. 同6 (6よりローム粒・軽石が少ない)
 8. 暗黄色土
 9. 暗茶色土
 10. 暗黄色土
 11. 茶褐色土(ローム粒・軽石が混入)
 12. 黄色ローム (やわらかい)
 13. 明茶色土
 14. 暗黄色土
 15. 褐色土(軽石が若干混入)
- ※覆土は全体にしまる。



P-350



P-350の土層

1. 暗赤褐色土(小さな軽石が混入)
2. 褐色土
3. 黒色土(ローム粒が若干混入)
4. 暗茶褐色土
5. 茶色土
6. 暗黄色土



図Ⅲ-207 P-349・350実測図と出土石器

P-351 (図Ⅲ-208)

位置: 50-44 規模: $1.32/1.04 \times 1.32/0.86 \times 0.84$ m 平面形: ほぼ円形

長軸方向: N-18°-E

検出面: IV層上面で暗茶色土の落ち込みを確認した。

覆土: 覆土1層は粘土質の腐植土で、Ⅲ層に軽石がわずかに混じる。覆土中部はもろく、ローム粒と軽石が多く含まれる。坑底直上は粘性の高いロームが主体で、軽石が多く含まれる。壁の崩落土も見られる。

坑底: V層を掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で固くしまる。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

性格: フラスコ状ピットである。性格を明らかにできる材料はない。

時期: 周辺の他遺構との関連から縄文時代早期中葉頃のものと思われる。 (笠原)

P-353 (図Ⅲ-208, 図版80・119)

位置: 50-44 規模: $1.00/0.80 \times 0.92/0.75 \times 0.66$ m 平面形: ほぼ円形

長軸方向: N-67°-W

検出面: V層上面でⅢ層の落ち込みを確認した。

覆土: Ⅲ層の落ち込みは浅く、しまりの弱い暗茶褐色土(Ⅲ>V)が混じる。覆土中部は軽石を多く含む、しまりの強い暗褐色土である。坑底直上は暗黄褐色土で軽石とローム粒を多く含む。

坑底: V層を掘り込んで構築されている。坑底の西側を精査中、明黄褐色の床面の一部に粘性のある灰白色を呈した箇所が認められた。覆土、床面の状況から土坑墓を想定し、採取した土壌資料を残存脂肪酸分析にかけることにした。分析の結果、高等動物に類する遺体を直接埋葬した土坑墓の可能性が示唆された。詳しくはV章-4を参照されたい。

遺物出土状況: 覆土上部から、I群D1類土器が3点出土している。

性格: 覆土、床面の痕跡から、土壌墓の可能性が推測される。形態はフラスコ状ピットである。

時期: 周辺の他遺構との関連から縄文時代早期中葉頃のものと思われる。 (笠原)

土器: 1はI群D1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。口唇部内面と外傾面を背圧痕、口縁部外面に羽状構成に連続腹縁文、文様中央部に1条と下限に2条の貝線文を施す。 (富永)

P-362 (図Ⅲ-209, 図版80)

位置: 51-44 規模: $1.28/0.96 \times 1.22/0.84 \times 0.88$ m 平面形: ほぼ円形

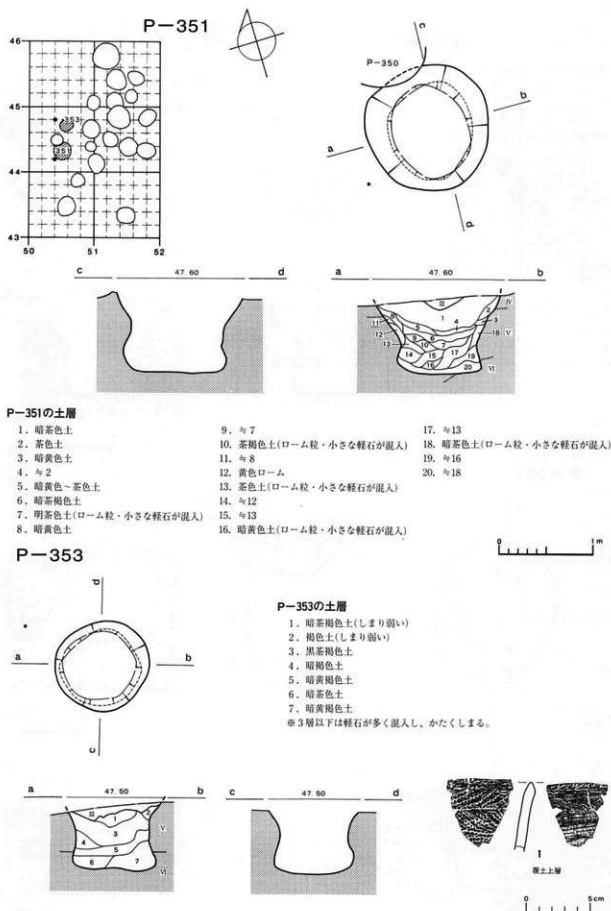
長軸方向: N-24°-W

検出面: Ⅲ層除去後、IV層上面で確認した。

覆土: 8層に分層した。比較的単純な堆積状況を示している。当時の生活面の腐植土(黒色土)が流れ込んだと考えられる第7層の暗褐色土が厚く堆積する。その上位にV層(黄色ローム)に作り出されたフラスコ状の括れ部分が崩落したとみられる第6層の暗黄色土(腐植土+黄色ローム)が堆積する。この土坑はある一時期、短期間に埋まったものと考えられる。

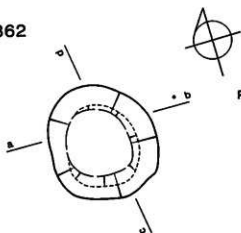
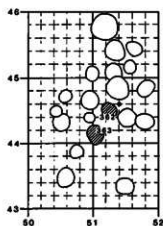
坑底: VI層の銭亀火砕流堆積物礫層上面に作られる。

壁: 傾斜面の低い側にあたる西側壁のフラスコ状括れ部は目立たない。括れ部の崩落土とみられる6層も西側の堆積は薄く、構築時にも括れ部は僅かであったと考えられる。



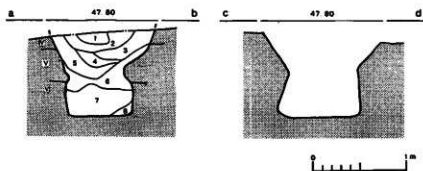
図III-208 P-351・353実測図と出土土器

P-362

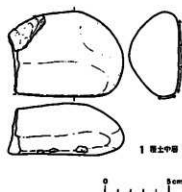
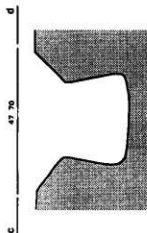
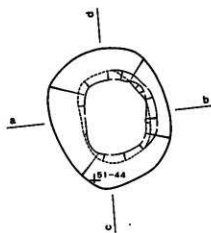


P-362の土層

1. 暗褐色土(粘質。■a層に相当?)
2. 黒褐色土(粘質。■b層に相当?)
3. 暗褐色土(粘質、径0.3~1.0cmの軽石が少量混入)
4. 暗灰褐色土(粘質。Ⅳ>Ⅲ)
5. 暗黄褐色土(粘質、軽石が少量混入)
6. 暗褐色土(粘質。Ⅳ>Ⅴ)
7. 暗褐色土(粘質、軽石が多量に混入)
8. 暗黄褐色土(粘質。Ⅲ<Ⅴ)



P-363



P-363の土層

1. 暗褐色土(粘質でかく、軽石がわずかに混入)
2. 暗褐色土(粘質)
3. 灰黄褐色土(粘質)
4. 暗灰黄褐色土(粘質、軽石がわずかに混入)
5. 暗褐色土(粘質、軽石が多量に混入)
6. 黒灰黄褐色土(粘性があるが、やわらかい)
7. 黄褐色土(粘質)
8. 暗灰黄褐色土(粘質、ローム・軽石が少量混入)
9. 灰黄褐色土(粘質、ロームがブロック状に混入)
10. 灰 8 (ロームがブロック状に混入)
11. 黒灰黄褐色土(粘質、軽石がわずかに混入)
12. 黄褐色土(粘質)
13. 暗褐色土(粘質でかたい)

図Ⅲ-209 P-362・363実測図と出土石器

性格：中型のフラスコ状ビットである。脂肪酸分析を行った結果、高等動物の脂肪酸が得られた。

時期：縄文時代早期中葉。I群I1～I2類の時期に所属すると考えられる。(富永)

P-363 (図III-209, 図版80・169)

位置：50-43・44, 51-43・44 規模：1.52/0.80×1.26/0.66×1.02m

平面形：ほぼ円形 長軸方向：N-18°-W

検出面：III層除去後、IV層上面で確認した。

覆土：13層に分層した。当時の生活面の腐植土の崩落土と考えられる第13層は薄く堆積し、その上位に壁の崩落土と考えられる第12層から第6層までの覆土が順次、崩落順に堆積する。第5層から第3層までは窪みとして残っていた部分に自然営力により土が堆積したと考えられる。それより上位は木根による攪乱も観察された。

坑底：VI層の錢亀火砕流堆積物上面に作られる。

壁：傾斜側の西壁の括れ部が崩落していることが、第12層が厚く堆積することからわかる。

遺物出土状況：覆土中部よりI群B類土器とすり石が出土したが、覆土の堆積状況から流れ込みと考えられる。

性格：中型のフラスコ状ビットである。

時期：縄文時代早期中葉。I群I1～I2類の時期と考えられる。(富永)

石器：1は閃緑岩製、1類のすり石。裏面平坦面の敲打痕は浅い窪みとなるものである。(田中)

P-364 (図III-210, 図版119・169)

位置：51-43 規模：1.44/0.86×1.34/0.66×1.02m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-35°-W

検出面：III層除去後、IV層上面で確認した。

覆土：8層に分層した。第8層は当時の生活面の腐植土の崩落土と考えられる。第7層は腐植土と壁の崩落土が混在したもの。第6層はフラスコ状括れ部の崩落土。第5層から第1層は腐植土が混入するため、自然営力により堆積したものと考えられる。

坑底：VI層の錢亀火砕流堆積物上面に作られる。

壁：傾斜側の西壁の括れ部が崩落していることが、第6層が厚く堆積することからわかる。

遺物出土状況：覆土下部より土器片鏟、石匙が各1点、出土している。

性格：中型のフラスコ状ビットである。：

時期：縄文時代早期中葉。I群I1～I2類の時期と考えられる。

土器：1はI1類a種の土器片鏟。胴部破片で、挟りの一方は補修孔跡を利用し、他方は打ち欠いて挟りをいれたもの。(富永)

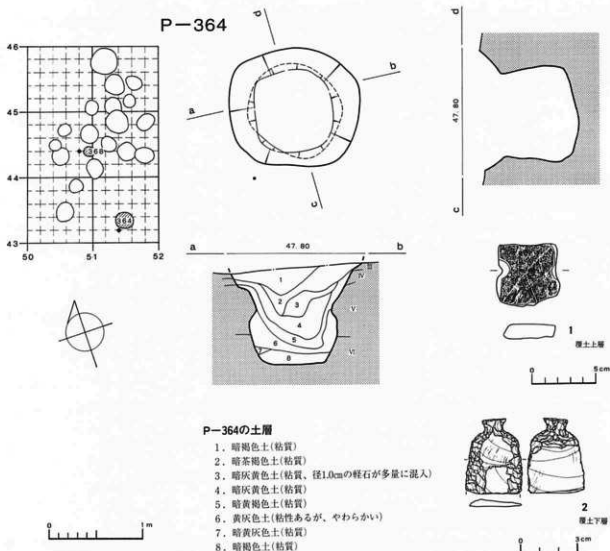
石器：2は硬質頁岩製の石匙片。周辺加工の3類とみられる。つまみ部は丁寧に調整され、T字形を呈している。上端も素材剥片の打点を残さず調整されるが、平坦となっている。(田中)

P-368 (図III-210, 図版80)

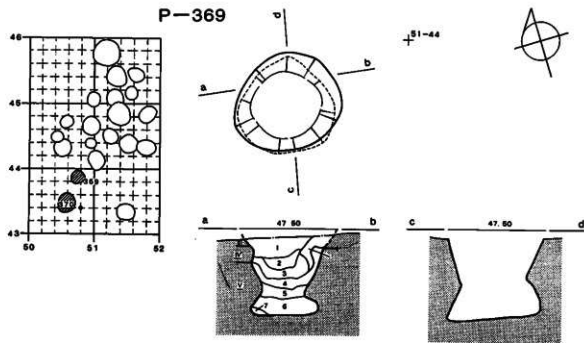
位置：50-44, 51-44 規模：0.90/0.76×0.90/0.70×0.44m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-12°-W

検出面：III層除去後、IV層上面で確認した。



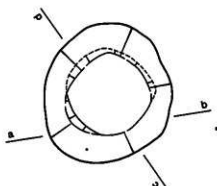
図Ⅲ-210 P-364・368実測図と出土遺物



P-369の土層

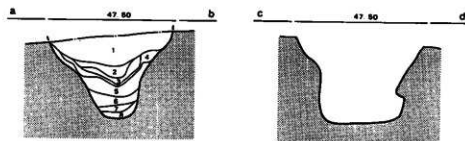
1. 暗褐色土(粘質)
2. 暗褐色土(径1.0~1.5cmの軽石が少量混入)
3. 暗灰褐色土(径1.0~1.5cmの軽石が少量混入)
4. 暗黄褐色土(軽石がわずかに混入)
5. 暗灰褐色土(軽石がわずかに混入)
6. 暗褐色土(径0.5~1.5cmの軽石が多量に混入)
7. 暗茶褐色土(粘質)

P-370



P-370の土層

1. 暗褐色土(粘質、径0.5cmの軽石が多量に混入)
2. ㄥ 1 (混入する軽石が小さい)
3. 暗褐色土(黄褐色土がブロック状に少量混入)
4. 黄褐色土(粘質、暗褐色土がブロック状に混入)
5. 黄褐色土(粘質)
6. 黄灰色土
7. 暗黄褐色土
8. 緑灰黄色土(砂質)



図Ⅲ-211 P-369・370実測図

覆土：7層に分層した。坑底には当時の生活面の腐植土（第7層）が薄く堆積し、第2層から第6層までは崩落土、その上に第1層の暗褐色土が厚く堆積する。崩落した壁土が少量な点、ひとつの覆土が厚く堆積する点から一気に埋め戻されたと考えられる。

坑底：Ⅵ層の錢亀火砕流堆積物上面に作られる。

性格：小型のフラスコ状ピットである。

時期：縄文時代早期中葉。I群D1～D2類の時期に所属すると考えられる。（富永）

P-369（図Ⅲ-211，図版80）

位置：50-43 規模：1.14/1.02×1.02/0.96×0.80m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-78°-W

検出面：Ⅲ層除去後、Ⅳ層上面で確認した。

覆土：7層に分層した。第1層から第6層までの覆土の堆積は比較的均一な厚みを持ち、自然営力により順次堆積したと考えられる。

坑底：Ⅵ層の錢亀火砕流堆積物の上面に作られる。

性格：中型のフラスコ状ピットである。

時期：縄文時代早期中葉。I群D1～D2類の時期に所属すると考えられる。（富永）

P-370（図Ⅲ-211）

位置：50-43 規模：1.46/0.88×1.36/0.98×0.88m 平面形：ほぼ円形

長軸方向：N-13°-W

検出面：Ⅲ層除去後、Ⅳ層上面で確認した。

覆土：8層に分層した。第2層から第8層までの覆土は、薄く順次積み重なり、自然営力により堆積したと考えられる。

坑底：Ⅵ層の錢亀火砕流堆積物の上面に作られる。

性格：中型のフラスコ状ピットである。

時期：縄文時代早期中葉。I群D1～D2類の時期と考えられる。（富永）

(6) G7区

G7区では16基の土坑が確認された（図Ⅲ-212）。単独につくられた土坑（P-352）のほか、堅穴覆土中につくられたもの（P-305・306・308～313）や堅穴に壊されたもの（P-355・357～361・367）があり、3種類に分かれる。それぞれに次のような点が、現場調査で確認された。

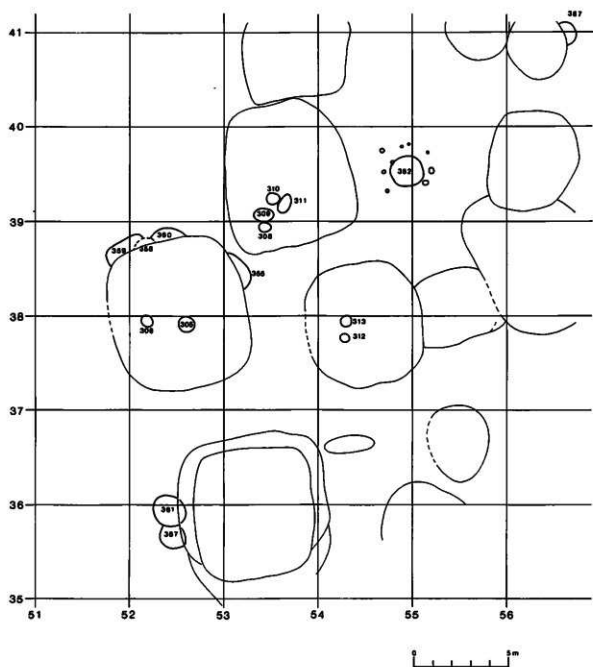
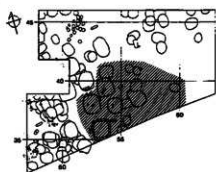
まず、単独にあり、多くの遺物が出土したP-352では、土坑周辺に柱穴状の小ピットが巡って確認されている。この小ピットの性格は不明であるが、遺構配置状況からみればこの土坑に伴いそうである。堅穴覆土中につくられた土坑の中ではP-305・306がH-565覆土上層のP.D.4上面で確認されている。最後に、堅穴に壊される土坑のうちH-588脇のP-361・367では、堅穴掘り揚げ土とみられるⅢd層が土坑全面を覆う状況が確かめられている。（田中）

P-305（図Ⅲ-213，図版75）

位置：52-38；H-565内のほぼ中央部に位置する。

規模：0.85/0.64×0.79/0.62×0.24m 平面形：楕円形 長軸方向：N-8°-W

〔G7区〕



図Ⅲ-212 G7区土坑位置図

検出面：H-565覆土上層のP.D.4上面で、黒色土の落ち込みを検出した。ちょうど土層観察用の土手に掛かり、土層断面でもP.D.4を掘り込んでいる状況が確認できた。

覆土：黒色土が主体で、坑底直上に暗茶褐色土が薄く堆積していた。

坑底・壁：H-565覆土中につくられ、ほぼ平坦である。壁は坑底から急激に立ち上がり、やや直立気味である。

性格・時期：遺物などの出土はなく、不明である。

(田中)

P-306 (図Ⅲ-213)

位置：52-37・38；H-565内の西側に位置する。

規模：0.62/0.46×0.49/0.39×0.18m 平面形：楕円形 長軸方向：N-14°-W

検出面：P-305同様、覆土上層のP.D.4上面で、褐色土の楕円形の輪郭を検出した。

覆土：上部が黒色土系の土壌（土層図1・2）で、坑底から壁にかけて軽石粒がはいる暗茶褐色土が堆積する。

坑底・壁：H-565覆土中につくられ、ほぼ平坦である。壁は坑底から急激に立ち上がり、やや直立気味である。

性格・時期：遺物などの出土はなく、不明である。

(田中)

P-308 (図Ⅲ-213, 図版75・169)

位置：53-38 規模：0.62/0.40×0.51/0.36×0.29m 平面形：楕円形

長軸方向：N-76°-W

検出・掘り込み面：H-568の調査中、Ⅲ層除去後に覆土1層上面で確認した。覆土のほとんどが黒褐色土である状況から、Ⅲ層中からの掘り込みと考えられる。

重複関係：H-568より新しい。

時期：遺物は出土しているが、H-568覆土中の遺物との区別は困難であり、特定できない。

坑底：H-568の覆土まで掘り込み、鍋底状を呈する。

壁：急傾斜で立ち上がる。

(福井)

石器：1は頁岩製、2類の石錘。板状礫の破片を素材とするもので、縁辺全周に剥離痕がみられる。

両端の挟り部以外の剥離痕は全体に丸みを持つものである。

(田中)

P-309 (図Ⅲ-213, 図版75・119)

位置：53-39 規模：1.08/0.93×0.77/0.64×0.21m 平面形：楕円形

長軸方向：N-78°-W

検出・掘り込み面：H-568の調査中、Ⅲ層除去後に覆土1層上面で確認した。覆土のほとんどが黒褐色土である状況から、Ⅲ層中からの掘り込みと考えられる。

重複関係：H-568より新しい。

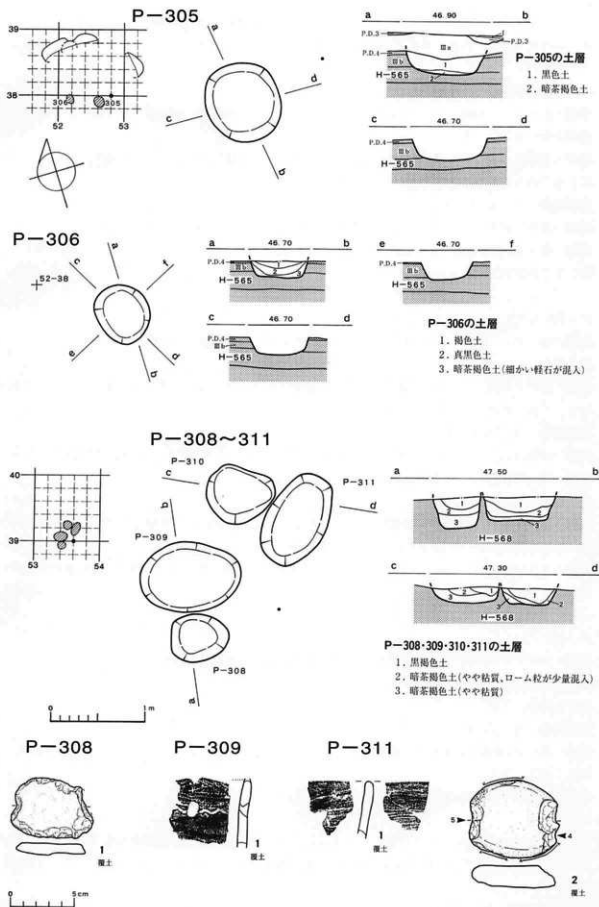
時期：遺物は出土しているが、H-568覆土中の遺物との区別は困難であり、特定できない。

坑底：H-568の覆土まで掘り込み、鍋底状を呈する。

壁：急傾斜で立ち上がる。

(福井)

土器：1はI群D1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。外傾面に鋸歯状の文様構成の連続腹縁文。下位を6条の貝縁文、下限を鋸歯状沈線文で区画す



図Ⅲ-213 P-305・306・308~311実測図と出土遺物

る。補修孔は外方から深く穿孔し、最後に内方から穿孔して貫通させている。

(富永)

P-310 (図Ⅲ-213, 図版75)

位置: 53-39 規模: $0.73/0.62 \times 0.58/0.45 \times 0.11\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-54°-W

検出・掘り込み面: H-568の調査中、Ⅲ層除去後に覆土1層上面で確認した。覆土のほとんどが黒褐色土である状況から、Ⅲ層中からの掘り込みと考えられる。

重複関係: H-568より新しい。

時期: 遺物は出土しているが、H-568覆土中の遺物との区別は困難であり、特定できない。

坑底: H-568の覆土まで掘り込み、鍋底状を呈する。

壁: やや急傾斜で立ち上がる。

(福井)

P-311 (図Ⅲ-213, 図版75・119・167)

位置: 53-39 規模: $1.64/1.00 \times 1.52/0.94 \times 0.32\text{m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-47°-E

検出・掘り込み面: H-568の調査中、Ⅲ層除去後に覆土1層上面で確認した。覆土のほとんどが黒褐色土である状況から、Ⅲ層中からの掘り込みと考えられる。

重複関係: H-568より新しい。

時期: 遺物は出土しているが、H-568覆土中の遺物との区別は困難であり、特定できない。

坑底: H-568の覆土まで掘り込み、鍋底状を呈する。

壁: やや急傾斜で立ち上がる。

(福井)

土器: 1はI群D1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は半椀で、口唇部断面形は丸形。やや内湾する。内面を条痕調整、外面はすり消し条痕で調整する。

(富永)

石器: 2は閃緑岩製の石錘。両挟り部には敲打による潰れがみられるほか、縁辺に敲打痕やすり面がある。

(田中)

P-312 (図Ⅲ-214)

位置: 54-37 規模: $0.45/0.32 \times 0.43/0.32 \times 0.16\text{m}$ 平面形: 円形

検出面: H-569の覆土上面で検出した。

掘り込み面: 不明

重複関係: H-569より新しい。

覆土: H-569の覆土に類似する褐色系土。

坑底: 碗状である。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

性格: 不明

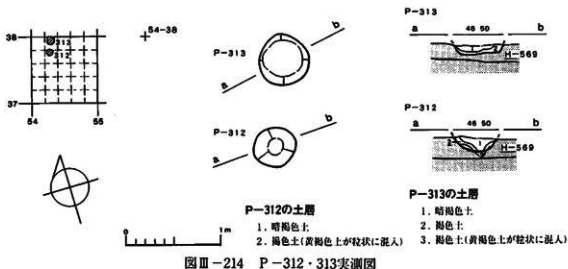
時期: H-569の覆土中、および覆土上の流れ込みのⅢ層から出土した土器がともにI群D類であることから、I群D類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期であると思われる。

(柳瀬)

P-313 (図Ⅲ-214, 図版75)

位置: 54-37 規模: $0.53/0.39 \times 0.53/0.39 \times 0.11\text{m}$ 平面形: 円形

P-312・313



検出面：H-569の覆土上面で検出した。

掘り込み面：不明

重複関係：H-569より新しい。

覆土：H-569の覆土に類似する褐色系土。

坑底：ほぼ平坦である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

性格：不明

時期：H-569の覆土中、および覆土上の流れ込みのⅢ層から出土した土器がともにⅠ群D類であることから、Ⅰ群D類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期であると思われる。(梅瀬)

P-352 (図Ⅲ-215・216, 図版76・119・167)

位置：54-39, 54-39 規模：1.64/1.00×1.52/0.94×0.32m 平面形：隅丸方形

長軸方向：N-56°-E

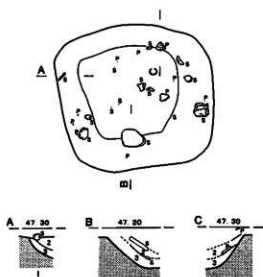
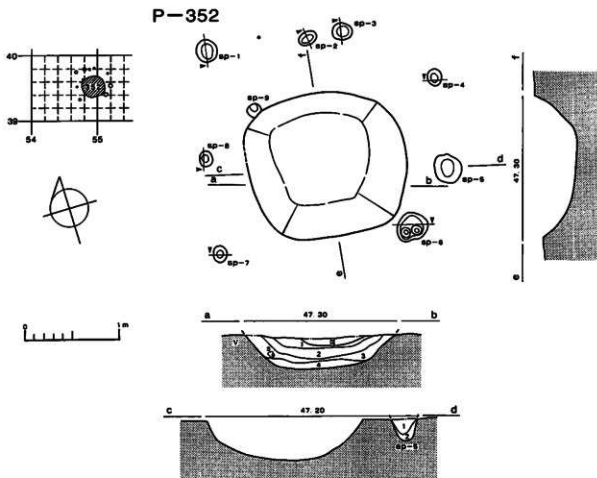
検出・掘り込み面：Ⅳ層上面で検出。Ⅲ層中から掘り込まれたものと思われる。

重複関係：なし。

時期：覆土中から多くのⅠ群D1類土器が出土しており、これに対応する縄文時代早期中葉の時期と考えられる。

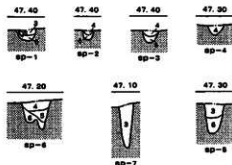
坑底・壁：坑底はⅤ層を掘り込んで構築され、皿状を呈している。壁は坑底から緩やかに立ち上がる。

覆土：覆土最下部の4層は、暗黒褐色土で粘質が強く、有機質が多く含まれていそうな土壌であった。この土壌を脂肪酸分析試料としてサンプル採取した(結果はⅤ章-4を参照されたい)。土壌の堆積状況は最下層が水平堆積で、その上層は壁際が厚く、中央部が薄い堆積である。さらにその上部には、掘り揚げ土を埋めたと思われる覆土2層があり、ほぼ均等の厚さで曲線を描いた堆積となっていた。このことから、最下部は埋納された有機物が腐食し、その体積が減少した際、上部埋め土が下部に落ち込んだ状況を推定することができる。このような状況から、この土坑は墓の可能性が強い。しかし、副葬品といえるようなものは出土せず、遺体も検出されなかったことから断言はできない。ただ、覆



P-352の土層

1. 暗褐色土(やや粘質、ローム粒が若干混入)
2. 暗黄褐色土(やや粘質、ローム粒・炭化物の混入多い)
3. 茶黒褐色土(粘質、微量のローム粒、多量の炭化物が混入)
4. 暗黒褐色土(粘質、ローム粒の混入多い)

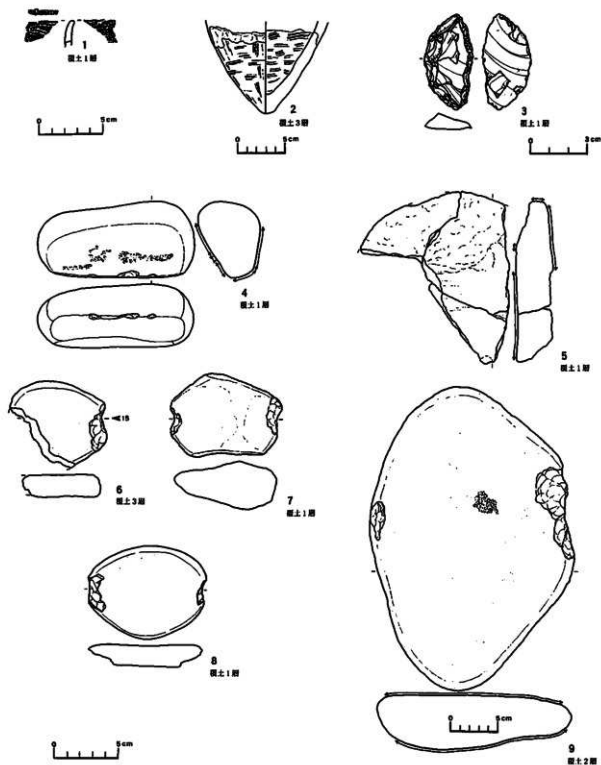


spの土層

1. 茶黒褐色土(粘質、微量のローム粒、多量の炭化物が混入)
2. 暗黄褐色土(やや粘質、ローム粒・炭化物の混入多い)
3. 暗茶褐色土(やや粘質、ローム粒が微量混入)
4. 黒色土(やや粘質、ローム粒が微量混入)
5. 茶黒褐色土(ロームブロックが多量混入)
6. 暗黄褐色土(やや粘質)

図Ⅲ-215 P-352実測図

土1層からは割られた後被熱した石皿が、覆土3層からは二次焼成を受け断面の一部にも炭化物の付着した土器片が出土しており、土坑上面で火を使用した何らかの行為が行われた可能性は高い。
付属ピット：周囲に9個の柱穴状小ピットを確認した。土坑を巡るように分布する。特に、東側の3個は覆土が同一で、土坑の壁に平行して並んでいる。性格は不明である。うち、1個の小ピットから蛇紋岩の礫が出土している。



図Ⅲ-216 P-352出土遺物

遺物出土状況：覆土1・2層中で、多量の遺物が土坑中央部に向かって傾斜して出土している。土坑上面に置かれていた遺物が、覆土が落ち込んだため引き起こされたような状況である。土坑南側には石皿、東側には大型礫が出土し、他に土器尖底部、多くの石錘などが出土した。 (福井)

土器：1・2はI群D1類a種で、1は口縁部破片、器形は口縁部形態が平縁で、口唇部断面形は丸形、口唇部が外反する。外面を条痕で調整する。2は砲弾形尖底。胴部との接合部位は内面を上方、外面を下方へ調整する。 (福永)

石器：3は硬質頁岩製のスクレイパー。両側縁に刃部を持つ2d類である。4は閃緑岩製のすり石。5は覆土1層出土の破片が接合した砥石。石質は粗粒で、礫面に気泡が日立つ凝灰岩である。図上方の2点の破片には煤が吸着する部分があり、割れ口にもみられる。なお、接合部には砥面の段差はみられない。6～8は2類の石錘。石質は順に、閃緑岩、安山岩、砂岩である。9は安山岩製の石皿。表裏両面を使用されるが、裏面はさほど使用の痕跡はない。 (田中)

P-355 (図Ⅲ-217, 図版168)

位置：53-38; H-565東壁際にあり、堅穴に壊される。北東側にはすぐH-568がある。

規模：(2.02)/(1.72)×-/-×0.59m **平面形：**楕円形?

検出：H-565東壁の北側に、茶褐色土の落ち込みを検出したものである。

覆土：上部の主体は茶褐色系の土(土層図3・4)で、坑底上には南北に分かれ褐色土(土層図5)が堆積する。壁際には部分的に茶色土と暗黄色土(土層図6・7)がみられる。土坑検出面にみられる暗赤褐色土(土層図2)はⅢd層に相当するものかもしれない。

坑底・壁：V層を掘り込んで作られ、浅い皿状を呈する。土坑北側には南北40cm×東西60cmほどの浅い窪みがみられる。壁は緩やかに立ち上がり、坑口近くで直立する。

性格・時期：遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。I群D1類の土器片も出土しているが、性格・時期を特定するまでには至らない。ただ、遺跡内容の全体的傾向から縄文時代早期中葉の時期とは考えられる。

石器：1は流紋岩製の砥石。平坦面の砥面は平滑で、ほぼ中央に細かい敲打痕が集合する。2・3は閃緑岩製の石錘である。 (田中)

P-357 (図Ⅲ-217)

位置：56-40・41 **規模：**1.20/0.17×(0.79)/0.39×0.42m **平面形：**円形?

検出：H-589の東壁面の一部に黒色土がみられたため、土層観察用のベルトを設定した。黒色土上位の暗赤褐色土を除去し、平面形を確認した。

掘り込み面：不明

重複関係：H-589と重複し、これより古い。

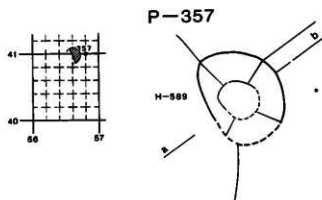
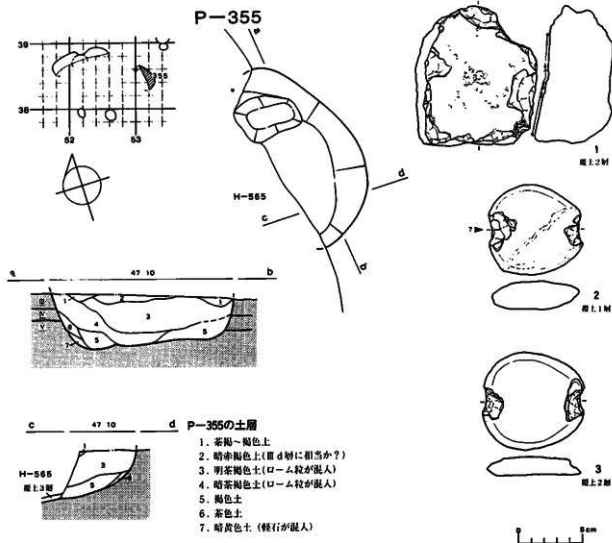
覆土：Ⅲ層とV層の褐色系混合土。

坑底：V層を掘り込んでおり、碗状。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

性格・時期：不明。

(柳瀬)



図Ⅲ-217 P-355・357実測図と出土石器

P-358 (図Ⅲ-218, 図版119・168)

位置: 52-38; H-565北壁際に、P-359・360と重複して位置する。3基の土坑はともに堅穴に壊されている。

規模: $-1.0 \times -1.0 (0.49) \text{ m}$ 平面形: 不明

検出・重複関係: H-565北壁で、茶褐色系の土壌の落ち込みが観察された。当初落ち込みは一連の堆積とみられ、規模的にH-565に壊された堅穴と考えたが、調査を進めるにしたがい3基の土坑であることが確認されたものである。この土坑はP-359を切っている状況は確認できた(a-bライン)が、P-360との新旧関係ははっきりしなかった。

覆土: 全体に茶色系の土壌で、上部から下部へ色調が漸次明るくなる。

坑底・壁: 残存する坑底はV層中に作られ、ほぼ平坦である。壁は坑底から急激に立ち上がり、直線的に開口する。

性格・時期: 遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。I群D1類の土器片も出土しているが、性格・時期を特定するまでには至らない。ただ、遺跡内容の全体的傾向から縄文時代早期中葉の時期とは考えられる。(田中)

土器: 1はI群D1類a種で、口縁部形態が平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。内面を条痕調整し、口唇部外傾面は連続腹縁文、下位に口唇部に沿って3条の貝線文を施す。(富永)

石器: 2は閃緑岩製、1類のすり石。すり面のごく一部に赤色顔料とみられる付着物が観察される。

(田中)

P-359 (図Ⅲ-218, 図版168)

位置: 51-38, 51-39; H-565北壁際、P-358の西側に位置する。堅穴、P-358に壊されている。

規模: $(2.34) / 1.48 \times -1.08 \times 0.56 \text{ m}$ 平面形: 楕円形

長軸方向: N-75°-E

検出: 前出のP-358とともに確認したものである。

覆土: 上部は茶色系の土壌(土層図1・2)で、北壁際下部から坑底にかけては褐色土(土層図4)が堆積する。

坑底・壁: 坑底はほとんどが残存すると考えられる。V層中に作られる。南側半分が平坦で、北壁に向かって一旦窪み、連続して壁が緩やかに立ち上がっている。壁は直線的に開口する。

性格・時期: P-358と同様、遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。I群D1類の土器片も出土しているが、性格・時期を特定するまでには至らない。ただ、遺跡内容の全体的傾向から縄文時代早期中葉の時期とは考えられる。

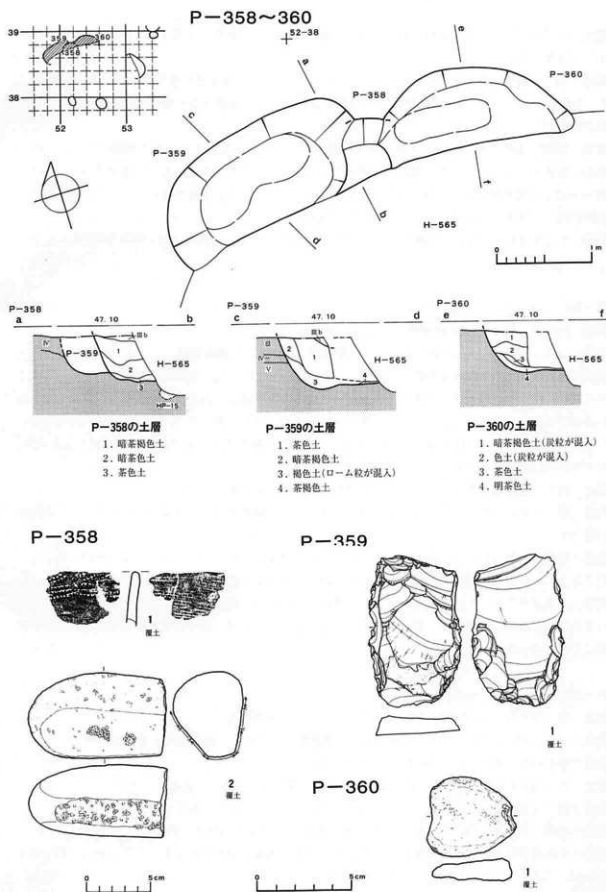
石器: 1は硬質頁岩製のスクレイパー。調整は全体的に粗く、連続調整による刃部の作出はみられない。左側縁の中央にある挟み部に細かい剥離がみられたことから2c類とした。右面の大きな剥離は素材剥片の厚みを減ずるものとみられる。(田中)

P-360 (図Ⅲ-218, 図版168)

位置: 52-38; H-565北壁際、P-358の東側に位置する。堅穴に壊されている。

規模: $-1.0 \times -1.0 \times 0.46 \text{ m}$ 平面形: 楕円形?

検出面: P-358・359とともに確認したものである。P-358との新旧関係ははっきり捉えられなかったが、坑底の残存する形をみるとP-358の方が新しうである。



図Ⅲ-218 P-358~360実測図と出土遺物

覆土：上部に炭粒が混入する褐色系の土壌（土層図1・2）があり、下部に薄く茶色土（土層図3・4）が堆積している。

坑底・壁：V層中に作られている。坑底の平面形は不定形で、北東側の壁に張り出しがある。また、P-359ほどははっきりしないが、坑底は北壁側が窪み、壁へと連続する。壁は緩やかに立ち上り、直線的に開口する。

性格・時期：前の2基の土坑と同様、遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。I群I1類の土器片も出土しているが、性格・時期を特定するまでには至らない。ただ、遺跡内容の全体的傾向から縄文時代早期中葉の時期とは考えられる。また、H-565と重複する4個の土坑が構築される時間的幅も、考えなければならない問題として残る。

石器：1は流紋岩製の石錘。円礫素材で、右側のにみ挟りを入れ、左側は自然の窪みを利用している。
(田中)

P-361 (図Ⅲ-219, 図版76・168)

位置：52-35・36；H-588西壁際にあり、堅穴に壊される。

規模：(1.77)/1.38×1.61/0.81×0.46m 平面形：楕円形 長軸方向：N-67°-W

検出・重複関係：H-588の西壁に黒褐色土の落ち込みを確認した。堅穴の土層観察用土手（e-fライン）に掛かり、堅穴がこの落ち込みを切っていることが確認された。また、落ち込みにも切り合い関係が確認され、規模的にみて新旧2個の土坑と予想された。新をP-361、旧をP-367とした。

H-588の周辺にあるⅢd層を掘り進めたところ、Ⅲd層が落ち込んだ楕円形の輪郭が捉えられ、P-361の範囲が確認できた。

覆土：覆土上位にⅢd層が落ち込み、覆土は黒褐色土の一層である。

坑底・壁：坑底はV層中に作られ、北壁側が大きく窪み、傾斜する。壁は緩やかに立ち上り、直線的に開口する。

性格・時期：遺物は覆土中に散在し、まとまった出土状況はない。土器も出土せず、性格・時期は特定できない。ただ、遺跡内容の全体的傾向から縄文時代早期中葉の時期とは考えられる。

石器：1は凝灰岩製、平坦面に敲打痕を持つ砥石。裏面にも部分的に砥面がみられる。2・3は2類の石錘。石質は順に、流紋岩、閃緑岩である。2点とも、挟り部の敲打による潰れは顕著で、2の縁辺にも敲打痕がみられる。
(田中)

P-367 (図Ⅲ-219, 図版76・168)

位置：52-35；H-588西壁際にあり、北側をP-361に壊される。

規模：(1.28)/1.21×(1.28)/1.14×0.28m 平面形：楕円形 長軸方向：N-16°-E

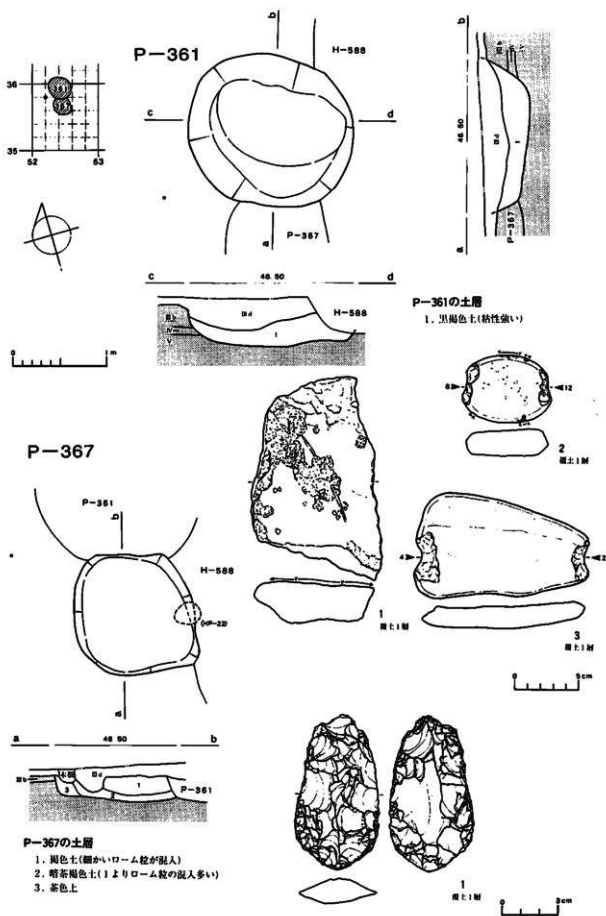
検出：前出のP-361とともに確認されたものである。

覆土：P-361ほどⅢd層の落ち込みはみられない。覆土は褐色土から茶色土である。

坑底・壁：坑底はV層中に作られ、ほぼ平坦。壁は急激に立ち上り、直立気味である。

性格・時期：P-361同様特定できないが、縄文時代早期中葉の時期とみられる。

石器：1は硬質頁岩製の両面調整石器。刃部様の明確な調整が認められなかったことからこの分類としたが、スクレイパーとして良いかもしれない。
(田中)



図Ⅲ-219 P-361・367実測図と出土石器

4. Tピット (図Ⅲ-220~244, 図版83~85)

Tピットは平成8年度調査で、47基が確認された。これまでの調査では271基が確認されたこととなり、昭和50年度面館市教育委員会調査のTピットを加えると合計289基 (重複するものは除く。)となる (表I-1)。いずれも溝状の細長いタイプのTピットである。

堅穴等遺構が密集するG地区からは8基が確認され、遺構確認調査を行った他地区からは、H地区4基、I地区10基、J地区18基、K地区7基がそれぞれ確認されている。便宜的地区割りであるが、地区ごとのTピットの多寡は調査面積によるものではなく、調査対象範囲全体に分布するTピットの密集度に起因している。これまでの調査地区全体を概観すると、ちょうど市道石倉6号線がはしっていた尾根上に一つの集積域があり、その東側ムジナ川の一つの沢頭にあたる谷地形部にTピットが集中する。これらは面館市教育委員会調査の石倉貝塚調査範囲に続くものである。他に南側調査範囲 (平成6年度B'地区、平成7年度E地区) の尾根上、谷地形部にもそれぞれ集積域があり、中野B遺跡主体部である集落跡も集積域の一つとなっている。これらの集積域を結ぶかたちで緩斜面上にいくつかのTピット列が観察される。これまでの報告でも規模や長軸方向からTピット列の把握に努めているが、これだけ多くのTピットが複雑に配置されており、その全体像ははっきりしないのが現状である。その中であって、長軸長が2mを切る小型のTピットが特徴的で、その分布は調査対象地区東側に偏る。ムジナ川沢頭の谷地形部に北東から南西方向に一列 (T-71~75・259・200・201・197・199・224・223) と、今回の調査で確認した北東側緩斜面上に一列 (T-237・236・240・239; I地区) が想定される。また、今回の調査では市道石倉6号線の尾根から集落跡集積域をつなぐように沢を横断して、T-229・262・230~232 (G・K地区) のTピット列が確認されている。

G地区で確認されたTピットはこれまでと同様、堅穴を壊してつくられており、集落跡より新しいものと位置付けられる。Tピットから出土する遺物はすべて流れ込みによるものと考えられ、ほとんどがG地区からの出土である。他にはJ地区T-228からすり石1点が出土するのみである。以下に主要な遺物をあげた。

(田中)

【土器】 (図Ⅲ-245, 図版119)

(T-229) 1はD1類a種の口縁部破片で、器形は口縁部形態が平縁で、口唇部断面形態は切り出し状に外傾し、僅かに外反する。口唇部内面を条痕で調整し、他の部位はナデ調整する。

(T-260) 1はD1類a種の口縁部破片で、器形は口縁部形態が波状口縁で、口唇部断面形態は切り出し状に外傾する。口唇部内面を押し、外傾面を連続腹縁文、外面に押し波状文を施す。下腹を2条の貝縁文と鋸歯状沈線文で区画する。

(T-261) 1はD1類a種の口縁部破片で、器形は口縁部形態が平縁で、口唇部断面形態は切り出し状に外傾する。器内面を条痕調整し、口唇部外傾面はナデ調整される。文様帯は2条の貝縁文で上下を区画し、鋸歯状の文様構成に腹縁文を施す。2はD2類の口縁部文様帯の下腹区画部分の胴部破片で、条痕文で文様構成されている。器内面は条痕で調整される。

(富永)

【石器】 (図Ⅲ-245, 図版169)

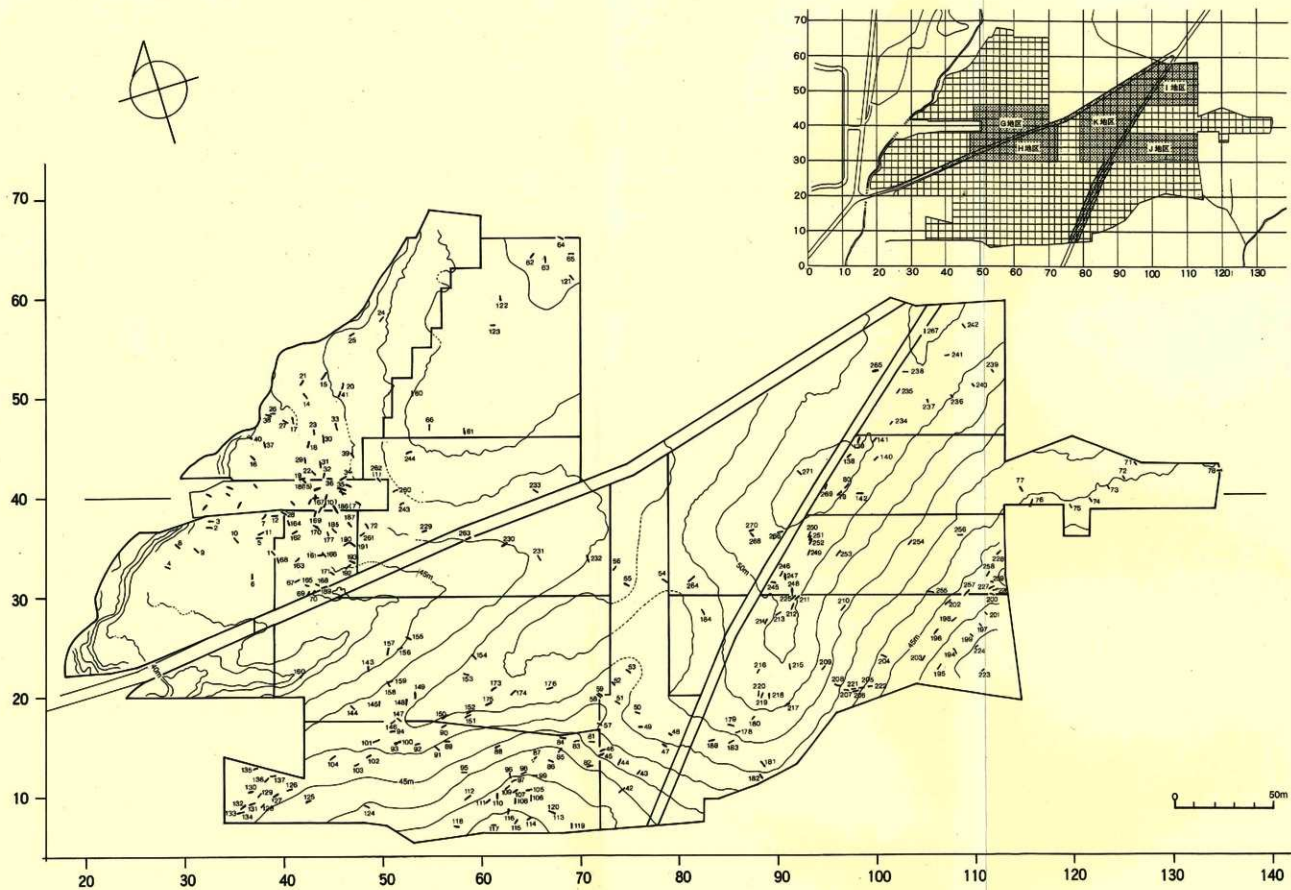
(T-229) 2は硬質頁岩製のスクレイパー。外湾する刃部を持つ2b類。3は閃緑岩製、1類の石錘。破損品の再利用で、意識的に短軸の挟りを入れたものとは考えられない。

(T-243) 1は凝灰岩製の砥石。両平坦面、折れ面を利用するもので、砥面は肌理細かく、平滑。

(T-261) 3は閃緑岩製、1類のすり石。図上側の稜部の敲打痕には、一部直線状のものがある。

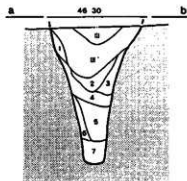
(T-228) 1は安山岩製、1類のすり石。T-228はJ地区東端に位置するTピットで、坑底から出土している。

(田中)



図III-220 Tビット位置図

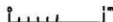
[G地区]
T-172



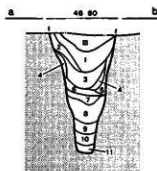
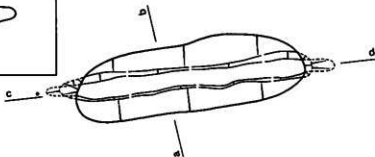
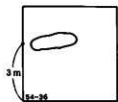
T-172の土層

Ⅲ' (Ⅲに灰褐色土が混入)

1. 暗茶褐色土
2. ⅣⅢ' (Ⅲ'より黄色ロームが多く混入)
3. ⅣⅡ (黄色ロームがより多く混入、軟質)
4. 黒色土(軟質)
5. 黄灰色土(淡褐色土とブロック状に黒色土が混入)
6. 黄色ローム (ボンボン)
7. 黒褐色土(粘質)



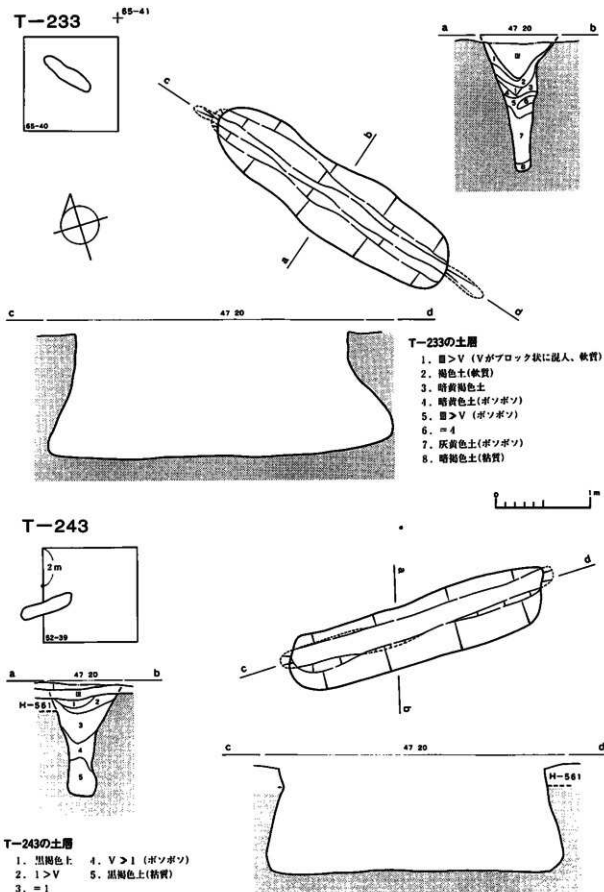
T-229



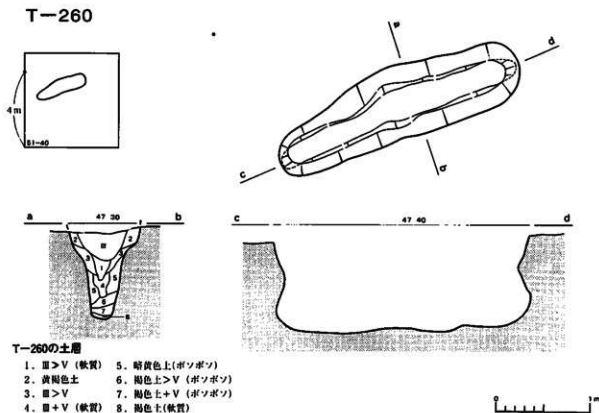
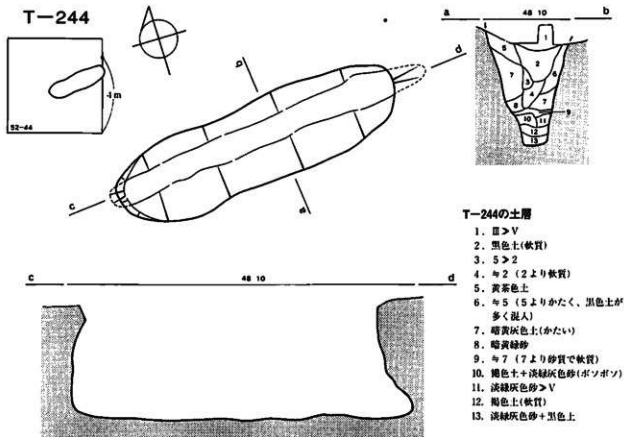
T-229の土層

1. 暗黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗茶褐色土(ローム粒が微量混入)
4. 暗茶褐色土(ロームブロックを多量に混入)
5. 黄褐色土(粗くもろい、壁の崩落土)
6. 暗茶褐色土(ロームブロックがやや多く混入)
7. 黒褐色土(ローム粒が混入)
8. 黄褐色土(砂質、壁の崩落土)
9. 暗黄褐色土(粗くもろい、黒色土が混入)
10. 黒褐色土(粘質)
11. 灰褐色土(粘質、ローム粒が多く混入)

図Ⅲ-221 T-172・229実測図

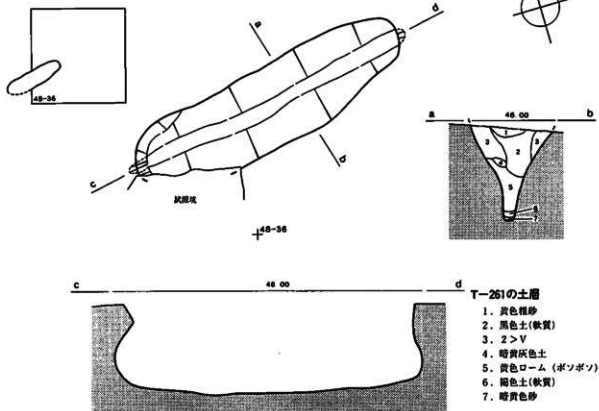


図Ⅲ-222 T-233・243実測図

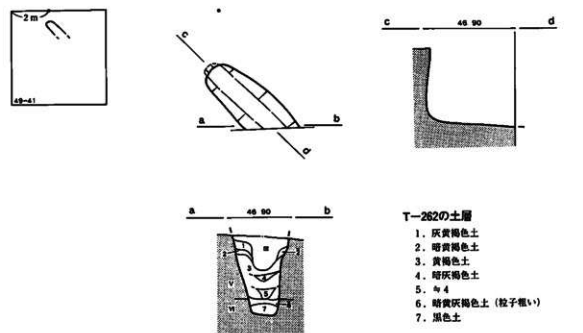


図III-223 T-244・260実測図

T-261

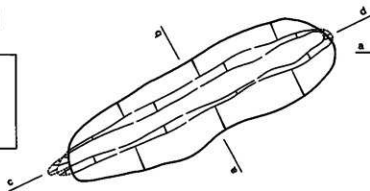


T-262

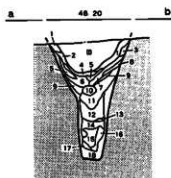
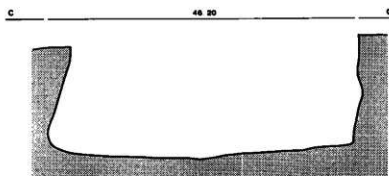


図Ⅲ-224 T-261・262実測図

[H地区]
T-230



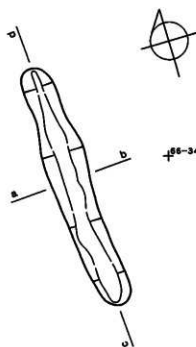
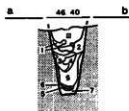
+52-35



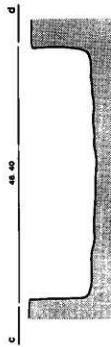
T-230の土層

1. 灰黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土(粘質、しまり弱い)
4. 黒色土(黄褐色土が粒状に混入)
5. 灰黄褐色土(黒色土と黄褐色土が粒状に混入)
6. 黒褐色土
7. 黒色土>褐色土・黄褐色土(モザイク状)
8. 暗黄褐色土(粘質)
9. 々々(赤褐色土が粒状に混入)
10. 灰黄褐色土(粘質)
11. 黒色土・褐色土<黄褐色土(モザイク状)
12. 黄褐色土(粘質、軽石が混入)
13. 褐色土+黄褐色土(モザイク状)
14. 黒褐色土(黄褐色土が粒状に混入)
15. 黄褐色土+褐色土(モザイク状)
16. 暗黄褐色土(若干砂質)
17. 黒褐色土(黄褐色土が粒状に混入)
18. 黄褐色土(粘質、しまり強い)

T-231



+56-34

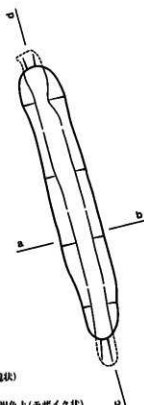


T-231の土層

1. 褐色土
2. 黄褐色土(黒色土が粒状に混入)
3. 黒色土
4. 褐色土
5. 暗黄褐色土(黒色土が粒状に混入)
6. 褐色土
7. 黄褐色土(粘質、しまり強い)

図Ⅲ-225 T-230・231実測図

T-232



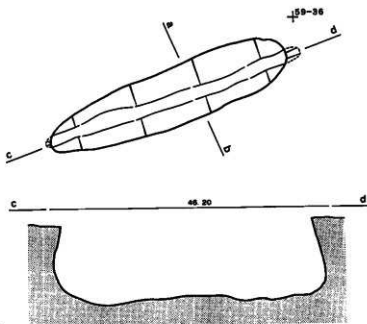
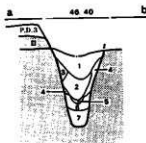
+71-34



T-232の土層

1. 灰褐色土
2. 灰黄褐色土
3. 黒色土+黄褐色土(モザイク状)
4. 黄褐色土(粘質、しまりない)
5. 灰黄褐色土
6. 黄褐色土(塊状)
7. 黒色土(黄褐色土が粒状に少量混入)
8. 灰黄褐色土(黒色土が粒状に少量混入)
9. 黄褐色土(軽石が混入)
10. 暗黄褐色土
11. 黄褐色土(塊状)
12. 灰黄褐色土
13. 黒色土+黄褐色土(モザイク状)
14. 黄褐色土(しまりない)
15. 黒色土(黄褐色土が粒状に混入)
16. 明黄褐色土(砂質)
17. 黒色土(黄褐色土が混入)

T-263



+59-36

T-263の土層

1. 黒色土(粘質)
2. 1 > V
3. 1 > V
4. 4 > 3 (3より黒色土が多く混入)
5. 茶灰色土
6. 暗黄褐色土(砂質)
7. 黒褐色土



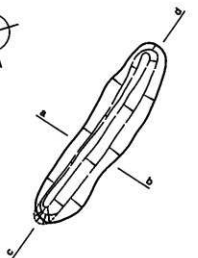
図 III-226 T-232・263実測図

[I 地区]

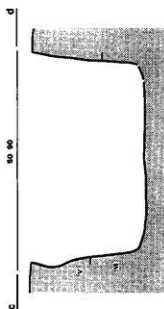
T-234



+101-47



a 50 90 b



T-234の土層

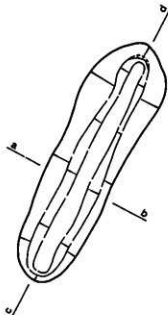
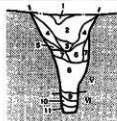
1. 暗黄色土(硬く、黒色土がブロック状に混入)
2. 暗茶褐色土(しまりない)
3. 暗黄色土(しまりない)
4. 茶色土(軽石が混入、ボソボソ)
5. 黒色土(ボソボソ)



T-235



a 50 90 b



+102-50

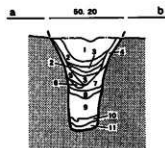
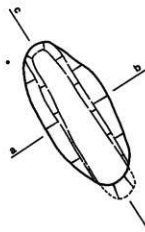
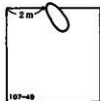


T-235の土層

1. 真黒色土(Ⅲ a 層相当?)
2. 褐色土(粘質。Ⅲ b 層相当?)
3. 黒色土(Ⅲ b 層相当?)
4. 暗茶色土(粘質)
5. 黒色土(黄色ロームブロックが混入)
6. 暗茶色～黒色土(しまりなく、ボソボソ)
7. 黄色ローム (ブロック状)
8. 黄色ローム (しまりなく、ボソボソ)
9. 黒色土(ボソボソ)
10. 暗黄色土(軽石が混入)
11. 黒色土(ボソボソ)

図Ⅲ-227 T-234・235実測図

T-236

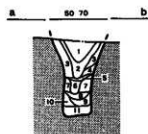
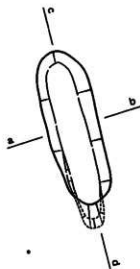
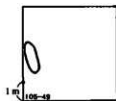


T-236の土層

1. 黒色土(旧層に相当?)
2. 暗茶色土(しまりない)
3. 褐色土(しまりない)
4. 暗茶色土(黄色ローム粒が混入)
5. 黄色ローム
6. 茶色土(しまりない)
7. = 5
8. 褐色土(しまりない)
9. や 5 (しまりない)
10. 黒色土(しまりない)
11. 褐色土(しまりない)



T-237

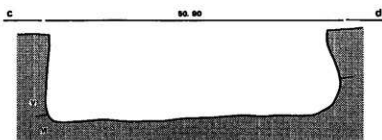
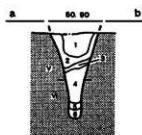
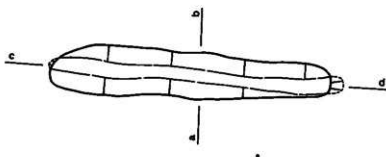
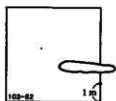


T-237の土層

1. 黒色土 (旧層に相当?)
2. 褐色土 (しまりない)
3. 暗茶色土
4. 暗褐色土 (しまりない)
5. 黒色土 (しまりない)
6. 暗茶色土
7. 黄色ローム (しまりない)
8. 褐色土
9. 黄色ローム (しまりあり、かたい)
10. や 9 (しまりない)
11. 黒色土 (しまりあり、かたい)

図 III-228 T-236・237実測図

T-238

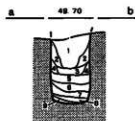
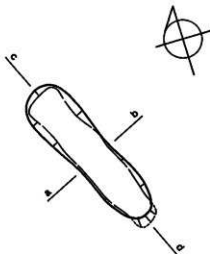
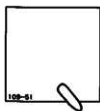


T-238の土層

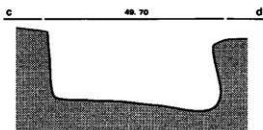
1. 黒色土(粘性強い。黒曜に相当?)
2. 暗茶褐色土(粘性強い)
3. 黄色ローム(しまりあり、かたい)
4. や3(しまりなく、ボンボン)
5. 暗茶褐色土(しまりない)
6. 黒色土(しまりない)



T-239



10-51

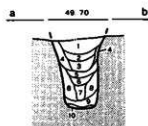
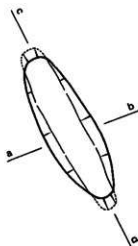
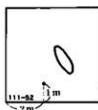


T-239の土層

1. 黒色土(軟質。Ⅲ>Ⅴ)
2. 暗茶褐色土(軟質、ボンボン。Ⅲ<Ⅴ)
3. 黒色土(Ⅴがブロック状に混入)
4. や2
5. 暗茶褐色土(軟質)
6. 明褐色土(軟質。Ⅲ>Ⅴ)
7. や5
8. 黒褐色土(粘質)
9. 褐色土(ボンボン)

図III-229 T-238・239実測図

T-240

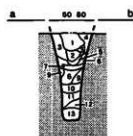
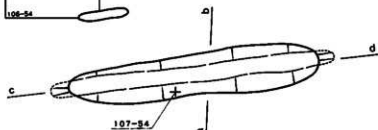


T-240の土層

1. 黒色土 (厚 > V)
2. ㄥ 1 (1 に暗茶黄色土が混入)
3. ㄥ 1 (暗茶黄色土がブロック状に混入)
4. 暗茶黄色土 (軟質)
5. 暗茶黄色土 (やや軟質)
6. ㄥ 5 (褐色土が中央部にブロック状に堆積)
7. 暗茶黄色土 (粘質、ボソボソ)
8. 明黄色土 (粘質)
9. 黒褐色土 (粘質)
10. 褐色土 (砂質)



T-241

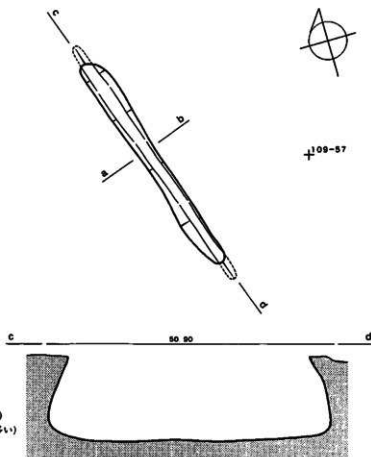
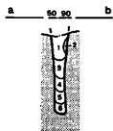


T-241の土層

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土 > 黄色土
3. 明黄色土 (ボソボソ)
4. 明黄色土 (粘質、かたい)
5. 明灰褐色土
6. 明褐色土 (3より黄色ロームの混入多い)
7. 黒褐色土 (黄色ロームがわずかに混入)
8. 黄褐色土 (軟質)
9. 暗黄色土 (砂質、軟質)
10. 褐色土 > 黄色ローム (軟質)
11. 褐色土 > 黄色ローム (軟質)
12. 暗黄色土 (砂質)
13. ㄥ 7 (軟質)

図Ⅲ-230 T-240・241実測図

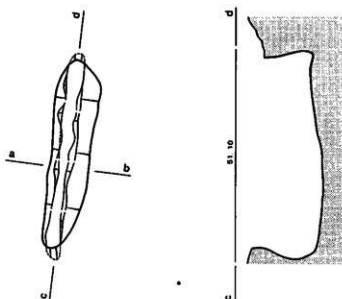
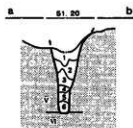
T-242



T-242の土層

1. 褐色土(軟質。Ⅲ>Ⅴ)
2. 黄褐色土(Ⅲ+Ⅴ)
3. 暗褐色土(ボツボツ)
4. 暗褐色土(軟質、黄色ロームがわずかに混入)
5. ㇿ4 (ボツボツ、4より黄色ロームの混入多い)
6. 黒褐色土(やや粘質)

T-267



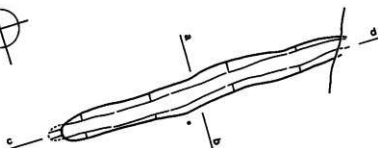
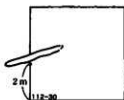
T-267の土層

1. 灰黄褐色土(しまり強く、Ⅴがブロック状に混入)
2. 黄褐色土(しまり弱く、ボツボツ)
3. 暗黄褐色土(しまり弱く、ボツボツ)
4. ㇿ2
5. ㇿ3
6. 黄褐色土



図III-231 T-242・267実測図

[J 地区]
T-226



a 44.20 b



c 44.20 d



T-226の土層

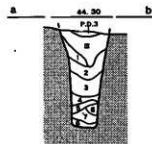
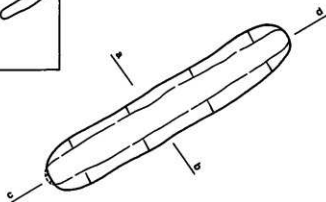
- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. Ⅲ>黄色ローム | 5. 黄灰色土(粘質) |
| 2. 黄色ローム(粘質) | 6. Ⅴ>Ⅲ |
| 3. Ⅲ+黄色ローム | 7. 黒褐色土 |
| 4. 暗黄色土(粘質、Ⅲが微量混入) | 8. Ⅶ+黄色ローム |



T-227



112-31



c 44.20 d

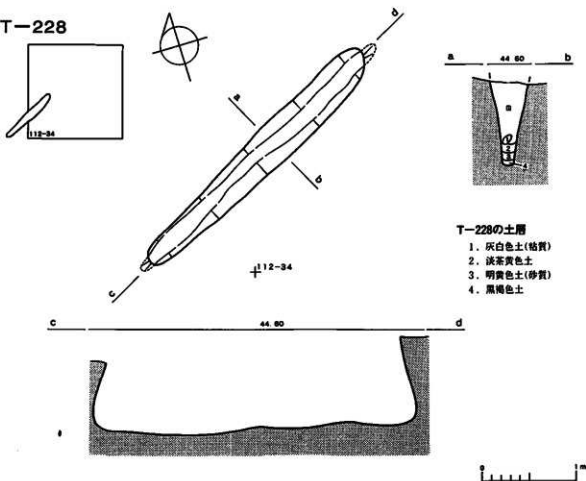


T-227の土層

- | |
|------------------------|
| 1. Ⅲ+黄色ローム (ボソボソ) |
| 2. Ⅲ>黄色ローム |
| 3. 暗黄色土(黒色土が微量混入、ボソボソ) |
| 4. 黄色ローム>黒色土(ボソボソ) |
| 5. 黒色土 |
| 6. 淡灰色土(粘質) |
| 7. Ⅴ(Ⅴより色調が明るい) |
| 8. 明灰色土(粘質で、かたい) |

図Ⅲ-232 T-226・227実測図

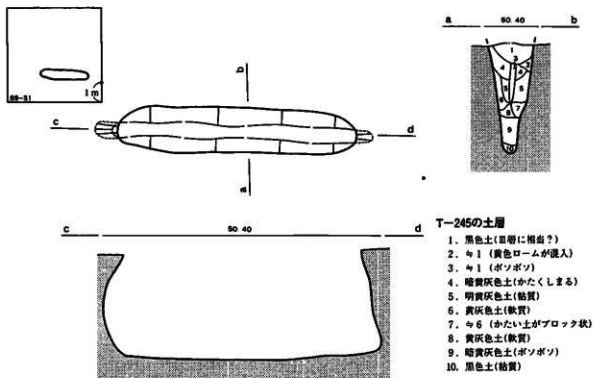
T-228



T-228の土層

1. 灰白色土(粘質)
2. 淡茶黄色土
3. 明黄色土(砂質)
4. 黒褐色土

T-245



T-245の土層

1. 黒色土(Ⅲ層に相違?)
2. ㄅ1 (黄色ロームが混入)
3. ㄅ1 (ボソボソ)
4. 暗黄灰色土(かたくしめる)
5. 明黄灰色土(粘質)
6. 黄灰色土(軟質)
7. ㄅ6 (かたい土がブロック状)
8. 黄灰色土(軟質)
9. 暗黄灰色土(ボソボソ)
10. 黒色土(粘質)

図Ⅲ-233 T-228・245実測図

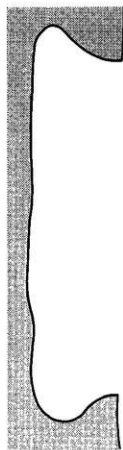
T-246



90-32

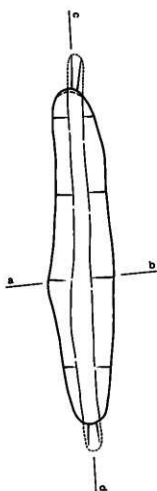


T-247



90-32

90-32

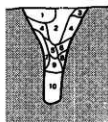


T-246の土層

1. 黒色土(若干黄色ロームが混入、しまり強い。■明相当?)
2. 明黄褐色土(しまり強い)
3. 暗黄褐色土(しまりなく、ボソボソ)
4. 黄褐色土(しまりなく、ボソボソ)
5. ㇿ3
6. 暗黄褐色土(しまりなく、ボソボソ)
7. ㇿ4
8. 黄色ローム(粘性若干あるが、ボソボソ)

91-32

90 40

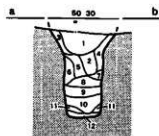
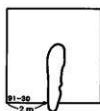


T-247の土層

1. 褐色土(かたい)
2. 黒色土(黄色ロームが若干混入、ややかたい)
3. 褐色土>黄色ローム(かたい)
4. 明黄灰色土(上部に2が混入)
5. 褐色土>黄色ローム(ボソボソ)
6. 暗黄褐色土(粘質)
7. 明黄灰色土(砂質)
8. 暗黄灰色土(粘質、かたい)
9. 暗褐色土(ボソボソ)
10. 黒色土(軟質)

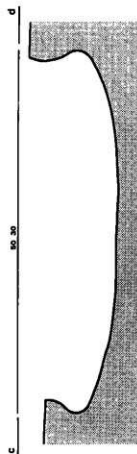
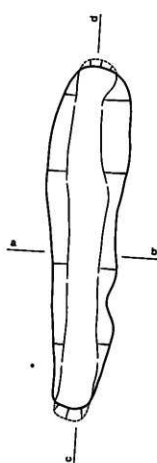
図Ⅲ-234 T-246・247実測図

T-248

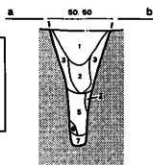


T-248の土層

1. 黒色土(かたい、黄色ロームが若干混入)
2. 黒色土+黄色ローム(軟質、ボソボソ)
3. ㄞ2(かたい)
4. ㄞ2(2より黄色ロームが多く混入)
5. 暗灰黄色土(軟質)
6. 明灰黄色土(砂質)
7. = 6
8. 褐色土+黄色ローム(軟質)
9. ㄞ6
10. 暗褐色土(軟質、黄色ロームが若干混入)
11. 9+10
12. 黒色土

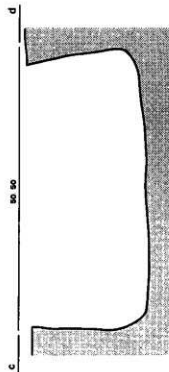
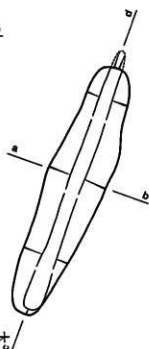


T-249



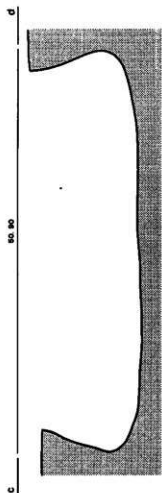
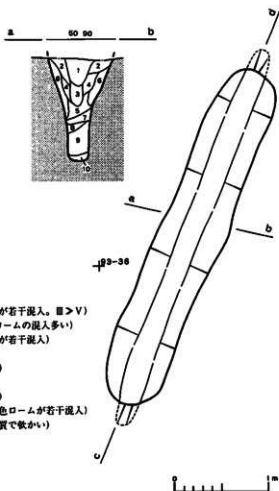
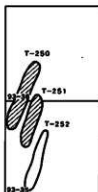
T-249の土層

1. 黒色土(黄色ロームが若干混入。Ⅲ>Ⅴ)
2. 褐色土(黄色ローム混入、ボソボソ)
3. 暗灰黄色土(やや粘質)
4. 淡灰黄色砂
5. 暗灰黄色土(砂質)
6. = 4
7. 褐色土(軟質、黄色ロームがやや多く混入)



図Ⅲ-235 T-248・249実測図

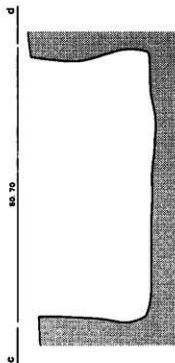
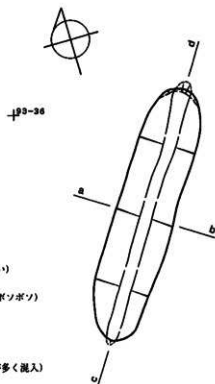
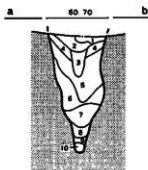
T-250



T-250の土層

1. 黒色土(黄色ロームが若干混入。Ⅲ>Ⅴ)
2. Ⅳ Ⅰ (Ⅰより黄色ロームの混入多い)
3. 褐色土(黄色ロームが若干混入)
4. 淡灰褐色土(軟質)
5. 明灰色土(ボソボソ)
6. Ⅳ Ⅴ (やや砂質)
7. 淡褐色土(ボソボソ)
8. 暗褐色土(軟質、黄色ロームが若干混入)
9. 暗黄灰色土(やや粘質で軟かい)
10. 淡褐色土(砂質)

T-251

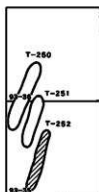


T-251の土層

1. 暗褐色土+黄色ローム (かたい)
2. 黒色土+黄色ローム
3. 褐色土+黄色ローム (軟質、ボソボソ)
4. 暗黄灰色土(ややかたい)
5. 明黄灰色土(砂質)
6. 明灰色土(砂質)
7. Ⅳ Ⅵ (淡緑灰色砂が多く混入)
8. 明灰色土(7より淡緑灰色砂が多く混入)
9. 明褐色土(砂質。8+10)
10. 褐色土(砂質)

図Ⅲ-236 T-250・251実測図

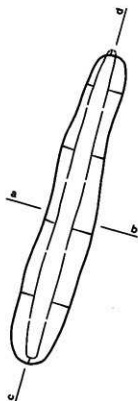
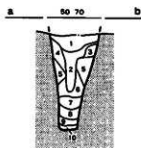
T-252



T-252の土層

1. 黒褐色土(しまり強い。田層に相当?)
2. 暗黄褐色土(しまりあり。田>V)
3. 黄褐色土(しまりあり、黒色土が若干混入)
4. ㄐ3(しまりあり、3より黒色土の混入多い)
5. 黄色ローム(しまりあり、粘性強い)
6. 黄褐色土(しまりなく、ボソボソ)
7. 暗黄褐色土(しまりなく、ボソボソ)
8. ㄐ7(7より黄色ロームの混入が多い)
9. =7
10. 黄色ローム(粘性あるが、しまりなくボソボソ)

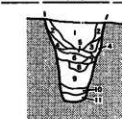
98-35



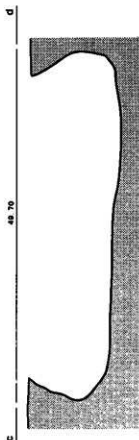
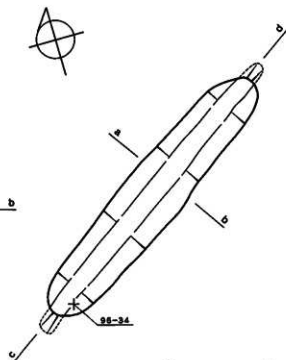
T-253



T-253の土層

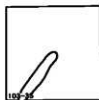


1. 黒色土(田層に相当?)
2. 暗茶褐色土
3. 茶褐色土
4. 黄色ローム(かたい)
5. 暗茶褐色土
6. 茶褐色土
7. 黄色ローム(ボソボソ)
8. ㄐ5
9. 黄色ローム(もろい)
10. 褐色土
11. 黒色土(もろく、黄色ローム粒が若干混入)

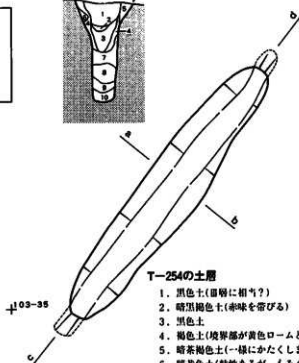


図III-237 T-252・253実測図

T-254

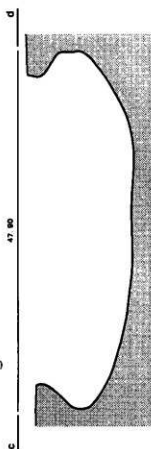


a 47.90 b



T-254の土層

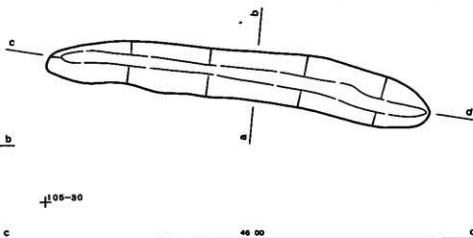
1. 黒色土(母岩に相当?)
2. 暗黒褐色土(赤味を帯びる)
3. 黒色土
4. 褐色土(境界部が黄色ロームと混じり合う)
5. 暗茶褐色土(一線にかくしまる)
6. 暗黄色土(粘性があるが、もろく軟らかい)
7. ≈6
8. 褐色土(もろく、軽石が若干混入)
9. 茶褐色土(もろく、軽石が若干混入)
10. 黒色土(もろく、坑底斜面で厚くたまる)



T-255



a 46.00 b

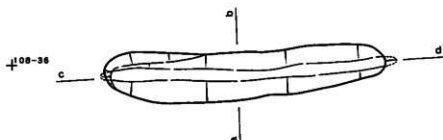


T-255の土層

1. 黒色土(母岩に相当?)
2. 暗茶褐色土
3. 褐色土
4. 黄~黄白色ローム(もろい)
5. 黒色土

図III-238 T-254・255実測図

T-256



a 46 40 b



c 46 40 d

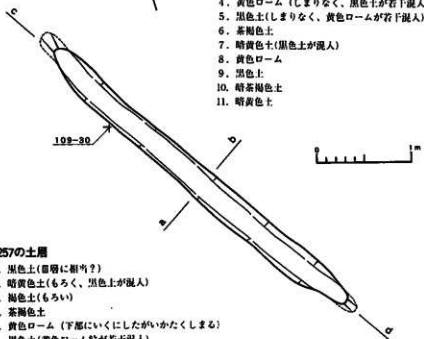
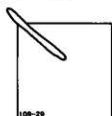


T-256の土層

1. 暗茶褐色土
2. 黒色土(器唇に相与?)
3. 暗茶褐色土(まだらに黄色ロームが混入)
4. 黄色ローム(しまりなく、黒色土が若干混入)
5. 黒色土(しまりなく、黄色ロームが若干混入)
6. 茶褐色土
7. 暗黄色土(黒色土が混入)
8. 黄色ローム
9. 黒色土
10. 暗茶褐色土
11. 暗黄色土



T-257



a 44 30 b



T-257の土層

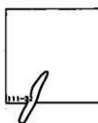
1. 黒色土(器唇に相与?)
2. 暗黄色土(もろく、黒色土が混入)
3. 褐色土(もろい)
4. 茶褐色土
5. 黄色ローム(下部にいくにしたがいにくくなる)
6. 黒色土(黄色ローム粒が若干混入)

c 44 30 d

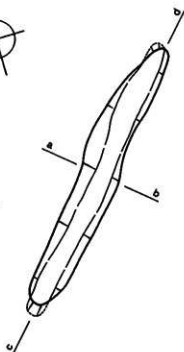


図Ⅲ-239 T-256・257実測図

T-258



+111-32

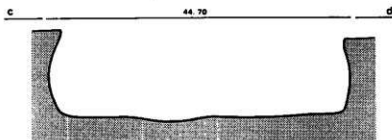


a 44 70 b

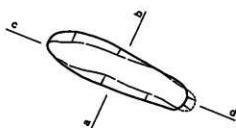


T-258の土層

1. 黒色土(黒礫に相当?)
2. 茶褐色土
3. 黄白色ローム
4. 暗黄色土
5. 黄色ローム (もろく軟らかい)
6. 黒色土(黄色ロームが若干混入)
7. 黄色ローム
8. 茶色粘質土
9. 褐色粘質土
10. 暗黄色土
11. 黒色土
12. 暗茶褐色土
13. 黒色土



T-259



0 1m

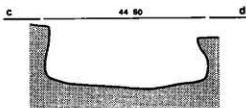
a 44 80 b



+112-31

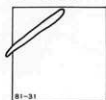
T-259の土層

1. 黒色土(黒礫に相当?)
2. 暗黄色土(粘質、黒色土が混入)
3. 暗茶色土
4. 黒色土(粘質)
5. 暗黄色土(粘質、F部に黒色土の薄層がある)

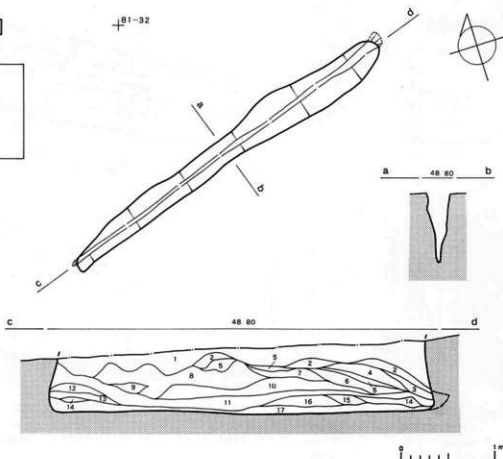


図Ⅲ-240 T-258・259実測図

[K地区]
T-264

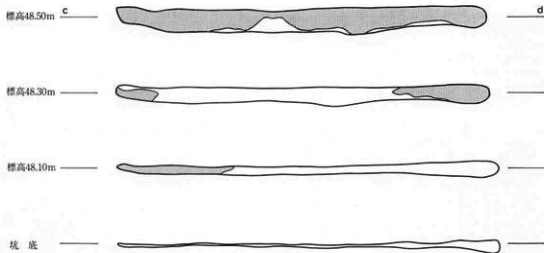


81-32



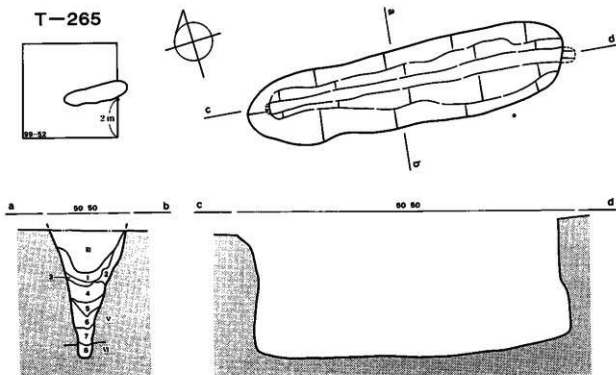
T-264の土層

- | | | |
|------------------------------|---------------------|----------------------|
| 1. 黒色土(Ⅲ層に相当?) | 8. 黄色ローム (かたく、ボンボン) | 13. 黒褐色土 |
| 2. 暗黄褐色土(黒色土が混入) | 9. ㇿ8 (やわらかい) | 14. 黄色ローム (やわらかい) |
| 3. 黒色土(黄色ロームが混入) | 10. 暗黄褐色土 | 15. ㇿ14 (かたい) |
| 4. 茶褐色土 | 11. 暗茶褐色土 | 16. 暗黄色土(黒色土がわずかに混入) |
| 5. ㇿ3 | 12. 褐色土 | 17. 黒褐色土 |
| 6. 黄色ローム (ブロック状で、わずかに黒色土が混入) | | |
| 7. 暗黄色土 | | |



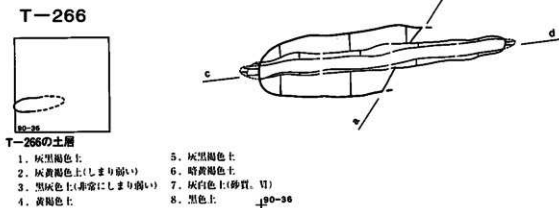
■ 黒色土系覆土の範囲

図Ⅲ-241 T-264実測図



T-265の土層

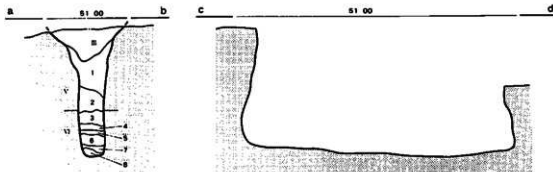
- | | |
|---------------|------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 5. 黒灰色土 |
| 2. 暗黄褐色土(V>1) | 6. 灰黒褐色土(しまり非常に弱い。5>V) |
| 3. 黒灰色土 | 7. 灰黄褐色土(V>5) |
| 4. 黄褐色土(V>3) | 8. 黒色土 |



T-266の土層

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. 灰黒褐色土 | 5. 灰黒褐色土 |
| 2. 灰黄褐色土(しまり弱い) | 6. 暗黄褐色土 |
| 3. 黒灰色土(非常にしまり弱い) | 7. 灰白色土(砂質。VI) |
| 4. 黄褐色土 | 8. 黒色土 |

50-55

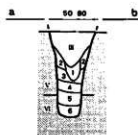
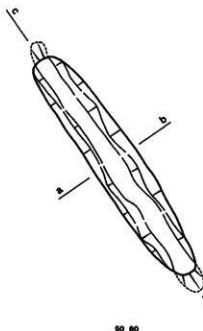


図Ⅲ-242 T-265・266実測図

T-268

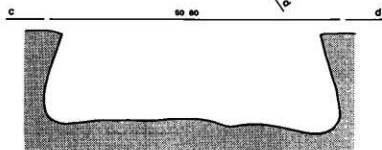


87-36



T-268の土層

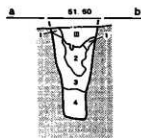
1. 暗褐色土(しまりやや強い)
2. 暗黄褐色土:
(しまり強い。V>III)
3. 黄褐色土:
(しまりやや強い。V>III)
4. 暗灰黄褐色土:
(しまり弱く、粒子やや粗い)
5. 灰黄褐色土(しまりやや強い)
6. 黒色土(しまりやや強い)



T-269

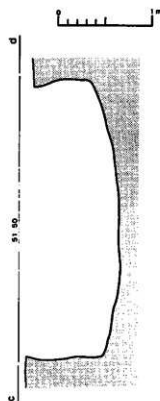
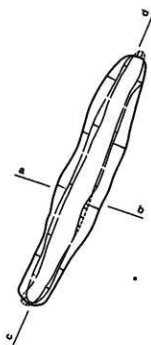


84-42



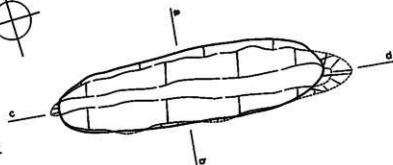
T-269の土層

1. 暗黄褐色土(しまり強い。V>III)
2. 暗茶褐色土(しまり強い。III>V)
3. 黄褐色土(しまりやや強い。V)
4. 黒色土(しまり弱く、粒子粗い)

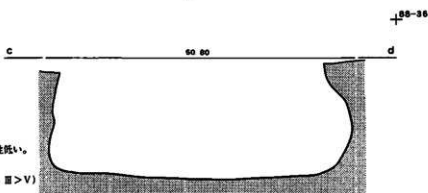
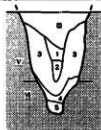


図Ⅲ-243 T-268・269実測図

T-270



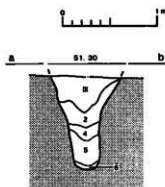
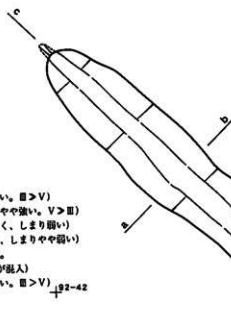
a 50 80 b



T-270の土層

1. 暗黄褐色土(砂質でしり弱く、粘性低い。
V > III)
2. 灰黒色土(砂質でしり非常に弱い。III > V)
3. 黄褐色土(上位に多少黒色土が混入。
しり強い)
4. 青灰色土(砂質。M)
5. 黒色土

T-271



T-271の土層

1. 黒褐色土(粒子細かく、しり強い。III > V)
2. 暗黄褐色土(粒子細かく、しりやや強い。V > III)
3. 暗黄褐色土(砂質で粒子やや細かく、しり弱い)
4. 灰黄褐色土(砂質で粒子やや粗く、しりやや弱い)
5. 黄褐色土(粒子粗く、しり弱い。
深5~10cmのロームブロックが混入)
6. 暗黄褐色土(粒子粗く、しり弱い。III > V)

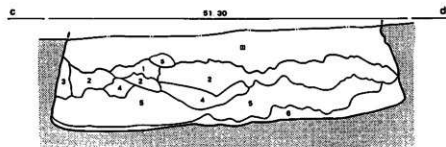
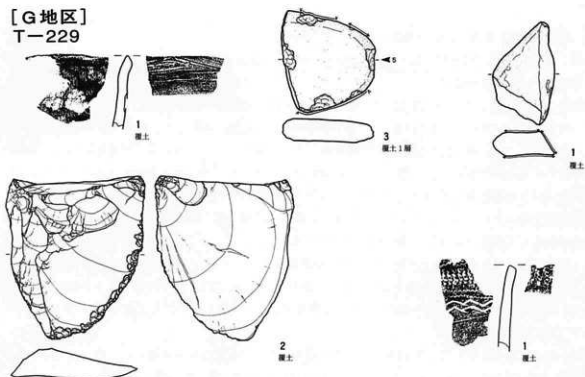
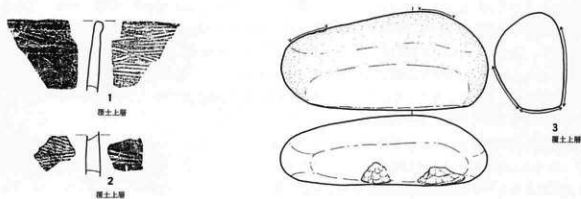


図 III-244 T-270・271実測図

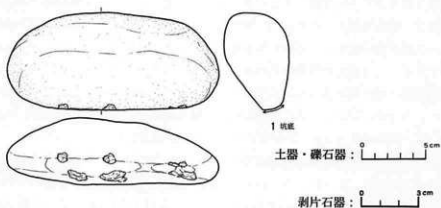
[G地区]
T-229



T-261



[J地区]
T-228



図Ⅲ-245 Tピット出土遺物

5. SP群 (図Ⅲ-246~248, 図版81・82・118・170)

位置: 46-34・35, 47-34・35・36, 47-35, 48-35; 標高45.12~45.71m、北東から南東へ傾斜する緩斜面に位置している。

検出面・検出状況: SP-13~62はV層上面付近、SP-63~85はH-580の床面でそれぞれ検出された。SP-63~85はH-580の床面上付近ではほぼ円形状の暗茶褐色土、茶褐色土、暗褐色土、黒褐色土上の落ち込みが検出され、SP-13~62は包含層調査中、とくに46-34、47-34区周辺で暗茶褐色土、茶褐色土の落ち込みが検出された。一部半截し、断面観察の結果、柱穴状小ピットが確認されたことから周辺調査区にも検出作業の範囲を広げ、精査したところほぼ同様の小ピット状落ち込みが検出された。

調査状況: 検出された小ピットはすべて半截し、覆土の堆積状態、断面の形状、深さ、傾き、遺物の出土状況などを観察、検討し、木の根状のもの以外を小ピットとして65個を調査した。このうちSP-31・34・35はH-580側に大きく傾いており、位置関係からH-580に伴う柱穴状小ピットとした。また、SP-63~85はH-580の床面上で検出されており、H-580に伴う柱穴状小ピットかとも考えられるが、規模(深さ)などがH-580のものとは異質であり、SP群のものとして取り扱っている。小ピット(SP)は70個である。

形状: 底面付近の形状には、平坦のもの、丸味のあるもの、坑状のものがある。このうち坑状のものは5個(SP-36・46・59・63・69)、平坦のものは19個(SP-16・20・21・28・33・37・42・44・47・51・53・61・62・64・67・68・70・73)で、他は丸味のあるものである。底面の違いによる分布上のまとまりなどはみられない。

深さ: 検出面からの深さで最も浅いのはSP-82の10cm、最も深いのはSP-30の62cmである。62個のうち20cm以下のものは12個、51cm以上のものは5個で、大半が21~50cmのもの(53個、76%)である。なかでも31~40cmの深さのものが最も多く26個、37%を占めている。全体的にみると20cm以下のものは北側に、51cm以上のものは南西側にそれぞれ集中しており、南側のものが総体的に深いようである。

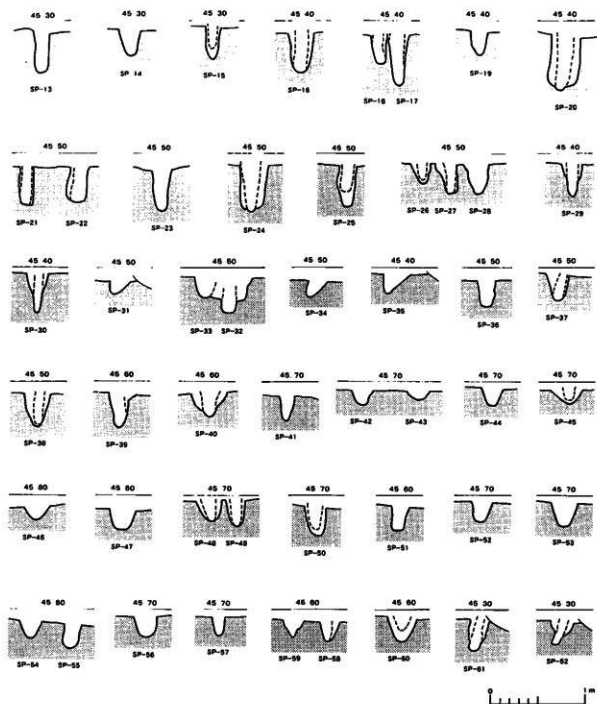
傾き: 南あるいは北へわずかに傾くものが6個(SP-18・20・37・58・61・62)みられるが、大きな傾きではない。もともと直立していたものと考えられることから、検出された小ピットはすべて直立していたものであろう。

柱跡: 断面観察で掘り方中に柱跡と思われるものが認められた。SP-16・20・21・24・26~28・32・37~40・45・48~50・58の17個である。このうちSP-16・20・21・28・37は底面が平坦のもので、他は丸味のあるものである。柱跡の径は最小が9cm、最大が17cmで、一定性はみられないが、12~14cmのものが多い。

覆土: 覆土はすべてⅡ層とV層がまじりあった混合土で、他遺構の覆土と同質のものである。堆積状態では、暗茶褐色土、茶褐色土、黒褐色土、褐色土、黒茶褐色土などが各々ほぼ全体的に見られるものと、上部が暗茶褐色土、下部が黒茶褐色土というようにほぼ二層に分けられるものとに大別することができる。ただ覆土の堆積状態の違いによって新旧関係やまとまりに明瞭な違いは認められない。

重複関係: 検出面で重複関係が認められたSP-17・18は、断面観察では明瞭な重複関係はみられなかった。ただSP-32とSP-33には検出面で重複関係は認められなかったが、半截し、断面観察したところ、SP-32の掘り方をSP-33が切っていることが確認された。

遺物出土状況: 覆土中から遺物が出土したのは25個である。このうち土器はSP-16・29・33・51・54で出土しており、SP-13・19・21・22・25・30・47で石器などが出土している。これらは覆土中に混入したもので意図的な状態は認められない。土器はI群D1類土器、石器では石錘、すり石などが出土している。

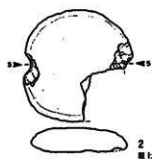
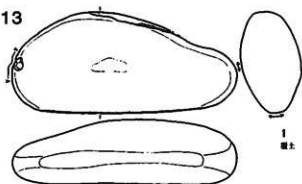


図III-247 SP群実測図(2)

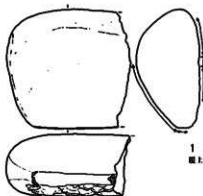
時期：覆土、周辺包含層出土の遺物などからみて、I群D1類土器を伴う縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

性格：柱跡が確認されたSP-24・27・28・32では柱跡が掘り方の底面より下に入り込んでおり、またSP-26・39・45では掘り方覆土中に柱跡の底面があることなど意識的な構築状況がうかがえる。さらにSP-56・60の底面は非常に堅く、輪郭が鮮明で、鋭利な道具で丁寧に底面がつくられている様子が見られる。このように深さ、柱跡などからきわめて丁寧に人手によってつくられている様子がうかが

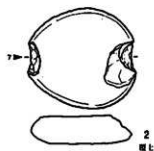
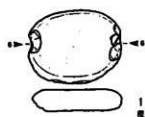
SP-13



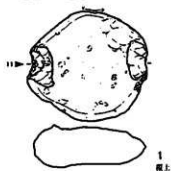
SP-19



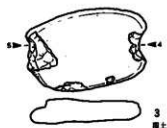
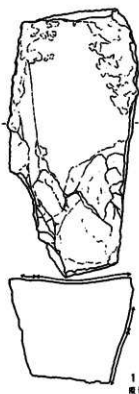
SP-22



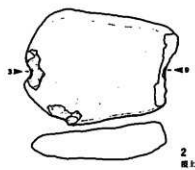
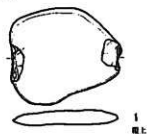
SP-25



SP-30



SP-47



SP-51



図Ⅲ-248 SP群出土遺物

える。しかしながら全体として見ると遺構を思わせる配置、規則性などはみられない。どのような性格のもので、いかなる目的のもとにつくられたのか明らかでない。(和泉田)

土器：(SP-51) 1はD1類a種の口縁部破片で、口縁部形態は平縁で、口唇部断面形は切り出し状に外傾する。内面は条痕で調整されるが口唇部付近のみ砂粒が動くケズリ状の条痕で調整される。外面は上方をナデ調整、下方を粗い条痕で調整する。(富永)

石器：ここでSP群とした小ピットから出土した石器のうち、H-580床面検出のものを除きすべて掲載している。

(SP-13) 1は閃緑岩製のすり石。断面がほぼ楕円形を呈するものであるが、1類とした。先端部に敲打痕や、平坦面にはごく僅かにすり面がある。2は閃緑岩製の石錘。挟り部両端に敲打による潰れがみられ、破損も敲打によるものとみられる。

(SP-19) 1は閃緑岩製、1類のすり石で、破損している。後部すり面にみられる剥離痕は敲打によるものかは不明である。

(SP-22) 1・2は閃緑岩製、3は流紋岩製の石錘である。3点とも挟り部に敲打による潰れがみられる。3の礫面には鉄分が顕著に吸着している。

(SP-25) 1は流紋岩製、2は凝灰岩製の石錘である。両者とも挟り部に敲打による潰れがみられる。2の右挟り部には裏面にも剥離痕はみられず、敲打痕があるのみである。

(SP-30) 1は流紋岩製の砥石。図下部の大きな剥離は人為的であり、砥面再生のためのものかもしれない。

(SP-47) 1は頁岩製、円礫素材の石錘。礫面には煤が部分的に付着している。(田中)

表III-1 SP群一覧

SP番号	規模 cm (長軸×短軸長×厚さ)	覆土	傾き	底面(模式図)	備考
SP-13	14×12×47	暗茶褐色土	ほぼ直立		石器出土(石錘、すり石)
SP-14	22×18×37	〃	直立		
SP-15	16×14×37	茶褐色土	〃		
SP-16	27×25×44	暗茶褐色土	〃		土器出土(ID1)。柱跡径13cm。
SP-17	15×15×54	上部…暗茶褐色土 下部…褐色土	〃		
SP-18	11×11×36	黒茶褐色土	北へやや傾斜		
SP-19	20×16×35	上部…暗茶褐色土 下部…黒褐色土	直立		石器出土(すり石)。
SP-20	32×27×58	暗茶褐色土	北へやや傾斜		柱跡径17cm。
SP-21	15×15×40	茶褐色土	直立		柱跡径12cm。
SP-22	18×18×40	暗茶褐色土	〃		石器出土(石錘)。
SP-23	20×20×49	〃	〃		
SP-24	42×33×48	褐色土	〃		柱跡径16cm。

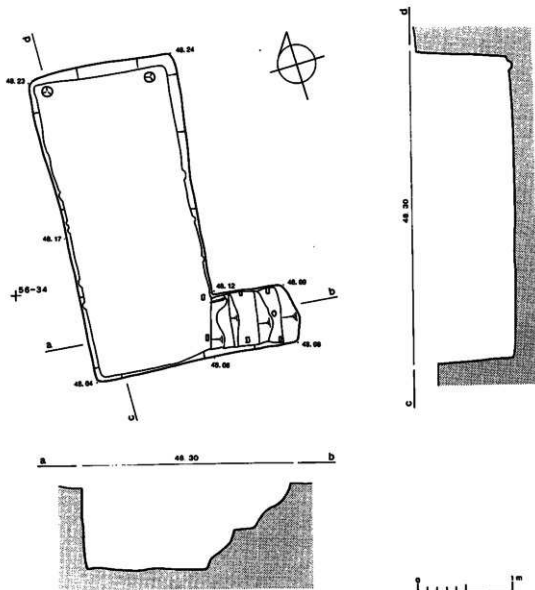
SP番号	規模 cm (長×短×高さ)	覆 土	傾 き	底面(模式図)	備 考
SP-25	18×17×45	暗茶褐色土 (最下層…褐色土)	直立		石器出土(石鏟)。
SP-26	22×20×20	黒褐色土	◇		柱跡径10cm。
SP-27	27×22×34	上部…暗茶褐色土 下部…黒褐色土	◇		柱跡径12cm。
SP-28	26×24×36	上部…暗茶褐色土 下部…黒褐色土 最下部…褐色土	直立		柱跡径 9 cm。
SP-29	22×20×43	茶褐色土	直立		土器出土 (II)1)。
SP-30	18×18×62	暗茶褐色土	◇		柱跡径 9 cm。石器出土(砥石)。
SP-31			H-580側へ傾斜		H-580の柱穴。
SP-32	16×16×35	暗茶褐色土	北へやや傾斜		柱跡径13cm。HP-33より古い。
SP-33	24×22×24	黒茶褐色土	直立		土器出土 (II)1、口縁部)。
SP-34			H-580側へ傾斜		H-580の柱穴。
SP-35			◇		◇
SP-36	19×18×33	黒茶褐色土	直立		
SP-37	24×22×30	暗茶褐色土	南西へ傾斜		柱跡径 9 cm。
SP-38	15×15×35	上部…茶褐色土 下部…黒茶褐色土	直立		柱跡径10cm。
SP-39	20×20×36	黒茶褐色土	ほぼ直立		柱跡径13cm。
SP-40	37×31×23	暗茶褐色土	直立		柱跡径14cm。
SP-41	16×16×28	茶褐色土	◇		
SP-42	22×20×17	暗茶褐色土	◇		
SP-43	23×23×12	◇	◇		
SP-44	24×22×20	茶褐色土	◇		
SP-45	26×26×17	暗茶褐色土	◇		柱跡径12cm。
SP-46	18×18×17	◇	◇		
SP-47	20×20×26	黒茶褐色土	◇		石器出土(石鏟)。
SP-48	27×25×23	暗茶褐色土	◇		柱跡径15cm。
SP-49	20×18×27	茶褐色土	◇		柱跡径13cm。
SP-50	28×25×31	黒茶褐色土	◇		柱跡径14cm。
SP-51	14×14×30	上部…暗茶褐色土 下部…黒褐色土	ほぼ直立		土器出土 (II)1)。
SP-52	14×14×21	暗茶褐色土	直立		
SP-53	28×26×30	◇	◇		
SP-54	24×23×24	◇	◇		土器出土 (II)1)。

SP番号	規模 cm (長×短軸長×深さ)	覆 土	傾 き	底面(模式図)	備 考
SP-55	19×19×29	上部…暗褐色土 下部…黒褐色土	直立		
SP-56	24×23×19	上部…暗茶褐色土 下部…黒茶褐色土	◇		底面は堅く、鮮明。
SP-57	13×13×19	褐色土	◇		
SP-58	22×21×28	暗茶褐色土	◇		柱跡径10cm。
SP-59	22×22×20	上部…暗茶褐色土 下部…黒褐色土	◇		
SP-60	30×26×27	暗茶褐色土	◇		底面の線は明瞭。
SP-61	26×23×37	◇	南へ傾斜		柱跡径11cm。
SP-62	23×22×23	◇	北へ傾斜		柱跡径10cm。
SP-63	20×20×53	◇	直立		(H-580・HP-8)
SP-64	13×13×40	暗褐色土	◇		(H-580・HP-20)
SP-65	20×18×45	暗茶褐色土	◇		(H-580・HP-28)
SP-66	21×20×40	暗褐色土	◇		(H-580・HP-23)
SP-67	18×18×50	上部…茶褐色土 下部…暗褐色土	◇		(H-580・HP-17)
SP-68	17×16×55	上部…茶褐色土 下部…黒茶褐色土	◇		(H-580・HP-6)
SP-69	16×15×48	褐色土	◇		(H-580・HP-5)
SP-70	16×14×35	茶褐色土	南へ若干傾斜		(H-580・HP-16)
SP-71	18×15×43	暗茶褐色土	直立		(H-580・HP-29)
SP-72	18×17×38	◇	◇		(H-580・HP-30)
SP-73	22×20×35	黒褐色土	◇		(H-580・HP-14)
SP-74	18×18×34	茶褐色土	◇		(H-580・HP-15)
SP-75	15×15×37	暗茶褐色土	◇		(H-580・HP-31)
SP-76	16×16×31	茶褐色土	◇		(H-580・HP-32)
SP-77	22×19×30	暗茶褐色土	◇		(H-580・HP-19)
SP-78	×25		◇		(H-580・HP-18)
SP-79	×40		◇		(H-580・HP-21)
SP-80	×41		◇		(H-580・HP-22)
SP-81	×26		◇		(H-580・HP-13)
SP-82	×10		◇		(H-580・HP-10)
SP-83	×11		◇		(H-580・HP-1)
SP-84	×20		◇		(H-580・HP-2)
SP-85	×25		◇		(H-580・HP-3)

6. 防空壕

防空壕が1カ所確認された。第2次世界大戦末期に構築されたもので、平成6・7年度調査でも確認されている。規模、内部構造の概略は以下のとおり。

56-42・43区のI層除去作業中に確認した。平面形は南北方向に長い長方形で、3.3×1.5mの規模がある。確認面からの深さは1m程であった。南東隅には東側へ延びる階段が作られており、3段が残存していた。階段の最下段にあたる床面と、各段には長方形の柱穴跡が一對ずつ、計6個残る。また、床から一段目に至る壁面に、杭に使われたと思われる木片が出土した。柱穴跡と位置的に対応するものである。床面の北側の2隅にも円形の柱穴跡が2個残り、東西の壁面には、杭または柱跡とみられる縦長のくぼみが8か所残っていた。(柳瀬)



図Ⅲ-249 防空壕実測図

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第130集

函館市

中 野 B 遺 跡 (Ⅳ)

函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

- I 調査の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 遺構と遺構出土の遺物

平成11年3月25日発行

編 集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目

☎011 (561) 3131

印 刷 中西印刷㈱

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号